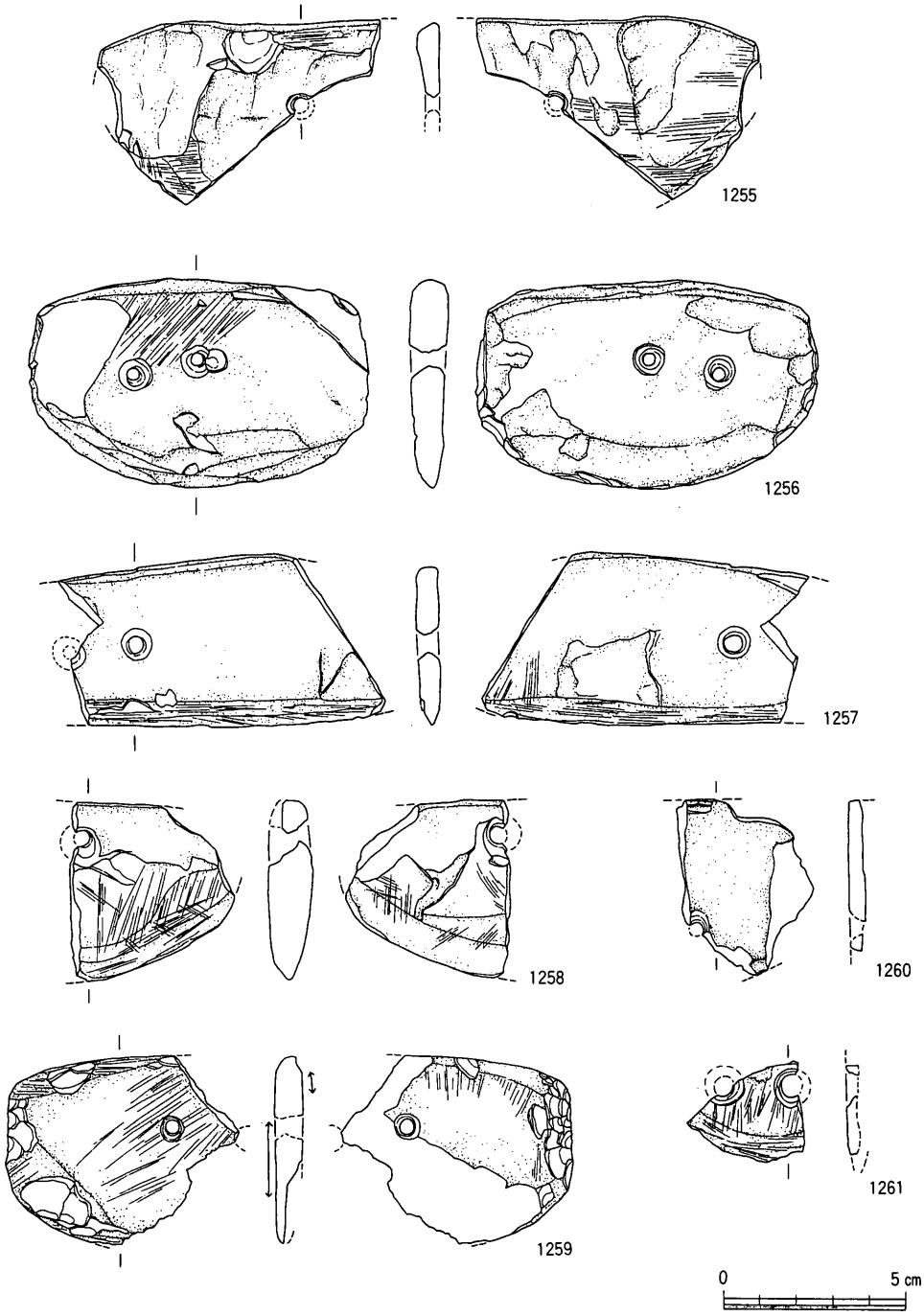
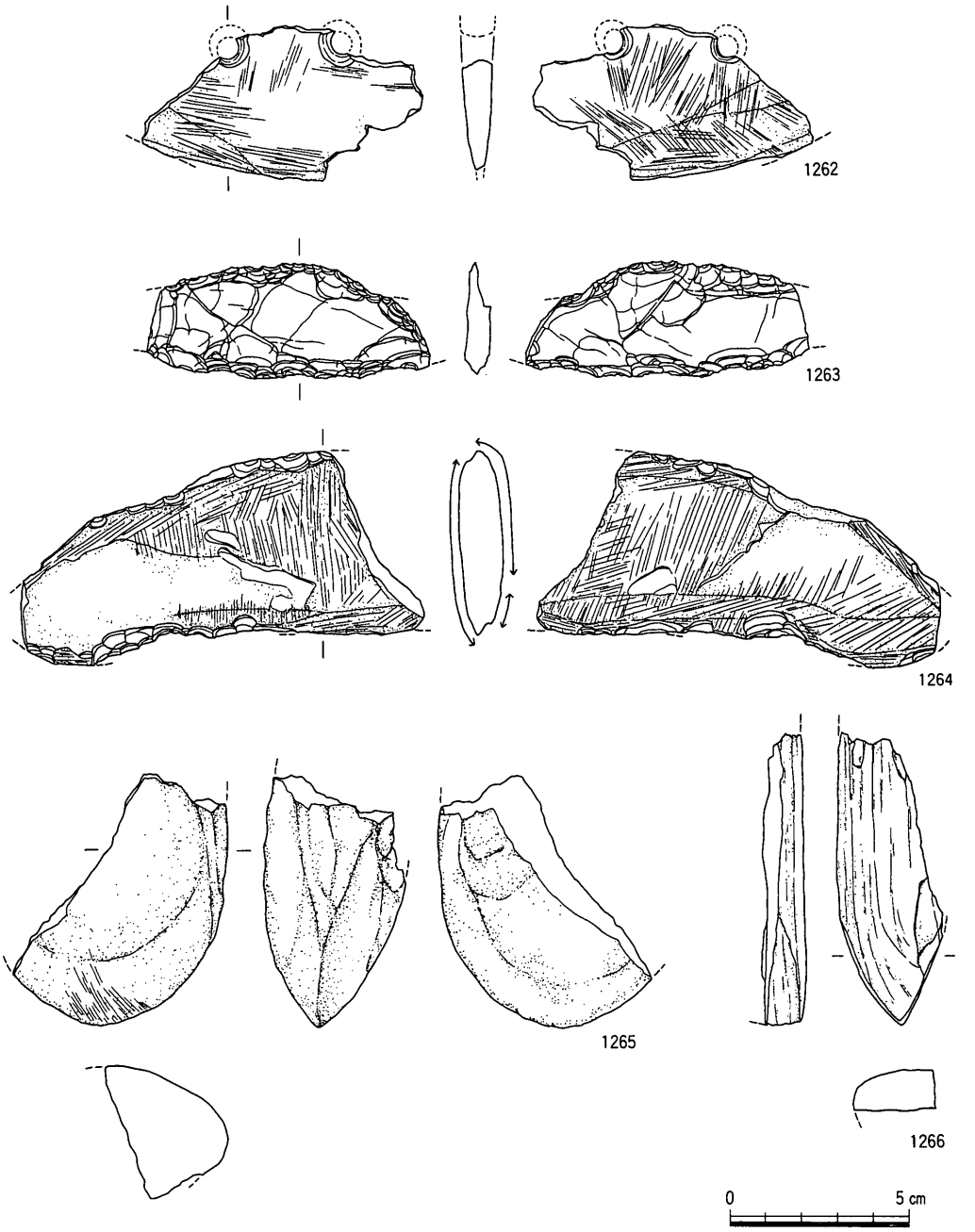
ているが，周囲には剥離を加えて厚さを減じている。1252も整形した段階の未製品である。刃部は直線と外湾の中間形態で，背部は外湾している。刃部と背部はそのままつながり，接点は尖っている。刃部は剥離により粗く整形した後に，部分的に研磨して刃部を研ぎ出している。背部は剥離による整形のままで，体部も研磨は行っておらず，穿孔も施していない。1253は整形を行い，一部研磨を開始した段階の未製品である。刃部は外湾，背部は直線に整形している。側縁部には抉りを入れている。刃部は剥離により整形した後に部分的に研磨を行い研ぎ出している。しかしまだ刃部としての鋭さはない段階である。背部は素材の剥片が板状に剥離したときの厚さに相当する部分の面をそのまま利用している。体部はまだ研磨しておらず，全体に厚いままの状態である。側縁部に抉りがあることから穿孔は行わないものと思われる。1254も整形を行い，部分的に研磨を開始した段階の未製品である。刃部・背部ともに外湾であるが，刃部は直線に近くなっている。側縁部は片側しか残っておらず，抉りがある。しかしこの抉りは二次的なものとおもわれ，本来は刃部と背部がそのままつながり，接点が尖る形であったと考えられ，この尖っている部分が欠損したため，その部分に調整を加えたものと考えられる。刃部は両面から作り出し研ぎ出して研磨を一部行っている。背部は大きな剥離により整形しており，部分的に研磨している。体部は背部から刃部に向かって徐々に薄くなるように仕上げており，刃部もだいぶ鋭くなっている。1255は半分以上が欠損しているが，刃部は大きく外湾しており，背部は直線になっており，半月形になるものと思われる。刃部の研ぎ出しは片側が大きくなっている。紐穴が現存で１個あり，体部と刃部に擦痕が見られる。1256の刃部は外湾しており，背部は直線に近いが僅かに外湾している。側縁部は片側は丸みを帯びているが，反対側は直線になっている。全体として楕円形に近い形である。刃部は主に片面から作り出しているが，その研ぎ出しはやや雑である。紐穴は体部中央から一方に偏った位置にあり，紐穴を結んだ線は背部と平行にはなっていない。また片方の紐穴は穿孔をやり直している。背部の研磨部分は剥離している部分が多い。片面の紐穴と背部の間に擦痕が見られる。1257の刃部は直線で，背部は緩く外湾するか山形になるものと思われる。刃部は両面から作り出しており，擦痕が認められる。背部の大部分は剥離している。紐穴は２個あるが，体部の偏った位置に穿たれている。1258の刃部は外湾しており，背部は直線になっている。刃部は両面から作り出しており，研ぎ出し部分は広くなっている。紐穴は現存で１個あるが穿孔の仕方はあまり上手ではない。体部は全体に厚手で，紐穴付近が最も厚くなっている。1259は刃部・背部ともに緩く外湾するものと思われる。側縁部は直線になっており，剥離痕が



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1255	磨製石庖丁	7.8	5.0	5.1	24.5	流紋岩	体部に擦痕	
1256	磨製石庖丁	9.4	5.7	1.1	67.1	流紋岩	紐穴偏る	
1257	磨製石庖丁	9.0	4.7	0.6	39.6	流紋岩	刃部に擦痕、紐穴偏る	
1258	磨製石庖丁	4.5	4.9	1.2	34.1	流紋岩	刃部の研ぎ出し大きい	
1259	磨製石庖丁	6.4	5.2	0.8	30.0	流紋岩	背部側も研ぎ出す、体部に擦痕	
1260	磨製石庖丁	3.7	4.8	0.5	9.3	流紋岩		
1261	磨製石庖丁	3.2	2.8		2.6	流紋岩	体部に擦痕	

第295図　C区包含層出土遺物（7）（1/2）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1262	磨製石庖丁	7.9	4.3	0.9	33.6	流紋岩	両面とも擦痕有り	
1263	石鏃	7.9	3.2	0.8	22.0	サヌカイト	両側とも刃部状になる	
1264	石鏃	11.3	5.9	1.2	83.4	流紋岩	磨製、全体に擦痕	
1265	太型蛤刃石斧	7.0	6.0	3.7	150.5	(脈岩)安山岩	刃部に擦痕	緑色
1266	柱状片刃石斧	8.1	3.0		36.2	結晶片岩	両刃に近い	

第296図　C区包含層出土遺物(8)(1/2)

見られるがこれは二次的なものと思われる。刃部の作りは剥離のためよくわからないが，研ぎ出しは側縁部付近から大きく行っている。また背部側にも研ぎ出しがあるが，あるいは使用途中で刃部と背部を入れ替えたのかもしれない。紐穴は現存で１個ある。体部には擦痕が認められる。1260・1261は紐穴部分の細片で，体部の反対側は剥離している。また1261は紐穴と刃部が接近している。1262の刃部は外湾すると思われ，背部は欠損している。刃部は両面から作り出され，研ぎ出しは弱い。紐穴は２個あり，体部両面に擦痕がある。

1263・1264は石鎌である。1263は打製石鎌で，両側が欠損している。刃部は直線であるが，背部は外湾している。刃部は両面から作り出しており，背部も両面から剥離を加えて刃部のようになっている。石鎌と考えたが，背部も刃部のようになっていることから石小刀かもしれない。あるいは縦方向の石匙の可能性もある。1264は磨製石鎌で，刃部は内湾しており先端部は下方を向いている。背部は外湾している。刃部は両面から作り出しているが，研ぎ出しは片面側が大きくなっている。背部も片面側を研ぎ出して整形している。刃部には使用時の刃こぼれと思われる剥離部分がある。体部両面と刃部には擦痕が顕著である。

1265は太型蛤刃石斧の刃部の破片である。刃部は両面から丁寧に整形しており，鋭利になっている。刃部の中央部分には斜め方向の擦痕が認められる。断面は扁平な楕円形である。

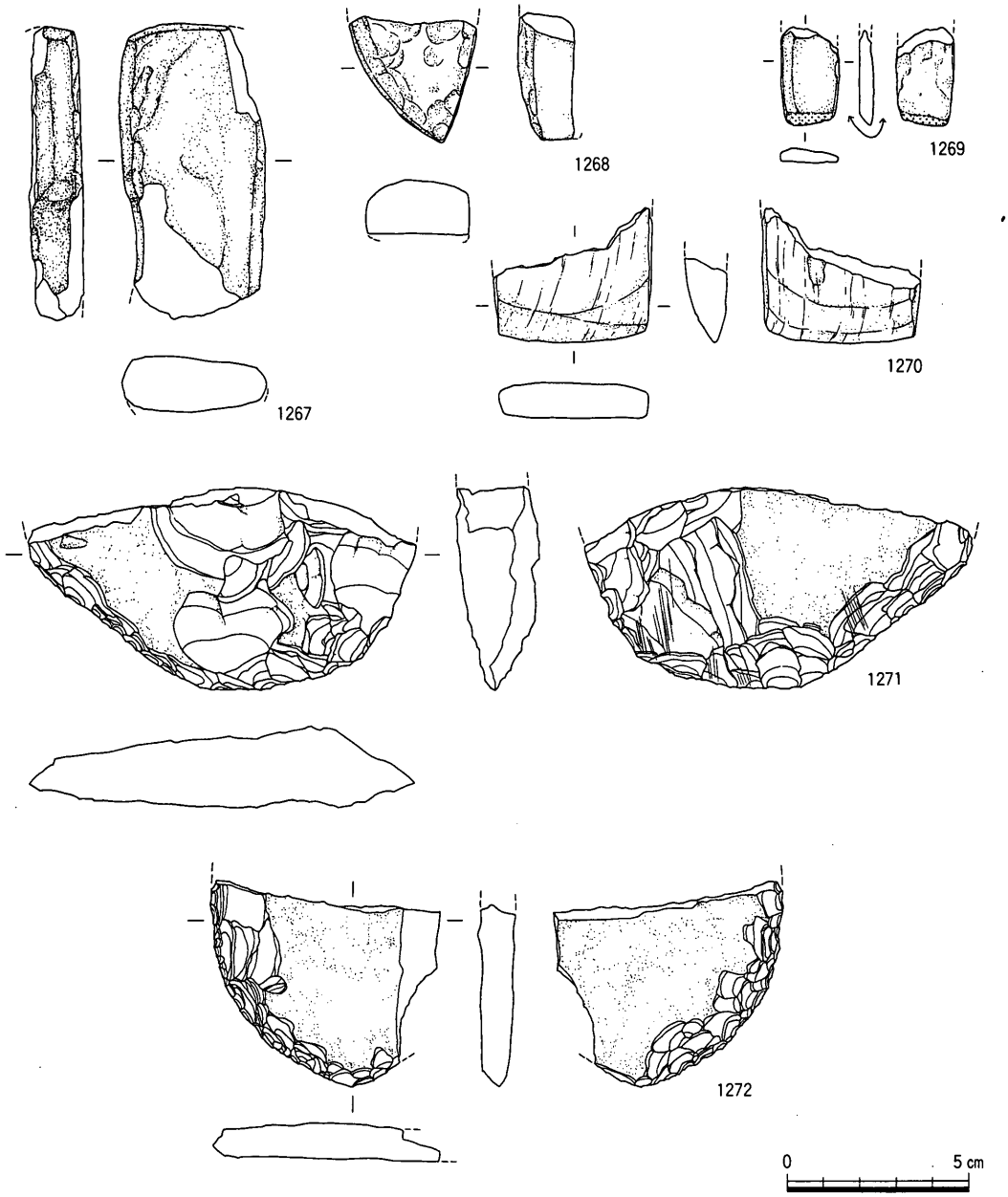
1266～1268は柱状片刃石斧である。1266は刃部が縦に半分に折れている。刃部の片側は曲線的になっており，反対側は直線的になっている。曲線的なほうが前面に相当するものと思われるが，両刃に近くなっている。1267は基端部付近の破片である。基端部は若干丸みを帯びており，端部から少し下の部分に抉りが施されている。側面は片方が薄く剥離しているもとの思われ，本来はもう少し厚手であったと考えられる。1268は刃部の破片である。前面側と考えられる曲線的になっている側の側縁部は研磨していない。

1269・1270は扁平片刃石斧である。1269は幅が1.6cm，厚さが0.4cmと非常に小さく扁平で，鑿のような形である。刃部は片側から作り出し，明瞭な片刃になっている。刃部は片側に湾曲しているが，これは使用による摩滅と考えられる。1270の刃部は片側から大きく研ぎ出して片刃に仕上げているが，反対側も弱いながらも研ぎ出しを行っている。

1271・1272は石鍬である。1271は刃部の破片である。刃部は主に片面から作り出しており，刃部の半分が直線的になっている。擦痕の方向から考えると直線的な部分がすり減ることは少ないと考えられるため，これは欠損後に再加工したためと考えられる。1272も刃

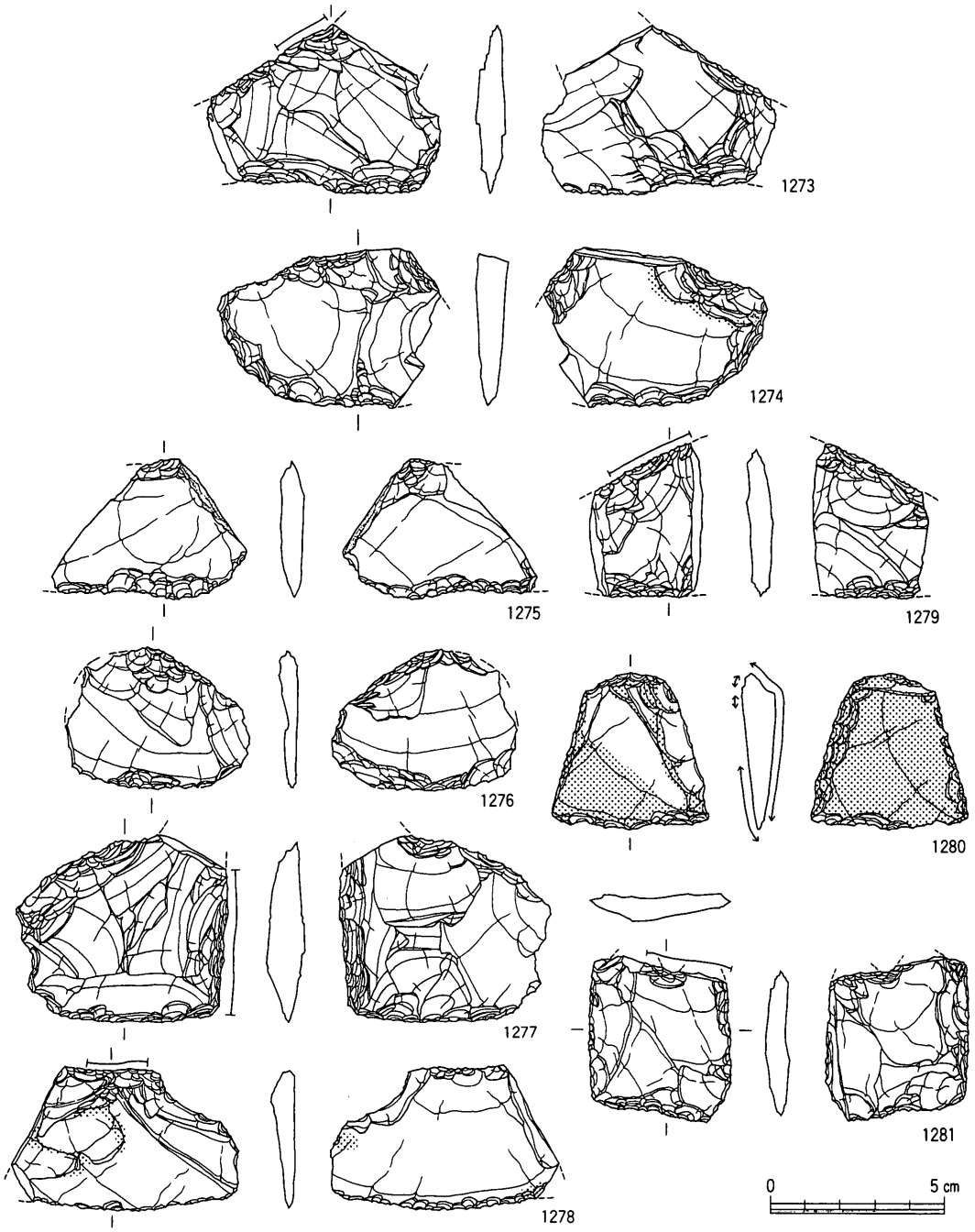
部の破片で，現存部分は両面から丁寧に加工しており，先端部は尖り気味である。

1273～1281はスクレイパーである。1273の刃部は不揃いである。背部は斜めになっており，一部に敲打痕がある。1274は背部の欠損した部分に調整を加えている。1275の刃部は



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1267	柱状片刃石斧	8.0	4.1	1.6	89.4	結晶片岩	抉り有り	
1268	柱状片刃石斧	3.5	3.5	1.5	20.4	結晶片岩	風化	
1269	扁平片刃石斧	2.7	1.6	0.4	2.7	結晶片岩	刃部偏り摩滅している	
1270	扁平片刃石斧	3.7	4.4	0.1	20.7	結晶片岩		
1271	石鏃	5.5	10.7	2.1	130.5	安山岩		
1272	石鏃	5.6	6.4	1.2	44.9	安山岩		

第297図　C区包含層出土遺物（9）（1/2）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1273	スクレイパー	6.8	4.8	0.9	26.8	サヌカイト		
1274	スクレイパー	6.4	4.5	0.9	27.7	サヌカイト		
1275	スクレイパー	5.6	3.9	0.9	15.1	サヌカイト		
1276	スクレイパー	5.4	4.0	0.5	9.8	サヌカイト		
1277	スクレイパー	6.0	5.3	1.1	36.1	サヌカイト	両面に敲打痕	
1278	スクレイパー	6.5	4.1	0.7	13.7	サヌカイト		
1279	スクレイパー	3.2	4.4	0.7	13.6	サヌカイト		
1280	スクレイパー	4.5	4.4	1.0	19.7	サヌカイト	全体に摩滅している	
1281	スクレイパー	4.1	4.8	0.8	17.6	サヌカイト	打製石庖丁の折れたものを転用	

第298図　C区包含層出土遺物(10)（1/2）

両面から丁寧に作り出し，鋭くなっている。斜めの側縁部には自然面が残っている。1276の刃部は外湾しており，全体に薄くなっている。背部には大きな剥離によって厚さを減じた後に細かい剥離により整形している。1277は刃部と片側の側面部は直角になっており，この側面部には敲打痕が見られる。刃部の少し上の部分に最大厚の部分があり，上下反対の感がある。背部の角の部分が欠損しており本来は突出する部分があり，小刀のようになっていたのかもしれない。1278は不定形の剥片を使用したものである。刃部の調整は弱く，素材となった剥片の鋭利な部分を利用している。背部には敲打痕がある。1279は刃部が直線，背部が外湾あるいは山形の石庖丁の可能性がある。背部には敲打痕がある。1280は撥形のもので，全体に摩滅の度合いが強い。1281は背部に欠損部分が２箇所あり，本来は2つの突起状のものがあったと考えられる。欠損部分に敲打を施している。また刃部は欠損部に加工して作り出している。これは打製石包丁が欠損したものをスクレイパーに転用したもので，背部の２つの欠損部は石庖丁の側面の抉りの部分で，刃部にしたところは石庖丁の体部が縦に折れた部分と考えられる。

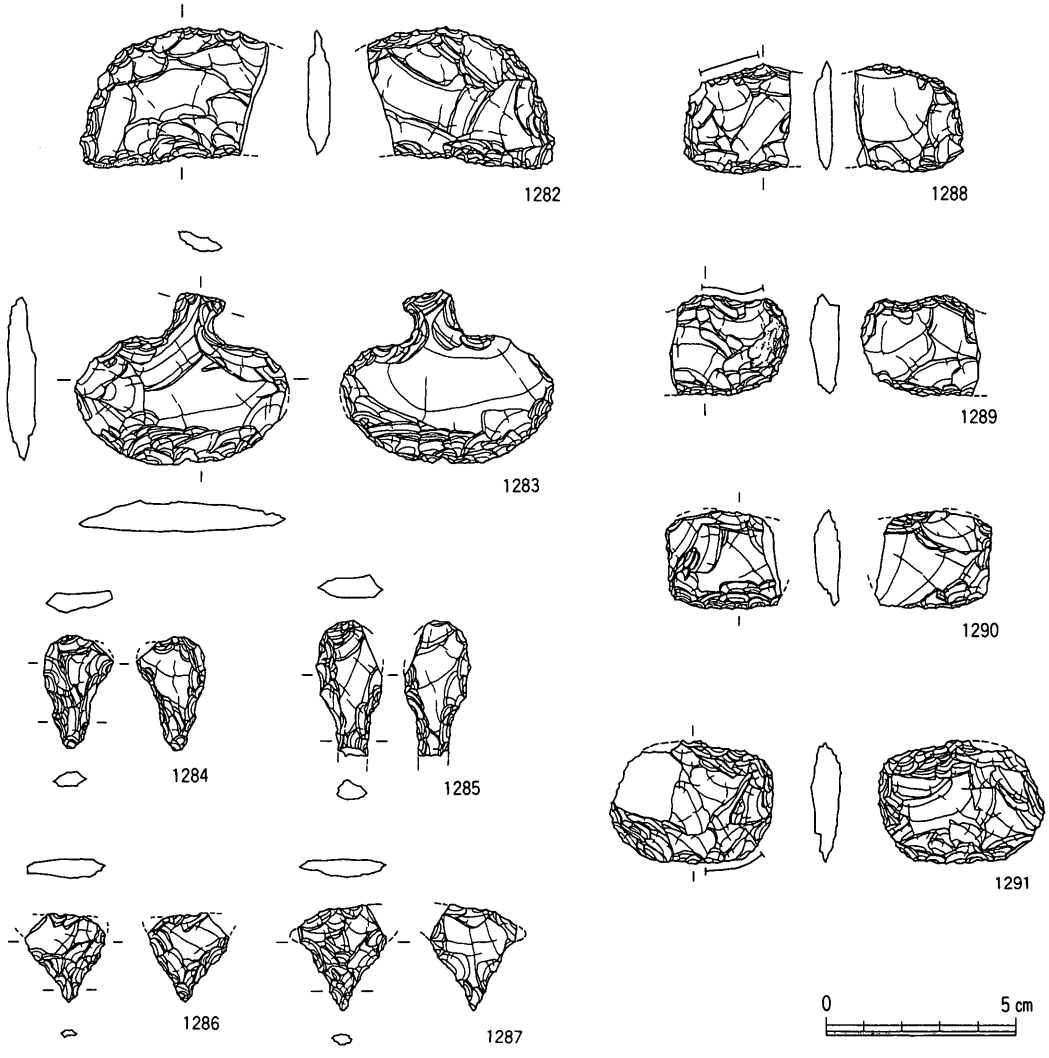
1282は石小刀と考えられるもので，両面ともに調整を施している。内側の刃部はやや内湾しており，先端部は下方を向いている。先端部付近の刃部の片側には自然面が残っているものの鋭利になっている。外側の刃部は強く外湾して鋭くなっている。外側の刃部の曲がり具合からすると，あまり長いものではなさそうである。

1283は石匙で，つまみ部は背部の中央部分に斜め方向に付いている。刃部は全体に外湾しており，両面から丁寧に作られている。体部は全体に楕円形に近く，側面部は丸みを帯びている。

1284～1287は石錐である。1284の錐部は幅広で短く，頭部とあまり差がない。頭部は丸みを帯びている。1285の頭部は縦長の楕円形になっており，錐部は太くなっている。1286・1287は全体に逆三角形で，先端の尖った部分を錐部としている。頭部と錐部の境は不明瞭である。

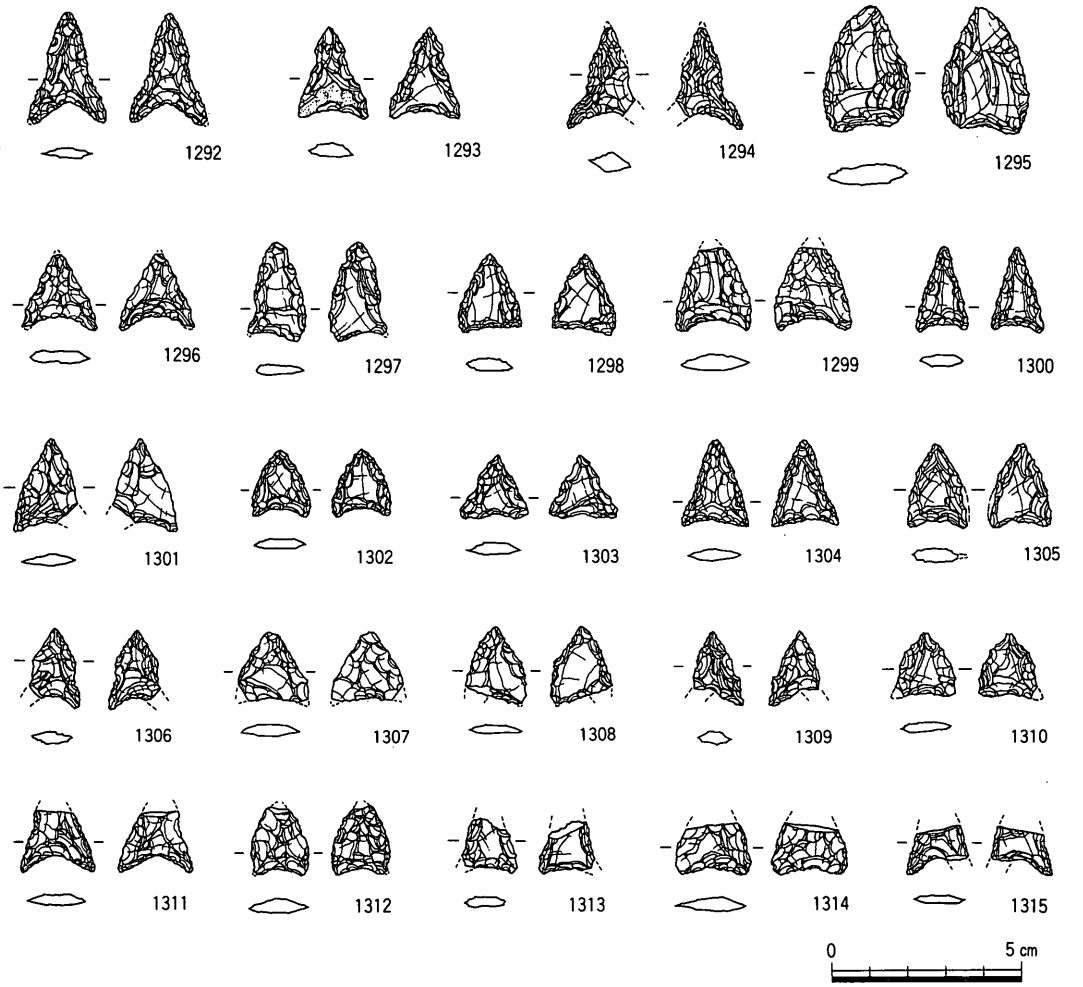
1288～1291は楔形石器である。1288の上部は山形に近くなっており，敲打が施されている。上部と下部は厳密には平行でない。1289の上部は緩く湾曲しており下部とは平行にはなっておらず，弱い敲打痕がある。側面には両極打撃の痕跡が認められる。厚手の剥片を使用している。1290も同様に側面に両極打撃の痕跡が認められる。下部は階段状に剥離している。1291は全体に隅丸の方形で，上部と下部はほぼ平行になっている。下部には一部敲打痕があり，上部にも弱く敲打を施している。下部は階段状に剥離している。

1292～1322は石鏃で，このうち1292～1315は凹基，1316～1320は平基，1322は凸基の石鏃である。1292は身の中央部分が平行になっている。1293は先端部が突出しているような形である。1294・1309は基部が横へ突出している。1295は全体に幅広で側縁部は丸みを帯びている。基端部は不揃いである。1296・1302・1303・1310は幅の割に身の長さが短いも



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1282	石小刀	5.0	3.6	0.7	14.0	サヌカイト	両側に刃部	
1283	石匙	5.6	4.5	0.8	19.5	サヌカイト		
1284	石錐	2.9	1.8	0.6	2.5	サヌカイト		
1285	石錐	3.5	1.7	0.7	3.9	サヌカイト		
1286	石錐	2.3	2.1	0.5	1.9	サヌカイト		
1287	石錐	2.7	2.4	0.5	2.3	サヌカイト		
1288	楔形石器	2.8	2.8	0.5	5.3	サヌカイト		
1289	楔形石器	3.1	2.6	0.8	7.9	サヌカイト	両極打撃の痕跡有り	
1290	楔形石器	3.1	2.5	0.6	5.9	サヌカイト	両極打撃の痕跡有り	
1291	楔形石器	4.3	3.2	0.8	12.1	サヌカイト		

第299図　C区包含層出土遺物(11)（1/2）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1292	石鏃	2.9	2.1	0.3	1.0	サヌカイト	凹基	
1293	石鏃	2.4	1.9	0.3	1.0	サヌカイト	凹基	
1294	石鏃	2.6	1.8	0.5	1.0	サヌカイト	凹基	
1295	石鏃	3.3	2.3	0.5	4.0	サヌカイト	凹基　基端部不揃い	
1296	石鏃	2.0	2.0	0.4	0.8	サヌカイト	凹基	
1297	石鏃	2.6	1.5	0.3	1.0	サヌカイト	凹基　基端部不揃い	
1298	石鏃	2.1	1.7	0.3	1.0	サヌカイト	凹基　基端部不揃い	
1299	石鏃	2.1	2.0	0.4	1.4	サヌカイト	凹基	
1300	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.8	サヌカイト	凹基	
1301	石鏃	2.4	1.7	0.3	1.0	サヌカイト	凹基	
1302	石鏃	1.7	1.5	0.3	0.7	サヌカイト	凹基	
1303	石鏃	1.7	1.8	0.4	0.8	サヌカイト	凹基	
1304	石鏃	2.3	1.8	0.3	1.1	サヌカイト	凹基	
1305	石鏃	2.2	1.6	0.4	1.4	サヌカイト	凹基	
1306	石鏃	2.1	1.4	0.4	0.7	サヌカイト	凹基	
1307	石鏃	1.9	1.9	0.3	0.9	サヌカイト	凹基	
1308	石鏃	2.1	1.6	0.3	0.8	サヌカイト	凹基	
1309	石鏃	2.0	1.3	0.4	0.6	サヌカイト	凹基	
1310	石鏃	1.7	1.6	0.3	0.6	サヌカイト	凹基	
1311	石鏃	1.6	1.9	0.3	0.6	サヌカイト	凹基	
1312	石鏃	1.8	1.5	0.4	0.9	サヌカイト	凹基	
1313	石鏃	1.4	1.5	0.3	0.6	サヌカイト	凹基	
1314	石鏃	1.3	2.0	0.4	0.9	サヌカイト	凹基	
1315	石鏃	1.2	1.6	0.3	0.4	サヌカイト	凹基	

第300図　C区包含層出土遺物(12)（1/2）

のである。1297・1298の基端部は不揃いである。1306は身の中央部分が平行になっている。1308・1313は片面に素材の主要剥離面を残している。1311・1315の基端部は大きく窪んでいる。1312の側縁部は丸みを帯びている。1316は素材の剥片の縁辺部だけに調整を施して整形している。1317の基部は不明瞭だが平基になるものと思われる。1318の基部は平基としたが，凹基に近くなっている。片面に剥片の主要剥離面を残している。1319の基部は部分的に欠損している。1320の先端部はやや歪んでおり，あるいは先端部が錐部に相当する石錐の可能性がある。1321は結晶片岩製のもので，一応石鏃と考えたが不確かなものである。1322は凸基のもので，身の最大幅は中央部分にある。素材となった剥片がすでに完成形に近かったのか側縁部を簡単に調整しただけである。

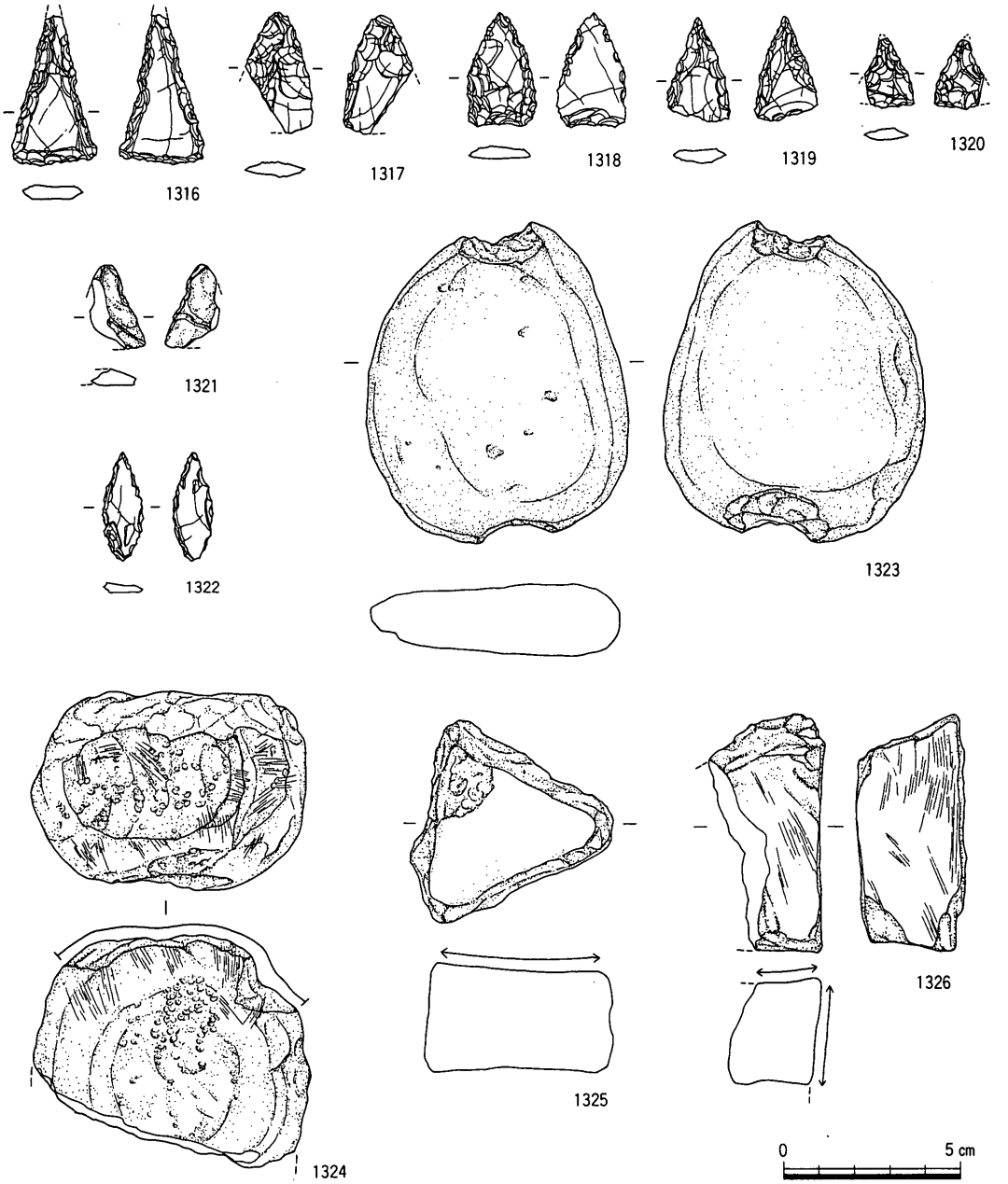
1323は石錘で，平面形が楕円形で扁平な礫の長軸方向の両端部を打ち欠いている。他の部分には加工を施していない。

1324は凹石であるが，先端部には明瞭な敲打痕があり敲打部分が平坦になっている。敲石としても使用したようである。

1325～1327は砥石である。1325は現存部分は三角形で，側面部は観察しにくいが折れ面の可能性が高い。使用面は1面である。1326は現存部分で2面使用しており，擦痕が認められる。1327は3面使用しているが，特に幅の狭い側面部分は使用頻度が高かったためか窪み方が大きい。また上面には部分的に溝状の研磨痕が見られる。

1328は素材剥片である。長さ22.5cm，最大幅21.5cm，最大厚2.2cmの大型の剥片で，重さは1210.3gある。サヌカイトの原石から大きく分割した状態で，上部にはその際の打点が残っている。また上部と下部，一部側面部に自然面が残っていることから，原石の厚さはこの剥片の長さに相当する22.5cm前後であったと考えられる。剥離面にも自然面が残ることから，早い段階に剥離された剥片であることがわかる。剥離時の鋭く尖った部分には軽く調整が施されているが，これは運搬する時に手を傷つけないようにするためのものと思われる。原石の採取場でこのような大型の剥片にして集落に持ち帰って，集落内でさらに細かく分割して石器を製作したものと考えられる。

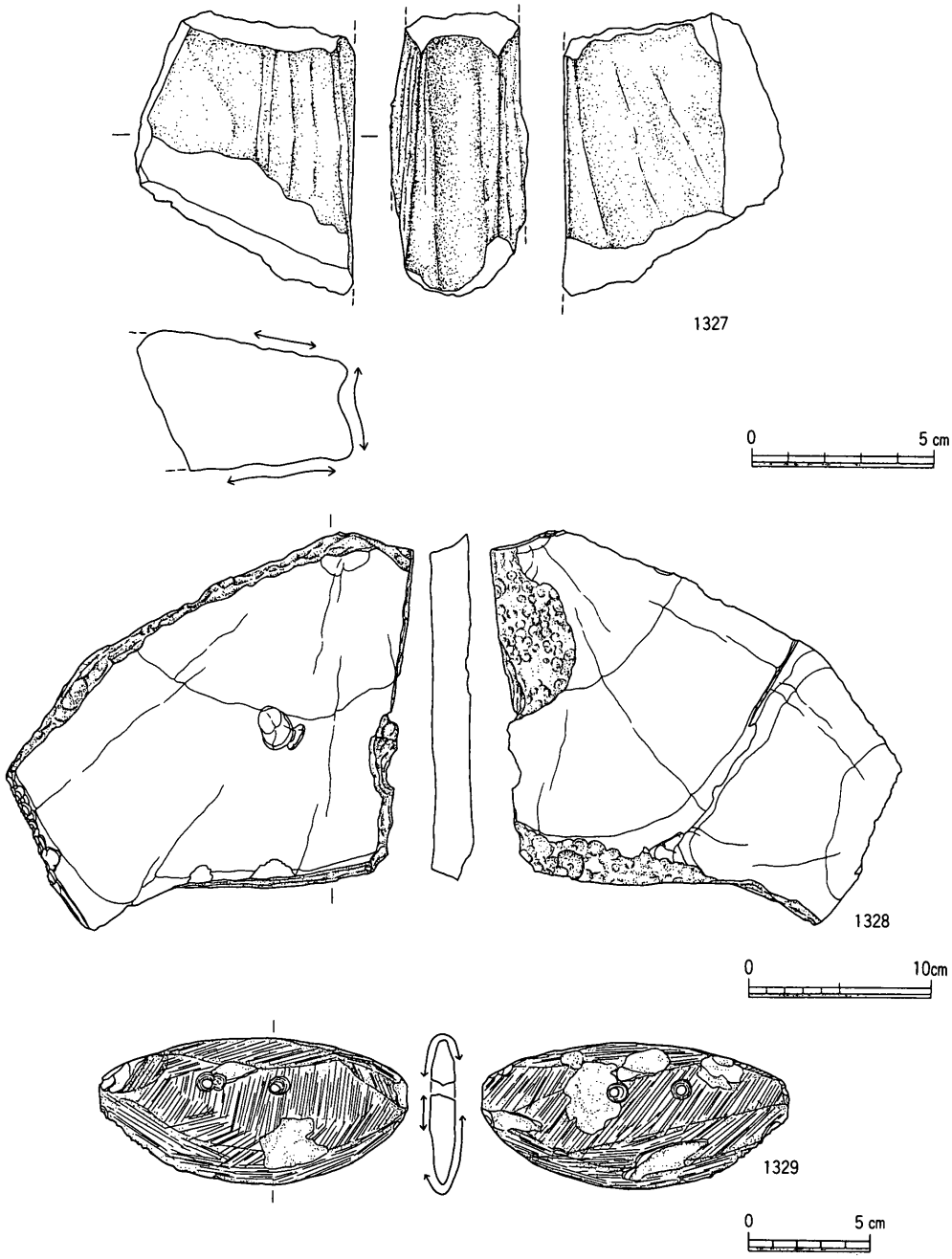
1329は磨製石庖丁で，ＳＤ01の北側部分のＳＫ06付近の遺構面から出土したものである。この部分には住居が復元できる可能性があることは先に述べたが，そうすると住居内の出土と言うことになるかもしれない。刃部・背部ともに外湾しているが，刃部のほうが強く外湾している。刃部と背部の交点は幾分直線になり僅かに側縁部を形成している。刃部は両面から作り出しており，研ぎ出しの部分は広くなっている。体部の中央から少しずれた



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1316	石鏃	4.1	2.4	0.5	3.9	サヌカイト	平基	
1317	石鏃	3.3	2.0	0.4	1.7	サヌカイト	平基	
1318	石鏃	3.1	1.9	0.4	2.3	サヌカイト	平基(凹基に近い)	
1319	石鏃	2.9	1.8	0.4	1.4	サヌカイト	平基	
1320	石鏃	2.0	1.4	0.4	0.8	サヌカイト	平基　先端部やや歪む	
1321	石鏃	2.3	1.5	0.4	1.2	結晶片岩	石鏃でないかも知れない	
1322	石鏃	3.0	1.1	0.3	0.9	サヌカイト	凸基	
1323	石錘	9.0	7.4	2.1	199.6	安山岩	両端を打ち欠く	
1324	凹石	6.6	7.8	5.5	372.4	安山岩	先端部に敲打痕	
1325	砥石	5.7	5.7	3.1	109.9	砂岩	1面使用	
1326	砥石	6.7	3.3	3.0	66.7	流紋岩	擦痕有り	赤色顔料？

第301図　C区包含層出土遺物(13)（1/2）

位置に紐穴が２個あるが，片方は穿孔をやり直している。体部は表面が部分的に剥離しており全体に擦痕が顕著である。擦痕が全体にあることから使用時のものとは考えにくく，



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1327	砥石	7.6	6.0	3.7	191.9	アプライト	部分的に溝状の研磨痕、３面使用	
1328	素材剥片	22.5	21.5	2.2	1210.3	サヌカイト		
1329	磨製石庖丁	12.6	6.0	1.1	92.2	流紋岩	全体に擦痕顕著	

第302図　Ｃ区包含層出土遺物(14)（１/２，１/３，１/４）

形は完成しているが研磨途中で，仕上げ直前の未製品である可能性が高い。

3. 小 結

C区では，弥生時代前期後半～中期初頭の遺構・遺物を検出した。中でも調査区を東西に弧を描く溝（ＳＤ01）が注目される。この溝は調査区の北側の平成3年度調査区に続いて行き全体に円形から卵形に巡るもので，集落を囲む環濠と言えるものである。中からは夥しい量の土器・石器及び木器が出土しており，遺物から弥生時代前期後半に掘削されて中期初頭には埋没したことがわかる。土器の中心は前期末で，前期から中期に至る土器の変化を考えるうえで重要な資料になる。石器は大陸系磨製石器が各種類出土しており，併せてサヌカイト製の打製石器も出土している。また木器も出土しており，なかでも鍬の製作工程が分かる資料が出土しており注目される。このようにＳＤ01には当時の生活状況を知る多量の情報が含まれている。

またＳＤ01の南東部には竪穴住居群が検出された。竪穴住居は７棟あるが切り合い関係や出土遺物からＳＨ07→ＳＨ03→ＳＨ04・ＳＨ06→ＳＨ01→ＳＨ05→ＳＨ02の変遷が考えられる。このうちＳＨ03とＳＨ04はＳＤ01に壊されており，環濠と言えるＳＤ01が掘削される以前に竪穴住居があり，集落が成立していたことがわかる。またＳＨ02は中期初頭まで下るもので，環濠の埋没後にも集落が続いていたことがわかる。これに対し，ＳＨ05出土の磨製石庖丁（1093）とＳＤ01から出土した磨製石庖丁とが接合している。このことはＳＨ05はＳＤ01と同時併存で，ＳＨ05で使用していたものの欠損品をＳＤ01に廃棄したと考えるか，あるいはＳＨ02がＳＨ05を壊した時に出土した欠損品をＳＤ01に廃棄したと考えるかである。後者の考えではＳＨ02とＳＤ01とが同時併存でＳＨ05はすでに廃絶されていることになる。しかしＳＤ01での磨製石庖丁の出土が埋土中で，ＳＤ01が埋没する以前であることと，ＳＨ02の時期的なことを考えると，前者の可能性が高い。ＳＨ05は少なくともＳＤ01と同時併存であったと考えたい。環濠の内側の内容は今回の調査では部分的であり全容は不明である。しかし平成３年度の調査で環濠の内側の大部分が調査され，その整理のなかで判明するものである。

C区の調査により，鴨部・川田遺跡の集落は弥生時代前期後半に成立して，前期後半のある時期に環濠を掘削して環濠集落の形態をとり，前期末の環濠の埋没後も少なくとも中期初頭段階までは集落は続いていたと考えられる。鴨部・川田遺跡の集落の変遷を考える上で重要な調査区と言える。

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第7冊

鴨部・川田遺跡Ⅱ
（第1分冊）

平成9年12月24日発行
編　集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県坂出市府中町字南谷5001番地の4
電話　（0877）48－2191（代表）
発　行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局
印　刷　株式会社　美巧社

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊

鴨部・川田遺跡Ⅰ

第２分冊

1997.12

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊

鴨部・川田遺跡Ⅰ

第２分冊

1997.12

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

鴨部・川田遺跡　　第２分冊

本文目次

第３章　調査の成果

第４節　Ｄ区の調査

1.　調査区の概要 …… 1

2.　調査の成果 …… 5

3.　小結 …… 138

第４章　自然科学調査の成果

第１節　鴨部・川田遺跡から出土した木製品の樹種 …… 139

第２節　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析 …… 151

第３節　自然科学調査の成果に対するコメント …… 167

第５章　まとめ

第１節　住居跡について …… 170

第２節　環濠について …… 181

第３節　方形区画溝について …… 183

第４節　鳥形木製品について …… 185

第５節　斎串について …… 193

第６節　鴨部・川田遺跡出土の石器 …… 197

第７節　鴨部・川田遺跡出土の土器 …… 211

挿図目次

第303図　D区基本土層柱状図(1/40) …… 2
第304図　D区遺構配置図(1/400) …… 3・4
第305図　D区SD02出土遺物(1/2,1/4),
断面図(1/30) …… 5
第306図　D区SD03断面図(1/30) …… 6
第307図　D区SD03出土遺物(1)(1/4) …… 7
第308図　D区SD03出土遺物(2)(1/4) …… 8
第309図　D区SD04断面図(1/30) …… 8
第310図　D区SD04出土遺物(1/2, 1/4) …… 9
第311図　D区SH01平・断面図(1/80) …… 10
第312図　D区SH02平・断面図(1/80) …… 11
第313図　D区SH02出土遺物(1)(1/4) …… 13
第314図　D区SH02出土遺物(2)(1/4) …… 14
第315図　D区SH02出土遺物(3)(1/4) …… 15
第316図　D区SH02出土遺物(4)(1/4) …… 16
第317図　D区SH02出土遺物(5)(1/2) …… 18
第318図　D区SH03平・断面図(1/80) …… 19
第319図　D区SH03内SP01出土遺物(1/4) …… 20
第320図　D区SH04平・断面図(1/80), SH04内
SK01・02平・断面図(1/40) …… 21
第321図　D区SH04内SP02・
SK01出土遺物(1/2,1/4) …… 22
第322図　D区SH05平・断面図(1/80) …… 24
第323図　D区SH05出土遺物(1)(1/4) …… 25
第324図　D区SH05出土遺物(2)(1/4) …… 27
第325図　D区SH05出土遺物(3)(1/4) …… 28
第326図　D区SH05出土遺物(4)(1/4) …… 30
第327図　D区SH05出土遺物(5)(1/4) …… 31
第328図　D区SH05出土遺物(6)(1/4) …… 33
第329図　D区SH05出土遺物(7)(1/4) …… 34
第330図　D区SH05出土遺物(8)(1/4) …… 35
第331図　D区SH05出土遺物(9)(1/4) …… 37
第332図　D区SH05出土遺物(10)(1/4) …… 38
第333図　D区SH05出土遺物(11)(1/4) …… 39
第334図　D区SH05出土遺物(12)(1/4) …… 40
第335図　D区SH05出土遺物(13)(1/4) …… 41
第336図　D区SH05出土遺物(14)(1/4) …… 42
第337図　D区SH05出土遺物(15)(1/4) …… 43
第338図　D区SH05出土遺物(16)(1/4) …… 44
第339図　D区SH05出土遺物(17)(1/4) …… 46
第340図　D区SH05出土遺物(18)(1/2) …… 47
第341図　D区SH05出土遺物(19)(1/2) …… 48
第342図　D区SH06平・断面図(1/80) …… 49
第343図　D区SH06出土遺物(1)(1/4) …… 50
第344図　D区SH06出土遺物(2)(1/4) …… 51
第345図　D区SH06出土遺物(3)(1/2) …… 52
第346図　D区SH07平・断面図(1/80) …… 53
第347図　D区SH07出土遺物(1/2, 1/4) …… 54
第348図　D区SK03断面図(1/30),
出土遺物(1/4) …… 55
第349図　D区SK04断面図(1/30),
出土遺物(1/4) …… 56
第350図　D区SK05平・断面図(1/30) …… 56
第351図　D区SK05出土遺物(1/2, 1/4) …… 57
第352図　D区SK06断面図(1/30),
出土遺物(1/4) …… 58
第353図　D区SK07出土遺物(1/4) …… 59
第354図　D区SK08断面図(1/30),
出土遺物(1/4) …… 59
第355図　D区SK09断面図(1/30),
出土遺物(1/2) …… 60
第356図　D区SK10出土遺物(1/2, 1/4) …… 60
第357図　D区SK10平・断面図(1/30) …… 61
第358図　D区SK11出土遺物(1/4) …… 62
第359図　D区SK12平・断面図(1/30) …… 62
第360図　D区SK13出土遺物(1/4) …… 63
第361図　D区SK13平・断面図(1/30) …… 63
第362図　D区SK14平・断面図(1/30) …… 64
第363図　D区SK14出土遺物(1/2, 1/4) …… 65
第364図　D区SK15出土遺物(1/4) …… 65
第365図　D区SK16出土遺物(1/4) …… 66
第366図　D区SK17出土遺物(1/2, 1/4) …… 67
第367図　D区SK18平・断面図(1/30) …… 68
第368図　D区SK18出土遺物(1/4) …… 69
第369図　D区SK19出土遺物(1/4) …… 70
第370図　D区SK20平・断面図(1/30) …… 71
第371図　D区SK20出土遺物(1/4) …… 72
第372図　D区SK21出土遺物(1/4) …… 73
第373図　D区SK21平・断面図(1/30) …… 73
第374図　D区SK22出土遺物(1/4) …… 74
第375図　D区SK23平・断面図(1/30),
出土遺物(1/4) …… 75
第376図　D区SP04～12出土遺物(1)(1/4) …… 76
第377図　D区SP04～12出土遺物(2)(1/4) …… 77
第378図　D区SP04～12出土遺物(3)
(1/2, 1/4) …… 79

第379図　Ｄ区ＳＸ01平面図(1/100),
断面図(1/50) …… 81・82
第380図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(１)(1/4) …… 83
第381図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(２)(1/4) …… 85
第382図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(３)(1/4) …… 86
第383図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(４)(1/4) …… 87
第384図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(５)(1/4) …… 89
第385図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(６)(1/4) …… 90
第386図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(７)(1/4) …… 92
第387図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(８)(1/4) …… 93
第388図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(９)(1/4) …… 94
第389図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(10)(1/4) …… 95
第390図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(11)(1/4) …… 96
第391図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(12)(1/4) …… 97
第392図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(13)(1/4) …… 98
第393図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(14)(1/4) …… 99
第394図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(15)(1/4) …… 102
第395図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(16)(1/2) …… 103
第396図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(17)(1/2, 1/4) … 104
第397図　Ｄ区包含層出土遺物(１)(1/4) …… 106
第398図　Ｄ区包含層出土遺物(２)(1/4) …… 108
第399図　Ｄ区包含層出土遺物(３)(1/4) …… 109
第400図　Ｄ区包含層出土遺物(４)(1/4) …… 110
第401図　Ｄ区包含層出土遺物(５)(1/4) …… 112
第402図　Ｄ区包含層出土遺物(６)(1/4) …… 113
第403図　Ｄ区包含層出土遺物(７)(1/4) …… 114
第404図　Ｄ区包含層出土遺物(８)(1/4) …… 115
第405図　Ｄ区包含層出土遺物(９)(1/4) …… 117
第406図　Ｄ区包含層出土遺物(10)(1/4) …… 118
第407図　Ｄ区包含層出土遺物(11)(1/4) …… 119
第408図　Ｄ区包含層出土遺物(12)(1/4) …… 120
第409図　Ｄ区包含層出土遺物(13)(1/4) …… 121
第410図　Ｄ区包含層出土遺物(14)(1/2) …… 122
第411図　Ｄ区包含層出土遺物(15)(1/2) …… 124
第412図　Ｄ区包含層出土遺物(16)(1/2) …… 125
第413図　Ｄ区包含層出土遺物(17)(1/2) …… 126
第414図　Ｄ区包含層出土遺物(18)(1/2) …… 127
第415図　Ｄ区包含層出土遺物(19)(1/2) …… 128
第416図　Ｄ区包含層出土遺物(20)(1/4) …… 129
第417図　Ｄ区包含層出土遺物(21)(1/2) …… 130
第418図　Ｄ区包含層出土遺物(22)(1/2, 1/4) … 131
第419図　Ｄ区包含層出土遺物(23)(1/2) …… 133
第420図　Ｄ区包含層出土遺物(24)(1/2) …… 134
第421図　Ｄ区包含層出土遺物(25)(1/2) …… 135
第422図　Ｄ区包含層出土遺物(26)(1/4) …… 137
第423図　木材(１) …… 147
第424図　木材(２) …… 148
第425図　木材(３) …… 149
第426図　木材(４) …… 150
第427図　サヌカイト及びサヌカイト
様岩石の原産地…… 152
第428図　鴨部・川田遺跡集落変遷図
(1/1000) …… 171・172
第429図　美園遺跡ＢＳＩ206周辺住居跡群 …… 175
第430図　弥生時代前期住居跡(1/80) …… 176
第431図　「松菊里型住居」平面図(1/100) …… 178
第432図　方形区画溝抽出図(1/400) …… 183
第433図　鴨部・川田遺跡出土鳥形木製品の
翼装着状況図(1/4) …… 186
第434図　鳥形木製品(1/6) …… 188
第435図　翼装着の鳥形木製品(1/8) …… 189
第436図　鳥形木製品・翼・斎串出土位置図
(1/100) …… 190
第437図　斎串形態分類図 …… 193
第438図　５類斎串(1/2) …… 195
第439図　鴨部・川田遺跡出土大陸系
磨製石器群(1/3) …… 198
第440図　鴨部・川田遺跡石器石材搬入状況 …… 205
第441図　磨製石庖丁製作工程図(1/3) …… 208
第442図　磨製石庖丁形態分類図…… 210
第443図　貼付突帯の刻み目の種類…… 214
第444図　甕の口縁部形態 …… 221

表目次

第５表　木製品の樹種同定結果 …… 141
第６表　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値(X)と標準偏差値(σ) … 154
第７表　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値(X)と標準偏差値(σ) … 155
第８表　原産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値(X)と標準偏差値(σ) …… 155
第９表　岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果 …… 156
第10表　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果 …… 156
第11表　和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果 …… 156
第12表　鴨部・川田遺跡出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果 …… 158
第13表　鴨部・川田遺跡出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果 …… 159
第14表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果 …… 161
第15表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果 …… 162
第16表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果 …… 163
第17表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果 …… 164
第18表　鴨部・川田遺跡出土遺物の原石産地別頻度分布 …… 165
第19表　岩屋第一群の２個を基準として補正した各原産地原石の使用頻度 …… 165
第20表　鴨部・川田遺跡（Ａ区～Ｄ区）住居跡一覧 …… 173
第21表　弥生時代前期～中期初頭住居跡検出主要遺跡 …… 179
第22表　香川県内斎串出土遺跡一覧 …… 194
第23表　石器組成(１) …… 197
第24表　石器組成(２) …… 197
第25表　調査区別石材集計 …… 199
第26表　石材集計（Ａ区～Ｄ区） …… 199
第27表　器種別石材一覧（Ａ区） …… 200
第28表　器種別石材一覧（Ｂ区） …… 201
第29表　器種別石材一覧（Ｃ区） …… 202
第30表　器種別石材一覧（Ｄ区） …… 203
第31表　器種別石材一覧（全体） …… 204
第32表　住居別サヌカイト出土数 …… 206
第33表　磨製石庖丁形態別出土数 …… 210
第34表　鴨部・川田遺跡出土土器（Ａ区～Ｄ区）の器種組成 …… 211
第35表　壺の貼付突帯(１) …… 212
第36表　壺の貼付突帯(２) …… 212
第37表　壺の貼付突帯(３) …… 212
第38表　壺の貼付突帯(４) …… 213
第39表　壺の貼付突帯(５) …… 213
第40表　壺の貼付突帯(６) …… 213
第41表　貼付突帯の刻み目(１) …… 215
第42表　貼付突帯の刻み目(２) …… 215
第43表　壺のヘラ描き沈線(１) …… 216
第44表　壺のヘラ描き沈線(２) …… 216
第45表　壺のヘラ描き沈線(３) …… 217
第46表　壺のヘラ描き沈線(４) …… 217
第47表　壺のヘラ描き沈線(５) …… 218
第48表　壺のヘラ描き沈線(６) …… 218
第49表　壺の各種文様 …… 219
第50表　壺の主な施文 …… 220
第51表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(１) … 222
第52表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(２) … 223
第53表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(３) … 224
第54表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(４) … 225
第55表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(５) … 226
第56表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(６) … 227
第57表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(７) … 228
第58表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(８) … 229
第59表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(９) … 230
第60表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(10) … 231
第61表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(11) … 232
第62表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線(12) … 233
第63表　甕の各種文様 …… 235

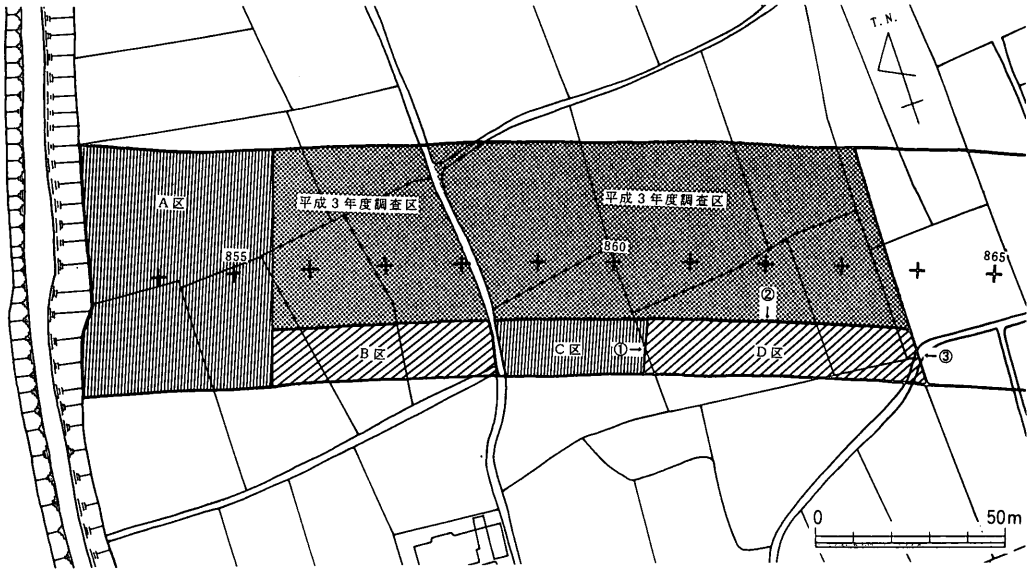
第４節　Ｄ区の調査

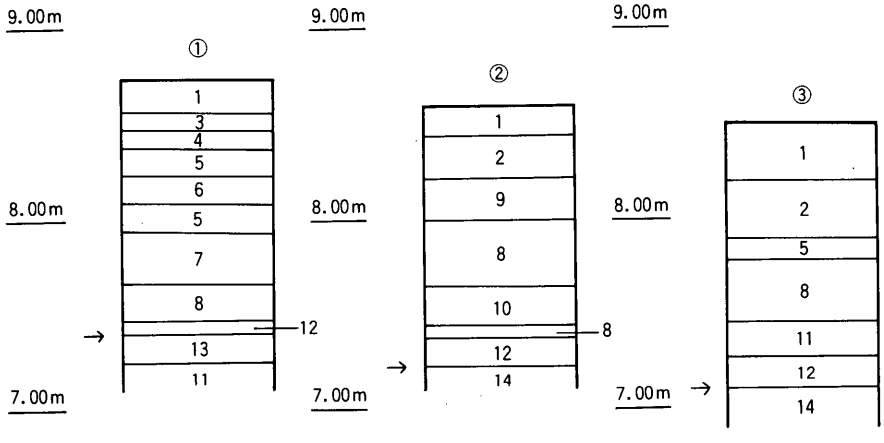
1.　調査区の概要

調査対象地の最も東側の調査区で，南北60ｍある調査対象地のうちの南側から14ｍ，東西は70ｍと東西に長く，調査区の面積は980㎡である。調査区の東側は現有の農道となっている。現地表面は西端で標高8.7ｍ，中央部分で標高8.6ｍ，東端で標高8.5ｍであるが，道路センター杭の№863ラインから西へ６ｍのところで変換して，東に向って緩やかに下っている。南北方向はほぼ平坦になっている。弥生時代前期～中期初頭の遺構面は，現地表面から1.3～1.5ｍ下の標高7.1～7.2ｍのところで検出した。遺構面は基本的には１面と考えられる。しかし具体的には検出できなかったが，調査区壁面の土層観察によると，弥生時代前期の遺構面より80～90㎝ほど上の標高8.0ｍ前後にＡ区で検出した平安時代ごろの遺構面が存在していた可能性がある。

弥生時代前期～中期初頭の遺構面は灰色粗砂層で，遺構面には湧水があり遺構は崩れやすくなっている。遺構面の直上には10～20㎝ほどの黒褐色砂混じり粘質土の遺物包含層がある。この包含層には多量の土器・石器が含まれており，包含層掘削には時間を要した。この包含層の上には，調査区の北半分の西側部分～Ｃ区にかけて，明茶褐色粘質土の間層があるが粘性の強い青灰色粘土が50～80㎝と厚く堆積していた。下部にはこの青灰色粘土層に密封されるように弥生時代前期～中期初頭の包含層と遺構があり，また残りも良好であったと考えられる。この青灰色粘土層の上面は標高7.9ｍ前後である。そして青灰色粘土層から現地表面との間の60～70㎝の部分は，砂層と砂混じり粘質土層が交互に堆積している。ここでも鴨部川の氾濫の影響が見られる。

Ｄ区では主に竪穴住居が検出された。Ｃ区で検出した環濠の外側にも居住域が広がっており，鴨部・川田遺跡での集落の構成・変遷を考える上で重要な遺構である。しかし，遺構面が先に述べたように湧水を伴う灰色粗砂層であり，１日過ぎると遺構の中に水が溜まる状態であった。そのため遺構の検出・掘削・維持が困難で，十分な調査が出来なかった部分もあることは否めない。

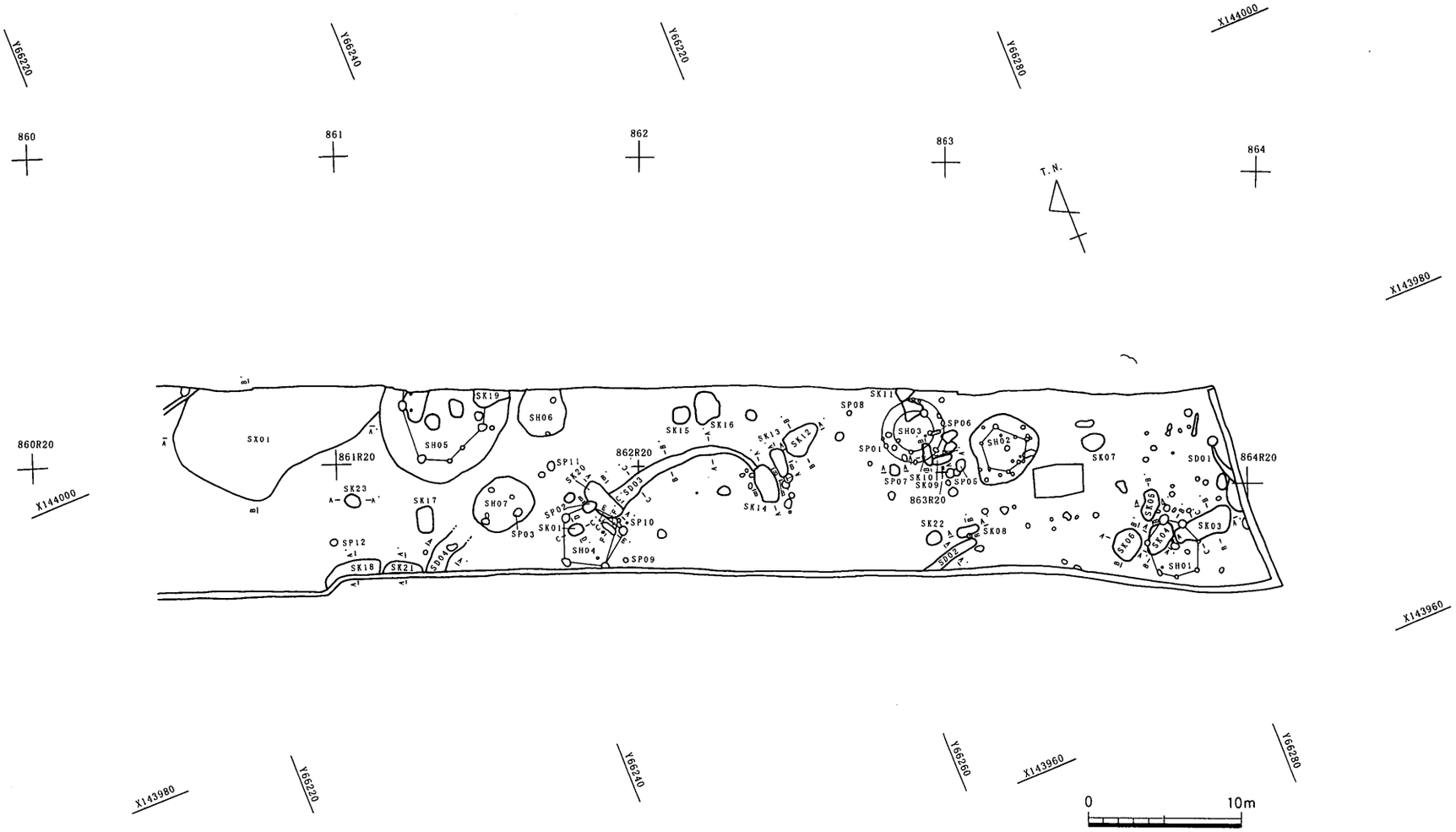




1．表土
2．褐色砂
3．橙褐色砂質土　鉄分多く含む
4．淡褐色粘質土
5．灰色砂混じり粘質土
6．淡灰色粘質土
7．明茶褐色砂
8．青灰色粘土　粘性強い
9．明灰色砂
10．明茶褐色粘質土
11．青灰色砂混じり粘質土
12．黒褐色砂混じり粘質土　遺物包含層
13．灰色砂質土　鉄分・マンガン含む
14．灰色粗砂

→：遺構面

第303図　D区基本土層柱状図（1/40）



第304図　D区遺構配置図（1/400）

2. 調査の成果

（1）弥生時代の遺構・遺物

ＳＤ01

調査区の東端の壁際で検出した溝である。緩く弧を描くがほぼ南北方向の溝で，北端部はピットにより壊されており，南側は調査区外に続いている。調査区内での全長は2.7m，幅は20～40cmで，南側ほど広がっている。深さは10～15cmで，埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

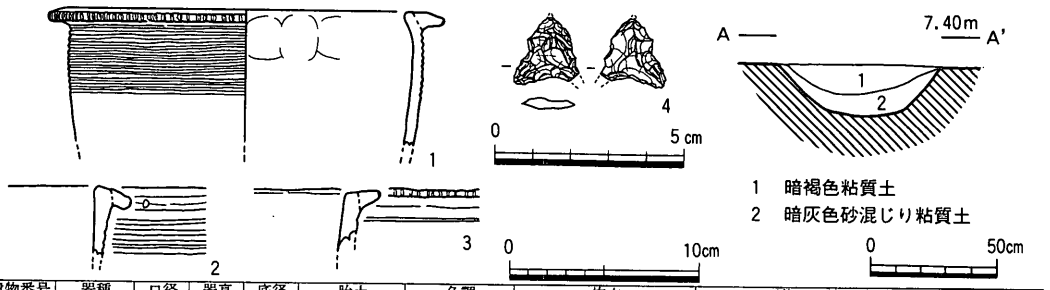
遺物は細片が少量出土したのみで，図化出来なかった。壺あるいは甕の体部の細片が数片ある。

ＳＤ02（第305図）

調査区の東側の南壁際で検出した溝である。直線的に東西に延びる溝で，西側は調査区外へ続く。全長は調査区内で3.9m，幅60cm，深さ20cmとなっている。断面は幅広のＵ字形で，埋土は上層に暗褐色粘質土，下層に暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。

１～３は逆Ｌ字形口縁の甕である。１は口縁部は内傾し，端部上面を強くナデており，刻み目を施している。体部は上半がやや膨らみ，外面にはヘラ描き沈線が11条巡り，体部全体をナデている。２は口縁部端部は下方を向き，端部には摩滅しているが刻み目が確認出来る。体部は全体にナデており，外面にヘラ描き沈線が現存で４条ある。３は口縁部端部は若干上向きになっている。

４は凹基の石鏃で，身の先端部側は短く幅広になっている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
1	弥・甕	16.6			中・多	灰黄褐10YR6/2 にぶい橙7.5YR 7/4	ヘラ描沈線11条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
2	弥・甕	*20.4			中・普	淡黄橙7.5YR8/4、にぶい橙7.5YR7/4	ヘラ描沈線現存4条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
3	弥・甕	*16.4			中・普、細・普	灰黄褐10YR4/2 にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線現存1条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	

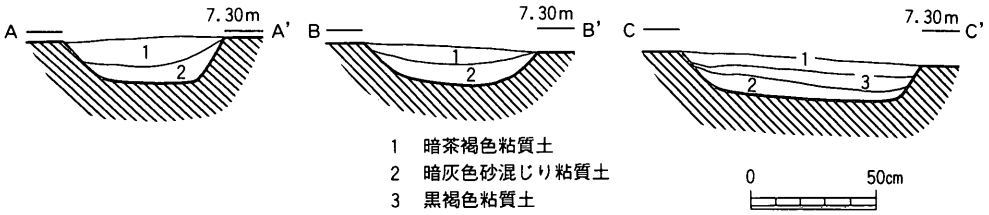
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
4	石鏃	2.8	1.8	0.3	0.7	サヌカイト	凹基	

第305図　Ｄ区ＳＤ02出土遺物（1/2，1/4），断面図（1/30）

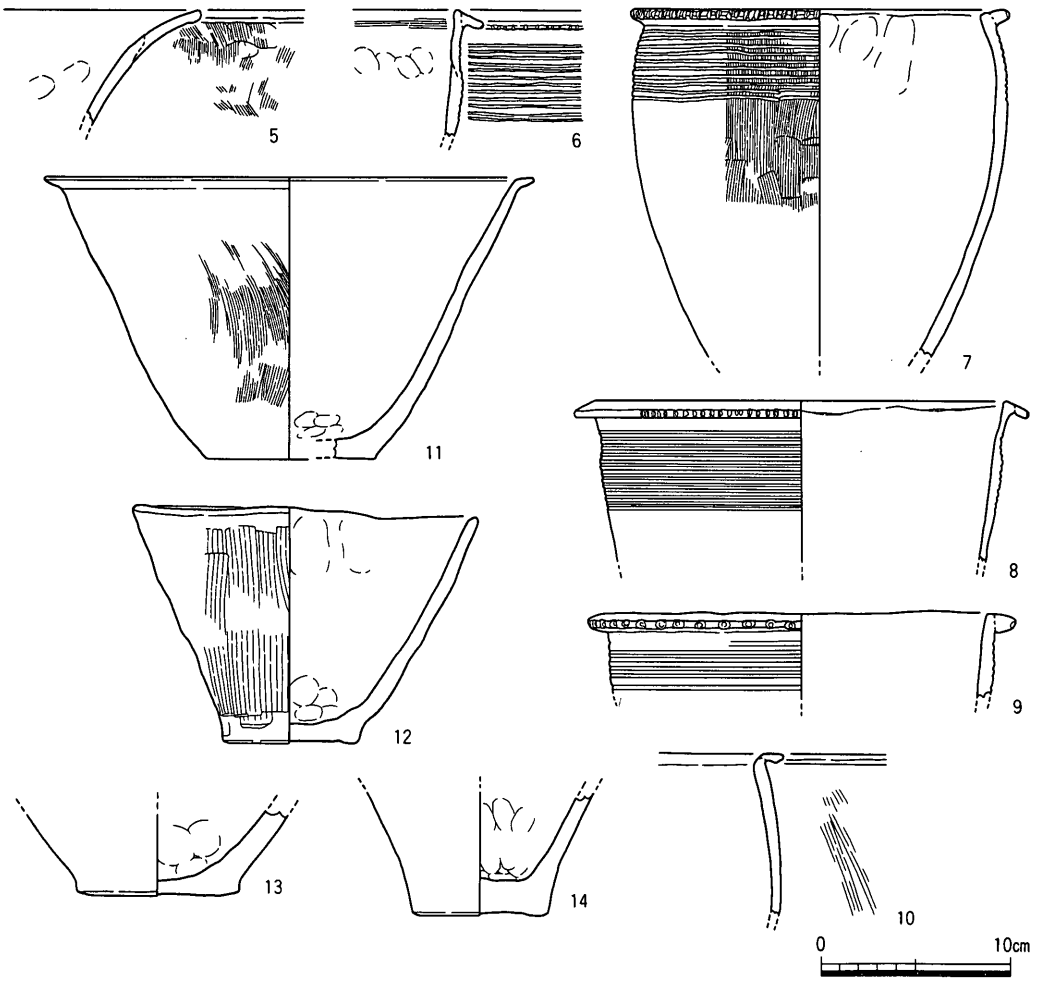
ＳＤ03（第306図～第308図）

調査区中央部分で検出した溝である。溝は西端部から中央部分までは直線に近く東側へ向うが，中央部分からは弧を描いて南側に向っている。溝の両端部はそれぞれ土坑により壊されている。検出長は10.4m，幅は0.3～1.4m，深さは16cmほどである。溝は西側から徐々に狭くなって行き，底部は西に向って緩く下っている。断面は幅広のＵ字形と逆台形部分があり，南端部付近の東側の掘り込みは急になっている。埋土は基本的に上層に暗茶褐色粘質土が，下層に暗灰色砂混じり粘質土が堆積しているが，西端部付近には間に黒褐色粘質土が堆積している。

５は壺で，口縁部は大きく開き，端部外面に指押さえを施している。外面はハケ目の後にナデている。６～10は逆Ｌ字形口縁の甕である。６の口縁部端部は下方に向き，小さな刻み目を入れており，口縁部内面にはハケ目を施している。体部は口縁部付近の器壁が薄くなっており，外面にはヘラ描き沈線が12条と多条である。７の口縁部端部は上方を向き刻み目を入れている。体部は上半で膨らみ，外面にヘラ描き沈線が10条巡っている。外面下半は摩滅しているが，全体にハケ目を施している。８の口縁部端部は下方を向き，刻み目を入れている。口縁部下の体部の器壁が薄くなっている。体部は直線的で外面にはヘラ描き沈線が13条と多条である。９は口縁部端部に棒状工具で刺突することにより刻み目を入れている。10は口縁部端部の上にさらに粘土を加えて横方向につまみ出し，逆Ｌ字形の口縁部を作っている。体部は若干膨らみ，外面にはハケ目を施している。11は鉢で，口縁部端部を横に折り曲げている。体部は直線的で幅広の底部をもつ。体部外面にはハケ目を施している。12も鉢で，直線的な体部からそのまま口縁部に至る。体部外面には全体にハケ目を施し，底部はやや突出気味である。口縁部端部付近にはハケ目が及んでいないことから，あるいは口縁部は貼りつけて逆Ｌ字形にしようとしたのかも知れない。14の底部外面はヘラケズリとなっている。内面には板ナデとナデを加えている。15は外面に粗いハケ目を施している。内面は剥離している。

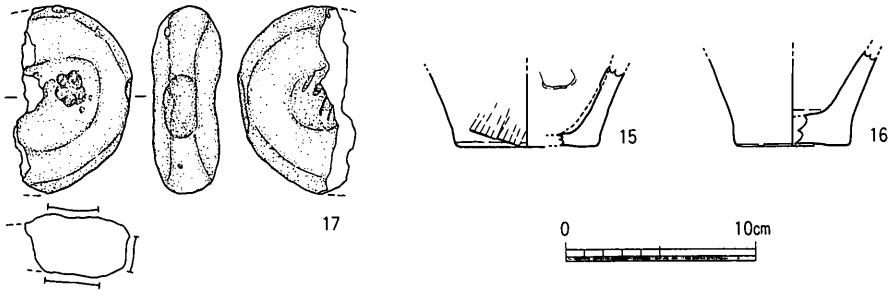


第306図　Ｄ区ＳＤ03断面図（1/30）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
5	弥・壷	*19.8			中・普、細・少	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
6	弥・甕	*21.2			細・少	灰黄褐10YR6/2 灰白10YR8/2	ヘラ描沈線12条、口縁部端部刻み目	口縁部内面ﾊｹ目、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
7	弥・甕	16.8			中・多	灰褐7.5YR4/2 灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線10条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
8	弥・甕	21.2			粗・少、中・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰白10YR8/2	ヘラ描沈線13条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
9	弥・甕	19.6			中・普、細・少	浅黄橙10YR8/3 灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線現存6条、口縁部端部棒状工具による刺突	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
10	弥・甕	*19.8			粗・少、細・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
11	弥・鉢	25.8	14.7	9.0	粗・少、微・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰白2.5Y8/2		口縁部折曲げ、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
12	弥・鉢	18.0	12.6	7.1	中・普	浅黄2.5Y7/3		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
13	弥・壷			8.6	中・多	浅黄橙7.5YR8/3、灰白10YR8/2		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
14	弥・甕			7.2	中・多	橙5YR6/8、にぶい黄橙10YR7/2		外面ﾏﾒﾂ、内面指押え・ﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ、底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ	

第307図　Ｄ区ＳＤ03出土遺物（１）（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
15	弥・甕			7.6	中・少、細・多	橙7.5YR6/6、灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目、内面剥離	
16	弥・甕			6.0	中・多	にぶい橙5YR6/4、灰黄2.5Y7/2		全体にﾏﾒﾂ	

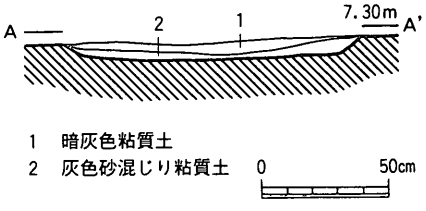
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
17	凹石	9.7	6.2	3.6	267.0	安山岩	敲打部分現存3ｹ所	

第308図　Ｄ区ＳＤ03出土遺物（２）（１/４）

17は凹石であるが，両面の窪みは少ない。現存で敲打痕が３箇所ある。

ＳＤ04（第309図～第310図）

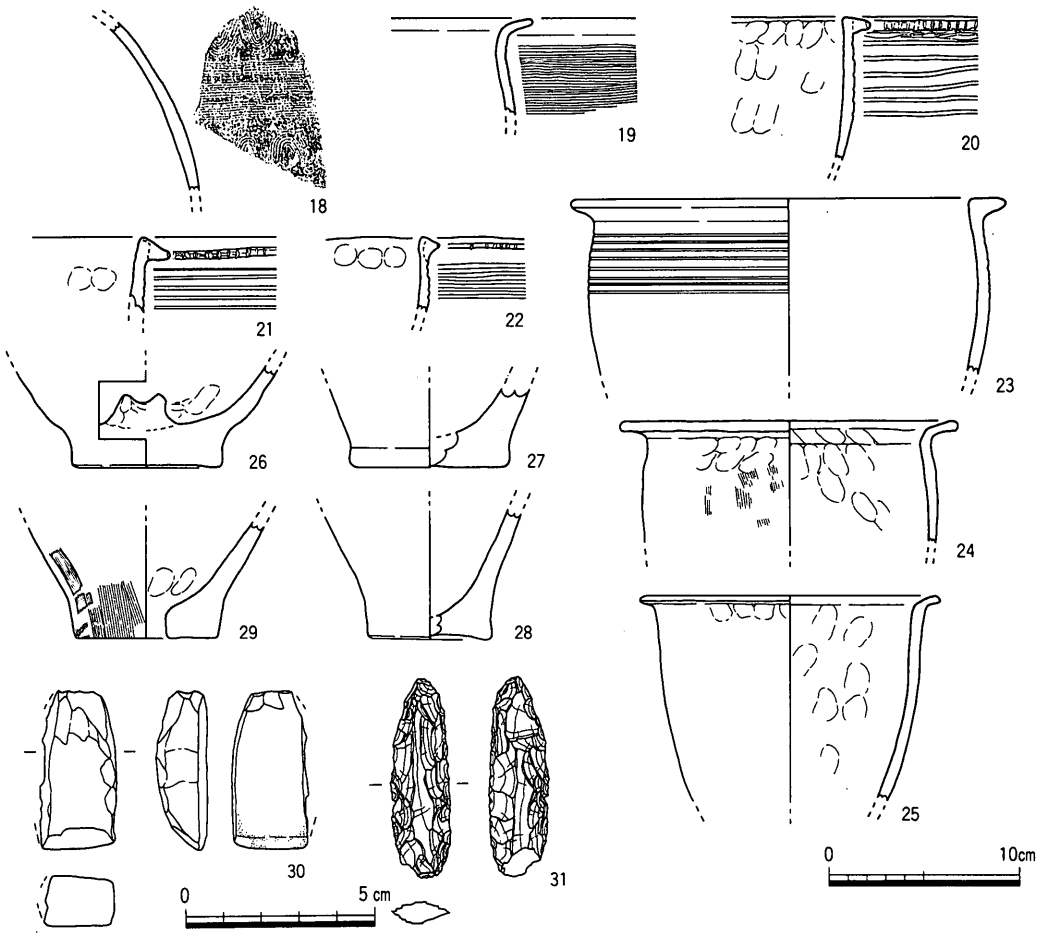
調査区の西側の南壁際で検出した溝である。南西－北東方向の溝で，途中で若干曲がっている。南西側は調査区外に続き，北東側は途中で検出出来なくなった。検出長は3.2m，幅1.2m，深さ10cm弱と非常に浅くなっている。断面は幅広の逆台形で上層に暗灰色粘質土が，下層には灰色砂混じり粘質土が堆積していた。



第309図　Ｄ区ＳＤ04断面図（１/30）

18は壺で，体部に７条１単位の櫛描き直線文と波状文を施している。19は如意形口縁の甕で，体部外面に８条１単位の櫛描き直線文を施している。20～23は逆Ｌ字形口縁の甕である。20は口縁部直下に板状工具の木口痕がある。体部外面には間隔の開いたヘラ描き沈線が６条ある。21の口縁部端部は下方を向き，刻み目を入れている。22の口縁部端部は先細りになっている。23は口縁部は横に折り曲げており，体部は膨らんでいる。24は如意形口縁の甕で，口縁部の内・外面に指押さえが顕著である。体部外面にはハケ目を施している。25も如意形口縁で，全体にナデている。26は壺の底部と思われ底部は突出している。底部の内面には瘤状の突起がある。27・28とも全体にナデている。29は甑で，底部に焼成後に穿孔している。外面にはハケ目を施している。

30は扁平片刃石斧で，大きさの割りには厚手になっている。31は凸基有茎式の石鏃で，



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
18	弥・壺				中・少、微・普	にぶい黄橙10YR 7/3、灰黄2.5Y6/2	櫛描文（直線文･波状文）、櫛描文の間にヘラ描沈線	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
19	弥・甕	*20.8			中・少、細・普	明褐7.5YR5/6、浅黄2.5Y7/3	櫛描文（直線文）	如意形口縁、全体にﾅﾃﾞ	
20	弥・甕	*19.4			中・少、微・多	灰黄褐10YR5/2 にぶい黄橙10YR 7/3	ヘラ描沈線6条、口縁部端部刻み目	口縁部下にﾍﾗ状工具の木口痕、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
21	弥・甕	*36.8			中・普	灰黄2.5Y7/2、にぶい橙7.5YR6/4	ヘラ描沈線現存5条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
22	弥・甕	*35.0			中・普	灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線5条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
23	弥・甕	19.0			粗・少、中・普	浅黄橙7.5YR8/3	ヘラ描沈線8条	口縁部折曲げ、口縁部ﾅﾃﾞ、全体にﾅﾃﾞ	
24	弥・甕	17.1			中・多	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2		如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
25	弥・甕	15.4			細・普	浅黄橙10YR8/3 浅黄2.5Y7/3		如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、全体にﾅﾃﾞ	
26	弥・壺			8.0	粗・少、中・普	橙5YR7/6、浅黄橙7.5YR8/4		底部内面に突起、全体にﾏﾒﾂ	
27	弥・甕			8.0	粗・少、中・普	灰黄2.5Y7/2、浅黄2.5Y7/3		全体にﾅﾃﾞ	
28	弥・甕			6.1	中・少、細・多	灰白2.5Y8/2、にぶい黄橙10YR 7/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
29	弥・甑			7.5	中・普	にぶい黄橙10YR 7/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

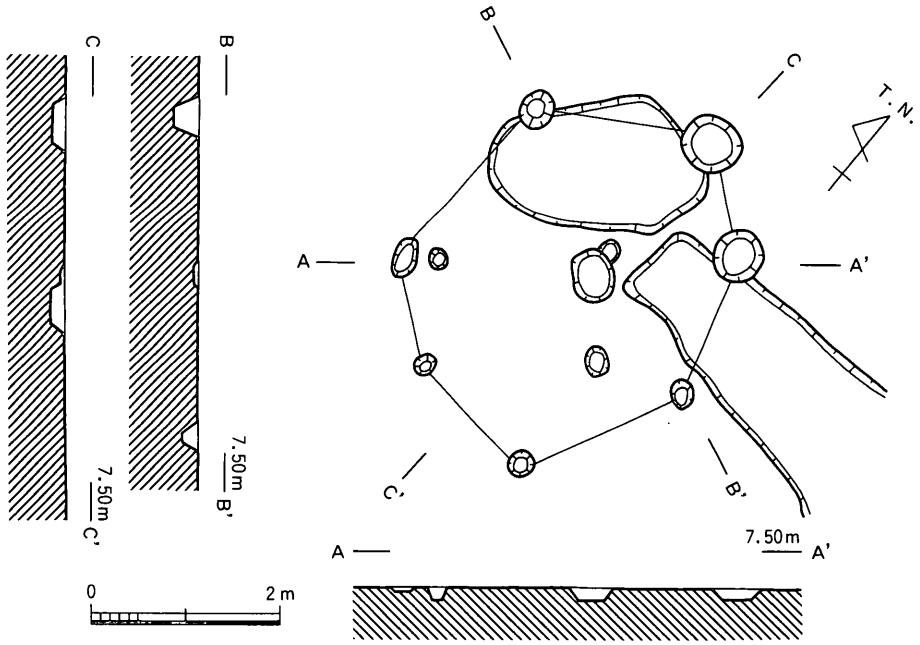
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
30	扁平片刃石斧	4.1	2.0	1.3	18.2	流紋岩		
31	石鏃	5.2	1.5	0.6	5.2	サヌカイト	凸基	

第310図　Ｄ区ＳＤ04出土遺物（１/２，１/４）

短い茎部を作り出している。体部の幅はほぼ一定である。

ＳＨ01（第311図）

調査区の南東隅で検出した竪穴住居である。壁の立ち上りが削平された竪穴住居あるいは平地式住居である。中央部分に楕円形の土坑を配しており，土坑の片側に柱穴をもつ。本来は土坑の両端に中央２主柱であった可能性が高い。しかし中央２主柱は土坑の長径側の両端にあるものが多く，本例のように土坑のコーナー部分にあるのはあまりない。従って本例は中央の土坑が単にピットを壊しているにすぎないのかも知れない。中央の土坑は長径60cm，短径45cm，深さ15cmで，規模的には柱穴としても良いものである。土坑端の中央主柱は直径20cm程度の円形で，深さは５cmと非常に浅く残りは悪く，中央主柱は２本のものが一般的であるので反対側の中央主柱も本来はあったと考えられる。主柱は中央土坑を中心に７本が配されており，南北方向に長い楕円形になっている。主柱掘形の平面形はＡ－Ａ’ラインの１つが楕円形である以外は円形で，直径は20～60cmで特に北東部分が大きくなっており，中央土坑より大きなものもあるが，これは単に掘形が大きいだけと考えたい。深さは15～20cm程度である。柱穴と中央土坑の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で柱痕は確認されなかった。主柱を楕円形の並びで復元すると長軸となる南北方向で4.1m，短軸となる東西方向で約3.0mの規模になる。竪穴住居として復元すると南北方向に約６m，

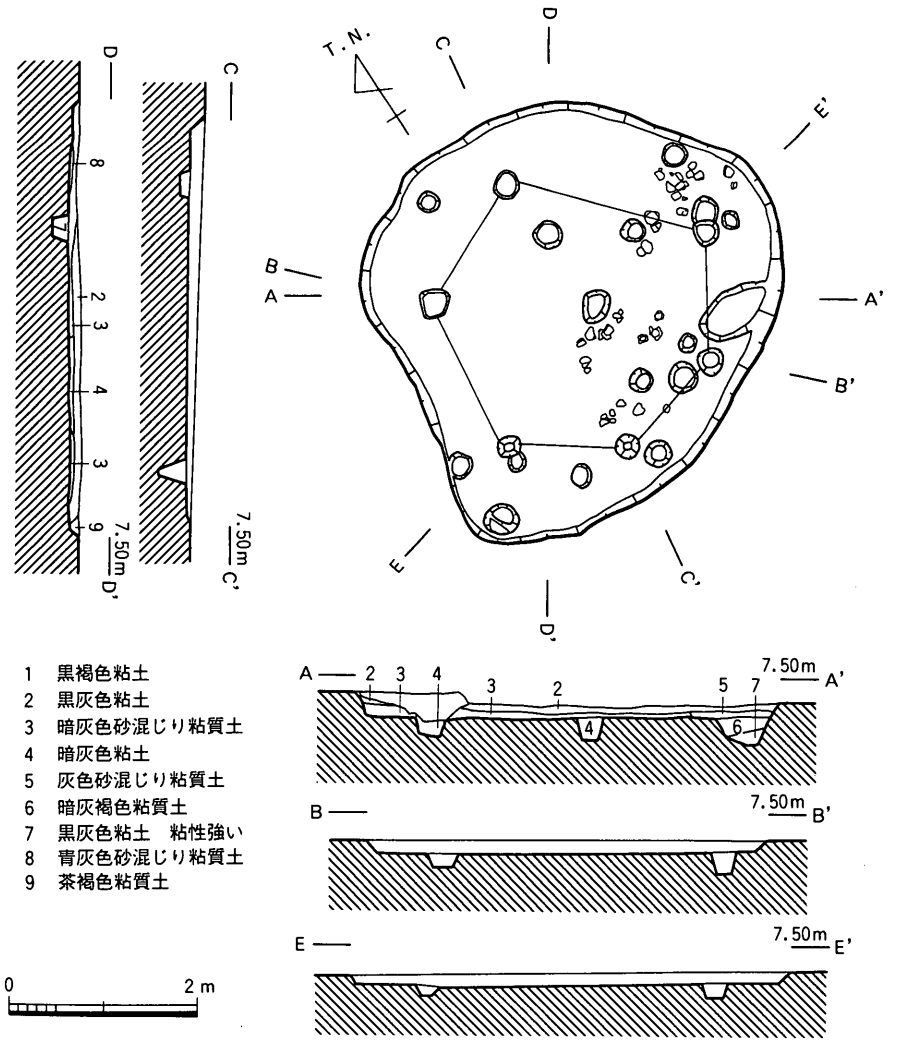


第311図　Ｄ区ＳＨ01平・断面図（１/80）

東西方向に約５ｍの弱い楕円形の住居が復元されよう。遺物は全く出土しなかったため詳細な時期は不明だが，後述する弥生時代前期後半のＳＫ03・04の埋没後に建てられているので，前期末～中期初頭頃と思われる。

ＳＨ02（第312図～第317図）

調査区の東側で検出した竪穴住居である。平面形は不整形で円形と方形の中間形態のような形である。西側の壁はやや内湾気味な直線で，東側は直線的になっている。直径はＡ－Ａ’ラインで4.45m，Ｃ－Ｃ’ラインで4.3m，Ｄ－Ｄ’ラインで4.6mとなっており，全体として4.5m前後と言えよう。壁の立ち上りは10～20cm程度残っており，西側部分の残りが良かった。埋土は大きく上下２層に分けられ，上層には黒灰色粘土が，下層には暗



第312図　Ｄ区ＳＨ02平・断面図（１/80）

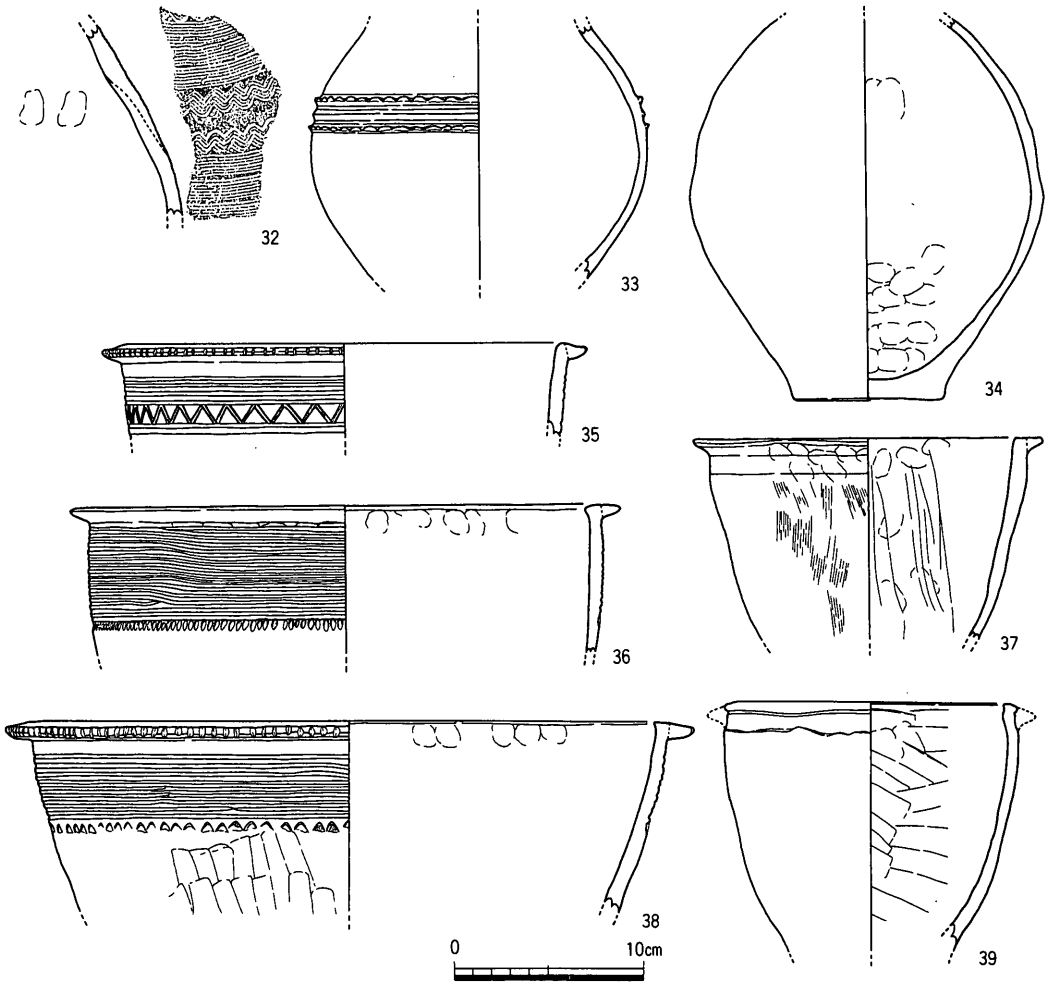
灰色砂混じり粘質土が堆積していた。床面には柱穴と考えられるものが多数あるが，このうち主柱穴として復元出来るものは６個で，直径3.0mの円周上に配置されている。主柱の柱間は平均して1.5m前後であるが，北東部分の柱間のみが2.2mと広くなっている。主柱穴の掘形の平面形は１辺20～30cmの隅丸方形で，深さは10～30cmである。主柱の埋土は暗灰色粘土の単一層であり，柱痕は確認されなかった。またＥ－Ｅ’ラインの２つの主柱穴は切り合いが認められ，他の主柱穴には切り合いがないことから，この部分の柱のみ建て替えを行なったと考えられる。床面のＡ－Ａ’ライン上の東壁際には楕円形の土坑がある。土坑は長径約90cm，短径50cm，深さ26cmで土坑の東側の掘り込み部は住居の壁と共有している。土坑の埋土は上下２層に分けられ，下層には粘性の強い黒灰色粘土が，上層には暗灰褐色粘質土がそれぞれ堆積していた。壁際で検出した柱穴のうち直径4.0mの円周上に配置されているものが４個あるが，あるいは外側に拡張したのかも知れない。Ａ－Ａ’ラインのＡ側に住居の埋没後に一部掘り込んだ痕跡がある。

住居の床面の直上からは土器が多く出土したが，土器は住居の東半分に集中して出土した。また埋土全体と住居検出面に相当する黒灰色粘土層上面からは多量のサヌカイト剥片が出土した。剥片・チップの総数で409点が出土し，総重量は1149.8ｇに及ぶ。これに対してサヌカイト製の石器品は18点と少ない。この住居ではもっぱら石器を製作していたと考えられる。しかし石器を製作する住居にしては土器の量が比較的多く，それも甕が多くなっている。石器製作のみを行なう工房のようなものではなく，そこに居住しながら石器を専門的に製作するような住居であったと考えられる。

32～34は壺である。32は体部に７条１単位の櫛描き直線文と６条１単位の櫛描き波状文を施している。33は体部の上下が欠損しているが，体部の中央部は球形に近い。体部中央に突帯を３条貼り付けているが，上下２条の突帯の上に指押さえを施している。34の体部は楕円形で，最大径は中央部分にある。

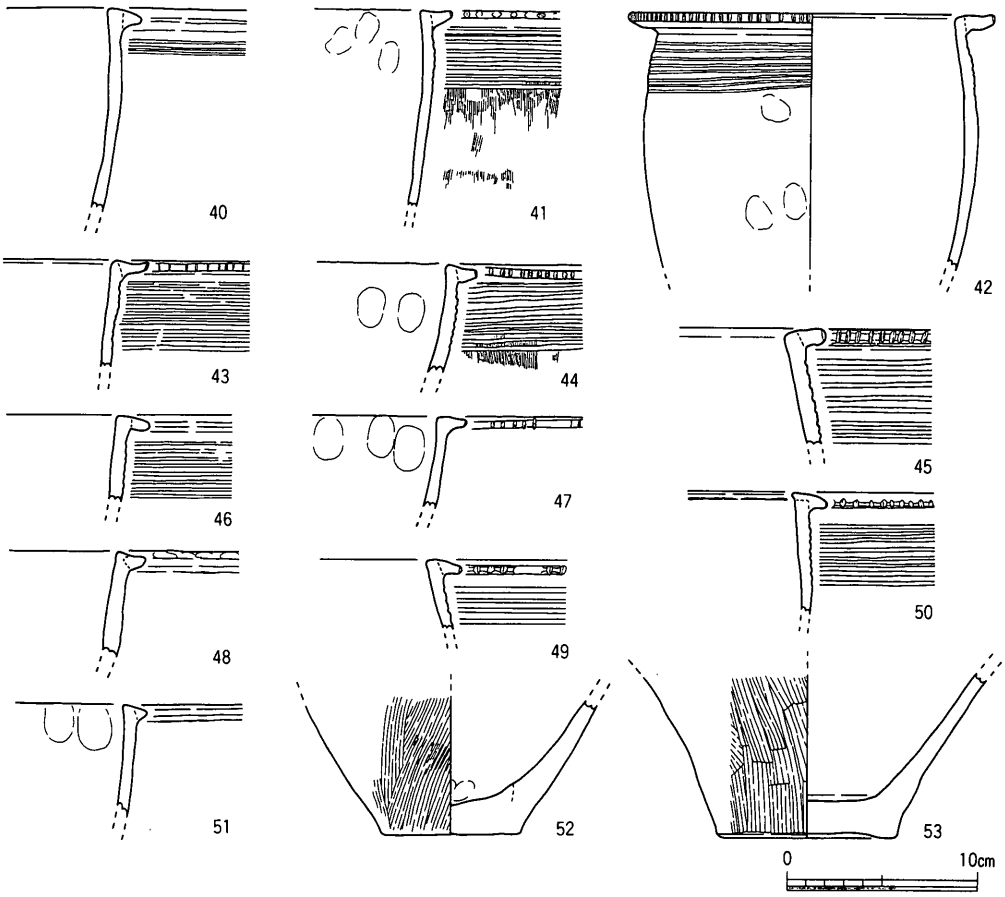
35～51は甕で，口縁部はいずれも逆Ｌ字形口縁となっている。35は口縁部を強くナデており，端部には刻み目を施す。体部にはヘラ描き沈線の間に半截竹管による山形文を施している。36は体部外面のヘラ描き沈線は15条と非常に多条となっており，下部に列点文を加えている。37の体部は緩く内湾しており，体部上部は肥厚している。体部外面はハケ目を施し沈線は加えない。内面はナデと板ナデである。38は口縁部端部に刻み目を施している。体部は直線的に外傾しており，外面にはヘラ描き沈線９条と三角形列点文を施している。体部外面は板ナデとなっている。39の口縁部は剥離しているが，口縁部貼付部分には

強くナデた後に下書き用の沈線を１条巡らせている。体部は緩く内湾しており，外面は摩滅しているが，内面は全体に板ナデを施している。40は体部外面のヘラ描き沈線は３条と体部の大きさの割りには少なくなっている。41の口縁部はやや上向きで，端部に刻み目を



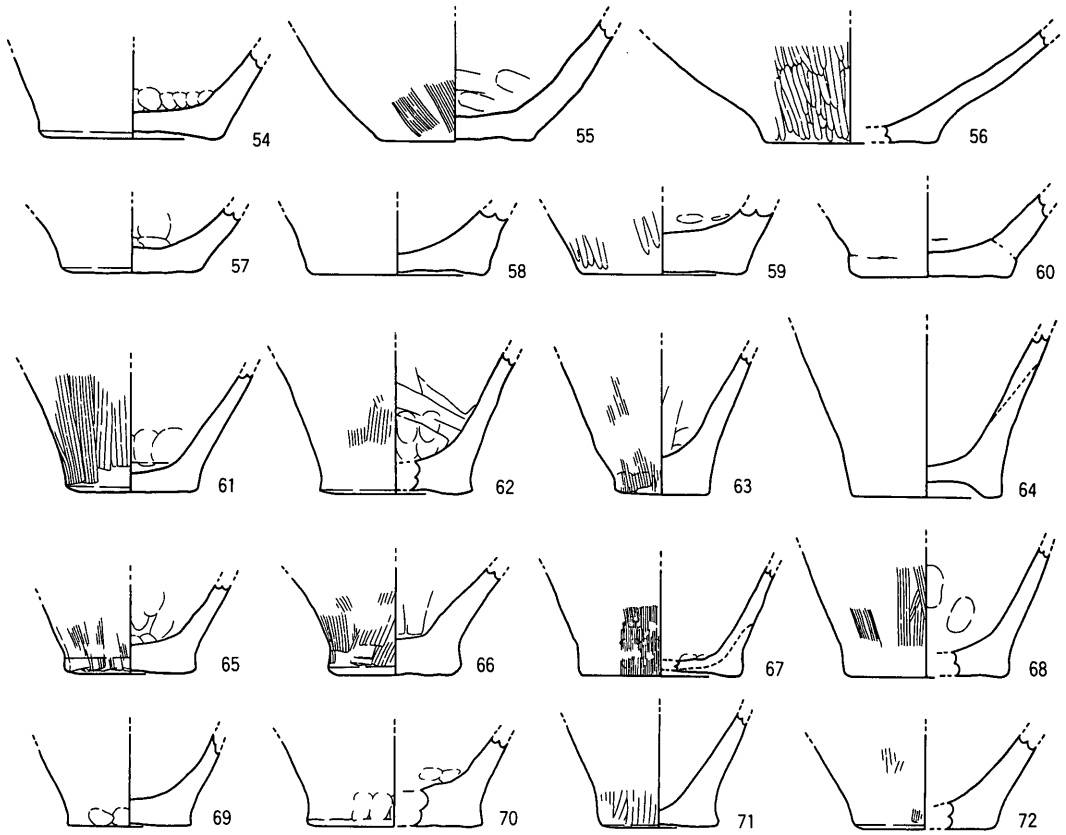
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
32	弥・壷				中・少、微・普	にぶい黄橙10YR7/4、灰黄2.5Y7/2	櫛描文（直線文･波状文）	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
33	弥・壷				中・少、細・普	にぶい黄橙10YR7/4、にぶい黄橙10YR6/3	体部に貼付突帯3条で、上下の2条には指押え	全体にﾅﾃﾞ	
34	弥・壷			7.8	中・多	浅黄橙7.5YR8/4		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
35	弥・甕	22.4			中・多	にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線4条＋現存2条、沈線文帯の間に半截竹管による山形文、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
36	弥・甕	25.2			中・普、微・多	灰黄褐10YR6/2	ヘラ描沈線15条、列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
37	弥・甕	15.4			細・多、微・多	にぶい赤褐5YR5/4、にぶい黄橙10YR6/4		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目・指押え、内面ﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ・指押え	
38	弥・甕	32.2			粗・少、細・普	橙7.5YR6/6	ヘラ描沈線9条、三角形列点文、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
39	弥・甕	13.8			細・多	橙7.5Y6/6		外面ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	

第313図　Ｄ区ＳＨ02出土遺物（１）（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
40	弥・甕	*17.8			中・普	淡黄2.5Y8/3、灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線3条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
41	弥・甕	*24.8			中・多、細・多	橙7.5YR6/6、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
42	弥・甕	15.0			粗・少、中・普	灰黄褐10YR4/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
43	弥・甕	*16.0			中・少、細・多	黒2.5Y2/1、にぶい黄褐10YR7/3	ヘラ描沈線10条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
44	弥・甕	*22.2			中・多	にぶい橙7.5YR6/4、にぶい黄橙10YR7/3	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
45	弥・甕	*47.6			中・多	浅黄2.5Y7/3	ヘラ描沈線現存8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
46	弥・甕	*31.8			粗・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/2、灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線現存8条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
47	弥・甕	*41.4			中・多	灰黄2.5Y7/2	口縁部端部刻み目	口縁部折曲げ、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
48	弥・甕	*23.4			細・普	暗灰黄2.5Y5/2		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
49	弥・甕	*21.6			中・少、細・多	にぶい赤褐5YR5/4、にぶい黄橙10YR7/4	ヘラ描沈線現存4条、口縁部端部刻み目	全体にﾏﾒﾂ	
50	弥・甕	*17.0			細・多	にぶい橙7.5YR7/4	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
51	弥・甕	*15.6			中・多	にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
52	弥・壷			7.4	中・少、細・多	淡黄橙10YR8/4 灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
53	弥・壷			9.6	粗・少、中・多	灰黄褐10YR6/2 にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

第314図　D区ＳＨ02出土遺物（２）（１/４）



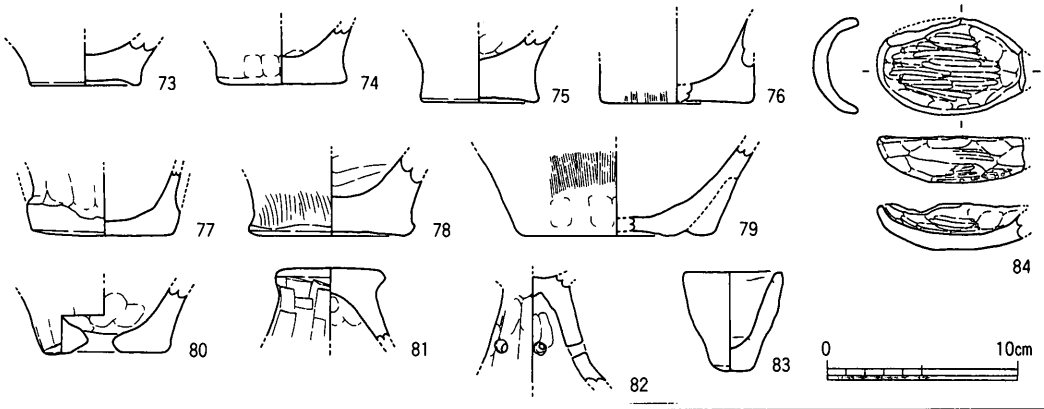
0　10cm

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
54	弥・壷			9.5	粗・少、細・多	にぶい黄橙10YR6/3		全体にﾅﾃﾞ、内面指押え	
55	弥・壷			8.0	粗・少、中・多	にぶい黄2.5Y6/3、にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾊｹ目、内面指で抉るようなﾅﾃﾞ、底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
56	弥・壷			9.2	中・普、細・多	黒2.5Y2/1、にぶい黄橙10YR7/4		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
57	弥・壷			7.4	中・多	にぶい橙10YR7/2、褐灰10YR5/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
58	弥・壷			9.0	中・多	明赤褐5YR5/6、淡赤橙2.5YR7/4		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
59	弥・壷			9.0	中・多	橙2.5YR6/8、にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
60	弥・壷			8.0	粗・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/2 にぶい橙7.5YR7/4		全体にﾅﾃﾞ	
61	弥・甕			7.0	中・多	にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
62	弥・甕			8.1	中・少	にぶい褐7.5YR5/4 明褐7.5YR5/6		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
63	弥・甕			5.0	中・多	橙2.5YR6/6、にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾊｹ目・指押え、内面板ﾅﾃﾞ	
64	弥・甕			7.9	中・少、細・普	浅黄橙10YR8/3、にぶい黄橙10YR7/3		全体にﾅﾃﾞ	
65	弥・甕			7.0	中・少、細・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
66	弥・甕			7.0	中・多	明黄褐10YR6/6、灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	
67	弥・甕			8.2	中・少	にぶい黄褐10YR7/2		外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
68	弥・甕			8.6	中・多	にぶい褐7.5YR5/4 褐灰7.5YR5/1		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え、底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
69	弥・甕			6.5	粗・少、中・普	灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面不明	
70	弥・甕			9.2	中・少	灰白2.5Y8/2、灰黄褐10YR5/2		外面指押え・ﾏﾒﾂ、内面指押え・ﾏﾒﾂ	
71	弥・甕			6.0	中・多	淡黄2.5Y8/3、にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ・粗いﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
72	弥・甕			7.5	中・多、細・普	浅黄橙7.5YR8/3、褐灰7.5YR6/1		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	

第315図　Ｄ区ＳＨ02出土遺物（３）（１/４）

施している。外面にはヘラ描き沈線を８条施し，全体にハケ目調整となっている。42の口縁部は横に大きく突出している。体部は膨らんでおり，外面は全体にナデている。43は口縁部の上面を強くナデている。体部外面にはヘラ描き沈線を10条施している。44は口縁部上面をナデて，端部に刻み目を施す。体部は内湾しており外面にはハケ目を施している。45の口縁部端部は上方を向き，端部には刻み目を入れる。体部は直線的に内傾している。46の口縁部端部は摩滅しており，刻み目の有無は不明である。端部は下方を向いている。47の口縁部は横方向に折り曲げている。体部外面は無文で全体にナデている。48は口縁部の上面を強く指押さえしている。49の体部は直線的に内傾している。50の口縁部は上部から覆うように粘土を加えて逆Ｌ字形に仕上げている。口縁部端部は下方を向き，刻み目を施している。体部外面にはヘラ描き沈線が８条ある。51の口縁部の横への拡張は弱い。体部は無文で摩滅している。

52～79は壺および甕の底部である。52・53の外面はハケ目を施している。54の底部内面



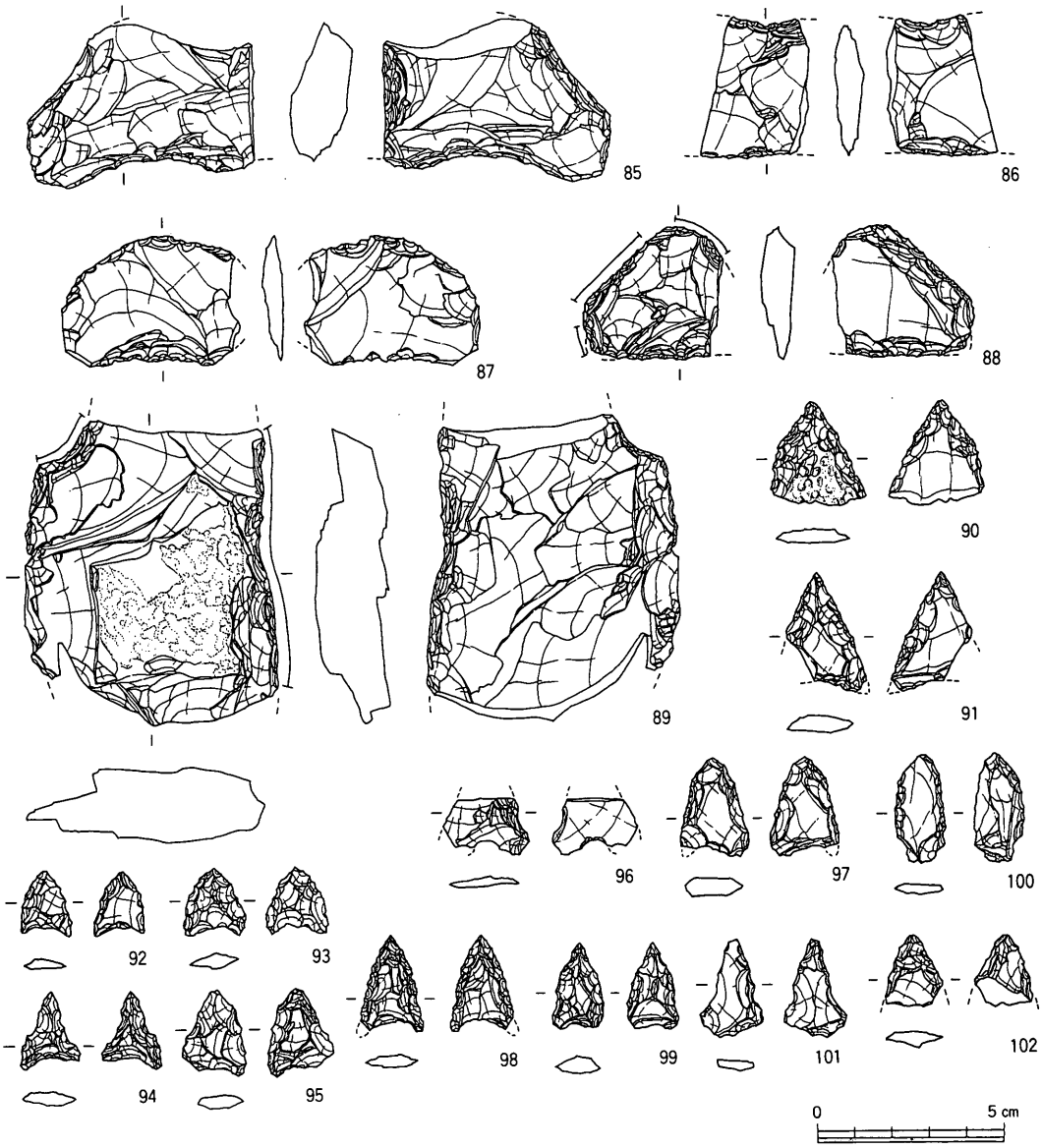
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
73	弥・甕			5.6	中・多	浅黄2.5Y7/3、明赤褐5YR5/6		全体にﾏﾒﾂ	
74	弥・甕			6.0	粗・少	灰白2.5Y8/2		外面指押え・ﾏﾒﾂ、内面指押え・ﾏﾒﾂ	
75	弥・甕			6.0	細・多	明赤褐5YR5/8		全体にﾅﾃﾞ、内面指押え	
76	弥・甕			8.0	中・多	浅黄橙7.5YR8/3、にぶい黄橙10YR7/2		外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
77	弥・甕			7.5	粗・少、細・普	にぶい黄橙10YR6/3、灰黄褐10YR6/2		全体にﾅﾃﾞ	
78	弥・甕			8.6	粗・少、細・多	にぶい橙7.5YR6/4、灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
79	弥・甕			9.6	粗・少	明赤褐5YR5/6 にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ	
80	弥・甑			6.4	中・多	灰白2.5Y8/1、浅黄橙7.5YR8/3		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
81	弥・蓋	つまみ径5.8			中・普、細・多	にぶい黄橙10YR7/3		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
82	弥・高杯				微・多	にぶい黄橙10YR7/3、にぶい橙7.5YR7/4		円形透し6個、外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
83	弥・ﾐﾆ甕	5.2	5.1	2.1	粗・少、細・少	浅黄2.5Y7/3		全体にﾅﾃﾞ、口縁部不整形	
84	弥・舟形土製品	A-A' 7.7、B-B' 5.0	2.4		中・少、細・普	橙5YR6/6、にぶい黄橙10YR7/2		スプーン状、外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	

第316図　Ｄ区ＳＨ02出土遺物（４）（１/４）

の立ち上り部には指押さえが顕著である。55の体部外面はハケ目を施すが，部分的にヘラケズリ状になっている。内面は指で抉るようにナデている。底部外面はヘラケズリとなっている。56の体部は底部から大きく開いて立ち上がる。外面には丁寧にヘラミガキを施している。59は外面にヘラミガキが施されている。60の底部は突出気味で，外面は全体にナデているが摩滅気味である。61～63は外面にハケ目を施しており，63の底部は小さいものである。64の底部は上げ底である。65・66の底部は突出気味で，外面にはハケ目を施す。67の外面はハケ目で，底部外側に粘土を加えて底部を作り出している。68の底部外面はヘラケズリである。71の底部は小さく突出気味である。体部外面には粗いハケ目を施している。72の外面は摩滅しているが，ハケ目が僅かに残っている。73は上げ底である。75の底部は肥厚している。77は外面が剥離している。78・79の外面はハケ目の後にナデている。79は外面の体部立ち上り部に粘土を加えて底部を作り出している。

80は甑で，底部の中央部からやや偏った位置に，焼成後に穿孔している。81は蓋で，つまみ部が横に突出している。外面には全体に板ナデを施している。82は高杯の脚部で，円形の透し穴が6個巡らされている。外面には板ナデを，内面はナデているが上部は細い板状工具で押すように整形している。83はミニチュアの甕で，口縁部は不整形である。全体に厚手の作りである。84は舟形土製品と考えられるものである。一部欠損しているが，その部分が完結するのかスプーンのように柄が付くのかは不明であるが，ここでは舟形と考えて完結するものと考えたい。全体に指押さえにより整形した後に，内・外面にヘラミガキを施している。断面は幅広のU字形である。

85は石小刀と考えられるものである。先端部は鎌のように下方を向き，両側縁に刃部を作り出している。途中で欠損しているが，欠損部分に後から加工を施している。石小刀として再生したものと思われるが，あるいは石小刀の刃部をそのまま利用してスクレイパーに転用したのかも知れない。86は楔形石器で，上下に加工を施しており，両側には両極打撃の痕跡が良好に残っている。87・88はスクレイパーで，87の刃部は主に片面から作り出しており，非常に鋭利になっている。88は欠損しているが三角形のものと考えられ，背部には敲打痕が認められる。89は石鏃の未製品である。両面ともに製作途中のためか凹凸が激しく，一部自然面も残っており整形に至っていない。側縁の片側は調整剥離により整えているが，反対側の側縁は一部に敲打痕があるがあまり調整を加えていない状態である。90～102は石鏃で，このうち90は平基，91～99は凹基，100は凸基のものである。90は片面に自然面が残り，基部には調整を施していない。92・94の基部の両端部は不揃いである。



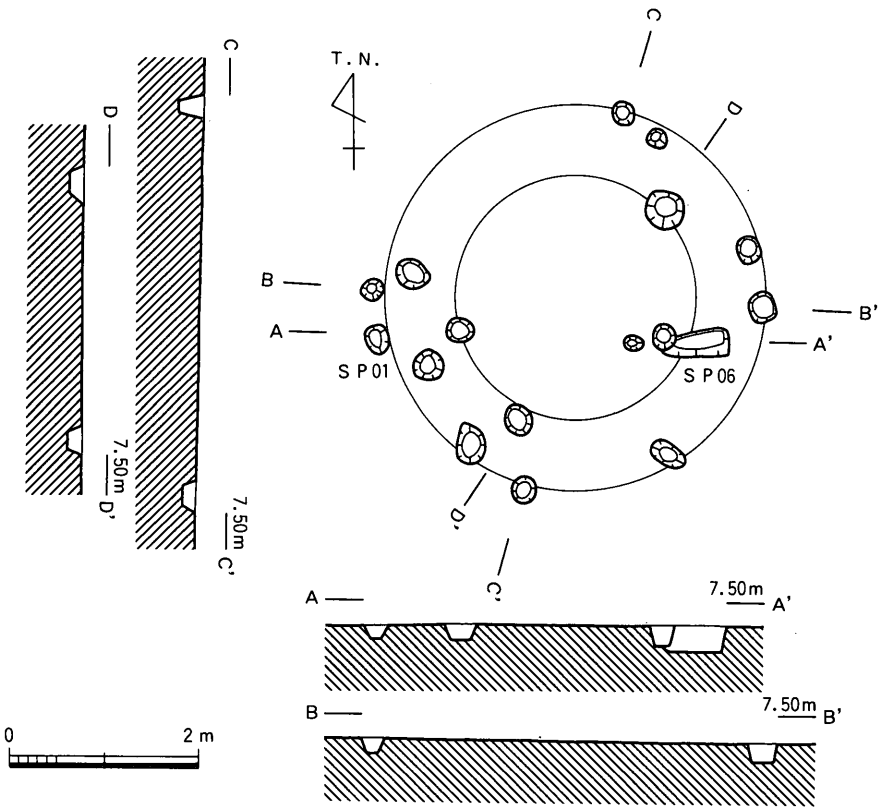
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
85	石小刀	6.1	4.3	1.5	42.2	サヌカイト	欠損部に後から加工	
86	楔形石器	2.8	3.7	0.8	10.3	サヌカイト	両極打撃の痕跡が明瞭	
87	スクレイパー	3.4	4.8	0.6	10.5	サヌカイト		
88	スクレイパー	3.8	3.5	0.9	14.0	サヌカイト	刃部鋭利	
89	石鍬	8.1	6.8	2.0	122.9	サヌカイト	両面とも製作途中で凹凸が残る、未製品	
90	石鏃	2.7	2.6	0.4	2.2	サヌカイト	平基	
91	石鏃	3.2	2.1	0.5	2.1	サヌカイト	凹基	
92	石鏃	1.7	1.4	0.3	0.6	サヌカイト	凹基　基部不揃い	
93	石鏃	1.8	1.7	0.4	0.8	サヌカイト	凹基	
94	石鏃	2.0	1.6	0.4	0.6	サヌカイト	凹基　基部両端が不揃い	
95	石鏃	2.3	1.7	0.4	1.4	サヌカイト	凹基	
96	石鏃	1.5	2.3	0.2	0.8	サヌカイト	凹基　先端部欠損	
97	石鏃	2.6	1.8	0.5	2.5	サヌカイト	凹基	
98	石鏃	2.6	1.7	0.3	1.2	サヌカイト	凹基	
99	石鏃	2.3	1.4	0.4	1.1	サヌカイト	凹基	
100	石鏃	2.8	1.3	0.3	1.0	サヌカイト	凸基有茎式	
101	石鏃	2.6	1.7	0.4	1.1	サヌカイト	基部不整形	
102	石鏃	1.9	1.5	0.4	0.9	サヌカイト		

第317図　D区ＳＨ02出土遺物（５）（１/２）

96は非常に薄いもので，基部は抉りを入れるように打ち欠いて凹基に仕上げている。97は厚手の剥片を利用しており，周囲は大きな剥離により整えている。98は両側縁部に非常に丁寧に調整を施している。100は凸基の有茎式で，幅広の茎部となっている。101の基部は整っていない。未製品かもしれない。102の基部は欠損している。

ＳＨ03（第318図～第319図）

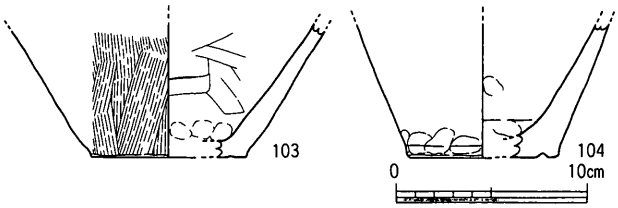
ＳＨ02の西側1.5mに隣接する住居である。壁の削平された竪穴住居あるいは平地式住居で，柱穴のみからの復元となった。主柱には直径2.5mの円周上に配置されるものと，4.0mの円周上に配置されるものの２群がある。しかし内側の柱のみの住居は小さすぎるので，これらは補助的な柱と思われ，主柱は外側のものと考えられる。内側の柱穴は４個あるが，北東部分は検出されなかった。このうちＳＰ06は円周上にあるが，形態的に他の柱穴と異なるため，ＳＨ03を構成する柱穴は円周より少し内側になるが，ＳＰ06を壊している柱穴とした。外側の柱穴は円周上に９個あるが，30cm前後の間隔で２穴１単位となっているものが４単位ある。これは主柱を横に移動して建て替えを行なったものと考えられる。北西



第318図　Ｄ区ＳＨ03平・断面図（１/80）

部分が検出されなかったが，復元すると主柱は６本と考えられる。主柱穴の掘形は平面がほぼ円形であるが東側のものは隅丸方形となっている。主柱穴の掘形は直径30cm前後，深さ15～30cmとなっており，埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で柱痕は確認出来なかった。竪穴住居であれば直径６ｍ前後の円形のものが想定され，建て替えが認められるものである。直径６ｍほどを想定すると，すぐ東側で検出したＳＨ02と接してしまうことからも，ＳＨ02とＳＨ03には時期差が考えられる。

遺物は外側の主柱穴ＳＰ01から出土した。103は外面にハケ目を施している。104は全体にナデている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
103	弥・甕			8.2	中・少、細・普	褐灰10YR4/1、にぶい黄橙10YR7/2		外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	SP01
104	弥・甕			8.0	中・少、細・多	褐灰7.5YR4/1		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	SP01

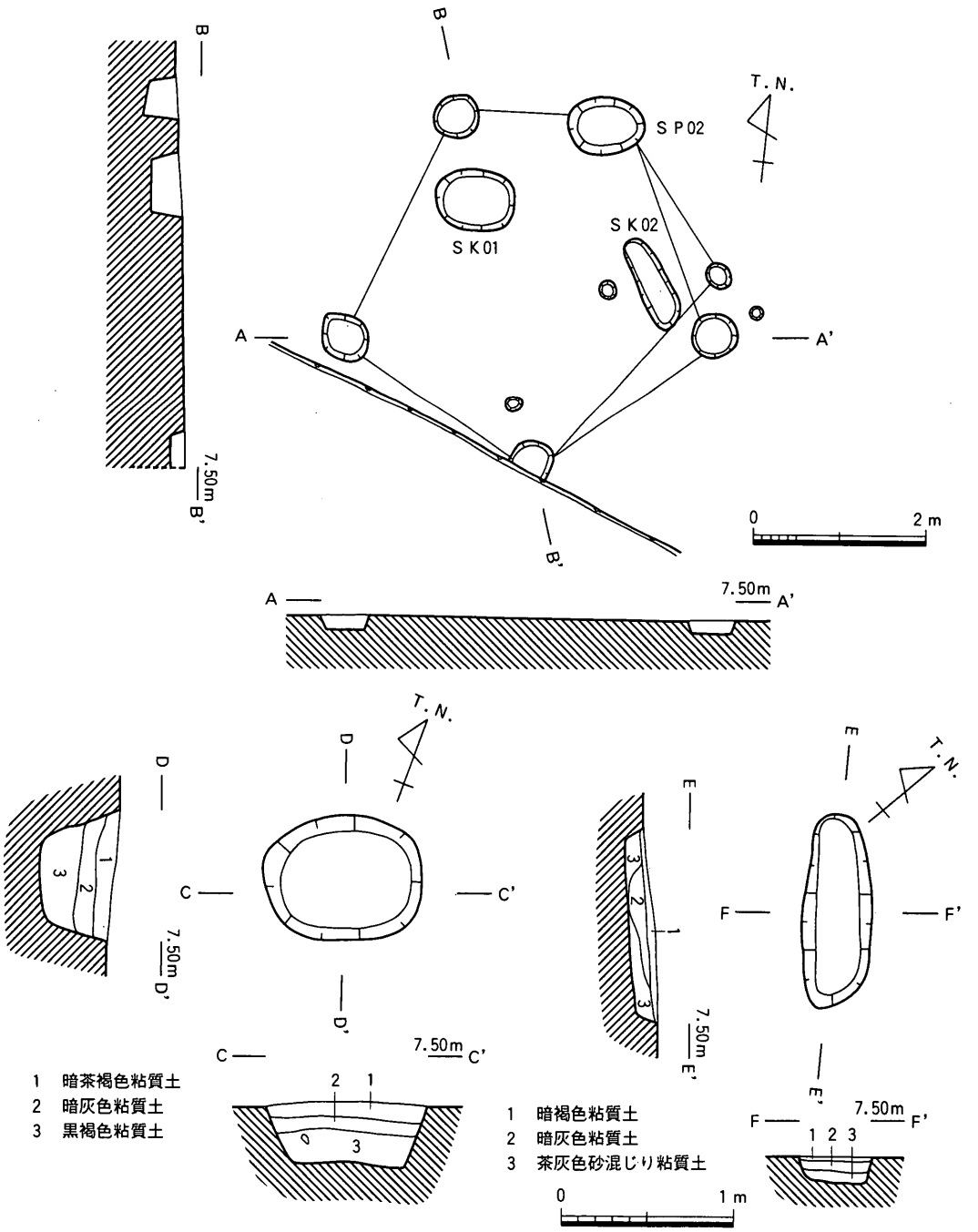
第319図　Ｄ区ＳＨ03内ＳＰ01出土遺物（１/４）

ＳＨ04・ＳＫ01・ＳＫ02（第320図～第321図）

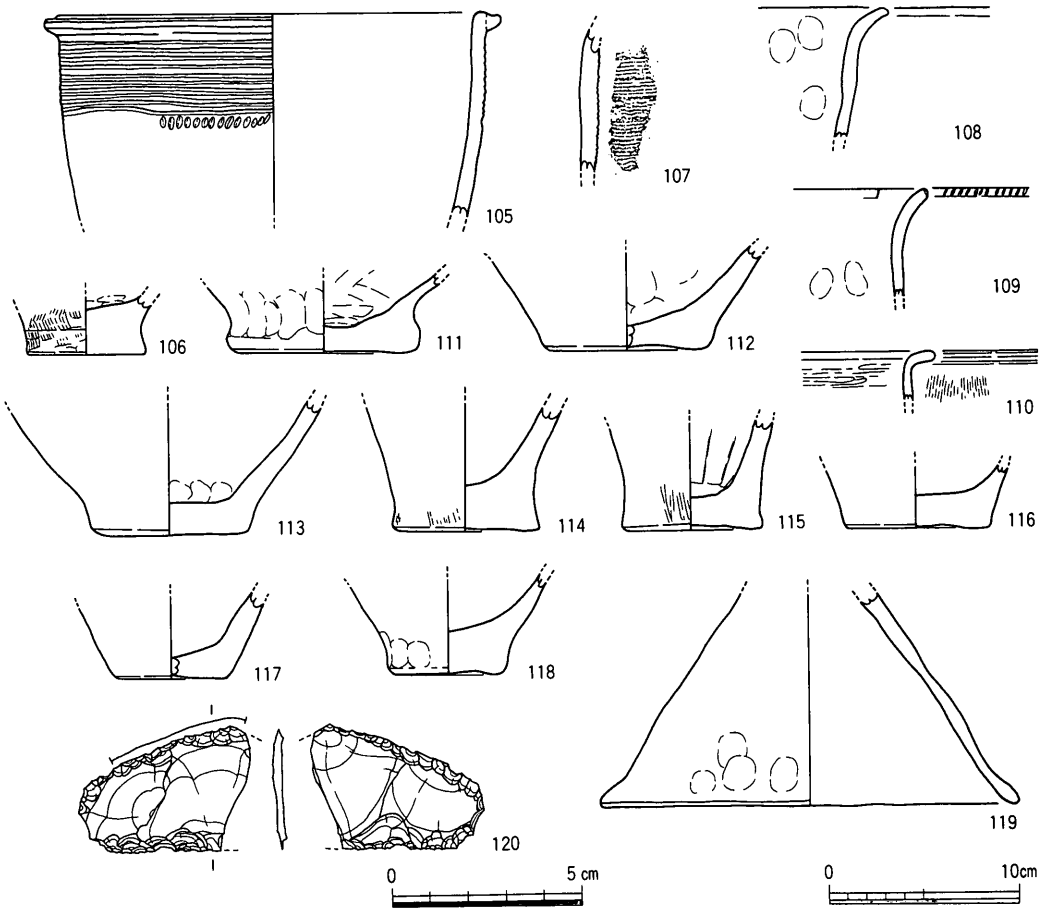
調査区の中央部の南壁際で検出した住居である。壁の削平された竪穴住居あるいは平地式住居で，柱穴のみからの復元となった。直径4.2mの円周上に柱穴が６個配置されているが，東側部分には25cmの間隔で隣接する２つの柱穴があり，そのどちらか片方が主柱として建てられていたと考えられる。従って主柱が５本の住居が復元できる。あるいはこの隣接する柱穴はこの部分だけ建て替えたためかも知れない。主柱穴のうちＳＰ02は長径90cm，短径68cm，深さ25cmの楕円形で柱穴としては大型である。他の４個の主柱穴の掘形は平面形は円形で，直径50cm，深さ15～20cmで，埋土は暗茶褐色粘質土の単一層となっており，柱痕は確認出来なかった。ＳＰ02が柱穴にしては大型であり，他の主柱穴と規模が異なっていることから考えると，あるいは住居に伴う土坑とも考えられる。すると４本柱の住居が想定出来る。これとは別に住居内に土坑を２基検出した。住居の壁面が残存していないため，土坑の検出面が確実に住居床面であるかどうかの検証は出来ないが，ここでは住居に伴うものとして考えておく。ＳＫ01は長径94cm，短径70cmの楕円形で，深さは36cmで東に向かって深くなっている。埋土は3層に分層され，最下層は黒褐色粘質土が堆積していた。遺物は主に最下層から出土した。これに対しＳＫ02は長径112cm，短径36cmの長楕円形のもので，深さは15cmである。埋土は３層に分層され，遺物は壺の体部の細片が１個出土したにとどまる。直径6.2m前後で床面に土坑が２ないし３基伴う，４本あるいは５本柱の円形

の住居が想定出来よう。出土遺物から弥生時代中期初頭に下るものである。

105・106はＳＰ02出土の遺物である。105は逆Ｌ字形口縁の甕で，口縁部上面は強いナデによる凹面となっており，端部は上方を向いている。体部は若干内湾しており，外面にはヘラ描き沈線10条と列点文を施している。106の底部は肥厚して突出している。外面はハケ



第320図　Ｄ区ＳＨ04平・断面図（１/80），ＳＨ04内ＳＫ01・02平・断面図（１/40）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
105	弥・甕	21.4			中・普	にぶい黄橙10YR7/2、橙5YR6/6	ヘラ描沈線10条、列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	SP02
106	弥・甕			6.0	粗・少、中・普	灰褐7.5YR5/2 褐灰7.5YR4/1		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	SP02
107	弥・甕				中・少	にぶい黄橙10YR7/4	櫛描文（直線文･波状文）	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
108	弥・甕	*19.6			中・多	浅黄2.5Y7/3		如意形口縁、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
109	弥・甕	*21.8			粗・多、中・普	灰黄褐10YR5/2	口縁部端部刻み目	如意形口縁、外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・指押え	
110	弥・甕	*16.4			細・普	にぶい黄橙10YR7/2		如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
111	弥・壺			9.8	粗・少、中・普	灰白2.5Y8/2		外面ﾅﾃﾞ・強い指押え、内面抉るようなﾅﾃﾞ	
112	弥・壺			8.3	粗・少、細・多	にぶい黄橙10YR6/3、灰黄褐10YR4/2		外面ﾏﾒﾂ、内面指押え	
113	弥・壺			8.2	粗・多、中・多	にぶい褐7.5YR5/4、灰黄褐10YR4/2		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
114	弥・甕			7.8	中・多、細・普	浅黄2.5Y7/3、灰黄褐10YR6/2		外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
115	弥・甕			7.0	粗・少、細・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面板ﾅﾃﾞ	
116	弥・甕			7.2	粗・少、細・普	浅黄橙10YR8/3		全体にﾏﾒﾂ	
117	弥・甕			6.0	中・少、細・普	にぶい橙5YR7/4、浅黄橙10YR8/3		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
118	弥・甕			5.8	中・普	にぶい黄橙10YR6/3、灰黄褐10YR6/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ	
119	弥・蓋	21.8			中・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
120	スクレイパー	4.5	3.2	0.4	5.7	サヌカイト		

第321図　Ｄ区ＳＨ04内ＳＰ02・ＳＫ01出土遺物（１/２，１/４）

目である。

107～120はＳＫ01出土の遺物である。107～110は如意形口縁の甕である。107の口縁部は欠損しているが，欠損状況から如意形口縁と思われる。体部外面には５条１単位の櫛描き直線文と波状文が施されている。108は全体にナデている。109の口縁部端部には刻み目を施し，口縁部内面は板ナデとなっている。110は口縁部の屈曲の度合いが強く，端部は肥厚している。体部外面にはハケ目を，内面にはヘラミガキを施している。

111～118は壺および甕の底部である。111は体部立ち上り部の外面に強い指押さえを施して底部を突出させている。底部内面は指で抉るようにナデている。底部に比べて体部は薄くなっている。114の底部は肥厚しており，外面は摩滅しているもののハケ目が僅かに見られる。115は底部からの体部の開きは小さく，外面にはヘラミガキを，内面には板ナデを施している。118は体部立ち上り部の外面に指押さえを施す。

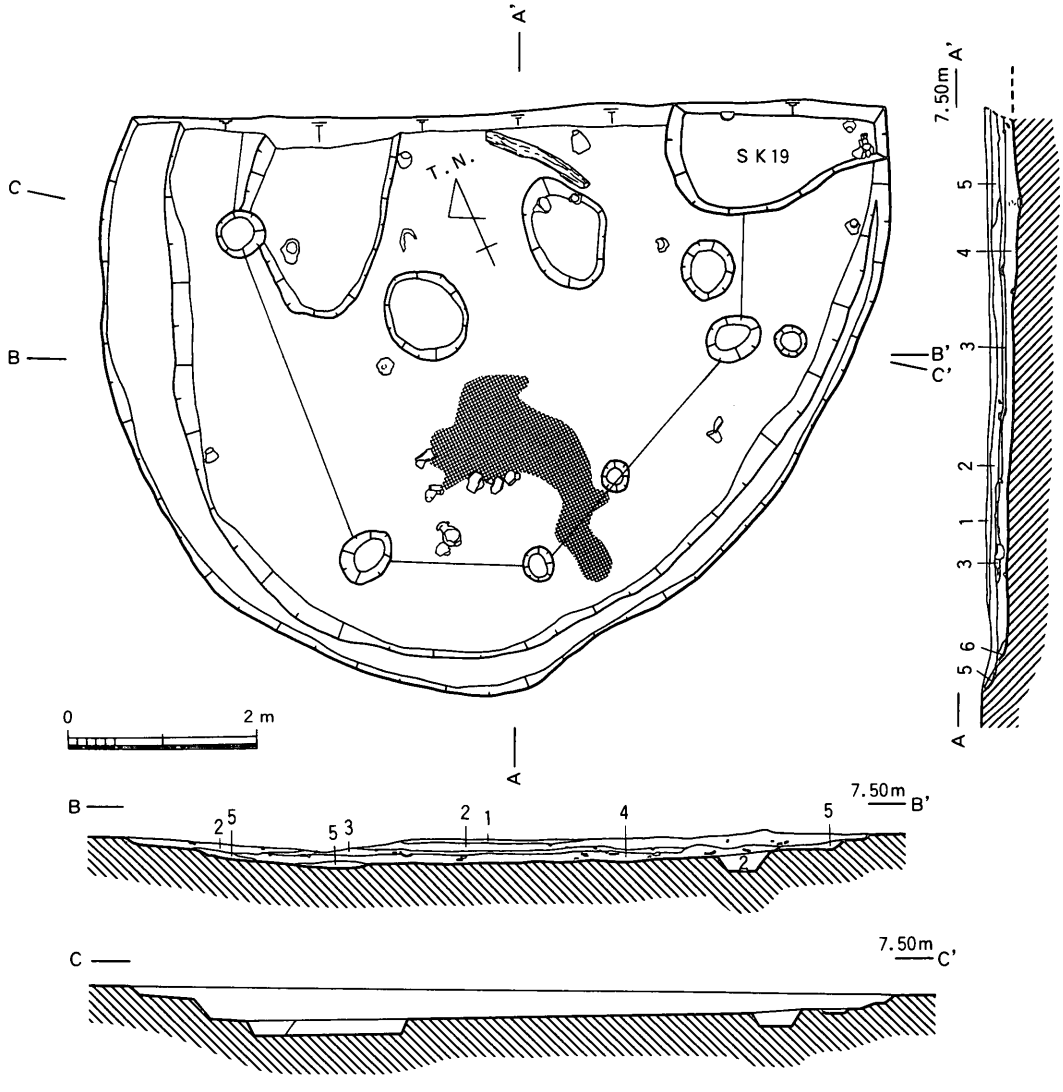
119は蓋で，体部は直線的で中央部分がやや薄くなっている。端部付近で外側に屈曲しており，端部は肥厚して丸く収める。全体にナデている。

120はスクレイパーで，背部は山形になるものと思われ敲打痕が認められる。薄い剥片を用いている。

ＳＨ05（第322図～第341図）

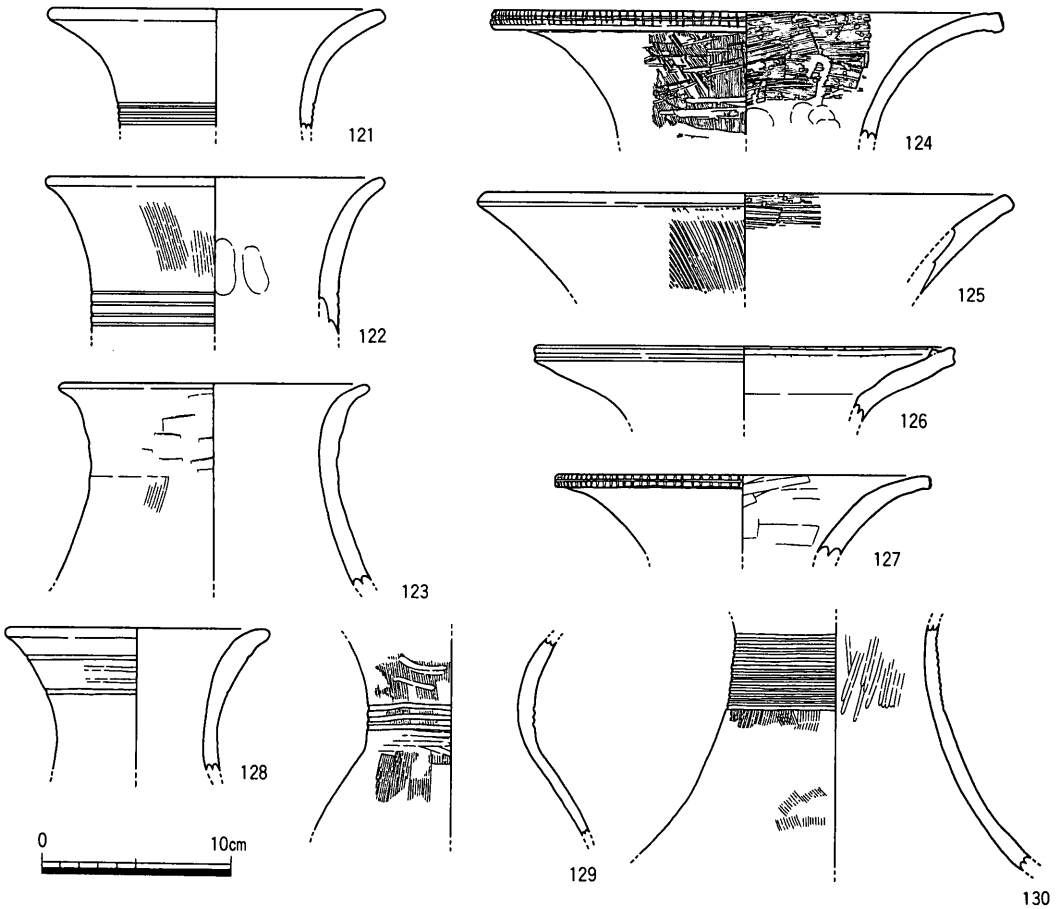
調査区の西側の北壁部分で検出した竪穴住居である。住居の北側は平成３年度調査区に続いており，平成３年度調査区については未整理のため，Ｄ区で検出した部分のみの報告となる。住居の平面形はＤ区の検出部分では円形と考えられ，直径は8.1ｍで鴨部・川田遺跡の中では大型の住居である。南北方向（Ａ－Ａ’ライン）は検出長で6.0ｍである。平成３年度調査区の所見によるとやや南北に長い楕円形になる可能性もある。住居の西側から東側にかけて掘り込みは２段になっており，西側は幅60cm，南側は幅30cm前後，東側は幅10cm程度のテラス状の平坦面を形成しており，西側から東側に向うほどテラスの幅は狭くなっている。このテラス状の面は東側で途切れている。住居検出面からテラス面までは10cm程度で，さらにテラス面から20cmほど下って床面に至る。従って検出面から床面までは30cm残っていたことになる。床面で柱穴と土坑を検出した。主柱と考えられるものは検出部分で４本で，復元すると８本柱程度になろうか。主柱穴の掘形の平面形は円形ないし円形に近い隅丸方形で，直径30～60cmで深さは15～20cmである。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で柱痕は確認出来なかった。Ｃ－Ｃ’ラインのＣ’側に柱穴が２つ並らんでいるが，壁際の柱穴のほうが浅いことから，内側の柱穴のほうが主柱穴と考えたいが，

しかし外側を主柱穴と考えると，他の主柱穴を含めて直径6.0mの円周上にきれいに配置されていることになる。この部分のみ建て替えを行なったのかも知れない。またC’側からC方向に２つ目の主柱穴と，南側のA－A’ライン上のA側の主柱穴を結ぶ直線上に１つ柱穴があるが，全体の柱のバランスを考えると，やや内側に入り過ぎているようである。C－C’ラインのC側の主柱穴と切り合うようにして土坑がある。長楕円形と考えられ，短径1.5m，長径は検出部分で1.9m，深さは15cmで底部は平坦である。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で，土器の細片が少量含まれていた。土坑の西側の掘り込み部分に主柱穴の



第322図　D区ＳＨ05平・断面図（１/80）

掘形があるが，見かけ上は前後関係があるがこの住居の同一の施設として考えたい。この他に土坑と柱穴の中間形態のものが2基ほどある。また北側の壁際の中央部分で炭化材が出土したが，他に炭化物や焼けた痕跡がないことから焼失家屋とは考えがたい。住居の南半分の中央部分の床面直上の暗灰色粘土層から壺・甕を中心とした土器が多量に出土した。土器の量に対して石器は少ないが，それでもサヌカイトの剥片・チップは総数98点，総重



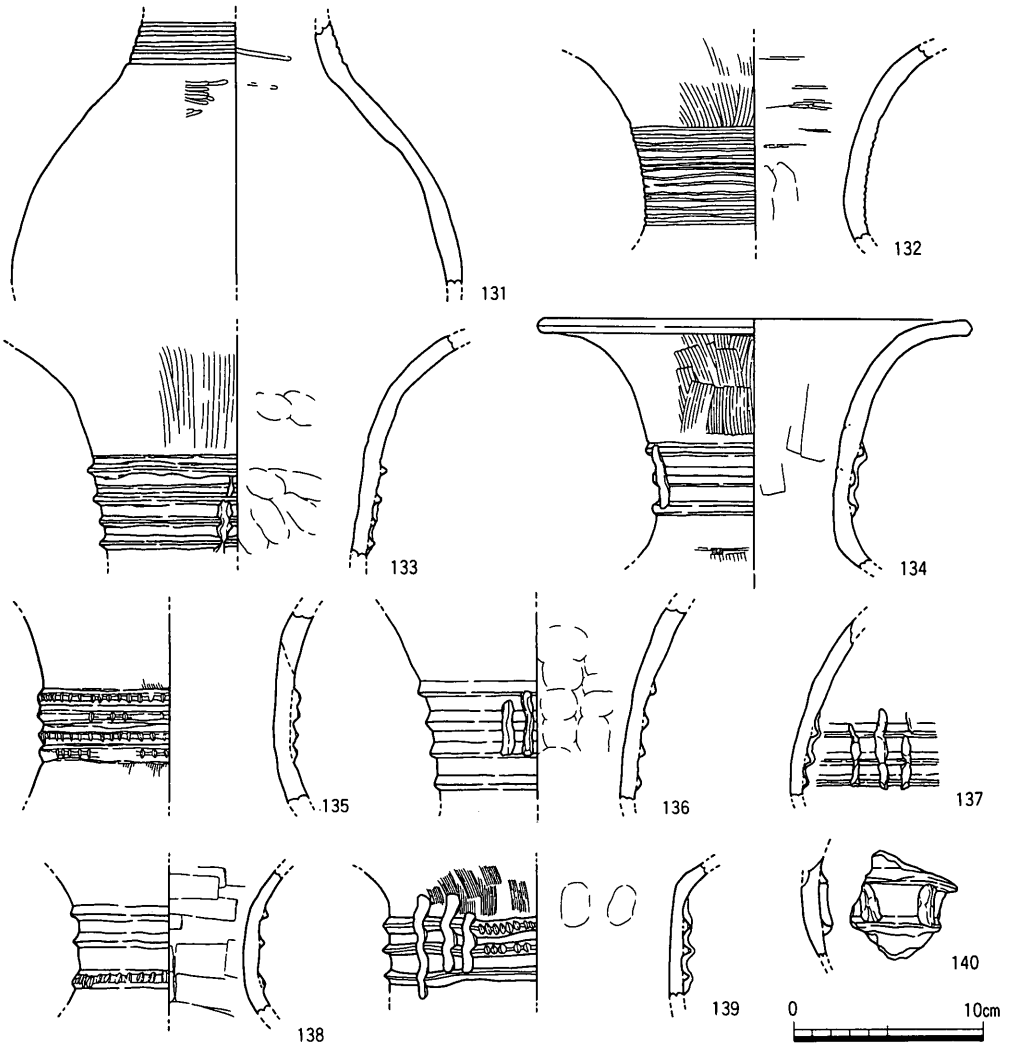
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
121	弥・壷	17.4			中・多	灰白2.5Y8/2	頸部にヘラ描沈線現存4条	全体にﾏﾒﾂ	
122	弥・壷	17.6			中・少、細・多	灰黄褐10YR6/2	頸部にヘラ描沈線現存4条	外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
123	弥・壷	15.8			中・多	灰白10YR8/2		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
124	弥・壷	26.8			中・普、粗・少	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部端部ヘラ描沈線1条→刻み目	口縁部端部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾊｹ目・指押え	
125	弥・壷	27.4			中・少	灰黄褐10YR5/2		外面非常に粗いﾊｹ目、内面非常に粗いﾊｹ目	
126	弥・壷	21.6			中・普	灰白2.5Y8/1	口縁部内面に貼付突帯1条、口縁部端部ヘラ描沈線1条	口縁部端部指押え、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
127	弥・壷	19.6			中・多	灰白10YR8/2	口縁部端部刻み目→ヘラ描沈線1条	外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ	
128	弥・壷	13.4			中・少、普・少	浅黄橙10YR8/3	口縁部にヘラ描沈線4条	全体にﾏﾒﾂ	
129	弥・壷				中・多	にぶい黄2.5Y6/3	頸部にヘラ描沈線3条	外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾏﾒﾂ	
130	弥・壷				中・多	浅黄2.5Y7/3、灰白2.5Y8/2	頸部にヘラ描沈線13条	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	

第323図　D区ＳＨ05出土遺物（１）（１/４）

量783.0ｇの量が出土している。北東の壁際にはＳＨ05の埋没後に掘削された土坑（ＳＫ19）があり，これに伴う混入と考えられる157・160が住居の最上層で出土している。

121～160は壺である。121・122は口縁部が短く外反し，頸部にヘラ描き沈線を施している。122の沈線は間隔がやや開いている。123は外反する口縁部をもち，頸部からそのまま体部に至る。外面はハケ目で頸部から口縁部にかけてハケ目原体の木口痕が多い。124の口縁部は大きく外反して開く。口縁部端部にヘラ描き沈線を１条施した後に，縦方向に刻み目を巡らしている。口縁部内・外面に丁寧にハケ目を施した後に外面にはヘラミガキを加えている。125は口縁部の内・外面に非常に粗いハケ目を施し，その後に口縁部端部付近の外面をナデている。126は口縁部端部は摩滅しているもののヘラ描き沈線が１条巡っている。口縁部内面に貼付突帯が１条あり，突帯と口縁部端部との間には指押さえを施している。127は口縁部端部は平坦な面を持ち，縦方向の刻み目を巡らせた後にヘラ描き沈線を１条施している。口縁部内面は板ナデであるが，部分的に強くなりハケ目状になっているところもある。128の口縁部は肥厚して外反する。頸部は細く，外面は摩滅しているがヘラ描き沈線が４条見られる。129は体部の張りはなく，頸部にはヘラ描き沈線を３条施す。口縁部から体部にかけての外面には，ハケ目の後に太いヘラミガキを雑に加えている。130は頸部にヘラ描き沈線が13条と多条である。体部上部はなだらかで，おそらく中央部分で大きく膨らむ扁平な体部になるものと思われる。あるいは上下反対向きともとれるが，頸部内面のヘラミガキは体部と考えた方には続かず，口縁部と考えた方に続いているため，図示したような向きに考えた。131の体部外面には摩滅しているがヘラミガキがある。132の頸部のヘラ描き沈線は14条と多条である。外面はハケ目の後にナデており，内面にはヘラミガキを施す。

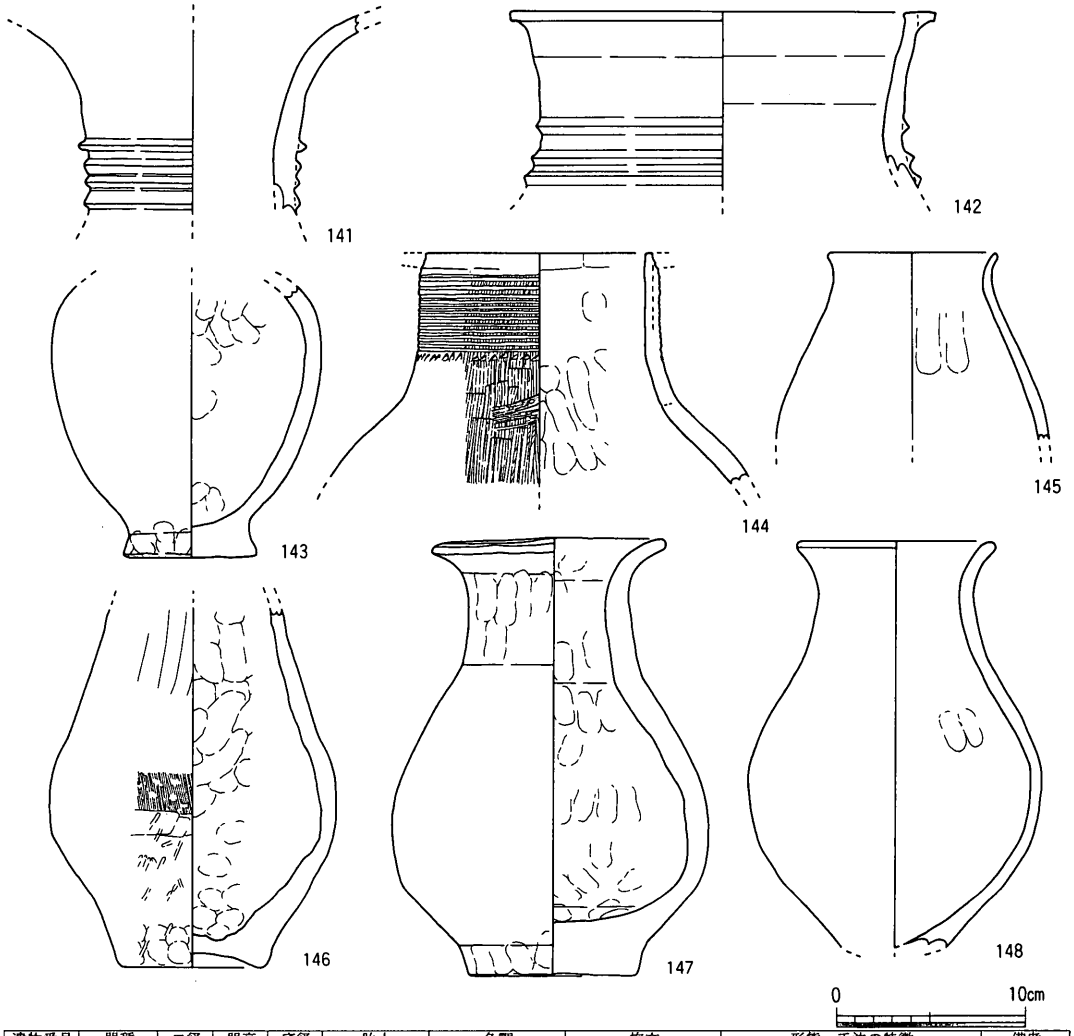
133～142は頸部に貼付突帯を巡らせるものである。133は頸部に貼付突帯を現存で４条巡らせた後に突帯上に棒状浮文を貼り付けている。口縁部は大きく開き，外面にはハケ目を施している。134の口縁部は大きく開くが，特に上部で強く屈曲して真横に開く。口縁部端部は角張っている。口縁部外面には粗いハケ目を施している。頸部には貼付突帯を３条巡らせた後に突帯上に２本１単位の棒状浮文を現存で２単位貼り付けている。体部上部の外面のハケ目も粗いものである。135は頸部に刻み目を施した４条１単位の複条貼付突帯を巡らせている。136は頸部に貼付突帯４条を巡らせた上に２本１単位の棒状浮文を現存で１単位貼り付けている。頸部は外傾している。137は頸部の貼付突帯上に３本１単位の棒状浮文を現存１単位貼り付けている。138の頸部の貼付突帯は３条あるが，最も下の



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
131	弥・壷				中・多	にぶい黄橙10YR6/3	頸部にヘラ描沈線現存5条	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	
132	弥・壷				細・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰黄褐10YR6/2	頸部にヘラ描沈線14条	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	
133	弥・壷				細・多	灰白10YR8/2、褐灰10YR6/1	頸部に貼付突帯現存4条＋棒状浮文現存1本	外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
134	弥・壷	22.4			中・普、粗・少	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	頸部に貼付突帯3条＋2本1単位の棒状浮文現存2単位	外面粗いﾊｹ目、頸部ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ	
135	弥・壷				細・多、粗・少	灰黄褐10YR6/2 黒褐10YR3/2	頸部に(4条1単位)複条貼付突帯	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
136	弥・壷				中・多	にぶい黄橙10YR7/2、にぶい黄橙10YR7/3	頸部に貼付突帯現存4条＋2個1単位の棒状浮文	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
137	弥・壷				細・多	灰黄2.5Y7/2、褐灰10YR5/1	頸部に貼付突帯現存3条＋3本1単位の棒状浮文現存1単位	全体にﾏﾒﾂ	
138	弥・壷				中・多	にぶい黄橙10YR7/2、灰黄2.5Y7/2	頸部に貼付突帯3条、このうち1条に刻み目	外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ	
139	弥・壷				中・多	灰黄2.5Y7/2、灰黄褐10YR6/2	頸部に貼付突帯現存3条(刻み目)＋3本1単位の棒状浮文現存1単位	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
140	弥・壷				中・多	灰黄2.5Y7/2	横方向2条突帯を貼付けた後に縦方向に棒状浮文で、格子状にする	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	

第324図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物（２）（１／４）

突帯には刻み目を入れている。内面は板ナデである。139も頸部の貼付突帯は３条であるが，上２条には刻み目を入れており，３本１単位の棒状浮文を現存で１単位貼り付けている。口縁部は頸部から急激に屈曲しており，外面にはハケ目を施した後にナデている。140は短い棒状浮文を突帯の間に埋め込むように貼り付けて，格子状に仕上げている。141は



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
141	弥・壷				中・普、細・多	灰白2.5Y8/2	頸部に貼付突帯現存4条	全体にﾏﾒﾂ	
142	弥・壷	19.0			中・普、粗・少	灰黄2.5Y6/2、にぶい黄橙10YR6/3	頸部に貼付突帯現存3条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
143	弥・壷			7.0	中・多、細・多	灰黄2.5Y6/2		外面ﾏﾒﾂ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
144	弥・壷				中・少、細・少	灰黄褐10YR6/2	頸部にヘラ描沈線12条、三角形列点文	外面粗いﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
145	弥・壷	8.7			粗・普、中・多	浅黄橙10YR8/3		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・縦方向強い指ﾅﾃﾞ	
146	弥・壷			7.2	中・少	灰黄2.5Y7/2		外面上半ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・下半ﾍﾗﾐｶﾞｷ→ﾅﾃﾞ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	
147	弥・壷	11.5	23.0	8.8	中・多、細・多	灰白10YR8/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え・ﾏﾒﾂ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	
148	弥・壷	9.9			粗・少、中・多	灰黄2.5Y7/2、黄灰2.5Y6/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

第325図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物（３）（１／４）

全体に摩滅している。142は口縁部は頸部からやや外傾して立ち上り，端部外面に粘土を加えて逆L字形に仕上げている。頸部には貼付突帯が現存で３条ある。口縁部から頸部にかけて強くナデている。

143の体部は上半部で肩が張っている。底部は突出しており底部立ち上り部の外面には指押さえを強く施している。144は直立する頸部からそのまま口縁部に至り，口縁部端部外側に粘土を加えて逆L字形になるものと思われるが剥離している。頸部にはヘラ描き沈線を12条施しその下に三角形列点文を加えている。外面全体に粗いハケ目を施している。

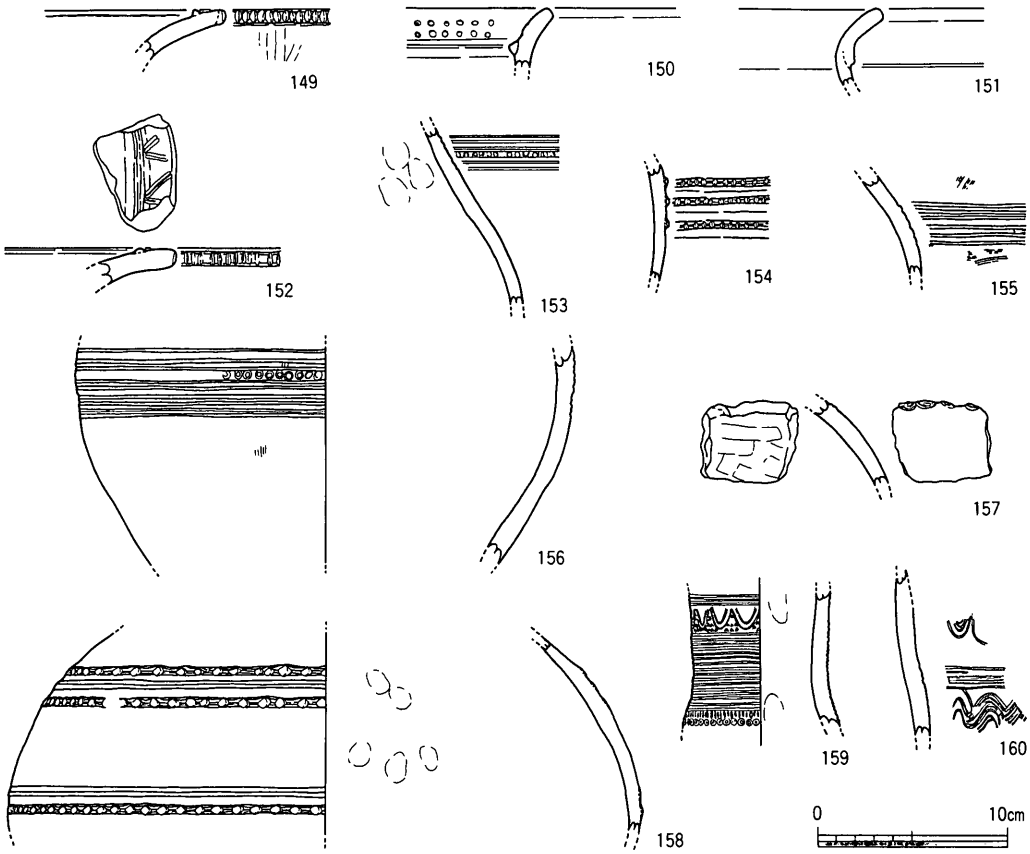
145～148は146の口縁部が欠損しているものの口縁部は短く開き，体部は最大径が中央やや下寄りにあり，上半部は肩が張らずになだらかになっているものである。146の外面の上半部はハケ目の後にナデており，最大径部分には横方向に板ナデを施している。下半部にはヘラミガキが見られる。内面は全体に指押さえが顕著である。底部は上げ底となっている。147の頸部は肥厚している。頸部外面と内面全体に指押さえを施すが，他は摩滅している。底部も肥厚しており安定している。

149～152はいずれも口縁部の細片である。149は口縁部内面に突帯を１条貼り巡らせている。口縁部端部には板の木口部分で押圧することにより刻み目を施している。150は口縁部内面のやや下がった部分に突帯を１条貼り巡らせ，突帯と口縁部端部との間に竹管文を２列巡らせている。151は頸部の粘土のつなぎ目が段になっている。152は口縁部内面に突帯を１条貼り巡らせ，突帯と口縁部端部との間に半截竹管による山形文を施している。口縁部端部には刻み目を入れている。

153～158・160は壺の体部である。153は体部上半にヘラ描き沈線を５条施すが，上から３条目と４条目の間に竹管文を加えている。156は体部中央にヘラ描き沈線現存３条と６条を施し，上下の沈線文帯の間に竹管文を加える。157は櫛描き波状文の一部が残っている。158は体部の上部と中央部に刻み目を持つものと持たないものの２種類の突帯を貼り付けている。160は櫛描き直線文と波状文がある。

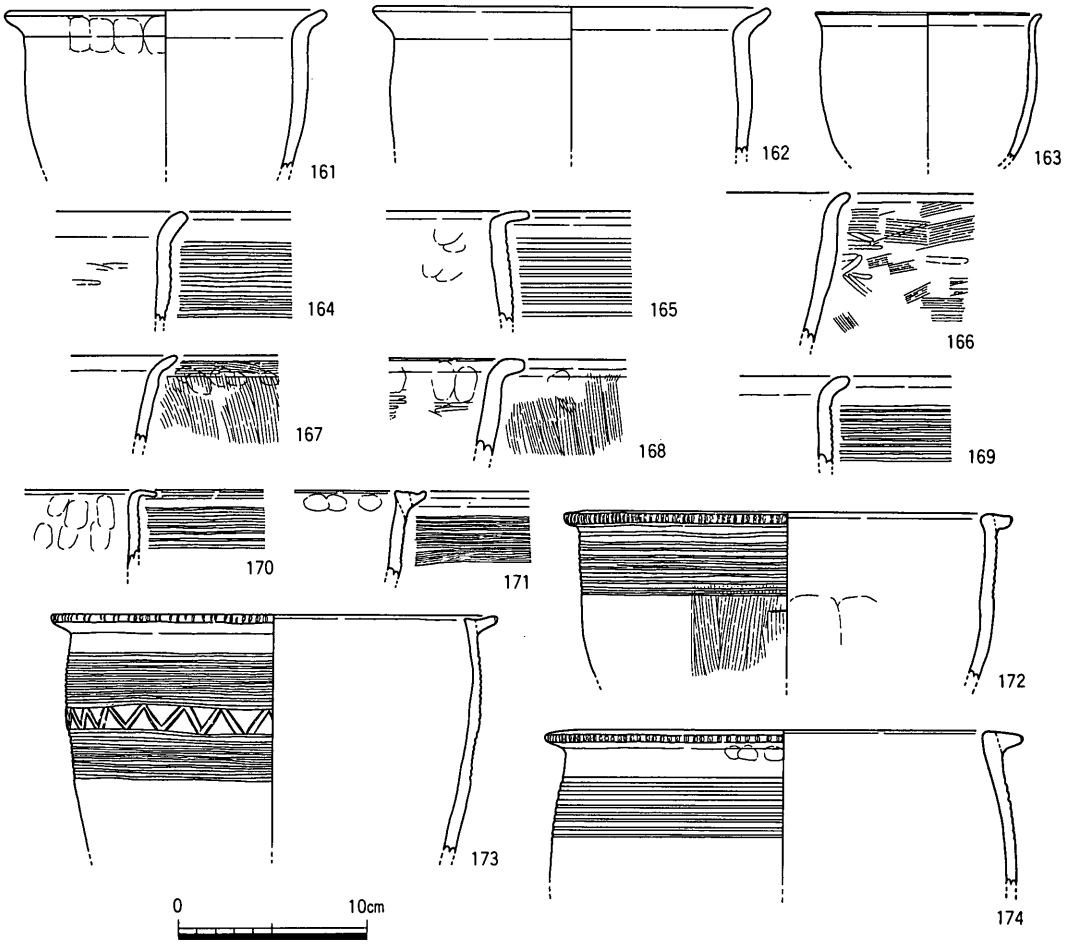
159は壺の頸部で，各種文様で飾っている。沈線文帯の間に半截竹管による連弧文を施し，連弧文の間には三角形列点文を加えている。さらに下部には列点文と竹管文も加えている。中央部のヘラ描き沈線は16条と多条である。

161～220は甕である。このうち161～164・166～169は如意形口縁の甕である。161は口縁部外面に指押さえを施している。163の口縁部の屈曲は短く弱い。161～163の体部外面は無文である。164は体部外面にヘラ描き沈線を現存で10条施し，内面はヘラミガキと



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
149	弥・壷	*16.6			中・普、細・普	灰黄褐10YR6/2	口縁部内面に貼付突帯1条、口縁部端部刻み目	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
150	弥・壷	*26.4			中・普	灰白10YR8/2	口縁部内面に貼付突帯1条＋竹管文2列	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
151	弥・壷	*24.6			中・少、細・普	灰黄褐10YR6/2 にぶい黄橙10YR7/2	頸部に段	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
152	弥・壷				中・多	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部内面に貼付突帯1条と半截竹管による山形文、口縁部端部に刻み目	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
153	弥・壷				中・普、細・普	灰白10YR8/2	体部上半にヘラ描沈線3条＋竹管文＋ヘラ描沈線2条	全体にﾏﾒﾂ	
154	弥・壷				中・多、粗・少	黒2.5Y2/1、にぶい黄橙10YR6/3	体部に貼付突帯3条、突帯に刻み目	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
155	弥・壷				中・少、微・普	にぶい黄橙10YR7/2、褐灰10YR5/1	体部にヘラ描沈線6条	外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
156	弥・壷				中・多	灰白10YR8/2	体部にヘラ描沈線現存3条＋竹管文＋ヘラ描沈線6条	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
157	弥・壷				細・少、微・普	にぶい黄2.5Y6/3、浅黄2.5Y7/3	櫛描文（波状文）	外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ	
158	弥・壷				粗・普	にぶい黄橙10YR7/2	2種類(刻み目有・無)の貼付突帯3条＋2条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
159	弥・壷				中・普	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存3条＋半截竹管連弧文・三角形列点文＋ヘラ描沈線16条＋列点文＋竹管文	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
160	弥・壷				細・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰黄褐10YR5/2	櫛描文（直線文・波状文）	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

第326図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物（４）（１／４）

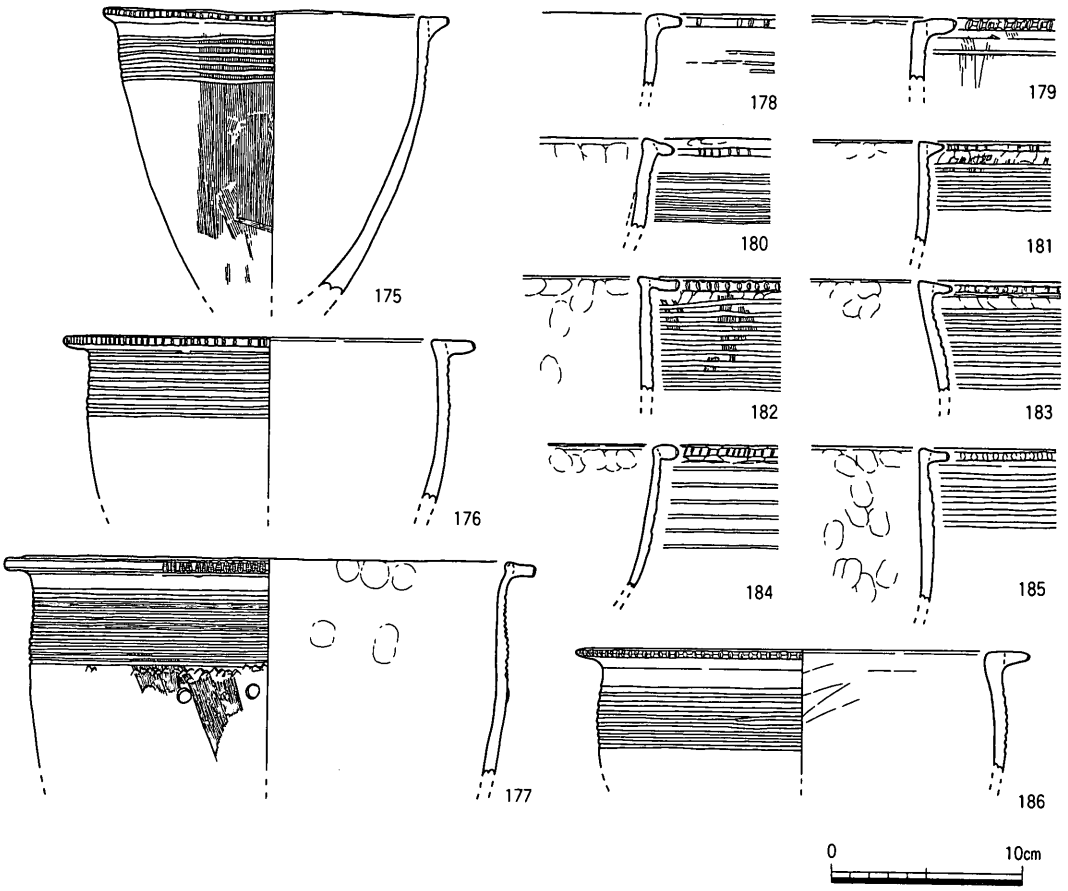


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
161	弥・甕	16.5			中・普、細・普	灰黄褐10YR5/2		如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
162	弥・甕	20.7			細・普、粗・少	灰黄褐10YR5/2 灰黄褐10YR6/2		如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
163	弥・甕	11.9			中・多	橙5YR6/6		如意形口縁、全体にﾏﾒﾂ	
164	弥・甕	*21.8			中・少	灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線現存10条	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ	
165	弥・甕	*23.8			中・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線現存9条	口縁部折曲げ、口縁部ﾏﾒﾂ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
166	弥・甕	*24.0			中・普	灰黄2.5Y7/2		如意形口縁、外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
167	弥・甕	*15.2			中・普	にぶい褐7.5YR6/3、灰白10YR8/2		如意形口縁、外面ﾊｹ目・指押え、内面ﾅﾃﾞ	
168	弥・甕	*16.6			細・少、微・少	黒2.5Y2/1、灰黄2.5Y7/2		如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ・指押え	
169	弥・甕				中・少	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存10条	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
170	弥・甕	*17.0			細・少、微・普	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存7条	口縁部折曲げ、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
171	弥・甕	*26.8			中・少、細・普	にぶい黄橙10YR7/2	櫛描文（直線文）	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
172	弥・甕	20.4			中・多	にぶい黄橙10YR7/3	ヘラ描沈線10条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
173	弥・甕	20.2			中・多	橙5YR7/6	ヘラ描沈線10条＋ヘラ描山形文＋ヘラ描沈線9条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
174	弥・甕	21.0			細・普、粗・少	浅黄橙7.5YR8/3	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

第327図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物（５）（１/４）

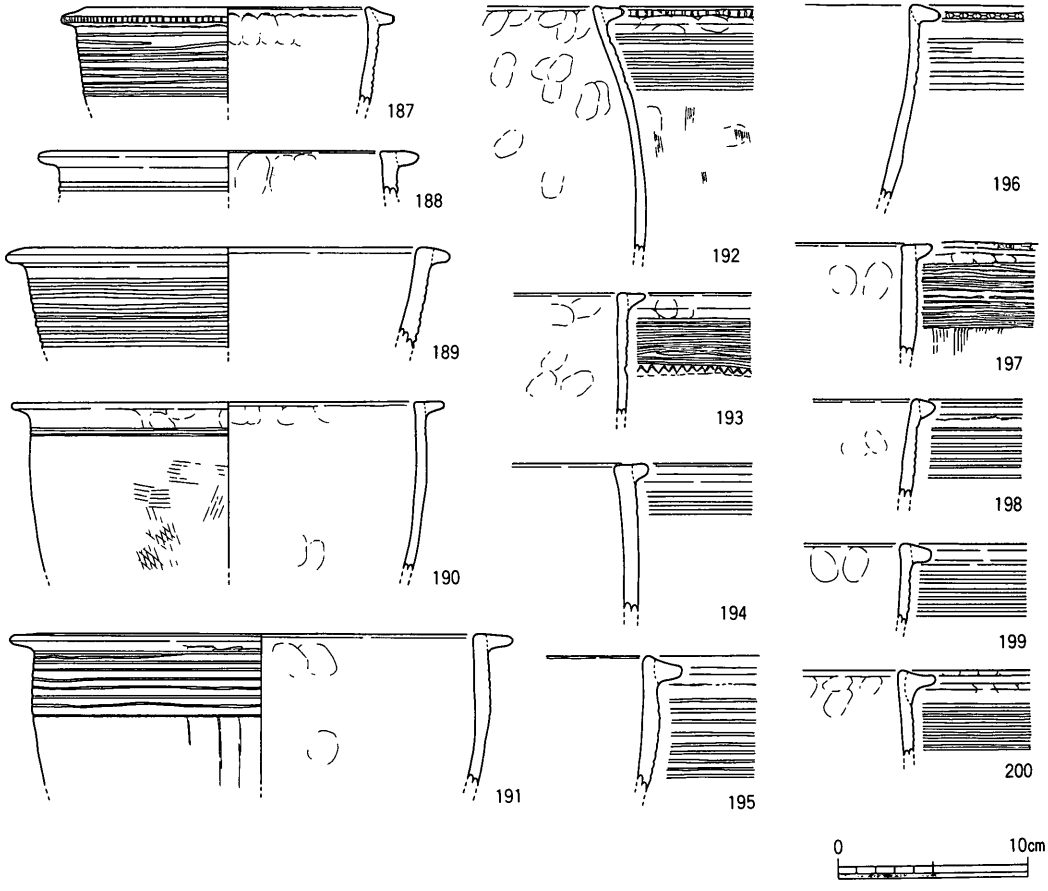
なっている。165は口縁部を真横に近く折り曲げている。体部はやや内傾しており，外面には間隔の開いたヘラ描き沈線が現存で９条ある。166は口縁部の屈曲は短く弱い。体部外面にはやや雑にハケ目の後にヘラミガキを施している。167は口縁部外面に強く指押さえを行なった後に横方向にハケ目を施している。体部外面にも全体にハケ目を施している。168は口縁部端部は真横を向き，体部外面は全体にハケ目で，内面にはヘラミガキを施している。169は体部外面にヘラ描き沈線が現存で10条ある。170の口縁部は真横に長く折り曲げており，器壁は薄くなっている。

171～220は逆Ｌ字形口縁の甕である。171は口縁部を数回ナデているため，上面にやや凹凸があり端部は上方を向いている。体部は直線的に外傾しており，外面に４条１単位の櫛描き直線文を施している。172は口縁部端部に刻み目を入れ，体部はやや内湾しており外面にヘラ描き沈線を10条施す。外面はハケ目，内面はナデとなっている。173は口縁部端部は上方を向き刻み目を入れている。体部は上部が膨らみ，外面にヘラ描き沈線を10条と９条をそれぞれまとまって施し，その間にヘラ描きの山形文を加えている。外面はナデており，内面は摩滅している。174は体部上部が内傾している。175は体部外面のヘラ描き沈線は６条あるが，やや蛇行している。外面全体にハケ目を施している。176は口縁部の横への突出は長くなっており，端部には刻み目を入れている。体部は内湾している。177は体部上部の口縁部付近が外反しており，全体に緩いＳ字状になっている。口縁部端部には板状工具により刻み目を施しており，刻み目には木目が残っている。体部外面にはヘラ描き沈線を13条施し，その下に三角形列点文と円形浮文を加えている。外面にはハケ目を施し，内面はナデている。179の口縁部端部はやや上方を向き，刻み目を入れている。体部にはヘラ描き沈線が１条だけあり，外面にハケ目を施している。180の口縁部端部は下方を向き，刻み目を入れている。体部は直線的に外傾する。181の口縁部端部は先細りになっている。182の体部は直線的で，外面にはハケ目の後にやや間隔が開いたヘラ描き沈線が現存で10条ある。183の体部は内傾している。184の口縁部端部は肥厚しており，端部の上下に間隔を開けながら強い指押さえを巡らせている。体部は外傾し，外面には間隔の開いたヘラ描き沈線が６条ある。186は口縁部の粘土接合部分が内側に肥厚している。187の口縁部端部上面は下方に下がる面となっており，体部はやや外傾し外面にはヘラ描き沈線が10条巡るが，このうち１条は途中で途切れている。189の体部は外傾しており，外面にヘラ描き沈線が現存で９条巡る。190は体部外面の上部にヘラ描き沈線が２条巡っている。体部外面はハケ目を施し，内面はナデている。191の体部外面のヘラ描き沈線は部分的に蛇行している。体部外面



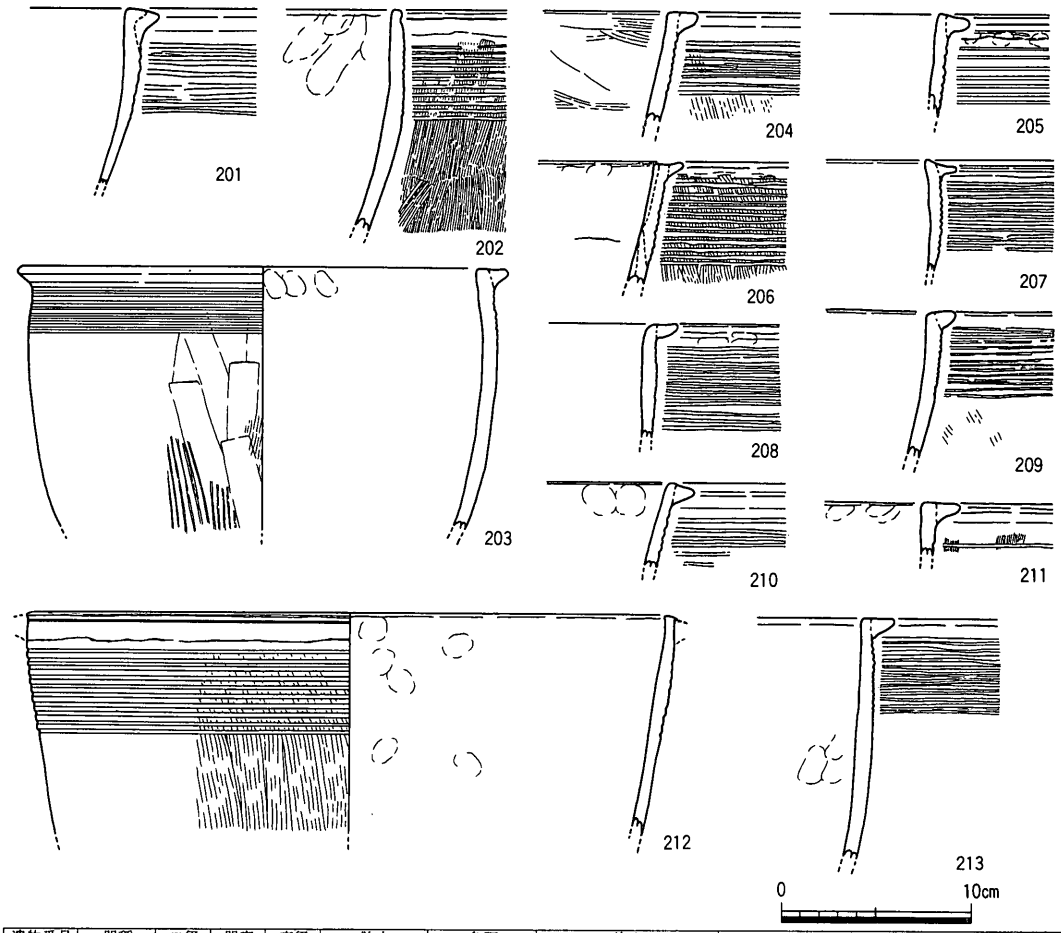
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
175	弥・甕	15.2			中・普	にぶい黄橙10YR6/3	ヘラ描沈線6条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
176	弥・甕	17.0			中・普	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
177	弥・甕	24.8			中・普	灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線13条、三角形列点文、円形浮文、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
178	弥・甕	*38.8			中・多	灰白10YR8/2	ヘラ描沈線現存3条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
179	弥・甕	*23.4			細・少	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線1条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
180	弥・甕	*31.6			中・多	灰白10YR8/2	ヘラ描沈線現存8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
181	弥・甕	*23.6			細・少	灰黄褐10YR7/2 にぶい黄橙10YR6/2	ヘラ描沈線6条、口縁部端部刻み目	外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
182	弥・甕	*25.0			細・少	灰黄褐10YR6/2	ヘラ描沈線現存10条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
183	弥・甕	*14.0			粗・少、中・多	灰白10YR8/2	ヘラ描沈線現存9条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
184	弥・甕	*23.8			中・少、粗・少	にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線6条、口縁部端部刻み目	口縁部強い指押え・ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
185	弥・甕	*12.8			中・少、細・多	灰黄褐10YR6/2 にぶい黄2.5Y6/3	ヘラ描沈線5条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
186	弥・甕	19.4			中・普、細・普	浅黄橙7.5YR8/3、灰白7.5YR8/2	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	全体にﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ	

第328図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物（６）（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
187	弥・甕	14.4			粗・普、中・少	にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線10条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
188	弥・甕	16.0			中・少、微・少	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存2条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
189	弥・甕	20.1			中・少、細・普	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存9条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
190	弥・甕	19.6			中・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線2条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
191	弥・甕	22.4			細・多	にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線9条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
192	弥・甕	*19.2			中・少、細・普	灰黄褐10YR6/2 にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
193	弥・甕	*14.4			細・多	灰黄褐10YR4/2	ヘラ描沈線10条、三角形列点文	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
194	弥・甕	*27.6			中・多	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線3条	全体にﾏﾒﾂ	
195	弥・甕	*44.6			中・少	灰白2.5Y8/2、浅黄橙7.5YR8/3	ヘラ描沈線現存9条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
196	弥・甕	*55.6			中・普、粗・少	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線5条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
197	弥・甕	*18.2			細・少	にぶい黄橙10YR7/2、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線13条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え、沈線の上からﾅﾃﾞ	
198	弥・甕	*21.4			中・少、粗・少	黒2.5Y2/1、灰白10YR8/2	ヘラ描沈線7条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
199	弥・甕	*25.4			細・普	浅黄橙10YR8/3	ヘラ描沈線現存6条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
200	弥・甕	*30.2			細・普	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存8条	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

第329図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物（７）（１／４）



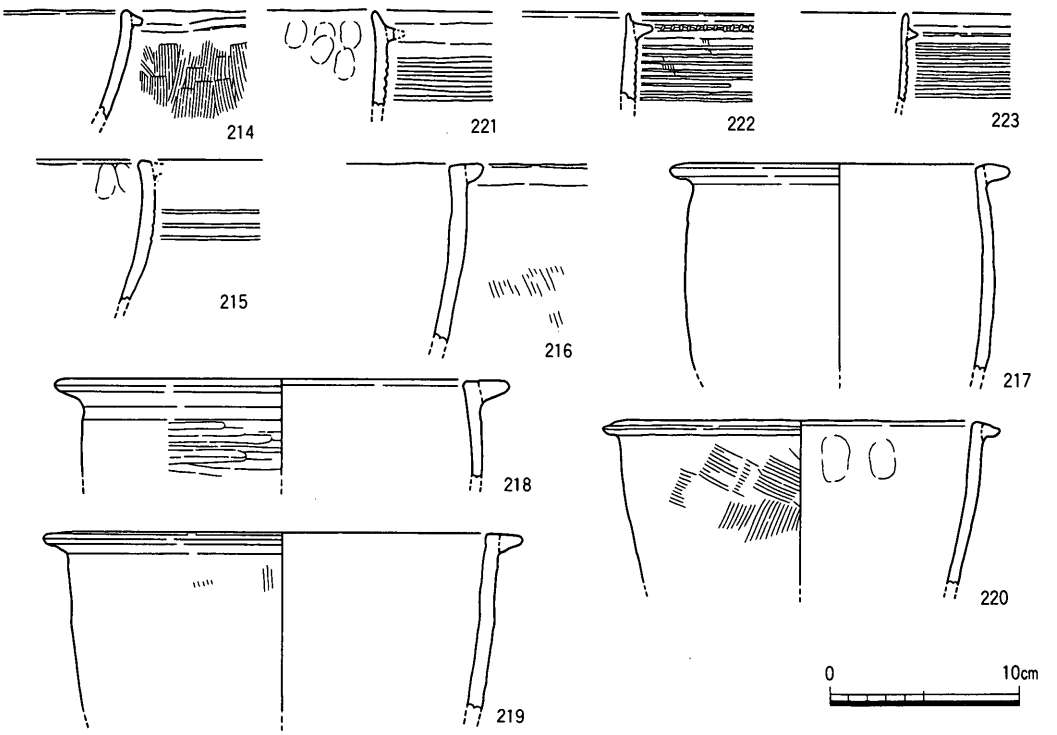
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
201	弥・甕	*26.8			中・普、細・普	灰白10YR8/2、浅黄橙10YR8/3	ヘラ描沈線8条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
202	弥・甕				細・多	灰黄褐10YR5/2褐灰7.5YR4/1	ヘラ描沈線11条	口縁部剥離、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
203	弥・甕	22.6			中・少、細・普	にぶい黄橙10YR6/3、灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線8条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面粗いﾊｹ目→板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
204	弥・甕	*26.6			中・普	淡黄2.5Y8/3	ヘラ描沈線8条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ	
205	弥・甕	*14.4			中・普	にぶい黄2.5Y6/3、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存7条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
206	弥・甕	*23.2			中・普	浅黄橙7.5YR8/3、浅黄2.5Y7/3	ヘラ描沈線12条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
207	弥・甕	*19.0			中・普	灰黄褐10YR5/2にぶい黄橙10YR7/3	ヘラ描沈線11条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
208	弥・甕	*26.0			中・少、細・多	黄灰2.5Y6/1、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存13条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
209	弥・甕	*24.6			中・少、細・少	浅黄2.5Y6/3、にぶい黄橙10YR7/4	ヘラ描沈線13条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
210	弥・甕	*23.6			中・普、細・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰白10YR8/2	ヘラ描沈線現存6条	全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
211	弥・甕	*37.0			細・普、微・多	灰白2.5Y7/1、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存1条	口縁部上面ﾊｹ目、外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
212	弥・甕	33.0			中・少	浅黄2.5Y7/3、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線10条	口縁部剥離、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
213	弥・甕	*27.6			中・普、細・多	灰褐7.5YR5/2にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線13条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	

第330図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物（８）（１/４）

には板ナデを施し，内面はナデている。192の体部上半は内傾し，外面にヘラ描き沈線を８条巡らすが，部分的に沈線の間隔が開いている。体部外面はハケ目の後にナデている。内面には指押さえが多い。193の口縁部端部は先細りである。体部外面にはヘラ描き沈線10条と三角形列点文を施している。沈線は部分的にかなり歪んでいる。体部は直線的で，全体にナデている。194の口縁部の外側への突出は短い。195の口縁部の上面は下方に向った面をもつ。196は細片であるが復元口径が55.6cmの大型の甕である。口縁部端部には刻み目を入れ，体部外面にはヘラ描き沈線が５条巡っている。197の口縁部端部の下部はナデと指押さえにより段が生じている。体部は直線的で，ヘラ描き沈線は13条と多条である。ハケ目を施しているが最終的に沈線の上から全体にナデている。198の口縁部端部は先細りで，口縁部下には板状工具の木口痕がある。体部はやや外傾しており，ヘラ描き沈線はやや間隔を開けて７条巡っている。199の口縁部は体部に比べて肥厚している。体部外面にはヘラ描き沈線が現存で６条巡っている。200は口縁部を上下から強くつまんで指押さえを行なっている。201の口縁部端部は先細りで，体部は緩く内湾しており，外面のヘラ描き沈線は８条であるが部分的に途切れたり蛇行している。202の口縁部の外側部分は剥離している。口縁部剥離部分に下書きの沈線がある。体部外面は全体に丁寧にハケ目を施し，内面はナデている。203の体部外面には粗いハケ目を施した後に板ナデを加えている。204の体部は外傾し，内・外面にハケ目を施し，内面は後にナデている。205は口縁部端部を強くナデており，口縁部下部には板状工具の木口痕がある。体部外面には間隔の開いたヘラ描き沈線が現存で７条ある。206の口縁部端部は上方を向いている。体部は直線的に外傾し，外面全体にハケ目を施した後にヘラ描き沈線を12条巡らせている。207の体部外面のヘラ描き沈線は11条であるが部分的に途切れている。208は口縁部上面を強くナデており，端部は上方を向く。体部は直線的で外面のヘラ描き沈線は現存で13条と多条である。209のヘラ描き沈線は13条と多条であるが，部分的に途切れている。体部外面はハケ目を施している。210の体部は直線的に外傾している。211は口縁部のみの細片で，口縁部上面にハケ目を施している。体部外面のヘラ描き沈線は現存で１条である。体部外面にはハケ目を施し，内面は摩滅している。212の口縁部の外側の貼付部分は剥離している。体部外面全体にハケ目を施した後にヘラ描き沈線を10条巡らせている。213は体部外面に密にヘラ描き沈線を13条施す。214の口縁部端部は下方を向き，全体に不整形である。体部は内湾しており，外面全体にハケ目を施している。215の口縁部の外側の貼付部分は剥離している。体部は内湾しており，口縁部のやや下側に間隔の開いたヘラ描き沈線が３条巡っている。全体にナデている。216～220

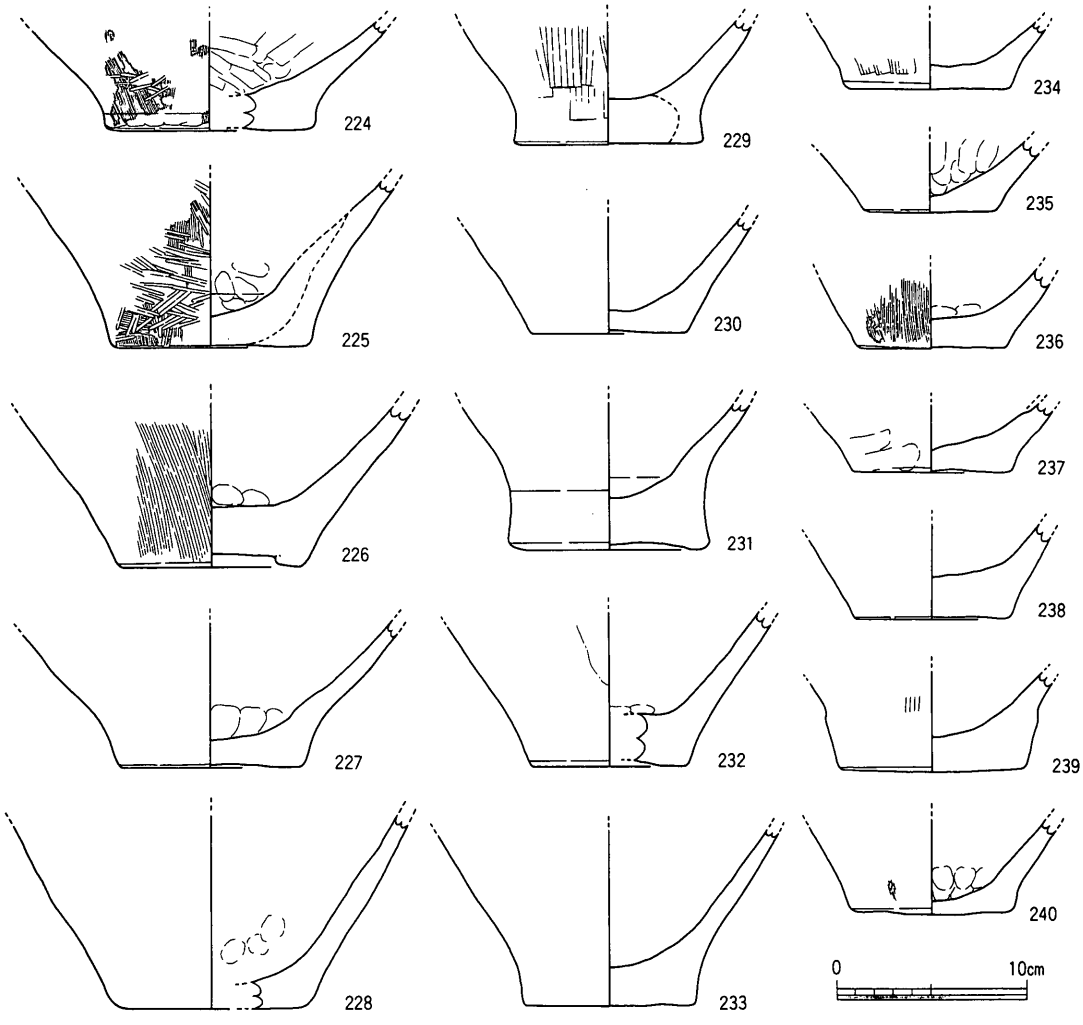
の体部外面は無文である。216は体部外面にハケ目を施す。217の体部は緩く内湾している。全体にナデている。218は体部外面に横方向にやや幅広のヘラミガキを施している。内面はナデている。219の体部外面は摩滅しているが，僅かにハケ目が残っている。内面はナデている。220の口縁部の外側への突出は短く，端部は下方を向いている。体部は直線的に外傾しており，外面にはやや粗いハケ目を施している。

221～223は口縁部端部のやや下に鍔状の突帯を１条貼り巡らせているものである。221は口縁部端部がやや内傾している。突帯の端部は欠損している。体部外面にはヘラ描き沈線



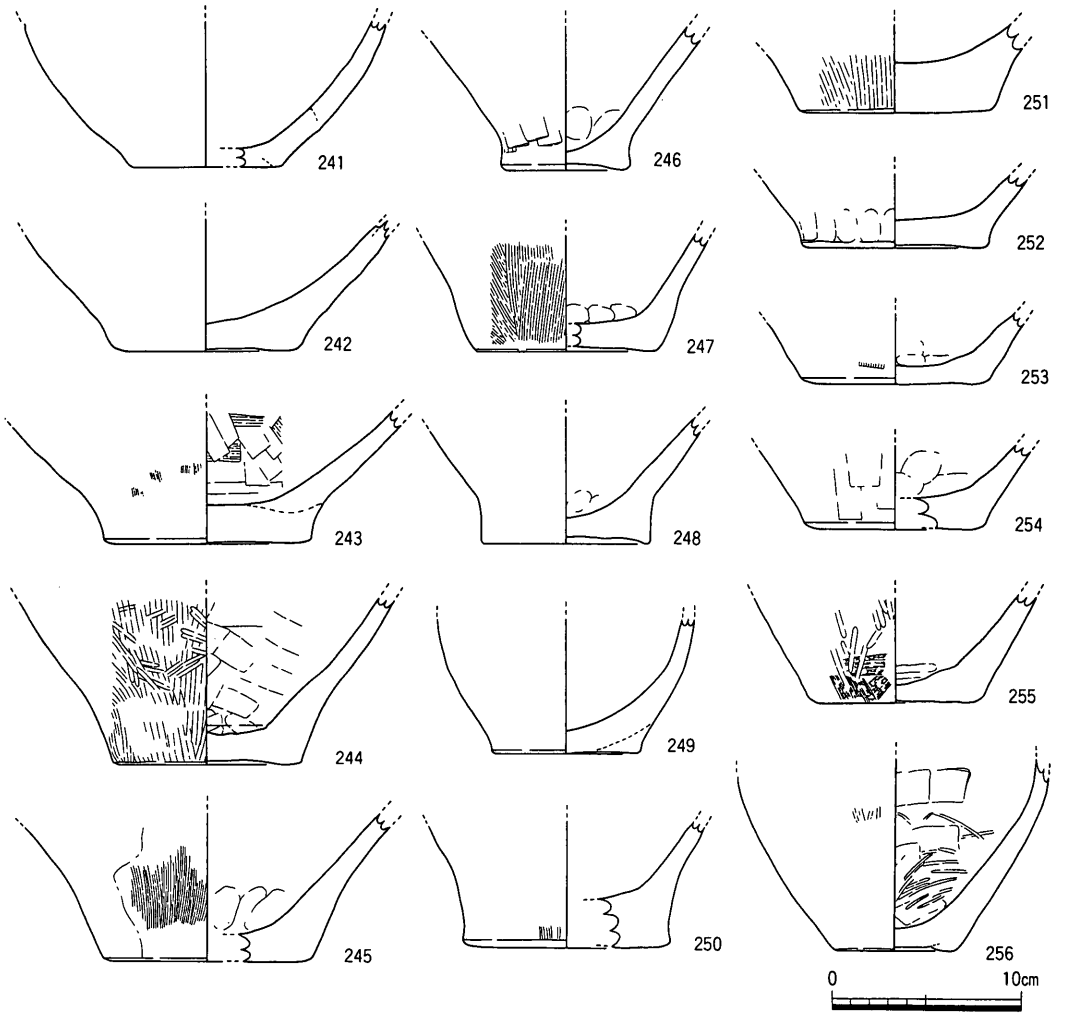
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
214	弥・甕	*24.8			中・普、細・普	灰黄2.5Y7/2		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
215	弥・甕				細・多	灰黄褐10YR6/2	ヘラ描沈線3条	口縁部剥離、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
216	弥・甕	*32.6			中・普	灰白10YR8/2、黄灰2.5Y7/1		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
217	弥・甕	14.2			中・普、細・普	浅黄2.5Y7/3		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
218	弥・甕	19.0			中・普、細・多	灰黄褐10YR5/2		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
219	弥・甕	21.2			中・多	褐灰10YR4/1		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
220	弥・甕	18.0			中・普	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
221	弥・甕				細・普	にぶい黄橙10YR7/3	ヘラ描沈線現存5条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
222	弥・甕	*19.8			細・少	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
223	弥・甕	*18.6			中・少	灰白10YR8/2	ヘラ描沈線現存8条、口縁部やや下に突帯	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	

第331図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物（９）（１/４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
224	弥・壷			11.1	中・少、細・多	暗灰黄2.5Y4/2、褐灰10YR4/1		外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
225	弥・壷			10.3	中・多、細・多	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
226	弥・壷			9.4	中・少、細・多	暗灰黄2.5Y4/2、にぶい黄2.5Y6/3		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
227	弥・壷			9.4	中・多	灰黄2.5Y6/2		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
228	弥・壷			9.0	中・少、細・少	灰黄2.5Y7/2、褐灰10Y4/1		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
229	弥・壷			10.0	中・多、粗・少	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
230	弥・壷			8.2	中・多	灰黄褐10YR6/2、灰白2.5Y8/2		全体にﾏﾒﾂ	
231	弥・壷			10.5	中・多、細・多	灰白5Y7/2		全体にﾏﾒﾂ	
232	弥・壷			8.1	細・多	灰白2.5Y8/1、黄灰2.5Y4/1		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
233	弥・壷			9.0	中・多	灰白10YR8/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
234	弥・壷			8.4	粗・普、細・多	浅黄橙10YR8/3		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
235	弥・壷			7.0	中・普	灰黄2.5Y7/2、にぶい黄橙10YR7/2		外面ﾅﾃﾞ、内面指押え	
236	弥・壷			7.8	中・普	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
237	弥・壷			8.2	粗・少、中・普	灰黄2.5Y6/2、灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
238	弥・壷			8.2	中・多、細・少	灰黄2.5Y7/2、黄灰2.5Y6/1		全体にﾏﾒﾂ	
239	弥・壷			9.6	中・多、粗・少	黄褐2.5Y5/3、灰黄2.5Y6/2		外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
240	弥・壷			8.6	中・普、細・多	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

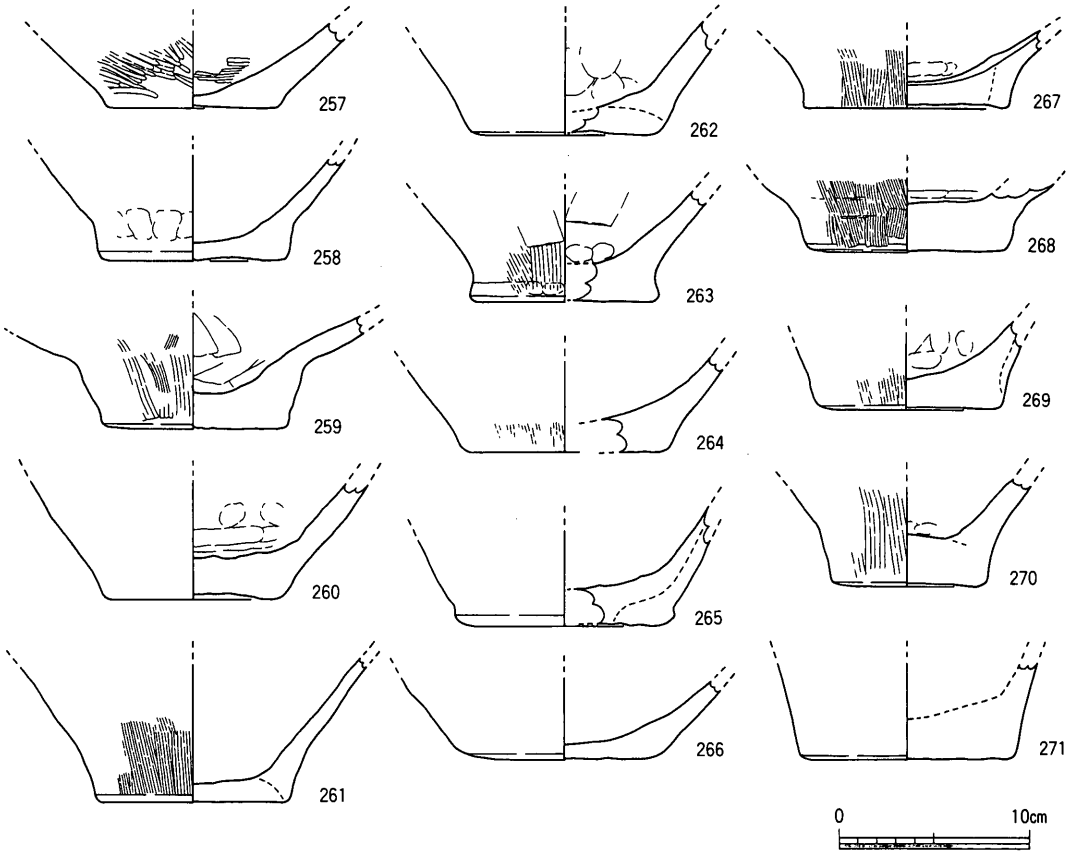
第332図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物(10)（1/4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
241	弥・壷			8.0	粗・少、細・多	にぶい黄2.5Y6/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
242	弥・壷			9.7	粗・普、中・多	明赤褐2.5YR5/8、黄灰2.5Y4/1		全体にﾏﾒﾂ	
243	弥・壷			11.0	粗・少、中・多	灰黄2.5Y6/2、灰黄褐10YR5/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾊｹ目→板ﾅﾃﾞ	
244	弥・壷			9.9	中・多、細・多	暗灰黄2.5Y5/2褐灰10YR4/1		外面粗いﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
245	弥・壷			10.9	細・多、粗・少	にぶい黄橙10YR7/2、灰黄褐10YR5/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
246	弥・壷			6.8	中・多	灰黄褐10YR5/2褐灰2.5Y6/1		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
247	弥・壷			9.4	中・少、細・普	灰黄2.5Y6/2、褐灰10YR6/1		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
248	弥・壷			8.8	中・少	灰白2.5Y8/2、灰白10YR8/2		外面ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
249	弥・壷			7.9	中・多	灰黄褐10YR6/2褐灰10YR6/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
250	弥・壷			11.0	中・多	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
251	弥・壷			10.2	中・多、粗・少	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
252	弥・壷			9.8	中・多、細・多	浅黄2.5Y7/3、灰白2.5Y8/3		外面指押え・ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
253	弥・壷			10.0	中・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目、内面指押え	
254	弥・壷			9.6	中・多	暗灰黄2.5Y5/2灰黄2.5Y6/2		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
255	弥・壷			8.2	中・少	暗灰黄2.5Y5/2浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指でﾗｾﾝ状に粘土を抉り取る	
256	弥・壷			6.4	微・普	灰白2.5Y8/2、灰黄2.5Y7/2		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	

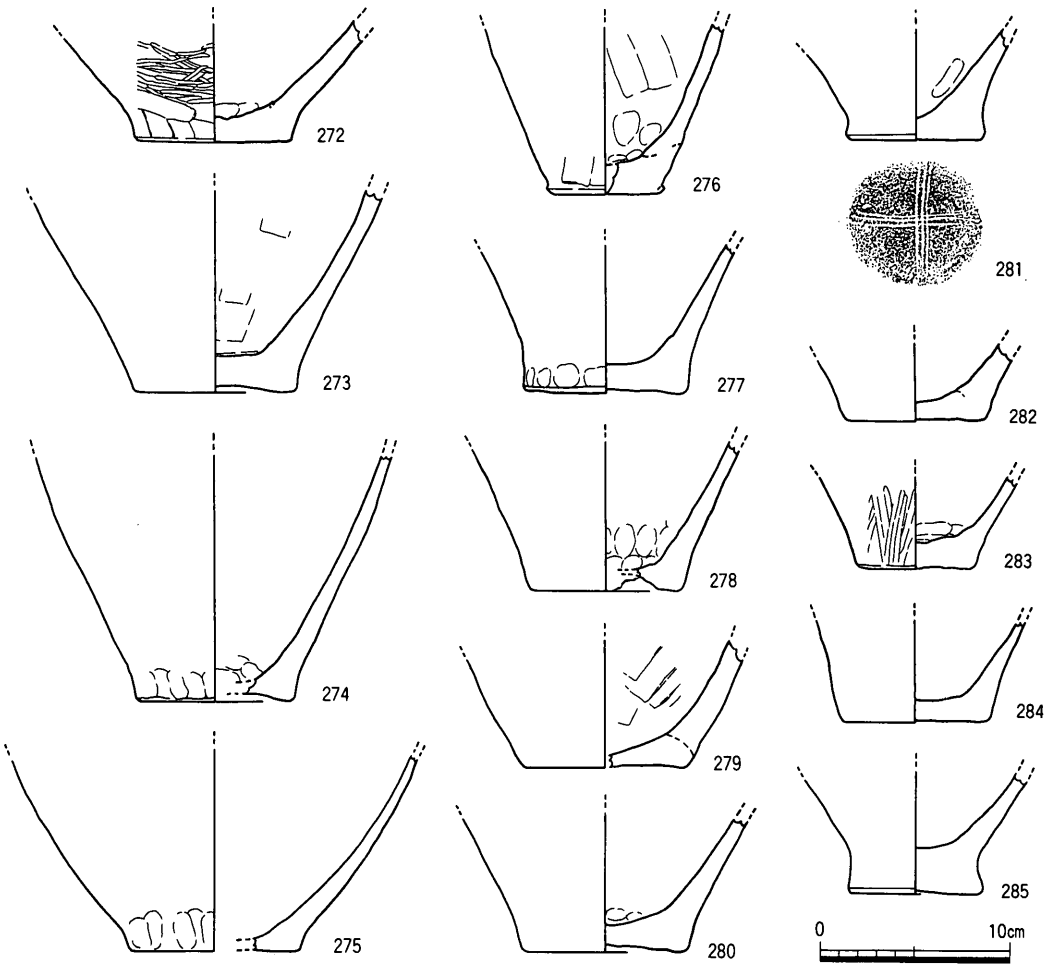
第333図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物(11)（１/４）

が現存で５条ある。222の口縁部端部は非常に細くなっている。突帯の端部には刻み目を施している。体部は直線的で，外面にハケ目を施した後にナデている。ヘラ描き沈線は現存で８条あるが，そのうちの１条は途中で途切れている。223の突帯は口縁部端部より1.5cm



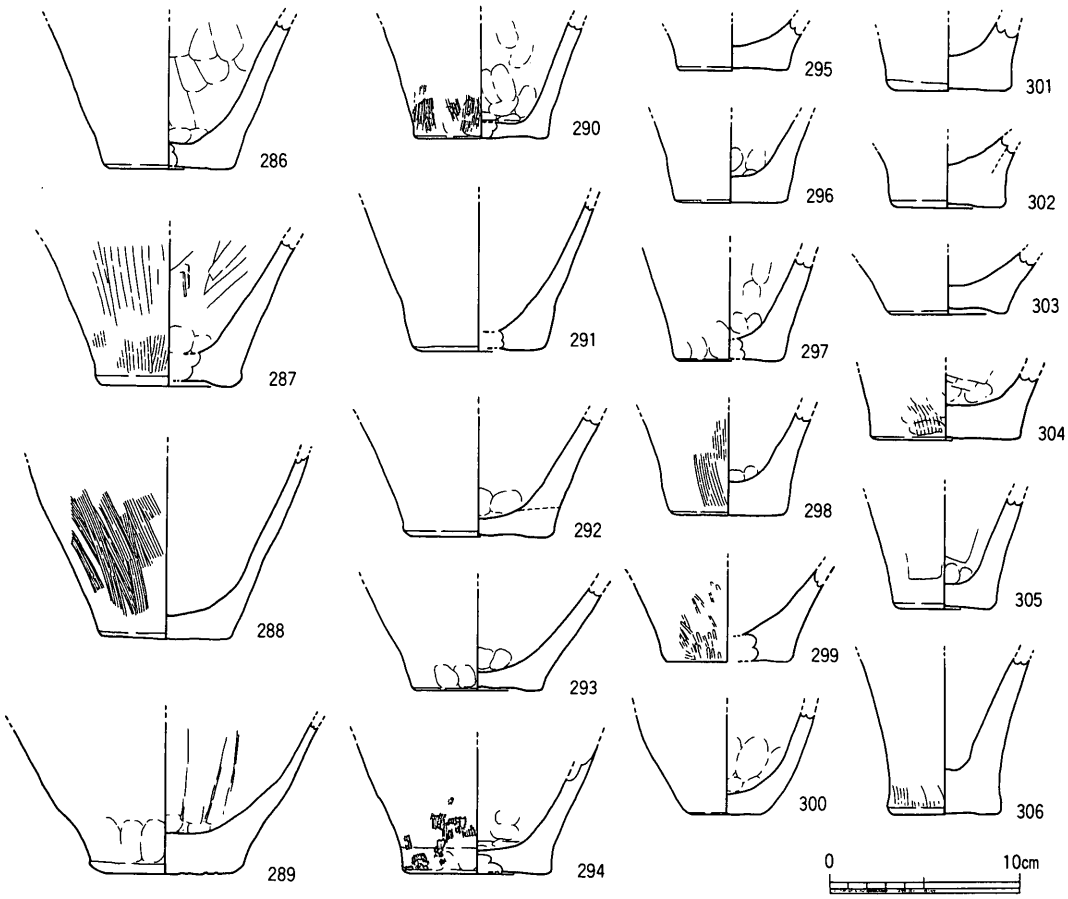
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
257	弥・壷			9.0	中・普	にぶい黄橙10YR7/2		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
258	弥・壷			9.8	細・多、粗・少	灰白10YR8/2		全体にﾏﾒﾂ、外面指押え	
259	弥・壷			9.8	細・普、粗・少	黄灰2.5Y4/1、灰黄褐10YR6/2		外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ、底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
260	弥・壷			9.3	粗・少、中・多	灰白2.5Y8/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
261	弥・壷			9.5	中・多	にぶい黄橙10YR6/3 灰黄褐10YR6/2		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
262	弥・壷			9.8	中・多	灰白10YR8/2、にぶい黄橙10YR7/2		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
263	弥・壷			9.4	中・多、粗・少	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目→板ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
264	弥・壷			10.0	中・普	暗灰黄2.5YR5/2、灰黄褐10YR5/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
265	弥・壷			9.4	中・普、粗・少	褐灰10YR4/1、灰黄褐10YR6/2		全体にﾏﾒﾂ	
266	弥・壷			10.4	中・多	灰黄2.5Y7/2		全体にﾏﾒﾂ	
267	弥・壷			10.8	中・少、粗・少	にぶい黄橙10YR7/3 灰白10YR8/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	赤色顔料？
268	弥・壷			10.4	細・普	にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ	
269	弥・壷			9.6	細・多	にぶい黄橙10YR7/2 灰黄褐10YR6/2		外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
270	弥・壷			8.0	細・多、粗・少	褐灰10YR4/1、灰白10YR8/2		外面粗いﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
271	弥・壷			10.4	細・普、粗・多	淡黄2.5Y8/4、灰黄褐10YR5/2		全体にﾏﾒﾂ	

第334図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物(12)（１/４）



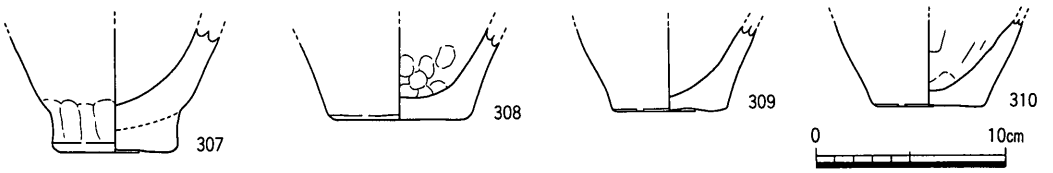
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
272	弥・甕			8.3	細・多、粗・少	にぶい黄2.5Y6/3、黒褐7.5YR3/1		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
273	弥・甕			8.6	中・普、細・普	明赤褐2.5YR5/6、黒N2/1		外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ	
274	弥・甕			8.4	中・多	灰白2.5Y8/1、にぶい黄橙10YR7/2		全体にﾏﾒﾂ	
275	弥・甕			9.0	中・少、細・多	灰黄褐10YR6/2		全体にﾏﾒﾂ、外面指押え	
276	弥・甕			5.8	細・多、粗・少	灰白2.5Y8/2		外面板ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
277	弥・甕			8.8	中・多、粗・少	灰白2.5Y8/2、灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ	
278	弥・甕			8.0	中・普	浅黄橙10YR8/3 褐灰10YR4/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
279	弥・甕			8.4	中・多、粗・少	浅黄2.5Y7/3		外面ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	
280	弥・甕			8.3	中・普	灰白2.5Y8/2、灰黄褐10YR6/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
281	弥・甕			7.4	中・多	灰黄褐10YR5/2 浅黄2.5Y7/3	底部外面にヘラ描の文様	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
282	弥・甕			7.4	中・普、細・多	橙5YR7/6、灰白10YR8/2		全体にﾏﾒﾂ	
283	弥・甕			6.0	粗・少	暗灰黄2.5Y5/2 灰黄2.5Y6/2		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ、底部内面指で器壁をﾗｾﾝ状に抉り取る	
284	弥・甕			7.6	中・多	にぶい橙7.5YR7/4、にぶい黄橙10YR7/3		全体にﾏﾒﾂ	
285	弥・甕			7.2	中・普、粗・少	にぶい黄橙10YR7/4、浅黄2.5Y7/3		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ、蓋の可能性も有る	

第335図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物(13)（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
286	弥・甕			6.3	粗・少、細・普	灰黄2.5Y7/2		外面ﾏﾒﾂ、内面指による強いﾅﾃﾞ	
287	弥・甕			7.0	中・普	灰黄2.5Y7/2、灰黄褐10YR6/2		外面粗いﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
288	弥・甕			7.0	中・多	にぶい黄橙10YR7/2 灰黄褐10YR5/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
289	弥・甕			8.1	中・普、粗・少	灰黄2.5Y6/2、黒褐2.5Y3/1		外面指押え・ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ	
290	弥・甕			7.0	中・多	灰黄褐10YR5/2		外面ﾊｹ目・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
291	弥・甕			7.0	中・普	灰黄2.5Y7/2、黄灰2.5Y6/1		全体にﾏﾒﾂ	
292	弥・甕			8.0	中・普、細・多	灰黄2.5Y6/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
293	弥・甕			6.6	細・多、粗・少	灰黄褐10YR6/2、にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
294	弥・甕			7.8	中・多	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目・指押え、内面ﾏﾒﾂ・指押え	
295	弥・甕			5.6	中・普	灰白10YR8/2		全体にﾏﾒﾂ	
296	弥・甕			5.9	中・多、細・普	褐灰10YR6/1、灰白2.5Y8/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
297	弥・甕			5.6	細・少、微・多	灰黄2.5Y6/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
298	弥・甕			5.7	細・普	にぶい黄2.5Y6/3、浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
299	弥・甕			6.4	中・多	灰白2.5Y8/1		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面剥離	
300	弥・甕			4.2	中・多	灰白2.5Y8/2、灰白2.5Y8/1		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
301	弥・甕			5.8	中・普、粗・少	灰白2.5Y8/2		全体にﾏﾒﾂ	
302	弥・甕			5.8	細・普、粗・少	淡黄橙10YR8/3、灰黄褐10YR6/2		全体にﾏﾒﾂ	
303	弥・甕			6.2	粗・少、中・多	浅黄橙7.5YR8/4、灰黄2.5Y7/2		全体にﾏﾒﾂ	
304	弥・甕			7.8	中・普、細・多	暗灰黄2.5Y5/2、灰黄2.5Y6/2		外面ﾊｹ目・指押え、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
305	弥・甕			4.8	中・少、細・普	灰黄2.5Y7/2		外面板ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
306	弥・甕			5.6	中・多	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ、蓋の可能性有り	

第336図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物(14)（1／4）

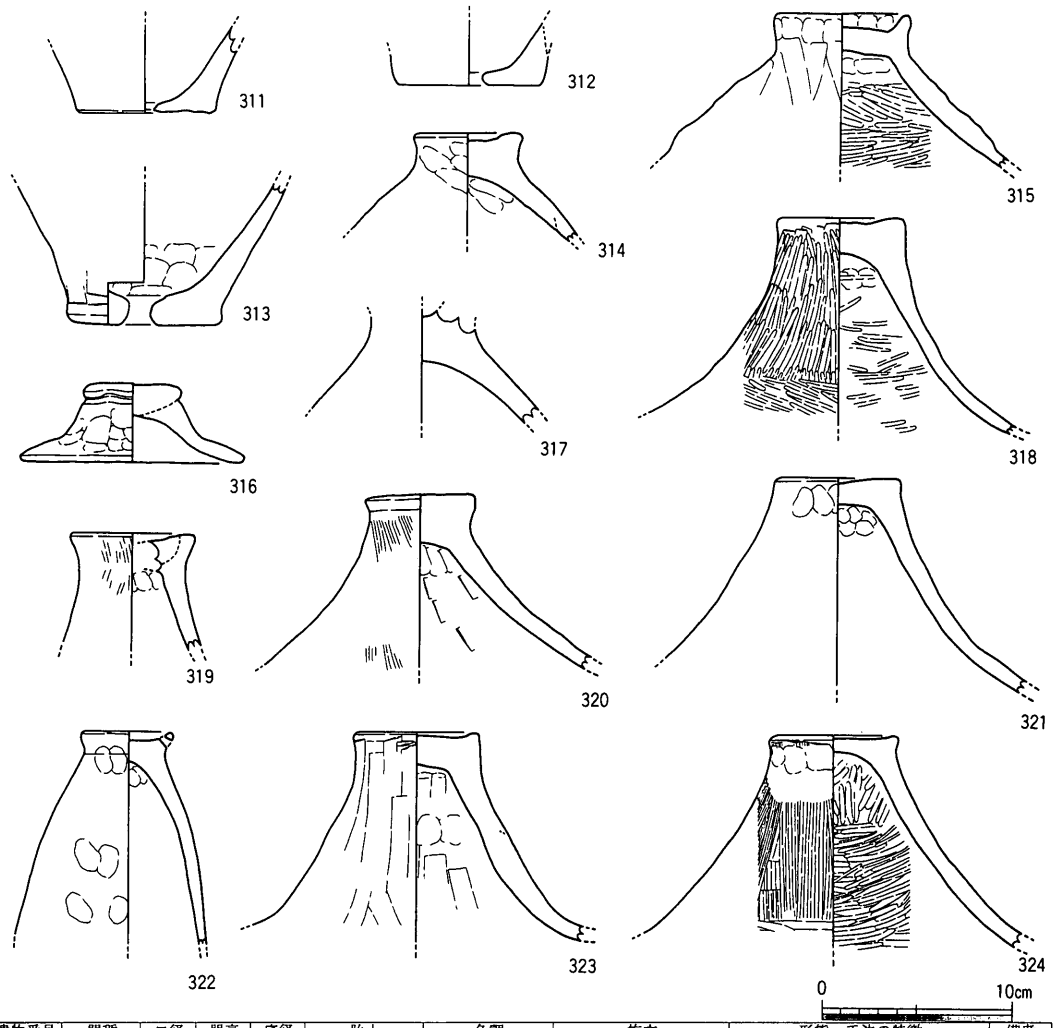


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
307	弥・甕			6.7	中・多	灰黄2.5Y7/2、灰黄2.5Y6/2		外面指押え・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
308	弥・甕			7.0	粗・少、中・普	灰黄2.5Y7/2、灰白2.5Y8/2		外面ﾅﾃﾞ、内面指押え	
309	弥・甕			6.1	中・多、粗・少	灰黄2.5Y7/2		全体にﾏﾒﾂ	
310	弥・甕			5.9	中・多、粗・普	灰黄褐10YR5/2 灰白2.5Y8/2		外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ	

第337図　D区ＳＨ05出土遺物(15)（1/4）

ほど下で221・222よりも下に貼り付けられている。突帯は小さく先端は先細りで断面三角形になっている。器壁は全体に薄手で，外面にはヘラ描き沈線が現存で８条巡っている。

224～310は壺および甕の底部である。224・225の外面はハケ目の後にヘラミガキを施している。226の底部は高台状になっており，体部外面にはハケ目を施す。227・229・231の底部は突出している。240の底部は薄手になっている。241の体部は丸みをもって立ち上がる。243の外面はハケ目の後にナデており，内面はハケ目の後に板ナデを施している。244の外面は全体に粗いハケ目を施した後に部分的にヘラミガキを加えている。内面は板ナデである。245・247・251の外面にはハケ目を施している。246・248の底部は突出している。255の外面は見にくいがハケ目の後にヘラミガキを加えている。底部内面は指で粘土を螺旋状に抉り取っている。256の外面は摩滅しているが部分的にヘラミガキが見られる。内面は板ナデの後にヘラミガキを施している。底部は高台状である。257は内・外面に丁寧にヘラミガキを施している。259・263の底部は突出しており，このうち259の体部は底部から大きく外側に屈曲して開く。259・261・263・264・267～270の外面にはハケ目を施している。272・285の底部は突出しており，272の体部外面はヘラミガキで，底部立ち上り部外面には板ナデを施している。278の底部は上げ底で中央部分は欠損しているものの，薄くなっている。281は底部外面に３本１単位のヘラ描きの十字形の文様がある。283は外面にヘラミガキを施す。底部内面は指で粘土を螺旋状に抉り取っている。286の内面は指で強くナデている。287は外面に粗いハケ目を施し，内面は板ナデとなっている。288は外面にハケ目を施す。289は底部立ち上り部外面に指押さえを強く施す。290・294・298・304は外面にハケ目を施す。299の外面はヘラミガキとなっている。302の底部はかなり肥厚している。306の底部は小さくなっており，外面にはハケ目を施す。あるいは蓋かも知れない。307は底部に粘土を加えて突出させている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
311	弥・甑			7.2	中・普	灰白10YR8/2、灰白2.5Y8/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
312	弥・甑			7.4	中・普	橙5YR7/6、灰白10YR8/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
313	弥・甑			8.2	中・多、粗・少	灰黄2.5Y7/2		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
314	弥・蓋	つまみ径5.5			中・多	灰黄褐10YR6/2、浅黄2.5Y7/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
315	弥・蓋	つまみ径6.8			中・普、粗・少	にぶい黄2.5Y6/3		外面板ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え	
316	弥・蓋	つまみ径5.2	4.1	11.6	細・普	灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾏﾒﾂ	
317	弥・蓋				中・多、細・多	にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
318	弥・蓋	つまみ径6.6			中・普	灰黄褐10YR6/2、褐灰10YR4/1		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ・指押え	
319	弥・蓋	つまみ径6.5			中・少	にぶい黄橙10YR7/2		外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
320	弥・蓋	つまみ径5.7			細・多、粗・少	にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
321	弥・蓋	つまみ径6.1			中・多、細・普	灰白10YR8/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
322	弥・蓋	つまみ径4.6			中・多、粗・少	灰白2.5Y8/2		つまみ部に向かい合った位置に穿孔1個ずつ、全体にﾅﾃﾞ	
323	弥・蓋	つまみ径6.6			中・多	灰黄褐10YR6/2、にぶい黄橙10YR6/3		外面板ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
324	弥・蓋	つまみ径6.8			中・普、粗・少	灰黄2.5YR7/2、浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目・指押え・上部は後にﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	

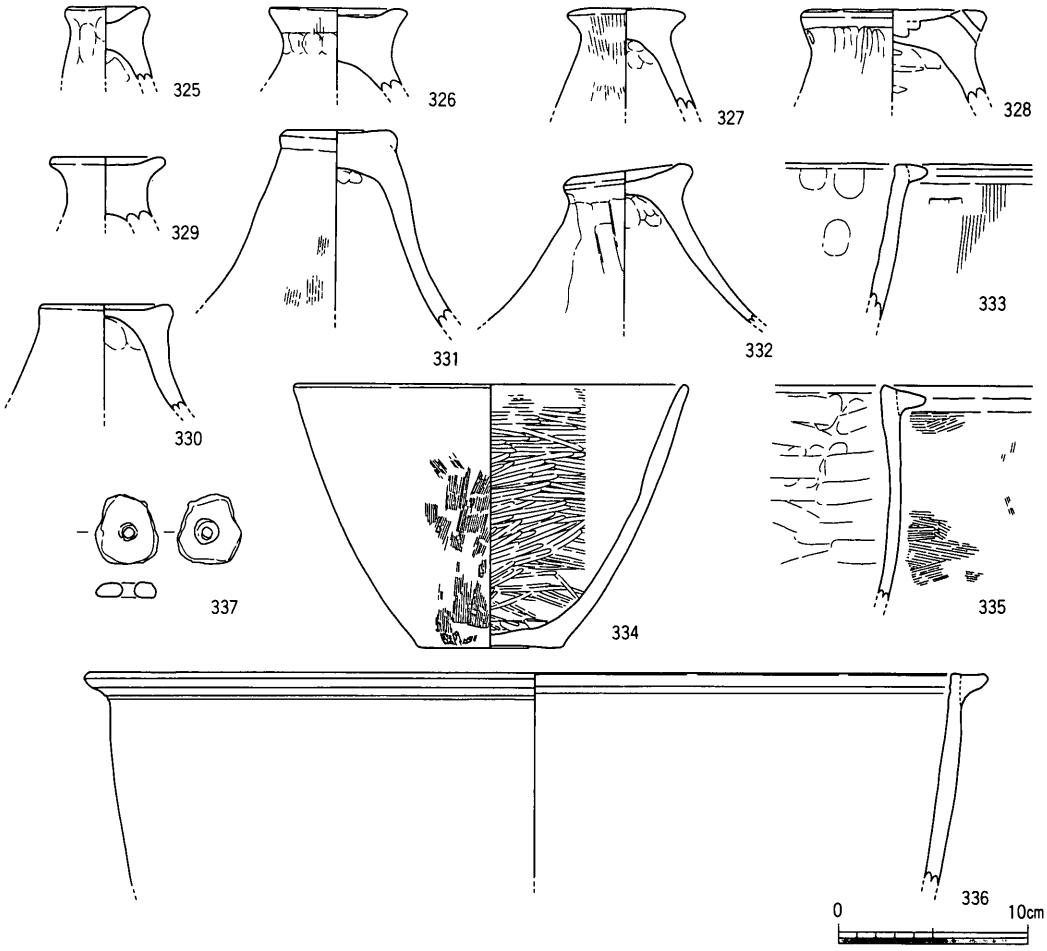
第338図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物(16)（1／4）

311～313は甑である。311は底部中央に焼成後に穿孔している。313は外面に板ナデの痕跡がある。

314～332は蓋である。314はつまみ部の上面が窪んでいる。つまみ部は指押さえにより整形している。315のつまみ部も上面が窪んでおり，指押さえとナデで整形している。体部は凹凸が著しく外面は板ナデ，内面はヘラミガキとなっている。316は器高・底径とも小さく壺の蓋と思われる。体部は中程で屈曲して開く。つまみ部と体部との接合部分は沈線状になっている。全体にナデと指押さえにより整形している。318はつまみ部上面がやや窪んでいる。端部は欠損しているものの全体に大きく開く。外面の上半部は縦方向の，下半部は横方向のヘラミガキをそれぞれ丁寧に施している。内面はヘラミガキとナデである。319もつまみ部の上面が窪んでおり，つまみ部外面にはハケ目を施している。320はつまみ部の下半を絞って握りやすくしている。体部はそのまま大きく開いている。外面はハケ目，内面は板ナデとなっている。321は体部下半でやや屈曲して開く。つまみ部は指押さえにより整形している。322は下部で大きく屈曲して開く蓋と考えたものである。体部上半は膨らんでいる。つまみ部は上面が窪んでおり，向かい合った位置に穿孔を１個ずつ施している。あるいは甕かも知れない。323は体部下半で大きく開く。全体に板ナデとなっている。324は外面にハケ目を施した後につまみ部付近をナデている。内面は全体に丁寧にヘラミガキを施している。325はつまみ部の上面が大きく窪む。326・327はつまみ部外面を絞って握りやすくしている。328はつまみ部の端部に２個１単位の穿孔が現存で１単位ある。外面はヘラミガキを施し，内面は棒状工具によりナデている。つまみ部の径が大きいことからあるいは甕の底部かも知れない。329はつまみ部の端部は横に突出しており全体に肥厚している。逆に330のつまみ部は薄くなっている。331はつまみ部に上から粘土を被せて整形している。332はつまみ部上面は窪み，傾いている。つまみ部端部は斜め上方に突出している。外面は板ナデである。

333～336は鉢で，333・335・336の口縁部は逆Ｌ字形である。333は口縁部内面を強くナデている。334の体部はほぼ直線的に立ち上り，そのまま口縁部に至る。外面の口縁部付近はナデており，下半にはハケ目を施している。内面は全体に丁寧にヘラミガキを施している。底部は安定した平底である。335は外面に細かいハケ目を施し，内面は全体に板ナデとなっている。336は口縁部直下にヘラ描き沈線が１条巡っている。

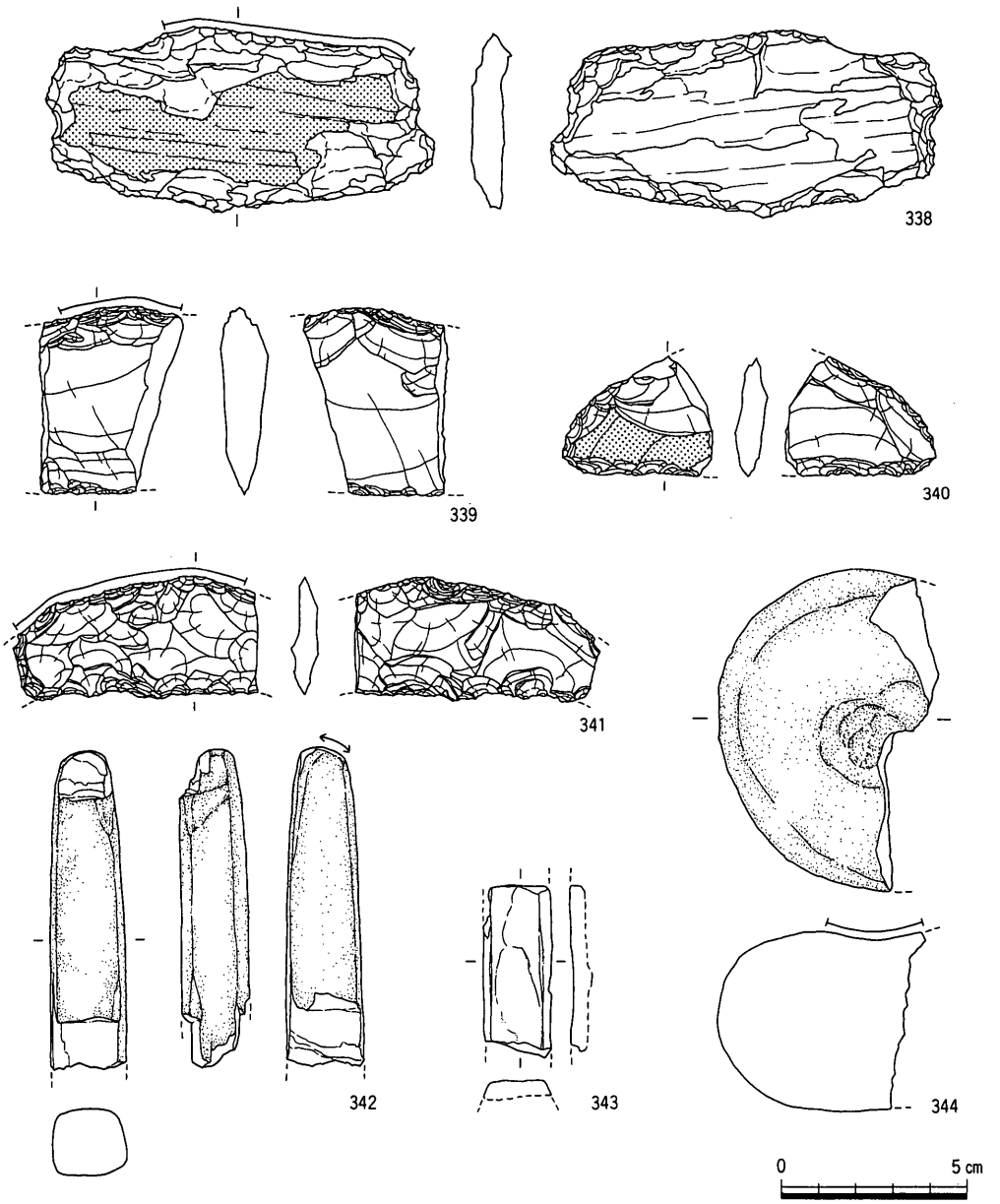
337は土製紡錘車である。土器片を転用したのか周囲は整っていない。両面側から穿孔している。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
325	弥・蓋	つまみ径4.1			粗・普	灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面板ﾅﾃﾞ	
326	弥・蓋	つまみ径7.3			中・普、細・普	浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目・指押え、内面ﾅﾃﾞ	
327	弥・蓋	つまみ径6.1			中・少	灰黄褐10YR5/2 灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
328	弥・蓋	つまみ径9.4			中・少、細・普	灰黄2.5Y7/2		2個1単位の穿孔現存1単位、外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面棒状工具によるﾅﾃﾞ	
329	弥・蓋	つまみ径5.8			中・少、細・普	浅黄2.5Y7/3		全体にﾅﾃﾞ	
330	弥・蓋	つまみ径6.7			中・多	浅黄2.5Y7/3、灰黄2.5Y7/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
331	弥・蓋	つまみ径5.5			中・少、細・多	灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
332	弥・蓋	つまみ径5.6			細・多、粗・少	灰白2.5Y8/2、にぶい黄橙10YR7/3		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
333	弥・鉢	*39.8			中・多	灰黄褐10YR6/2		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
334	弥・鉢	20.4	13.7	7.7	細・少、微・多	浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
335	弥・鉢	*31.6			中・普、微・普	灰白2.5Y8/2、浅黄2.5Y7/3		口縁部ﾏﾒﾂ、外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
336	弥・鉢	43.8			中・普、粗・少	にぶい黄橙10YR7/3、灰黄褐10YR6/2	ヘラ描沈線1条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
337	土製紡錘車	3.65	3.35	0.8	中・少、細・普	橙2.5YR6/6、灰黄褐10YR6/2		中央部に穿孔、両面ともﾅﾃﾞ	

第339図　Ｄ区ＳＨ05出土遺物(17)（１/４）

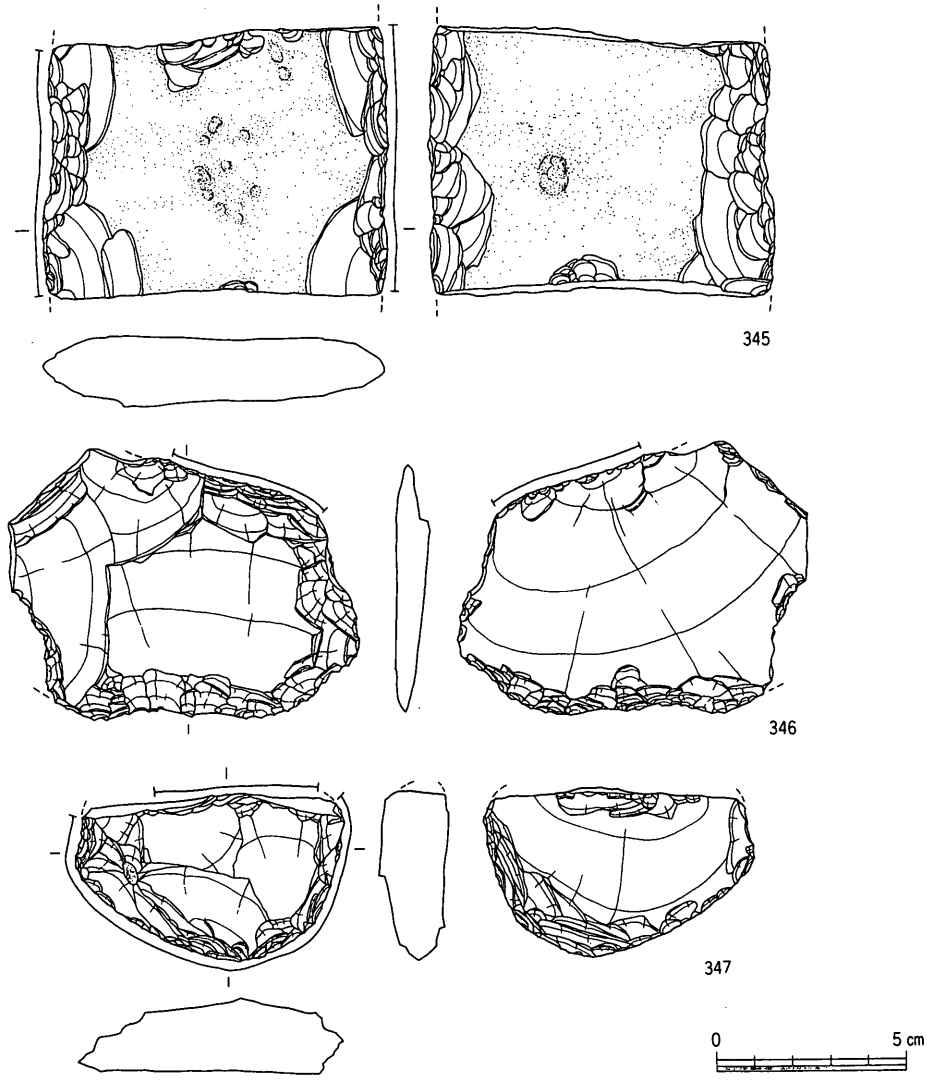
338～341は打製石庖丁である。338は結晶片岩製の打製石庖丁で，刃部は緩やかに外湾している。背部は直線であるが片側の側縁に近い部分が段になっている。背部の直線部分には敲打が認められる。両側縁部には小さく抉りを入れている。339は両側が欠損しているも



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
338	打製石庖丁	10.6	4.9	0.9	62.2	結晶片岩	側縁部に小さな抉り	
339	打製石庖丁	3.9	5.0	1.2	30.4	サヌカイト		
340	打製石庖丁	4.1	3.2	0.9	11.6	サヌカイト		
341	打製石庖丁	6.6	3.3	0.7	21.6	サヌカイト	横に細長く、石鏃に近い	
342	小型方柱状石斧	8.5	2.0	1.8	54.6	結晶片岩	基端部摩滅	
343	小型方柱状石斧	4.6	1.8	0.5	7.7	結晶片岩		
344	凹石	8.5	5.9	4.7	355.1	閃緑岩	敲打痕1面	

第340図　D区ＳＨ05出土遺物(18)（1/2）

のである。現存部での刃部は直線で，両面からの剥離により刃部を作っている。背部は緩やかに外湾しており，敲打痕がある。340は全体の形は不明であるが，刃部が直線で背部が外湾する石庖丁と考えたものである。全体に半月形のものと思われ，側縁部を形成しないものである。刃部は両面から形成されている。341も340と同じ形の石庖丁である。両面とも全体に調整剥離を施しており，背部には敲打痕がある。長さの割に幅のない細長いものである。342・343は結晶片岩製の小型方柱状石斧である。342の断面は方形で，基端部に向って緩やかに狭くなって行く。基端部は丸く，摩滅している。刃部は欠損している。



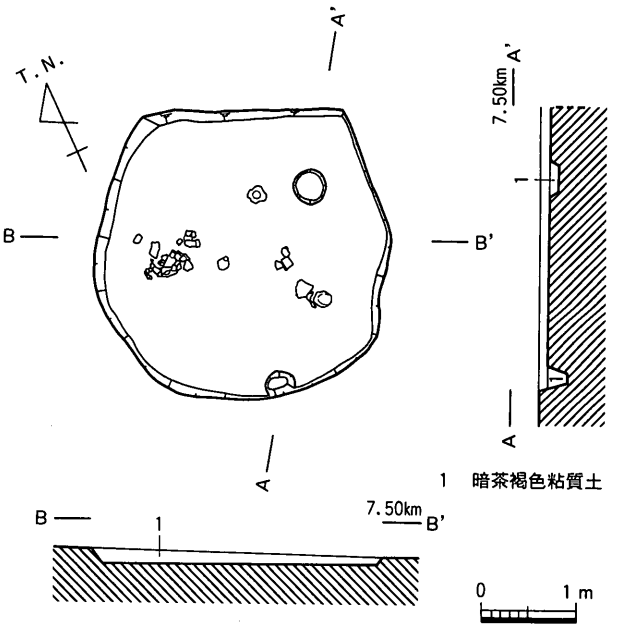
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
345	石鏃	6.9	9.1	2.1	216.2	安山岩	基部中央部分	
346	スクレイパー	9.3	7.0	1.0	66.3	サヌカイト	背部に敲打痕	
347	スクレイパー	7.1	4.4	1.8	75.8	サヌカイト	石鏃の刃部を転用	

第341図　D区SH05出土遺物(19)（1/2）

343は基部中央部分の破片である。344は凹石で，片面の中央部分が窪んでいる。345は石鍬の基部中央部分で，両側縁部に調整を施している。346は大型のスクレイパーで，裏面には素材剥離時の主要剥離面を残している。刃部はやや蛇行しており，両面から作り出している。背部は斜めで敲打痕がある。347もスクレイパーで，石鍬の刃部が欠損したものを転用し，欠損部分を敲打して背部を作り，刃部はそのまま利用したものである。

ＳＨ06（第342図～第345図）

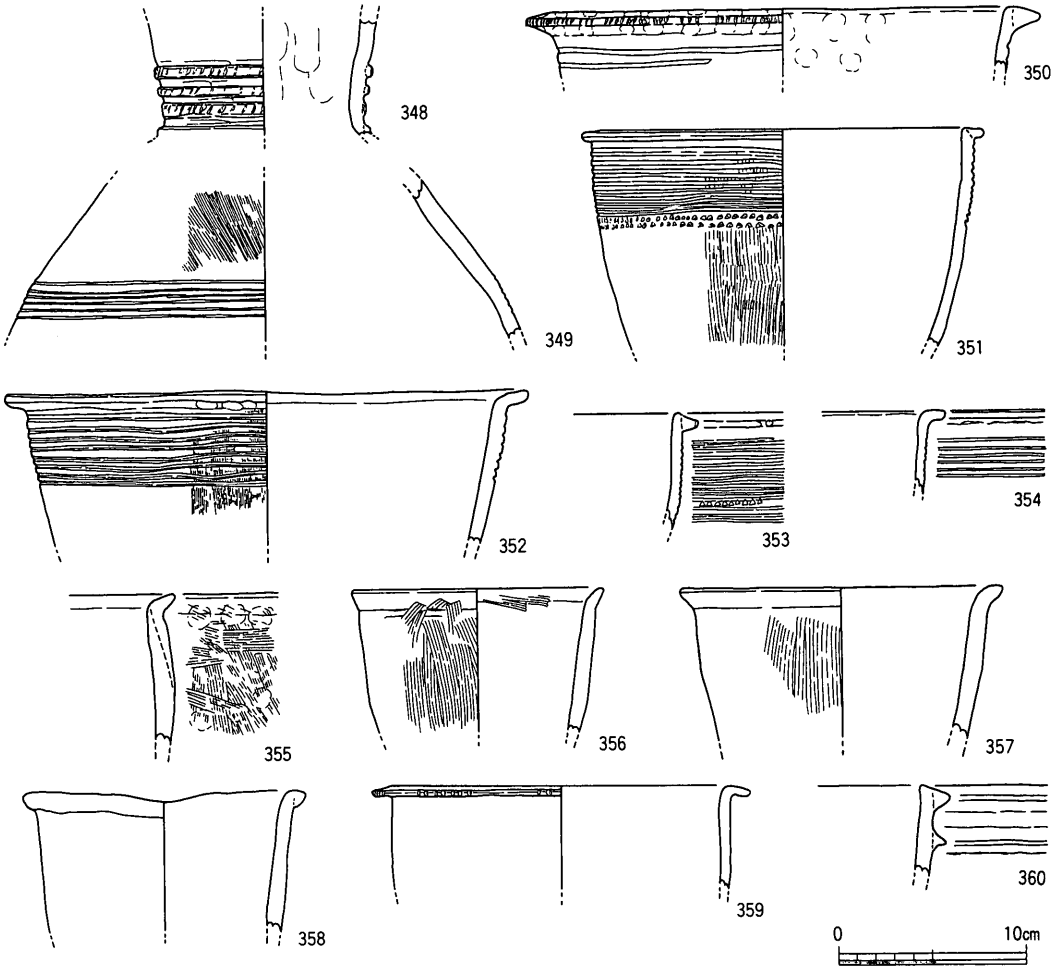
調査区の北壁沿いでＳＨ05の東側１ｍ弱のところに隣接して検出した竪穴住居である。住居の北側の一部は平成３年度調査区に続いている。住居の平面形はほぼ円形であるが，東側部分が不整形である。直径は約3.3ｍで，壁は18cmほど残っている。柱穴はＡ－Ａ’ライン上の２個のみである。住居の中央からはややずれているが，主柱穴と考えられる。主柱穴の掘形の平面形は円形で，直径32cm，深さ10～30cmで南側の柱穴のほうが深くなっている。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で，柱痕は確認出来なかった。南側の主柱穴は壁際に掘り込まれており，主柱穴間の距離は1.8ｍである。住居全体の埋土も暗茶褐色粘質土の単一層で，床面直上から土器・石器が出土した。



第342図　Ｄ区ＳＨ06平・断面図（１/80）

348・349は壺である。348は頸部に突帯を現存で４条貼り付けているが，最も下の突帯の刻み目の有無は摩滅のため不明である。頸部は若干外傾している。349は体部にヘラ描き沈線を６条巡らせているが，途中で途切れている部分もある。外面にはハケ目を施している。

350～360は甕で，このうち350・351・353は逆Ｌ字形口縁のものである。350の口縁部端部はやや下方に向き，刻み目を施している。体部外面にはヘラ描き沈線が現存で２条巡っている。351は体部外面にヘラ描き沈線を10条巡らせ，その下に三角形列点文を２列施している。外面は粗いハケ目で，内面はナデている。353は体部外面にヘラ描き沈線を11条と現存３条の２つのまとまりで巡らせるが，沈線文帯の間に三角形列点文を加えている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
348	弥・壺				細・普	にぶい黄橙10YR7/3	頸部に貼付突帯現存4条(刻み目)	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
349	弥・壺				中・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰黄2.5Y7/2	体部にヘラ描沈線6条	外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
350	弥・甕	23.4			中・少	にぶい黄橙10YR6/3、にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線現存2条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
351	弥・甕	18.8			粗・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/3、灰黄褐10YR6/2	ヘラ描沈線10条、三角形列点文2列	口縁部ﾅﾃﾞ、外面粗いﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
352	弥・甕	27.2			中・少、細・普	灰褐7.5YR5/2 にぶい黄橙10YR7/3	ヘラ描沈線8条	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
353	弥・甕	*20.0			中・少、細・普	にぶい黄橙10YR7/4	ヘラ描沈線11条＋三角形列点文＋ヘラ描沈線現存3条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
354	弥・甕	*15.2			中・少	灰白10YR8/1、灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線現存6条	口縁部折曲げ？、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
355	弥・甕	*22.2			中・普	灰白10YR8/2、灰黄2.5Y7/2		如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
356	弥・甕	13.0			粗・少、細・普	灰黄2.5Y7/2	一部にヘラ描沈線2条	如意形口縁、口縁部内面ﾊｹ目、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
357	弥・甕	16.6			中・普	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2		如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
358	弥・甕	13.0			中・普	灰黄褐10YR6/2 浅黄橙10YR8/3		口縁部折り返す、口縁部歪む、全体にﾅﾃﾞ	朝鮮系無文土器？
359	弥・甕	17.2			細・多	にぶい赤褐5YR4/3、にぶい黄2.5Y6/3	口縁部端部刻み目	口縁部折曲げ、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
360	弥・甕	不能			中・少	灰白2.5Y8/2	口縁部やや下に突帯1条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

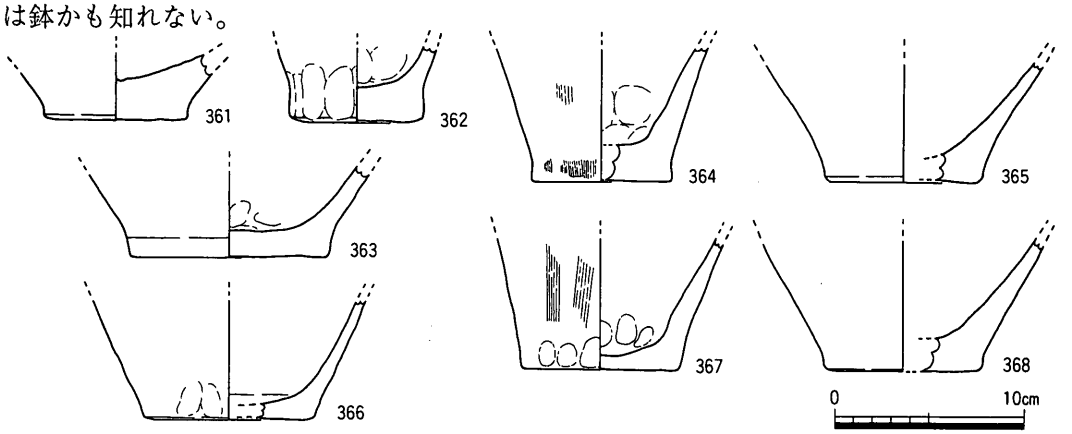
第343図　D区ＳＨ06出土遺物（１）（１/４）

全体にナデている。

352・355～357は如意形口縁の甕である。352は口縁部を強くナデており，口縁部下部に指押さえを行なう。体部は外傾しヘラ描き沈線を８条巡らしているが蛇行しているものが多い。外面はハケ目である。355の口縁部は短く外面に指押さえを行なっている。体部は口縁部に比べて肥厚しており，外面全体にハケ目を施している。356は体部外面全体にハケ目を施し，口縁部内面にもハケ目を施している。口縁部の屈曲は明瞭である。口縁部下に部分的にヘラ描き沈線が２条ある。357の体部は外傾しており，外面はハケ目となっている。

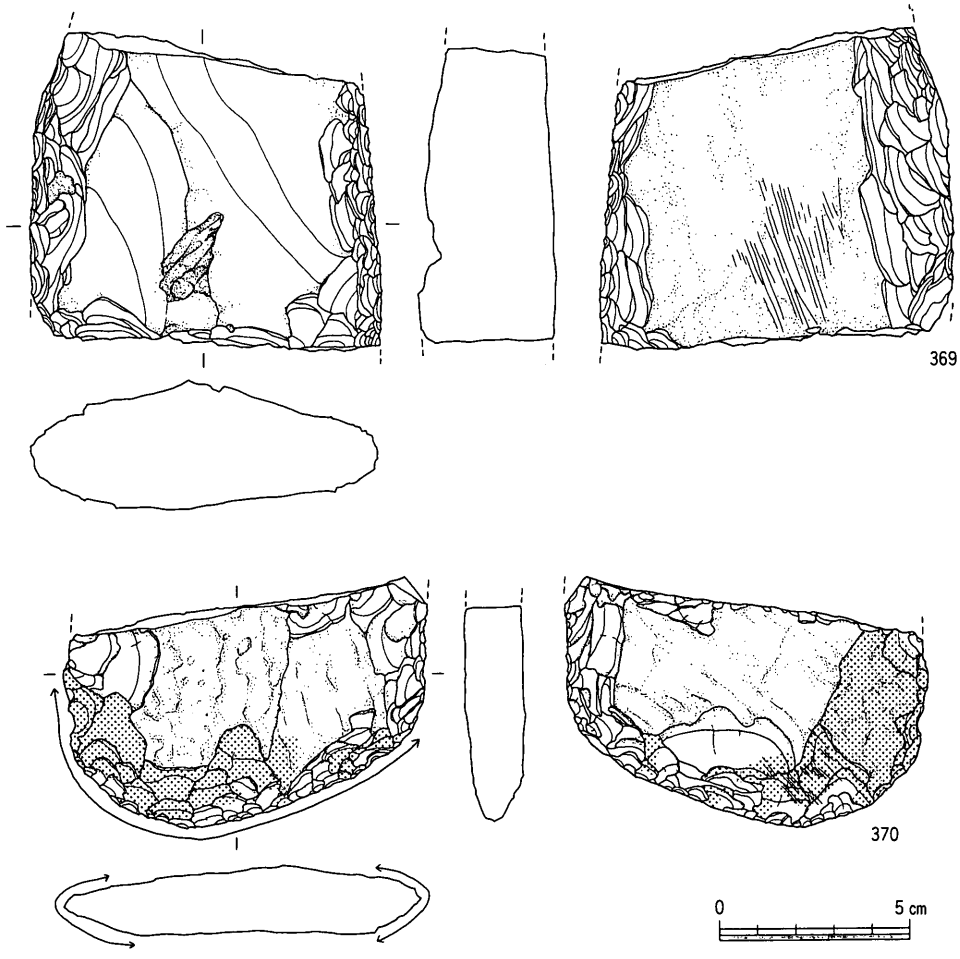
354は口縁部の断面観察が困難であり，口縁部下には粘土の貼付け痕と考えられるものがあるものの，おそらく真横に折り曲げているものである。359の口縁部は大きく横に折り曲げ，端部はやや下方を向いており，刻み目を施している。体部は内・外面とも全体にナデている。

358の口縁部は外側に折り返して玉縁状になるが，部分的には平坦な粘土帯のようになっている。口縁部は歪んでおり，外面から見ると口縁部を折り返した時の粘土の先端が明瞭に残っており，雑な感じを受ける。体部は直線的で全体にナデており無文である。朝鮮系無文土器の可能性が高いものである。360は口縁部端部は逆Ｌ字形になるが，その下に断面三角形の突帯を巡らせている。細片であり正確な口径は出ないが，大型品であるいは鉢かも知れない。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
361	弥・壺			7.5	中・多	浅黄2.5Y7/3		外面ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
362	弥・甕			7.0	中・多	浅黄橙10YR8/3		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面指押え	
363	弥・壺			10.5	粗・少、中・多	灰白2.5Y8/2、灰白2.5Y8/1		全体にﾏﾒﾂ	
364	弥・甕			7.5	中・多	灰黄2.5Y7/2、灰白2.5Y8/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
365	弥・甕			7.8	粗・少、細・普	にぶい橙7.5YR7/4、灰白10YR8/2		全体にﾏﾒﾂ	
366	弥・甕			8.9	粗・少、中・多	橙5YR7/6、黄灰2.5Y5/1		全体にﾏﾒﾂ	
367	弥・甕			8.2	中・普	灰黄2.5Y6/2、灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
368	弥・甕			8.5	粗・少、中・多	橙5YR6/6、褐灰10YR4/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	

第344図　Ｄ区ＳＨ06出土遺物（２）（1/4）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
369	石鏃	8.3	9.3	3.3	410.3	安山岩	基部に使用痕と考えられる擦痕あり	
370	石鏃	6.5	9.6	1.8	146.9	安山岩	刃部擦痕と使用による摩滅	

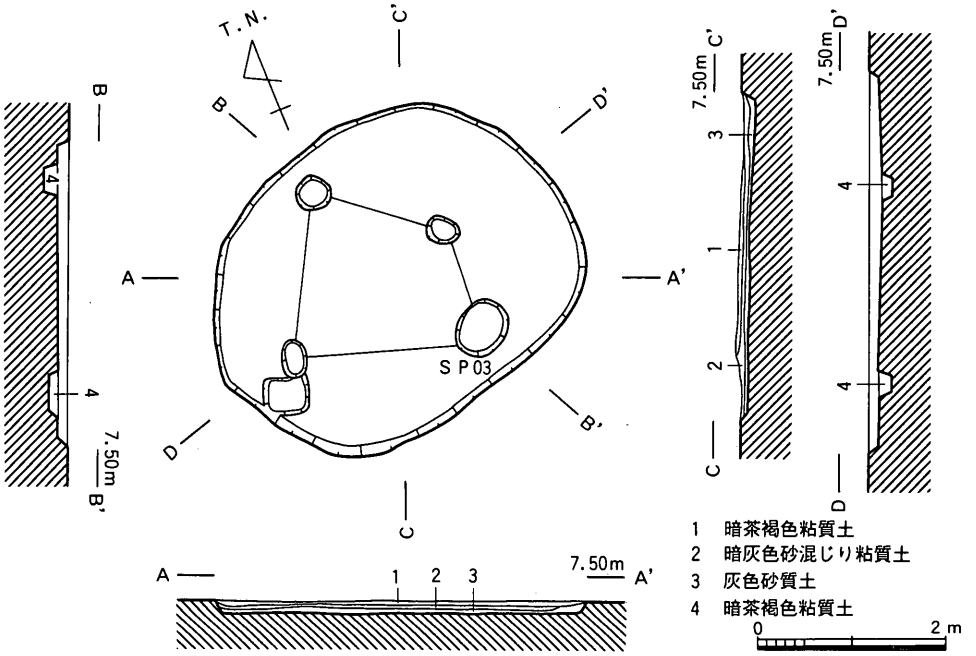
第345図　Ｄ区ＳＨ06出土遺物（３）（１／２）

361～368は壺および甕の底部である。362の底部は肥厚しており，底部立ち上り部外面に指押さえを施している。364の外面には鉄分が付着しており観察しにくいが，ヘラミガキのようにも思えるが，おそらくハケ目であろう。367の外面はハケ目である。

369・370は石鏃である。369は厚手の剥片を利用している。両側縁に調整を施し，基部の片面に使用痕と考えられる擦痕がある。370は刃部の破片で，片面に弱い擦痕が残っている。また使用により摩滅している。

ＳＨ07（第346図～第347図）

調査区の中央やや西寄りで，ＳＨ05の南1.5mのところに隣接して検出した竪穴住居である。住居の平面形は楕円形で長径4.0m，短径3.1mでやや東西に長くなっている。壁は

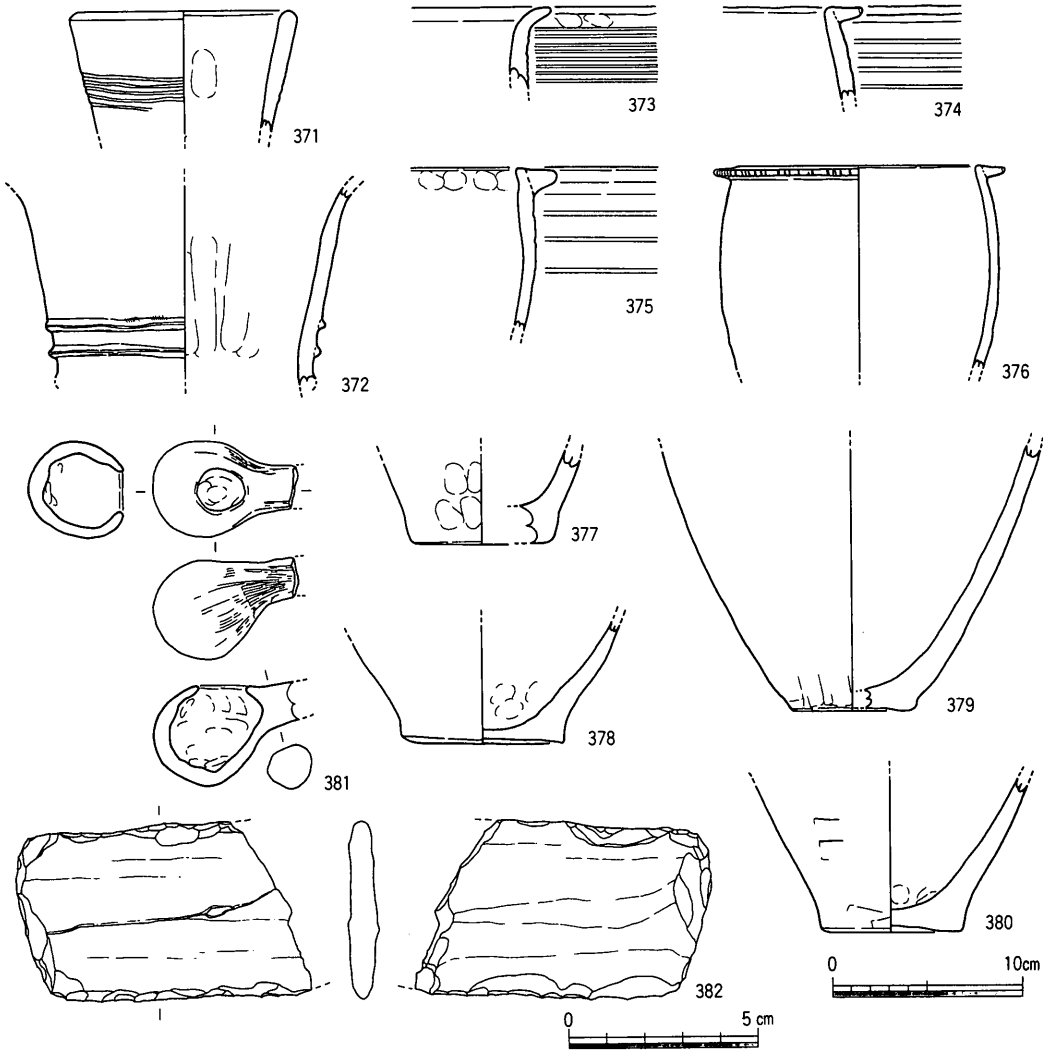


第346図　D区SH07平・断面図（1/80）

6～14cm程度しか残っておらず，特に北側の残りが悪い。主柱は4本と考えられるが，D－D’ラインのD’側の柱穴の位置が偏っている。主柱の柱間の平均は1.55mである。主柱穴の掘形の平面形は円～楕円形で直径40cm前後であるが，SP03は他に比べて大きく60cm×50cmの規模である。深さは10～15cmで，埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で柱痕は確認出来なかった。住居の埋土は3層に分層され，遺物は主に中層の暗灰色砂混じり粘質土層から出土した。一部の遺物はSP03からも出土している。

371・372は壺である。371は口縁部端部は肥厚し丸く収める。頸部にはヘラ描き沈線が5条巡っている。372は頸部は外傾し，突帯は現存で2条あるが，欠損部にも突帯の痕跡がある。内面は指で縦方向に長くナデている。

373～376は甕である。373は如意形口縁で，口縁部下部に指押さえを行なっている。体部外面にはヘラ描き沈線が現存で8条あるが，上から2条めの沈線はナデたときの凹線のようになっている。374～376は逆L字形口縁である。374は体部は内傾しており，外面には間隔の開いたヘラ描き沈線が現存で4条ある。375は口縁部内面に強い指押さえを施している。体部外面には間隔の開いたヘラ描き沈線が3条あり，最下段の沈線部分で体部は屈曲している。376は口縁部端部に刻み目を入れている。体部は全体に内湾しており，均整のとれた形である。内・外面とも全体にナデている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
371	弥・壺	11.2			中・多	灰白2.5Y8/2、淡黄2.5Y8/3	頸部にヘラ描沈線5条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
372	弥・壺				細・普	にぶい黄橙10YR6/3、明赤褐2.5YR5/8	頸部に貼付突帯現存2条	外面ﾏﾒﾂ、内面指による縦方向の強いﾅﾃﾞ	
373	弥・甕	*20.4			細・多	にぶい黄橙10YR6/4、明赤褐2.5YR5/6	ヘラ描沈線現存8条	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
374	弥・甕	*26.2			中・普	にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線現存4条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
375	弥・甕	*38.4			中・少、細・多	灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線3条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
376	弥・甕	12.3			中・普	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
377	弥・甕			7.1	粗・少、中・普	浅黄橙10YR8/3 黒褐10YR3/2		外面指押え、内面ﾅﾃﾞ	
378	弥・甕			8.5	中・普	灰黄褐10YR6/2 灰白2.5Y8/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
379	弥・甕			6.5	粗・少、中・普	灰白10YR8/2、浅黄橙10YR8/3		外面板ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
380	弥・壺			7.5	中・普	にぶい黄橙10YR6/3		外面板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
381	用途不明土製品	A-A' 7.7、B-B' 4.9	5.2		中・少、細・普	浅黄2.5Y7/3、淡黄2.5Y8/3		パイプの頭状で、円形の穿孔があり中は空洞となる。外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	SP03

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
382	磨製石庖丁	6.8	4.7	0.8	44.4	結晶片岩	磨き方は弱い	

第347図　D区ＳＨ07出土遺物（1／2，1／4）

377～380は壺および甕の底部である。378の底部は薄くなっており，体部は屈曲気味に立ち上がる。379・380は体部外面に板ナデの痕跡がある。

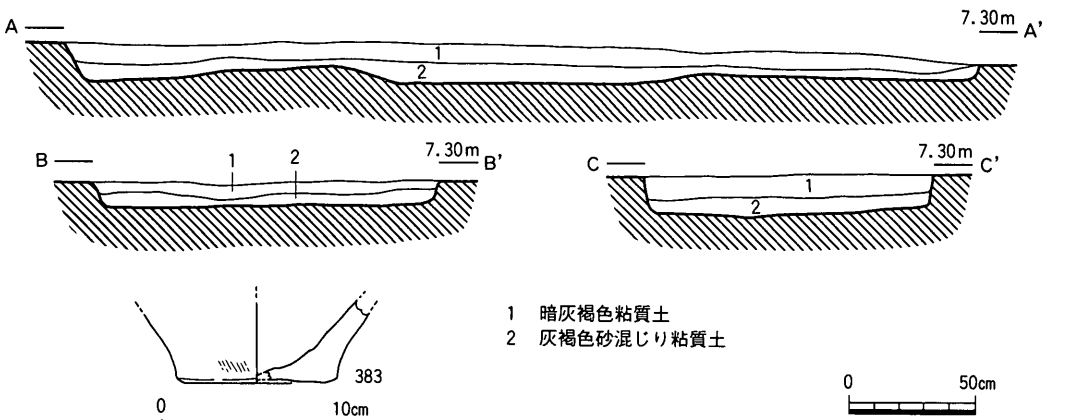
381はＳＰ03から出土した用途不明の土製品である。パイプの頭のような形で球形の部分に柄と思われる部分の欠損部がある。上面のやや柄側に円形の穿孔があり窓のようになっており，中は空洞になっている。内面は底部付近は指押さえで整形しており，穿孔部付近は板ナデとなっている。外面は全体にヘラミガキを施している。柄の部分は中実である。全体の形や用途は不明である。

382は結晶片岩製の石庖丁である。刃部・背部ともに直線で背部を磨いている。刃部の作り方は雑で，刃部を作るための剥離も弱い。体部は部分的に研磨しているが，全体に磨き方は弱い。

ＳＫ03（第348図）

調査区の東端で検出した土坑である。平面形は不整形な長方形で東西方向に長く，東側部分が膨らんでいる。長辺3.8m，短辺0.9～1.7mで短辺は西側ほど狭くなっている。深さは10～15cmで底部は中央部分が少し低くなっており，逆に低くなっている部分のすぐ西側が盛り上がっている。土坑はＳＨ01の主柱穴により一部を壊されている。埋土は上下２層に分層され，主に下層の灰褐色砂混じり粘質土層から遺物が出土した。遺物は細片が多く，図化出来たものは１点である。

383は甕の底部と考えられるもので，底部中央部は薄くなっている。全体に摩滅しているが，体部外面にハケ目の痕跡がある。



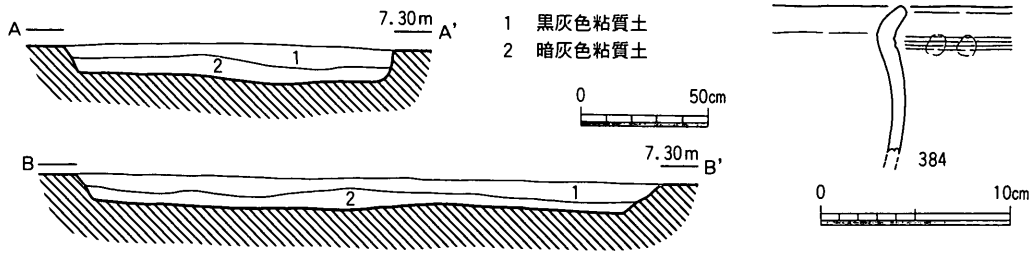
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
383	弥・甕			8.4	中・普	にぶい赤褐5YR 5/3、灰黄2.5Y 6/2		外面ハケ目、内面剥離	

第348図　Ｄ区ＳＫ03断面図（１/30），出土遺物（１/４）

ＳＫ04（第349図）

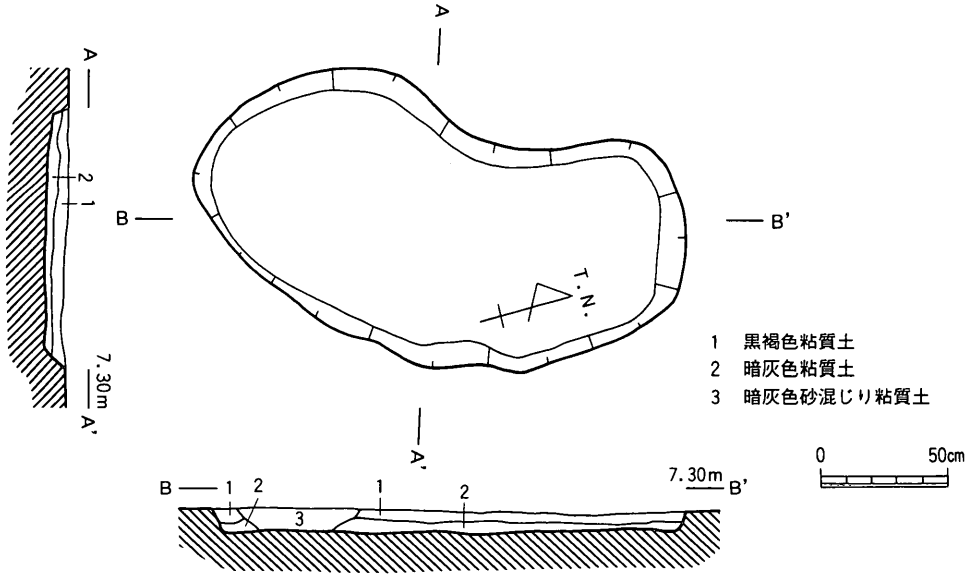
調査区の東端で，ＳＫ03の西側に隣接して検出した土坑である。平面形は不整形な楕円形で北東－南西方向に長く，土坑の北東部分が歪んでいる。長径は2.4m，短径は最大部分で1.5mである。深さは12cm程度で，底部はほぼ平坦である。この土坑もＳＨ01の主柱穴にその一部を壊されている。埋土は上下２層に分かれ，遺物は下層の暗灰色粘質土から少量出土したにとどまる。

384は如意形口縁の甕で，口縁部端部は平坦になる。体部は膨らみ，口縁部との境部分にヘラ描き沈線を２条施している。内・外面とも全体にナデている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
384	弥・甕	*25.4			粗・少、中・多	にぶい橙7.5YR 7/4、にぶい黄橙10YR7/3	ヘラ描沈線2条	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

第349図　Ｄ区ＳＫ04断面図（１/30），出土遺物（１/４）

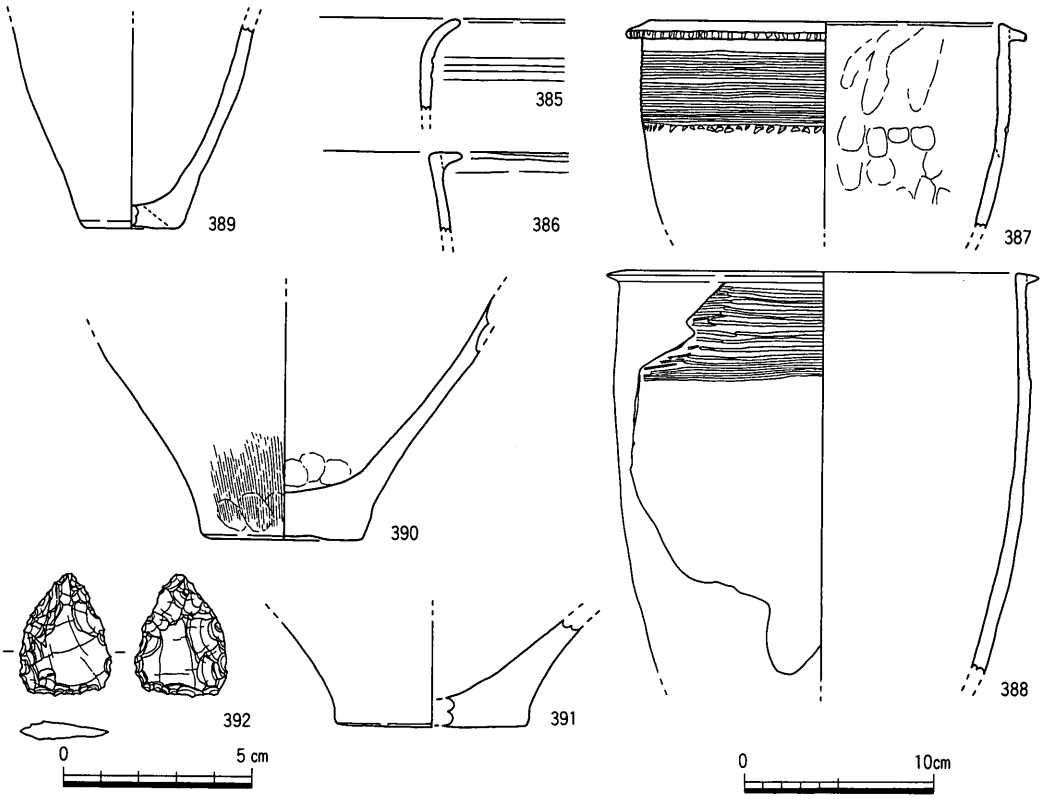


第350図　Ｄ区ＳＫ05平・断面図（１/30）

ＳＫ05（第350図～第351図）

調査区の東端で，ＳＫ04の北側に隣接して検出した土坑である。平面形は不整形な楕円形で北北東－南南西方向に長く，西側部分がくびれており空豆のような形をしている。径は2.0m，短径は0.9～1.0mとなっている。深さは10cm前後で底部は平坦である。埋土は上下２層で，下層の暗灰色粘質土から遺物が出土した。

385～388は甕である。385は如意形口縁で幅広のヘラ描き沈線を２条施す。386～388は逆Ｌ字形口縁の甕で，386は体部は内傾している。387は口縁部端部は下方を向き，刻み目



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
385	弥・甕	*42.0			中・多	灰黄褐10YR6/2	ヘラ描沈線2条	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
386	弥・甕	*58.2			中・普	灰白10YR8/1		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
387	弥・甕	18.2			細・少	橙2.5YR6/6、にぶい黄褐10YR5/3	ヘラ描沈線13条、三角形列点文、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
388	弥・甕	20.4			中・普、細・少	橙5YR6/6、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線は不連続で14条の部分と17条の部分がある	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
389	弥・甕			4.9	粗・少、細・多	橙5YR6/6、灰黄2.5Y7/2		全体にﾏﾒﾂ	
390	弥・壺			8.5	中・普、細・普	にぶい黄2.5Y6/3、浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
391	弥・壺			10.0	粗・少、中・多	浅黄橙10YR8/3 橙2.5YR6/8		全体にﾏﾒﾂ	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
392	石鏃	3.2	2.4	0.5	3.4	サヌカイト	平基	

第351図　Ｄ区ＳＫ05出土遺物（1/2，1/4）

を入れている。体部は緩く内湾し，外面のヘラ描き沈線は13条と多条で，その下に三角形列点文を加えている。内面には指押さえが顕著である。388の口縁部端部は先細りで，体部は下半で緩く内湾する。外面のヘラ描き沈線は不連続で14条と17条の部分がある。

389～391は壺および甕の底部で，390は外面にハケ目を施し，底部は若干上げ底である。

392は平基の石鏃で，周囲を丁寧に調整している。

ＳＫ06（第352図）

調査区の東端で，ＳＫ04の西側に隣接して検出した土坑である。平面形は隅丸方形で，長辺2.0m，短辺1.6mで北東－南西方向がやや長い。深さは13cmで底部は平坦である。埋土は上下２層で，下層の灰色砂混じり粘質土層から遺物が少量出土した。

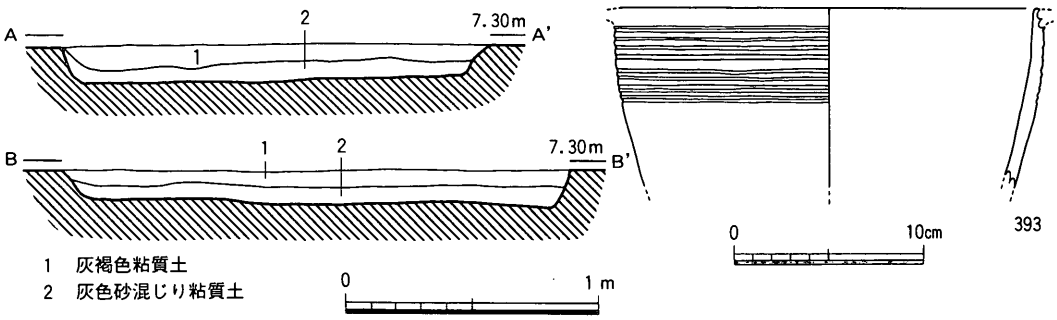
393は甕で，口縁部は剥離しているが逆Ｌ字形のものである。体部は若干内湾しており外面にはヘラ描き沈線を９条巡らせている。

ＳＫ07（第353図）

調査区の東側で，ＳＨ02の東３ｍのところに位置する土坑である。平面形は楕円形で，長径1.5m，短径1.1m，深さ10～15cmである。底部は東に向って少し下っている。北側部分の掘り込みは急になっている。埋土は茶褐色粘質土の単一層であった。

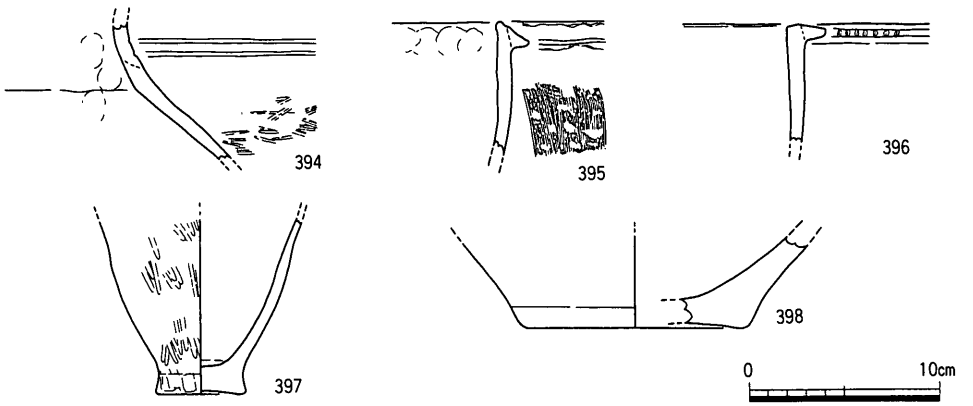
394は壺で，頸部にヘラ描き沈線が２条ある。体部は頸部から大きく開き，外面にはヘラミガキを施している。

395・396は逆Ｌ字形口縁の甕である。395は口縁部上面は著しく下方を向き，端部の上下に指押さえを施している。口縁部の内面にも強く指押さえを行い，体部外面は口縁部付近はナデで，それ以下はハケ目である。396は口縁部端部に刻み目を入れており，体部は直線的で外面はナデている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
393	弥・甕	21.4			中・多	にぶい黄橙10YR6/4、にぶい黄2.5Y6/3	ヘラ描沈線9条	口縁部剥離、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	

第352図　Ｄ区ＳＫ06断面図（１/30），出土遺物（１/４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
394	弥・壺				中・多、細・多	灰白10YR8/2	頸部にヘラ描沈線2条	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
395	弥・甕	*18.4			中・普	にぶい黄褐10YR5/4、にぶい黄2.5Y6/4		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
396	弥・甕	*32.4			中・多	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部端部刻み目	口縁部ﾏﾒﾂ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
397	弥・甕			4.6	中・普、細・多	にぶい橙7.5YR7/4 明黄褐10YR6/6		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾏﾒﾂ、底部外面ﾍﾗｹｽﾞり	
398	弥・壺			11.4	中・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	

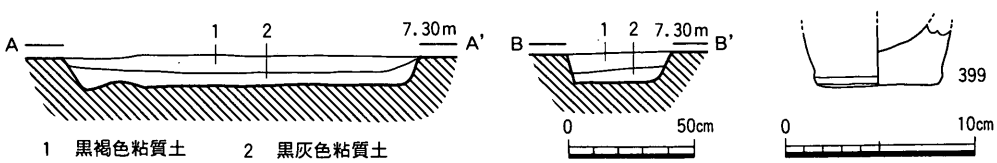
第353図　Ｄ区ＳＫ07出土遺物（１/４）

397・398は壺および甕の底部である。397は体部中央部分が他に比べて薄くなっており，外面にはヘラミガキを施している。底部は突出しており，立ち上り部の外面には板ナデの痕跡がある。底部外面にはヘラケズリを施している。398は体部は大きく開いて立ち上がっている。

ＳＫ08（第354図）

調査区の東側で，ＳＤ02の東側先端部分の北側に隣接して検出した土坑である。平面形は長方形で，東側の隅がいくぶん丸みを帯びている。長辺1.4m，短辺0.5m，深さ10cm程度で，東西に長くなっている。底部はほぼ平坦であるが，西側部分が幾分盛り上がっている。埋土は上下２層に分かれるが，黒色系の粘質土が堆積していた。

399は甕の底部と考えられるもので，底部は肥厚しており外面はナデている。



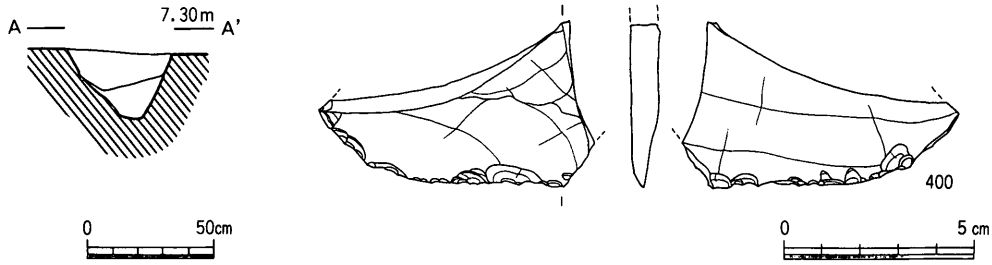
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
399	弥・甕			6.4	中・多	灰黄褐10YR6/2 にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	

第354図　Ｄ区ＳＫ08断面図（１/30），出土遺物（１/４）

ＳＫ09（第355図）

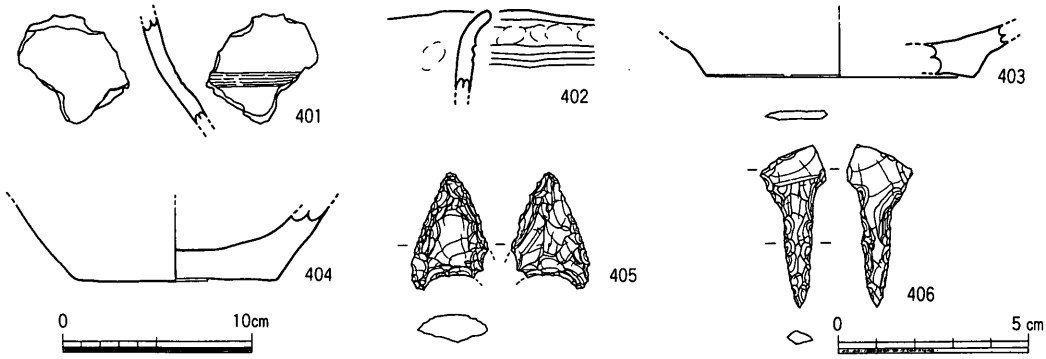
調査区の東側でＳＨ02とＳＨ03の間で検出した土坑である。平面形は長楕円形であるが東側部分がやや不整形で尖り気味である。長径1.4m，短径0.4mと東西に長く，深さは25cmである。土坑の短径ラインの断面形はＶ字形で，北側部分の掘り込みは急である。埋土は上下２層に分かれ，下層には黒褐色砂混じり粘質土が堆積していた。土坑の西側部分は僅かであるが，後述するＳＫ10に壊されている。

遺物は土器は全く出土せず，僅かにサヌカイトの剥片１点と，図示したスクレイパーが出土したのみである。400のスクレイパーは，欠損部分に後に調整を加えているが，他の器種を転用したのかも知れない。



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
400	スクレイパー	7.3	4.3	0.8	20.8	サヌカイト		

第355図　Ｄ区ＳＫ09断面図（1/30），出土遺物（1/2）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
401	弥・壷				中・少、細・普	灰黄2.5Y7/2	体部上半に削出突帯（沈線2条）	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
402	弥・甕	*25.6			中・普	灰白10YR8/2	ヘラ描沈線2条	如意形口縁、口縁部歪む、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
403	弥・壷			14.1	細・多	浅黄橙10YR8/4、にぶい橙7.5YR7/4		全体にﾏﾒﾂ	
404	弥・壷			10.6	中・普	黒2.5Y2/1、灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
405	石鏃	3.1	2.0	0.7	3.9	サヌカイト	凹基	
406	石錐	4.3	1.7	0.6	2.2	サヌカイト		

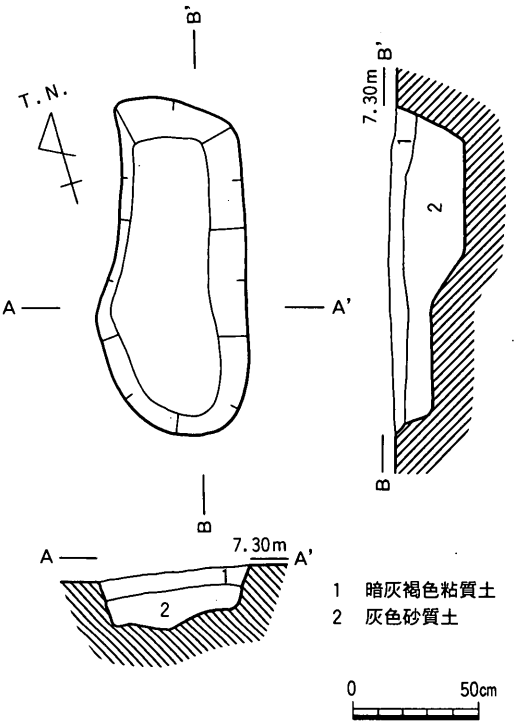
第356図　Ｄ区ＳＫ10出土遺物（1/2，1/4）

ＳＫ10（第356図～第357図）

調査区の東側で，ＳＫ09の北西でＳＫ10の一部を僅かに壊している土坑である。平面形は不整形であるが長方形に近く，西側部分はくびれており，南側部分は丸みを帯びている長辺は1.3m，短辺は0.5～0.6mで南北に長くなっている。深さは18～30cmで北半分が一段深くなっている。埋土は上下２層に分かれ下層は灰色砂質土である。

401は壺で，体部に削出突帯を施し中に沈線を２条加えている。内・外面ともにナデている。

402は如意形口縁の甕で，口縁部は歪んでおり，口縁部外面に指押さえを強く行なっている。体部外面にはヘラ描き沈線を２条巡らせている。全体にナデている。



第357図　Ｄ区ＳＫ10平・断面図（１/30）

403・404は壺の底部と考えられ，403の底部は破片であるが幅広で安定感がある。

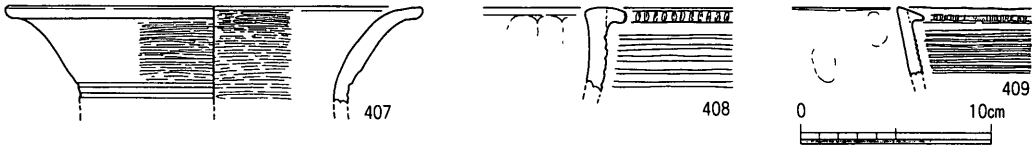
405は凹基の石鏃で，基部の窪みは大きい。全体に丁寧に加工している。406は石錐で，錐部の先端は鋭利で，両側縁から調整を施し断面方形に仕上げている。つまみ部の上部は斜めになっており小さな作りである。

ＳＫ11（第358図）

調査区の東側のＳＨ03の北側に隣接し，北壁際で検出した土坑である。土坑の北側は平成３年度調査区に続いており全体の形は不明であるが，円形あるいは楕円形になるものと思われる。調査区内で検出した部分では，壁沿い部分での直径は1.1mで，深さは10cmである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

407は壺で，口縁部は大きく開き端部は真横を向く。頸部にはヘラ描き沈線が現存で２条ある。内・外面ともに丁寧にヘラミガキを施している。

408・409は逆Ｌ字形口縁の甕である。408の口縁部端部は緩く下方を向き，端部には刻み目を入れている。体部外面にはやや間隔の開いたヘラ描き沈線が現存で５条ある。409の口縁部端部は下方を向き，刻み目を入れている。体部は直線的に内傾し，外面にヘラ描



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
407	弥・壺	21.8			中・少、細・普	にぶい黄2.5Y6/3	頸部にヘラ描沈線現存2条	口縁部端部ﾅﾃﾞ、外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
408	弥・甕	*24.0			中・少、細・多	橙5YR6/6、灰黄2.5YR7/2	ヘラ描沈線現存5条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
409	弥・甕	*24.4			中・少、微・多	灰黄褐10YR5/2 褐灰10YR6/1	ヘラ描沈線現存8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

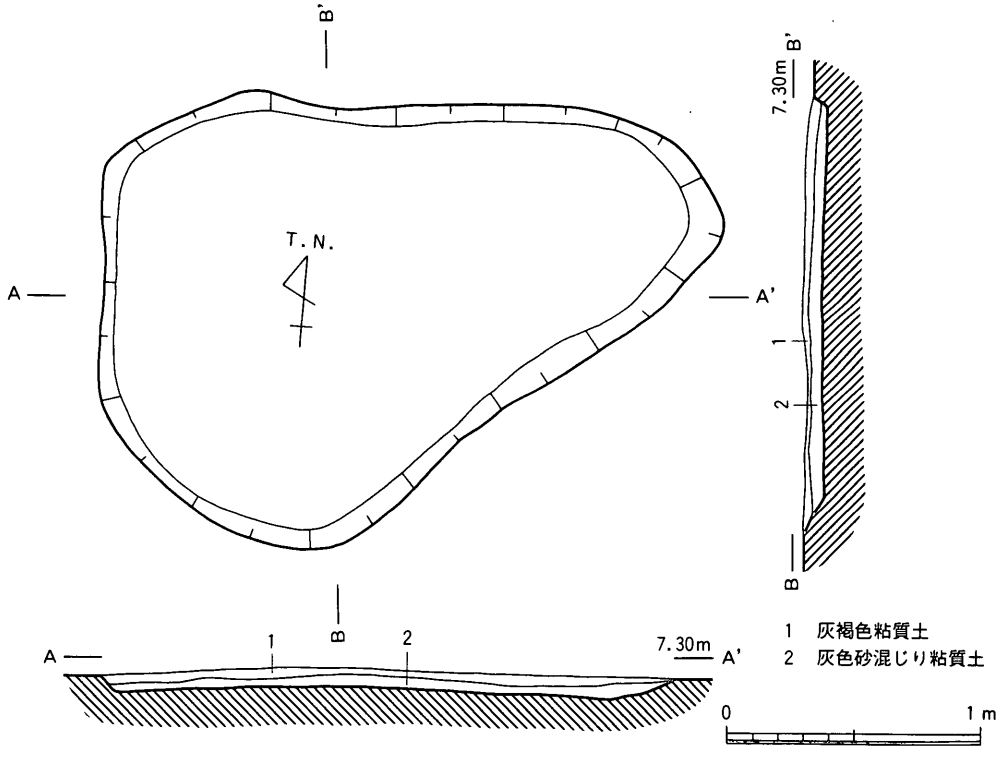
第358図　Ｄ区ＳＫ11出土遺物（１/４）

き沈線が現存で８条ある。

ＳＫ12（第359図）

調査区の中央で検出した土坑である。平面形は不整形であるが，西洋梨のような形で，西側が膨らんでおり，各コーナーは丸みを帯びている。長径2.5m，短径の最大幅で1.8m，深さは８cmで，東西方向に長くなっている。底部は平坦で，埋土は上下２層に分かれ，灰色系の粘質土が主に堆積していた。

遺物は細片が少量出土したにとどまる。逆Ｌ字形口縁の甕の細片が２点あり，外面にヘ

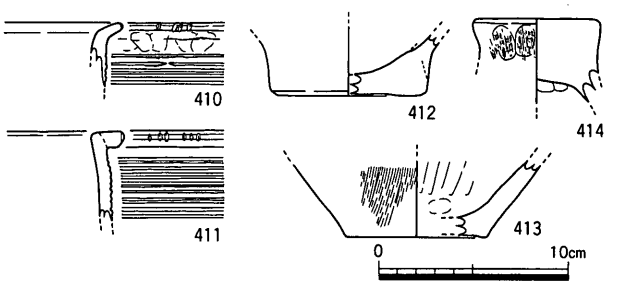


第359図　Ｄ区ＳＫ12平・断面図（１/30）

ラ描き沈線がそれぞれ７条と５条現存している。他に甕の底部と思われるものが１点出土している。

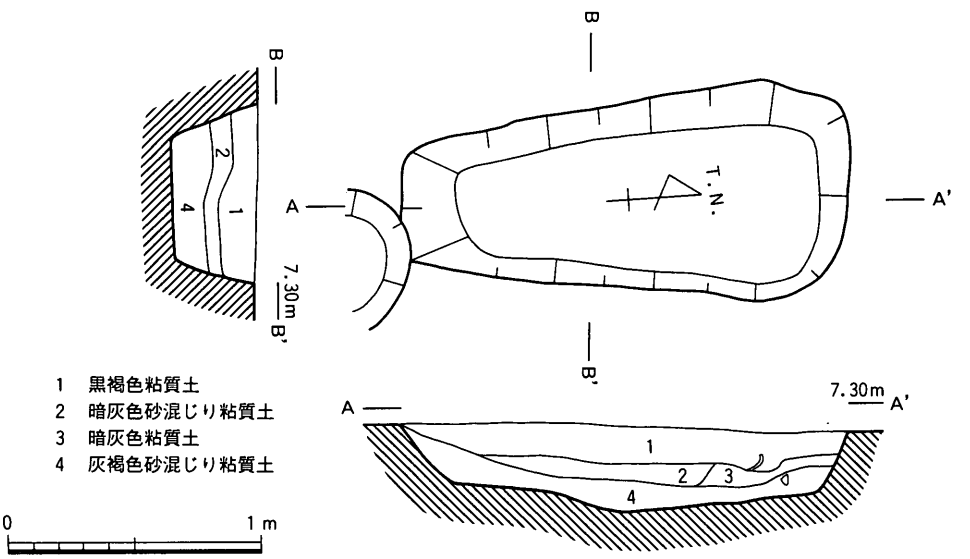
ＳＫ13（第360図～第361図）

調査区の中央で，ＳＫ12の西側に隣接して検出した土坑である。平面形は長方形であるが，南東隅を僅かであるが他の遺構に壊されている。長辺1.8m，短辺は0.45～0.9mで，南北に長く短辺は北側部分が長くなっている。深さは24～34cmで，底部は南側から中央部に向って緩やかに下り，中央部で一段低くなった後に北側に向って再び緩やかに上がっている。南側の掘り込みは他の部分に比べて緩やかになっている。断面は逆台形で，埋土は大きく３層に分けられ，最上層の黒褐色粘質土層の下部と最下層の灰褐色砂混じり粘質土



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
410	弥・甕	*17.6			細・多	黒褐10YR3/1、灰黄褐10YR5/2	ヘラ描沈線現存5条、口縁部端部刻み目	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
411	弥・甕	*16.4			粗・少、中・普	にぶい黄橙10YR7/3、灰白10YR8/2	ヘラ描沈線現存10条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
412	弥・壷			8.2	粗・少、細・多	橙7.5YR7/6		全体にﾏﾒﾂ	
413	弥・壷			7.4	中・少、細・少	浅黄橙2.5Y7/3		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
414	弥・蓋	つまみ径6.3			粗・少、細・普	にぶい橙5YR6/4、にぶい黄橙10YR7/4		外面ﾊｹ目・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

第360図　Ｄ区ＳＫ13出土遺物（１/４）



第361図　Ｄ区ＳＫ13平・断面図（１/30）

層の上部を中心に土器が出土した。

410は如意形口縁の甕で，口縁部は内面に稜を形成して屈曲しており，端部には刻み目を入れている。体部外面にはヘラ描き沈線が５条現存している。411は逆Ｌ字形口縁の甕で，口縁部端部には刻み目を入れており，体部は外面にヘラ描き沈線が10条現存しており全体にナデている。

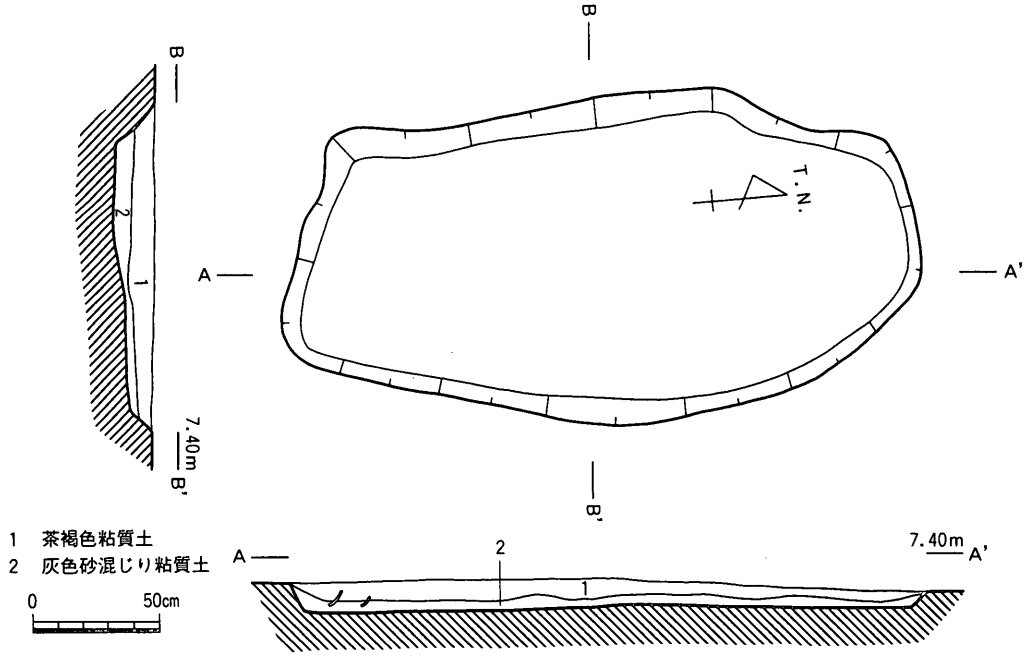
412・413は壺の底部と考えられる。413は外面にハケ目を施し，内面には板ナデを施している。

414は蓋のつまみ部で，外面に指押さえを行なった後にハケ目を加えている。

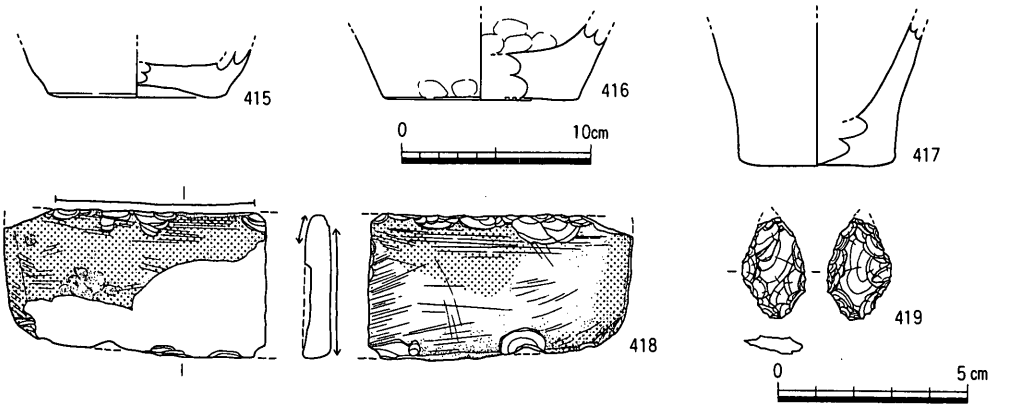
ＳＫ14（第362図～第363図）

調査区の中央で，ＳＫ13の西側に隣接して検出した土坑である。平面形は不整形であるが長方形に近い。北東部分は丸みを帯びて膨らんでおり，逆に北西部分は内側に窪んでいる。長辺2.5m，短辺1.3mと南北に長くなっている。深さは10～15cmで，底部は西側部分がやや低くなっている。土坑の北西部分はＳＤ03の先端部を壊している。埋土は上下２層で，上層と下層の境目で土器が出土した。

415～417は壺および甕の底部である。415の底部は上げ底である。416の外面はナデているが，全体に雑な作りである。



第362図　Ｄ区ＳＫ14平・断面図（1/30）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
415	弥・壷			9.4	中・普、細・普	橙5YR6/6、浅黄2.5Y7/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
416	弥・壷			10.2	中・少、細・普	灰黄褐10YR5/2、褐灰10YR4/1		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
417	弥・甕			8.2	中・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/4、褐灰10YR6/1		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
418	磨製石庖丁	7.0	3.8	0.8	31.1	安山岩	体部に擦痕	
419	石鏃	2.6	1.7	0.4	1.9	サヌカイト	凸基	

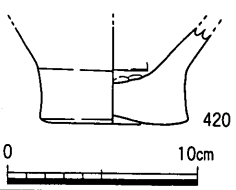
第363図　Ｄ区ＳＫ14出土遺物（1/2，1/4）

418は安山岩製の磨製石庖丁である。刃部は僅かに外湾するがほぼ直線で，背部は直線である。刃部は側縁部分に僅かに研ぎ出されており，主要な部分は剥離しており良く判らない。剥離していない面の刃部の研ぎ出しは側縁に近い部分で認められる。背部は磨いておらず整形時のままであり，一部に整形時の剥離痕が残っている。全体に作りは雑で，刃部の断面がまだ方形に近いことなどから，未製品ではないかと思われる。419は凸基の石鏃で基部は太めである。

ＳＫ15（第364図）

調査区の中央部北寄りで，ＳＤ03の北側で検出した土坑である。平面形は隅丸正方形で南側ほど丸みが強い。一辺1.1mで，深さは15cmである。断面は逆台形で，埋土は暗茶褐色粘質土の単一層となっている。遺物は少量である。

420は突出した底部で，若干の上げ底となっている。内面には板ナデと指押さえの痕跡がある。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
420	弥・壷			7.7	中・普	浅黄橙7.5YR8/3、灰白10YR8/2		外面ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	

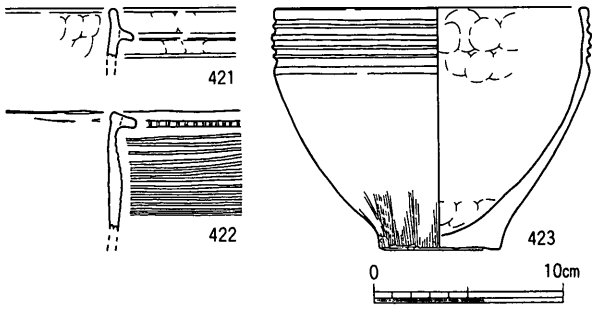
第364図　Ｄ区ＳＫ15出土遺物（1/4）

ＳＫ16（第365図）

調査区の中央部北寄りで，ＳＫ15の東側に隣接して検出した土坑である。平面形は不整形であり，台形に近い形である。東側が部分的に突出している。長辺は1.5～2.0m，短辺は1.5m前後である。深さは15～20cmで，底部は南側に向って下っている。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

421は甕で口縁部は内面の指押さえのため若干内傾しており，端部は丸く収めている。口縁部のやや下に突帯を１条貼り付けており，体部外面にはヘラ描き沈線が現存で１条巡っている。422は逆Ｌ字形口縁の甕で，端部は下方を向き刻み目を入れている。口縁部は内側に肥厚している。体部外面にはヘラ描き沈線が13条と多条である。

423は鉢で体部は内湾して立ち上り，口縁部端部は平坦に仕上げている。口縁部外面には彫りの深いヘラ描き沈線を５条巡らせている。外面は底部付近にハケ目が残っており，内面はナデている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
421	弥・甕	*23.2			細・少、微・多	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部やや下に突帯、ヘラ描沈線現存1条	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
422	弥・甕	*14.4			中・少	灰白10YR8/2	ヘラ描沈線13条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
423	弥・鉢	16.0	12.5	6.4	中・多	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線5条	外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

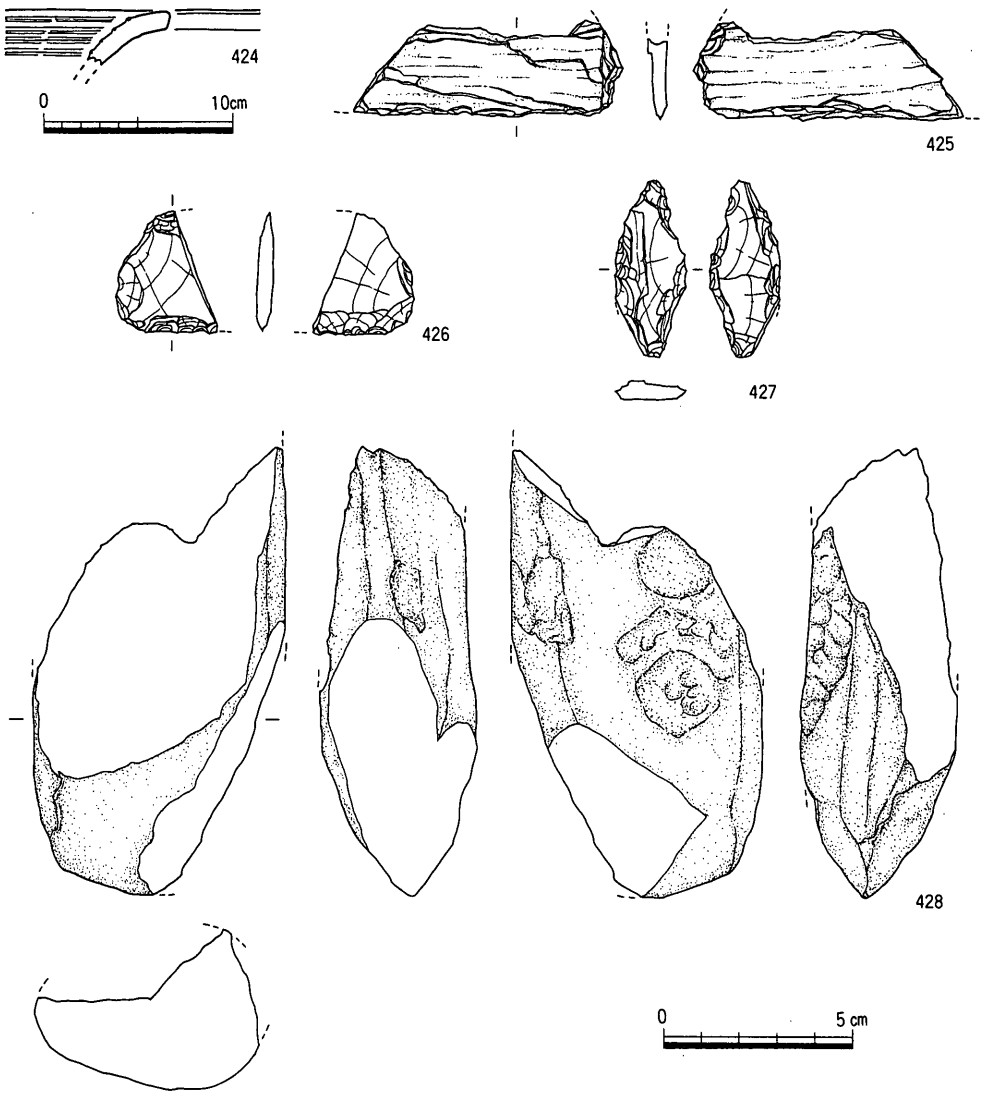
第365図　Ｄ区ＳＫ16出土遺物（１/４）

ＳＫ17（第366図）

調査区の西側でＳＨ05の南側に位置する土坑である。平面形は長方形で，長辺1.6m，短辺1.0mで北東－南西方向が長くなっている。深さは10cmで底部は平坦である。埋土は茶褐色粘質土の単一層である。

424は壺の口縁部で，端部は外側に平坦な面を作る。内面に突帯を現存で４条貼り付けている。

425は結晶片岩製の石庖丁で，刃部は直線である。磨き方は弱い。426はスクレイパーで刃部の作りは粗い。427は凸基有茎式の石鏃で，茎部の作り出しは弱い。428は太型蛤刃石斧であるが大部分が欠損もしくは剥離している。刃部は両面から作り出しているが，やや雑な仕上がりである。



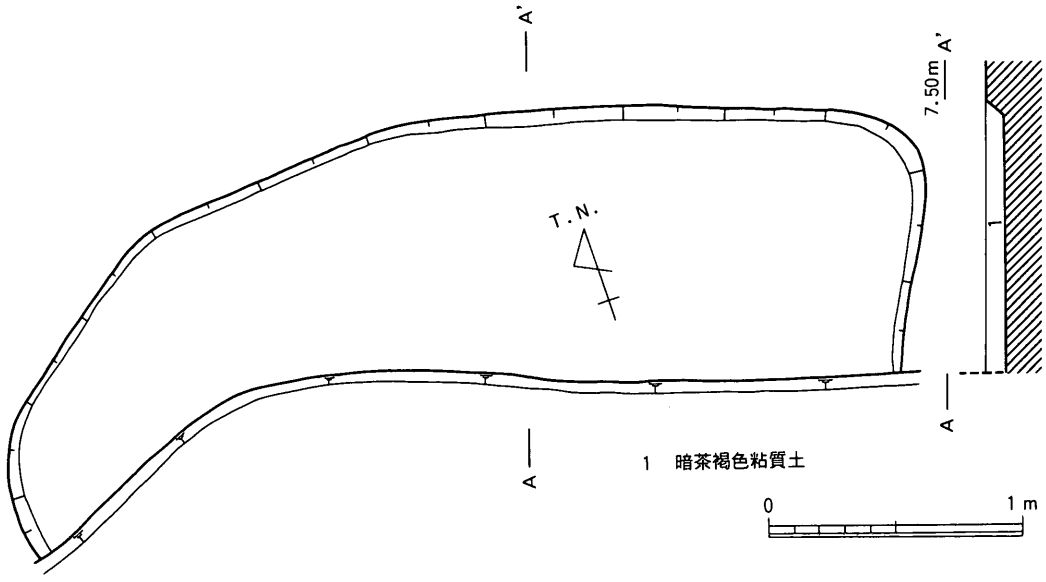
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
424	弥・壷	不能			中・少、細・普	灰白2.5Y8/2	口縁部内面に貼付突帯現存4条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
425	磨製石庖丁	7.1	2.5	0.5	11.5	結晶片岩		
426	スクレイパー	2.7	3.2	0.5	4.3	サヌカイト		
427	石鏃	4.6	1.9	0.6	5.1	サヌカイト	凸基有茎式	
428	太型蛤刃石斧	11.8	6.7	4.1	280.3	(脈岩)安山岩		淡緑色～灰色

第366図　Ｄ区ＳＫ17出土遺物（１/２，１/４）

ＳＫ18（第367図～第368図）

調査区の西端の南壁際で検出した土坑である。土坑の南側部分は調査区外に広がっているので，全体の形は不明である。検出部分での平面形は長方形に近く北東隅は丸みを帯びながらも直角に曲がるが，西側部分は丸くカーブしている。長辺は3.5mで短辺は調査区



第367図　D区ＳＫ18平・断面図（1/30）

内で1.0mである。深さは7cmと浅く，底部は平坦である。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

429・430は壺で，429は口縁部端部の上下に刻み目を施している。430の口縁部端部は平坦になっており，外面にはハケ目が施されている。

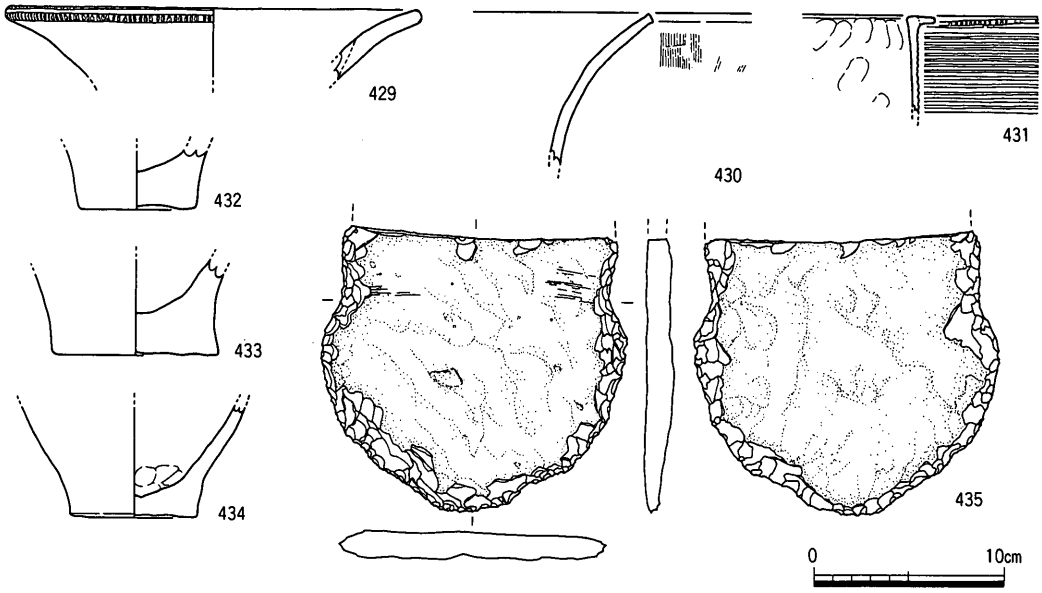
431は逆Ｌ字形口縁の甕で，器壁は全体に薄くなっている。口縁部の内面には指押さえを強く施しているため，若干この部分が内傾気味である。体部は直線的で外面にヘラ描き沈線が13条ある。

432～434は甕の底部と考えられるものである。432・433の底部は肥厚している。434の底部内面には指押さえを行なっている。

435は安山岩製の石鍬で，最大幅16.0cmの大型品である。先端部より11cmほど上の部分で両側縁部はくびれて幅が狭くなっている。この部分に一部擦痕が認めれ，柄の装着痕の可能性がある。すると柄の装着部分と先端部との距離が短いため，刃部と考えた先端部のほうが基端部のほうの可能性が出てくる。しかし周囲を加工して仕上げていることから，図の下側を刃部と考えたい。

ＳＫ19（第369図）

調査区の西側で，ＳＨ05の埋没後にＳＨ05の東側の壁部分に掘り込まれた土坑である。土坑は調査区壁部分で検出したもので，その北側部分は平成３年度調査区との境部分で不明瞭であるが，壁際で収束するようである。全体の形は正確ではないが検出部分の平面形



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
429	弥・壺	21.4			中・多	灰白2.5Y8/2	口縁部端部の上下に刻み目	全体にﾏﾒﾂ	
430	弥・壺	*25.8			中・少	灰黄2.5Y7/2、浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
431	弥・甕	*42.4			細・普	灰黄2.5Y6/2、暗灰黄2.5Y5/2	ヘラ描沈線現存13条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
432	弥・甕			6.0	中・普、細・普	橙7.5Y6/6、橙5YR6/6		全体にﾏﾒﾂ	
433	弥・甕			8.7	中・多	橙2.5YR6/6、黄灰2.5Y6/1		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
434	弥・甕			6.8	中・普	灰白2.5Y8/2		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	

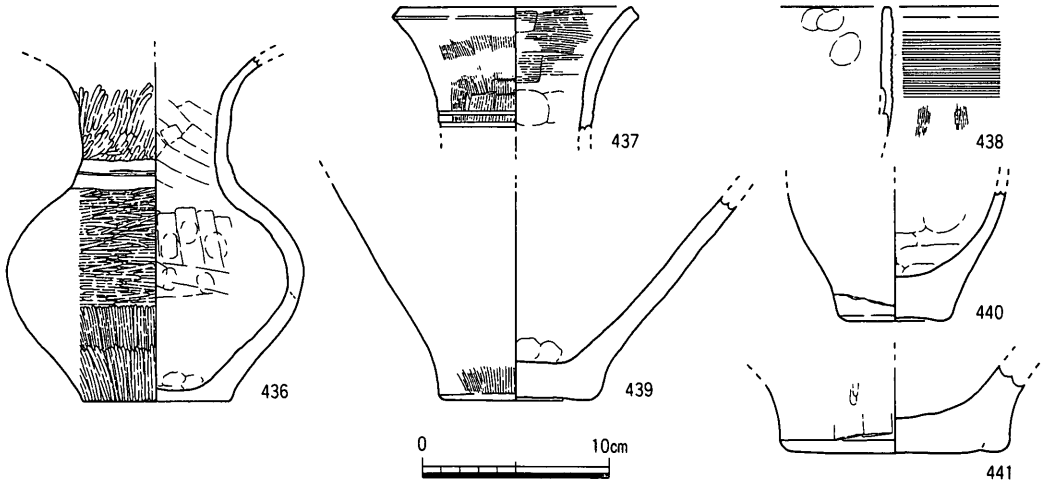
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
435	石鍬	14.7	16.0	1.5	533.0	安山岩	側縁部がくびれる、くびれ部に擦痕	

第368図　Ｄ区ＳＫ18出土遺物（１/４）

は不整形で，西側が丸く膨れている。東側はＳＨ05のラインに沿って直角に曲がっている。長径2.2m，短径は検出部分で1.1mとなっている。深さは28cm前後で底部は西側に向って下っている。埋土は黒褐色粘土の単一層である。

436・437は壺である。436の口縁部は端部が欠損しているが大きく開いている。頸部は凹凸を見せながらもほぼ直立する。体部は中央部分に最大径があり大きく膨らんでいる。底部は安定した平底である。頸部下半には突帯の剥離痕があり，その部分に突帯の下書きの沈線が巡っている。外面は全体に丁寧にヘラミガキを施している。体部上半は横方向，それ以外は縦方向のヘラミガキとなっている。内面は頸部と体部上半に板ナデを施し，他はナデている。437の口縁部は厚手で開き方は弱い。端部は外側に平坦な面を作りナデている。内・外面にハケ目を施し，外面はその後にナデている。頸部にはヘラ描き沈線が現存で２条ある。

438は甕で逆Ｌ字形口縁の外側の突出部分が剥離している。体部外面にはヘラ描き沈線



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
436	弥・壷			7.8	細・・普、中・小	灰黄2.5Y7/2	突帯剥離、突帯の下書き線2条	外面丁寧なヘラミガキ、内面板ナデ・指押え	
437	弥・壷	12.2			中・少、細・普	暗灰黄2.5Y5/2 灰黄2.5Y6/2	頸部にヘラ描沈線現存2条	外面ハケ目→一部ナデ、内面ハケ目・指押え	
438	弥・甕	*30.8			細・多	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線12条	口縁部剥離、外面ハケ目、内面ナデ・指押え	
439	弥・壷			8.5	粗・少、中・多	灰黄2.5Y7/2、黄灰2.5Y4/1		外面ハケ目→ナデ、内面ナデ・指押え	
440	弥・壷			5.0	粗・少、中・多	灰黄褐10YR5/2 浅黄2.5Y7/3		外面ナデ、内面ナデ・指押え	
441	弥・壷			11.2	粗・少、中・多	灰黄褐10YR5/2 にぶい黄橙10YR7/2		外面板ナデ→ヘラミガキ？、内面マメツ	

第369図　D区ＳＫ19出土遺物（1/4）

が12条あり，ハケ目が残っている。

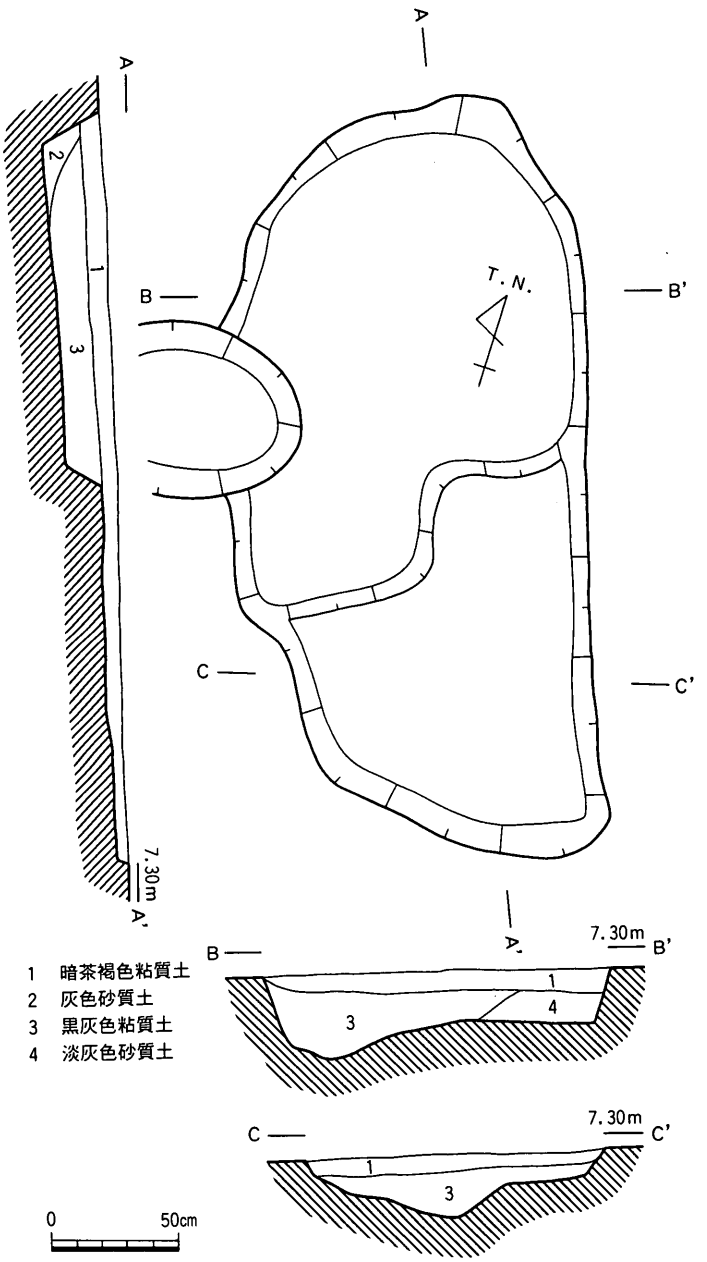
439～441は壺の底部と考えられるものである。439の外面はハケ目を施した後にナデている。440の底部は肥厚し，体部は内湾して立ち上る。441の外面は板ナデの後によく観察出来ないが，おそらくヘラミガキを施しているものと思われる。

ＳＫ20（第370図～第371図）

調査区の中央やや西寄りで，ＳＨ04と重複して検出した土坑である。土坑は弥生時代中期初頭と考えられるＳＨ04の主柱穴に壊されており，ＳＤ03を壊している。平面形は隅丸長方形と長楕円形の中間形態となっている。西側部分はクランク状に屈曲しており，南東コーナーは尖り気味になっている。長径は3.0m，短径は1.4mとなっている。底部は南側部分が一段高くテラス状になっている。深さはテラス部分で６cm，深い部分で20cmである。埋土は上層に暗茶褐色粘質土が，下層の深い部分に黒灰色粘質土が堆積していた。

442は壺である。頸部から口縁部にかけて全体に外反し，口縁部端部は丸く収める。頸部外面にはヘラ描き沈線を８条巡らせ，口縁部外面はナデ，頸部外面にはハケ目を施している。

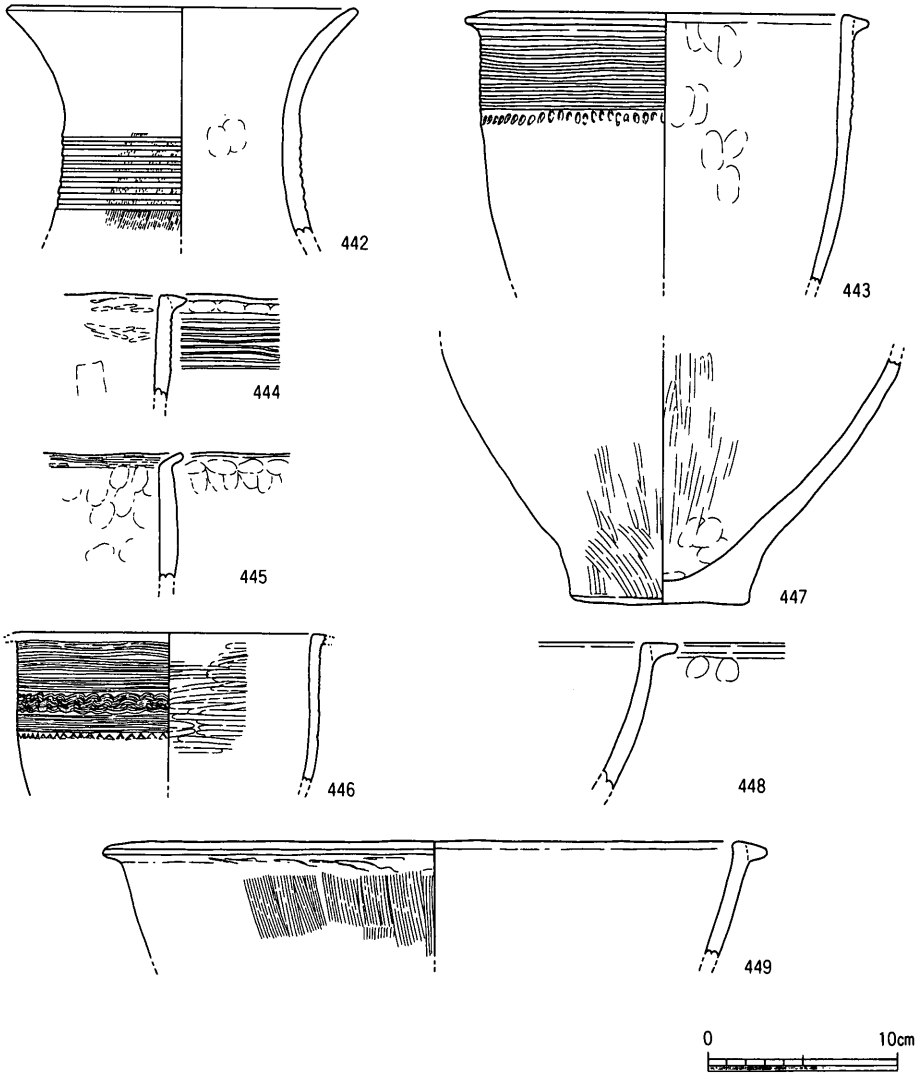
443～446は甕である。443は逆Ｌ字形口縁で，体部は下半で内湾する。外面にはヘラ描き沈線を10条巡らせ，その下に列点文を加えている。444は逆Ｌ字形口縁であるが，口縁部の上下に強く指押さえを行なうため口縁部は歪んでいる。内面にはヘラミガキを施している。445は如意形口縁で，口縁部は体部に比べて薄く鋭く屈曲している。口縁部の外面には指押さえを強く施し内面はハケ目調整である。体部外面は全体にナデている。446は逆Ｌ字形口縁部であるが端部は欠損している。体部外面には４条１単位の櫛描き直線文を合計４単位施し，３単位目と４単位目の間に櫛描き波状文とその下にヘラ描き波状文を加えている。さらに最下段の櫛描き直線文の下のヘラ描き沈線を施し，三角形列点文を加える。内面はヘラミガキを施している。



第370図　Ｄ区ＳＫ20平・断面図（１/30）

447は壺の底部と考えられ，外面にはハケ目の後にヘラミガキを加えている。内面は摩滅しているもののヘラミガキが残っている。底部外面はヘラケズリの後にナデている。

448・449は鉢で，448の体部は内湾気味で外傾している。449の体部は直線的に外傾し，



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
442	弥・壺	18.0			中・普	灰黄2.5Y7/2、浅黄2.5Y7/4	頸部にヘラ描沈線8条	外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面指押え・ﾏﾒﾂ	
443	弥・甕	18.7			粗・少、細・多	灰黄褐10YR5/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線10条、列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	赤色顔料？
444	弥・甕	*12.0			中・少	灰黄褐10YR4/2 灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線8条	口縁部歪む、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・板ﾅﾃﾞ	
445	弥・甕	*22.8			中・少、微・多	にぶい黄橙10YR7/2、浅黄橙10YR8/3		如意形口縁、口縁部外面ﾅﾃﾞ・指押え、口縁部内面ﾊｹ目、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
446	弥・甕	15.0			細・普、微・普	灰黄2.5Y7/2	櫛描文（直線文・波状文）＋ヘラ描沈線＋ヘラ描波状文、三角形列点文	口縁部剥離、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
447	弥・壺			9.4	粗・少、細・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え、底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	
448	弥・鉢	*33.6			細・多	灰黄2.5Y7/2		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
449	弥・鉢	31.4			中・普	黒2.5Y2/1、灰黄褐10YR6/2		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	

第371図　Ｄ区ＳＫ20出土遺物（１／４）

外面にはハケ目を施す。口縁部直下には板状工具の木口痕が残っている。

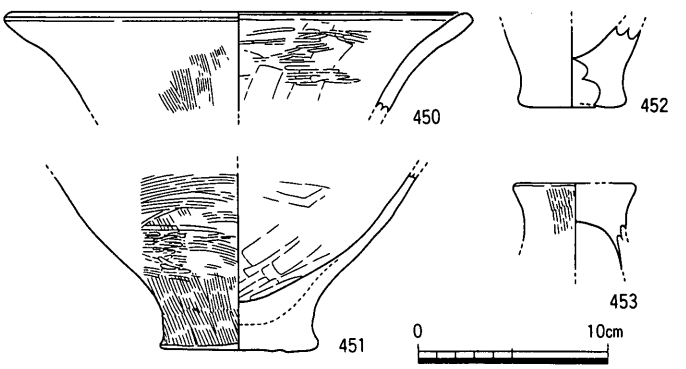
ＳＫ21（第372図～第373図）

調査区西側の南壁際で，ＳＫ18とＳＤ04の間で検出した土坑である。土坑の南側部分は調査区外に広がるので全体の形は不明である。検出した部分での平面形は半楕円形で，長径2.6m，検出部分での短径0.75m，深さは10cm前後で，底部は緩く東に向って下っている。埋土は上下２層で，遺物は下層の灰褐色砂混じり粘質土から主に出土した。

450は壺の口縁部で，端部付近が若干肥厚している。端部の内面には剥離痕があり，おそらく突帯を貼り付けていたものと思われる。外面はハケ目，内面は板ナデの後にヘラミガキを施している。

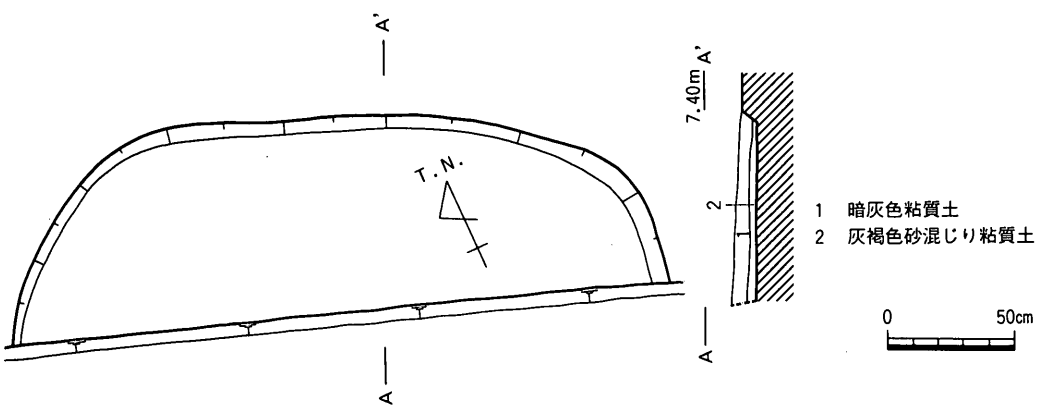
451・452は壺および甕の底部で，451の底部は突出し，底部外面はヘラケズリである。体部外面はハケ目の後にヘラミガキを加えている。

453は蓋のつまみ部である。

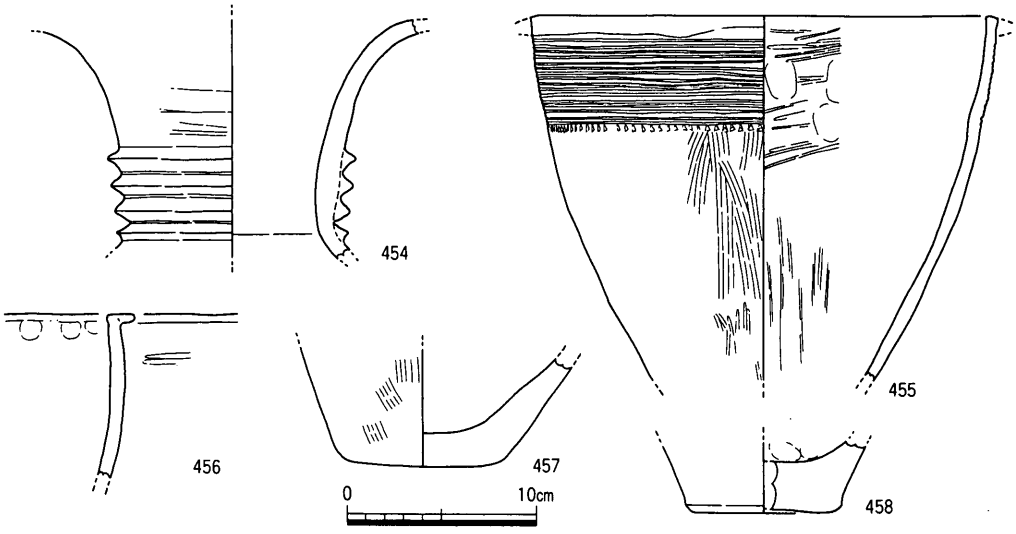


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
450	弥・壷	24.2			細・少、微・普	浅黄橙10YR8/3、にぶい黄2.5Y6/3		口縁部端部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
451	弥・壷			8.2	中・少	浅黄2.5Y7/3、黄灰2.5Y5/1		外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面板ﾅﾃﾞ、底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ	
452	弥・甕			5.7	中・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰黄褐10YR6/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
453	弥・蓋	つまみ径6.1			粗・少、中・少	橙2.5YR6/6		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	

第372図　Ｄ区ＳＫ21出土遺物（1/4）



第373図　Ｄ区ＳＫ21平・断面図（1/30）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
454	弥・壺				中・普、細・普	にぶい黄橙10YR6/4、浅黄2.5Y7/3	頸部に複条貼付突帯（4条1単位）	外面板ﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
455	弥・甕	23.6			細・普	橙5YR6/6、にぶい黄橙10YR6/3	ヘラ描沈線16条、三角形列点文	口縁部剥離、外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え	
456	弥・甕	*25.0			中・少	にぶい橙7.5YR7/4、橙5YR6/8		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
457	弥・壺			8.4	中・多	にぶい橙7.5YR7/4、灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
458	弥・壺			8.2	中・多	灰白2.5Y8/2、灰黄褐10YR6/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

第374図　Ｄ区ＳＫ22出土遺物（１/４）

ＳＫ22（第374図）

調査区の東側でＳＤ02の北側に隣接する土坑である。平面形は円形で，直径90cm，深さ８cmとなっている。断面は逆台形で底部は平坦である。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

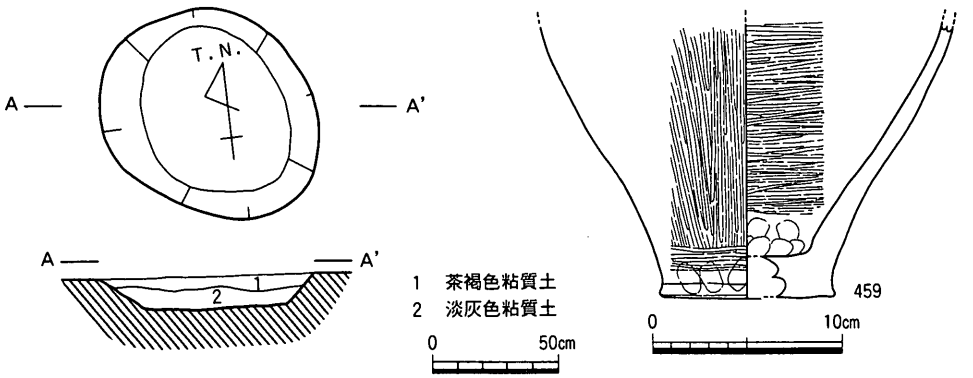
454は壺で，口縁部は端部は欠損しているが大きく開く。頸部には４条１単位の複条貼付突帯を巡らせている。全体にナデている。

455・456は逆Ｌ字形口縁の甕であるが，455は口縁部の外側は剥離している。体部は外傾しており，外面のヘラ描き沈線は16条と非常に多条となっている。その下には三角形列点文を加えている。体部外面はハケ目の後に下半にヘラミガキを加えている。内面はヘラミガキである。456の体部は内湾しており，外面にはヘラミガキが僅かに認められる。

457・458は壺の底部と考えられるもので，457の外面はハケ目の後にナデており，底部は若干丸みを帯びている。

ＳＫ23（第375図）

調査区の西側で，ＳＫ18とＳＸ01の間で検出した土坑である。平面形は楕円形で，長径



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
459	弥・壺			9.2	粗・少、細・多	浅黄2.5Y7/3		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、指押え	

第375図　D区ＳＫ23平・断面図（1/30），出土遺物（1/4）

90cm，短径75cmと北西－南東方向に長くなっている。深さは14cmで底部は平坦で，西側の掘り込みの角度は浅くなっている。埋土は上下２層に分かれ，下層の淡灰色粘質土層から遺物が少量出土した。

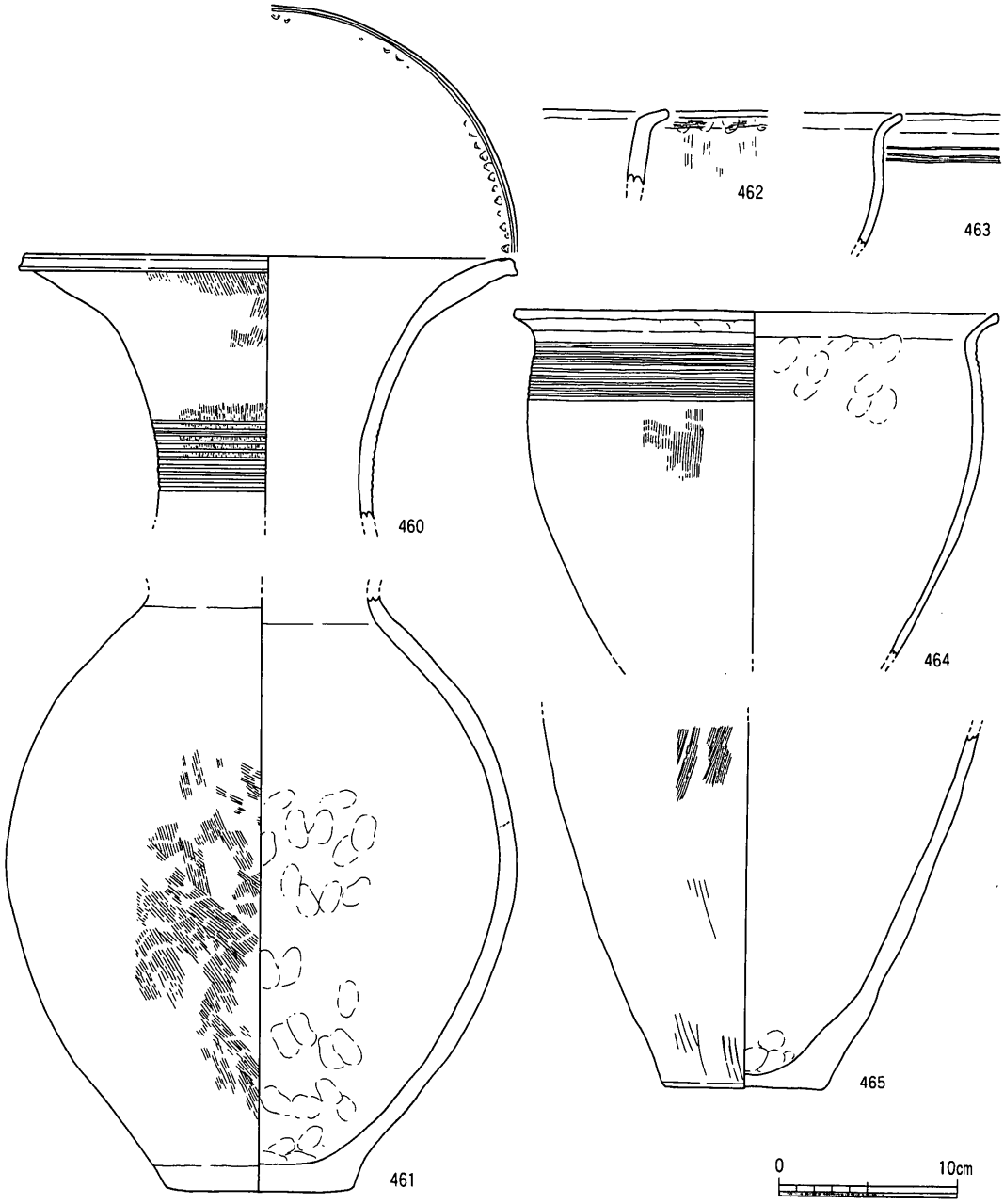
459は壺の下半部と考えられ，底部は肥厚している。外面はヘラミガキを丁寧に施すが底部付近のみ横方向のヘラミガキとなっている。内面もヘラミガキを施すが底部までは及んでいない。

ＳＰ04～12（第376図～第378図）

建物の主柱を構成しない，単独のものである。この中でＳＰ06はＳＨ03の内側の柱穴と考えたものに壊されており，位置的には内側の円周上にあるが，ＳＨ03の箇所で述べたようにＳＨ03の柱穴とは考えなかったものである。平面形はＳＰ06が長方形，ＳＰ07が方形に近い以外は基本的に円形である。直径は15～60cmで，深さは10～20cmである。埋土はいずれも単一層で，ＳＰ04～08・11・12が暗茶褐色粘質土，ＳＰ09・10が茶褐色粘質土であった。

463～465・469・482がＳＰ04出土，481がＳＰ05出土，462がＳＰ06出土，467がＳＰ07出土，476がＳＰ08出土，466・472がＳＰ09出土，478がＳＰ10出土，461・477・479・480がＳＰ11出土，460・468・470・471・473～475がＳＰ12出土である。

460・461は壺である。460の口縁部は頸部に比べて肥厚しており，大きく開く。口縁部端部は強いナデにより凹線状になっており，下端部は少し突出している。口縁部内面には三角形列点文が施されている。頸部にはヘラ描き沈線が10条巡り，外面は全体にハケ目を施し，内面はナデているが下半は摩滅している。461は壺の体部である。体部は長楕円形

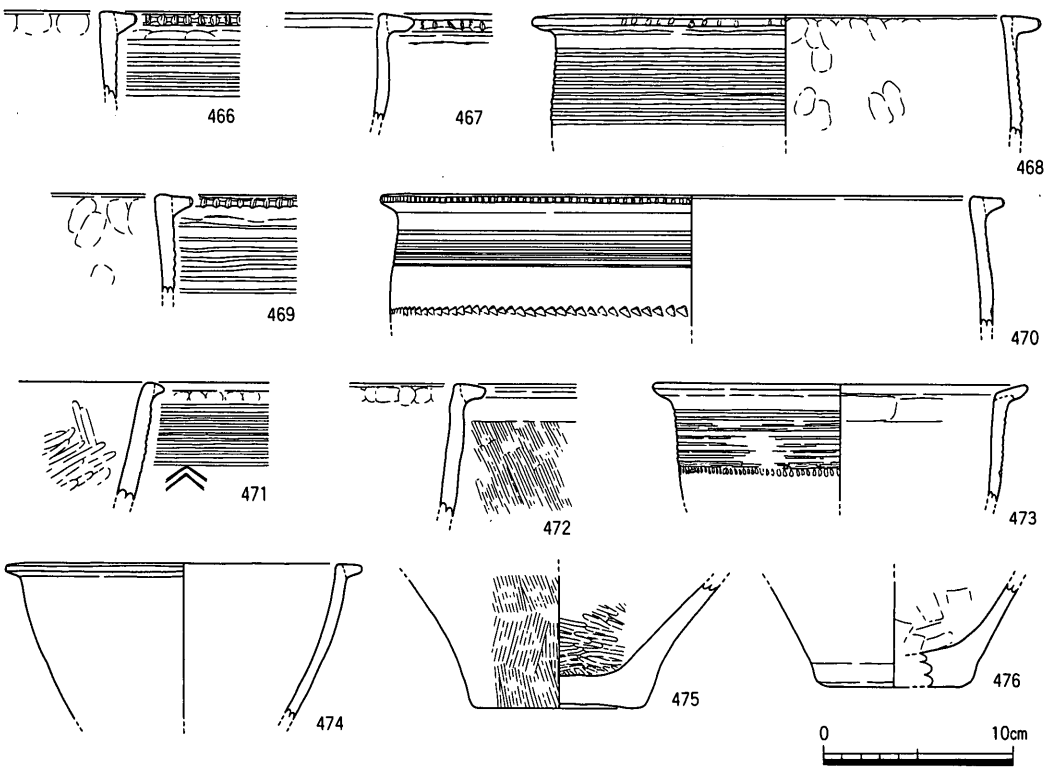


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
460	弥・壺	26.8			粗・少、中・普	灰黄2.5Y7/2、にぶい黄橙10YR7/4	口縁部内面に三角形列点文、頸部にヘラ描沈線10条	口縁部端部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	SP12
461	弥・壺			10.5	粗・普、中・多、細・多	灰白2.5Y8/2、灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	SP11
462	弥・甕				粗・少、中・少、微・普	灰白2.5Y8/2、浅黄2.5Y7/4		如意形口縁、口縁部指押え→外面ﾊｹ目、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	SP06
463	弥・甕	*17.0			中・多	にぶい黄橙10YR7/2、灰白10YR8/2	ヘラ描沈線3条	如意形口縁、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	SP04
464	弥・甕	26.8			中・多、細・多	褐灰10YR4/1、にぶい黄橙10YR6/3	ヘラ描沈線10条	如意形口縁、口縁指押え・ﾏﾒﾂ、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	SP04
465	弥・甕			8.8	粗・少、細・多	浅黄橙10YR8/3、にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾊｹ目（2種類の原体）、内面ﾅﾃﾞ・指押え	SP04

第376図　Ｄ区ＳＰ04～12出土遺物（１）（１/４）

で最大径は中央部分にくる。外面にはハケ目を施し，内面は下半部を中心に指押さえを行なう。底部は安定した平底である。

462～464は如意形口縁の甕である。462の口縁部は内面に稜を形成して鋭く屈曲する。口縁部外面にはハケ目を施し，体部外面もハケ目となっている。463は口縁部から体部にかけてＳ字状にカーブする。体部外面にはヘラ描き沈線が３条巡っている。464は口縁部



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
466	弥・甕	*31.2			中・普	にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線現存7条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	SP09
467	弥・甕	*50.8			中・普	黄灰2.5Y5/1、灰黄2.5Y7/2	口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	SP07
468	弥・甕	22.6			中・普、細・多	浅黄2.5Y7/3、暗灰黄2.5Y4/2	ヘラ描沈線10条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	SP12
469	弥・甕	*23.2			細・少	灰白2.5Y8/1、にぶい黄橙10YR7/3	ヘラ描沈線現存7条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	SP04
470	弥・甕	29.2			粗・少、細・多	灰黄2.5Y7/2、にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線6条、三角形列点文、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	SP12
471	弥・甕	*25.0			中・普、細・普	灰黄褐10YR4/2灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線10条、ヘラ描山形文	口縁部ﾏﾒﾂ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	SP12
472	弥・甕	*21.0			中・少、細・多	灰黄褐10YR6/2にぶい黄橙10YR7/2		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	SP09
473	弥・甕	16.4			中・少、細・普	灰白2.5Y8/2、	ヘラ描沈線10条、列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	SP12
474	弥・甕	16.0			粗・少、中・多	橙2.5YR6/8、橙5YR6/6		全体にﾏﾒﾂ	SP12
475	弥・壷			9.0	粗・少、中・普	明赤褐2.5Y7/6にぶい黄橙10YR6/3		外面粗いﾊｹ目、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	SP12
476	弥・壷			8.1	粗・少、中・多	灰黄褐10YR6/2褐灰10YR4/1		外面ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ	SP08

第377図　Ｄ区ＳＰ04～12出土遺物（２）（１/４）

は「ク」字状に屈曲し，端部は摩滅しているため刻み目の有無は不明である。体部は全体に内湾している。外面は摩滅しているため調整等の観察が困難であるが，ヘラ描き沈線が10条巡っていると思われ，ハケ目も僅かに残っている。内面は上部に指押さえが認められる他はナデている。465は甕の下半部で，体部は直線的に外傾している。外面には２種類の原体によるハケ目を施している。

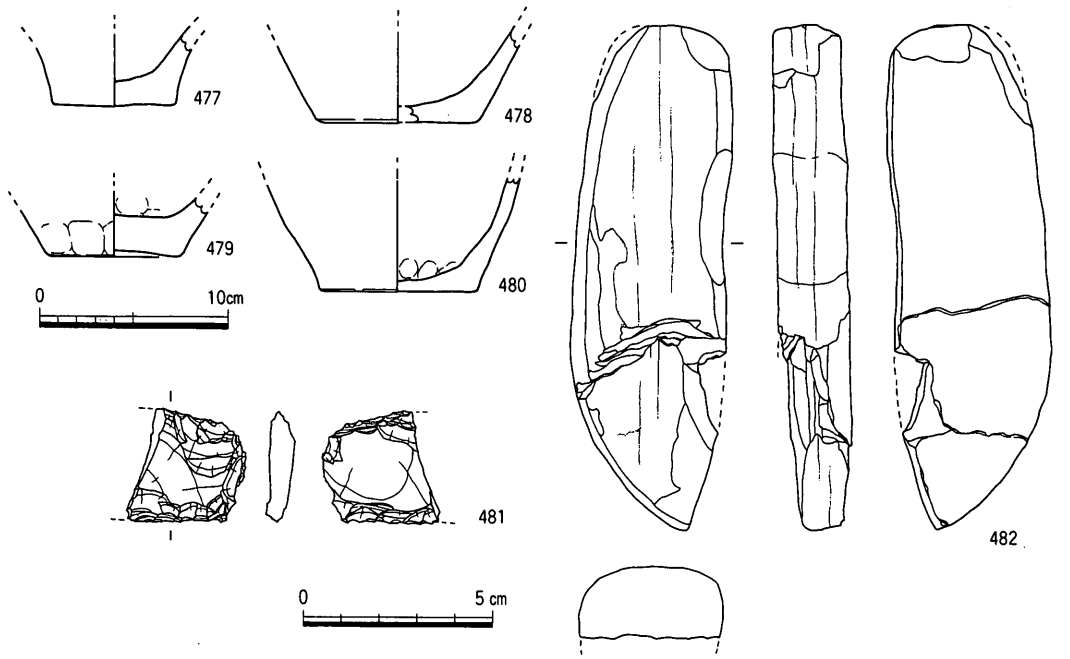
466～474は逆Ｌ字形口縁の甕である。466は口縁部端部に幅広の刻み目を施している。口縁部外面の直下に指先を回転させてナデるような押えを行なっている。体部は直線的でヘラ描き沈線が現存で７条ある。467は口縁部内面を強くナデている。468の体部外面にはヘラ描き沈線が10条巡る。469の口縁部端部の刻み目は彫りが深い。体部は直線的でヘラ描き沈線現存７条の下にハケ目が残る。470の体部外面にはヘラ描き沈線が６条巡っており，間隔を開けて三角形列点文を加えている。471は口縁部の外への突出は弱く小さくなっている。体部は直線的に外傾し，外面はヘラ描き沈線10条の下にヘラ描き山形文を加えている。内面にはヘラミガキを施している。472は口縁部直下の外面を強くナデており，内面には強い指押さえを施す。体部外面は全体にハケ目となっている。473の口縁部は上部に粘土を加えて横に突出させ，逆Ｌ字形に仕上げる。端部は上方を向くが摩滅しており，刻み目の有無は不明である。体部外面にはヘラ描き沈線10条の下に列点文を加える。474の体部は内湾気味に大きく外傾する。全体に摩滅している。

475～480は壺および甕の底部である。475の底部は若干の上げ底で，外面には粗いハケ目を施し，内面には丁寧にヘラミガキを施す。476の内面は板ナデである。479の底部は肥厚しており，上げ底である。内・外面に指押さえを施している。480の底部は薄いが，立ち上り部は肥厚している。

481は楔形石器で，向かい合う両辺に調整を加えている。断面に両極打撃の痕跡が認められる。482は結晶片岩製の柱状片刃石斧である。縦方向に側面が剥離している。基部の抉りは弱く前主面側の刃面は大きく弧を描き，刃部は鋭くなっている。

ＳＸ01（第379図～第396図）

調査区の西端の北壁際で検出した落ち込み状遺構である。平面形は不整形で南側部分は部分的に窪んでいる。西側部分は大きく弧を描いている。東端部分をＳＨ05に，北西端をＣ区から続いている溝（Ｃ区ＳＤ04）によりそれぞれ壊されている。遺構の北から北東部分にかけては平成３年度調査区に続いて行く。検出部分での東西方向の最大長は13.0m，南北方向の最大長は7.2mと東西方向に長い大きな遺構である。底部は東西方向は平坦で



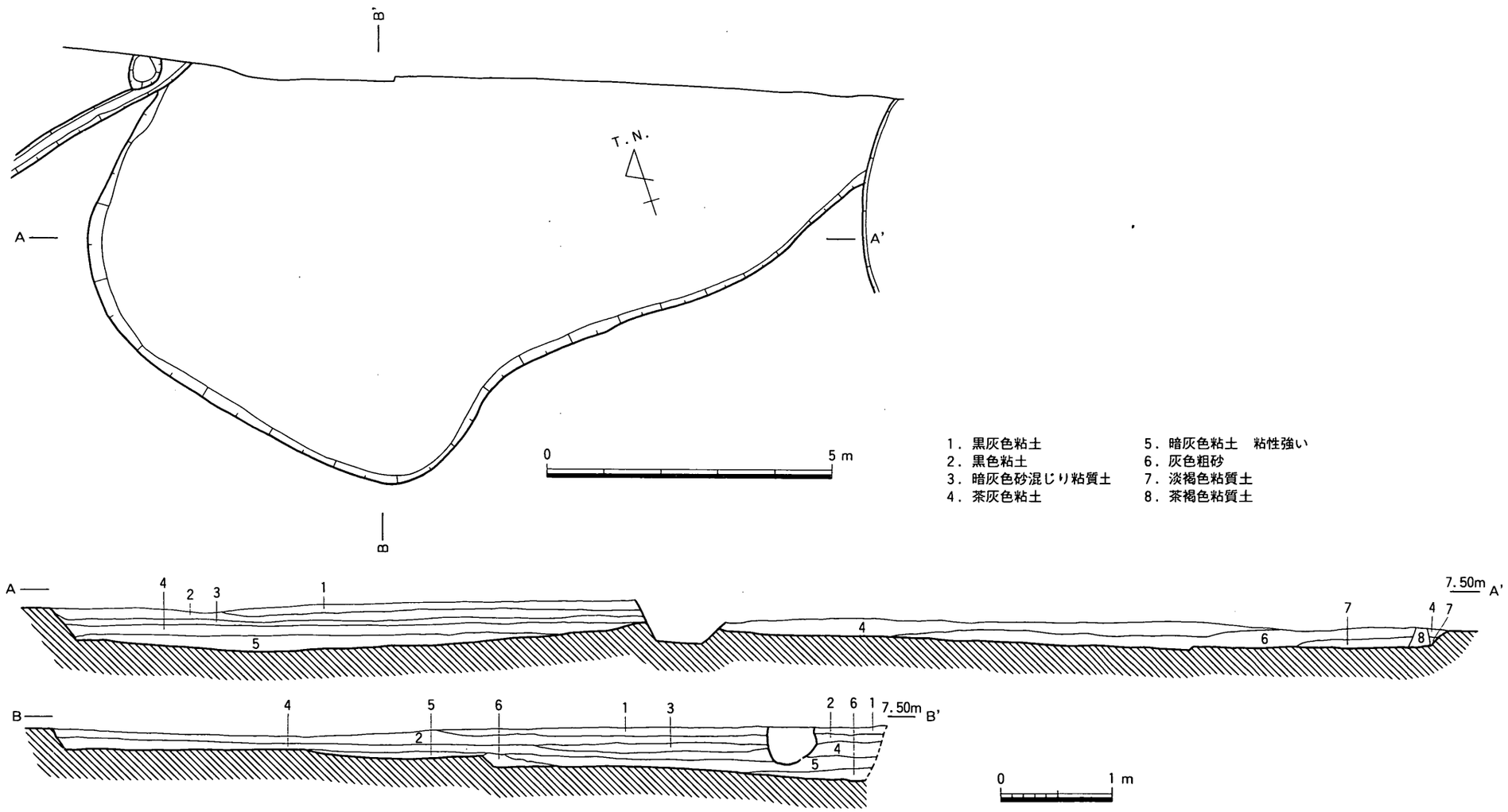
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
477	弥・甕			6.5	中・普	浅黄2.5Y7/4		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	SP11
478	弥・甕			8.6	粗・少、中・普	明赤褐5YR5/6		全体にﾏﾒﾂ	SP10
479	弥・甕			7.0	中・多	浅黄2.5Y7/3		外面指押え、内面指押え	SP11
480	弥・甕			8.4	中・普	暗灰黄2.5Y5/2 灰黄2.5Y6/2		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	SP11

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
481	楔形石器	3.1	2.9	0.7	6.9	サヌカイト	両極打撃の痕跡有り	SP05
482	柱状片刃石斧	13.1	4.1	1.9	180.7	結晶片岩	抉り有り	SP04

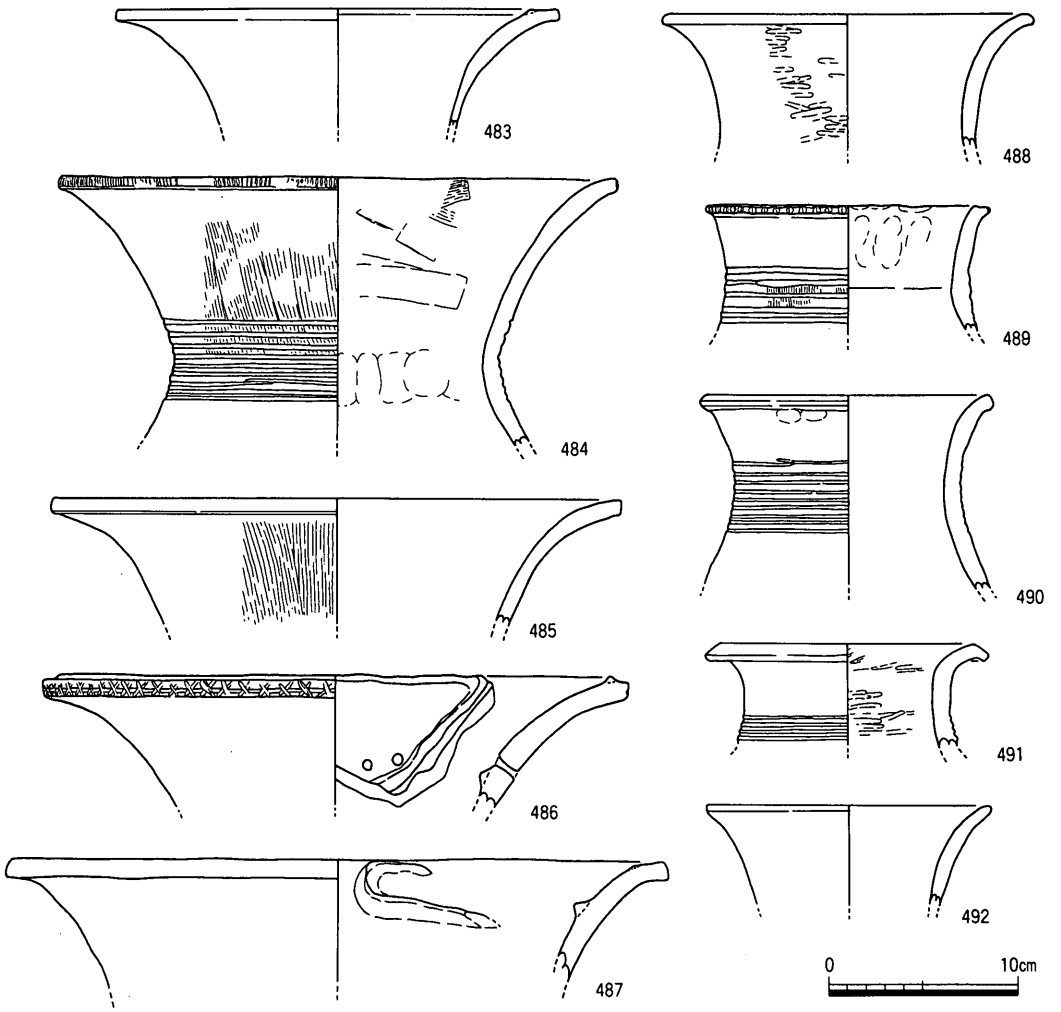
第378図　D区ＳＰ04～12出土遺物（３）（１/２，１/４）

あるが，南北方向は中央部分で一段低くなって緩やかに北に向って下って行く。深さは南側の浅い部分で20cm，北側壁際では50cm，北西部分では40cmになっている。また中央部分から北東部分にかけては攪乱を受けて上部が削平されている。埋土は上部に黒色系の粘土が堆積しており，最下層は部分的には灰色粗砂があるが，粘性の強い暗灰色粘土が堆積している。遺物は多量に出土しており，住居にしては不整形で大きすぎ柱穴等もないことから，遺物の廃棄場としての機能を想定しておきたい。

483～515は壺である。483は口縁部に比べて頸部の器壁が薄くなっている。口縁部内面に貼付突帯が１条巡っている。484の口縁部は頸部から大きく開き，端部には刻み目を入れている。外面には粗いハケ目を施し，内面にはハケ目の後に板ナデを施している。486は口縁部内面に端部付近から下方に向って弧を描く貼付突帯が巡っている。また口縁部には円形の穿孔が２個ある。口縁部端部には沈線の上から「×」状の刻み目を施している。487は口



第379図　Ｄ区ＳＸ01平面図（１/100），断面図（１/50）

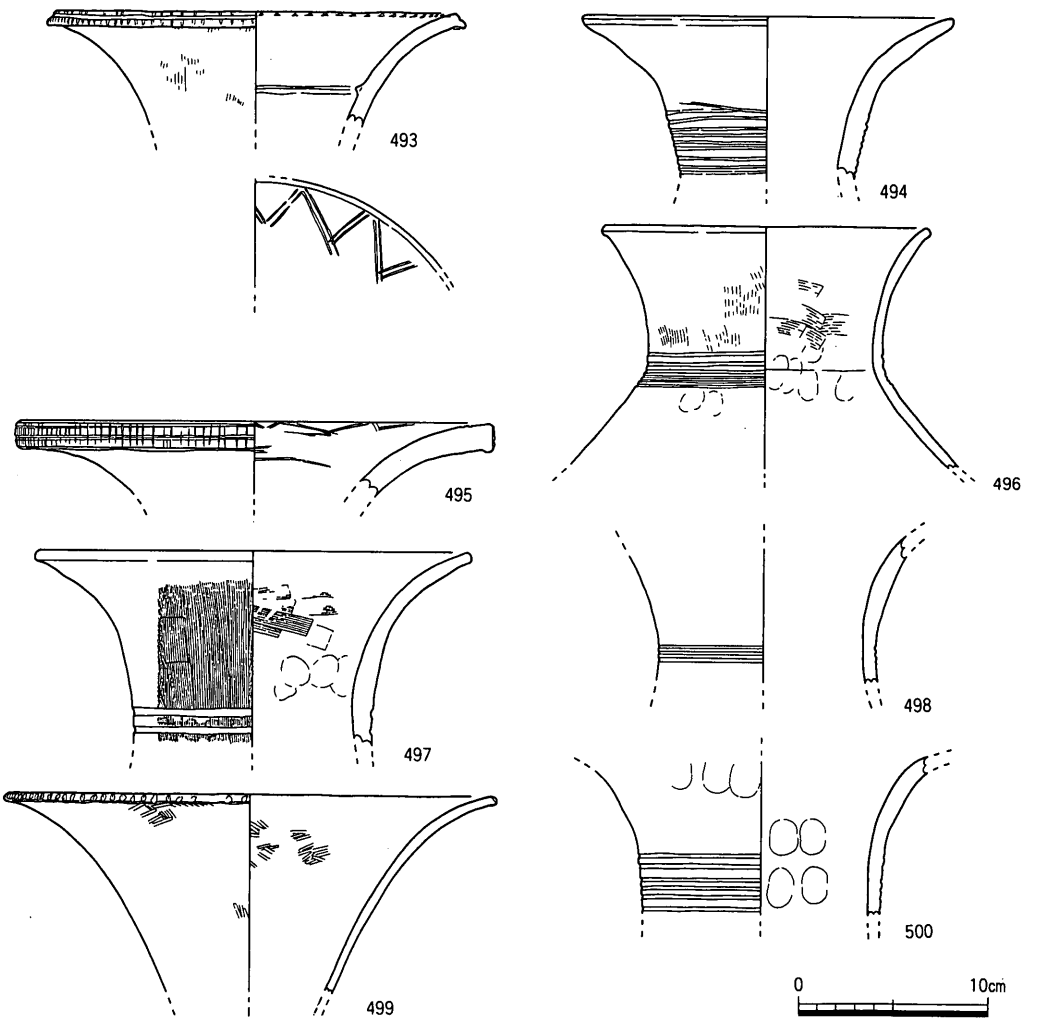


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
483	弥・壺	23.2			中・多	灰黄2.5Y7/2	口縁部内面に貼付突帯1条	全体にﾏﾒﾂ	
484	弥・壺	29.3			中・普	灰黄2.5Y7/2、浅黄2.5Y7/3	頸部にヘラ描沈線9条、口縁部端部刻み目	外面粗いﾊｹ目、内面ﾊｹ目→板ﾅﾃﾞ・指押え	
485	弥・壺	29.8			中・少、細・普	灰黄褐10YR6/2 褐灰10YR6/1		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
486	弥・壺	31.0			中・少、細・普	灰白10YR7/1、灰白10YR8/2	口縁部内面に貼付突帯1条 口縁部端部にヘラ描沈線1条→斜め十字状のヘラ描文	口縁部に円形の穿孔2個、全体にﾏﾒﾂ	
487	弥・壺	34.2			中・多	灰白2.5Y8/1	口縁部内面に貼付突帯1条	全体にﾏﾒﾂ	
488	弥・壺	19.0			中・少	にぶい黄2.5Y6/3		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
489	弥・壺	13.4			中・少、細・多	灰黄2.5Y7/2、灰白2.5Y8/2	頸部にヘラ描沈線現存5条、口縁部端部刻み目	口縁部強いﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
490	弥・壺	14.7			粗・普、細・普	浅黄2.5Y7/3、橙5YR6/6	頸部にヘラ描沈線9条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
491	弥・壺	13.4			細・多	灰黄2.5Y7/2	頸部に削出突帯（沈線現存3条）	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
492	弥・壺	15.0			粗・少、中・多	にぶい橙7.5YR7/4、浅黄橙7.5YR8/3		全体にﾏﾒﾂ	

第380図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（１）（１/４）

縁部内面に弧を描いて反転する貼付突帯がある。488の口縁部は外反し，外面にはヘラミガキを施している。489の口縁部は頸部から緩く外反し，端部は外側につまみ出しており，刻み目を入れている。口縁部端部はつまみ出す時に強くナデており，部分的に潰れている。頸部にはヘラ描き沈線が現存で５条あり，外面にはハケ目を施している。490の口縁部端部は若干玉縁状に膨らんでいる。491の口縁部は上半で大きく外反し，端部を下方に拡張している。頸部には削出突帯を施している。内面はヘラミガキである。492の口縁部端部は丸く収めている。493の口縁部は大きく外反し端部を若干外側につまみ出している。口縁部内面の端部付近に三角形列点文を施しており，頸部に近い部分に貼付突帯を巡らせている。外面はハケ目の後ナデている。494の頸部は外傾し口縁部端部は丸く収めている。ヘラ描き沈線が現存で９条巡っているが，一番上の沈線は乱れている。495の口縁部下端部は下方に肥厚しており，端部外面には縦方向の刻み目を入れた後に沈線を巡らせている。内面には半截竹管による山形文を施している。496は口縁部は緩く外反し，端部はナデにより若干屈曲している。内・外面ともにハケ目が見られる。497の口縁部は大きく外反し，外面には丁寧にハケ目を施す。口縁部はハケ目の後にナデている。頸部には太いヘラ描き沈線が現存で２条巡っている。498は外面は全体に摩滅しているが，頸部にヘラ描き沈線が３条巡っている。499の口縁部は大きく開き，頸部は欠損しているが細いものと思われる。口縁部端部には刻み目を施し，口縁部の内・外面は摩滅しているもののヘラミガキが見られる。500は頸部にヘラ描き沈線が６条現存している。501の口縁部は短く外反し，体部には張りがない。頸部と体部の境には粘土の接合痕が残っている。外面は全体に摩滅しているが，体部内面は全体に板ナデとなっている。502は頸部からそのままなだらかに体部に至るが，頸部と体部の境部分の内面には強く指押さえを行なっている。503の体部は中央部分で屈曲して最大径が来ている。頸部と体部にそれぞれヘラ描き沈線が２条巡っている。外面はヘラミガキとなっており，内面の下半部には板ナデを施している。底部は安定した平底である。504の体部は全体に丸くなっている。505の体部は長細く中央部分に最大径がある。体部は中央部分が厚くなっており，下半部は薄い。外面にはハケ目が施されており，内面は頸部と体部中央部分に指押さえが顕著である。底部は安定した平底である。506の口縁部は上部が欠損しているが，頸部から大きく開くものと思われる。頸部にはヘラ描き沈線９条とその下に縦長の列点文が巡っている。体部は均整のとれた楕円形で，中央部分に最大径がある。体部中央には貼付突帯が１条巡り，突帯の上下を強くナデている。頸部外面にはハケ目を施し，体部外面はハケ目の後にヘラミガキを丁寧に加えている。内面は全体にナデているが，

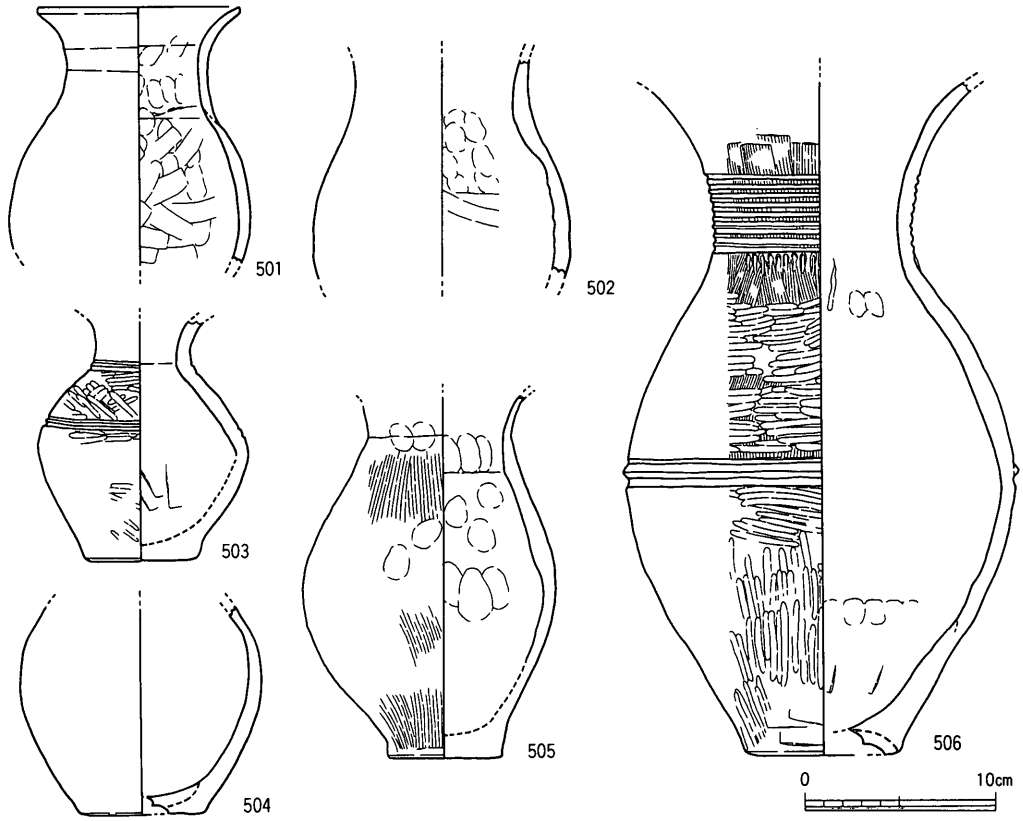
底部付近には板ナデの痕跡がある。507は口縁部端部が欠損しているものの全体に大きく開く。頸部にはヘラ描き沈線文の間に三角形列点文を配置している。508は頸部にヘラ描き沈線が現存で８条あるが，一番上の沈線は乱れている。全体にマメツしているが，内面



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
493	弥・壷	21.1			中・少、細・普	黄灰2.5Y6/1、黄灰2.5Y5/1	口縁部内面に貼付突帯1条と三角形列点文	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
494	弥・壷	19.6			粗・少、微・多	灰白2.5Y7/1	頸部にヘラ描沈線現存9条	全体にﾏﾒﾂ	
495	弥・壷	24.6			細・多	にぶい黄橙10YR6/4、浅黄2.5Y7/3	口縁部内面に半截竹管山形文、口縁部端部刻み目→ヘラ描沈線1条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
496	弥・壷	16.9			中・普、細・多	灰黄2.5Y7/2	頸部にヘラ描沈線6条	外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ	
497	弥・壷	22.6			中・少、細・普	灰黄褐10YR6/2暗灰黄2.5Y5/2	頸部にヘラ描沈線現存2条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・指押え	
498	弥・壷				粗・少、中・普	灰白10YR8/2	頸部にヘラ描沈線3条	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
499	弥・壷	25.4			中・普、細・普	灰黄褐10YR6/2灰黄褐10YR4/2	口縁部端部刻み目	外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
500	弥・壷				中・普	浅黄2.5Y7/3、	頸部にヘラ描沈線現存6条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

第381図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（２）（１/４）

にヘラミガキが少し残っている。509は頸部の外傾の度合いが強く，外面にヘラ描き沈線が５条巡り，沈線の丁度裏側に貼付突帯が１条ある。510の頸部は内傾しており，上部にヘラ描き沈線が現存で１条ある。体部上半は張りが弱く，ヘラ描き沈線が７条巡っているがナデのために沈線の一部が潰れている。外面にはヘラミガキを施し，内面は指押さえとナデを行なっている。511の頸部は細く，内・外面にハケ目を施している。512は頸部の貼付突帯の上に２本１単位の棒状浮文が現存で２単位ある。513は体部のヘラ描き沈線が15条と多条になっている。内・外面ともにヘラミガキとなっている。514は大きめの刻み目を入れた貼付突帯の間にヘラ描き沈線を３条施している。515は体部に櫛描き直線文と波状文が施されている。

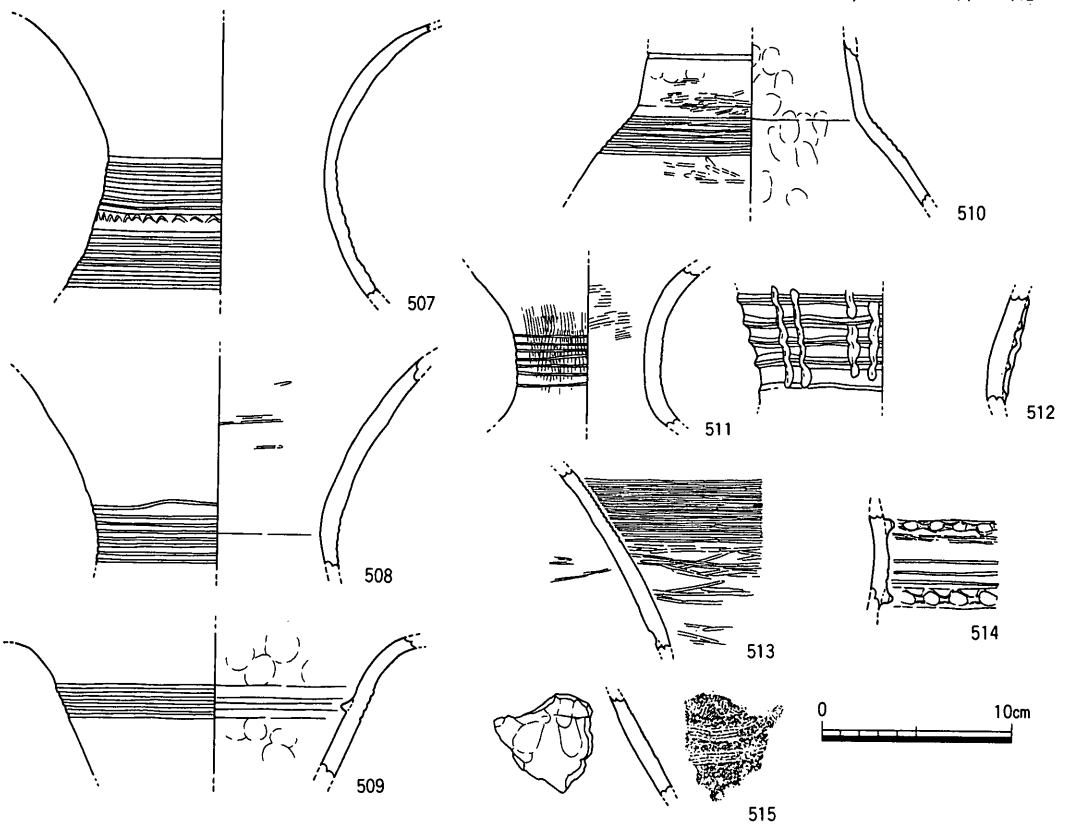


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
501	弥・壷	10.5			細・多、微・多	灰白2.5Y7/1		外面ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
502	弥・壷				中・少	暗灰黄2.5Y5/2 灰黄2.5Y6/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
503	弥・壷			5.9	中・少、細・多	灰黄2.5YR7/2	頸部にヘラ描沈線2条、体部にヘラ描沈線2条	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ	
504	弥・壷			6.6	中・多	浅黄橙7.5YR8/4、淡橙5YR8/3		全体にﾏﾒﾂ	
505	弥・壷			6.0	中・少、細・多	灰白2.5Y7/1、黒2.5Y2/1		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
506	弥・壷			8.2	中・少、細・多	にぶい黄2.5Y6/3	頸部にヘラ描沈線9条、軸長列点文、体部に貼付突帯1条	頸部外面ﾊｹ目、体部外面ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押え・板ﾅﾃﾞ	

第382図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（３）（１/４）

516～566は甕で，このうち516～521は如意形口縁の甕，522～566は逆Ｌ字形口縁の甕である。

516は口縁部端部に刻み目を入れ，体部にはやや間隔の開いたヘラ描き沈線が現存で３条ある。517は口縁部外面を強くナデており，端部には刻み目を入れる。体部外面にはヘラ描き沈線が現存で11条と多条である。518の口縁部端部は真横を向き刻み目を入れている。口縁部は全体に歪んでいる。519の体部外面のヘラ描き沈線は８条であるが，下の２条は乱れ

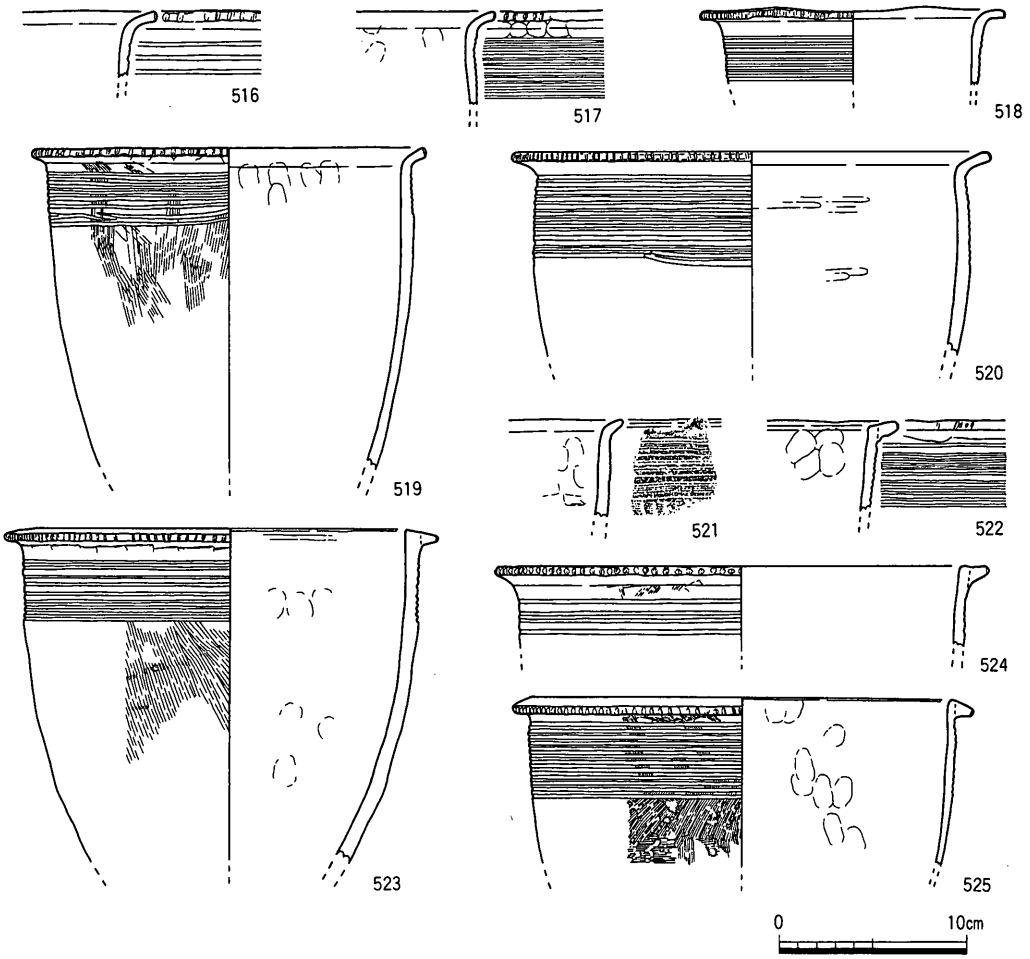


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
507	弥・壷				中・多	灰白2.5Y8/2	頸部にヘラ描沈線7条＋三角形列点文＋ヘラ描沈線現存8条	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
508	弥・壷				粗・少、中・多	灰白2.5Y8/2、灰黄2.5Y7/2	頸部にヘラ描沈線現存8条	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ	
509	弥・壷				中・普、微・普	褐灰10YR4/1	頸部内面に貼付突帯1条、頸部にヘラ描沈線5条	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	Ｂ－160と類似
510	弥・壷				中・少、細・多	灰黄2.5Y6/2	頸部にヘラ描沈線現存1条、体部上半にヘラ描沈線7条	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
511	弥・壷				粗・少、中・普	灰白10YR8/2	頸部にヘラ描沈線7条	外面ﾊｹ目、内面ﾊｹ目	
512	弥・壷				中・普	灰白2.5Y8/2、にぶい黄橙10YR7/4	頸部に貼付突帯現存4条＋2本1単位の棒状浮文現存2単位	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
513	弥・壷				粗・少、細・普	にぶい黄2.5Y6/3、浅黄2.5Y7/3	体部にヘラ描沈線15条	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
514	弥・壷				細・多	灰黄褐10YR5/2にぶい黄褐10YR5/3	貼付突帯2条（刻み目）の間にヘラ描沈線3条	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
515	弥・壷				粗・普、細・少	灰黄2.5Y7/2	櫛描文（直線文･波状文）	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

第383図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（４）（１/４）

ている。外面のハケ目は口縁部直下まで及んでいる。520の口縁部は長く，端部には刻み目を入れている。体部のヘラ描き沈線は12条で，下の２条は重ねるように引いている。内面にはヘラミガキが見られる。体部は若干内湾気味である。521の体部外面の施文は，櫛描き直線文の上下にヘラ描きの直線文を引いている。またヘラ描き直線文の２本目と３本目の間は半截竹管による２単位分の直線文となっている。また一番下には簾状文を加えている。

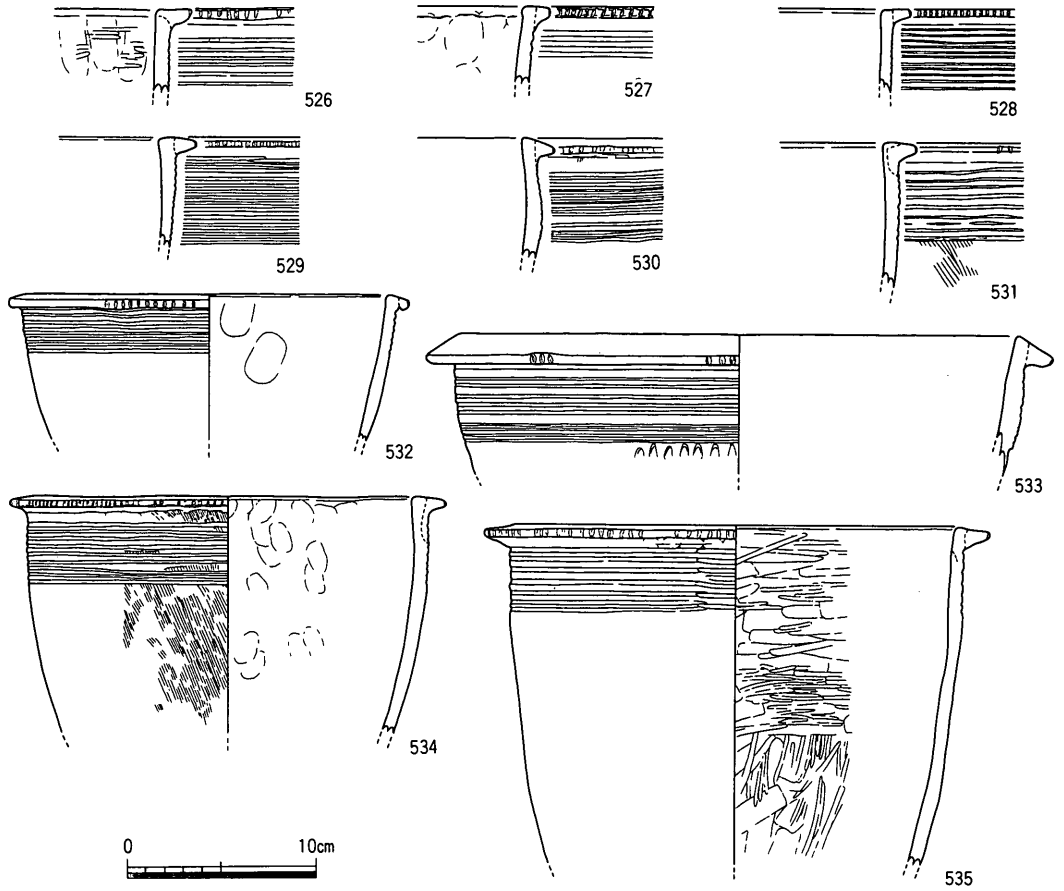
522の口縁部端部は上方を向き刻み目を入れている。口縁部の内面は強い指押さえのため窪んでいる。523の体部は下半で緩く内湾している。外面はハケ目となっており，口縁部直下には板状工具の木口痕が顕著であるが，この板状工具はハケ目原体と思われる。ヘラ描き沈線は９条である。524は口縁部の上面にハケ目を施しており，口縁部の下部にも一部ハケ目が及んでいる。525の口縁部端部は下方を向き刻み目を入れている。体部はほぼ直線的で。外面のヘラ描き沈線は12条と多条である。外面はハケ目で口縁部直下まで及んでいる。内面は指押さえとナデである。526は口縁部端部の上から包み込むように粘土を加えて逆Ｌ字形に仕上げており，端部には刻み目を入れている。体部内面はヘラミガキである。527は口縁部端部の外面への突出は弱く厚手で，刻み目を入れている。528の体部は直線的で外面にはヘラ描き沈線が現存で11条ある。529の口縁部の上面は丸みを帯びており端部には刻み目を入れる。体部外面のヘラ描き沈線は現存で14条と多条である。530の口縁部端部は先細りになり刻み目を入れている。体部は内湾しており外面にヘラ描き沈線が12条巡る。531の口縁部端部は刻み目が一部見られる。体部外面のヘラ描き沈線は９条あるが，後のナデのために沈線の一部は潰れている。外面にはハケ目を施している。532の口縁部端部は丸みを帯びて下方を向いている。体部はほぼ直線的に外傾している。533の口縁部端部は下方を向き，３個１単位の刻み目が現存で２単位確認出来る。体部は肥厚しており外面にヘラ描き沈線９条と列点文がある。534の体部は若干内湾しており，ヘラ描き沈線が９条巡る。外面はハケ目を施しているが，ハケ目は口縁部直下まで及んでいる。535の体部の器壁はやや凹凸が目立つ。体部のヘラ描き沈線は７条であるが，沈線を引いた時の重なり部分が明瞭である。体部内面は板ナデの後にヘラミガキを加えているが，下半部のヘラミガキは縦方向に施している。536の体部外面のヘラ描き沈線は16条と多条である。口縁部直下には板状工具の木口痕がある。内面は縦方向に指でナデている。537の体部は内湾しており，外面のヘラ描き沈線は12条である。538の口縁部端部は摩滅しており刻み目の有無は不明である。全体にナデている。539の口縁部端部も摩滅しているが刻み目が１個確認出来る。体部は内湾しており，太いヘラ描き沈線を７条巡らせている。外面には一部ハケ目が見られ，内面に



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
516	弥・甕	*17.0			中・少、細・少	暗灰黄2.5Y5/2 灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線現存3条、口縁部端部刻み目	如意形口縁、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
517	弥・甕	*21.0			中・普	灰黄2.5Y6/2、黄褐2.5Y5/3	ヘラ描沈線現存11条、口縁部端部刻み目	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
518	弥・甕	15.5			中・普	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存8条、口縁部端部刻み目	如意形口縁、口縁部歪む、全体にﾏﾒﾂ	
519	弥・甕	20.5			中・多、細・多	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
520	弥・甕	25.1			中・普	灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線12条、口縁部端部刻み目	如意形口縁、口縁部ﾏﾒﾂ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
521	弥・甕	*17.0			細・少、微・普	灰白10YR8/2、灰黄褐10YR6/2	櫛描文（直線文）、ヘラ描沈線、半截竹管文、簾状文	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
522	弥・甕	*9.6			細・普	にぶい黄2.5Y6/3、黄灰2.5Y6/1	ヘラ描沈線現存11条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
523	弥・甕	18.4			粗・少、中・普	灰黄褐10YR5/2 灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線9条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
524	弥・甕	23.0			中・多、細・普	にぶい黄2.5Y6/3、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線4条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・上面ﾊｹ目、外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
525	弥・甕	21.8			中・普、細・多	黒2.5Y2/1、灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線12条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

第384図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（５）（１／４）

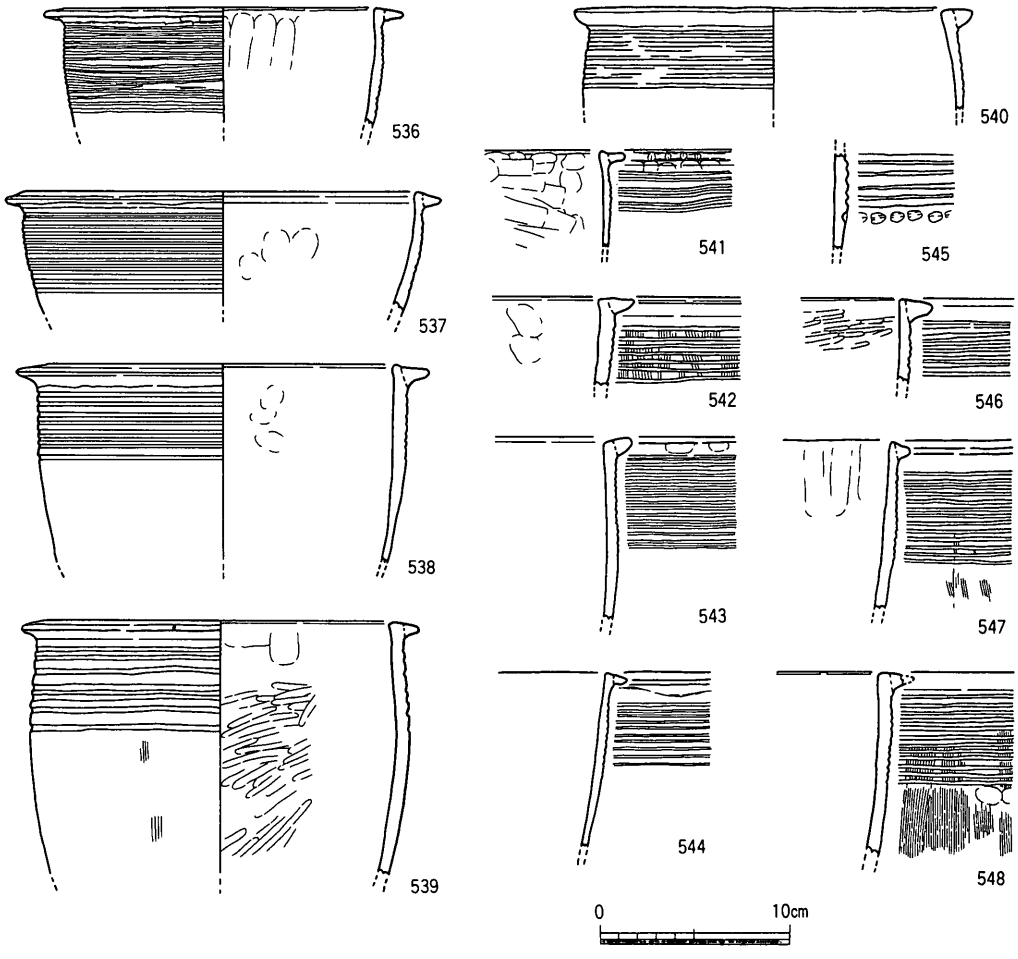
はヘラミガキを施している。540の口縁部は全体に厚手である。541は口縁部に上下から強い指押さえを行なっている。口縁部端部の刻み目は幅広になっている。体部外面には半截竹管による沈線を３単位の６条巡らせている。内面は板ナデとなっている。542は口縁部



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
526	弥・甕	*24.2			粗・少、細・普	黒褐2.5Y3/1、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存6条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
527	弥・甕	*19.6			中・普	灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線3条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
528	弥・甕	*18.6			細・多	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線現存11条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
529	弥・甕	*30.6			中・多	灰黄褐10YR4/2 灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線現存14条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
530	弥・甕	*26.0			中・多	黄灰2.5Y6/1	ヘラ描沈線12条、口縁部端部刻み目	全体にﾏﾒﾂ	
531	弥・甕	*24.1			中・少、細・多	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線9条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
532	弥・甕	18.8			粗・少、中・普	にぶい黄褐10YR5/3、褐灰10YR4/1	ヘラ描沈線7条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
533	弥・甕	29.0			中・多	灰白10YR8/2	ヘラ描沈線9条、口縁部端部3個1単位の刻み目現存2単位、列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
534	弥・甕	19.4			中・普、細・多	褐灰10YR4/1、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線9条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
535	弥・甕	23.0			粗・少、細・普	にぶい黄橙10YR6/3、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線7条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	

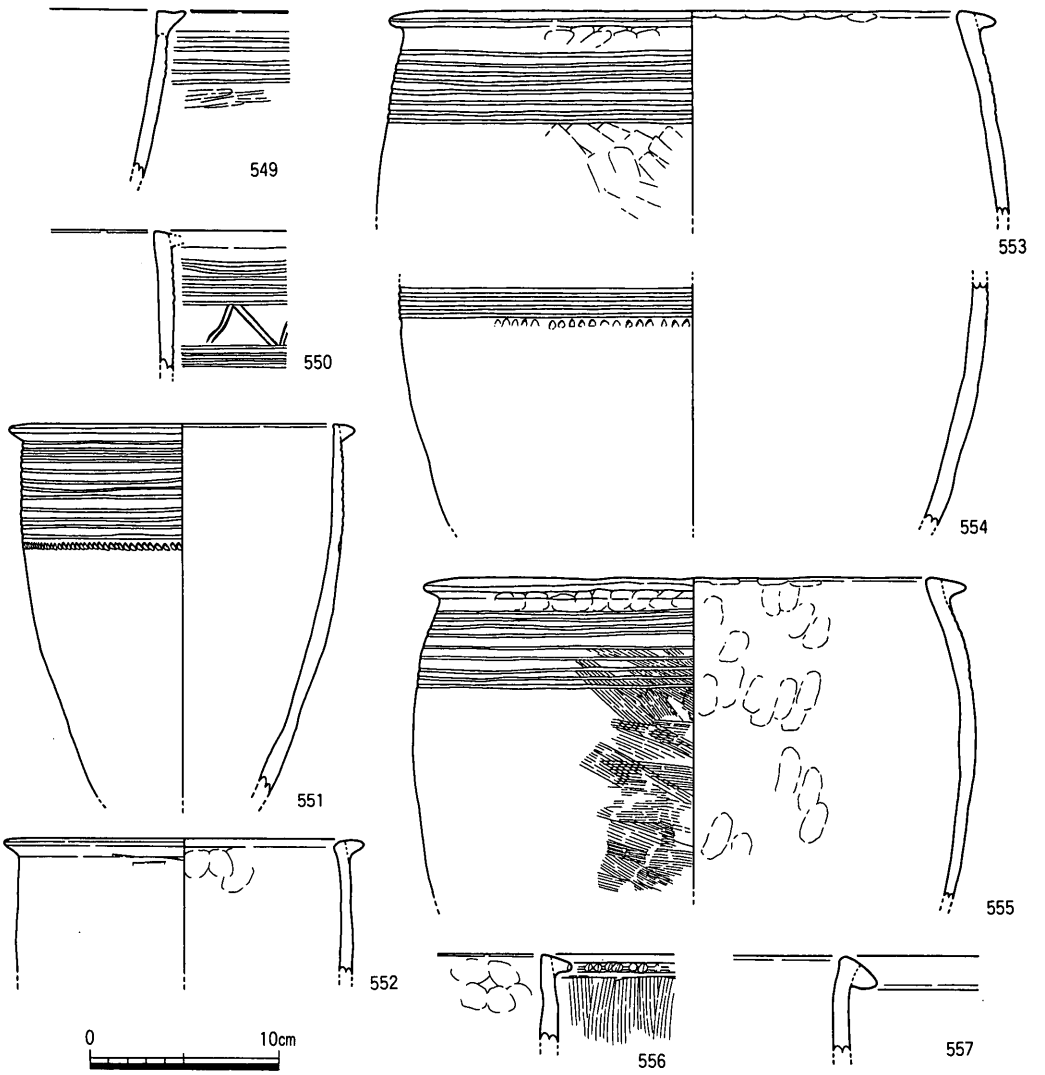
第385図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（６）（１/４）

の上面を強くナデており端部は上向き加減で先細りになっている。体部外面にはヘラ描き沈線が現存で７条あり，ハケ目を施している。543の口縁部端部は上方を向く。体部は直線的で外面のヘラ描き沈線は15条と多条である。544は口縁部端部は下方を向き先細りになっている。体部は直線的に外傾し，ヘラ描き沈線が10条巡っている。545は沈線の下に楕円形の列点文がある。546は口縁部直下にナデによる小さな凹線があり，その下にヘラ描き沈線が６条巡っている。内面はヘラミガキとなっている。547は口縁部の外側への突出は弱くなっている。体部は直線的に外傾しており，外面のヘラ描き沈線は13条と多条である。外面にはハケ目を施し，内面は縦方向に指でナデている。548の口縁部端部は欠損している。体部外面には全体にハケ目を施している。549は口縁部端部の上部に粘土を包み込むようにして逆Ｌ字形に仕上げており，端部は上方を向いている。体部は直線的に外傾しており，外面にはやや間隔の開いたヘラ描き沈線が５条巡っている。外面には一部ヘラミガキが見られる。550の体部は直線的で，外面にはヘラ描き沈線文帯の間に半截竹管による山形文が配されている。551の口縁部端部は先細りになっている。体部は緩く内湾しており，外面には下部がやや間隔の開いているヘラ描き沈線を12条巡らせ，その下に三角形列点文を配している。552の口縁部は内側に少し肥厚している。口縁部直下の外面には板状工具の木口痕がある。553の口縁部には指押さえが顕著である。体部は内傾しており，外面には板ナデを施している。554はヘラ描き沈線の下に三角形列点文を配している。555の口縁部には指押さえが顕著で，端部は先細りになっている。体部は内湾しており，外面は全体にハケ目を施している。内面は指押さえとナデとなっている。556は口縁部端部に大きめの刻み目を入れている。体部外面はハケ目となっている。557の口縁部端部は下方を向いている。558の口縁部端部は先細りになっている。559は口縁部外面に薄く粘土を加えて逆Ｌ字形に仕上げているが，下部はなだらかで横への突出は不明瞭である。体部は直線的に外傾しており，外面は板ナデとなっている。560の口縁部端部は下方を向き，全体に丸みを帯びている。口縁部直下の外面には指押さえが顕著で，体部外面は板ナデとなっている。561の口縁部端部は先細りで，体部は全体にナデている。562の口縁部端部は上向き加減で，刻み目を入れている。体部は外面にハケ目を施し口縁部直下をナデている。内面はヘラミガキとなっている。563はヘラ描き沈線文帯の間に半截竹管による山形文を配している。564は口縁部を間隔を開けて上下から強く指押さえを行なっている。体部は直線的に外傾しており全体にナデている。565の体部は直線的である。口縁部の下部に指押さえを行なっている。566の体部は緩く内湾しており，外面には５条１単位の櫛描き直



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
536	弥・甕	15.8			粗・少、中・少	灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線16条	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ内面ﾅﾃﾞ	
537	弥・甕	20.0			中・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線12条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
538	弥・甕	17.8			中・少、細・普	浅黄橙10YR8/3、にぶい黄橙10YR7/2	ヘラ描沈線8条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
539	弥・甕	17.8			細・普	浅黄橙10YR8/3、淡黄2.5Y8/3	ヘラ描沈線7条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾍｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
540	弥・甕	17.6			粗・少、中・多	灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線7条	全体にﾏﾒﾂ	
541	弥・甕	*25.4			細・少	褐灰10YR4/1、灰黄2.5Y7/2	半截竹管による2条1単位の沈線が3単位、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
542	弥・甕	*29.6			細・普	にぶい黄橙10YR6/3、灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線現存7条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾍｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
543	弥・甕	*27.8			中・少、細・普	褐7.5YR4/3、浅黄2.5Y7/3	ヘラ描沈線15条	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
544	弥・甕	*24.0			粗・少、中・少	にぶい黄橙10YR7/3、灰黄褐10YR4/2	ヘラ描沈線10条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
545	弥・甕				中・普	黒2.5Y2/1、 灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線現存5条、列点文	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
546	弥・甕	*10.8			中・少、細・普	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線6条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	
547	弥・甕	*20.4			細・普	にぶい黄橙10YR7/3、灰黄2.5Y6/2	ヘラ描沈線13条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾍｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
548	弥・甕				中・少、細・普	灰黄褐10YR6/2、浅黄橙10YR8/3	ヘラ描沈線12条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾍｹ目、内面ﾅﾃﾞ	

第386図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（７）（１／４）

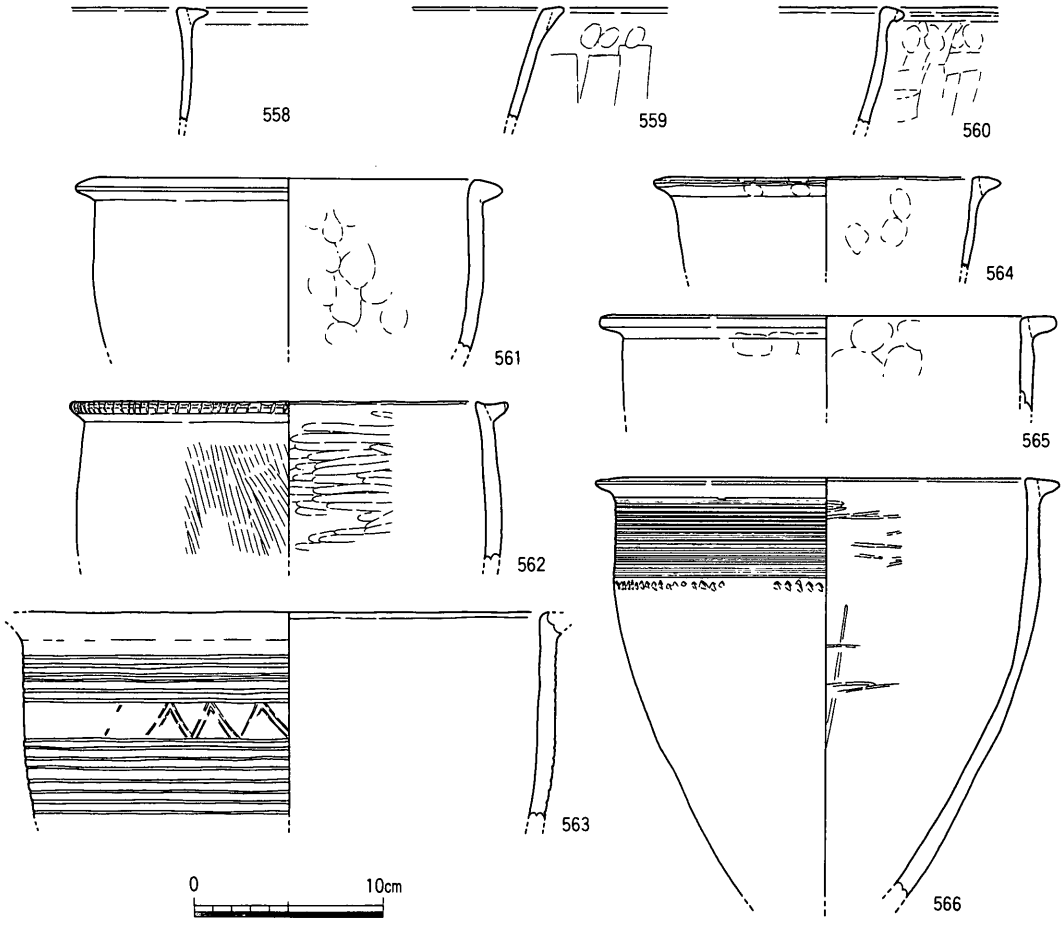


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
549	弥・甕	*41.2			中・少、細・少	橙5YR6/6、灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線5条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
550	弥・甕				粗・少、細・普	灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線6条＋半截竹管山形文＋ヘラ描沈線現存4条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
551	弥・甕	16.0			粗・多、中・多	にぶい黄褐10YR5/3、灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線12条、三角形列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
552	弥・甕	19.0			中・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/4		口縁部ﾏﾒﾂ、外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
553	弥・甕	28.4			粗・少、中・普	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線8条	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
554	弥・甕				粗・少、中・多	にぶい黄橙10YR7/2、灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線現存4条、三角形列点文	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
555	弥・甕	24.7			粗・少、中・多	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線9条	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
556	弥・甕	*23.6			細・普	灰白2.5Y8/2、灰白2.5Y8/1	口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
557	弥・甕	*40.4			中・普、細・普	にぶい橙7.5YR7/4		全体にﾏﾒﾂ	

第387図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（８）（１／４）

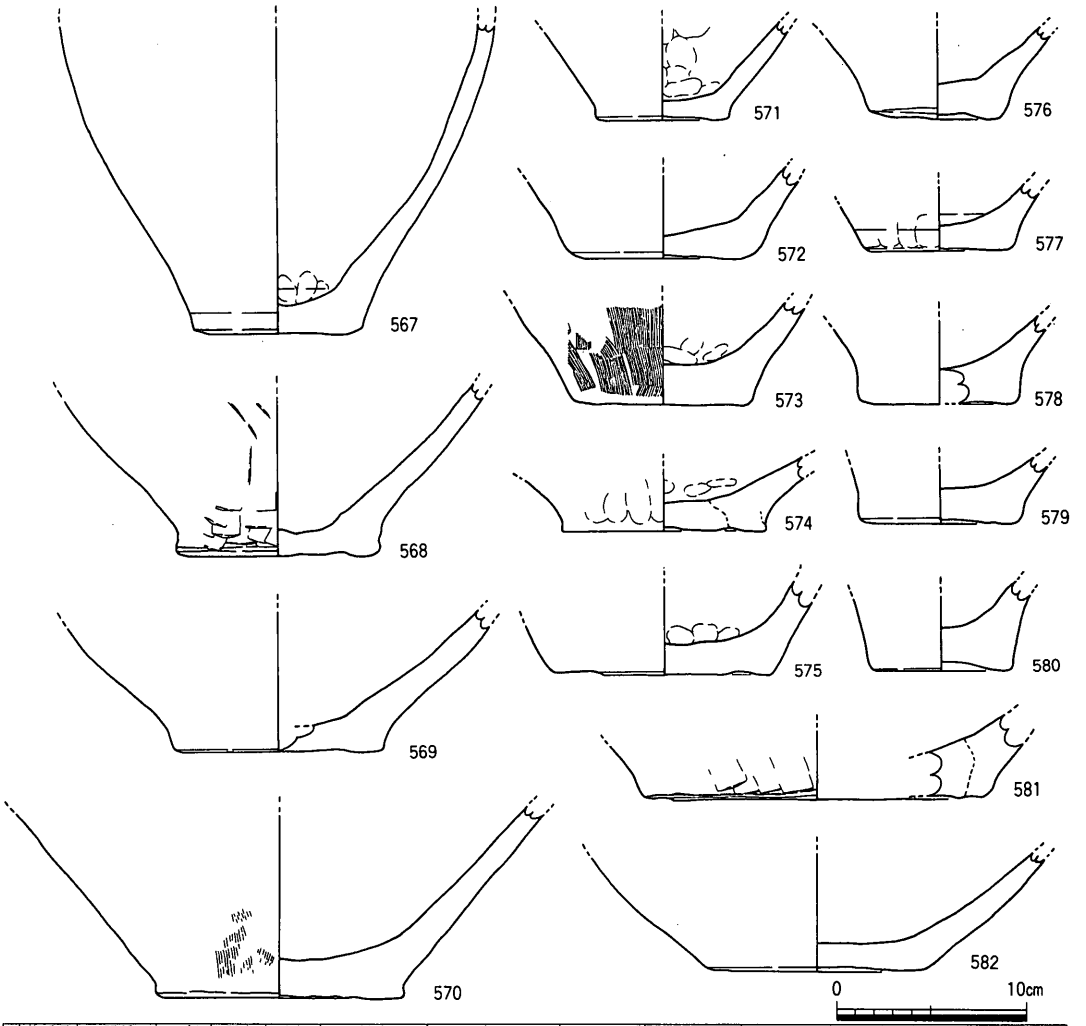
線文と三角形列点文を巡らせている。外面はナデ，内面にはヘラミガキを施している。

567～633は壺および甕の底部である。567は一応壺としたが甕かも知れない。568の底部は低い高台状になっており，体部外面は板ナデとなっている。底部外面はヘラケズリのよ



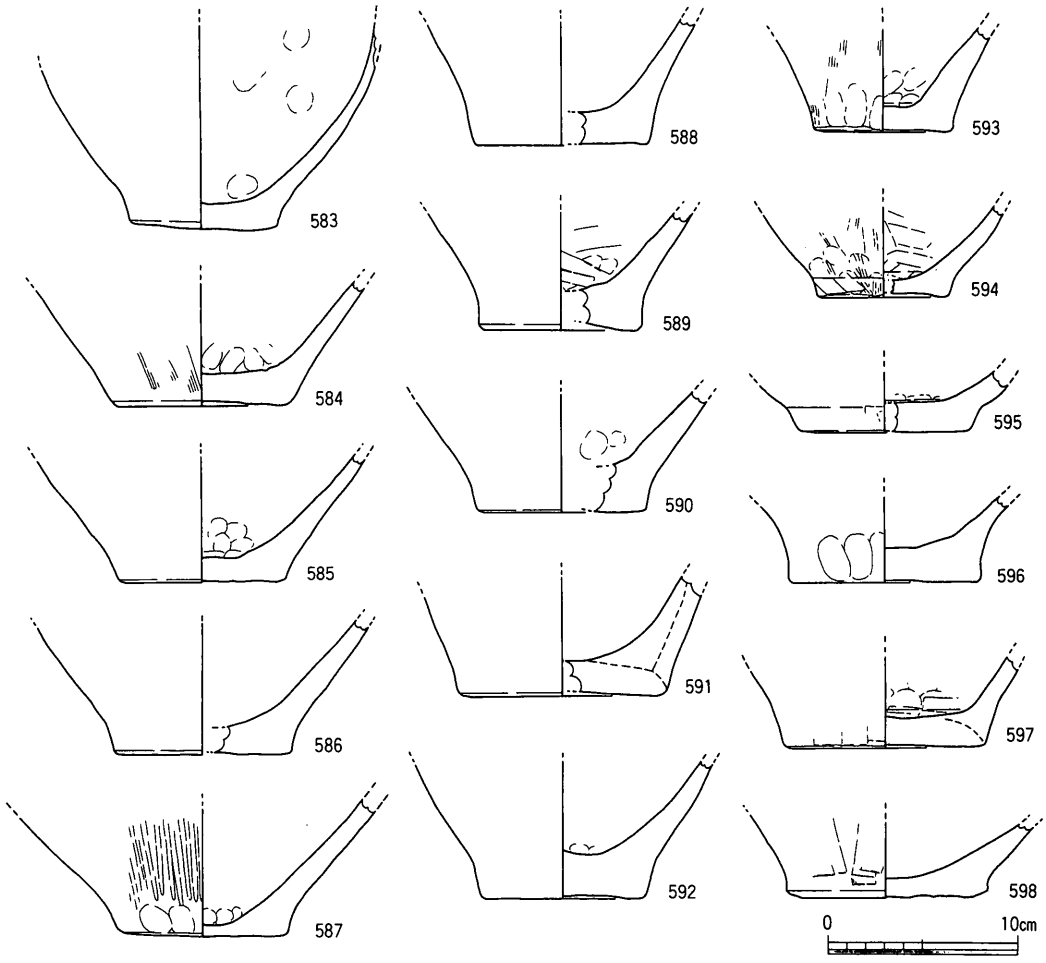
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
558	弥・甕	*26.0			中・多	浅黄橙10YR8/3 橙5YR6/6		全体にﾏﾒﾂ	
559	弥・甕	*24.4			中・少、細・普	にぶい橙7.5YR 5/4、灰黄2.5Y 6/2		口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
560	弥・甕	25.6			細・普	にぶい黄橙10YR7/4		口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
561	弥・甕	19.6			粗・少、細・少	灰黄2.5Y7/2、にぶい橙7.5YR 6/4		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
562	弥・甕	19.6			粗・少、中・普	灰白10YR8/2	口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、外面ﾊｹ目、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
563	弥・甕	26.4			中・多	灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線6条＋半截竹管山形文＋ヘラ描沈線現存8条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
564	弥・甕	15.4			粗・少、中・普	にぶい黄2.5Y6/3		口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
565	弥・甕	20.4			中・普、細・普	灰黄2.5Y7/2		口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
566	弥・甕	20.8			細・普	浅黄2.5Y7/3	櫛描文（直線文）、三角形列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	

第388図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物（９）（１/４）



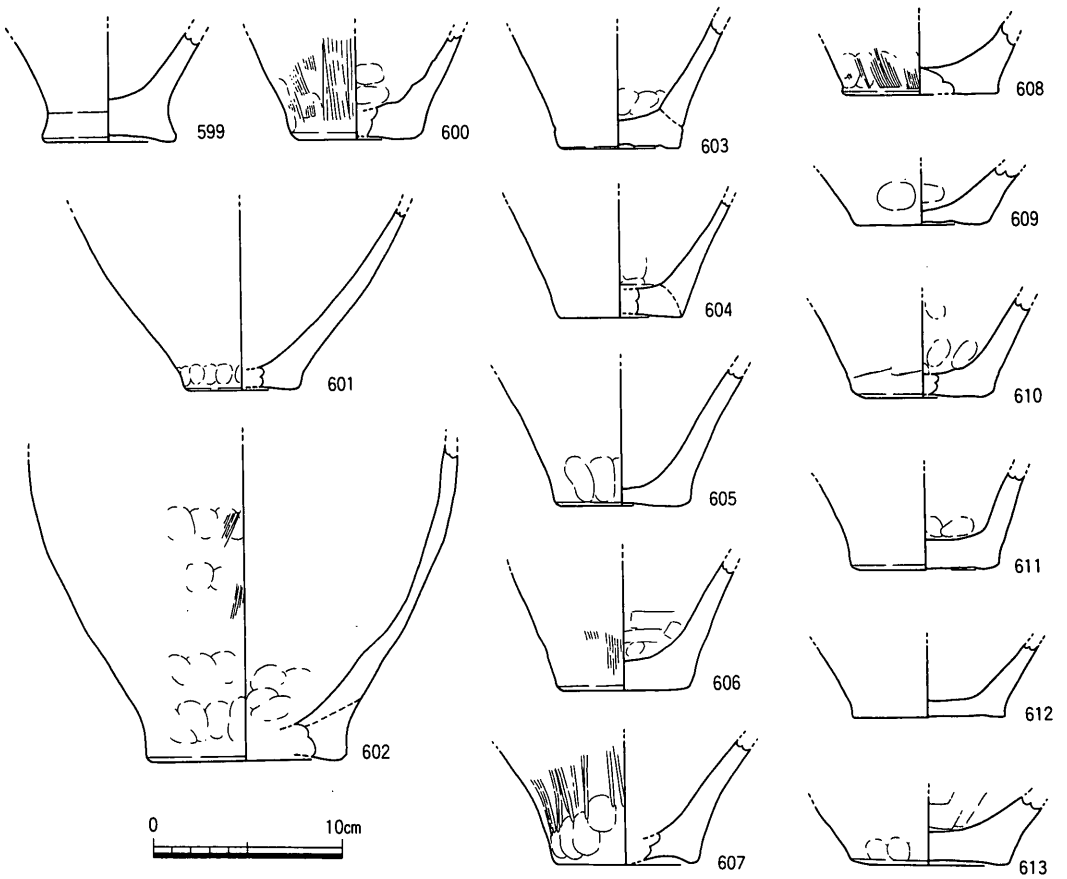
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
567	弥・壷			8.9	粗・多、中・多	浅黄橙10YR8/3、浅黄橙7.5YR8/4		全体にﾏﾒﾂ	
568	弥・壷			10.7	粗・少、細・多	にぶい赤褐5YR4/4 にぶい褐7.5YR5/4		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
569	弥・壷			11.0	中・多	灰白2.5Y8/1		全体にﾏﾒﾂ	
570	弥・壷			12.6	粗・少、中・多	灰白2.5Y8/2、灰白7.5YR8/2		外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
571	弥・壷			7.0	中・普、細・多	灰白2.5Y7/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
572	弥・壷			9.8	粗・少、細・多	にぶい黄橙10YR6/3、灰黄2.5Y6/2		全体にﾏﾒﾂ	
573	弥・壷			9.0	粗・少、中・普	にぶい黄橙10YR7/2、灰白10YR8/2		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
574	弥・壷			10.7	中・普	にぶい橙7.5YR6/4 淡黄2.5Y8/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
575	弥・壷			11.5	中・多	浅黄橙7.5YR8/4、にぶい褐7.5YR5/4		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
576	弥・壷			6.9	粗・少、中・普	灰黄2.5Y6/2、黄灰2.5Y6/1		全体にﾏﾒﾂ	
577	弥・壷			7.4	中・多、細・多	灰黄2.5Y7/2、灰白2.5Y7/1		全体にﾏﾒﾂ、外面指押え	
578	弥・壷			8.3	中・多	灰黄2.5Y7/2、黄灰2.5Y5/1		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
579	弥・壷			8.6	粗・多、細・多	浅黄橙10YR8/3		全体にﾏﾒﾂ	
580	弥・壷			7.5	粗・少、細・多	にぶい黄橙10YR6/4、浅黄2.5Y7/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
581	弥・壷			18.3	粗・少、中・多	浅黄2.5Y7/3、灰黄2.5Y6/2		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
582	弥・壷			11.6	中・多、細・多	浅黄2.5Y7/3、橙5YR6/6		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

第389図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(10)（1／4）



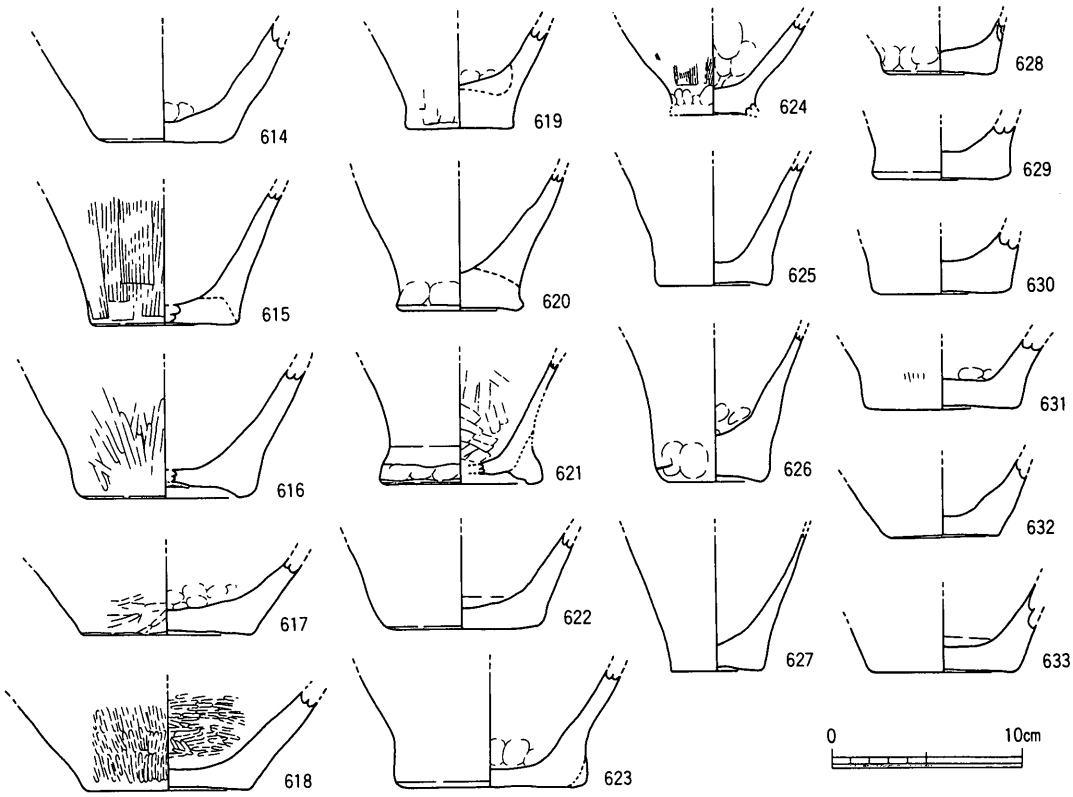
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
583	弥・壷			7.8	粗・多、中・普	灰黄2.5Y7/2、灰白5Y7/1		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
584	弥・壷			8.8	細・多	にぶい黄橙10YR6/3、褐灰10YR4/1		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
585	弥・壷			8.8	細・多	浅黄2.5Y7/3、灰白10YR8/2		全体にﾏﾒﾂ,内面指押え	
586	弥・壷			9.4	粗・少、中・少	暗灰黄2.5Y5/2にぶい黄2.5Y6/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
587	弥・壷			8.6	中・少、細・普	灰白10YR8/2		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
588	弥・壷			9.0	中・多	橙7.5YR7/6、灰黄2.5Y7/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
589	弥・壷			8.0	細・多	浅黄2.5Y7/3		外面ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
590	弥・壷			9.0	中・少、細・普	にぶい黄橙10YR7/3、灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
591	弥・壷			11.0	中・多	灰白2.5Y8/2		全体にﾏﾒﾂ	
592	弥・壷			8.4	粗・少、中・少	灰黄2.5Y7/2、灰黄褐10YR6/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
593	弥・壷			7.2	中・多、細・多	灰白10YR8/1、灰白10YR8/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
594	弥・壷			7.0	中・普、細・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・指押え、内面板ﾅﾃﾞ	
595	弥・壷			8.9	中・多、細・多	灰黄褐10YR5/2褐灰10YR5/1		全体にﾏﾒﾂ	
596	弥・壷			9.8	中・多	浅黄橙10YR8/3褐灰10YR4/1		全体にﾏﾒﾂ、外面指押え	
597	弥・壷			10.5	中・多、細・普	浅黄橙10YR8/3灰黄2.5Y7/2		外面板ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
598	弥・壷			10.6	粗・少、中・多	にぶい黄褐10YR5/4、にぶい黄2.5Y6/3		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	

第390図　D区ＳＸ01出土遺物(11)（1/4）



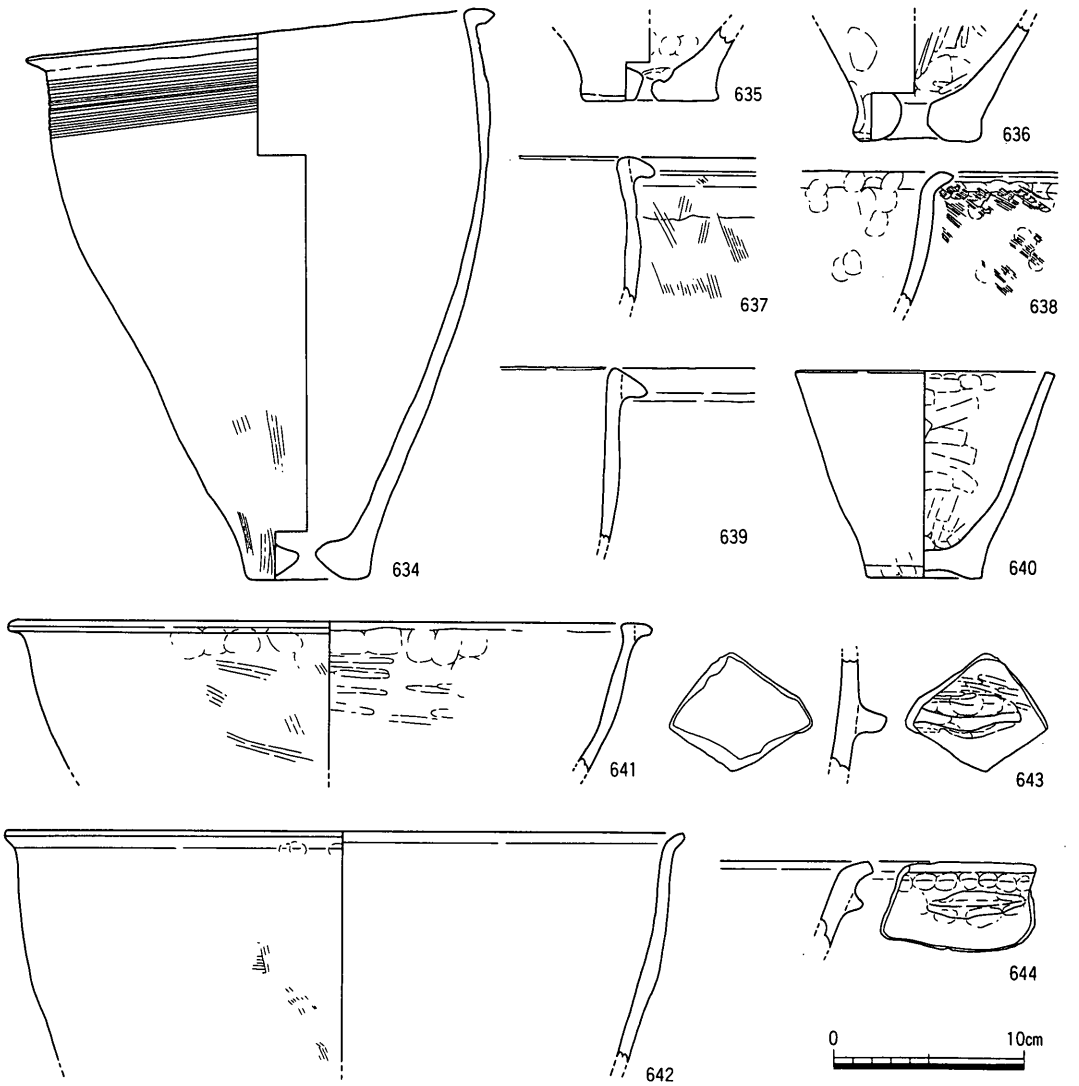
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
599	弥・甕			7.1	粗・少、中・普	灰白2.5Y8/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
600	弥・甕			6.0	中・少、細・普	褐灰10YR4/1、黒褐2.5Y3/1		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	内面にタール状のものが付着
601	弥・甕			6.0	中・普、細・少	灰黄2.5Y7/2、黄灰2.5Y5/1		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾏﾒﾂ	
602	弥・甕			10.5	中・普	浅黄橙10YR8/3黄灰2.5Y5/1		外面ﾊｹ目・指押え・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
603	弥・甕			6.4	細・多	灰黄2.5Y7/2、にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
604	弥・甕			6.4	中・普、細・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
605	弥・甕			7.0	中・少、細・普	浅黄橙10YR8/4		全体にﾏﾒﾂ、外面指押え	
606	弥・甕			7.0	粗・少、細・多	灰白2.5Y7/1		外面ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
607	弥・甕			7.5	中・普	浅黄2.5Y7/3、暗灰黄2.5Y4/2		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え、内面ﾅﾃﾞ	
608	弥・甕			8.2	細・普	灰褐7.5YR5/2灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ、底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	
609	弥・甕			7.0	中・多	にぶい黄2.5Y6/3、にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
610	弥・甕			7.1	中・多、微・多	明赤褐5YR5/6黒10YR2/1		外面板ﾅﾃﾞ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	
611	弥・甕			7.8	粗・少、微・多	灰黄2.5Y6/2、灰白2.5Y7/1		外面ﾅﾃﾞ、内面指押え・ﾏﾒﾂ	
612	弥・甕			8.0	粗・少、中・普	にぶい橙2.5YR6/4、灰黄2.5Y7/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
613	弥・甕			8.3	粗・少、細・普	灰黄2.5Y6/3		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面板ﾅﾃﾞ	

第391図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(12)（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
614	弥・甕			7.1	中・少、細・多	灰白10YR8/2、橙5YR6/6		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
615	弥・甕			7.8	中・少、細・普	浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
616	弥・甕			9.1	中・少、微・少	灰白2.5Y8/1、黄灰2.5Y6/1		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
617	弥・甕			9.0	中・少	にぶい黄橙10YR6/3、黄灰2.5Y4/1		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
618	弥・甕			8.4	粗・少、中・普	灰黄2.5Y6/2、暗灰黄2.5Y5/2		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
619	弥・甕			5.8	粗・少、中・普	灰黄2.5Y7/2、灰白2.5Y8/2		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
620	弥・甕			6.7	粗・少、中・多	明赤褐2.5YR5/6、黒褐2.5Y3/1		外面ﾏﾒﾂ・指押え、内面ﾏﾒﾂ	
621	弥・甕			8.6	中・普、細・多	にぶい黄2.5Y6/3		外面指押え・ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
622	弥・甕			8.1	中・多、細・多	灰黄2.5Y6/2、灰黄2.5Y7/2		全体にﾏﾒﾂ	
623	弥・甕			10.0	中・多、細・普	灰白10YR8/2		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
624	弥・甕				中・少、細・普	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
625	弥・甕			6.0	中・多	暗灰黄2.5Y4/2 にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
626	弥・甕			5.2	中・多	褐灰10YR4/1、にぶい黄橙10YR7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
627	弥・甕			4.7	粗・多、中・普	にぶい橙7.5Y6/4		全体にﾏﾒﾂ	胎土に結晶片岩を含む
628	弥・甕			5.9	中・普	灰白2.5Y8/1		全体にﾏﾒﾂ	
629	弥・甕			7.2	中・普	にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
630	弥・甕			7.0	中・多	にぶい橙7.5YR7/4、灰白10YR8/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
631	弥・甕			8.0	中・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
632	弥・甕			6.0	粗・少、中・多	灰黄2.5Y7/2、黄灰2.5Y6/1		全体にﾏﾒﾂ	胎土に結晶片岩を含む
633	弥・甕			7.9	中・少	灰黄2.5Y6/2、灰白2.5Y8/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	

第392図　D区ＳＸ01出土遺物(13)（1/4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
634	弥・甑	21.8	29.5	6.4	中・多	にぶい黄橙10YR7/4	櫛描文（直線文）	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
635	弥・甑			6.9	粗・少、中・多	にぶい黄橙10YR7/4、灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
636	弥・甑			6.4	中・多、細・普	浅黄2.5Y7/4、明赤褐5YR5/6		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
637	弥・鉢	*34.0			中・普	褐灰10YR4/1		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
638	弥・鉢	*24.0			中・多	灰黄2.5Y7/2、灰白2.5Y7/1		口縁部指押え・外面ﾊｹ目、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
639	弥・鉢	*39.4			中・多、細・多	灰白2.5Y8/1		全体にﾏﾒﾂ	
640	弥・鉢	12.8	10.6	6.1	中・多、細・多	灰黄褐10YR5/2褐灰10YR4/1		外面ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
641	弥・鉢	30.8			中・普	にぶい黄橙10YR7/4、灰黄2.5Y7/2		口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
642	弥・鉢	35.6			中・少、微・少	黄灰2.5Y4/1、橙5YR7/8		口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
643	弥・鉢				中・少、細・普	にぶい橙7.5YR7/4、灰黄2.5Y7/2	把手状の突起現存1個	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
644	弥・鉢	*29.6			中・多	灰白2.5Y8/2	口縁部の下に把手状の突起	口縁部指押え、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	

第393図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(14)（1/4）

うになっている。570の底部は突出気味で，底部付近の外面はハケ目となっている。571は若干の上げ底となっている。573の底部は肥厚しており，体部の外面はハケ目である。574は底部の内・外面と側面に指押さえを強く施している。575は底部の内・外面に指押さえを行なっている。580の底部は肥厚し上げ底になっている。581は幅広の安定した底部で，体部外面は板ナデとなっている。583の底部は突出気味で，体部は内湾して立ち上る。584の体部外面はハケ目の後にナデている。587は底部の側面に指押さえを行い，底部は薄くなっている。体部外面にはヘラミガキを施している。589は底部中央部分が欠損しているが上げ底になると思われ，内面は板ナデである。592の底部は中央部分が肥厚している。593は底部の内・外面と側面に指押さえを行い，体部外面はハケ目後ナデている。594の底部は突出しており，若干の上げ底になっている。体部外面はハケ目後ナデ，内面は板ナデとなっている。595は突出した底部である。598の底部はやや潰れながら突出している。体部外面は板ナデとなっている。599は底部の側面が細くなっている。600の体部外面はハケ目で，内面は強い指押さえとなっている。内面にタール状のものが付着している。602は底部と体部全体に指押さえを行なっている。体部は内湾して立ち上り，外面にはハケ目が一部見られる。あるいは壺かも知れない。607の底部は高台状になっており，体部外面にはヘラミガキを施している。608の底部外面はヘラケズリの後にナデている。体部外面はハケ目となっている。609の底部は薄くなっている。615の体部外面は全体にハケ目を施している。616の底部は高台状になっており，底部の外面には粘土のつなぎ目や剥離部分が多い。体部外面にはヘラミガキを施している。618は体部内・外面とも全体に丁寧にヘラミガキを施している。619の底部は小さく非常に厚手になっている。620は底部の側面に強く指押さえを行い，底部を搾り出すようにしている。621は外側に粘土を加えて指押さえで整形して，高台状に仕上げている。体部内面は板ナデである。623の底部は突出気味である。624の底部は小さく突出しており，体部外面にはハケ目を施している。626の底部は小さく肥厚している。627の体部は底部に比べて非常に薄くなっている。631の内面の体部立ち上り部は鋭くなっている。外面はハケ目の後ナデている。

634～636は甑である。634の体部は全体に緩く内湾する。外面には３条１単位の櫛描き直線文が巡っている。外面はマメツしているがハケ目が残っている。底部には中央部分に両面から穿孔している。635の底部の穿孔は雑である。636は底部の側面に強く指押さえを行い，体部内面にはヘラミガキを施している。

637～644は鉢である。637の体部外面はハケ目の後にナデている。638は口縁部に強く指

押さえを行い，端部は先細りになっている。体部外面にはハケ目を施しているが，ハケ目は口縁部まで及んでいる。639は全体にマメツしている。640は直線的に外傾する体部からそのまま口縁部に至り，口縁部端部は平坦になっている。外面は全体に摩滅しているが底部付近に僅かに板状工具の痕跡がある。内面は板ナデである。底部は高台状になっている。641は口縁部外面に指押さえを行なっている。体部は緩く内湾しており，外面はハケ目の後にナデ，内面はヘラミガキである。642は下部は欠損しているが器高の高いものと思われる。体部は内湾気味で，外面はハケ目の後にナデている。内面は摩滅している。643は把手状の突起部分で，口縁部のやや下側の部分であろう。突起の上側にヘラミガキを施している。644は口縁部の外面に強く指押さえを行なっている。口縁部の下には把手状の突起がある。

645～656は蓋である。645は全体に指押さえが顕著で，指押さえが強いためにハケ目状の板ナデは潰れている。646はつまみ部中央が窪んでいる。外面はハケ目である。647はつまみ部の向かい合った位置に穿孔が１個ずつある。648はつまみ部の側面に強い指押さえを行なっている。650のつまみ部は窪んでおり，２個１単位の穿孔が向かい合った位置にある。外面はハケ目，内面は板ナデである。651の外面はハケ目の後にヘラミガキを加えている。652はつまみ部の窪みは深くなっており，窪み部分にヘラミガキを施している。２個１単位の穿孔が向かい合った位置にあるが，このうちの１個は未貫通である。外面にはヘラミガキを施している。653はつまみ部の側面を指で器壁をナデながら押えている。654はつまみ部の側面に指押さえを行い，内面を指で縦方向に強くナデている。655のつまみ部は非常に厚手となっている。656は小型で笠形の蓋である。体部は直線的に開き，端部は丸く収めている。端部付近に２個１単位の穿孔が現存で１単位ある。外面はハケ目である。

657は高杯の脚部と考えたが，あるいは656のような蓋かも知れない。端部は真横に開き２個１単位の穿孔が現存で１単位ある。全体にナデている。

658はミニチュア土器で甕に近い器形になるものと思われる。全体に指押さえにより整形した後にナデている。短い脚部が付いている。

659は土笛と考えられる。平面形は3.0cm×2.4cmの楕円形で，厚さは1.0cmである。上部に直径３㎜の穿孔が２個ある。

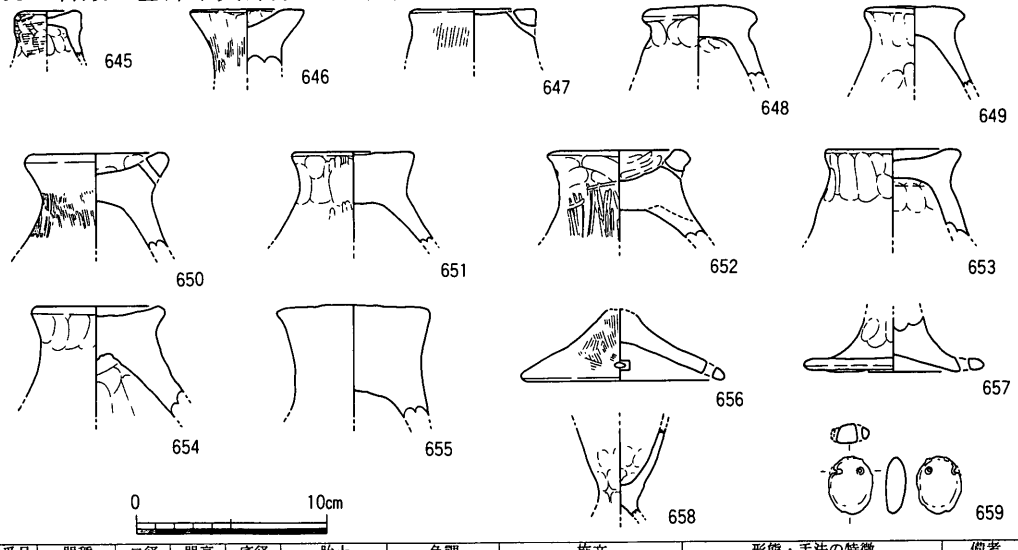
660～663は石庖丁で，このうち660～662は磨製，663は打製のものである。660は刃部・背部ともに緩く外湾している。刃部と背部は一部剥離しており研磨以前の自然面が表れている。紐部で欠損しているが，紐部には穿孔をやり直した痕が伺える。刃部は両面から作り出しており，擦痕が認められる。661は紐部付近の破片である。刃部・背部ともに外湾

のものと思われる。刃部は非常に摩滅しており，白色透明の物質が付着している。662は紐部付近の破片である。刃部は両面から作り出しており，擦痕が認められる。663は刃部・背部ともに直線となっている。刃部は両面から作り出し背部は一部摩滅している。体部の一部を磨いている。

664はスクレイパーで，長さの割に幅のあるもので長方形である。背部には敲打を施している。石庖丁に近いものである。

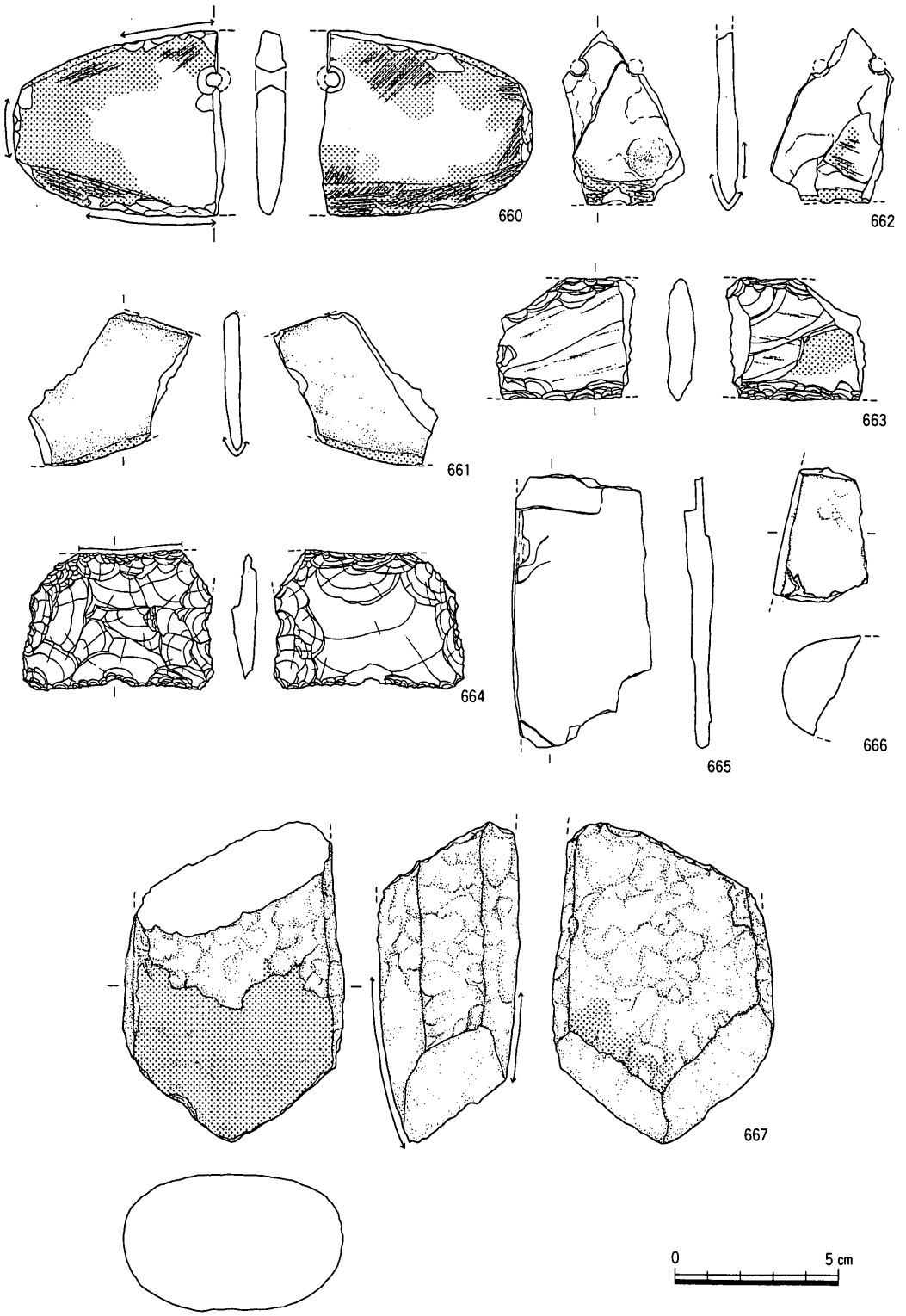
665は柱状片刃石斧の基部中央部分の破片である。666は太型蛤刃石斧の基部の一部である。667も太型蛤刃石斧の基部の一部であるが，刃部に近い部分である。

668は石鍬で基部中央部分で刃部方向に向って幅広になり撥形になるものと思われる。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
645	弥・蓋	つまみ径2.5			細・少	灰黄2.5Y7/2		外面ﾊｹ目状の板ﾅﾃﾞ→強い指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
646	弥・蓋	つまみ径6.0			中・多、細・普	浅黄2.5Y7/3		外面ﾊｹ目・指押え、内面不明	
647	弥・蓋	つまみ径6.6			細・少	にぶい黄橙10YR6/4	穿孔向かい合って1個ずつ	外面ﾊｹ目、内面不明	
648	弥・蓋	つまみ径6.0			粗・少、細・普	灰黄2.5Y7/2、灰黄2.5Y6/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
649	弥・蓋	つまみ径5.3			中・多、細・普	にぶい橙2.5YR6/4、にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾏﾒﾂ	
650	弥・蓋	つまみ径7.6			中・少、細・普	浅黄2.5Y7/3、灰黄2.5Y6/2	つまみ部に2個1単位の穿孔2単位	外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面板ﾅﾃﾞ	
651	弥・蓋	つまみ径6.5			中・少、細・少	灰白2.5Y8/1		外面指押え・ﾊｹ目→ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
652	弥・蓋	つまみ径7.6			粗・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/3、灰黄2.5Y7/2	2個1単位の穿孔2単位（1個未貫通）	外面ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
653	弥・蓋	つまみ径7.1			中・普	にぶい赤褐5YR4/4、黒7.5YR2/1		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
654	弥・蓋	つまみ径6.5			粗・少、細・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ	
655	弥・蓋	つまみ径8.0			粗・少、中・普	にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
656	弥・蓋	10.7	3.7		中・少、細・少	灰黄2.5Y7/2	2個1単位の穿孔現存1単位	外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
657	弥・高杯			9.5	粗・少、中・普	灰白2.5Y8/2、灰白2.5Y8/1	2個1単位の円形透し現存1単位	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
658	弥・ﾐﾆ土器				中・少	灰黄2.5Y7/2、にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
659	土笛	長 3.0	幅 2.4	厚 1.0	中・普	灰白2.5Y8/2		上部に穿孔２ヶ所	

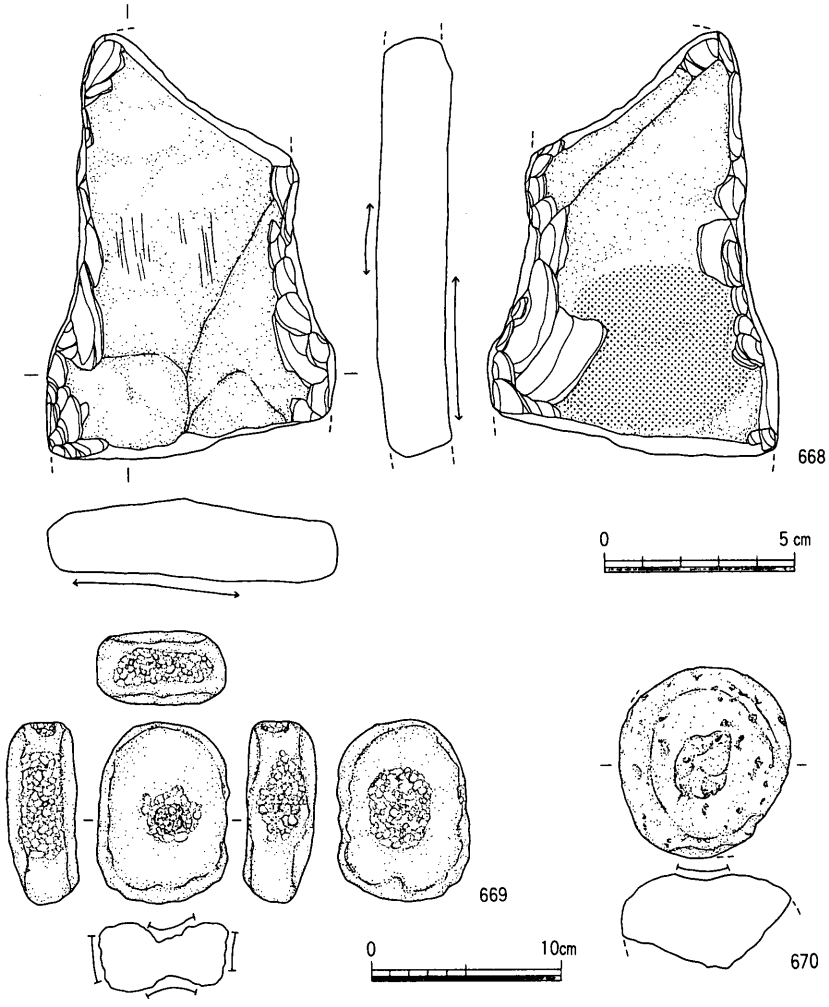
第394図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(15)（１/４）



第395図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(16)（１/２）

側縁部に剥離を加えて整形している。基部には柄との装着痕と思われる擦痕が一部に見られ，くびれ部より下側が摩滅している。

669は敲石であるが形態は凹石と同じである。表裏の中央部分は打撃により非常に窪んでいる。側面にも敲打痕が顕著で合計５面に敲打痕があり，非常によく使い込まれているものである。670は凹石で窪みの度合いは低い。

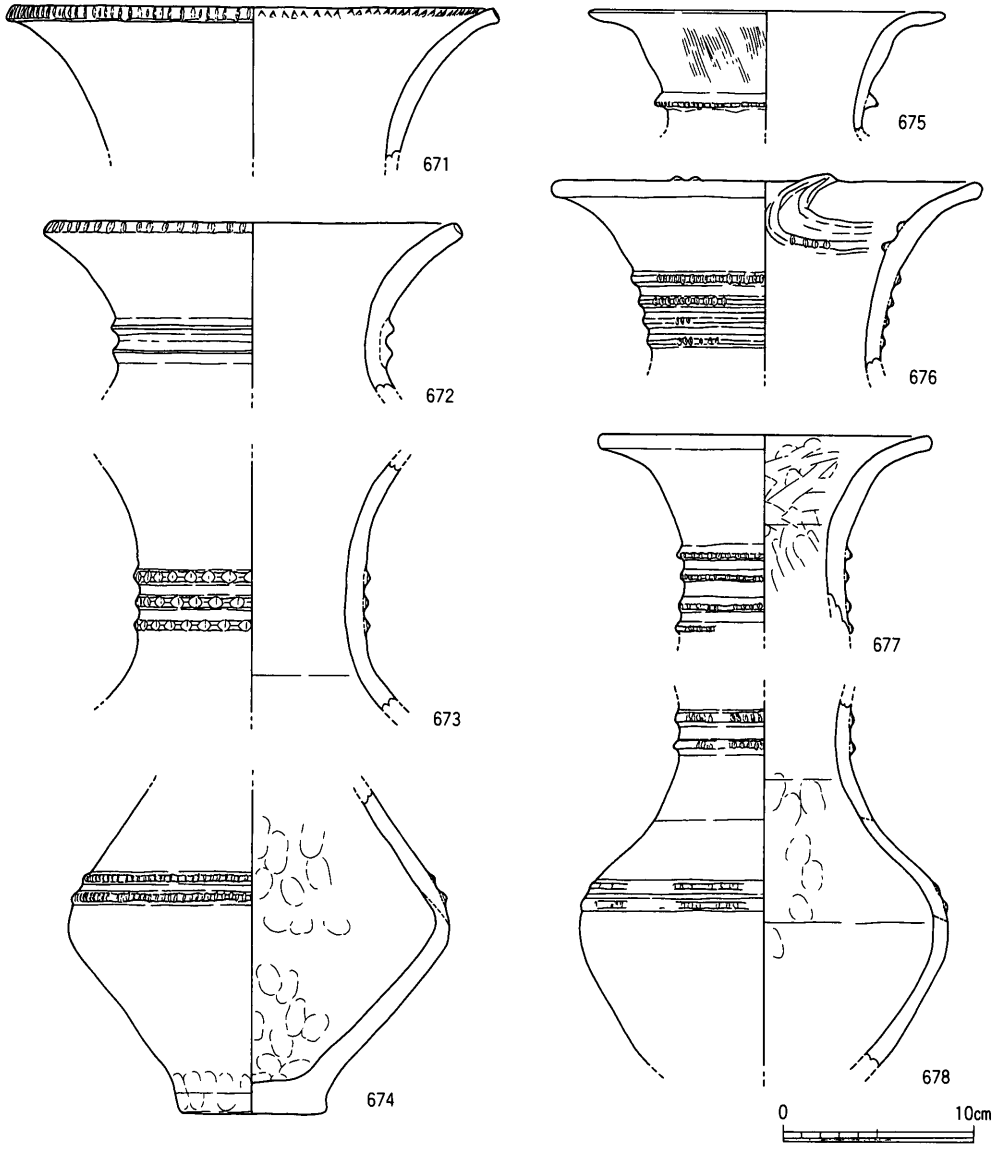


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
660	磨製石庖丁	6.5	5.6	0.9	46.4	流紋岩	紐部穿孔やり直し、刃部に擦痕	
661	磨製石庖丁	5.0	4.6	0.5	11.6	流紋岩	刃部摩滅	
662	磨製石庖丁	3.7	5.2	0.6	12.8	流紋岩	刃部に擦痕	
663	打製石庖丁	4.2	3.7	0.9	23.2	結晶片岩	一部磨いている、背部摩滅	
664	スクレイパー	5.9	4.3	0.7	19.9	サヌカイト	背部に敲打痕	
665	柱状片刃石斧	8.3	4.3	1.0	31.6	結晶片岩		
666	太型蛤刃石斧	4.2		2.8	42.8	(脈岩)安山岩	基部の細片	緑色
667	太型蛤刃石斧	9.7	6.8	4.4	401.5	(脈岩)安山岩		緑色
668	石鏃	11.0	7.7	2.5	250.6	安山岩	撥形、基部に擦痕、下半部摩滅	
669	敲石	9.7	6.9	3.6	318.9	石英安山岩	5面に敲打痕がある	
670	凹石	10.1	–	–	587.4	花崗岩		

第396図　Ｄ区ＳＸ01出土遺物(17)（１/２，１/４）

（2）包含層出土遺物（第397図～第422図）

671～705は壺である。671の口縁部は大きく開き端部には刻み目を入れている。内面には三角形列点文を巡らせている。672の口縁部端部には刻み目を入れている。頸部には2条1単位の複条貼付突帯がある。673は頸部に刻み目突帯が3条あるが，刻み目は大きめになっている。全体にナデている。674の体部は中央部分で強く屈曲しており，最大径は中央部分にある。体部に刻み目突帯が2条ある。底部は突出気味で側面に指押さえを行なっている。全体に摩滅しているが，体部内面には指押さえが顕著である。675の口縁部は大きく開き，端部は真横を向き先細りになっている。頸部には刻み目突帯が1条あり，外面にはハケ目を施している。676は口縁部の内面に突帯を貼り付けているが，1条の突帯を口縁部端部で反転させて二重にして，全体に弧を描くように貼り付けている。突帯の反転部分は口縁部より上に出ており，突帯の一部には刻み目を入れている。頸部には刻み目突帯を4条巡らせている。677の口縁部は大きく開き，頸部には刻み目突帯が現存で4条ある。口縁部内面は板ナデであるが，頸部内面は指で器壁を抉るようにナデている。外面は全体にナデている。678は頸部と体部に刻み目突帯がある。体部は最大径が中央部分にあるものの扁平で，体部上半は外反気味でなで肩状になる。全体に摩滅している。679は頸部から口縁部にかけて全体に外反している。頸部には貼付突帯が現存で4条ある。680は外傾する頸部から口縁部は大きく開き，端部にはヘラ描き沈線が1条巡る。頸部には現存で4条1単位の複条貼付突帯がある。681は扁平な体部で，最大径部分のやや上に貼付突帯が2条ある。突帯の端部は丸みを帯びている。682は体部の上半に削出突帯が3条ある。内面は指押さえを行なっている。体部は扁平なものと思われる。683の口縁部端部は真横を向き，先細りになっている。頸部には貼付突帯が1条巡っており，頸部の上部が肥厚している。684は口縁部端部に指押さえによる刻み目を施している。外面はハケ目となっている。685は外傾する頸部から口縁部は大きく開くが，頸部は長くなっている。頸部は貼付突帯が1条あるが，その下から体部との境部分にかけて突帯の剥離した痕跡がある。686の口縁部は短く外反する。687の口縁部は頸部から緩く外反している。口縁部は頸部に比べて肥厚している。外面にはヘラミガキを施している。688は頸部から口縁部にかけて大きく外反し，端部は若干下方を向いている。頸部には削出突帯があり，突帯上には沈線は5条ある。外面はヘラミガキが施されている。689の口縁部は頸部に比べて肥厚している。頸部にはヘラ描き沈線が現存で3条ある。外面は指でナデた後にヘラミガキを施している。口縁部内面の端部付近にヘラミガキが少し見られる。690は頸部に沈線を3条巡らせた幅広の削出突帯と1条の小さい削出



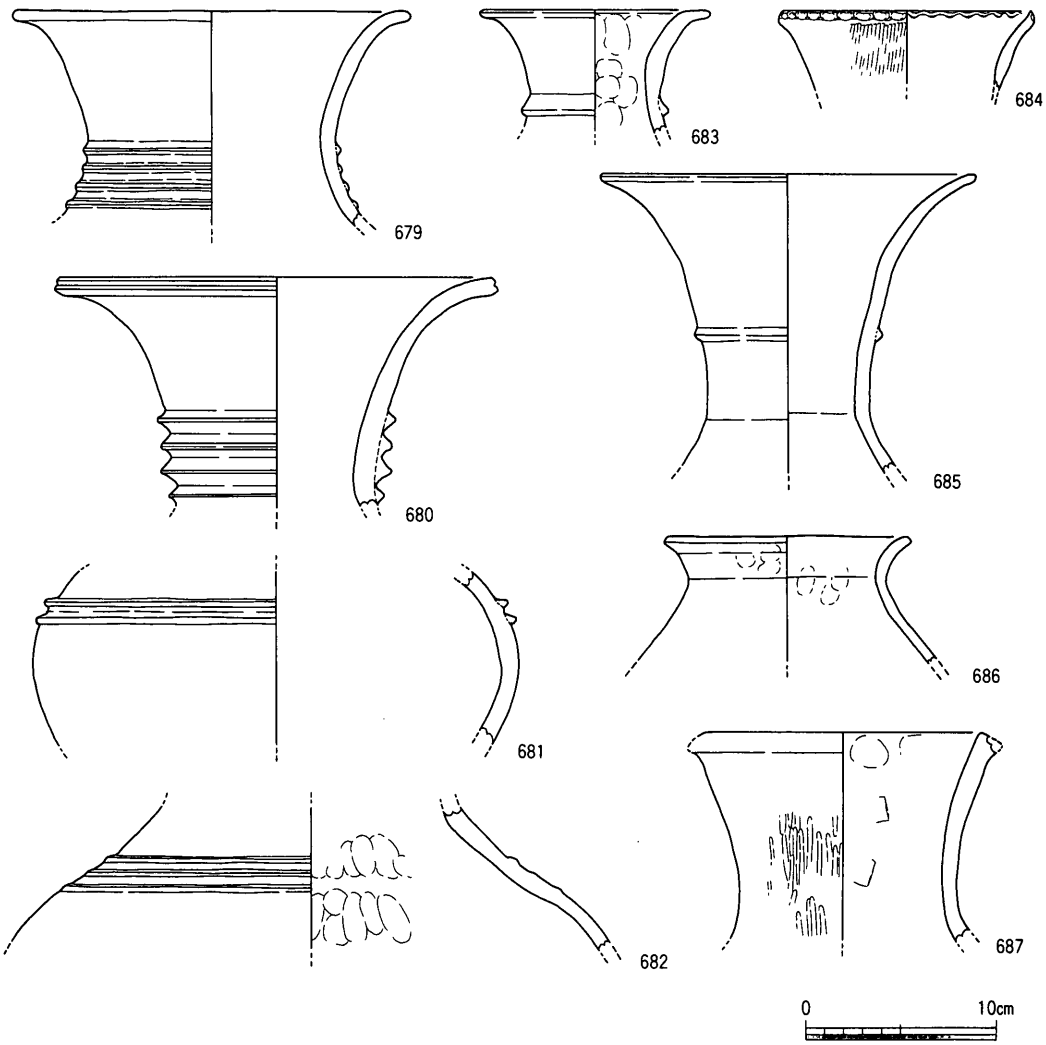
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
671	弥・壷	25.3			中・普、細・普	浅黄2.5Y7/3、淡黄2.5Y8/3	口縁部内面に三角形列点文、口縁部端部刻み目	全体にﾏﾒﾂ	
672	弥・壷	21.2			粗・少、中・多	灰白10YR7/1、灰黄褐10YR5/2	頸部に複条貼付突帯(2条1単位)、口縁部端部刻み目	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
673	弥・壷				中・普	灰白10YR8/2、淡黄2.5Y8/3	頸部に貼付突帯3条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
674	弥・壷			7.7	中・多、粗・少	淡橙5YR8/3、浅黄橙10YR8/3	体部に貼付突帯2条	外面指押え・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
675	弥・壷	18.2			粗・少、細・普	橙7.5YR6/6、浅黄2.5Y7/3	頸部に貼付突帯1条	外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
676	弥・壷	21.9			粗・少、中・普	灰黄2.5Y6/2、にぶい黄2.5Y6/3	口縁部内面に湾曲する貼付突帯、頸部に貼付突帯現存4条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
677	弥・壷	17.1			粗・少、細・多	にぶい黄2.5Y6/3、黄褐2.5Y5/3	頸部に貼付突帯現存4条	外面ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・指押え	
678	弥・壷				中・多	にぶい橙7.5YR7/4、浅黄橙7.5YR8/3	頸部に貼付突帯現存2条、体部に貼付突帯2条	外面ﾏﾒﾂ、内面指押え・ﾏﾒﾂ	

第397図　D区包含層出土遺物(1)(1/4)

突帯がある。全体にナデている。691は頸部にヘラ描き沈線が6条巡っている。外面は摩滅しているがハケ目が残っている。692は頸部から口縁部にかけて緩く外反し，頸部は細くなっており，外面にヘラ描き沈線が現存で7条巡っている。沈線の上の部分が肥厚している。693の口縁部は大きく開き，端部は丸く収める。頸部のヘラ描き沈線の下にはハケ目が見られ，口縁部の外面と内面はヘラミガキとなっている。694の口縁部は大きく開き，端部は欠損しているものの端部付近の内面には三角形列点文が2列配されている。頸部にはヘラ描き沈線が9条巡っている。全体に摩滅している。695の口縁部端部は先細りになっている。頸部のヘラ描き沈線は現存で6条であるが，一番上の沈線は途中で途切れている。696は頸部にヘラ描き沈線を8条巡らせたその上に，2本1単位の棒状浮文が現存で2単位貼り付けられている。外面にはハケ目が施されている。697は頸部にヘラ描き沈線が3条巡っているが，一番下の沈線は始点と終点がずれている。全体に摩滅しているが，内面には指押さえが多くなっている。体部上半は肩が張らない。698は内傾する頸部に現存する2条のヘラ描き沈線の下に三角形列点文と2列の竹管文を配している。699は体部に巡らせた5条のヘラ描き沈線の上下に竹管文を配している。外面はハケ目の後に板ナデを施し，内面は指押さえとナデを行なっている。700は外反する頸部で，外面にヘラ描き沈線を2条巡らせ，その間に竹管文を配している。701は頸部の下半部から体部にかけての部分である。頸部から体部上半にかけて6条1単位の櫛描き直線文と櫛描き波状文を巡らせている。体部は下半が欠損しているが全体に張りがなく，最大径も中央よりやや下側になっている。体部外面には太いヘラミガキを施し，内面には板ナデと指押さえを行なっている。702は外面に4条1単位の櫛描き直線文と5条1単位の櫛描き波状文がある。703は6条1単位の櫛描き直線文と単位は不明であるが櫛描き波状文が施されている。704はヘラ描き沈線の間にヘラ描き山形文とヘラ描き波状文を配している。705は8条1単位の櫛描き直線文の間に扇状文を配し，一番下に櫛描き波状文を加えている。

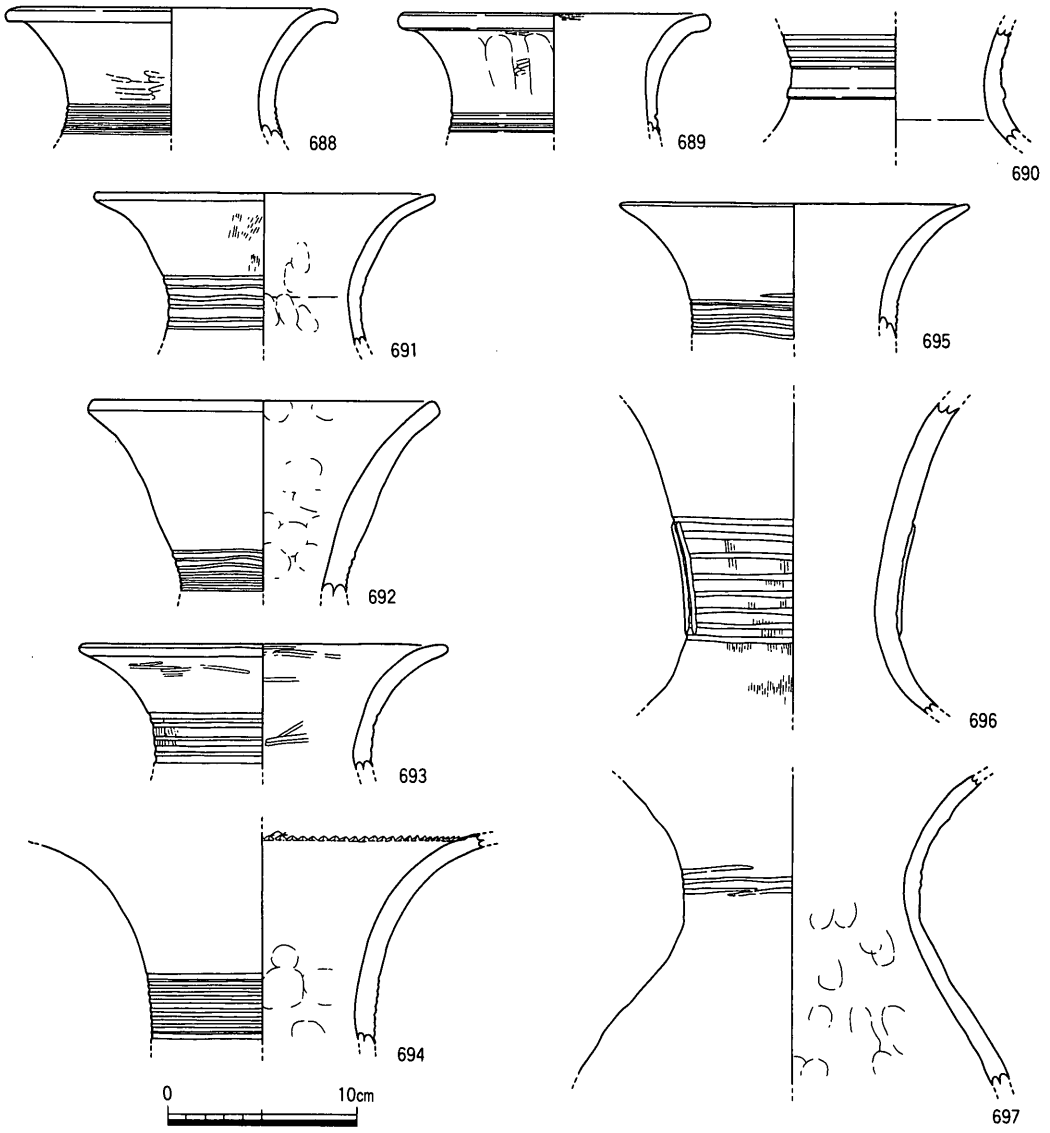
706～743は甕でこのうち707～713・715・716・718は如意形口縁，719～736・738～742は逆L字形口縁，706・714・717は口縁部を折り曲げとなっている。

706の口縁部端部は真横を向き，刻み目を入れている。全体に摩滅している。707は口縁部端部に刻み目を入れている。体部は内湾しており外面にヘラ描き沈線が5条巡り，板ナデを施している。708の口縁部端部は肥厚し，刻み目を入れている。体部は全体に指押さえとナデとなっている。709の体部は緩く内湾し，外面にヘラ描き沈線が3条巡る。710は体部外面に6条1単位の櫛描き直線文とヘラ描き沈線を組み合わせて施文している。外面



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
679	弥・壷	20.5			中・多	灰白2.5Y8/2	頸部に貼付突帯現存4条	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
680	弥・壷	22.8			細・多	にぶい黄橙10YR6/3、にぶい黄2.5Y6/3	頸部に複条貼付突帯（現存4条1単位）、口縁部端部へラ描沈線1条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
681	弥・壷				中・普	にぶい褐7.5YR5/4、浅黄橙10YR8/3	体部に貼付突帯2条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
682	弥・壷				中・多	にぶい赤橙10R6/4、橙2.5YR6/6	体部上半に削出突帯3条	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
683	弥・壷	11.7			中・少、細・普	灰黄褐10YR6/2 灰黄2.5Y7/2	頸部に貼付突帯1条	口縁部ﾏﾒﾂ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
684	弥・壷	13.0			粗・少、中・少	灰黄2.5Y6/2、暗灰黄2.5Y5/2	口縁部端部に指押えによる刻み目	口縁端部に強い指押え、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
685	弥・壷	19.6			粗・少、中・普	灰白2.5Y8/2	頸部に貼付突帯現存1条、突帯剝離痕有り	全体にﾏﾒﾂ	
686	弥・壷	12.5			細・多、中・多	灰白2.5Y8/2		口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾏﾒﾂ	
687	弥・壷	14.4			中・普、細・普	明赤褐5YR5/6 橙5YR6/6		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・指押え	

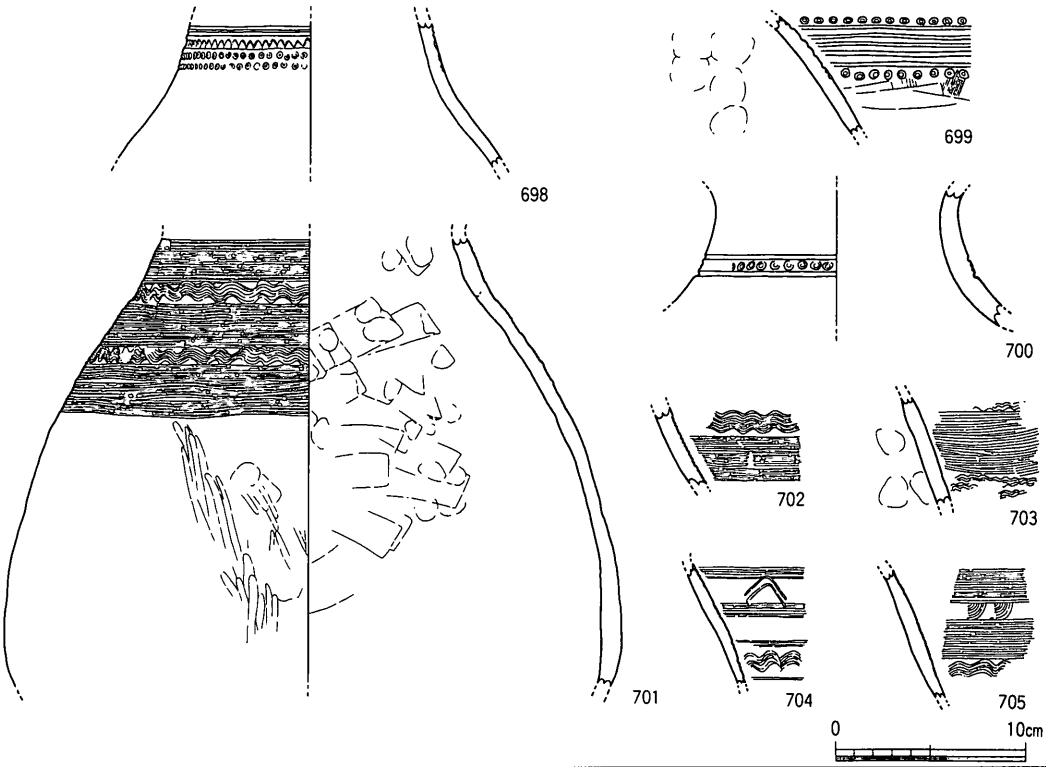
第398図　D区包含層出土遺物（2）（1／4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
688	弥・壺	15.8			中・普	明褐7.5YR5/6 浅黄2.5Y7/4	頸部に削出突帯(沈線5条)	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾏﾒﾂ	
689	弥・壺	15.8			細・少	黄灰2.5Y5/1、灰白2.5Y8/1	頸部にヘラ描沈線現存3条	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ	
690	弥・壺				中・少、細・普	にぶい黄2.5Y6/3	頸部に削出突帯(沈線3条)＋削出突帯	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
691	弥・壺	17.7			中・多、粗・少	浅黄橙7.5YR8/4	頸部にヘラ描沈線6条	外面ﾊｹ目、内面指押え・ﾏﾒﾂ	
692	弥・壺	18.0			中・多、細・普	浅黄2.5Y7/3	頸部にヘラ描沈線現存7条	口縁部肥厚、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
693	弥・壺	19.2			中・普	にぶい黄褐10YR5/3、にぶい黄2.5Y6/3	頸部にヘラ描沈線現存5条	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
694	弥・壺				中・多	にぶい黄橙10YR7/3、赤褐5YR4/6	口縁部内面に三角形列点文2列、頸部にヘラ描沈線現存9条	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
695	弥・壺	18.0			中・普	にぶい黄橙10YR7/4	頸部にヘラ描沈線現存6条	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
696	弥・壺				細・普、中・普	灰黄2.5Y7/2	頸部にヘラ描沈線8条、2本1単位の棒状浮文現存2個	外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
697	弥・壺				粗・普、細・多	浅黄2.5Y7/3	頸部にヘラ描沈線3条	全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	

第399図　D区包含層出土遺物(3)(1/4)

は摩滅しているがハケ目が見られ，一部は口縁部直下まで及んでいる。711の口縁部は長く，外面にハケ目を加えている。体部は直線的に外傾しており，外面にヘラ描き沈線を6条巡らすが，一番下のものは太くなっている。また外面にはハケ目を施している。712は口縁部内面にハケ目を施す。体部は直線的で，外面に5条1単位の櫛描き直線文を巡らせている。713の口縁部端部は平坦に近い。体部外面にヘラ描き沈線が3条巡っている。714の口縁部端部は真横を向いている。体部外面には8条1単位の櫛描き直線文と波状文と思われるものの一部が見える。715は体部外面に6条1単位の櫛描き直線文と櫛描き波状文が施されている。内面には全体に丁寧にヘラミガキが施されている。716の口縁部は短く

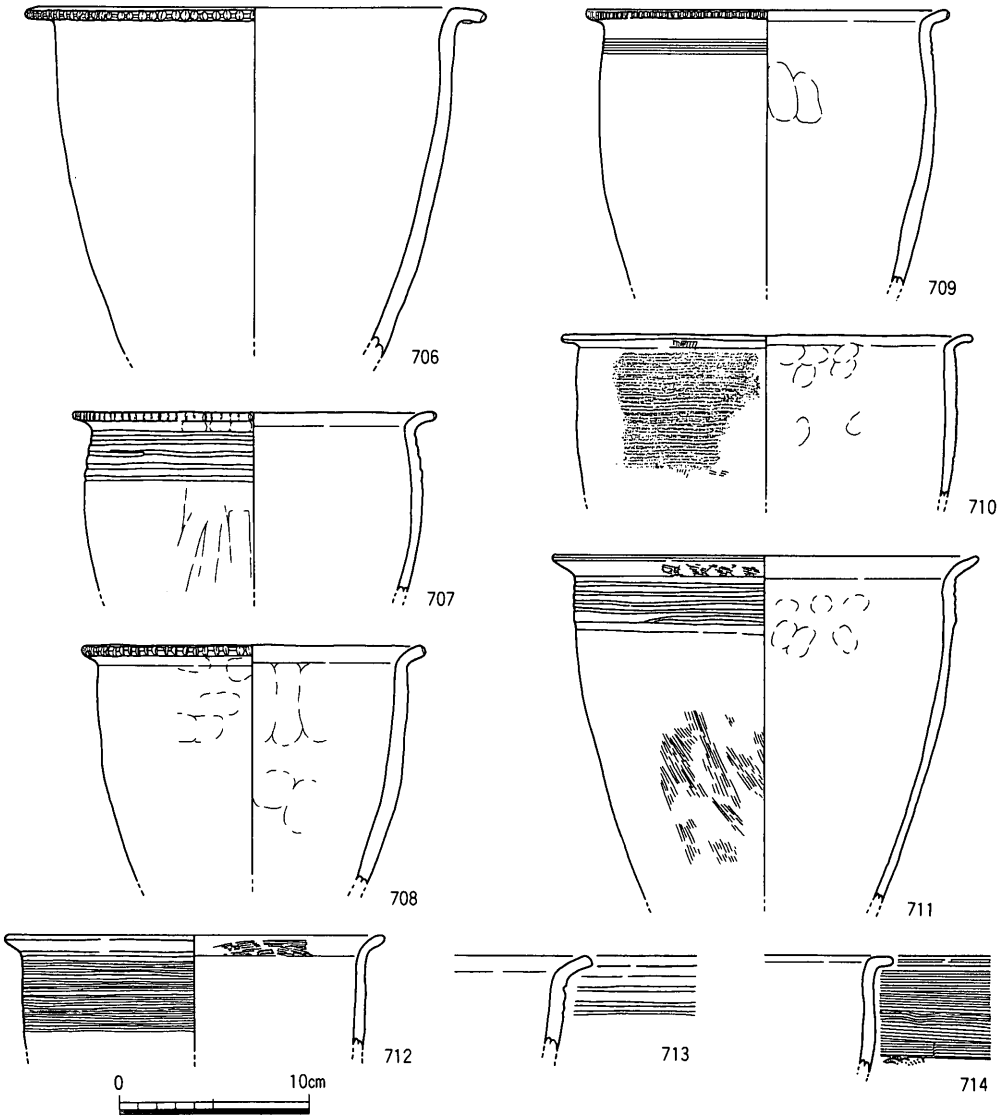


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
698	弥・壷				中・多、粗・少	にぶい黄橙10YR7/4	頸部にヘラ描沈線現存2条、三角列点文、竹管文2列	全体にﾏﾒﾂ	
699	弥・壷				粗・少、中・普	橙5YR6/6、灰黄2.5Y7/2	体部にヘラ描沈線5条とその上下に竹管文	外面ﾊｹ目→板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
700	弥・壷				中・多	橙7.5YR6/6、灰黄2.5Y7/2	頸部にヘラ描沈線2条とその間に竹管文	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
701	弥・壷				細・少、微・多	灰黄2.5Y6/2、にぶい黄橙10YR7/4	櫛描文（直線文･波状文）	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
702	弥・壷				中・多	にぶい黄橙10YR5/4	櫛描文（直線文･波状文）	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
703	弥・壷				細・多	にぶい黄橙10YR7/4、浅黄2.5Y7/3	櫛描文（直線文･波状文）	外面ﾅﾃﾞ、内面指押え・ﾏﾒﾂ	
704	弥・壷				細・少、微・普	にぶい黄2.5Y6/3	ヘラ描沈線（直線文･山形文･波状文）	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
705	弥・壷				中・多	にぶい橙7.5YR6/4、黄灰2.5Y4/1	櫛描文（直線文･波状文）、扇状文	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

第400図　D区包含層出土遺物（4）（1/4）

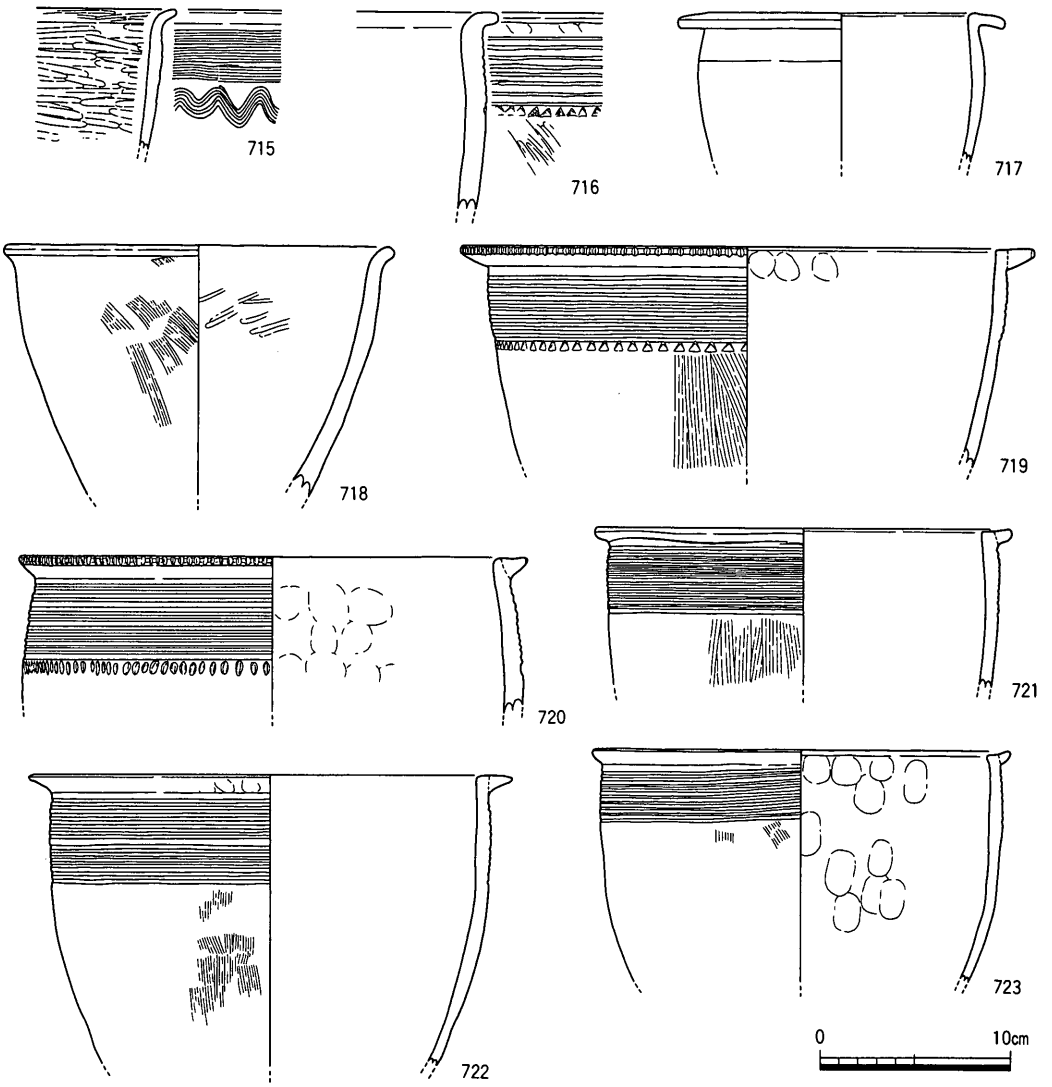
端部は真横を向いており，指押さえを行なっている。体部は厚手で，外面にヘラ描き沈線８条と三角形列点文がある。外面にはヘラミガキが施されている。717の口縁部は長めでやや下方に折り曲げられている。全体にナデている。718の口縁部は短く外反する。体部は強く外傾している。外面はハケ目，内面はヘラミガキとなっている。

719は口縁部端部に刻み目を入れている。体部は外傾しており，ヘラ描き沈線９条と三角形列点文を巡らせている。体部外面はハケ目，内面はナデている。720の口縁部端部は先細りで若干上方を向いており，刻み目を入れている。体部は外面にヘラ描き沈線11条と列点文を巡らせている。全体にナデている。721の口縁部端部は上方を向いている。体部外面のヘラ描き沈線は14条と多条である。体部外面にはハケ目を施している。722の口縁部端部は先細りで，体部は下部が内湾する。体部外面のヘラ描き沈線は12条であるが，６条のまとまりになっており，６条目と７条目の間が若干開いている。口縁部は外面に指押さえを行い，体部外面にはハケ目を施している。723の口縁部端部は上方を向き内面側がやや突出している。体部外面はハケ目の後にナデており，内面は口縁部付近に指押さえが多い。724は口径が32.6cmと大型の甕で，体部外面には５条１単位の櫛描き直線文を巡らせ，その下には竹管状の工具による刺突文が配されている。725の口縁部には指押さえを強く施し，そのため端部は先細りになっている。体部は直線的に外傾し，外面には４条１単位の櫛描き直線文が巡る。体部外面は板ナデ，内面には指押さえが顕著である。726は口縁部外面に板状工具の木口痕が見られる。体部外面には６条１単位の櫛描き直線文と櫛描き波状文がある。全体に摩滅している。727は口縁部端部は若干上方を向いている。口縁部には強く指押さえを行い，内面側は指押さえにより窪んでいる。体部は全体に内湾しており中央やや上が膨らんでいる。体部外面のヘラ描き沈線は15条と多条でその下に列点文を加えている。体部外面はハケ目の後にナデており，内面はナデている。底部は突出している。728は口縁部端部に刻み目を入れる。体部のヘラ描き沈線は６条であるが全体に蛇行している。外面にはハケ目を施している。729の口縁部は外側に大きく突出しており全体に歪み，端部には刻み目を入れている。体部にはヘラ描き沈線が９条巡り，沈線の下側の器壁が肥厚している。730の口縁部端部は先細りで刻み目を入れている。体部は直線的で，ヘラ描き沈線は16条と多条である。731の体部には４条１単位の櫛描き直線文が巡る。732は口縁部に指押さえを行い，端部は先細りで刻み目を入れている。体部のヘラ描き沈線は10条あるが部分的に蛇行している。内面にはヘラミガキを施している。733は口縁部の内面は強い指押さえのために窪んでいる。体部は内湾し外面にはヘラ描き沈線が８



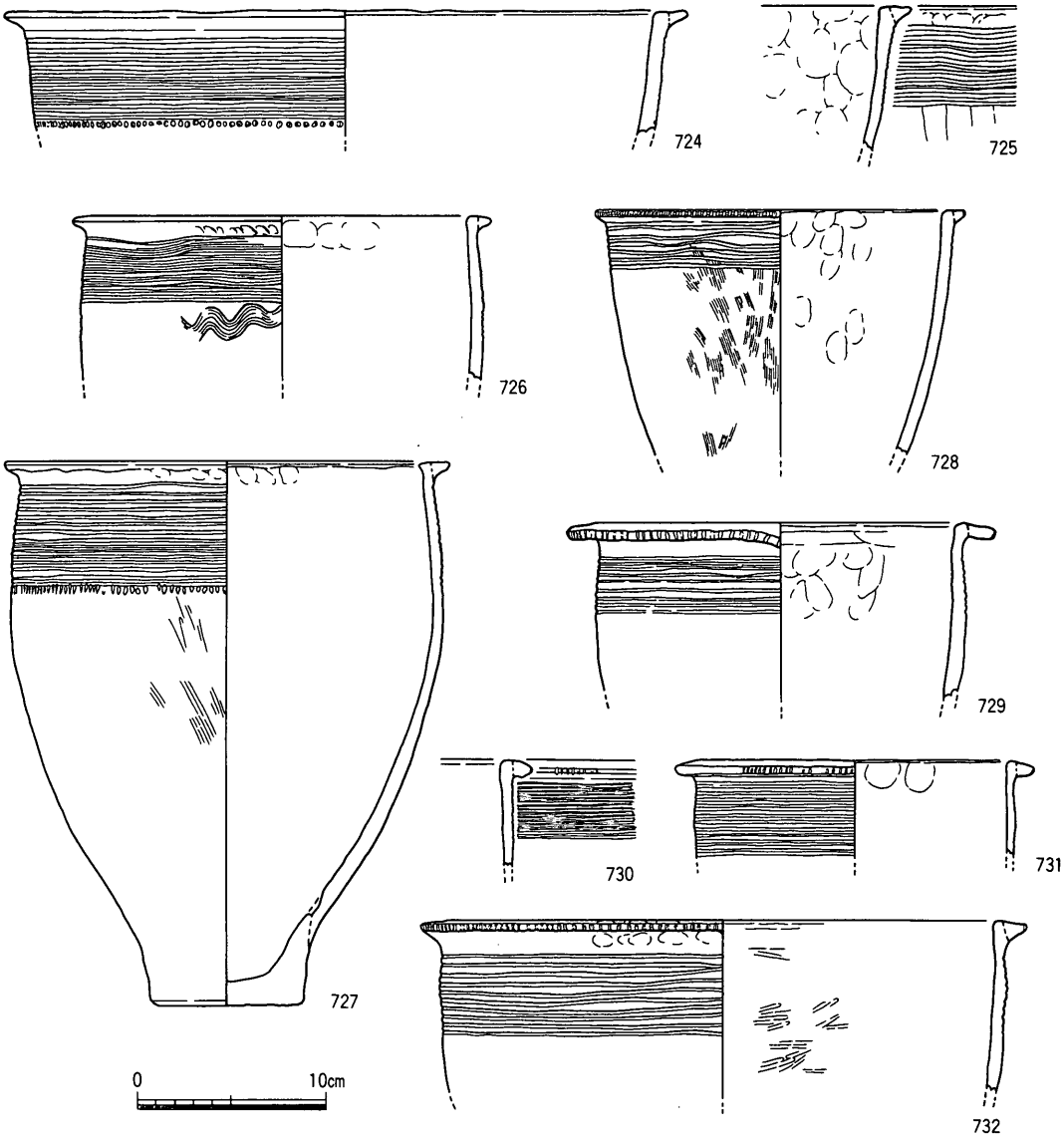
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
706	弥・甕	24.1			中・多	浅黄2.5Y7/3	口縁部端部刻み目	口縁部折曲げ、全体にﾏﾒﾂ	
707	弥・甕	18.9			中・多	にぶい黄橙10YR7/3、浅黄2.5Y7/3	ヘラ描沈線5条、口縁部端部刻み目	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	胎土に金雲母を含む
708	弥・甕	17.5			粗・少、中・多	浅黄橙10YR8/3灰白2.5Y8/2	口縁部端部刻み目	如意形口縁、外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
709	弥・甕	18.6			中・普	にぶい橙7.5YR6/4、にぶい黄2.5Y6/3	ヘラ描沈線3条、口縁部端部刻み目	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
710	弥・甕	21.3			細・多、中・多	にぶい黄橙10YR6/4、灰黄2.5Y7/2	櫛描文（直線文）＋ヘラ描沈線	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
711	弥・甕	22.1			粗・普、中・普	にぶい黄褐10YR5/3、にぶい黄橙10YR7/3	ヘラ描沈線6条	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、口縁部外面ﾊｹ目、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
712	弥・甕	19.8			微・普、細・少	にぶい黄橙10YR7/4、橙5YR6/6	櫛描文（直線文）	如意形口縁、口縁部内面ﾊｹ目、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
713	弥・甕	不能			細・少、中・少	にぶい黄褐10YR5/4、黄褐10YR5/6	ヘラ描沈線3条	如意形口縁、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
714	弥・甕	*19.4			細・多	にぶい赤褐5YR4/3、暗灰黄2.5Y5/2	櫛描文(直線文＋波状文)	口縁部折曲げ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	

第401図　D区包含層出土遺物（5）（1/4）



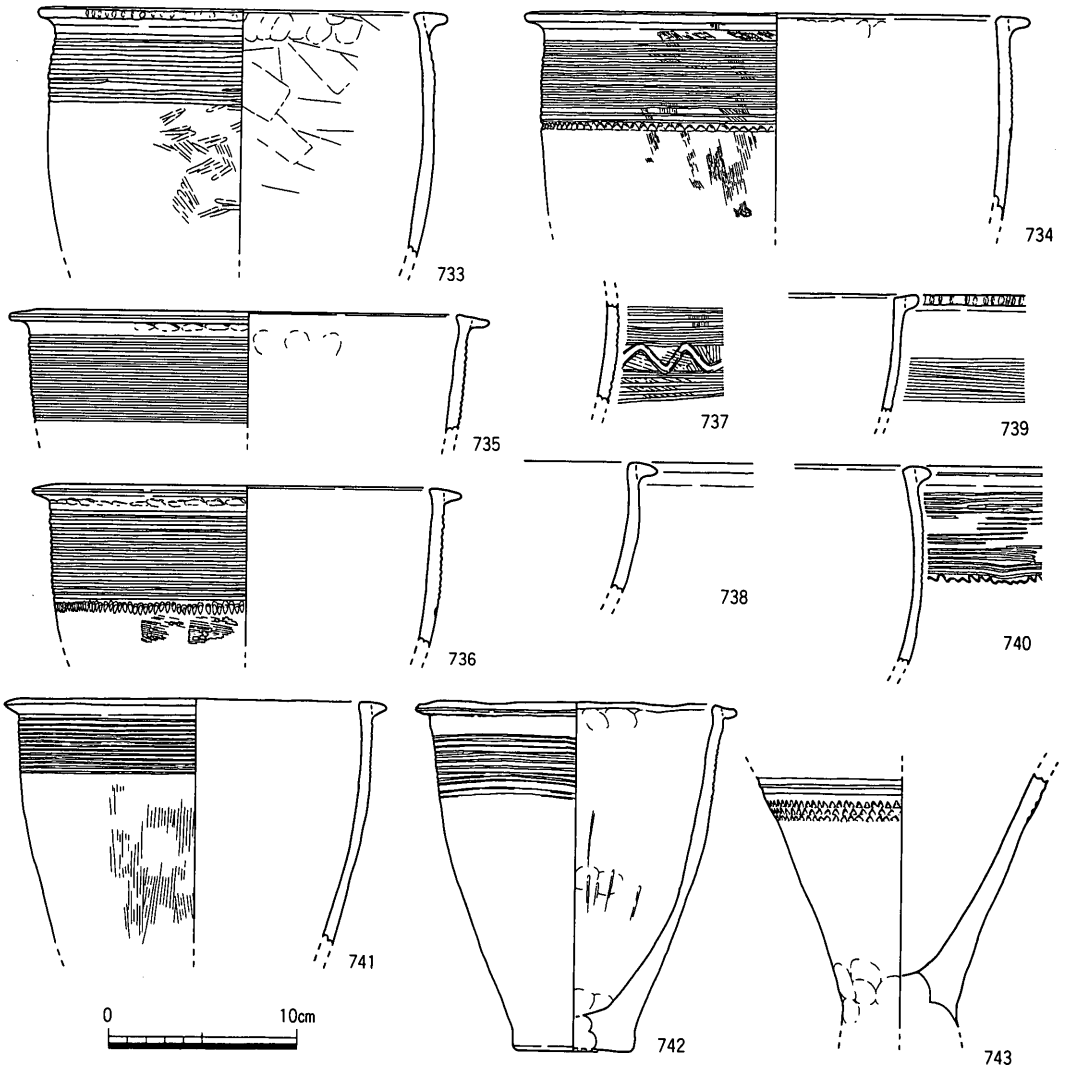
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
715	弥・甕	*21.2			細・少	にぶい黄橙10YR6/3	櫛描文(直線文＋波状文)	如意形口縁、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
716	弥・甕	*34.8			中・多	浅黄2.5Y7/3、にぶい黄橙10YR6/3	ヘラ描沈線8条、三角形列点文	如意形口縁、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ	
717	弥・甕	13.4			細・多、中・少	にぶい黄褐10YR4/3、灰黄2.5Y6/2		口縁部折曲げ、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
718	弥・甕	19.9			中・多	灰黄2.5Y6/2		如意形口縁、外面ﾊｹ目、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	
719	弥・甕	26.2			中・少、細・多	橙5YR6/6、にぶい黄褐10YR5/4	ヘラ描沈線9条、三角形列点文、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
720	弥・甕	23.4			中・普、細・普	灰黄2.5Y8/2	ヘラ描沈線11条、列点文、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
721	弥・甕	18.8			中・多	橙5YR6/6、浅黄2.5Y7/3	ヘラ描沈線14条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
722	弥・甕	21.8			粗・少、中・多	灰黄褐10YR6/2 灰白2.5Y8/2	ヘラ描沈線12条	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
723	弥・甕	19.4			中・多	黒褐10YR3/1	ヘラ描沈線9条	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	

第402図　D区包含層出土遺物（6）（1/4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
724	弥・甕	32.6			微・普、細・少、中・少	にぶい黄褐10YR4/3、黄褐2.5Y5/3	櫛描文（直線文）、竹管状工具による刺突文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
725	弥・甕	*19.6			中・普	褐10YR4/4	櫛描文（直線文）	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
726	弥・甕	19.8			粗・少、細・普	橙7.5YR6/6、浅黄2.5Y7/3	櫛描文（直線文・波状文）	口縁部直下に板状工具痕、全体にﾏﾒﾂ	
727	弥・甕	20.2	28.5	7.5	粗・少、細・多	にぶい黄褐10YR5/3、にぶい黄2.5Y6/3	ヘラ描沈線15条、列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
728	弥・甕	17.2			微・多、細・普	にぶい黄褐10YR5/3、にぶい黄橙10YR6/3	ヘラ描沈線6条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
729	弥・甕	18.4			細・普	にぶい黄橙10YR6/3、灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線9条、口縁部端部刻み目	口縁部歪む、口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
730	弥・甕	*19.2			中・多	明赤褐5YR5/6、にぶい黄2.5Y6/3	ヘラ描沈線16条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
731	弥・甕	16.0			中・普	にぶい黄橙10YR6/3	櫛描文（直線文）	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
732	弥・甕	28.6			粗・少、中・普	灰黄褐10YR5/2、灰白10YR8/2	ヘラ描沈線10条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	

第403図　D区包含層出土遺物（7）（1/4）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
733	弥・甕	18.0			細・多、中・普	にぶい褐7.5YR 5/3、浅黄2.5Y 7/3	ヘラ描沈線8条、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内面板ﾅﾃﾞ	
734	弥・甕	23.0			細・多、中・普	にぶい橙7.5YR 6/4、灰黄2.5Y 7/2	ヘラ描沈線15条、三角形列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
735	弥・甕	21.8			中・普	にぶい黄橙10YR5/3、にぶい黄2.5Y6/4	ヘラ描沈線現存15条	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
736	弥・甕	19.2			中・普	にぶい黄橙10YR5/3、にぶい黄2.5Y6/3	ヘラ描沈線14条、列点文	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
737	弥・甕				中・普	黒2.5Y2/1、灰黄褐10YR5/2	ヘラ描沈線現存7条＋5条、沈線文帯の間に半截竹管による波状文	外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	
738	弥・甕	*24.8			粗・少、細・多	灰白2.5Y8/2		口縁部ﾅﾃﾞ、全体にﾏﾒﾂ	
739	弥・甕	*19.2			中・少、細・少	にぶい橙7.5YR 6/4、にぶい赤褐5YR5/4	櫛描文（直線文）、口縁部端部刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
740	弥・甕	*15.6			中・普	橙5YR6/6、にぶい黄橙10YR7/4	櫛描文(直線文)＋ヘラ描波状文	全体にﾏﾒﾂ	
741	弥・甕	17.3			細・普、中・少	明赤褐5YR5/6 灰黄2.5Y7/2	ヘラ描沈線13条	口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
742	弥・甕	14.4			中・多	浅黄橙10YR8/3 橙5YR7/6	櫛描文（直線文）	口縁部ﾏﾒﾂ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え	
743	弥・甕				中・普	灰白10YR8/2、浅黄橙10YR8/4	ヘラ描沈線現存2条、三角形列点文3列	外面指押え・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	

第404図　D区包含層出土遺物（8）（1/4）

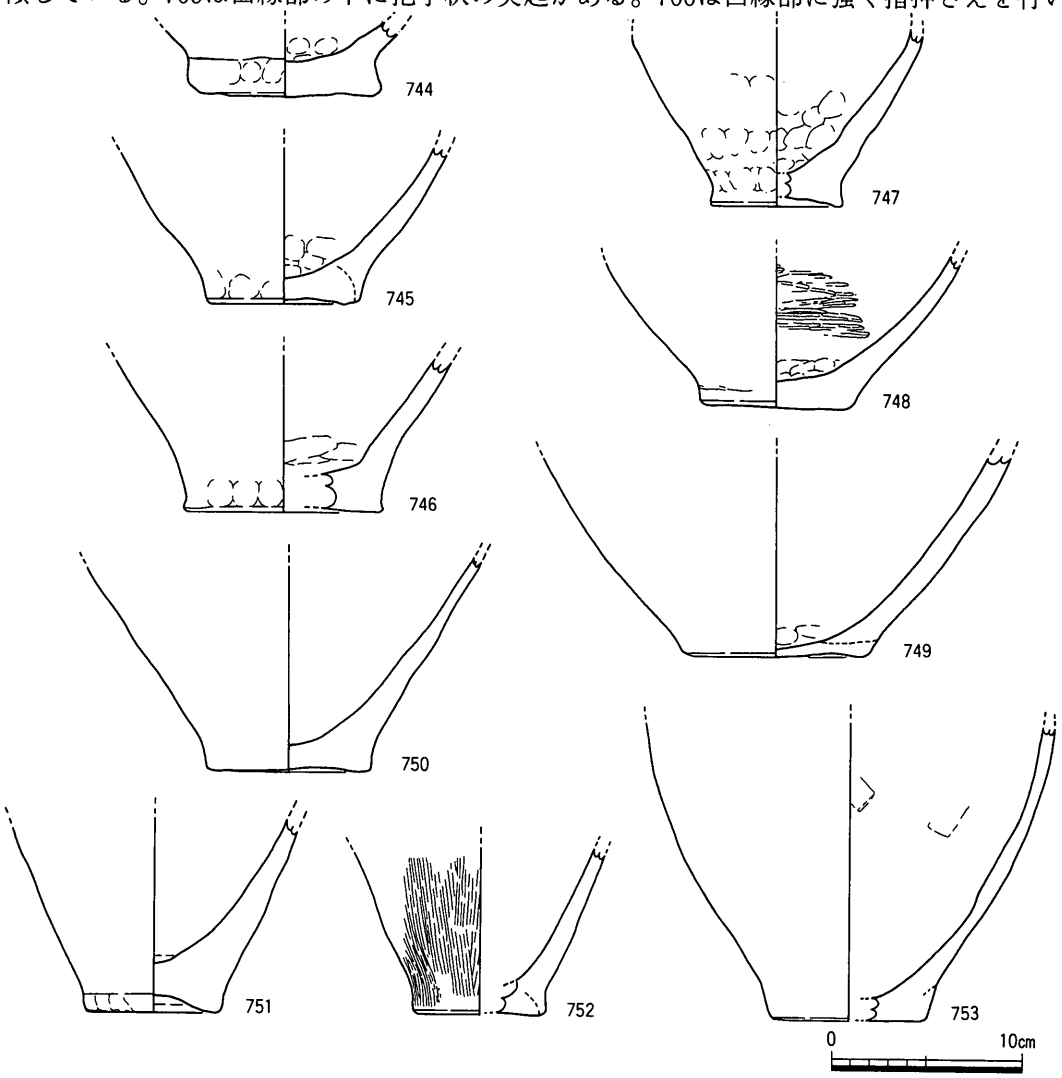
条巡る。外面はヘラミガキで部分的にナデており，内面は板ナデである。734の体部外面のヘラ描き沈線は15条と多条で，その下に三角形列点文を配している。外面のハケ目は口縁部まで及んでいる。内面はナデている。735の口縁部端部は下方を向き，内面側に肥厚している。口縁部には指押さえが強い。体部外面のヘラ描き沈線は現存で15条と多条である。736の口縁部端部は先細りで，口縁部の外面下部には指押さえが顕著で，一部に爪の痕が残っている。体部には14条と多条のヘラ描き沈線を巡らせ，その下に列点文を配している。外面にはハケ目を施す。737はヘラ描き沈線が７条と５条残っており，沈線文帯の間には半截竹管による波状文を配している。738の口縁部端部は先細りで，体部は内湾している。739の口縁部端部は上方を向き，刻み目を入れている。体部には口縁部からやや間隔を開けて４条１単位の櫛描き直線文が巡る。740の体部は全体に内湾し，外面には３条１単位の櫛描き直線文の下にヘラ描きのやや不規則な波状文を配している。741の体部は若干内湾し，外面にはハケ目を施す。742は口縁部に指押さえを行う。体部は中央やや下で緩く内湾する。外面には４条１単位の櫛描き直線文を巡らし，内面にはヘラミガキが見られる。底部は突出し肥厚している。743の底部は欠損しているが肥厚している。体部は直線的でヘラ描き沈線が現存で２条あり，その下に三角形列点文が３列配されている。

744～758は壺および甕の底部である。744の底部は突出しており，側面に指押さえを行う。745の底部は高台状で，体部は内湾気味に立ち上がる。746は底部側面に指押さえを行い，内面は指で螺旋状にナデている。747は内・外面に指押さえが顕著である。底部は上げ底になっている。748は内面にヘラミガキを施している。外面はナデている。749の底部は体部に比べて極端に薄くなっている。750の底部内面はなだらかになっている。751の底部は上げ底になっている。752は外面全体にハケ目を施している。753の体部は内湾して立ち上がる。内面には板ナデの痕跡がある。一応甕としたが壺かも知れない。755の底部は突出気味で，内面に指押さえが顕著である。体部は直線的に立ち上がる。756の内面は板ナデとなっている。757は底部外面のやや内側を指で器壁を抉り取りながらナデている。体部外面にはハケ目を施し，内面は指で横方向にナデている。758の外面は板ナデで，内面は指で縦方向に，底部付近は横方向にナデている。

759～761は甑である。760は底部に外面側から穿孔を行っている。内面には指押さえを施している。761は底部の中央から片寄った部分に穿孔を行っている。体部外面にはハケ目を施している。

762～767は鉢である。762の口縁部は如意形になり，端部は平坦である。口縁部のやや

下には段があり，全体にナデている。763は逆L字形口縁であるが，外側への突出は弱く端部は先細りになっている。口縁部付近は肥厚している。764は如意形口縁で，体部は外傾している。765は口縁部の下に把手状の突起がある。766は口縁部に強く指押さえを行い

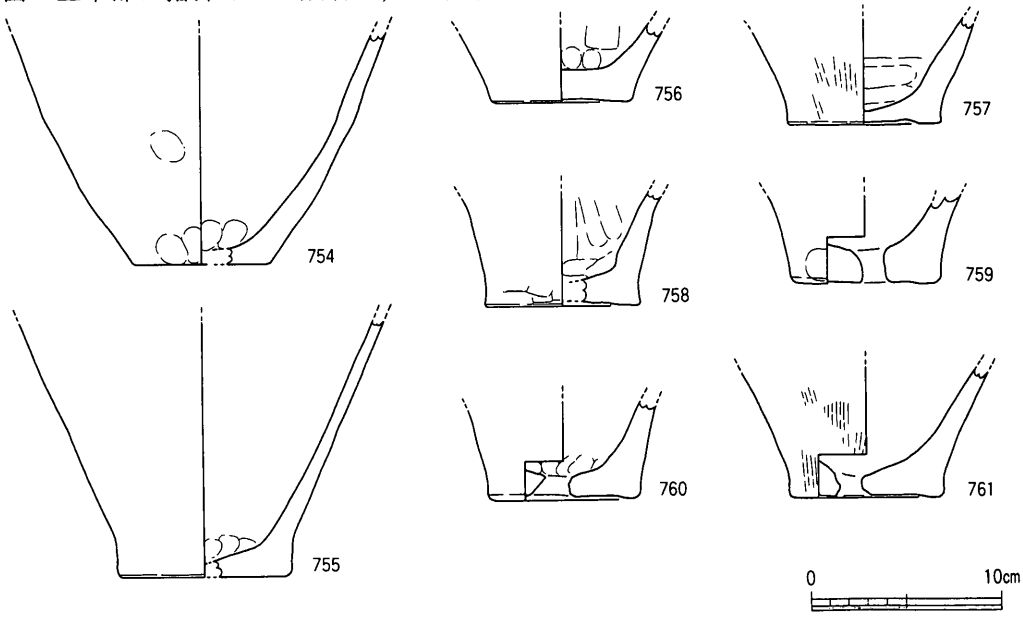


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
744	弥・壷			10.0	中・普	灰黄褐10YR6/2、灰白5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
745	弥・壷			8.1	中・多	にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面指押え・ﾏﾒﾂ	
746	弥・壷			10.0	粗・少、中・普	橙5YR7/6、灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ	
747	弥・壷			6.8	中・普	浅黄橙10YR8/3、褐灰7.5YR4/1		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
748	弥・壷				細・普	灰白2.5Y8/2、暗灰黄2.5Y5/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指押え	
749	弥・壷			9.8	中・普	灰黄2.5Y7/2、灰白2.5Y8/2		底部の器壁薄い、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ・指押え	
750	弥・甕			8.6	粗・少、中・多	浅黄橙10YR8/3、暗灰黄2.5Y4/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
751	弥・甕			7.1	中・多	にぶい橙2.5YR6/4 浅黄橙10YR8/3		全体にﾏﾒﾂ、底部外面ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	
752	弥・甕			7.0	中・少、細・多	にぶい黄橙10YR7/4 灰黄褐10YR6/2		外面ﾊｹ目、内面ﾏﾒﾂ	
753	弥・甕			8.1	中・普、細・普	橙5YR6/6、黒2.5Y2/1		全体にﾏﾒﾂ	

第405図　D区包含層出土遺物（9）（1/4）

端部には指押さえにより刻み目を入れている。体部外面にはハケ目が見られる。767はボウル形の鉢で，底部は丸底である。口縁部と体部の内面に指押さえが顕著である。外面は板ナデである。上から見ると楕円形の作りになっている。

768～781は蓋である。768はつまみ部に２個１単位の穿孔が向かい合ってある。769はつまみ部の側面が横に突出している。770のつまみ部は突出しており，側面に指押さえを行なっている。772は向かい合った位置に穿孔が１個ずつある。外面はハケ目である。甕の底部の可能性もある。773のつまみ部は窪み，向かい合った位置に穿孔が１個ずつある。774のつまみ部は小さく，中央部が窪んでいる。775のつまみ部は僅かに窪み，側面に指押さえを行なう。体部は下半で屈曲して開く。器壁は中央部分が薄くなり，裾部で再び肥厚する。外面にはハケ目を施しているが，裾部には鉄分が付着しており観察が困難である。内面は上半部に指押さえが顕著で，下半部はナデている。776はつまみ部に２個１単位の



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
754	弥・甕			7.2	中・普	にぶい橙2.5Y6/3、灰白10YR8/2		全体にﾏﾒﾂ	
755	弥・甕			9.0	中・多	にぶい黄橙10YR7/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
756	弥・甕			7.4	中・少	にぶい橙5YR6/4黄灰2.5Y5/1		外面ﾏﾒﾂ、内面板ﾅﾃﾞ・指押え	
757	弥・甕			8.1	粗・少、中・普	浅黄橙7.5YR8/3浅黄橙10YR8/3		外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
758	弥・甕			8.0	細・普	にぶい褐7.5YR5/3、にぶい黄橙10YR6/3		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
759	弥・甑			8.0	中・普	橙5YR6/6、にぶい橙7.5YR7/4		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
760	弥・甑			7.9	細・多	にぶい橙7.5YR7/4、にぶい黄橙10YR7/3		全体にﾏﾒﾂ、内面指押え	
761	弥・甑			7.6	粗・少、中・普	橙5YR6/6、にぶい黄橙10YR6/3		外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	

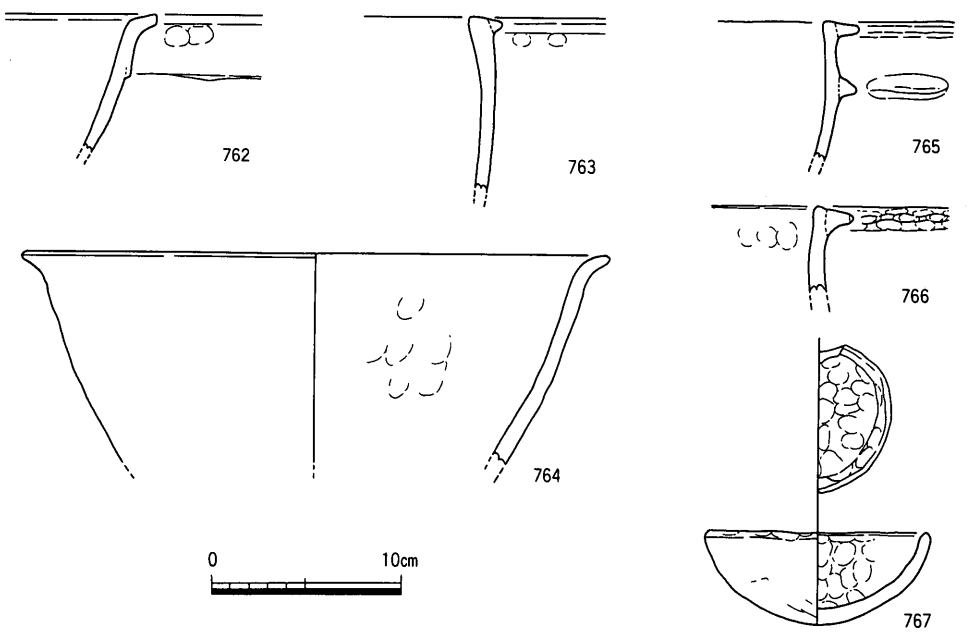
第406図　Ｄ区包含層出土遺物(10)（１/４）

未貫通の穿孔が向かい合ってある。外面は板ナデである。777・779の外面も板ナデである。778はつまみ部の側面が横に突出する。780のつまみ部は僅かに窪み，器壁は薄くなっている。781のつまみ部は大きく窪み，体部は内湾している。

782はミニチュアの甕で，底部側面に指押さえを行なう。底部は上げ底である。783もミニチュアの甕で，体部は下半で僅かに膨らむ。底部は高台状になっており，体部外面には板ナデ，内面はナデている。

784は不明土製品である。中央部が鍔状になっており，下部は欠損しているが中実になっている。

785は須恵器の杯で断面方形の高台が付く。786は黒色土器A類の椀で断面三角形の高めの高台が付く。787は土師器の椀で，全体に回転ナデを施している。788は白磁碗で，底部はヘラ切りである。高台は断面方形のしっかりとしたものが付き，底部外面には離れ砂が付着している。789は青磁碗で，内面見込み部に砂目積みの痕跡がある。

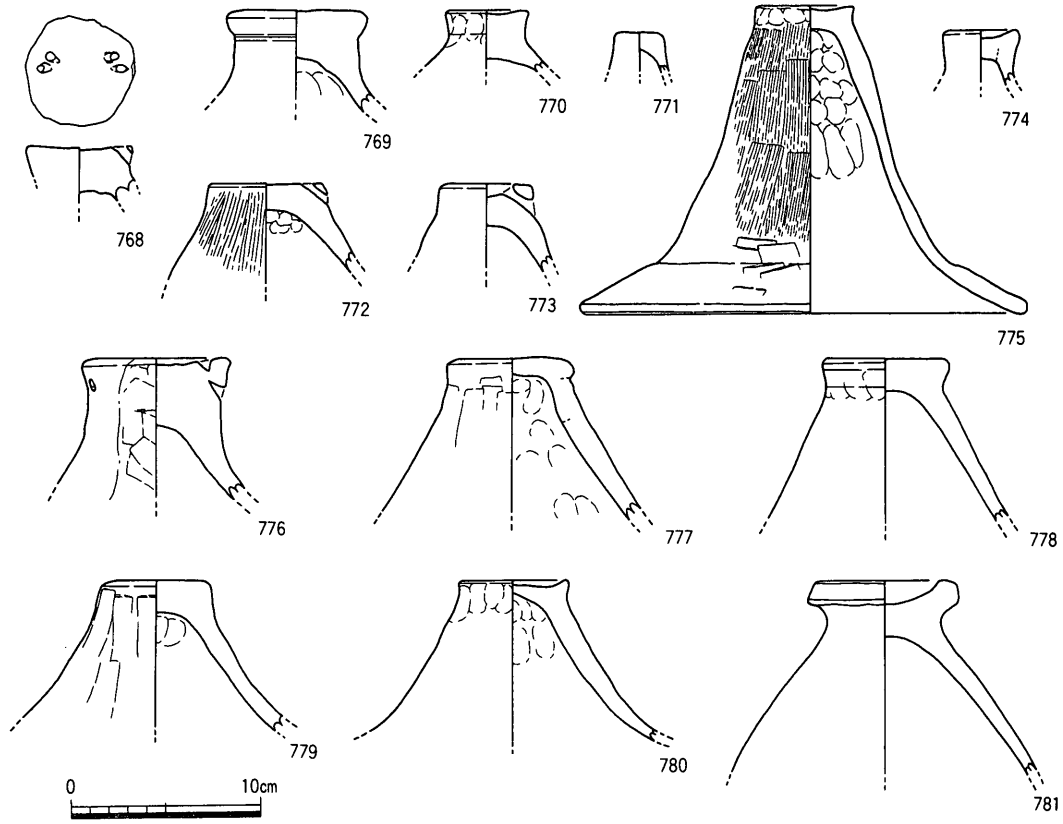


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
762	弥・鉢	*31.2			中・多、細・普	淡黄2.5Y8/3、灰白2.5Y8/2		口縁部下に段、口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
763	弥・鉢	*54.8			中・普	灰白10YR8/2		外面指押え、全体にﾏﾒﾂ	
764	弥・鉢	30.8			粗・普、中・普	浅黄橙10YR8/3		口縁部ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
765	弥・鉢	*34.0			中・多	灰白2.5Y8/2	口縁部下に把手状の突起	全体にﾏﾒﾂ	
766	弥・鉢	*46.0			中・普	浅黄橙10YR8/3	口縁部端部指押えによる刻み目	口縁部ﾅﾃﾞ・指押え、外面ﾍｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
767	弥・鉢	11.4	4.9		細・多、中・少	灰黄2.5Y7/2		楕円形、内面指押え顕著、外面板ﾅﾃﾞ	

第407図　D区包含層出土遺物(11)（1/4）

790は土錘で先端部が細くなっている。791は中央部分に2個の穿孔がある。半分欠損しているが，円形に近いものであろう。

792～797は打製石庖丁である。792は体部の細片であるが，刃部は直線で，背部は外湾しているものと思われる。背部には敲打痕がある。793は刃部は直線，背部は外湾であるが山

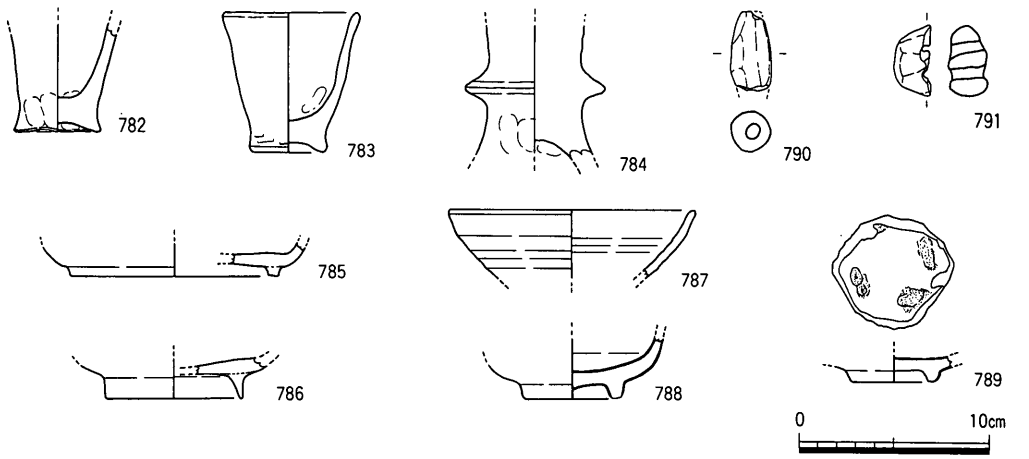


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
768	弥・蓋	つまみ径5.6			粗・少、中・普	にぶい黄橙10YR6/3	2個1単位の穿孔が向い合って2単位	外面ﾅﾃﾞ、内面指押え	
769	弥・蓋	つまみ径7.4			細・多	灰白2.5Y8/2		外面ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
770	弥・蓋	つまみ径4.2			細・多、微・多	灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
771	弥・蓋	つまみ径2.4			中・普	灰白2.5Y8/2、灰黄2.5Y7/2		全体にﾏﾒﾂ	
772	弥・蓋	つまみ径5.9			中・普	にぶい黄橙10YR6/3	向い合った位置に穿孔を1個ずつ施す	外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
773	弥・蓋	つまみ径5.0			粗・少、中・多	明赤褐2.5YR5/6、灰黄褐10YR6/2	向かい合った位置に穿孔1個ずつ	外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	
774	弥・蓋	つまみ径3.7			細・普	灰黄2.5Y7/2、にぶい黄2.5Y6/3		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
775	弥・蓋	つまみ径5.1	15.9	口縁部径23.0	中・少、細・普	にぶい黄橙10YR7/3 灰黄褐10YR6/2		外面ﾊｹ目・指押え・板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
776	弥・蓋	つまみ径7.6			中・多、粗・少	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい橙7/5YR6/4	2個1単位のすべて未貫通の穿孔が2単位	外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾏﾒﾂ	
777	弥・蓋	つまみ径6.5			粗・少、細・普	灰白2.5Y8/2		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
778	弥・蓋	つまみ径6.4			細・多、中・多	灰黄2.5Y7/2、灰白2.5Y8/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾏﾒﾂ	
779	弥・蓋	つまみ径5.8			中・少、細・多	浅黄2.5Y8/3、灰黄2.5Y7/2		外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
780	弥・蓋	つまみ径5.8			中・多	にぶい褐7.5YR5/4 にぶい黄橙10YR5/3		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
781	弥・蓋	つまみ径7.4			中・多	淡黄2.5Y8/3、灰黄2.5Y7/2		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	

第408図　D区包含層出土遺物(12)（1/4）

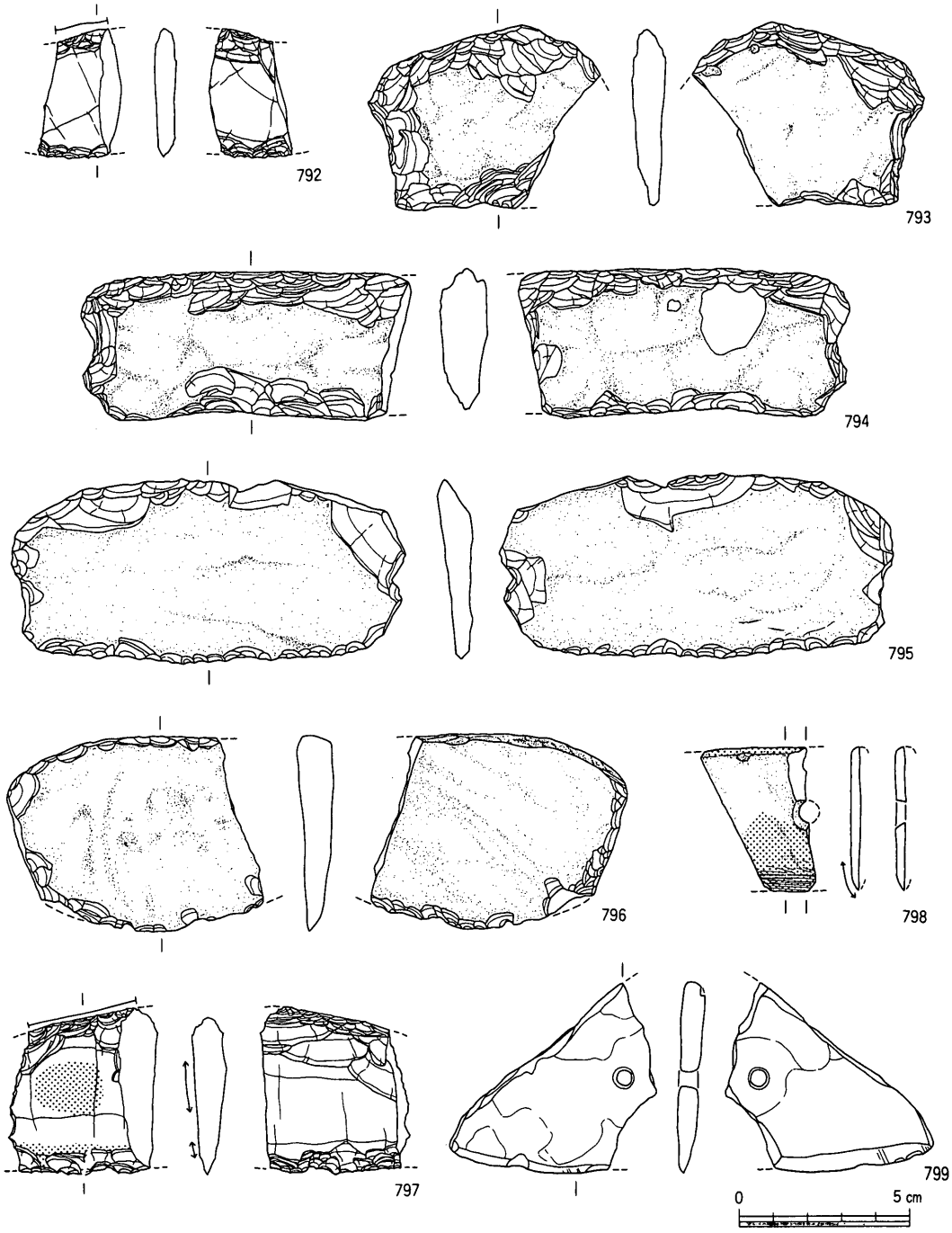
形に近い。側縁部に抉りがあるが不明瞭である。体部は長さの割に幅広である。周縁部全体に丁寧に調整を施している。794は刃部・背部とも直線で長方形のものである。側縁部には抉りを入れている。安山岩の厚手の剥片を使用している。795は刃部は直線，背部は緩く外湾している。両側縁部に抉りを入れている。背部の調整は雑で，側縁部の抉りも雑に作っている。刃部は両面から調整を施している。796は刃部・背部ともに緩く外湾している。側縁部は外傾しており，背部との境部分は尖っている。安山岩の剥片の周囲に軽く調整を施しただけで石庖丁に仕上げている。あるいはスクレイパーかも知れない。797は刃部は直線，背部は山形に近いものと思われる。刃部は両面から作り，背部には敲打痕がある。

798～811は磨製石庖丁である。798は体部中央部分の破片である。現存部分では刃部・背部ともに直線である。体部中央部分に紐部が現存で１個ある。刃部には擦痕が顕著で，刃部付近は摩滅している。裏面は剥離している。799は刃部は直線，背部は山形で全体として三角形になるものと思われる。刃部は両面から作っており，体部中央部分に紐部が現存で１個ある。安山岩製のものだが，全体にローリングを受けており摩滅している。800の刃部



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施文	形態・手法の特徴	備考
782	弥・ミニ甕			4.5	粗・少、中・少	浅黄2.5Y7/3、灰黄褐10YR6/2		外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
783	弥・ミニ甕	6.9	7.4	3.6	中・多	にぶい黄橙10YR7/3、にぶい黄2.5Y6/3		外面板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	
784	不明土製品				中・少	浅黄2.5Y7/4、浅黄橙10YR8/4		中央部が鍔状に盛り上がる	
785	須・杯			11.0	精緻	灰N4/1、灰白N8/1		外面回転ﾅﾃﾞ、内面回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ、底部回転ﾍﾗ切り	
786	黒A・椀			7.0	細・普	にぶい黄橙10YR7/3、褐灰10YR4/1		外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ	
787	土・椀	13.0			中・少	灰黄褐10YR6/2		全体に回転ﾅﾃﾞ	
788	白磁・碗			5.2	精緻	灰白10Y7/1		高台内側に離れ砂、内・外面施釉	
789	青磁・碗			4.5	精緻	明オリーブ灰2.5GY7/1		内面見込み部砂目積み、内・外面施釉	
790	土錘	現存長4.2	最大幅2.2		細・少、微・普	にぶい黄2.5Y6/3		指押え・ﾅﾃﾞ	
791	弥・不明土製品	現存長3.7	現存幅2.0		中・普、細・少	にぶい黄橙10YR6/4		穿孔2個、ﾅﾃﾞ・指押え	

第409図　Ｄ区包含層出土遺物(13)（１/４）

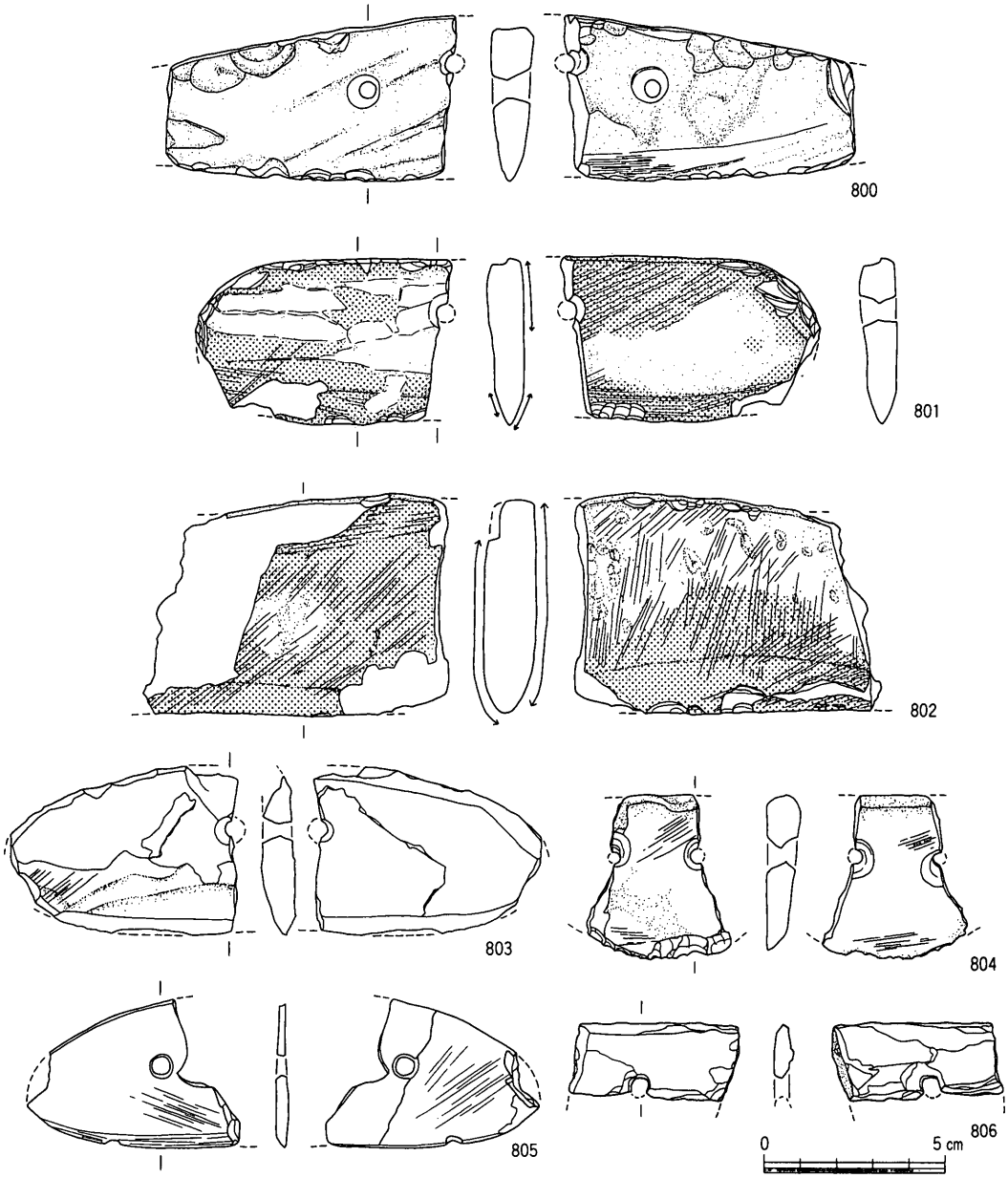


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
792	打製石庖丁	2.4	3.7	0.5	7.3	サヌカイト	背部に敲打痕	
793	打製石庖丁	6.8	5.3	1.0	45.5	安山岩	背部山形に近い	
794	打製石庖丁	9.7	4.2	1.4	85.8	安山岩	側縁部に抉り	
795	打製石庖丁	11.6	5.4	1.1	81.1	安山岩	側縁部に抉り	
796	打製石庖丁	7.5	5.6	1.0	57.5	安山岩	スクレイパーの可能性も有る	
797	打製石庖丁	4.4	4.9	1.0	25.5	サヌカイト	背部に敲打痕	
798	磨製石庖丁	3.4	4.2	0.3	4.3	流紋岩	刃部に擦痕、刃部付近摩滅	
799	磨製石庖丁	6.1	5.6	0.9	30.0	安山岩	全体にローリングによる摩滅	

第410図　D区包含層出土遺物(14)（1/2）

は直線で，背部は山形になるものと思われる。刃部と体部の境界部分は不明瞭で，片側に僅かに稜線が形成されている。刃部には擦痕が見られ，刃こぼれを起こしている。紐部は２個が斜めに配されている。背部の部分は肥厚しており，両側が欠損しているが横に長くなるものと思われる。背部は研磨されておらず体部は部分的に表面が剥離している。801は刃部・背部ともに直線である。側縁部の刃部側は欠損しているが，丸くなるものと思われる。刃部と紐部から背部にかけて擦痕が認められる。背部は研磨しているが，部分的に磨き残した部分がある。体部は部分的に表面が剥離している。802の刃部は直線，背部は緩く外湾している。両面とも刃部と体部に擦痕が顕著である。全体に肥厚しており背部の研磨は弱い。大型の石庖丁であるが，体部の残存部分には紐部は認められない。刃部は両面から作り出しているが，研ぎ出しは片側の方が大きくなっている。803の刃部はほとんど直線に近いが側縁部にかけて外湾する。背部は外湾している。紐部が現存で１個あり，体部表面の剥離が著しい。804は体部中央部分の破片であるが，刃部は外湾，背部は直線のものである。刃部は片面側から作られており，刃こぼれが著しい。背部は傾斜しており，刃部と紐部付近に擦痕が認められる。805は刃部・背部ともに外湾しており，いわゆる杏仁形のものである。刃部は両面から作り出しているが，研ぎ出しは片面側の方が圧倒的に大きくなっており，片刃に近くなっている。体部との境は明瞭である。紐部付近の表面は一部剥離しているが，全体に丁寧に作っている。体部と刃部に擦痕が認められる。刃部側にくらべて背部側が薄くなっている。806は紐部付近の細片である。背部と側縁部を斜めに整形し，側縁部を一部研磨している。体部は研磨されておらず未製品であろう。結晶片岩製のものである。807は刃部・背部ともに僅かに外湾するが中央部分は両者とも直線的である。いわゆる杏仁形のものである。長さ16.4cmと横に長いものである。刃部は両面から作られているが，研ぎ出しは片面側に広く作られている。紐部は体部の側縁部方向に片寄った位置に斜め方向に２個ある。背部の中央部分には研磨を施していない。刃部と紐部周辺の手の当たる部分に擦痕が認められる。紐部が片寄った場所にあることは，紐部のない長い部分の刃部を主に使用したと考えられ，紐部側の背部から側縁部にかけての掌に当たる部分は摩滅が著しい。全体に丁寧に作られている。808の刃部は直線背部は外湾している。側縁部はやや内傾しており抉りは施されていない。刃部は両面から作り出されており，背部は研磨されていない。体部は部分的に研磨しているだけで，現存部では紐部はない。あるいは未製品かも知れない。809の刃部は直線，背部は緩く外湾している。側縁部は欠損しており形状は不明である。刃部は両面から作り出しているが，片面側の方が強く

研磨している。背部はあまり丁寧に研磨されておらず，体部も図の右側部分はあまり丁寧に研磨されていない。紐部は現存で１個ある。結晶片岩製のものである。810の刃部は外湾，背部は直線となっており，側縁部の形状は不明である。刃部は両面から均等に作り出



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
800	磨製石庖丁	8.0	4.5	1.2	53.9	流紋岩	紐部斜めに配置	
801	磨製石庖丁	7.1	4.5	1.0	45.0	流紋岩	刃部と背部付近に擦痕	
802	磨製石庖丁	8.4	6.0	1.4	111.4	流紋岩	両面に擦痕顕著、全体に厚手	
803	磨製石庖丁	6.3	4.7	0.9	36.5	流紋岩		
804	磨製石庖丁	4.0	4.6	1.0	18.8	流紋岩	刃部は明瞭な片刃	
805	磨製石庖丁	5.9	4.1	0.4	12.1	流紋岩	刃部と体部に擦痕、酸化鉄が風化したものが付着して赤くなっている	
806	磨製石庖丁	4.7	2.1	0.6	8.6	結晶片岩	研磨途中の未製品	

第411図　Ｄ区包含層出土遺物(15)（１/２）

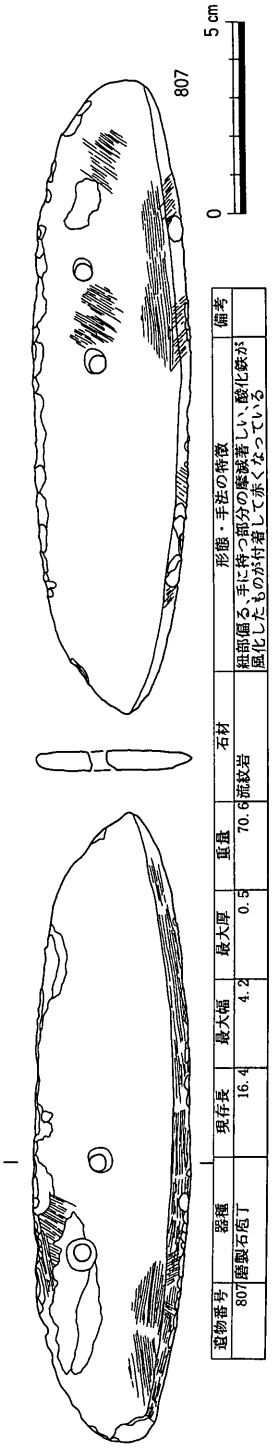
されている。背部は非常に厚く，上面に平坦な面が出来ているが，あまり研磨されていない。体部に擦痕が認められる。811は刃部は直線，背部は強く外湾している。刃部は両面から作り出されており，体部との境は明瞭である。背部も丁寧に研磨されている。体部は研磨されているが，あまり丁寧ではない。全体に非常に薄手である。

812は扁平片刃石斧である。やや基部のほうが広い長方形のものである。刃部は先端部が欠損しているが片刃である。刃部の研ぎ出しはやや丸みを帯びており，体部には擦痕が認められる。

813は小型方柱状石斧である。刃部は欠損している。基端部は調整剥離のままになっている。基部は側縁部付近で縦に折れているが，断面は台形になるものと思われる。側縁部は丁寧に整形している。

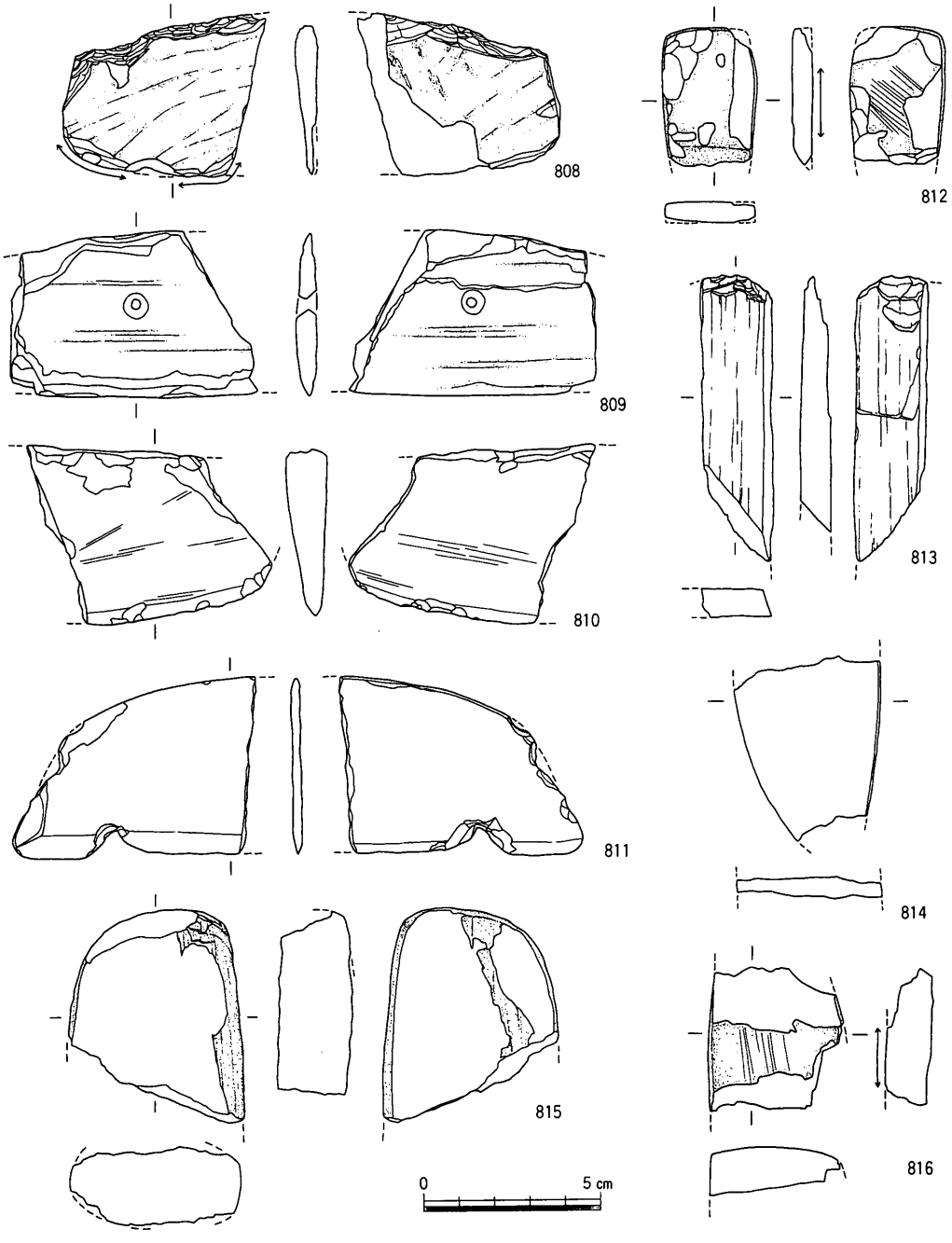
814～816は柱状片刃石斧で，いずれも結晶片岩製のものである。814は刃部付近が縦方向に割れており，両面とも欠損面になっている。815は基端部の破片である。表面は剥離している部分が多いが，残っている部分は丁寧に整形している。816は基部中央部分の細片である。

817～821は太型蛤刃石斧である。817の刃部は基端部よりも幅広になっており，基端部は平坦になっている。断面は円形に近い楕円形で，刃部は半分欠損しているが，擦痕が少し確認出来る。残存部分の刃縁は鋭利である。図の右側の基部中央部分の表面は研磨面が少し剥離しておりざらざらしているが，柄との装着による擦れの可能性がある。818は刃部の破片で，刃縁は使用したため潰れて丸くなっている。刃部は左図の向って右側の部分の摩滅の度合いが高く，均等になっていない。刃部の断面は扁平な楕円形になっている。819は基端部の細片で，断面は楕円形である。820も基端部の細片で，断面は扁平な楕円形である。821は基端部から縦に欠損している。基端部は丸み



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
807	磨製石庖丁	16.4	4.2	0.5	70.6	流紋岩	紐部欠損。手に持つ部分の摩滅著しい。酸化鉄が風化したものが付着して赤くなっている	

第412図　D区包含層出土遺物(16)(1/2)

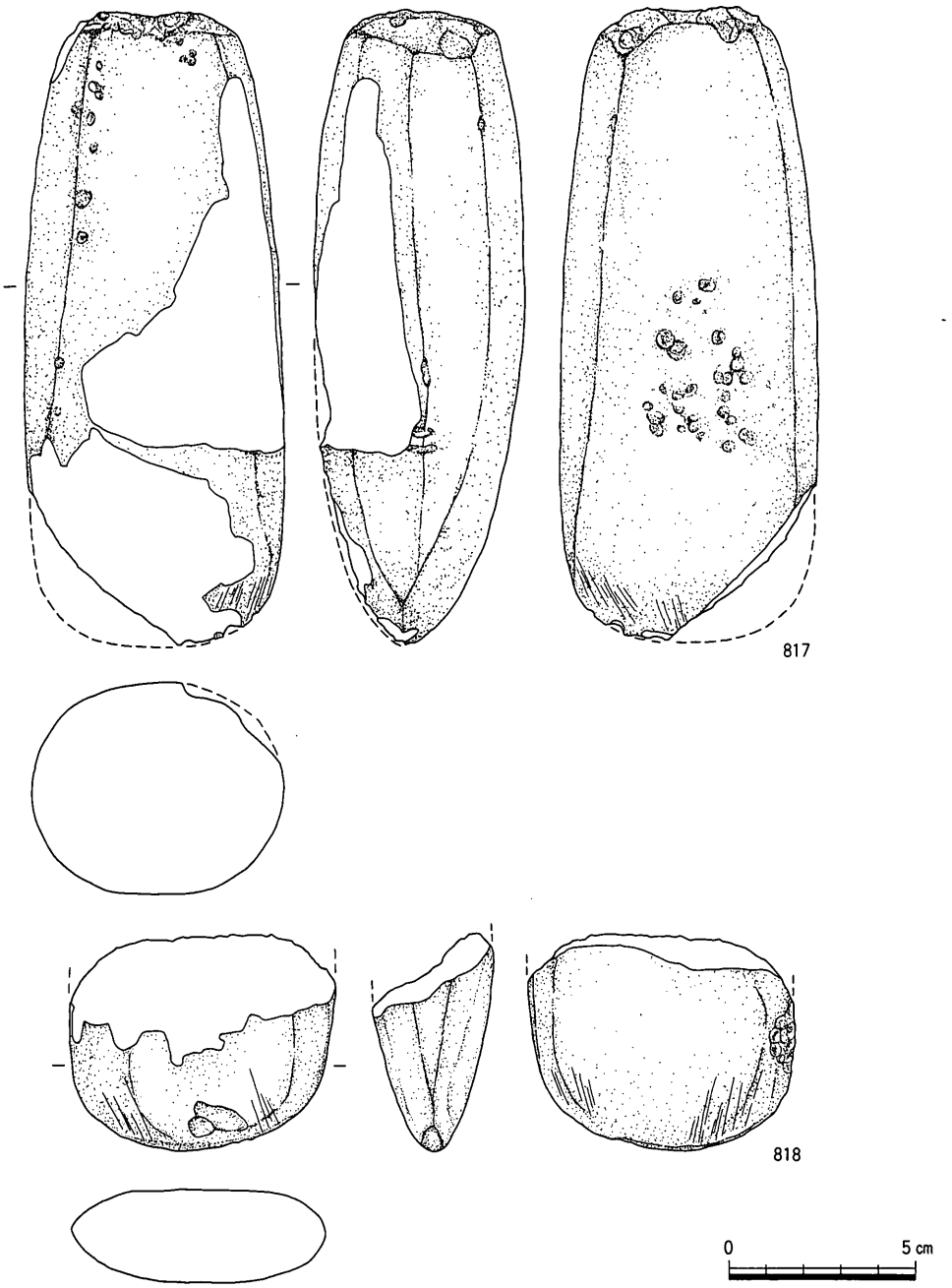


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
808	磨製石庖丁	5.8	4.5	0.7	24.0	流紋岩	研磨は部分的	
809	磨製石庖丁	7.0	4.6	0.6	33.4	結晶片岩	研磨は雑	
810	磨製石庖丁	6.9	5.0	1.3	48.3	安山岩	背部は厚手、体部に擦痕	
811	磨製石庖丁	6.9	5.0	0.4	23.4	流紋岩	背部は強く外湾、全体に薄手、刃部片側に光沢	
812	扁平片刃石斧	3.8	2.7	0.6	11.0	結晶片岩		
813	小型方柱状石斧	7.9	2.1	0.8	23.0	結晶片岩	基端部は調整剥離のままで研磨していない	
814	柱状片刃石斧	5.1	4.1	0.6	12.6	結晶片岩		
815	柱状片刃石斧	6.0	5.0	2.1	106.6	結晶片岩		
816	柱状片刃石斧	4.1	3.8	1.3	28.4	結晶片岩	基部細片	

第413図　D区包含層出土遺物(17)（1/2）

を帯びており，断面は扁平である。

822～824は石鍬である。822は基部下半の破片で，刃部は欠損している。基部の下半は幅広になって膨らんでいるが，左右は不均衡である。もともとは左右対称の撥形の石鍬で

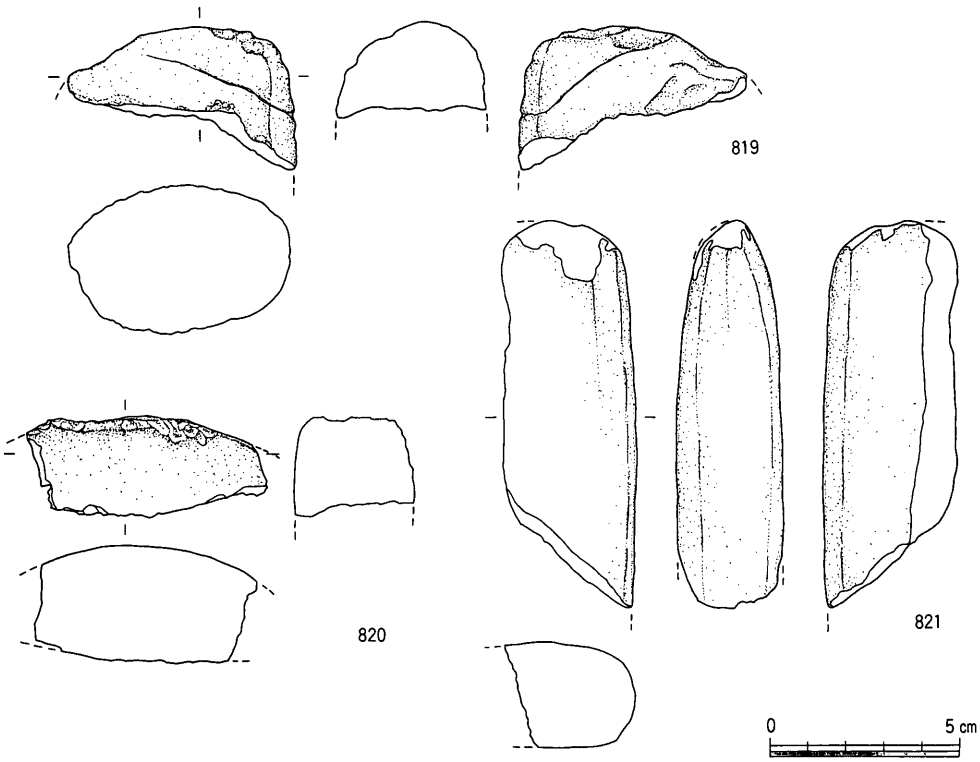


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
817	太型蛤刃石斧	16.7	7.0	5.7	1022.1	(脈岩)安山岩	刃部に擦痕、断面円形に近い	淡緑色
818	太型蛤刃石斧	5.8	7.1	2.9	169.8	(脈岩)安山岩	刃縁部は潰れて丸い	緑色

第414図　D区包含層出土遺物(18)（1/2）

あったと思われるが，側縁部の片側が欠損したため補修したと考えられる。補修した側面は断面が急に立ち上がっている。側縁部の刃部付近が一部摩滅している。823は基部中央やや上側がくびれる分銅形の石鍬で，基部端部幅と刃部幅は等しくなっている。完形のもので，長さ29.5cm，最大幅14.0cm，最大厚3.0cmの大型品である。周辺を丁寧に加工しており，基部のくびれ部には丁度剥離の稜線がきており，段になっている。くびれ部の側縁部には弱いものの敲打痕が認められ，刃部の側縁部は少し摩滅している。刃部の稜線も少し丸みを帯びている。現存ではくびれ部で２つに折れている。安山岩製である。824は刃部の破片である。刃部の片側の側縁部は欠損しており，刃部全体の形態は不明である。しかし刃部の膨らみからから，片側に偏った刃部になっているものと思われる。刃部には僅かに擦痕が認められる。基部の欠損部には欠損後に部分的に調整が加えられているが，スクレイパーに転用しようとしたのかも知れない。825は石鍬の基端部の破片で，側縁部には敲打痕が認められる。

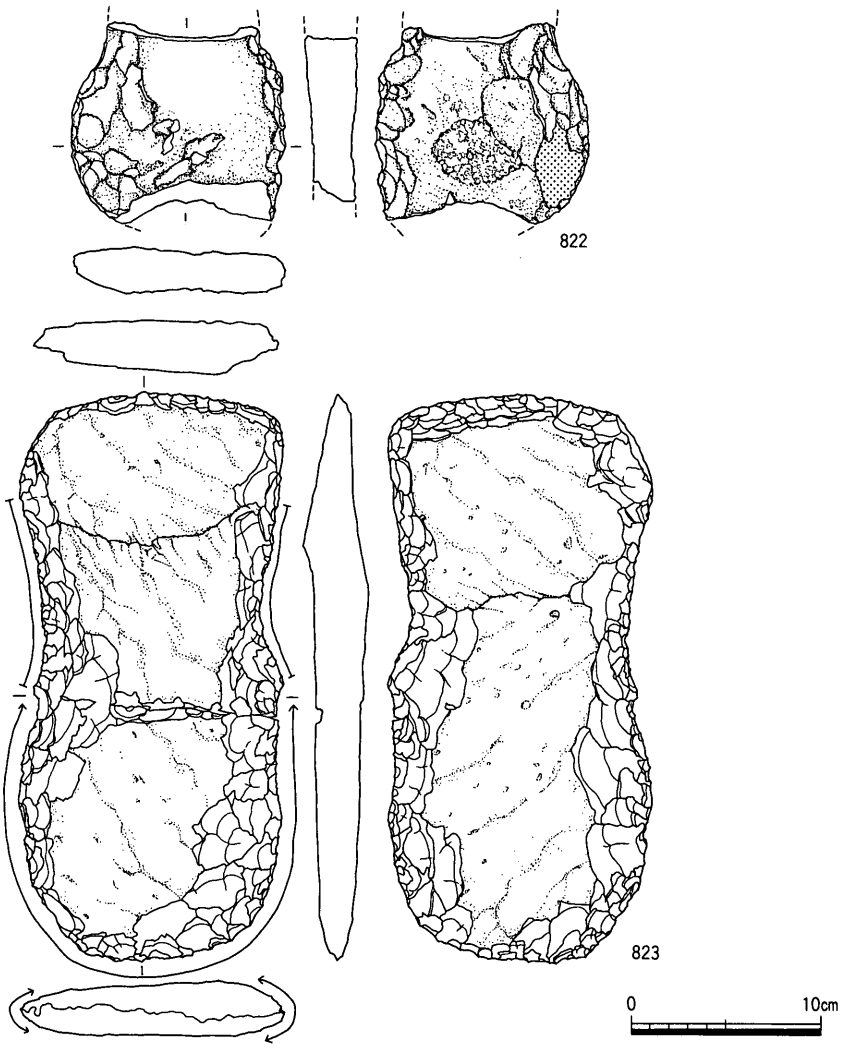
826～838はスクレイパーである。826は全体の形状は不明であるが，刃部は現存部では



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
819	太型蛤刃石斧	3.7	6.0	4.1	91.7	(脈岩)安山岩		緑色
820	太型蛤刃石斧	2.7	6.4	3.4	90.5	(脈岩)安山岩		緑色
821	太型蛤刃石斧	10.2	3.6	2.8	173.2	(脈岩)安山岩	基端部丸みを帯びる	緑色

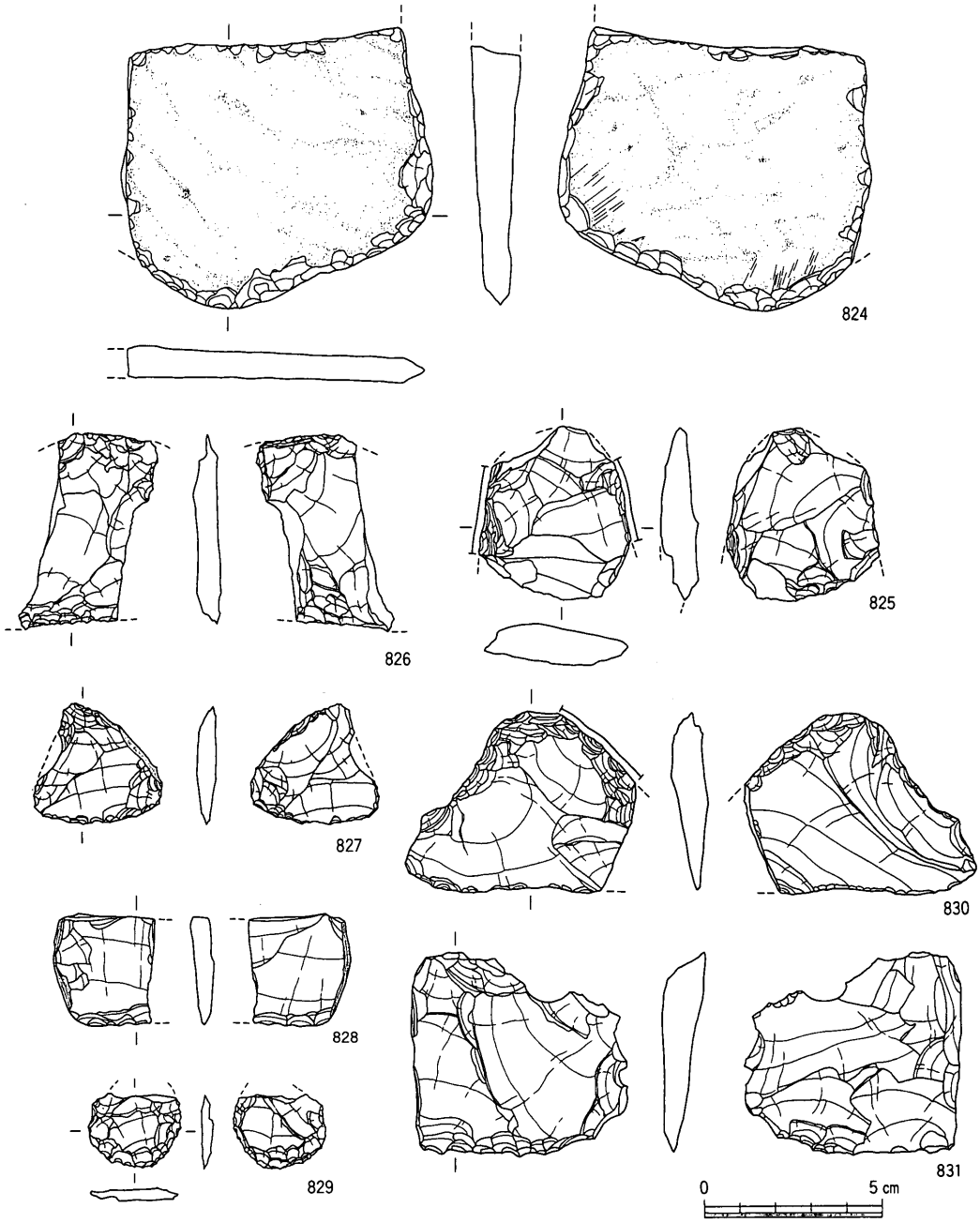
第415図　Ｄ区包含層出土遺物(19)（1/2）

直線である。背部は山形に近くなっている。石庖丁の可能性も高く，792とよく似ているが，幅広であることや背部の調整の粗さと形状からここではスクレイパーと考えた。827は側縁部の一部が欠損しているが，全体として三角形のものである。側縁部には一部自然面を残し，刃部の作りは雑である。828は現存で正方形のもので，側縁部に自然面を残している。829は小型の円形のスクレイパーで，周囲に求心的に調整を施している。830は部分的に欠損しているが，三角形のものと思われる。刃部の作りは雑であるが，背部は山形の部分を中心に敲打を施すなど丁寧に作っている。831は側縁部に自然面を残し，不定形なものである。刃部は片面から大きな剥離により作っている。背部は肥厚しており斜めの



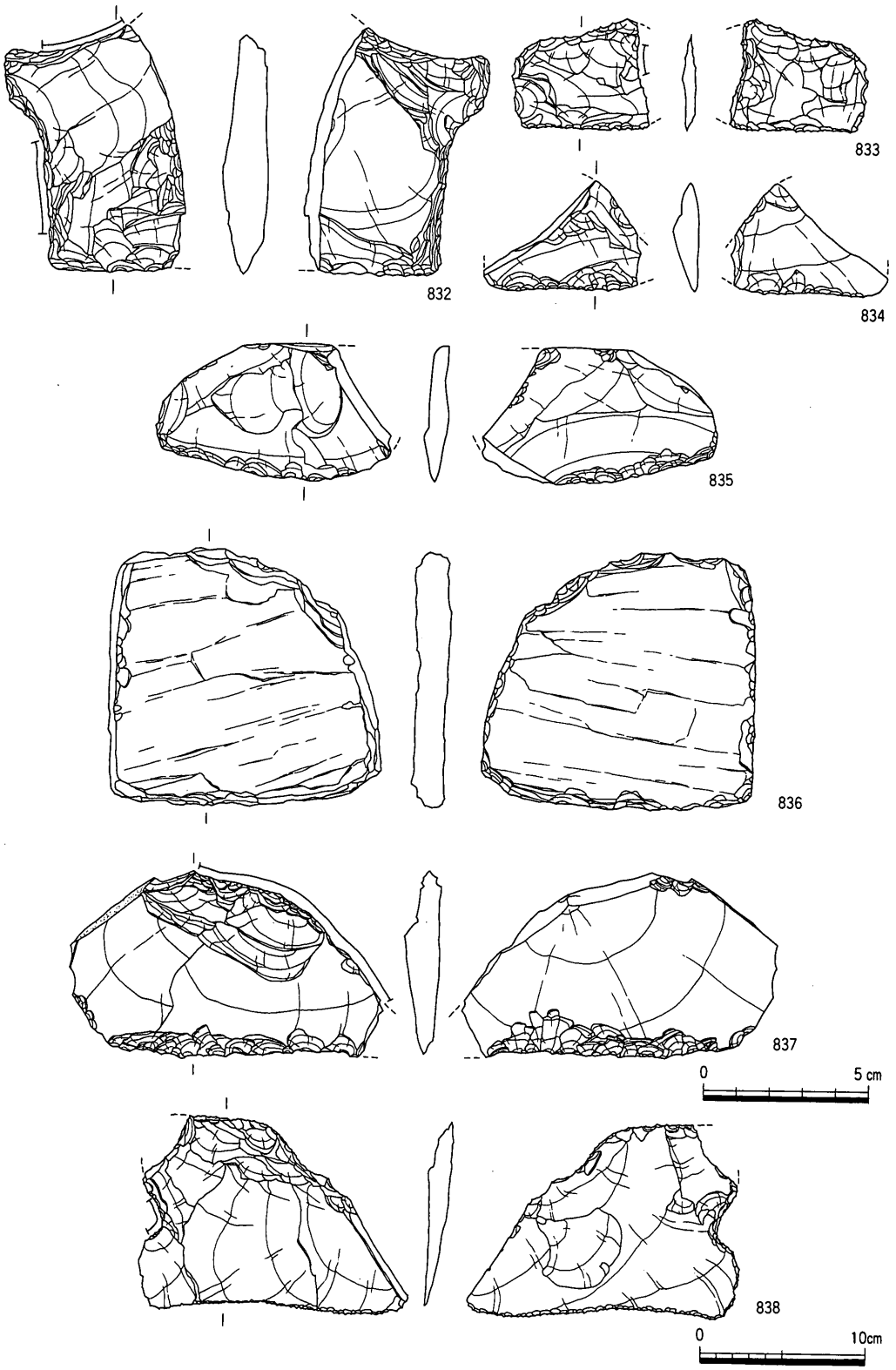
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
822	石鏃	10.6	11.2	2.4	469.0	安山岩	撥形、刃部付近一部摩滅	
823	石鏃	29.5	14.0	3.0	1823.7	安山岩	分銅形、くびれ部に弱い敲打痕、刃部少し摩滅	

第416図　D区包含層出土遺物(20)（1/4）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
824	石鏃	7.6	8.8	1.4	139.8	安山岩	刃部不均整、欠損部に後から加工	
825	石鏃	4.8	4.4	1.0	24.1	サヌカイト	基端部片	
826	スクレイパー	3.9	5.5	0.7	15.1	サヌカイト	石庖丁の可能性あり	
827	スクレイパー	3.6	3.4	0.7	7.4	サヌカイト		
828	スクレイパー	2.9	3.2	0.6	9.2	サヌカイト	風化している	
829	スクレイパー	2.6	2.1	0.3	2.7	サヌカイト	円形	
830	スクレイパー	5.0	6.5	0.9	24.3	サヌカイト	背部山形	
831	スクレイパー	6.1	5.8	1.1	34.0	サヌカイト		

第417図　D区包含層出土遺物(21)（1/2）



第418図　D区包含層出土遺物(22)（1/2，1/4）

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
832	スクレイパー	5.6	7.4	1.4	58.0	サヌカイト	背部の角が突出	
833	スクレイパー	4.2	3.3	0.4	7.9	サヌカイト		
834	スクレイパー	4.8	3.3	0.8	8.7	サヌカイト		
835	スクレイパー	7.2	4.1	0.8	25.5	サヌカイト		
836	スクレイパー	8.3	7.8	1.1	109.3	結晶片岩	周囲に雑な調整	
837	スクレイパー	9.5	5.6	1.3	58.2	サヌカイト		
838	スクレイパー	16.4	11.8	1.4	255.8	サヌカイト	大型で刃部は丁寧に作り鋭利である	

D区包含層出土遺物(22)観察表

面をもっている。832は背部と側縁部の境部分が突出している。刃部から側縁部にかけては直角に曲っており，背部と側縁部には弱い敲打を施している。厚手の剥片を使用している。833は片側の側縁部の上下が欠損しており，打製石庖丁の側縁部の抉りのような形をしていたと思われる。上下の欠損部の間の部分には敲打痕がある。834は裏面に素材の剥片の主要剥離面を残している。刃部は直線で，両面から作り出している。835の刃部は外湾しているが均等な形ではなく，両面から作り出している。あるいは石庖丁であるかも知れない。836は台形に近い形で，幅広のものである。周囲に雑に調整を加えている。結晶片岩製のものである。837は打点と主要剥離面を残す剥片を利用している。刃部は両面から作り出している。表側の背部付近には厚さを減ずるためと思われる大きな剥離が施されている。838は長さ16.4cm，最大幅11.8cmの大型のスクレイパーである。裏側に主要剥離面を残す大型の剥片を利用している。刃部は直線で，全体に両面から細かく丁寧な調整を加えており，鋭利に仕上げている。側縁部の片方には抉りを入れており，敲打を加えている。背部付近には厚さを減ずることを目的とした剥離が数回施されている。

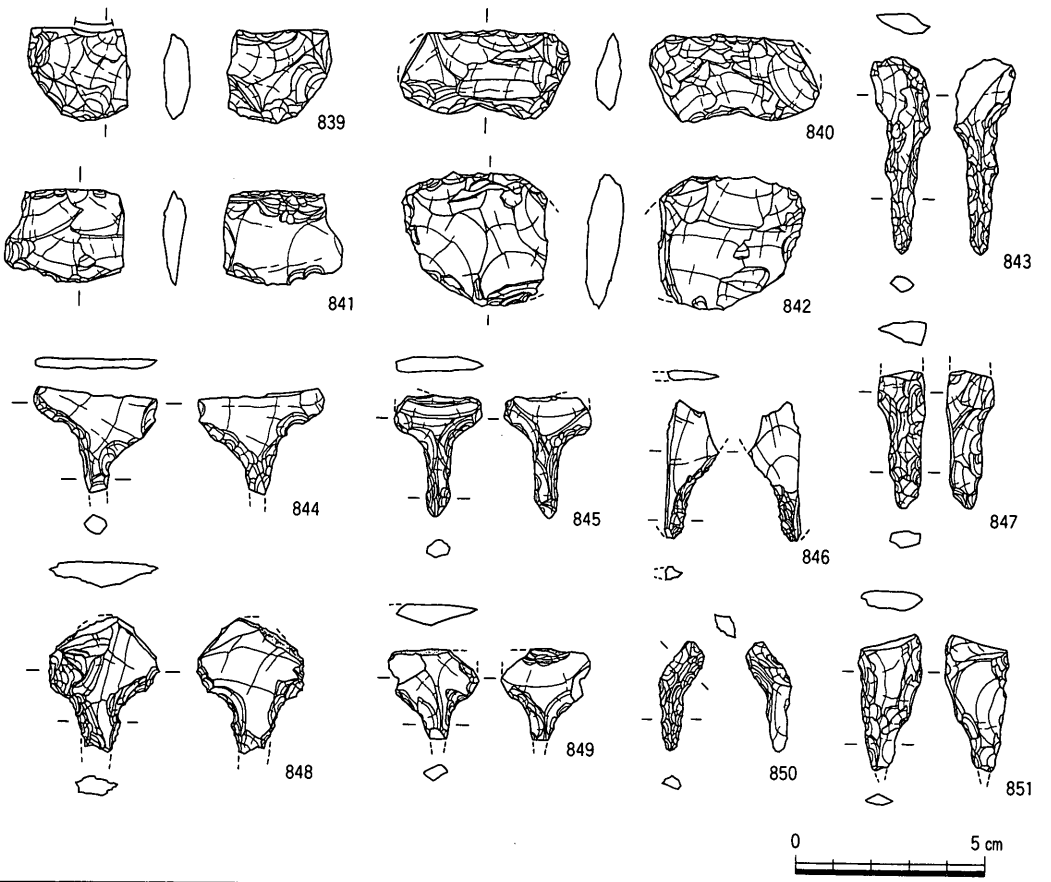
839～842は楔形石器である。839は上側に敲打痕があり，片側縁には両極打撃の痕跡が見られる。840は下部がやや不定形である。841も片側の側縁に両極打撃の痕跡が見られる。842の下部は外湾しており，上部と平行になっていない。上部には弱い敲打痕があり，片側の側縁部には両極打撃の痕跡がある。

843～851は石錐である。843の錐部は長く棒状で，頭部は錐部よりやや幅広で錐部の半分の長さである。844の頭部は錐部に比べて横に非常に長く，上部は直線的である。全体にぜんまいネジのような形である。錐部は欠損している。845も頭部が錐部より幅広で，ぜんまいネジのような形である。846の頭部は周囲が欠損しており不定形になっている。錐部は短いものである。847は頭部と錐部の境は不明瞭で，頭部の上側が欠損しているものの全体に棒状に近い。848は素材の剥片の周囲を加工して整形しているが，頭部に自然面が残っている。頭部と錐部の境目は鋭く明瞭である。849の頭部も大きいもので，錐部との境は明瞭である。850は頭部と錐部の境は屈曲しており，幅は全体に同じ棒状のもので「く」字状に

なっている。851は頭部と錐部の境は不明瞭で，全体に逆三角形になっている。錐部先端部は欠損している。あるいは凸基有茎式の石鏃の先端部が欠損したものかも知れない。

852は石小刀である。外側と内側の両側に刃部をもち，先端部は下方に折れ曲っており鋭くなっている。外側の刃部には先端部に向って屈曲する部分と，基部付近に弱く敲打を行なっており，中央部分は幾分抉れている。内側の刃部は直線的に鈍角に屈曲している。基部は若干湾曲している。

853～855は石匙である。853の刃部は全体としては外湾しているが，中央部分は直線的になっている。背部の中央部分につまみが付いている。854のつまみ部は側縁部と背部の

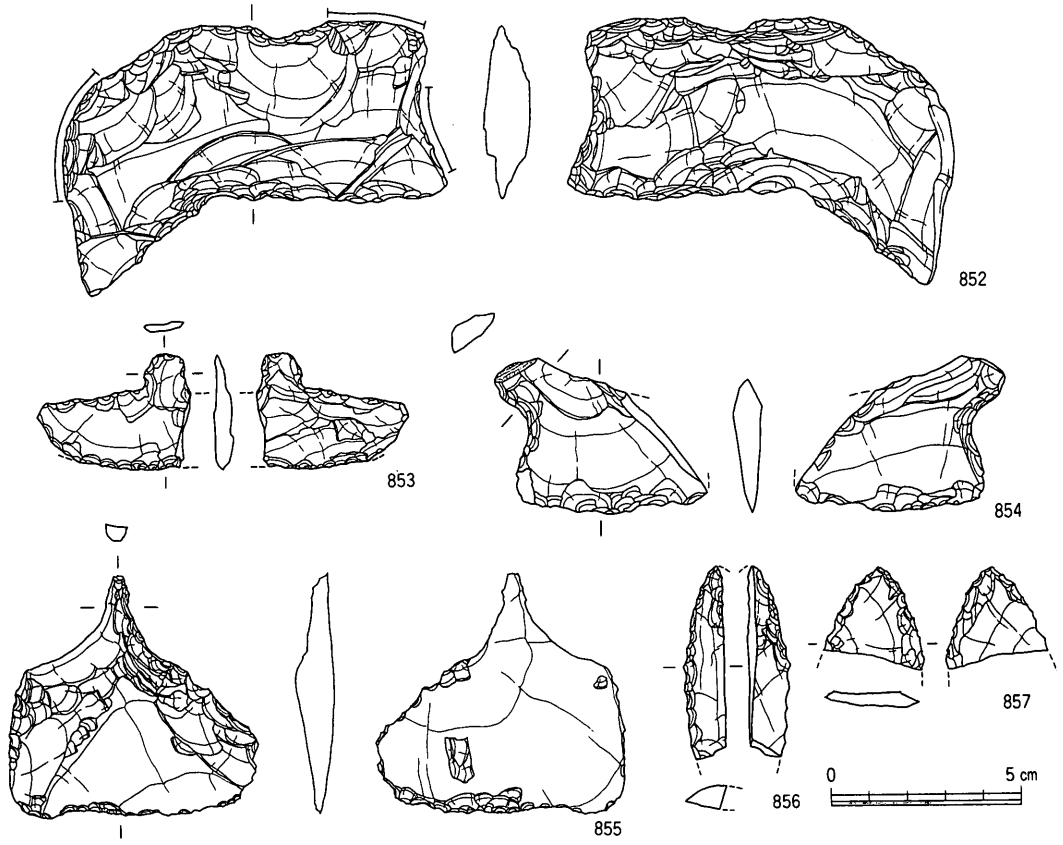


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
839	楔形石器	2.8	2.5	0.7	5.9	サヌカイト	両極打撃の痕跡有り	
840	楔形石器	4.5	2.3	0.8	8.3	サヌカイト		
841	楔形石器	3.2	2.5	0.6	5.5	サヌカイト	両極打撃の痕跡有り	
842	楔形石器	3.8	3.5	0.9	13.8	サヌカイト	両極打撃の痕跡有り	
843	石錐	5.2	1.6	0.5	3.2	サヌカイト	錐部長い	
844	石錐	3.3	2.7	0.5	2.8	サヌカイト	頭部横に長い	
845	石錐	3.2	2.3	0.6	2.2	サヌカイト		
846	石錐	3.6	1.4	0.4	1.3	サヌカイト		
847	石錐	3.7	1.1	0.7	2.5	サヌカイト		
848	石錐	3.5	2.9	0.6	5.9	サヌカイト		
849	石錐	2.4	2.4	0.6	2.5	サヌカイト		
850	石錐	2.9	1.2	0.5	1.0	サヌカイト		
851	石錐	3.6	1.7	0.5	3.4	サヌカイト	凸基有茎式の石鏃の可能性もある	

第419図　D区包含層出土遺物(23)（1／2）

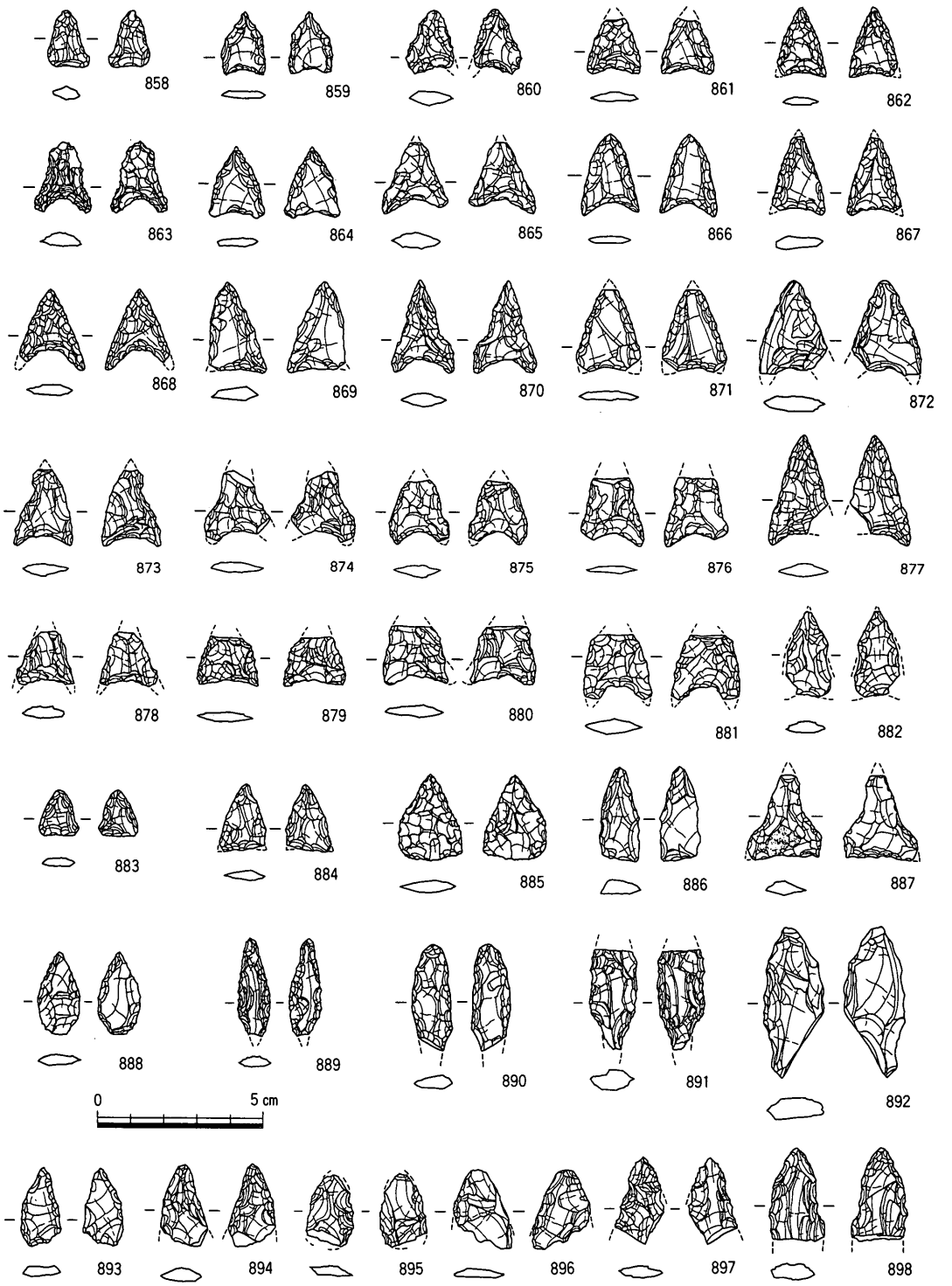
境部分に斜め方向に付いている。つまみ部の先端部は自然面になっている。刃部の作りは雑である。855のつまみ部は背部の中央部分に付くが，小さい棒状ものものである。側縁部の片側はつまみ部からそのまま斜めに刃部に至り，調整が顕著である。刃部は素材の剥片の縁辺部の鋭利な部分を利用している。裏面には素材剥片の主要剥離面を残している。つまみ部と考えたものが錐部である石錐と考えられなくもないが，錐部にしては裏側は未調整であることや，頭部が大きすぎることからも，ここでは石匙と考えたい。

856は石鏃状の石器で，縦に半分に割れている。周囲に加工を施し，先端部は折れている部分にも調整があるが，この調整は欠損以前のものである。従って先端部は折れているものの旧形状をある程度残していると考えらる。先端を鋭利に尖らせた石鏃状あるいは石槍状の石器であろう。857は石槍の先端部分である。周囲に調整を施している。



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
852	石小刀	10.2	7.2	1.2	80.5	サヌカイト	先端部は下方を向き鋭い	
853	石匙	4.1	3.0	0.5	6.4	サヌカイト		
854	石匙	5.6	4.0	0.8	13.9	サヌカイト		
855	石匙	6.6	6.4	1.0	29.9	サヌカイト	片面未調整	
856	石鏃?	5.1	1.1	0.6	3.4	サヌカイト	未製品?	
857	石槍	2.7	2.7	0.4	2.4	サヌカイト		

第420図　D区包含層出土遺物(24)（1/2）



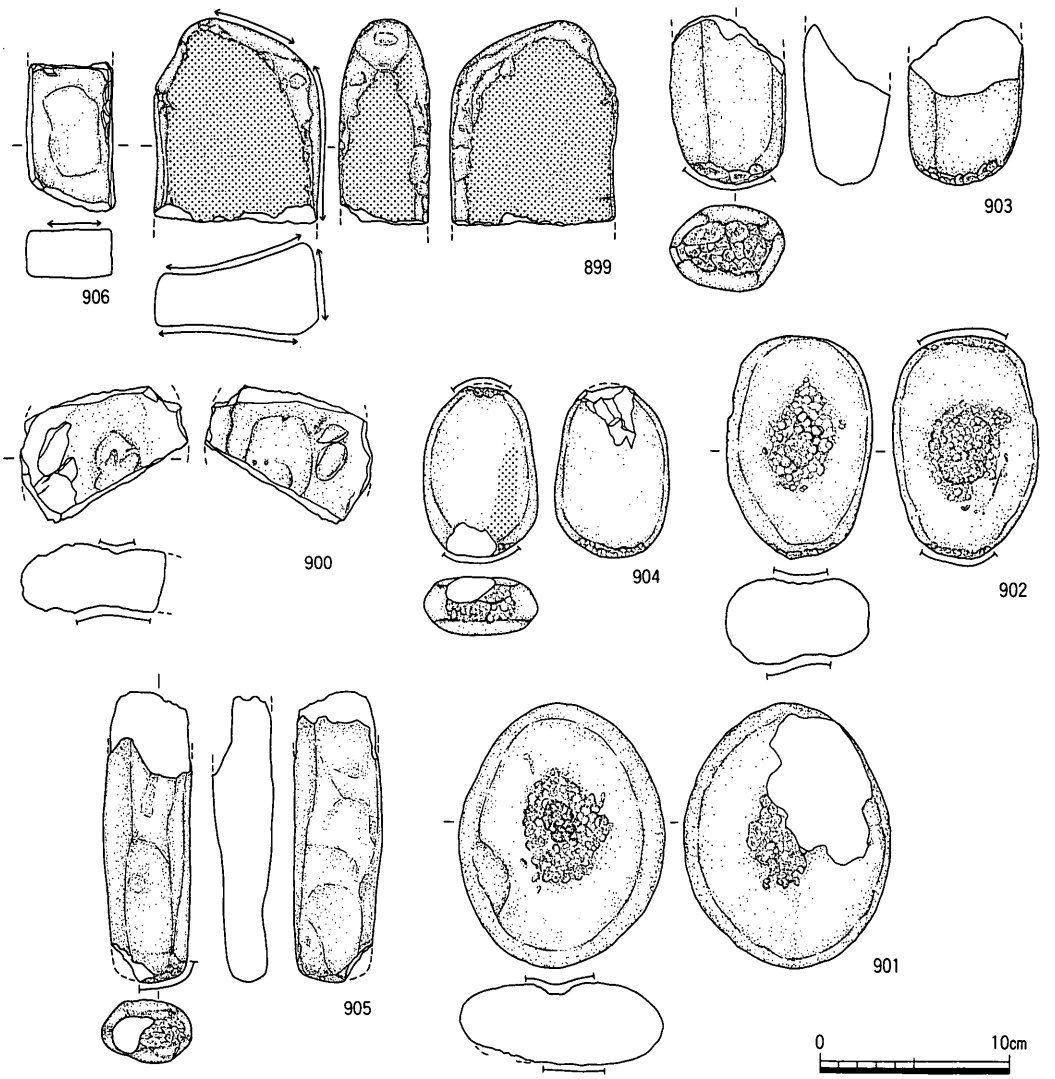
第421図　D区包含層出土遺物(25)（1/2）

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
858	石鏃	1.6	1.3	0.4	0.6	サヌカイト	凹基　基部不揃い	
859	石鏃	1.9	1.3	0.2	0.5	サヌカイト	凹基	
860	石鏃	1.9	1.5	0.4	0.7	サヌカイト	凹基	
861	石鏃	1.6	1.6	0.3	0.6	サヌカイト	凹基	
862	石鏃	2.1	1.5	0.2	0.8	サヌカイト	凹基	
863	石鏃	2.1	1.7	0.4	0.9	サヌカイト	凹基	
864	石鏃	2.0	1.7	0.3	0.8	サヌカイト	凹基	
865	石鏃	2.1	2.0	0.5	1.2	サヌカイト	凹基　基部端部不揃い	
866	石鏃	2.5	1.8	0.2	1.0	サヌカイト	凹基	
867	石鏃	2.4	1.7	0.4	1.2	サヌカイト	凹基	
868	石鏃	2.4	2.0	0.4	0.9	サヌカイト	凹基	
869	石鏃	2.7	1.8	0.5	1.6	サヌカイト	凹基　全体にやや歪む	
870	石鏃	2.7	1.9	0.4	1.2	サヌカイト	凹基	
871	石鏃	2.4	1.9	0.3	1.2	サヌカイト	凹基	
872	石鏃	2.8	2.1	0.5	2.2	サヌカイト	凹基	
873	石鏃	2.3	1.7	0.4	1.2	サヌカイト	凹基　側縁部分的に歪む	
874	石鏃	2.1	1.9	0.4	1.1	サヌカイト	凹基	
875	石鏃	1.9	1.8	0.4	1.2	サヌカイト	凹基	
876	石鏃	2.1	1.9	0.3	1.2	サヌカイト	凹基　基部端部不揃い、風化	
877	石鏃	3.3	1.8	0.4	1.6	サヌカイト	凹基	
878	石鏃	1.6	1.8	0.4	0.8	サヌカイト	凹基	
879	石鏃	1.4	1.9	0.3	0.8	サヌカイト	凹基	
880	石鏃	1.7	2.0	0.4	1.1	サヌカイト	凹基	
881	石鏃	2.0	2.1	0.5	1.5	サヌカイト	凹基	
882	石鏃	2.6	1.3	0.4	1.2	サヌカイト	凹基(平基に近い)、風化	
883	石鏃	1.4	1.2	0.3	0.4	サヌカイト	平基	
884	石鏃	2.0	1.4	0.3	0.6	サヌカイト	平基	
885	石鏃	2.5	1.9	0.4	1.6	サヌカイト	平基	
886	石鏃	2.8	1.3	0.5	1.5	サヌカイト	平基	
887	石鏃	2.5	2.3	0.5	1.7	サヌカイト	平基	
888	石鏃	2.5	1.3	0.3	0.9	サヌカイト	凸基	
889	石鏃	3.0	1.0	0.3	0.9	サヌカイト	凸基	
890	石鏃	3.2	1.2	0.4	2.3	サヌカイト	凸基有茎式	
891	石鏃	3.0	1.4	0.6	3.0	サヌカイト	凸基有茎式	
892	石鏃	4.5	1.9	0.8	6.7	サヌカイト	凸基有茎式の石鏃の茎部の作成の未製品か失敗品	
893	石鏃	2.3	1.2	0.3	0.8	サヌカイト	基部製作途中	
894	石鏃	2.4	1.5	0.4	1.1	サヌカイト		
895	石鏃	2.2	1.4	0.3	1.2	サヌカイト		
896	石鏃	2.3	1.8	0.3	1.1	サヌカイト		
897	石鏃	2.5	1.5	0.4	1.1	サヌカイト		
898	石鏃	2.8	1.7	0.5	2.6	サヌカイト		

D区包含層出土遺物(25)観察表

858～898は石鏃で，このうち858～882は凹基，883～887は平基，888～892は凸基，893～898は基部形態が不明のものである。重さの平均は1.33ｇ，現存長での平均は2.33cmである。858は基端部は不揃いで，基部の窪みも弱い。859は先端部が突出している。863は先端部がやや不整形で幅広になっている。864・866は全体に薄手である。865は基端部が不揃いである。868の基部は大きく開いている。869は全体に少し歪んでいる。870は片側の側縁の中央部分から下側が膨らんでいる。873は片側の側縁部の先端寄りが抉れている。874は先端部と基端部が欠損している。876は基端部が不揃いである。877は全長が3.3cmと長いものである。880は全体に粗い作りである。882は凹基であるが，平基に近くなっている。883は非常に小型のものである。884は先端部の片側が抉れ気味である。885の側縁は丸みを帯びている。886は全体に細長くなっている。887は側縁部が中央部分で反っており，下半部全

体が幅広になっている。888は木葉形になっている。889は中央やや下側が膨らんでいる。890は先端部が丸みを帯びている。891は有茎式で茎部は明瞭である。892は有茎式のものと思われるが，茎部の側面には自然面が残っており歪んだままであることから，未製品か失敗品と思われる。893は基部がまだ製作途中で，基部がどのような形態になるかは不明である。



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
899	砥石	10.6	8.8	4.7	547.6	砂岩	3面使用している	
900	凹石	8.8	7.2	3.5	309.0	安山岩		
901	凹石	13.8	10.8	4.6	974.1	安山岩	片面の中央部が大きく窪む	
902	凹石	11.7	7.6	4.5	648.0	安山岩		
903	敲石	8.7	6.0	4.2	264.2	花崗岩	石斧の基部の可能性もある	
904	敲石	9.2	6.0	2.9	255.3	花崗岩	両端部に敲打痕	
905	敲石	15.1	4.6	3.1	353.3	結晶片岩	先端部に敲打痕	
906	砥石	7.7	4.5	2.5	195.9	安山岩	1面使用	

第422図　D区包含層出土遺物(26)（1/4）

896は下部は欠損しているが幅広になるものと思われる。898は厚手のもので石槍に近い。

899・906は砥石である。899は表裏と1側面を使用している。表側はかなり使用されていて摩滅の度合いが著しい。

900～902は凹石である。900は中央部分のみの破片で，両面ともに窪んでいるが窪みの度合いは小さい。901は均整のとれた楕円形のもので，両面とも敲打により窪んでいるが，特に片側を頻繁に使用しており，中央部分が深く窪んでいる。902は長楕円形のもので，表裏が窪んでいるのに加えて両端部にも敲打痕が認められる。手に握りやすい大きさである。

903～905は敲石である。903は欠損しており全体の形状は不明である。下端部に敲打痕が認められる。全体に厚手で石斧の基部のようである。904は楕円形で両端部に敲打痕が認められる。片側の側縁近くが部分的に摩滅している。905は結晶片岩製の棒状の敲石である。手に握りやすい太さで，端部に敲打痕がある。

3. 小　結

D区では弥生時代前期後半～中期初頭にかけての遺構・遺物を検出した。住居跡は7棟検出したが，明確に掘り込んで壁を作る竪穴住居が4棟，柱穴のみの検出になったものが3棟となっている。遺構面の状況や遺構面に至るまでの土層の堆積状況などから，柱穴のみの検出になった住居が，単に壁が削平されたとは言い切れない部分がある。住居付近の包含層からは多量の土器・石器が出土していることなどからも平地式住居の可能性も考えなければならないものである。

ＳＨ02では埋土と検出面から夥しい量のサヌカイトの剥片・チップが出土した。製品は少ないことから石器の製作を行なっていた住居として注目される。ＳＨ05は鴨部・川田遺跡の中でも最大級の住居で，住居の構造も他の住居に比べてしっかりとしたものである。土器も多量に出土しており，中心的な住居であったことが伺える。

また調査区の北西部分では土器の廃棄場と考えられる遺構（ＳＸ01）があり，前期末を中心とした土器が多量に出土している。

D区は居住域と言えるが，C区で検出した環濠の外側にも住居が広がっていることが確認され，中には中期初頭まで下る住居（ＳＨ02・04）もあることから，鴨部・川田遺跡で環濠の成立前後の集落の変遷を考えるうえで重要となってこよう。

第4章　自然科学調査の成果

第1節　鴨部・川田遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

香川県では，これまでに高松平野および丸亀－坂出平野の遺跡を中心に，出土した様々な用途の木質遺物の樹種同定が行われてきた（島地・林，1990；能城・鈴木，1990；パリノ・サーヴェイ株式会社，1992，1993ａ，1993ｂ等）。これらの調査により，各時代の用材選択の一端が明らかになりつつある。また，花粉分析が下川津遺跡や林・坊城遺跡などで行われ，古植生が推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1990，1993ｃ）。その結果から，木材の多くは遺跡周辺部で入手していたことが推定されている。

1.　試　料

試料は，出土した木製品40点（試料番号W１～W40）である。各木製品の詳細については，樹種同定結果と共に第５表に記した。

2.　方　法

剃刀の刃を用いて，試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。切片は，ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートとした。プレパラートは，生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し，種類を同定する。

3.　結　果

樹種同定の結果を第５表に示す。試料番号W３とW14は，保存状態が良好ではなく，樹種の同定には至らなかった。その他の試料は，針葉樹４種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・ヒノキ属・カヤ），広葉樹７種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節またはツブラジイ・コ

ナラ属アカガシ亜属・シイノキ属・ムクノキ・クスノキ・ヤブツバキ・ハイノキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・**マツ属複維管束亜属**（*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.）　　**マツ科**

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状，放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列，1～15細胞高のものと，水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

・**モミ属**（*Abies* sp.）　　**マツ科**

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで，晩材部の幅は薄い。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は粗く，じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で，1～4個。放射組織は単列，1～20細胞高。

・**ヒノキ属**（*Chamaecyparis* sp.）　　**ヒノキ科**

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか，分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列，1～15細胞高。

・**カヤ**（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）　　**イチイ科カヤ属**

早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は薄い。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか，分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1～4個。放射組織は単列，1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・**コナラ属コナラ亜属コナラ節またはツブラジイ**（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp. or *Castanopsis cuspidata*（Thunberg）Schottky）　　**ブナ科**

環孔材または放射孔材で，試料には年輪界が認められない。孔圏部は1～5列でやや放射状，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高で，木口面では複合～集合放射組織が認められる。

・**コナラ属アカガシ亜属**（*Quercus* subgen. *Cylobalanopsis* sp.）　　**ブナ科**

放射孔材で，管壁厚は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

試料番号	出土遺構	時代・時期	器種	樹種
W1(C 908)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	板材	シイノキ属
W2(C 896)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬・未製品	コナラ属アカガシ亜属
W3(C 897)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	板材	針葉樹
W4(C 895)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬・未製品	コナラ属アカガシ亜属
W5(C 910)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	不明	コナラ属コナラ亜属コナラ節またはツブラジイ
W6(C 893)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬・未製品	クスノキ
W7(C 902)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	容器(椀)	ムクノキ
W8(C 905)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	杭	カヤ
W9(C 904)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	杭	クスノキ
W10(C 899)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	木包丁	コナラ属アカガシ亜属
W11(C 906)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	杭	ハイノキ属
W12(C 887)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬	コナラ属アカガシ亜属
W13(C 911)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	丸太材	ヒノキ属
W14(A 183)	A SR01 (河川)	平安時代	鳥形	広葉樹(環孔材)
W15(A 178)	A SR01 (河川)	平安時代	斎串	ヒノキ属
W16(A 179)	A SR01 (河川)	平安時代	斎串	ヒノキ属
W17(A 180)	A SR01 (河川)	平安時代	斎串	ヒノキ属
W18(A 150)	A SP16 (柱穴)	平安時代	曲物底	ヒノキ属
W19(A 181)	A SR01 (河川)	平安時代	板材	ヒノキ属
W20(A 182)	A SR01 (河川)	平安時代	板材	モミ属
W21(A 184)	A SR01 (河川)	平安時代	用途不明	ヒノキ属
W22(C 909)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	板材	ヒノキ属
W23(C 891)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬・未製品	クスノキ
W24(C 894)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬・未製品	クスノキ
W25(C 900)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	杵	ヤブツバキ
W26(C 901)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	弓	カヤ
W27(C 898)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鋤	コナラ属アカガシ亜属
W28(C 903)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	容器未製品	クスノキ
W29(C 892)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬	コナラ属アカガシ亜属
W30(C 888)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬・隆起部分	コナラ属アカガシ亜属
W31(C 889)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬・未製品	クスノキ
W32(C 890)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	鍬・未製品	コナラ属アカガシ亜属
W33(C 907)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	杭	カヤ
W34(A 69)	A SP09 (建物)	弥生時代前期	柱	ヒノキ属
W35(C 912)	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	みかん割り材	ヒノキ属
W36	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	円形板材	クスノキ
W37	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	枝の付いた木	ヒノキ属
W38	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	枝の付いた木	カヤ
W39	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	太い幹	マツ属複維管束亜属
W40	C SD01 (環濠)	弥生時代前期	棒状	ヒノキ属

第5表　木製品の樹種同定結果

・シイノキ属（*Castanopsis* sp.）　　ブナ科

環孔材～放射孔材で孔圏部は３～４列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～20細胞高。

・ムクノキ（*Aphananthe aspera*（Thunb.）Planchon）　　ニレ科ムクノキ属

散孔材で横断面では角張った楕円形，単独または２～３個が複合する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型，１～５細胞幅，１～20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・クスノキ（*Cinnamoum camphora*（L.）Presl）　　クスノキ科クスノキ属

散材孔で管壁は薄く，横断面では楕円形，単独まれに２～３個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性Ⅲ型，１～３細胞幅，１～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔組織はしばしば大型の油細胞となる。

・ヤブツバキ（*Camellia japonica* L.）　　ツバキ科ツバキ属

散材孔で管壁は薄く，横断面では多角形～角張った楕円形，単独および２～３個が複合する。道管は階段穿孔を有し，壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型，１～２(３)細胞幅，１～20細胞高であるが時に上下に連結する。柔組織は随伴散在状。柔細胞は顕著に結晶を含む。

・ハイノキ属（*Symplocos* sp.）　　ハイノキ科

散材孔で管壁は薄く，横断面では多角形～角張った楕円形，単独および２～５個が複合する。道管は階段穿孔を有し，段は多数。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型，１～３細胞幅，１～20細胞高であるが時に上下に連結する。

4. 考　察

同定を行った木製品は，17種類（板材，鍬，容器，杭，木包丁，丸太材，鳥形，斎串，曲物底，杵，弓，鋤，柱，みかん割り材，枝の付いた木，太い幹，棒状）に分類される。

鍬・鋤については合計で11点について同定を行い，７点がアカガシ亜属，４点がクスノキであった。これまで各地で行われた鍬・鋤の樹種同定結果は，その多くがアカガシ亜属である（島地・伊東，1988；伊東，1990）。香川県においても，下川津遺跡や林・坊城遺跡で樹種同定が行われている（島地・林，1990；能城・鈴木，1990；パリノ・サーヴェイ

株式会社，1993ｂ)。その結果は多くがアカガシ亜属であり，アカガシ亜属以外の樹種では下川津遺跡でケヤキが鋤先に確認されている。これらの結果は，アカガシ亜属が選択的に利用されていたことを示している。林・坊城遺跡における結果から，アカガシ亜属の選択的利用が縄文時代晩期の稲作の開始と共に始まっていた可能性がある。稲作の技術と共に用材選択に関する知識・技術も伝播してきたのかなど，今後の検討課題は尽きない。クスノキについては，県内で確認された例は知られていない。しかし，福岡市拾六町ツイジ遺跡，大阪府四ツ池遺跡等では確認された例があり（島地・伊東，1988；伊東，1990)，鍬や鋤の用材として利用されていたことが推定される。しかし，強度等の面ではアカガシ亜属と大きく異なることから，製作された鍬・鋤の使用条件（水田・畑）等が異なっていた可能性がある。

本遺跡では，製作の各過程を示す鍬の未製品が多数出土しており，遺跡内で原木から鍬に加工されていたことが推定される。鍬は，みかん割りにした柾目材を利用している。アカガシ亜属の場合，道管が放射状に配列していることや大型の放射組織を有することから，放射方向に割ることが最も容易である。同様の加工法は，これまでにも各地で確認されており，材質を理解した上で適切な加工を施していたことが推定される。また２工程（添付資料による）[註1]では，板材の厚さを均一にした上で，１枚分の長さごとに切り込みをいれていたことが確認されている。伐採した木から，細かい板をすぐに作ると，内部応力のために反ったり割れたりということがおこる。内部応力を緩和するためには，少しずつ大分けにしながら，ある程度の期間放置しておくことが必要である。佐賀県菜畑遺跡では，その過程を示す馬鍬が出土している。本遺跡から出土した未製品では，２工程の後に内部応力を緩和するためにしばらく放置していた期間があったと推定される。

杵はヤブツバキであった。同様の製品については，これまでにも各地で樹種同定が行われている。その結果では，アカガシ亜属等の堅い木材が比較的多く（島地・伊東，1988；伊東，1990)，用途を考慮した上での用材選択が行われていたと考えられる。香川県では，下川津遺跡でイボタノキ属やアカガシ亜属が確認されている（島地・林，1990；能城・鈴木，1990)。このことから，他の地域と同様の用材選択が行われていたと推定され，今回の結果もその一例といえる。

弓はカヤであった。弥生時代の弓の樹種には，これまで各地で行われた調査でカヤとイヌガヤが多く，他にイヌマキ，イチイ等が確認されている(島地・伊東，1988；伊東，1990)。これらが出土した遺跡の位置を見ると，カヤは大阪以西に，イヌマキとイヌガヤ

は大阪以東の主として東海地域に集中している（松田，1984)。イチイはいずれも東北地方で確認されている。今回の結果から，香川県における弥生時代の弓には，大阪以西の地域と同様にカヤを用材として選択していたと考えられる。

木包丁はアカガシ亜属であった。木包丁は石包丁に似せて作られた木器であり，これまでにも北陸地方から畿内・中国地方にかけて出土例が知られている（奈良国立文化財研究所，1993)。各地で出土した木包丁は，多くの場合柾目板で２孔１対の紐孔が確認できる（奈良国立文化財研究所，1993)。樹種はコナラ節・ヤマグワ・アカガシ亜属などが確認され（島地・伊東，1988；伊東，1990)，比較的硬い木材を選択している。今回出土した試料は孔が確認できないが，樹種がアカガシ亜属であること，木取りが柾目板であることは，これまでに確認されてきた傾向と一致する。

容器は椀にムクノキ，未製品にクスノキが確認された。椀にムクノキが確認された例は，県内・県外のいずれでもほとんど知られていない。しかし，県内で弥生時代前期の椀について樹種を明らかにした例はなく，ムクノキの選択が一般的であったか否かについてはさらに資料を蓄積した上で検討する必要がある。容器にクスノキが使用される例は，鉢や蓋などに少ないながら確認することができる（島地・伊東，1988；伊東，1990；奈良国立文化財研究所，1993)。本遺跡の結果もその一例といえるが，既存資料が少ないために一般的な用材選択であったのか否かは不明である。当該期の容器類については，さらに多くの資料を蓄積したい。

弥生時代前期で上記以外の製品（柱・板材・不明・みかん割り材・円形板材・枝の付いた木・太い幹・棒状）については，試料の用途・性格とこれまで各地で行われてきた樹種同定結果等を考慮すれば，遺跡周辺で生育していた樹木を使用した可能性がある。これは，これまで高松平野で行われた木製品の樹種同定や花粉分析の結果とも一致する。このことから弥生時代前期の遺跡周辺には，基本的にアカガシ亜属やクスノキなどの暖温帯性の常緑広葉樹を主とし，針葉樹が混じるような植生であったと考えられる。

平安時代の製品は，鳥形，斎串，曲物底，板材，用途不明であり，鳥形が環孔材である以外は全て針葉樹が使用され，そのほとんどはヒノキ属である。ヒノキ属は，材質が均質で木理が通直なために，板状の加工が容易である。これまでにも多くの遺跡で今回と同様の製品に確認されている（島地・伊東，1988；伊東，1990)。このことから，同様の用材選択が広い地域で行われていたと推定される。このうち斎串については，下川津遺跡の調査結果から，ヒノキ属が選択的に利用されていた可能性が指摘されている（能城・鈴木，

1990)。本地域周辺では，東山崎・水田遺跡でスギが2点確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社，1992)，必ずしもヒノキ属が選択されていたとは限らない。高松平野では，斎串の樹種を明らかにした例が少ない。そのため，今後さらに資料を蓄積し，地域による違いがあるのか，時代・時期による差があるのか等を明らかにしていく必要がある。

今回の結果を見た限りでは，高松平野における用材選択の傾向と大きな差異は認められない。例えば東山崎・水田遺跡は，本遺跡とは丘陵を挟んだ西側に位置しており，木材は同じ丘陵で得ていた可能性がある。また弥生時代以降の水田開発で低地の開墾が進めば，木材を得る場所は基本的には徐々に丘陵地に限られていったことが推定される。高松平野周辺の丘陵地の潜在自然植生は，基本的には構成種はほぼ同じである（宮脇，1982)。そのため，結果的に用材選択に差が現れなかった可能性がある。しかし，中にはこれまで認められなかった結果も認められるので今後の検討課題として残される。さらに資料を蓄積したい。

＜引用文献＞

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ.木材研究・資料，26，p.91-189

松田隆嗣（1984）山賀（その3）遺跡より出土した木製遺物の樹種について.「山賀（その3）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　―本文編―」　p.429-436，　大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

宮脇　昭編（1982）日本植生誌　四国．539p.，至文堂

奈良国立文化財研究所（1993）木器集成図録　近畿原始編（解説）．410p.

能城修一・鈴木三男（1990）昭和63年度の調査の分析委託結果.「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡　―第2分冊―」，p.533-567，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）木製品の樹種.「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　東山崎・水田遺跡　第1分冊」，p.358-369，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993ａ）郡家一里屋遺跡出土木材等分析委託業務報告.「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十二冊　郡家一里屋遺跡」，p.227-233，香川県埋蔵文化財研究会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993ｂ）林・坊城遺跡自然河川出土木材の樹種.「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　林・坊城遺跡」, p.224-238, 香川県埋蔵文化財研究会.

島地　謙・林　昭三（1990）昭和61年度の調査の分析委託結果.「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡　―第２分冊―」, p.520-532, 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団.

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.

註１　添付資料とは「鴨部・川田遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成３年度』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1992　文献のP33-34のことを指している。

参考に上記文献から必要箇所を引用しておく。

「製作段階の異なる広鍬を中心とした多数の鍬未製品を検出しており，それによって木製鍬の製作工程をある程度推定することができる。

０工程　伐採および枝落とし・分割　０工程製品は未検出であるが，以下の諸工程の前提として当然想定し得る工程である。また次工程以後の製品の規模から考えてこの段階で概ね２枚分長さに分割している可能性が高い。

１工程　原木丸太材の分割　放射状に割り裂きいわゆる「ミカン割り材」を作る。この段階で木芯部を除去しているが樹皮は残す。

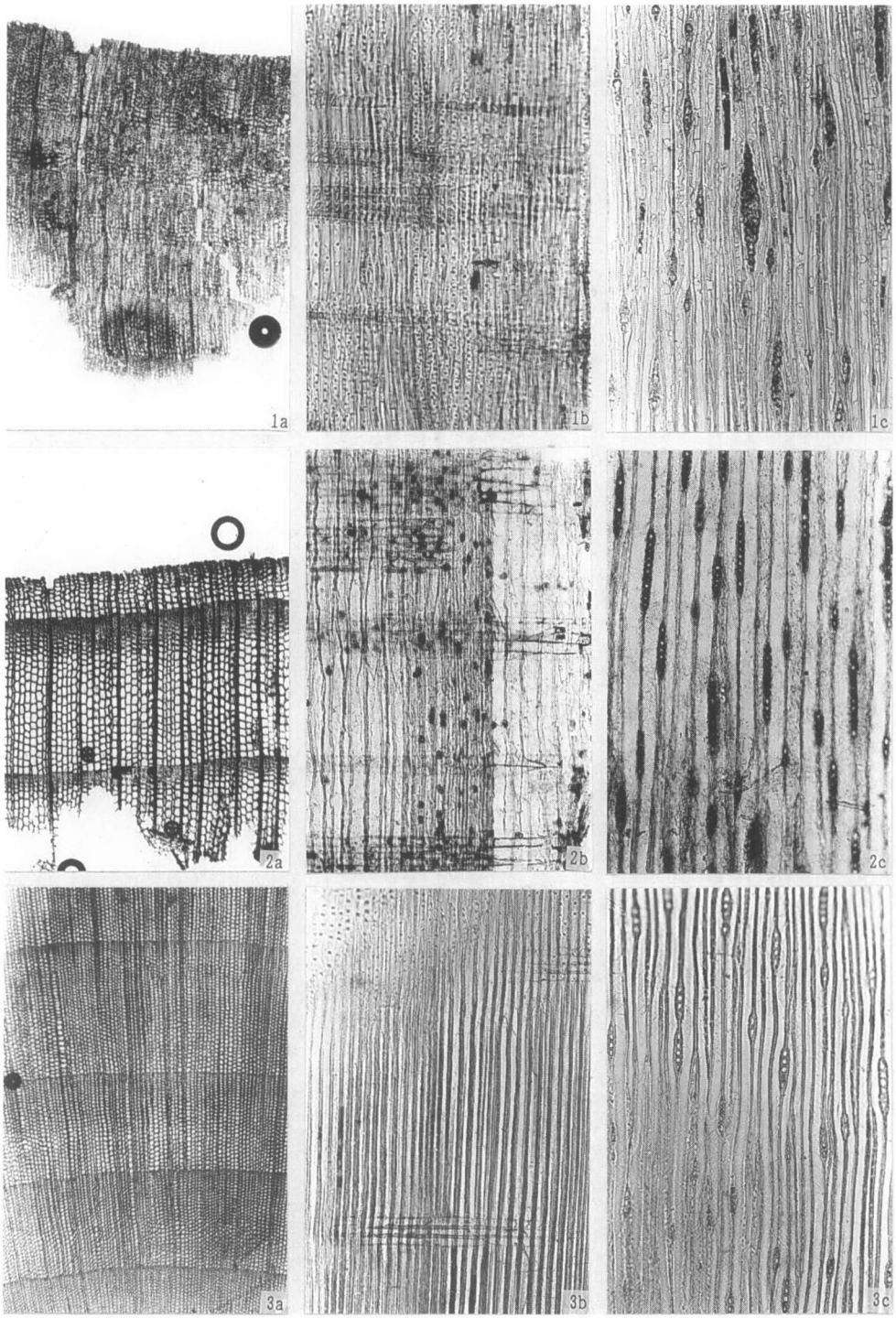
２工程　前工程製品では両側部（樹皮側と木芯側）の厚さが異なるため，最終的には「柄壺」となる隆起を作りつつ厚板材の一面を削り込み，均一的な厚さの板材とする。と同時に鍬一枚分の長さごとに切り込みを入れる。

３工程　前工程で作り出した切り込みに従って分割する。

４工程　樹皮を剝がし,「柄壺」の形態を整える。

５工程　柄壺および刃部の細部加工　基本形態の完成

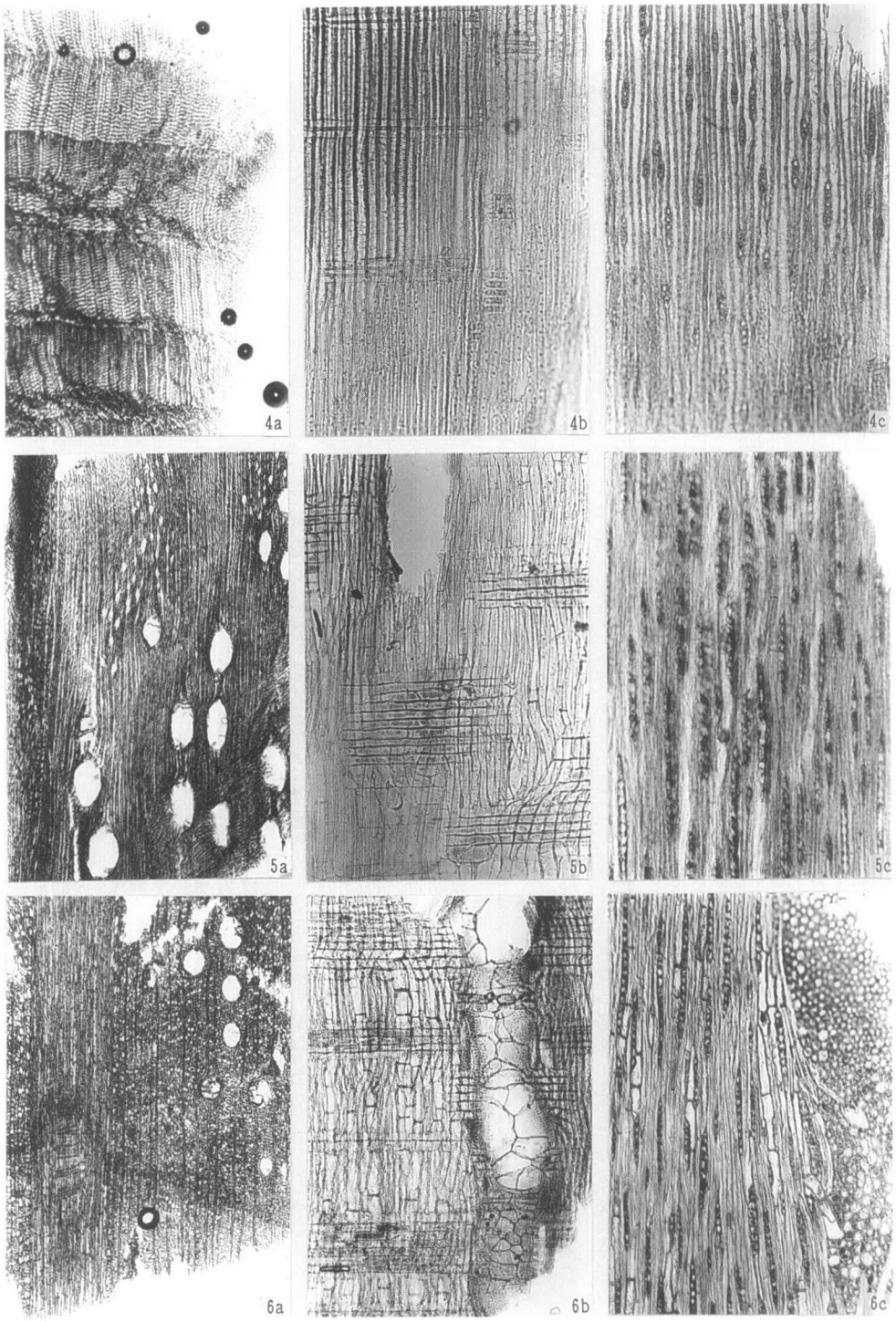
６工程　柄装着部の穿孔　諸手鍬で１例穿孔途上の資料がある。」



1. マツ属複維管束亜属（試料番号W39）
2. モミ属（試料番号W20）
3. ヒノキ属（試料番号W37）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

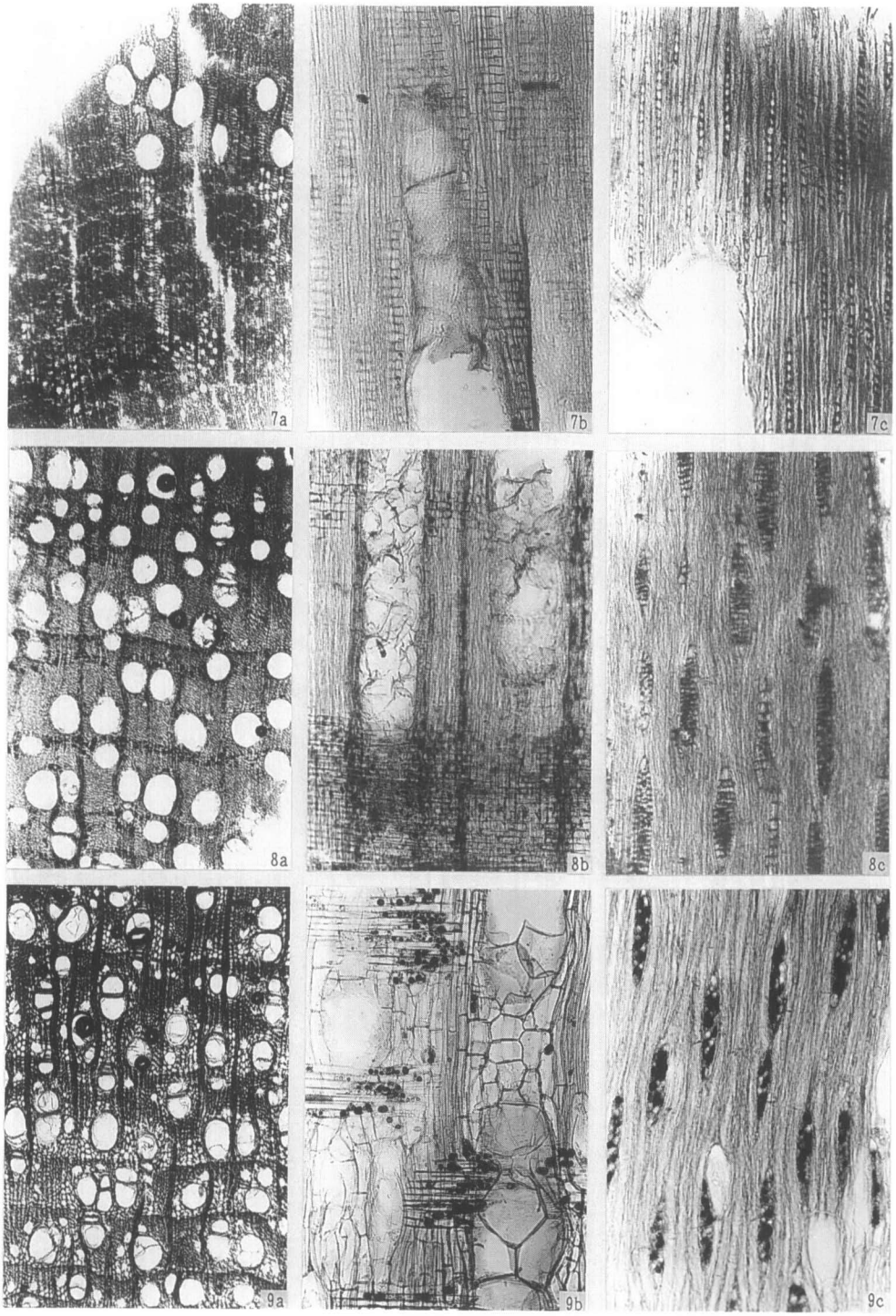
第423図　木材（1）



4. カヤ（試料番号W38）
5. コナラ属コナラ亜属コナラ節またはツブラジイ（試料番号W5）
6. コナラ属アカガシ亜属（試料番号W32）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b, c

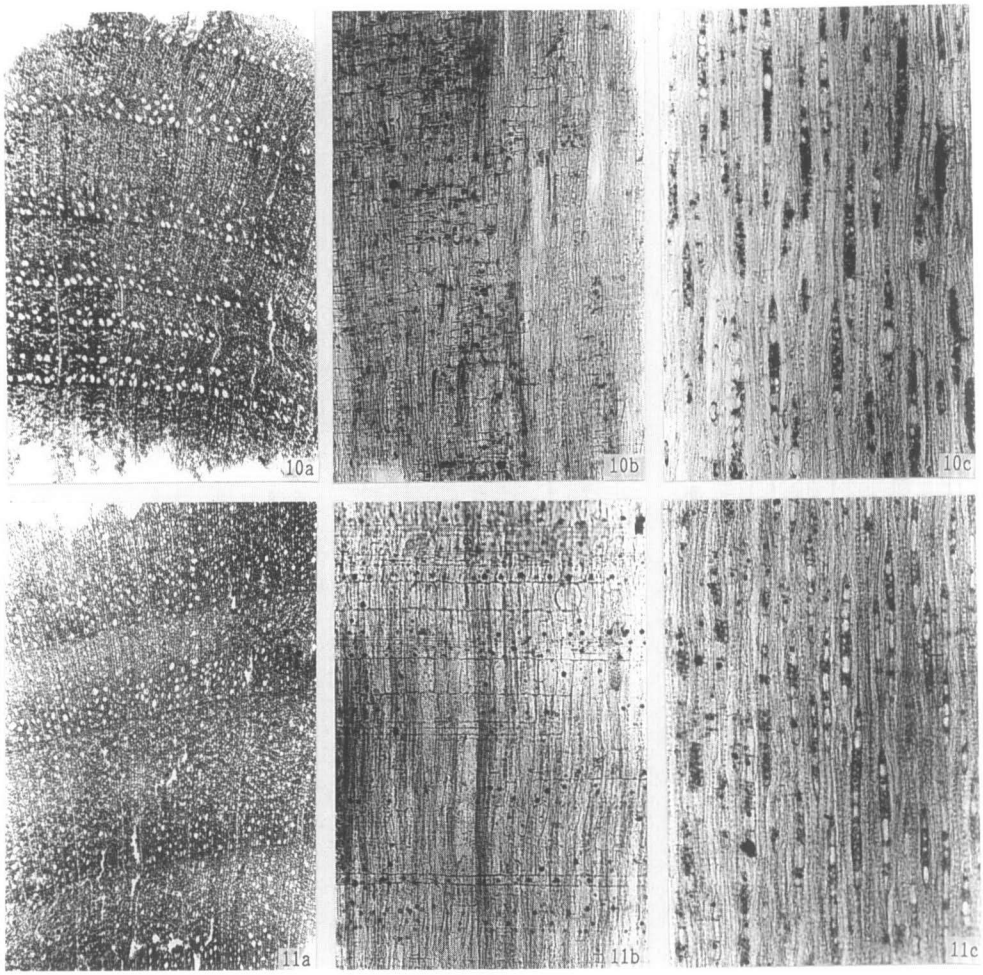
第424図　木材（2）



7. シイノキ属（試料番号W1）
8. ムクノキ（試料番号W7）
9. クスノキ（試料番号W6）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第425図　木材（3）



10. ヤブツバキ（試料番号W25）
11. ハイノキ属（試料番号W11）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第426図　木材（4）

第2節　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析

藁科　哲男
（京都大学原子炉実験所）

はじめに

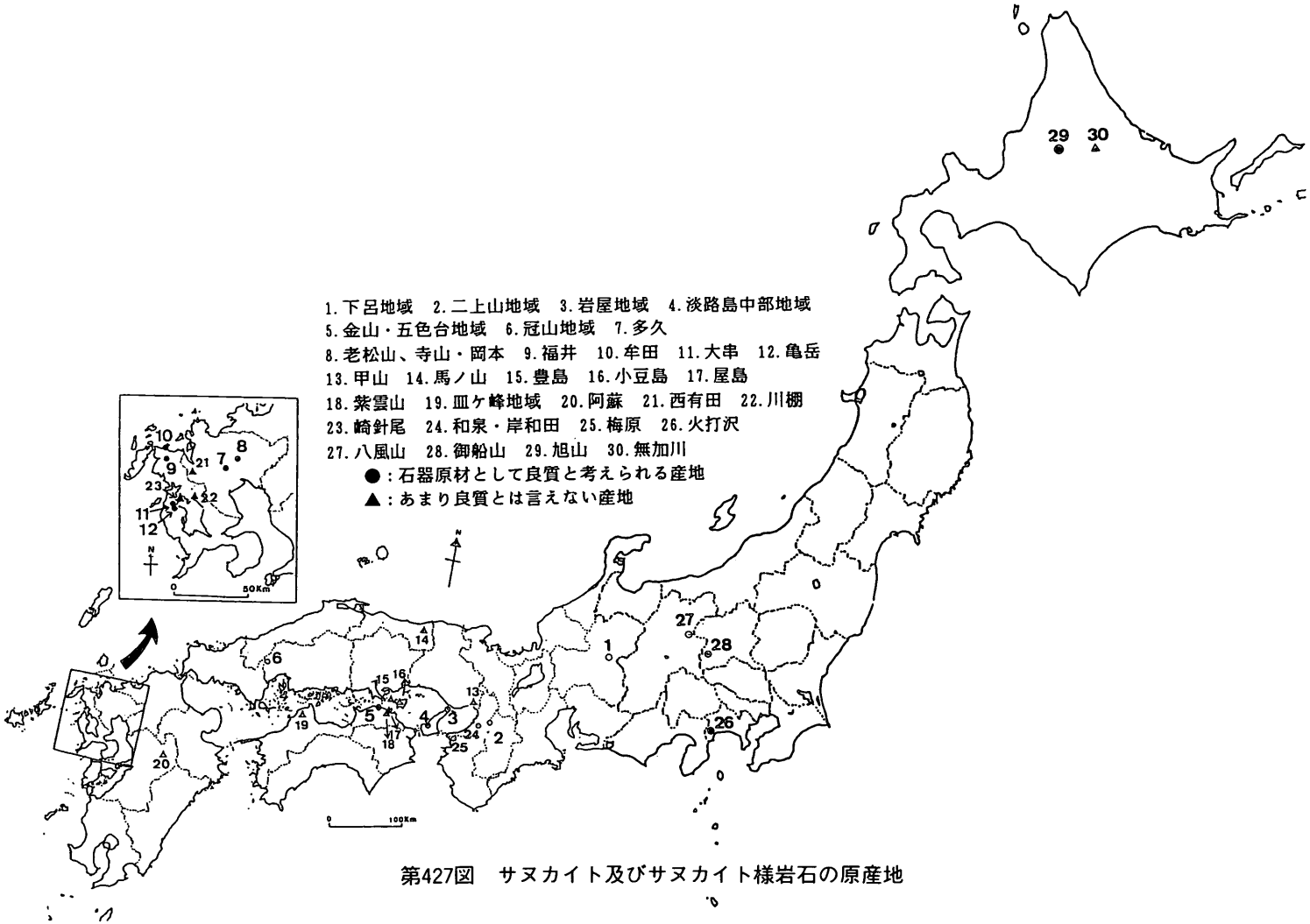
自然科学的な手法を用いて，石器石材の産地を客観的に，かつ定量的に推定し，古代の交流，交易および文化圏，交易圏を探ると言う目的で，蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に，分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが，サヌカイトで一応の成果を得た後に，同じ方法を黒曜石にも拡張し，本格的に産地推定を行なっている[1, 2, 3]。サヌカイト，黒曜石などの主成分組成は，原産地ごとに大きな差はみられないが，不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため，微量成分を中心に元素分析を行ない，これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて，かつ，試料調整が単純，測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め，あらかじめ，各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値，分散などと，遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて，各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析を行なった試料は，香川県大川郡志度町に位置する鴨部・川田遺跡出土の弥生時代前期後半～終末のサヌカイト製遺物88個で，これら遺物の産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き新鮮面を出し，塊状の試料を作り，エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl，Si，K，Ca，Ti，Mn，Fe，



第427図　サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地

Rb，Sr，Y，Zr，Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り，それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは，K/Ca，Ti/Ca，Mn/Sr，Fe/Sr，Rb/Sr，Y/Sr，Zr/Sr，Nb/Srをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は，西日本に集中してみられ，石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地，および玄武岩，ガラス質安山岩など，合わせて31ヶ所の調査を終えている。第427図にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち，金山・五色台地域では，その中の多く地点からは良質のサヌカトおよびガラス質安山岩が多量に産出し，かつそれらは数ヶの群に分かれる。これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると40個の原石群に分類できる。その結果を第６表～第８表に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると，金山西群，金山東群，国分寺群，蓮光寺群，白峰群，法印谷群の６ヶの群に，ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると，全体の約２/３が第９表に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し，これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは，岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92％および88％と群を作らない数個の原石とがみられ，金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。第10表に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約１％であるが金山東群に一致する原石が採取される。第11表に示す和歌山市梅原原産地からは，金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に，遺物が岩屋，和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には，産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し，第９，10表のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め，確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から６％の割合で採取されることから，一遺跡10個以上の遺物を分析し，第10表のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて，和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

原産地	原石群名	分析個数	K／Ca X±σ	Ti／Ca X±σ	Mn／Sr X±σ	Fe／Sr X±σ	Rb／Sr X±σ	Y／Sr X±σ	Zr／Sr X±σ	Nb／Sr X±σ	Al／Ca X±σ	Si／Ca X±σ
北海道	旭山	80	0.351±0.011	0.288±0.010	0.089±0.005	5.064±0.140	0.174±0.011	0.096±0.009	0.903±0.029	0.015±0.012	0.015±0.001	0.141±0.005
群馬県	荒船山	43	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.034	0.085±0.014	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.021	0.123±0.032
長野県	八風山	46	0.274±0.028	0.324±0.010	0.090±0.008	4.905±0.505	0.104±0.009	0.100±0.009	0.581±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.168±0.014
神奈川県	火打沢	40	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.023±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001
岐阜県	下呂	93	1.576±0.055	0.227±0.011	0.038±0.004	0.766±0.025	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.035±0.009	0.052±0.003	0.660±0.025
奈良県	二上山	51	0.288±0.010	0.215±0.006	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.066±0.009	0.620±0.022	0.024±0.010	0.019±0.001	0.144±0.005
大阪府	和泉	26	0.494±0.023	0.325±0.025	0.056±0.004	4.060±0.148	0.296±0.021	0.065±0.010	0.706±0.025	0.038±0.010	0.023±0.001	0.194±0.009
兵庫県	岩屋第一	28	0.616±0.021	0.254±0.012	0.057±0.005	3.610±0.189	0.365±0.019	0.056±0.012	0.846±0.026	0.027±0.017	0.018±0.001	0.186±0.007
	〃 第二	24	0.535±0.020	0.263±0.005	0.053±0.005	3.438±0.103	0.340±0.015	0.042±0.012	1.069±0.030	0.026±0.014	0.017±0.001	0.173±0.008
	甲山	22	0.300±0.017	0.154±0.005	0.056±0.007	3.350±0.261	0.130±0.012	0.061±0.033	0.574±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008
香川県	五色台 国分寺	28	0.457±0.011	0.251±0.007	0.053±0.005	3.574±0.122	0.311±0.019	0.043±0.016	0.970±0.033	0.038±0.015	0.015±0.001	0.149±0.005
	五色台 蓮光寺	18	0.459±0.012	0.249±0.008	0.053±0.005	3.518±0.129	0.308±0.019	0.043±0.015	0.972±0.037	0.034±0.009	0.016±0.001	0.150±0.004
	五色台 白峰	51	0.534±0.015	0.262±0.005	0.053±0.005	3.376±0.108	0.340±0.014	0.040±0.016	1.071±0.051	0.032±0.011	0.017±0.001	0.173±0.007
	五色台 法印谷	25	0.397±0.009	0.239±0.004	0.069±0.005	4.619±0.127	0.277±0.012	0.059±0.011	1.145±0.029	0.031±0.013	0.015±0.001	0.130±0.004
	金山 金山東	24	0.488±0.012	0.222±0.004	0.079±0.005	4.617±0.126	0.316±0.017	0.057±0.011	1.186±0.033	0.020±0.015	0.017±0.001	0.155±0.005
	金山 〃 西	19	0.406±0.009	0.216±0.005	0.082±0.005	4.808±0.125	0.292±0.017	0.064±0.011	1.059±0.025	0.020±0.011	0.015±0.001	0.133±0.006
	*五色台	63	0.869±0.048	0.120±0.006	0.023±0.005	2.294±0.114	0.484±0.026	0.006±0.011	0.705±0.044	0.043±0.011	0.039±0.003	0.459±0.028
鳥取県	馬ノ山	23	0.188±0.007	0.178±0.006	0.011±0.001	0.916±0.033	0.032±0.002	0.001±0.002	0.177±0.009	0.004±0.002	0.015±0.001	0.111±0.005
広島県	冠山 冠高原	60	0.651±0.021	0.485±0.014	0.046±0.004	3.322±0.104	0.174±0.009	0.029±0.009	0.462±0.017	0.185±0.010	0.025±0.002	0.241±0.008
	冠山 冠山東	29	0.323±0.019	0.363±0.031	0.019±0.001	1.607±0.060	0.059±0.009	0.003±0.005	0.399±0.043	0.025±0.009	0.021±0.001	0.171±0.006
	冠山 飯山	25	1.116±0.061	0.472±0.022	0.037±0.005	2.228±0.080	0.245±0.011	0.023±0.009	0.524±0.014	0.246±0.013	0.038±0.003	0.391±0.021

第6表　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値（X）と標準偏差値（σ）

原産地	原石群名	分析個数	K/Ca X±σ	Ti/Ca X±σ	Mn/Sr X±σ	Fe/Sr X±σ	Rb/Sr X±σ	Y/Sr X±σ	Zr/Sr X±σ	Nb/Sr X±σ	Al/Ca X±σ	Si/Ca X±σ
佐賀県	多久第一	53	0.834±0.053	0.385±0.010	0.060±0.008	5.075±0.284	0.507±0.036	0.060±0.017	0.851±0.036	0.237±0.019	0.030±0.002	0.307±0.019
	〃 第二	23	0.849±0.062	0.381±0.016	0.070±0.009	5.728±0.310	0.559±0.052	0.061±0.018	0.854±0.035	0.254±0.025	0.030±0.003	0.313±0.022
	〃 第三	8	1.109±0.220	0.335±0.029	0.068±0.009	4.784±0.981	0.702±0.091	0.082±0.024	0.811±0.031	0.260±0.025	0.036±0.006	0.401±0.063
	老松山	62	0.718±0.029	0.304±0.010	0.074±0.007	5.780±0.241	0.539±0.036	0.068±0.019	0.693±0.033	0.211±0.020	0.025±0.002	0.263±0.010
	寺山・岡本	30	0.633±0.045	0.299±0.011	0.079±0.005	6.119±0.295	0.478±0.035	0.071±0.018	0.638±0.033	0.192±0.013	0.023±0.002	0.237±0.016
	西有田	17	0.453±0.019	0.331±0.005	0.098±0.010	7.489±0.249	0.307±0.024	0.081±0.015	0.568±0.023	0.106±0.010	0.023±0.002	0.237±0.016
長崎県	大串	28	1.111±0.118	0.140±0.009	0.055±0.020	1.650±0.236	0.236±0.043	0.041±0.027	0.486±0.038	0.082±0.022	0.050±0.006	0.607±0.059
	亀岳	19	1.072±0.042	0.144±0.008	0.041±0.006	1.776±0.152	0.233±0.014	0.015±0.013	0.497±0.018	0.065±0.015	0.049±0.003	0.587±0.018
	牟田第一	30	0.794±0.094	0.335±0.024	0.072±0.009	4.938±0.251	0.872±0.132	0.223±0.036	0.720±0.053	0.301±0.042	0.026±0.003	0.284±0.033
	〃 第二	13	0.601±0.044	0.316±0.010	0.102±0.015	8.390±0.541	1.114±0.102	0.329±0.034	0.976±0.065	0.479±0.039	0.021±0.002	0.218±0.015
	川棚第一	59	0.509±0.022	0.294±0.008	0.072±0.006	4.539±0.157	0.211±0.016	0.072±0.015	0.823±0.046	0.044±0.010	0.022±0.002	0.201±0.009
	〃 第二	9	0.389±0.042	0.245±0.022	0.073±0.005	5.373±0.332	0.193±0.032	0.068±0.013	0.721±0.041	0.045±0.011	0.018±0.002	0.157±0.013
	福井第一	15	0.639±0.015	0.317±0.006	0.098±0.009	8.284±0.312	1.242±0.050	0.352±0.031	1.021±0.032	0.519±0.033	0.022±0.002	0.230±0.007
	〃 第二	25	0.519±0.015	0.305±0.007	0.090±0.008	7.729±0.227	0.954±0.038	0.274±0.027	0.871±0.041	0.407±0.019	0.020±0.001	0.190±0.006
	崎針尾第一	71	0.388±0.029	0.242±0.019	0.057±0.005	4.371±0.218	0.158±0.019	0.055±0.009	0.450±0.039	0.062±0.008	0.017±0.001	0.161±0.011
	〃 第二	14	0.608±0.125	0.360±0.046	0.081±0.013	5.625±0.884	0.316±0.055	0.071±0.016	0.659±0.097	0.098±0.023	0.024±0.004	0.246±0.050
熊本県	阿蘇第一	15	2.006±0.258	0.646±0.052	0.064±0.011	2.085±0.320	0.481±0.068	0.106±0.028	1.647±0.197	0.063±0.012	0.057±0.010	0.597±0.099
	〃 第二	14	0.993±0.198	0.514±0.070	0.061±0.008	3.087±0.441	0.299±0.066	0.064±0.013	1.043±0.182	0.038±0.013	0.032±0.005	0.293±0.041
	菊池	42	0.678±0.057	0.458±0.020	0.062±0.005	3.457±0.206	0.194±0.018	0.072±0.009	0.728±0.054	0.025±0.010	0.019±0.002	0.185±0.015
	JG−1 a)	56	1.327±0.021	0.266±0.006	0.058±0.006	2.817±0.074	0.756±0.015	0.183±0.024	0.762±0.033	0.078±0.014	0.036±0.003	0.448±0.011

＊：ガラス質安山岩　a)：Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol. 8 175-192.

第7表　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値(X)と標準偏差値(σ)

遺跡名	遺物群名	分析個数	K/Ca X±σ	Ti/Ca X±σ	Mn/Sr X±σ	Fe/Sr X±σ	Rb/Sr X±σ	Y/Sr X±σ	Zr/Sr X±σ	Nb/Sr X±σ	Al/Ca X±σ	Si/Ca X±σ
北海道	頭無川遺物群	35	0.352±0.029	0.291±0.021	0.094±0.012	5.376±0.721	0.170±0.015	0.103±0.016	0.874±0.101	0.018±0.011	0.017±0.021	0.156±0.090
石川県	酒見遺物群	39	0.476±0.016	0.596±0.012	0.097±0.053	5.229±0.168	0.160±0.010	0.110±0.015	1.282±0.033	0.031±0.008	0.025±0.017	0.228±0.075

第8表　原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値(X)と標準偏差値(σ)

群　名	個　数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
岩屋第一群	２０個	３０％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	２２	３３	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
〃	5	8	国分寺群に一致
〃	4	6	蓮光寺群に一位
〃	3	5	金山東群に一致
〃	2	3	和泉群に一致
〃	4	6	不明（どこの原石群にも属さない）

第９表　岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

群　名	個　数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
岩屋第一群	１２個	１７％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和　泉　群	9	１３	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	３９	５４	不明（どこの原石群にも属さない）

第10表　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

群　名	個　数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
和　泉　群	１０個	４８％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	淡路島、岸和田、和歌山に出現
	１０	４８	不明（どこの原石群にも属さない）

第11表　和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

結果と考察

遺跡から出土した石器，石片は，風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し，新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に，圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で，表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため，表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を第12，13表に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするため K/Ca の一変量だけを考えると，分析番号46209番の遺物は K/Ca の値が0.482で，金山東群の［平均値］±［標準偏差値］は，0.488±0.012であるから，遺物と原石群の差を標準偏差値（σ）を基準にして考えると遺物は原石群から0.5σ離れている。ところで金山原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると，平均値から±0.5σのずれより大きいものが61ヶある。すなわち，この遺物が，金山東群の原石から作られていたと仮定しても，0.5σ以上離れる確率は61％であると言える。だから，金山東群の平均値から0.5σしか離れていないときには，この遺物が金山東群の原石から作られたものでないとは，到底言い切れない。ところがこの遺物を二上山群に比較すると，二上山群の平均値からの隔たりは，約19σである。これを確率の言葉で表現すると，二上山群の原石を採ってきて分析したとき，平均値から19σ以上離れている確率は，一兆の千万倍分の一であると言える。このように，一兆の千万倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して，この遺物が作られたとは考えられないから，この遺物は，二上山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと，「この遺物は金山東群に61％，二上山群に一兆の十万倍分の一％の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について，この判断を第６表～第８表のすべての原石群について行ない，低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは，金山東群の原産地だけとなり，金山産地または岩屋原産地の石材が使用されていると判定される。実際は K/Ca といった唯１ヶの変量だけでなく，前述した８ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならならい。例えばＡ原産地のＡ群で，Ca元素と Rb元素との間に相関があり，Caの量を計れば Rb の量は分析しなくても分かるようなときは，Ａ群の石材で作られた遺物であれば，Ａ群と比較したとき，Ca量が一致すれば当然 Rb量も一致するはずである。した

分析番号	元素比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
46173	0.473	0.228	0.090	4.630	0.315	0.058	1.198	0.046	0.017	0.143
46174	0.450	0.222	0.086	4.639	0.328	0.081	1.152	0.053	0.015	0.146
46175	0.474	0.219	0.075	4.595	0.347	0.065	1.120	0.034	0.014	0.141
46176	0.454	0.214	0.082	4.574	0.321	0.048	1.195	0.045	0.015	0.136
46177	0.470	0.225	0.079	4.355	0.340	0.067	1.136	0.000	0.016	0.141
46178	0.477	0.224	0.084	4.647	0.301	0.062	1.182	0.013	0.016	0.143
46179	0.481	0.227	0.086	4.385	0.326	0.037	1.109	0.000	0.016	0.139
46180	0.468	0.223	0.084	4.392	0.313	0.084	1.183	0.000	0.015	0.141
46181	0.474	0.222	0.075	4.455	0.305	0.057	1.139	0.022	0.014	0.137
46182	0.469	0.224	0.079	4.441	0.307	0.061	1.198	0.010	0.014	0.136
46183	0.426	0.215	0.077	4.668	0.307	0.053	1.103	0.015	0.014	0.129
46184	0.456	0.224	0.088	4.517	0.311	0.054	1.137	0.014	0.015	0.134
46185	0.451	0.219	0.080	4.576	0.321	0.054	1.114	0.036	0.014	0.131
46186	0.469	0.219	0.081	4.703	0.313	0.075	1.186	0.000	0.013	0.143
46187	0.500	0.262	0.051	3.440	0.335	0.034	1.062	0.023	0.016	0.152
46188	0.614	0.254	0.074	4.384	0.407	0.085	1.029	0.030	0.017	0.176
46189	0.450	0.205	0.079	4.731	0.335	0.086	1.139	0.000	0.014	0.138
46190	0.472	0.226	0.077	4.556	0.310	0.058	1.186	0.031	0.016	0.138
46191	0.459	0.218	0.084	4.740	0.296	0.075	1.148	0.000	0.015	0.151
46192	0.457	0.217	0.067	4.461	0.344	0.059	1.132	0.032	0.015	0.139
46193	0.455	0.217	0.086	4.822	0.326	0.055	1.137	0.033	0.015	0.137
46194	0.453	0.217	0.086	4.538	0.334	0.070	1.128	0.032	0.014	0.133
46195	0.673	0.235	0.058	4.150	0.433	0.097	1.127	0.000	0.016	0.191
46196	0.457	0.222	0.070	4.655	0.319	0.078	1.133	0.000	0.015	0.137
46197	0.483	0.226	0.094	4.522	0.346	0.028	1.151	0.044	0.017	0.148
46198	0.474	0.223	0.072	4.449	0.297	0.083	1.156	0.017	0.015	0.140
46199	0.287	0.226	0.068	4.358	0.207	0.071	0.610	0.007	0.010	0.095
46200	0.453	0.220	0.070	4.650	0.315	0.087	1.184	0.000	0.014	0.132
46201	0.476	0.228	0.096	4.581	0.318	0.047	1.135	0.015	0.016	0.146
46202	0.441	0.210	0.083	4.403	0.325	0.084	1.128	0.042	0.015	0.135
46203	0.452	0.214	0.078	4.594	0.314	0.044	1.152	0.029	0.015	0.133
46204	0.486	0.216	0.083	4.630	0.317	0.041	1.182	0.043	0.015	0.150
46205	0.459	0.219	0.080	4.775	0.317	0.093	1.199	0.019	0.014	0.141
46206	0.537	0.264	0.047	3.406	0.346	0.041	1.064	0.039	0.018	0.161
46207	0.490	0.225	0.081	4.689	0.331	0.058	1.159	0.022	0.014	0.142
46208	0.479	0.225	0.087	4.827	0.328	0.047	1.212	0.020	0.015	0.143
46209	0.482	0.221	0.071	4.541	0.320	0.070	1.188	0.000	0.015	0.135
46210	0.471	0.224	0.080	4.668	0.314	0.071	1.146	0.025	0.014	0.135
46211	0.477	0.237	0.078	4.401	0.310	0.064	1.198	0.000	0.014	0.138
46212	0.475	0.217	0.089	4.687	0.304	0.068	1.149	0.021	0.015	0.140
46213	0.466	0.223	0.090	4.595	0.321	0.070	1.150	0.000	0.013	0.142
46214	0.470	0.218	0.090	4.674	0.337	0.067	1.177	0.040	0.015	0.140
46215	0.490	0.221	0.084	4.488	0.335	0.067	1.082	0.015	0.016	0.147
46216	0.480	0.228	0.091	4.444	0.343	0.075	1.144	0.020	0.015	0.147
46217	0.482	0.228	0.076	4.627	0.329	0.086	1.164	0.016	0.015	0.143
46218	0.468	0.218	0.089	4.626	0.327	0.085	1.185	0.000	0.015	0.142
46219	0.527	0.267	0.050	3.503	0.369	0.028	1.112	0.029	0.016	0.159
46220	0.454	0.215	0.074	4.531	0.302	0.064	1.152	0.018	0.016	0.136
46221	0.478	0.226	0.068	4.663	0.309	0.068	1.201	0.025	0.016	0.142
46222	0.479	0.217	0.078	4.456	0.314	0.088	1.149	0.023	0.015	0.142

第12表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
46223	0.491	0.230	0.078	4.564	0.331	0.068	1.182	0.025	0.014	0.147
46224	0.475	0.218	0.072	4.363	0.355	0.070	1.158	0.027	0.015	0.138
46225	0.474	0.213	0.085	4.563	0.306	0.103	1.206	0.000	0.017	0.146
46226	0.462	0.219	0.080	4.546	0.306	0.072	1.150	0.010	0.015	0.139
46227	0.482	0.221	0.084	4.425	0.351	0.059	1.166	0.014	0.017	0.141
46228	0.479	0.221	0.080	4.605	0.309	0.051	1.177	0.000	0.016	0.144
46229	0.459	0.221	0.075	4.624	0.329	0.074	1.147	0.029	0.013	0.137
46230	0.461	0.223	0.078	4.488	0.316	0.090	1.171	0.029	0.014	0.135
46231	0.469	0.221	0.076	4.739	0.319	0.075	1.195	0.015	0.016	0.141
46232	0.467	0.223	0.082	4.316	0.362	0.045	1.129	0.033	0.017	0.140
46233	0.454	0.217	0.088	4.674	0.332	0.078	1.178	0.018	0.015	0.133
46234	0.463	0.224	0.085	4.630	0.307	0.073	1.122	0.000	0.013	0.139
46235	0.458	0.213	0.084	4.741	0.315	0.069	1.124	0.016	0.016	0.139
46236	0.447	0.250	0.043	3.595	0.307	0.056	1.013	0.047	0.015	0.138
46237	0.472	0.223	0.082	4.574	0.331	0.056	1.201	0.022	0.014	0.143
46238	0.488	0.222	0.085	4.537	0.337	0.089	1.124	0.030	0.018	0.146
46239	0.451	0.218	0.089	4.755	0.318	0.077	1.192	0.011	0.016	0.135
46240	0.480	0.235	0.074	4.518	0.305	0.067	1.198	0.034	0.016	0.150
46241	0.476	0.225	0.077	4.480	0.324	0.054	1.130	0.028	0.016	0.138
46242	0.477	0.224	0.082	4.697	0.311	0.061	1.199	0.012	0.015	0.142
46243	0.456	0.224	0.079	4.782	0.322	0.081	1.183	0.033	0.015	0.142
46244	0.463	0.222	0.076	4.598	0.323	0.053	1.158	0.000	0.014	0.137
46245	0.445	0.247	0.048	3.824	0.291	0.046	0.919	0.049	0.014	0.134
46246	0.451	0.221	0.078	4.627	0.314	0.088	1.143	0.013	0.015	0.135
46247	0.446	0.220	0.065	4.687	0.311	0.075	1.150	0.000	0.014	0.136
46248	0.451	0.222	0.069	4.612	0.307	0.067	1.140	0.017	0.016	0.136
46249	0.462	0.224	0.082	4.709	0.298	0.054	1.193	0.007	0.016	0.139
46250	0.455	0.221	0.081	4.652	0.360	0.062	1.224	0.000	0.014	0.136
46251	0.683	0.247	0.066	4.162	0.426	0.007	1.086	0.027	0.019	0.200
46252	0.455	0.255	0.055	3.506	0.326	0.050	0.996	0.000	0.014	0.141
46253	0.449	0.220	0.079	4.709	0.315	0.079	1.183	0.000	0.016	0.141
46254	0.454	0.225	0.076	4.484	0.362	0.033	1.121	0.011	0.017	0.138
46255	0.383	0.239	0.072	4.848	0.296	0.058	1.231	0.011	0.014	0.119
46256	0.438	0.227	0.085	4.746	0.324	0.079	1.183	0.000	0.016	0.137
46257	0.446	0.223	0.078	4.517	0.331	0.055	1.183	0.000	0.013	0.131
46258	0.478	0.219	0.088	4.817	0.308	0.065	1.218	0.021	0.015	0.148
46259	0.544	0.260	0.065	3.536	0.349	0.041	1.092	0.028	0.016	0.167
46260	0.586	0.257	0.051	3.375	0.375	0.020	0.789	0.013	0.018	0.179
JG-1	1.298	0.297	0.062	2.814	0.783	0.174	0.719	0.026	0.023	0.314

第13表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の元素比分析結果

JG-1：標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

がって，もし Rb 量だけが少しずれている場合には，この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 検定である。これによって，それぞれの群に帰属する確率を求めて，産地を同定する[4, 5]。産地の同定結果は１個の遺物に対して，サヌカイト製では40個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略し，高い確率で同定された産地のみの結果を第14表～第17表に記入した。原石群を作った原石試料は直径３㎝以上であるが，小さな遺物試料の測定から原石試料と同じ測定精度で元素含有量を求めるには，測定時間を長時間掛けなければならない。しかし，多数の試料を処理するために，１個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり，短時間で測定を打ち切る。このため，得られた遺物の測定値には，大きな誤差範囲が含まれ，ときには，原石群の元素組成のバラツキの範囲を越て大きくなる。したがって，小さな遺物の産地推定を行なったときに，判定の信頼限界としている0.1％に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離 D^2 の値で記した遺物については，判定の信頼限界としている0.1％の確率に達しなかった遺物でこの D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さい程，遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため，推定確率は低いが，そこの原石産地と考えてほゞ間違いないと判断されたものである。

鴨部・川田遺跡出土の弥生時代前期後半～終末の88個のサヌカイト遺物の原材産地を原石産地別に出現する頻度は85％（75個）が金山群，岩屋第１群に３％（３個），岩屋第２群または白峰群に５％（４個），国分寺群に３％（３個），法印谷群と二上山群にそれぞれ１％（１個）で，産地が特定できなかった遺物は１％（１個）で，これらの結果を第18表に示した。これら遺物の原石採取地点を考察するときに幾つかの推測ができる。第18表の割合で金山，白峰，国分寺，法印谷岩屋第１群と群を作らない（不明）原石を産出する淡路島中部原産地および二上山原産地の各々の原石産出地点から伝播したとする考えがある。岩屋原産地からも原石が伝播したと考えると，金山・五色台原産地の諸群に帰属されたものは，淡路島北部の岩屋原産地からも同じ組成のサヌカイト原石が採取されるため，原石産地の判定は岩屋原産地におけるサヌカイト原石の組成別の分類結果の第９表にしたがって判断する必要があり，岩屋第一群に同定された３個を基準にすると，白峰（岩屋第２群）の３個，法印谷群の１個，国分寺群の１個，金山東群の１個及び不明の１個も岩屋産

分析番号	試料番号	遺物出土区層	時代（伴出土器）	原石産地（確率）	判定	遺物品名（備考）
46173	No.1-S1192	D SH02直上	弥生時代前期後半～終末	金山東(3%)	金山	剥片
46174	No.2-S2464	D 包含層	〃	金山東(21%)	〃	〃
46175	No.3-S1138	D SH02直上	〃	金山東(11%)	〃	〃
46176	No.4-S1156	D SH02直上	〃	金山東(13%)	〃	〃
46177	No.5-S1136	D SH02直上	〃	金山東(14%)	〃	〃
46178	No.6-S615	A SD04	〃	金山東(75%)	〃	〃
46179	No.7-S1954	D 包含層	〃	金山東(7%)	〃	〃
46180	No.8-S5527	C 包含層	〃	金山東(5%)	〃	〃
46181	No.9-S1612	D SH05	〃	金山東(77%)	〃	〃
46182	No.10-S2527	D 包含層	〃	金山東(25%)	〃	〃
46183	No.11-S1833	D 包含層	〃	金山西(25%)	〃	〃
46184	No.12-S4000	C SD01	〃	金山東(80%)	〃	〃
46185	No.13-S5200	C 包含層	〃	金山東(76%)	〃	〃
46186	No.14-S1603	D SH05	〃	金山東(56%)	〃	〃
46187	No.15-S892	A 包含層	〃	岩屋第2群(88%), 白峰(55%)	白峰	〃
46188	No.16-S1815	D 包含層	〃	岩屋第1群(D^2=97)	岩屋	〃
46189	No.17-S1137	D SH02直上	〃	金山東(1%)	金山	〃
46190	No.18-S4376	C SH04	〃	金山東(32%)	〃	〃
46191	No.19-S4244	C SD01	〃	金山東(17%)	〃	〃
46192	No.20-S6000	B 包含層	〃	金山東(24%)	〃	〃
46193	No.21-S1769	D SX01	〃	金山東(30%)	〃	〃
46194	No.22-S799	A 包含層	〃	金山東(37%)	〃	〃
46195	No.23-S4575	C 包含層	〃		不明	〃
46196	No.24-S3906	C SD01	〃	金山東(24%)	金山	〃
46197	No.25-S2378	D 包含層	〃	金山東(38%)	〃	〃
46198	No.26-S1196	D SH02直上	〃	金山東(29%)	〃	〃

第14表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果

分析番号	試料番号	遺物出土区層	時代（伴出土器）	原石産地（確率）	判定	遺物品名（備考）
46199	No.27-S4202	C SD01	弥生時代前期後半～終末	二上山(15%)	二上山	剥片
46200	No.28-S2285	D 包含層	〃	金山東(27%)	金山	〃
46201	No.29-S1492	D SH05	〃	金山東(2%)	〃	〃
46202	No.30-S4384	C SH06	〃	金山東(3%)	〃	〃
46203	No.31-S1587	D SH05	〃	金山東(37%)	〃	〃
46204	No.32-S2039	D 包含層	〃	金山東(23%)	〃	〃
46205	No.33-S4841	C 包含層	〃	金山東(15%)	〃	〃
46206	No.34-S4359	C SH03	〃	岩屋第2群(97%),白峰(89%)	白峰	〃
46207	No.35-S1157	D SH02直上	〃	金山東(73%)	金山	〃
46208	No.36-S797	A 包含層	〃	金山東(37%)	〃	〃
46209	No.37-S4758	C 包含層	〃	金山東(61%)	〃	〃
46210	No.38-S1756	D SX01	〃	金山東(32%)	〃	〃
46211	No.39-S1197	D SH02直上	〃	金山東(1%)	〃	〃
46212	No.40-S6090	B 包含層	〃	金山東(37%)	〃	〃
46213	No.41-S4299	C SH01	〃	金山東(23%)	〃	〃
46214	No.42-S1688	D SK01	〃	金山東(4%)	〃	〃
46215	No.43-S960	A 包含層	〃	金山東(17%)	〃	〃
46216	No.44-S5778	B SH01	〃	金山東(2%)	〃	〃
46217	No.45-S2499	D 包含層	〃	金山東(13%)	〃	〃
46218	No.46-S4168	C SD01	〃	金山東(10%)	〃	〃
46219	No.47-S1045	D SH02	〃	岩屋第2群(45%),白峰(9%)	白峰	〃
46220	No.48-S4386	C SH06	〃	金山東(59%)	金山	〃
46221	No.49-S1626	D SH06	〃	金山東(21%)	〃	〃
46222	No.50-S1763	D SX01	〃	金山東(53%)	〃	〃
46223	No.51-S4710	C 包含層	〃	金山東(45%)	〃	〃
46224	No.52-S616	A SD04	〃	金山東(33%)	〃	〃

第15表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果

分析番号	試料番号	遺物出土区	層	時代（伴出土器）	原石産地（確率）	判定	遺物品名（備考）
46225	No.53-S922	A	包含層	弥生時代前期後半～終末	金山東(2%)	金山	剥片
46226	No.54-S4494	C	包含層	〃	金山東(52%)	〃	〃
46227	No.55-S682	A	SK01	〃	金山東(29%)	〃	〃
46228	No.56-S1874	D	包含層	〃	金山東(97%)	〃	〃
46229	No.57-S4982	C	包含層	〃	金山東(52%)	〃	〃
46230	No.58-S2170	D	包含層	〃	金山東(47%)	〃	〃
42631	No.59-S4353	C	SH03	〃	金山東(51%)	〃	〃
46232	No.60-S4321	C	SH03	〃	金山東(8%)	〃	〃
46233	No.61-S5876	B	包含層	〃	金山東(36%)	〃	〃
46234	No.62-S1559	D	SH05	〃	金山東(36%)	〃	〃
46235	No.63-S915	A	包含層	〃	金山東(5%)	〃	〃
46236	No.64-S4519	C	包含層	〃	国分寺(48%),岩屋第2群(7%),蓮光寺(13%)	国分寺	〃
46237	No.65-S6545	B	包含層	〃	金山東(43%)	金山	〃
46238	No.66-S4113	C	SD01	〃	金山東(18%)	〃	〃
46239	No.67-S6802	B	包含層	〃	金山東(65%)	〃	〃
46240	No.68-S2465	D	包含層	〃	金山東(1%)	〃	〃
46241	No.69-S1562	D	SH05	〃	金山東(39%)	〃	〃
46242	No.70-S805	A	SH01直上	〃	金山東(90%)	〃	〃
46243	No.71-S1184	D	SH02直上	〃	金山東(51%)	〃	〃
46244	No.72-S5090	C	包含層	〃	金山東(56%)	〃	〃
46245	No.73-S5197	C	包含層	〃	国分寺(4%),蓮光寺(5%)	国分寺	〃
46246	No.74-S5667	B	SD02	〃	金山東(68%)	金山	〃
46247	No.75-S1636	D	SH07	〃	金山東(13%)	〃	〃
46248	No.76-S1539	D	SH05	〃	金山東(38%)	〃	〃
46249	No.77-S6157	B	包含層	〃	金山東(41%)	〃	〃
46250	No.78-S4314	C	SH02	〃	金山東(4%)	〃	〃

第16表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果

分析番号	試料番号	遺物出土区	層	時代（伴出土器）	原石産地（確率）	判定	遺物品名（備考）
46251	No.79-S6128	B	包含層	弥生時代前期後半～終末	岩屋第1群(D^2=94)	岩屋	剥片
46252	No.80-S5684	B	SD02	〃	国分寺(21%),岩屋第2群(11%),蓮光寺(8%)	国分寺	〃
46253	No.81-S692	A	SK09	〃	金山東(88%)	金山	〃
46254	No.82-S5984	B	包含層	〃	金山東(30%)	〃	〃
46255	No.83-S5696	B	SD10	〃	法印谷(16%)	法印谷	〃
46256	No.84-S806	A	SH01直上	〃	金山東(8%)	金山	〃
46257	No.85-S811	A	SH01直上	〃	金山東(56%)	〃	〃
46258	No.86-S621	A	SD04	〃	金山東(75%)	〃	〃
46259	No.87-S3923	C	SD01	〃	白峰(58%),岩屋第2群(61%)	白峰	〃
46260	No.88-S6118	B	包含層	〃	岩屋第1群(21%)	岩屋	〃

第17表　鴨部・川田遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果

原石産地 個数（%）						
金山	岩屋第一	岩屋第二（白峰）	国分寺	法印谷	二上山	不明
75(85%)	3(3%)	4(5%)	3(3%)	1(1%)	1(1%)	1(1%)

第18表　鴨部・川田遺跡出土遺物の原石産地別頻度分布

原石産地 個数（%）				
金山	岩屋	白峰	国分寺	二上山
74(84%)	10(11%)	1(1%)	2(2%)	1(1%)

第19表　岩屋第一群の２個を基準として補正した各原産地原石の使用頻度

と考えられる。結局，金山産が84%，岩屋産が11%，国分寺産が２%，白峰産と二上山産がそれぞれ１%の頻度で各産地の原石が使用されたことになり，法印谷産原石は使用されなかった結果になる（第19表)。この岩屋産の可能性を持つ法印谷群に同定された遺物は，法印谷産原石を産出する赤子谷地区には小規模ながら金山原産地のような石器原材採集跡様の所があり，ここから伝播した可能性も推測される。今後，分析数を増やすことによりより正確な石器伝播ルートを明らかにすることができるであろう。

鴨部・川田遺跡で金山・五色台原産地の原石以外に淡路島産の原石および奈良県二上山産原石が使用されていることが明らかになり，本遺跡が畿内地域の情報を二上山産原石の伝播に伴って入手し，また畿内地方との交流の存在を推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

1)　藁科哲男・東村武信(1975)，蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学，８：61-69

2)　藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977)，(1978)，蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学，10，11：53-81：33-47

3)　藁科哲男・東村武信(1983)，石器原材の産地分析。考古学と自然科学，16：59-89

4) 東村武信(1976)，産地推定における統計的手法。考古学と自然科学，
9：77-90
5) 東村武信(1980)，考古学と物理化学。学生社

第３節　自然科学調査の成果に対するコメント

（１）木製品の樹種について

鍬の未製品と考えたものの中の４点（C889・C891・C893・C894）が，クスノキという結果が出た。鍬や鋤などの農耕具は通常アカガシ亜属，カシ類などの硬く水湿に強い材を使用している。特に西日本ではその傾向が強い。本遺跡でも明らかに鍬や鋤であるものはアカガシ亜属を使用している。これに対してクスノキは加工は容易であるがカシ類に比べては軟らかいものであるため，容器や生活用具などに多く使用されている。以上のことからすると本遺跡で出土したクスノキ製の鍬の未製品と考えたものは，他の製品例えば容器類の未製品の可能性が高くなる。

しかしクスノキを使用した鍬・鋤などの農耕具も少ないながらあることも事実である。福岡県拾六町ツイジ遺跡，大阪府鬼虎川遺跡，大阪府瓜破遺跡などで例がある。鍬・鋤は直接に地面に働きかけるものであるが，この他の農耕具に鍬に付着する泥除や整地用のえぶりなどがあるが，これらは直接地面に叩きつけるような使い方はしない。これらの農具にはクスノキを使用したものがある。クスノキを使用した泥除は大阪府山賀遺跡，大阪府池上遺跡，大阪府東奈良遺跡などで出土しており，またクスノキを使用したえぶりは福岡県拾六町ツイジ遺跡，大阪府山賀遺跡などで出土している。このような使い方をするものであれば必ずしもカシ類などのような硬いものでなくてもよいと思う。

本遺跡で出土した鍬の未製品と考えたクスノキのものは，形態・大きさ・技法的にも鍬のそれに酷似しているため，鍬を作るものと考えた。しかしまだ隆起なども作り出しておらず板材の段階であるので，鍬を作るためのものと確実に断言は出来ないものである。従って，分析の結果クスノキと同定されたものは鍬ではなくて，先に述べた泥除やえぶりなどの未製品の可能性も考えなければならないものである。中でもC893は横向きにしたら，えぶりのようになる。

また農耕具以外のもの，容器や生活用具などの可能性も考慮しなければならない。本遺跡で出土したもので容器の未製品としたC903はクスノキを使用している。しかし形態的に鍬の未製品としたものとは異なっている。

C902は鉢と考えたが大部分が欠損している。従って同定結果がムクノキで，使用材の

類例が県内・県外ともにほとんどないことは，あるいは他器種を考えなければならないかも知れない。

（2）サヌカイトの石材産地分析について

a．はじめに

鴨部・川田遺跡から出土したサヌカイトのうち88点について石材産地分析を行った。従来から香川県は国分台や金山などサヌカイトの原産地として知られていた。近年の自然科学調査の進歩により，サヌカイトについても蛍光X線分析によりその原産地の推定が可能になってきた。特に西日本では旧石器～弥生時代の遺跡を発掘するとサヌカイト製の石器が出土することが多く，その原産地や石材の移動について検討されることが多くなった。その結果瀬戸内地方を中心に縄文時代以降は香川県の金山産のサヌカイトが広く使用されていることが判明してきた。さらにサヌカイト原産地は香川県内でも数カ所あることが分かって来ている。しかし原産地である香川県内の遺跡において，実際どこの原産地のサヌカイトが使用されているのかという分析はほとんど行われていなかったのが現状である。そこで今回，鴨部・川田遺跡から多量のサヌカイト製の石器や剥片が出土したため，その原産地の分析を試みた次第である。鴨部・川田遺跡は香川県の東部に位置しており，金山などの原産地から東へ約30kmとやや離れており直接影響を受けにくいこと，また時期的にも弥生時代前期後半～中期初頭にほぼ限定できることなどの好条件を満たしている。

b．試料の抽出方法について

自然科学分析を行う場合には，その試料の抽出の方法も問題になってくる。例えば今回のような石材の産地分析を行う場合には，どの様なものを選ぶかが問題になってくる。同じようなものばかりを選ぶと，その結果は偏る可能性が大きい。許されるなら全試料を分析するのが最良であろう。しかしそういう訳にもいかないので，今回は同じサヌカイトでも肉眼で見てなるべく違ったタイプのものを同数程度ずつ抽出した。加えて主要な遺構と，包含層でもサヌカイトが集中した部分の試料を選んだ。なお，試料はすべて剥片で石器は含んでいない。

c．分析結果について

88点のうち75点，率にして85％が金山産のサヌカイトであった。肉眼観察で異なるタイプのものを多く抽出したにもかかわらず，圧倒的多数は金山産であった。割れ方や風化の度合い，その剥片の原石中における場所などにより，様相が異なるように見えることがあ

るということである。肉眼観察はある程度の目安にはなるが絶対的ではなく，同一産地でも違った見え方をすることがあるということが今回わかった。

分析の結果を見ると，なるほど原産地をもつ県内の遺跡という印象をもつが，しかし高率ではあるが100％に近いものではなく，残りの13点（15％）は金山以外のものであったということに興味がある。その内訳は岩屋第一群が３点（３％），岩屋第二群（白峰）が４点（５％），国分寺が３点（３％），法印谷が１点（１％），二上山が１点（１％），不明が１点（１％）となっている。これらのうち岩屋産とされているものは，淡路島北部を原産地とするものである。しかしこの岩屋原産地のものは他の原産地のものが流れ着いたもので，厚い堆積の礫層中に含まれるものである。この岩屋産のものには成分的に金山・五色台地域産とほぼ一致する一群が全体の２／３ほどあるという。金山産の原石が角礫であるのに対して，岩屋産の原石は大部分が円礫である。流された時にローリングを受けたためであろう。今回の試料でも岩屋産と判定されたものの中に，この円礫の原石が含まれている（分析番号46260　No88-S6118　Ｂ包含層）。鴨部・川田遺跡の所在する大川郡志度町は播磨灘を挟んで淡路島に面しており，地理的には岩屋産のものが搬入されていても不思議ではない。自然科学分析で実証されたことに意義がある。また奈良県二上山産のものが今回は１点ではあるが確認されている。県内に金山・五色台という良好な原産地があるにもかかわらず，遠方から搬入されているということは，遺跡の地理的条件の可能性が高いと思われる。この二上山産も岩屋産のものとともに淡路島経由で搬入された可能性が高い。あるいは鴨部・川田遺跡が環濠を伴う拠点的集落という性格によるものかも知れない。今後，香川県東部の遺跡出土のサヌカイトを数多く分析することにより，その答えが出るものと思われる。

第5章　まとめ

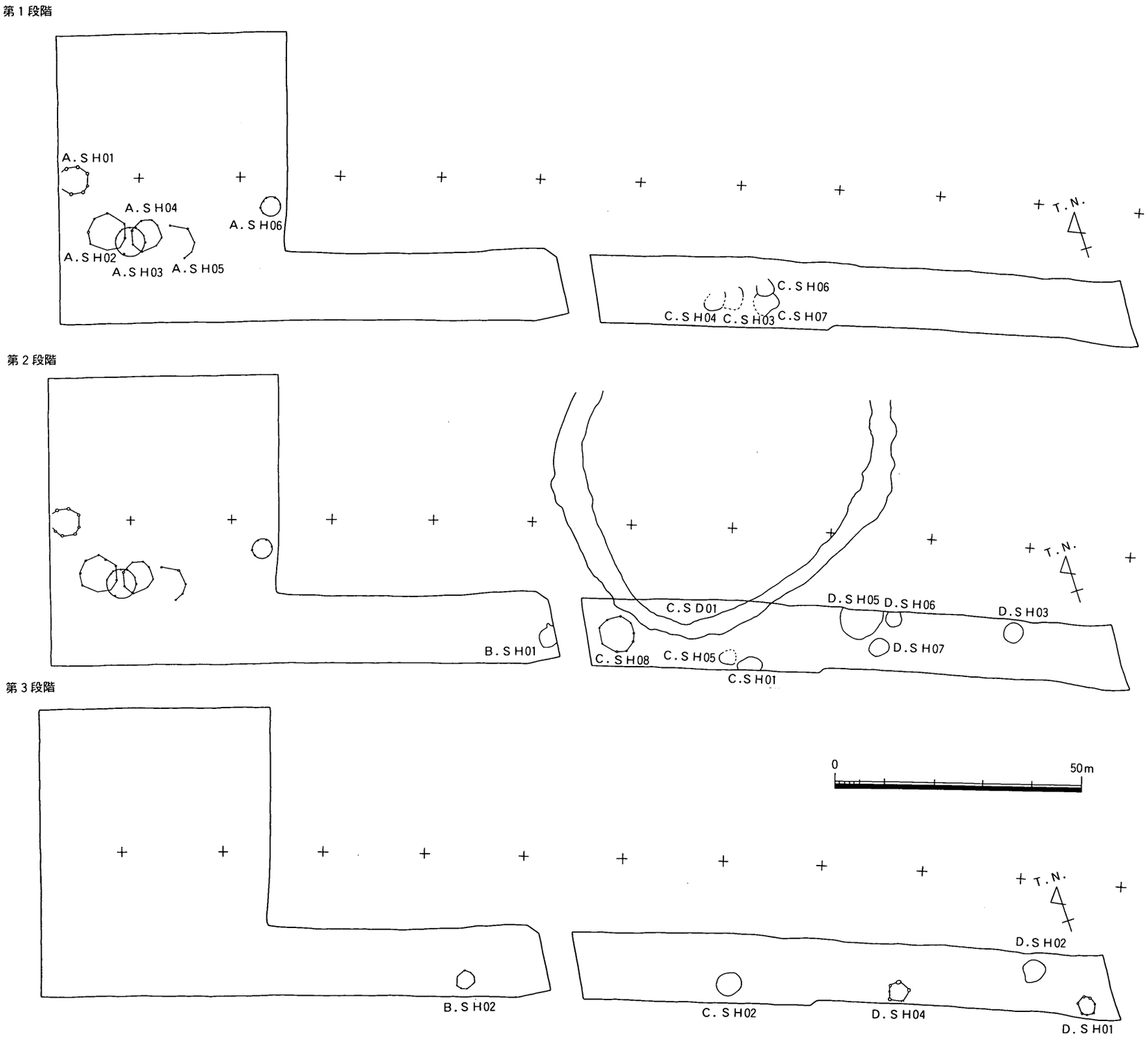
第1節　住居跡について

（1）集落の変遷

鴨部・川田遺跡は弥生時代前期後半を中心とする集落遺跡である。このうち本書で報告した平成2年度調査区内（A区～D区）では合計23棟の住居跡を検出した。その一覧は第20表の通りである。住居跡の他には溝・土坑・ピット・性格不明遺構などがあるが，時期的には住居跡と同じ弥生時代前期後半～中期初頭のものである。この他に平安時代の溝と自然河川があるが，弥生時代の遺構面とは異なっている。ここではまず集落遺跡の遺構の中心である弥生時代の住居跡の変遷を追うことにより，基本的な集落の変遷過程を考えたい。

住居跡は前期後半段階（前期新段階）のものと中期段階のものにまず大別出来る。前期後半段階のものは出土土器から見るとほとんど同じ時期で古い傾向，新しい傾向以外に細かい時期差を求めることは困難である。しかしC区で検出した環濠（C区SD01）を基準にして前後関係がある程度つかめる。この環濠は出土遺物より前期後半に掘削されて前期末にはほぼ埋没しており，中期初頭には完全に埋没しているものである。C区では竪穴住居が7棟検出されたが，これらの竪穴住居はそれらの切り合い関係や出土遺物からSH07→SH03→SH04・SH06→SH01→SH05→SH02のように変遷するものである。このうちのSH03とSH04の2棟が環濠に壊されており，環濠の掘削以前のものであることがわかる。従ってSH06とSH07も環濠掘削以前のものである。そして前期後半でも環濠が機能している段階のものがSH01とSH05で，環濠の埋没後の中期段階のものがSH02である。これに対して同じC区でも単独で検出されたC区SH08であるが，この住居と接するように環濠が巡っているが，この接する部分の環濠が住居を避けるように湾曲している。このことからSH08と環濠が同時併存か，少なくとも環濠の掘削時にはSH08は建っていたと考えられる。

このように前期後半でも環濠の掘削前のものと環濠と同時併存のものに分けることが可能である。このC区の住居を基準として他の調査区の住居の時期を比定した結果，第428図のように変遷するものと思われる。しかしA区のSH02～SH05は土器が出土していな



第428図　鴨部・川田遺跡集落変遷図（１/1000）

いため，住居形式・群などから推定したものである。

また明瞭に出土土器から中期と考えられる主な遺構にＣ区ＳＨ02・Ｄ区ＳＨ02・Ｂ区ＳＤ10・Ｄ区ＳＤ04がある。また主体は前期後半であるが，中期初頭まで継続する可能性のあるものにＤ区ＳＨ05・Ｄ区ＳＸ01がある。

以上のことから鴨部・川田遺跡では次のような３段階の変遷が考えられる。第１段階：前期後半段階にまず環濠を伴わない集落が成立。第２段階：その後の前期後半のある時期に環濠が掘削されて環濠集落の形態をとる。第３段階：環濠が埋没後の中期初頭段階の集落。第３段階の後に集落は廃絶され鴨部川の氾濫による厚い堆積に覆われることになる。平成２年度の調査ではこのような変遷が考えられるが，平成３年度調査分を合わせた全体でも，基本的にはこのような変遷をするものと考える。

（２）住居の構造

（ａ）竪穴住居

いずれの竪穴住居も地面の掘り込み，つまり壁の立ち上がりは浅いものであった。最も深いものでＤ区ＳＨ05が30cmほどで，平均して15cm前後である。遺構面の直上には濃密な包含層が形成されており，また洪水砂層が上部に厚く堆積していることから遺構の削平は考えにくいため，住居は元々掘り込みの浅いものであったと考えられる。遺跡が鴨部川に

住居名	平面形	規模（m）	面積（㎡）	主柱	住居施設	住居形式	時期	備考
A. SH01	円形	＊直径7.4	43.0	８＋中央２柱穴	土坑１	平地	Ⅰ	「松菊里型」、建て替え、ｻﾇｶｲﾄ片多い
A. SH02	円形	＊直径9.8	75.4	8		平地	Ⅰ？	遺物なし
A. SH03	円形	＊直径8.0	50.2	10		平地	Ⅰ？	遺物なし、柱材残存
A. SH04	円形	＊直径8.2	52.5	7		平地	Ⅰ？	遺物なし、柱材残存、住居拡張
A. SH05	円形	＊直径9.1	65.0	8		平地	Ⅰ？	遺物なし
A. SH06	円形	＊直径6.0	28.3	8	土坑１	平地	Ⅰ	
B. SH01	円形と方形の中間	3.9×2.9	11.3	不明	土坑１，ベット状の平坦面	竪穴	Ⅰ	突出部あり
B. SH02	円形	＊直径5.8	26.4	8	土坑１	平地	Ⅰ～Ⅱ	
C. SH01	不整方形	一辺4.8前後	23.0	４＋α		竪穴	Ⅰ	
C. SH02	円形と方形の中間	4.4×5.1	22.4	３＋α		竪穴	Ⅱ	
C. SH03	不明	不明		不明	土坑１	竪穴	Ⅰ	環濠に壊される
C. SH04	不明	東西4.2前後		不明		竪穴	Ⅰ	環濠に壊される
C. SH05	不明	不明		不明		竪穴	Ⅰ	
C. SH06	円形	直径3.5～3.7	10.2	0		竪穴	Ⅰ	
C. SH07	不整方形	不明		不明		竪穴	Ⅰ	
C. SH08	円形	＊直径9.0	63.6	9	土坑１	平地	Ⅰ	
D. SH01	楕円形	＊長径6.1，短径5.0	23.9	７＋中央２柱穴（現存１柱穴）	土坑１	平地	Ⅰ～Ⅱ	「松菊里型」
D. SH02	円形と方形の中間	直径4.5	15.9	6	土坑１	竪穴	Ⅱ	ｻﾇｶｲﾄ片多数、拡張？
D. SH03	円形	＊直径6.0	28.3	6		平地	Ⅰ	建て替え
D. SH04	円形	＊直径6.2	30.2	４あるいは５	土坑２～３	平地	Ⅱ	
D. SH05	円形	直径8.1	51.5	8	土坑３＋α	竪穴	Ⅰ～Ⅱ	土器多い
D. SH06	円形	直径3.3	8.5	2		竪穴	Ⅰ	
D. SH07	楕円形	長径4.0，短径3.1	9.7	4		竪穴	Ⅰ	
		＊：主柱の円周の直径＋２ｍ						

第20表　鴨部・川田遺跡（Ａ区～Ｄ区）住居跡一覧

近接しており頻繁な氾濫による砂地の遺構面では，深く掘ると湧水に見舞われたであろうし，湿気もかなりのものであったと思われる。従って深く掘り込むよりもかえって浅い方が適していたものと思われる。

平面形は竪穴住居12棟のうち，円形が３棟，楕円形が１棟，円形と方形の中間形態が３棟，不整方形が２棟，不明のものが３棟となっている。住居面積は平面形が不明なもの以外では，最大のものがＤ区ＳＨ05の51.5㎡である。この他はＣ区ＳＨ01とＣ区ＳＨ02が22～23㎡である以外は，すべて10㎡前後の小型の住居である。（第20表）

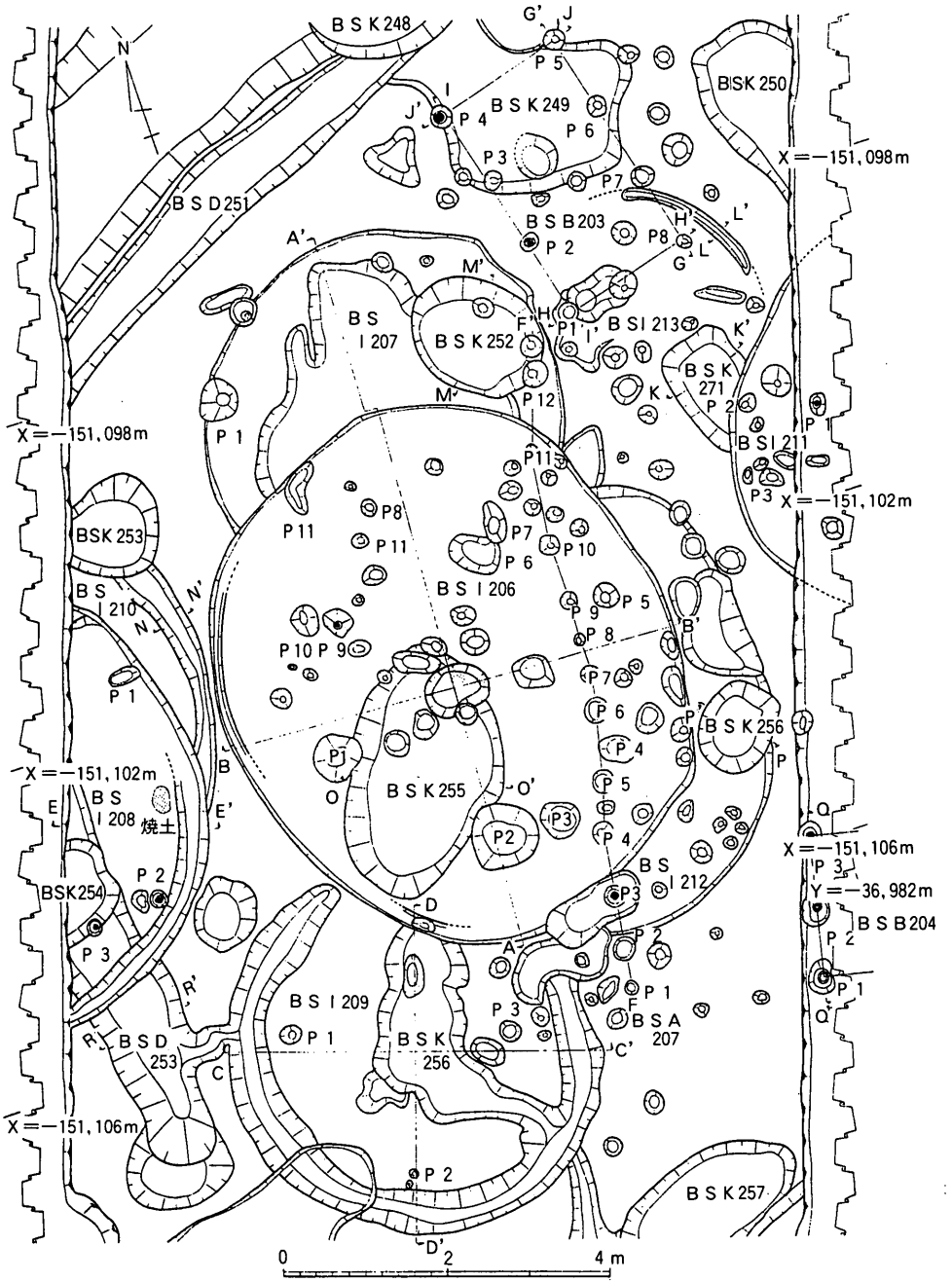
主柱の並びは基本的に同心円上に配置されている。明確に確認出来たもので４，６，８本といずれも主柱は偶数になっている。この他に２本のものや，全く柱穴をもたないものもある。主柱の他に土坑を伴うものがある。概して住居は単純なものが多い。しかしＢ区ＳＨ01はやや複雑で，突出部が一カ所あり壁に沿って床面より一段高いテラス状の平坦面がある。

（ｂ）平地式住居

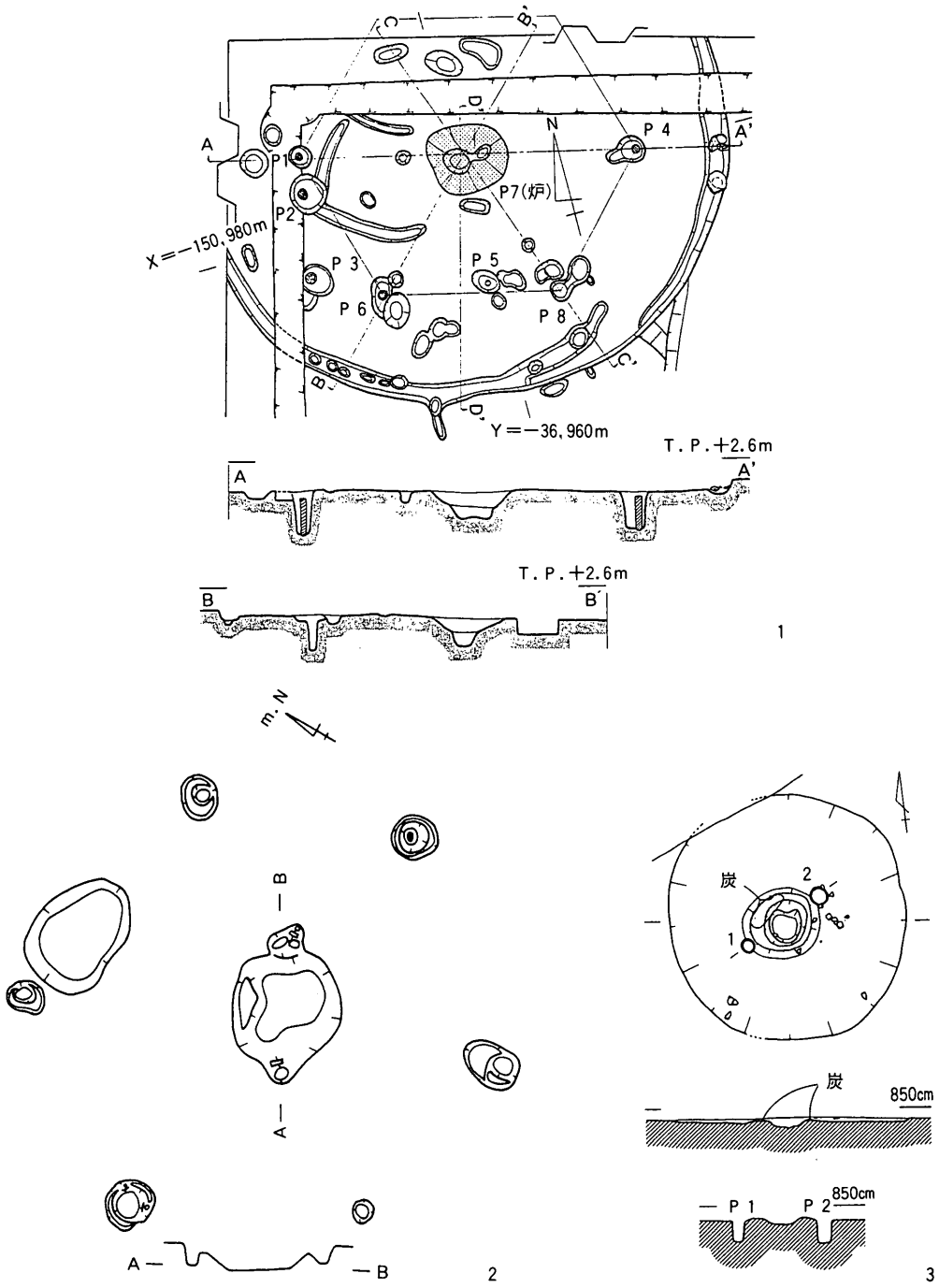
明確に地面に掘り込んで壁を作る上記のような竪穴住居に対して，鴨部・川田遺跡では壁の立ち上がりが認められず，柱穴のみが検出された住居が11棟ある。明らかに掘立柱建物と認められるもの以外でこのような住居を検出した場合に，壁が削平された竪穴住居と報告されることが多い。しかし先に述べたように鴨部・川田遺跡の弥生時代前期後半を中心とする遺構面の直上に当該期の濃密な包含層が形成されており，さらに上部に鴨部川の洪水砂が厚く整然と堆積しており，遺構面は現地表から1.5m前後ほど下部であり，遺構の削平は考えにくい状況である。包含層は黒褐色でこの包含層の上面からの掘り込みも考えたが，調査時の精査にもかかわらずそのような状況は伺えなかった。また同一遺構面から同時期の竪穴住居と並んで検出されることからも，これら柱穴のみの検出となった住居は最初から竪穴住居とは異なり地面に掘り込みを行わない住居，つまり平地式住居と考えたい。包含層で遺物が集中している部分がいくつかあったが，結果としてその部分が平地式住居に重なる部分が多かった。地表面が床面に相当する平地式住居ではそうした「包含層」出土遺物が住居に伴う遺物であった可能性が高い。「包含層」でそのような遺物集中部分がいくつか見られたら，このような平地式住居を考慮する必要もあろう。

平地式住居と考えたものは，主柱が基本的に同心円上に配置されているものである。周囲に土盛りをして周堤を構築していたかどうかは不明である。周溝を巡らせたものは検出されなかった。住居の平面形は主柱の配列から円形と考えられるが，Ｄ区ＳＨ01のみが楕

円形と考えられる。周堤などが残っておらず主柱痕のみなので，どこからが住居なのかが特定出来ないため，住居の規模は正確には分からない。ここで仮に主柱の配置されている円周上から１ｍ離れた円周内を住居と考えてみることにする。すると40m²以上のものが６棟，30m²前後のものが４棟，20m²前後のものが１棟となる。50m²ぐらいのものが多く，全



第429図　美園遺跡ＢＳＩ206周辺住居跡群



1．美園遺跡ＢＳＩ202

2．田村遺跡Loc. 25　ＳＴ１

3．南溝手遺跡竪穴住居４

第430図　弥生時代前期住居跡（１/80）

体的に竪穴住居より大きいものである。(第20表)

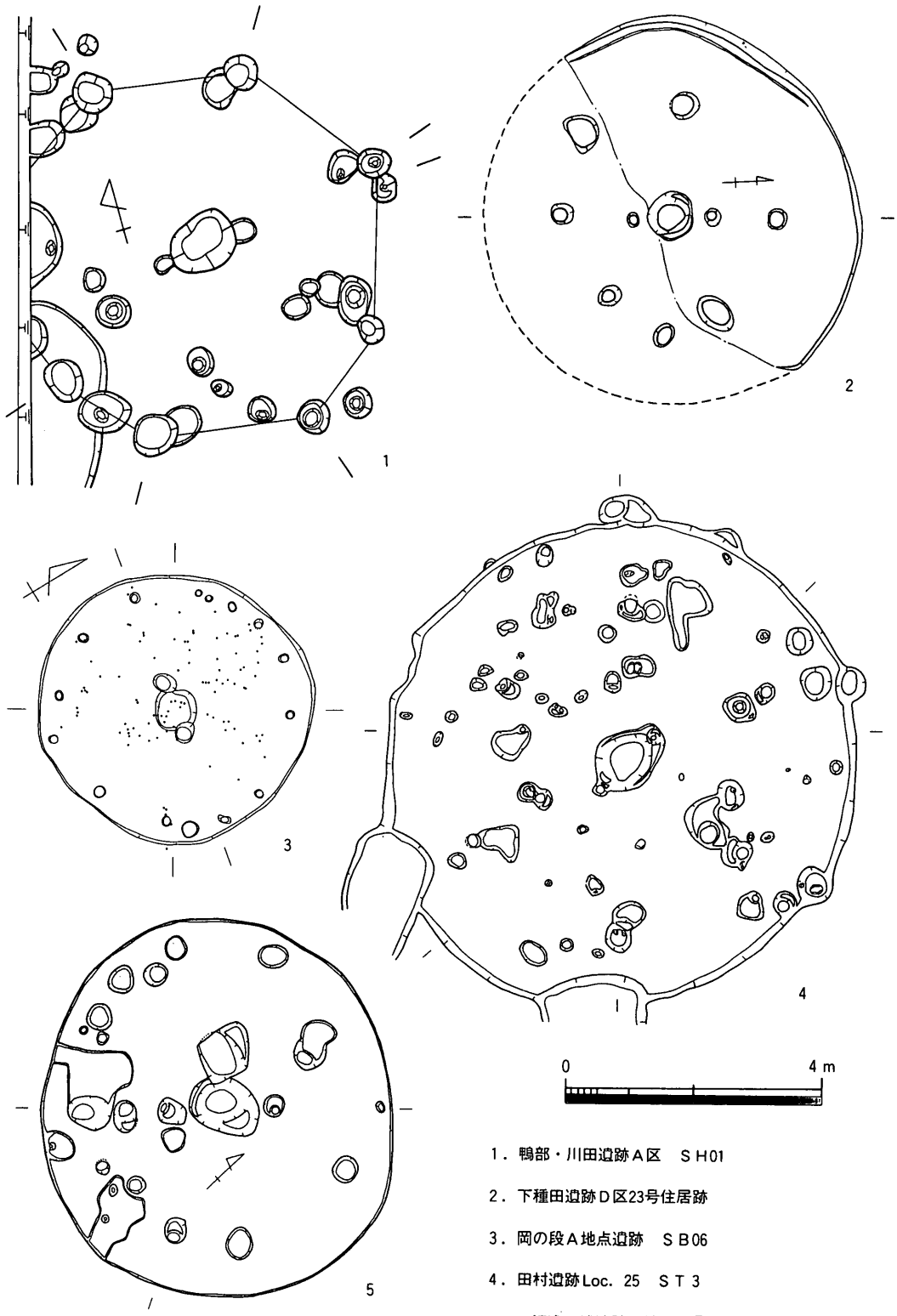
主柱は基本的に同心円上に配置されており，住居の拡張も同じ原理で外側に直径の大きい同心円を描き主柱を配置している。また主柱の内側に補助的な柱を配置しているD区SH03の場合，その補助的な柱も同心円上に配置されている。主柱は8本のものが平均で，最多は10本のA区SH03，最少は4本あるいは5本のD区SH04である。全体に竪穴住居の主柱より多くなっており，そのことは建物面積にも反映している。A区SH03・SH04には主柱穴に柱材が残っているものがあった。柱はヒノキを使用しており，柱の下部を尖らせて地面に深く打ち込んでいた。この柱穴を含めて他の住居でも主柱穴はすべて真下に掘り込まれており，柱を真っ直ぐ立てていたことがわかる。そして主柱に梁を渡して屋根を構築したものと考えられる。

これら平地式住居には土坑を伴うものが6棟ある。平地式住居を復元する場合に主柱穴はその並びでわかるが，しかしこれらの土坑は竪穴住居のものと異なり，確実に住居に伴うとは言い切れない部分がある。報告でも主柱との位置関係や出土遺物の時期などから判断した部分が多い。また付随する柱穴でも本当に住居に伴うものか判断に苦しむものもあるのは事実である。

このような平地式住居と考えられているものは，大阪府美園遺跡の弥生時代前期の住居がある（第429図・第430図1）。美園遺跡では竪穴住居が14棟（方形2棟，円形および楕円形12棟）検出されている。美園遺跡で竪穴住居とされたものは，「いずれも壁の立ち上がりが極めて低いか，あるいはまったくない」[(1)]ものである。周知のように美園遺跡は河内平野の厚い堆積層に埋没している遺跡で，堆積状況も鴨部・川田遺跡と同様で遺構の削平が考えにくく，報告でも「平地住居，ないしはそれに近い形態もの」[(1)]と考えている。他には高知県田村遺跡 Loc.25のST1（1号住居跡）がある（第430図2）。この住居は6主柱と中央に土坑を配するもので，周囲の他の住居跡の検出標高などを考慮しても削平とは考えられないことから，平地式住居と考えている。

（c）「松菊里型住居」について

土坑を伴うもので，その土坑が住居の中央に位置しており，その両端に柱穴をもつものが2棟ある。A区SH01とD区SH01である。A区SH01は直径5.4mの円周上に主柱を8本配している。そして住居の中央に楕円形の土坑が1基あり，その両端に2本の主柱穴があるものである。これに対してD区SH01は長径4.1m，短径3.0mの楕円上に主柱を7本配している。住居中央には楕円形の土坑が1基あり，土坑の片側端部の軸から少しずれ



1．鴨部・川田遺跡Ａ区　ＳＨ01

2．下種田遺跡Ｄ区23号住居跡

3．岡の段Ａ地点遺跡　ＳＢ06

4．田村遺跡Loc. 25　ＳＴ３

5．三沢逢ヶ浦遺跡Ｂ地区13号住居跡

第431図　「松菊里型住居」平面図（１/100）

遺跡名	所在地	内容	備考
一の谷遺跡群	香川・観音寺市	前期後半～末　２棟（円形、不整円形）	
龍川五条遺跡	香川・善通寺市	前期後半　３棟（円形、柱穴のみ）、掘立柱建物２棟	
五条遺跡	香川・善通寺市	前期　１棟（円形？、柱穴のみ）	
下川津遺跡	香川・坂出市	前期・古　１棟（隅丸長方形）	
鴨部・川田遺跡	香川・志度町	前期後半～末　18棟（円形11棟、楕円形１棟、円形と方形の中間１棟、方形２棟、不明３棟）、前期末～中期初頭　３棟（円形１棟、楕円形１棟、円形と方形の中間１棟）、中期初頭　２棟（円形１棟、円形と方形の中間１棟）	
文京遺跡	愛媛・松山市	前期前半　２棟（円形）	
田村遺跡	高知・南国市	前期前半　10棟（円形５棟、方形５棟）、平地式１棟（円形）、掘立柱建物15棟	松菊里型含む
百間川沢田遺跡	岡山・岡山市	前期中葉～後葉　４棟（円形）	松菊里型含む
南溝手遺跡	岡山・総社市	前期前葉～中葉　４棟（円形）	松菊里型含む
岡の段Ａ地点遺跡	広島・大朝町	前期後半　６棟（円形）、無主柱のもの１棟	松菊里型含む
岡の段Ｃ地点遺跡	広島・大朝町	前期中葉　３棟（円形）	松菊里型含む
横路遺跡	広島・大朝町	前期　１棟（円形）	
青木原遺跡	広島・千代田町	前期末　１棟（円形）	
大開遺跡	兵庫・神戸市	前期前半　５棟（円形、楕円形）　環濠集落	松菊里型含む
美園遺跡	大阪・東大阪市	前期後半～末　14棟（方形２、円・楕円形12）、掘立柱建物４棟	
有田遺跡　第48次	福岡・福岡市	前期後半　２棟（方形）、～中期前半５棟（円形、方形）、環濠集落	松菊里型含む
有田遺跡　第100次	福岡・福岡市	前期後半　１棟（円形）	松菊里型含む
有田遺跡　第125次	福岡・福岡市	前期後半～中期　１棟（円形、柱穴のみ）	
有田遺跡　第138次	福岡・福岡市	中期前半　１棟（円形）	松菊里型含む
有田遺跡　第145次	福岡・福岡市	前期末～中期初頭　１棟（方形）？	
有田遺跡　第152次	福岡・福岡市	前期後半～中期初頭　１棟（円形）	松菊里型含む
五十川遺跡	福岡・福岡市	前期末　１棟（円形）	
野黒坂遺跡	福岡・筑紫野市	前期前半　２棟（方形）、前期後半　７棟（隅丸長方形、方形）	
今川遺跡	福岡・津屋崎町	前期中葉　１棟（円形）	松菊里型含む
三沢蓬ケ浦遺跡	福岡・小郡市	前期後半～中期前半　26棟（方形２棟、円形24棟）	松菊里型含む
下稗田遺跡	福岡・行橋市	前期中葉　７棟（円形）、前期後葉　61棟（円形）、中期前葉33棟（円形）	松菊里型含む

第21表　弥生時代前期～中期初頭住居跡検出主要遺跡

た部分に柱穴が１つある。

上記のような住居は「松菊里型住居」と言われている。中間研志は「中央に楕円形土壙を有し，その両端に二主柱穴を持ち，他床面に主柱穴が認められないもの，・・（中略）・・基本的に正円形タイプのものに類似する日本例」を「松菊里型住居」と定義している。そしてそれを「古期松菊里型住居」,「新期松菊里型住居」，さらに中央土坑両端の二主柱穴以外に四本以上の主柱穴が床面に巡るものを「発展松菊里型住居」としている[(2)]。

鴨部・川田遺跡のＡ区ＳＨ01とＤ区ＳＨ01は「発展松菊里型住居」に分類されよう。しかし両者とも鴨部・川田遺跡の中では平地式住居と考えられるものである。壁の立ち上がりが不明瞭で全体に浅い窪み状になっている岡山県南溝手遺跡竪穴住居４が,「松菊里型住居」で平地式住居に最も近い例である（第430図３）。他は明確に壁が削平されているか，竪穴住居である。弥生時代前期後半～中期初頭の時期で現在のところ,「松菊里型住居」で平地式のものは鴨部・川田遺跡のもの以外に例を見ない。鴨部・川田遺跡のものも中央二主柱以外に主柱穴を伴う「発展松菊里型住居」である。従って無理に「松菊里型住居」としない方が良いかも知れない。しかし「松菊里型住居」の中央土坑は石器製作のための

作業用とも考えられている。A区ＳＨ01の中央土坑からは敲石の他にサヌカイト剥片が5点，計13.5ｇが出土しているのに加えて，住居床面の少し上の層からサヌカイト片66個，合計159.8ｇが出土している。他に石鏃の未製品もあり石器の製作を行っていたことがわかるのも示唆的である。しかしこれに対してD区ＳＨ01からは遺物は全く出土していない。

現在香川県内で弥生時代前期の住居跡が検出された遺跡は鴨部・川田遺跡を含めて５遺跡である（第21表)。少なくとも床面で「松菊里型住居」の構造をもつものは鴨部・川田遺跡のものだけである。今後増加するものと思われるが，九州以外の西日本でもまだ例は少ない。「松菊里型住居」は言うまでもなく韓国忠清南道扶余の松菊里遺跡の住居を標識とするものである。この「松菊里型住居」の分布を押さえることは，水稲耕作とともに朝鮮半島から伝わってきた文化の拡散を示すものとともに，日本における初期の農耕社会を知るうえで重要である。(第431図)

第２節　環濠について

Ｃ区で検出したＳＤ01は調査区内で東西に弧を描き，平成３年度調査区へと続くものである。この溝はその北側は平成３年度調査区外で検出されなかったが，全体に卵形に巡るもので環濠と言えるものである。環濠全体については平成３年度調査区の報告を待たねばならず，またその時点で詳細な検討が行われるものである。ここでは平成２年度調査において検出した部分の，本文の補足をしておきたい。(第132図・第133図)

Ｃ区での環濠は幅2.2～4.4m，深さ0.7～1.0mの規模をもつ。Ｃ区で検出した部分は南北に長い環濠の南側のコーナー部分にあたるもので，このコーナーの曲がる頂点部分が最も幅が狭く，かつ浅くなっている。また底部の高さはその東側がやや低くなっているが，ほぼ一定である。底面には局部的に凹凸が見られる。断面形は逆台形あるいは船底形で，Ｖ字形の部分はない。

また環濠の内・外には土塁などの施設の痕跡はなかった。特に西側のＣ区ＳＨ08付近ではこの住居を避けるようにして環濠の外側ラインが内側に曲がっている。少なくとも環濠の掘削時にはＣ区ＳＨ08は存在していたと考えられ，この部分に土塁や柵列を構築するのは困難である。

環濠は前期後半段階のＣ区ＳＨ03・04の後に掘削され，前期末段階までにほぼ埋没を完了している。そして最上層の窪みから中期初頭の土器が僅かに出土している。このことから環濠は基本的に前期後半段階の短時期のものと言える。コーナー部分のＣ－Ｃ'部分が小規模に再掘削されている他は自然に埋没している。出土遺物からも環濠は掘削直後から遺物が投棄され続けている。このことは絶えず環濠が掘削時の状態でなくとも良いことを示していると言えよう。Ｃ区においては土塁や柵の痕跡は認められず，また環濠も深いＶ字状で渡るのに困難という状態ではない。従って戦闘に対する防御的なものとは言い難く，他の機能を考えた方が良さそうである。

鴨部・川田遺跡は鴨部川の氾濫源の低地に位置しているため，洪水や湧水など日常的に水との闘いであったと考えられる。発掘調査時でも湧水に悩まされ，環濠は埋土を掘り進めるにつれて水が湧き，底まで完掘して環濠掘削時の状態であると半分近くまで水が貯まる状態であった。弥生時代前期段階には鴨部川は現在の位置よりも東側に流れていたと考えられるが，湧水状況は現在とあまり変わらないものと思われる。この環濠は他にもいろいろと機能が考えられようが，生活面から水気や湿気を除去して環濠に水を集めるための

パイプ役も担っていたものと考えられる。これに加えて鴨部川の氾濫に対する備えも考えられようか。

第３節　方形区画溝について

Ａ区からＢ区にかけて直角に近く屈曲する溝や，大きく弧を描く溝が数条検出されている。それらの溝の組み合わせにより，通常の溝とは異なる機能を持ち合わせる可能性があるので，ここでそれらを抽出しておきたい。(第432図)

①：Ａ区ＳＤ04とＡ区ＳＤ09

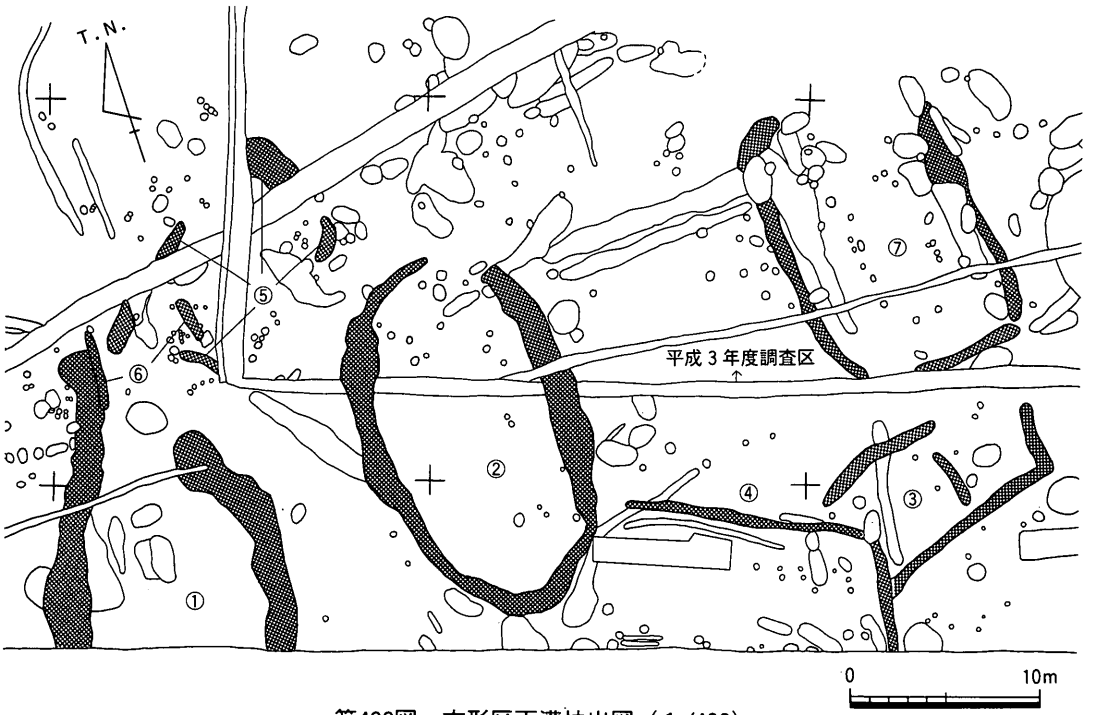
この両者の南側は調査区外に伸びて行くため，反転して１つにつながるかどうかは不明である。両溝とも向かい合った内側に屈曲しており，北側部分が開いている。前方後方形に近くなっている。溝で囲まれた内部には土坑がある。弥生時代前期後半である。

②：Ｂ区ＳＤ02

大きく弧を描いて反転して平成３年度調査区へ至る。平成３年度調査の知見を合わせると，南北方向に長い楕円形になり，北側の一部が途切れている。溝の内側部分で計ると長径約14m，短径８ｍになる。溝の内部にはピットが検出されているが，規則的には並ばない。弥生時代前期後半である。

③：Ｂ区ＳＤ06・07・08

ＳＤ07は直角に曲がっており，ＳＤ06とは平行になっている。またＳＤ07の屈曲した短



第432図　方形区画溝抽出図（１/400）

い部分はＳＤ08と平行になっている。北側と西側が大きく開いている。弥生時代前期後半である。

④：Ｂ区ＳＤ10

調査区中央部で，調査区に平行して走り途中で直角に曲がる溝である。この溝に対応すると思われる西側部分は検出されなかった。弥生時代中期初頭である。

⑤：Ａ区ＳＤ06・08と平成３年度調査区の溝

①の北東部に隣接しており，溝は途切れながらも長方形に巡っている。しかし南東側が大きく途切れすぎていることや，Ａ区ＳＤ08がＢ区ＳＤ01と同一の溝の可能性があることから，偶然に長方形に巡っているだけかもしれない。弥生時代前期後半である。

⑥：Ａ区ＳＤ05とＡ区ＳＫ05

５ｍの間隔で向かい合うもので，ＳＫ05としたものは溝としたほうが良いかもしれない。ＳＫ05の方が短くなっている。無理な抽出かもしれない。弥生時代前期後半である。

⑦：平成３年度調査区検出遺構

参考にあげておくが，③の北側３ｍ，②の東側13ｍの位置に北側を除く３方を溝で方形に巡らせた区画がある。区画内には楕円形の柱穴列がある。

以上であるが，このうちの①・②・⑦は主軸を南北方向に揃えており，いずれも北側部分は溝は巡らず区画の入り口のようになっている。③の主軸はこれらに直交している。平成３年度の調査報告を待って検討したい。

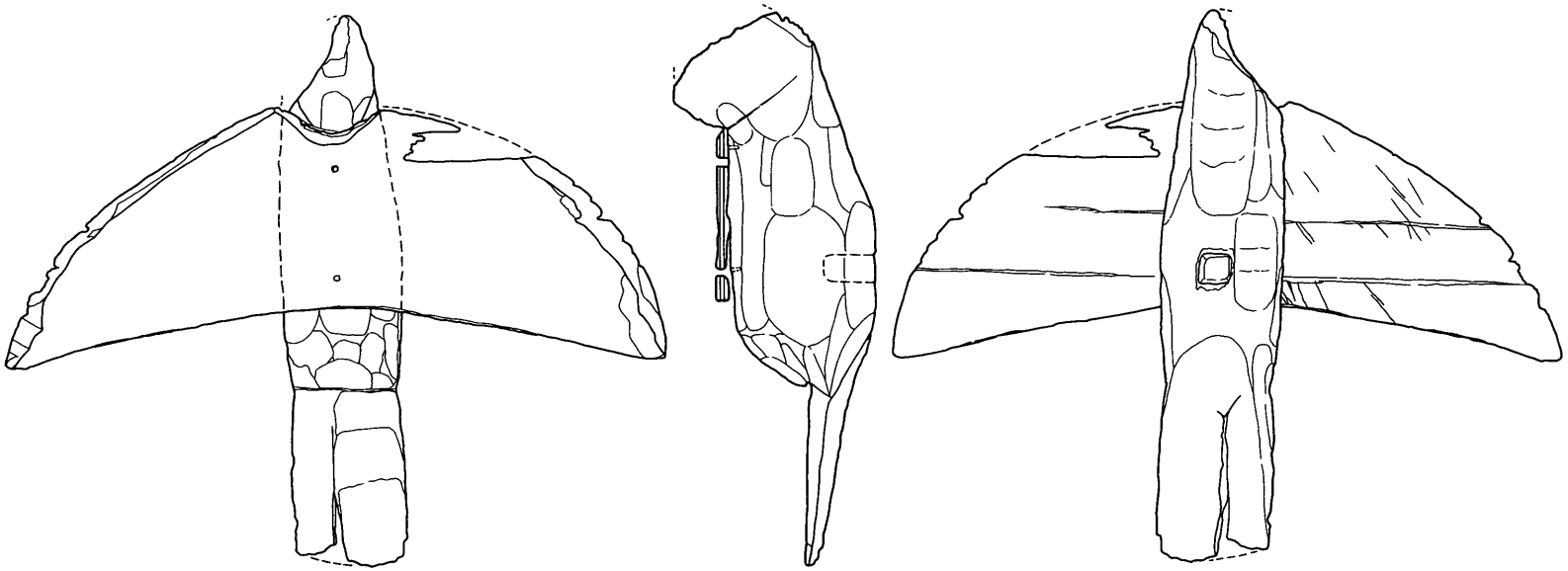
第４節　鳥形木製品について

Ａ区ＳＲ01から鳥形木製品（Ａ183）が１個体出土した。すでに本文で記述しているように，一木の丸太材を削り出して作った立体的なものである。頭部が半分欠損している他は完存している。体部の中央部に木材の芯の部分を充てており，背部には釘穴が２カ所あり，腹部には深さ2.7㎝の方形の穿孔が１カ所ある。当初どちらが上下か迷ったが，方形の穿孔部は角材を挿入するためのもので，２カ所の釘穴は他の部材を結合するためのものと考えた。角材を上に向かって挿入する，つまり背部側と考えれば腹部側は頭部が邪魔になって安定して置くことが出来ない。従って角材を下に向かって挿入してこちら側を腹部側と考える方が自然である。角材の先に鳥形木製品を付けているのである。そして背部側の釘穴は翼を付けた痕と考えられる。鳥形木製品と一緒に出土した，当初用途不明と考えていた三日月形の板状の木製品（Ａ184）がまさに翼ではないかと考えるに至ったのである。この鳥形木製品は腹部側に角材を挿入することによって棒の先端部に固定し，背部に翼を装着して飛翔している姿を表しているものと考えられるのである。（第433図）

鳥の形を模倣した木製品は古代には平城京などの宮都を中心に古くから出土している。それは人形や斎串などとともに祓いや穢れを取り除くための律令的祭祀に用いられた形代である。これらの鳥形木製品は板状の薄い材を使用して，形もかなり抽象的になってきている。これに対して大阪府池上遺跡で弥生時代中期の遺構から鳥形木製品が出土して以来，弥生時代あるいは古墳時代の遺跡から鳥形木製品が出土するようになり，注目されている。最近の集成によると弥生時代のもので13遺跡25例，古墳時代のもので11遺跡17例が知られている[(3)]。これらは先の古代のものとは異なり，鳥の形が良く判る写実的なものが多い。そして板状のもの以外に立体的な丸彫りのものが含まれていることが特徴的である。

弥生時代を中心とした鳥形木製品については近年その研究成果が多くなってきたが，それらの中でそれぞれ形態分類がなされている。基本的にはまず丸彫りで立体的なものと，板作りで平面的なものに大別されている。これに加えて想定の使用法や表現法（平面優位か側面優位か）などにより細分されている。また鳥が飛翔状態か静止状態かで分類も試みられている。以上の分類をもとにすると，鴨部・川田遺跡の鳥形木製品は丸彫りで立体的であり，腹部に穿孔があり棒の先端に装着して使用したと考えられる。そして背部に翼を装着することにより飛翔中の姿を表現しているものである。

鴨部・川田遺跡の鳥形木製品には直接は接合しなかったものの，翼部分が近接した位置

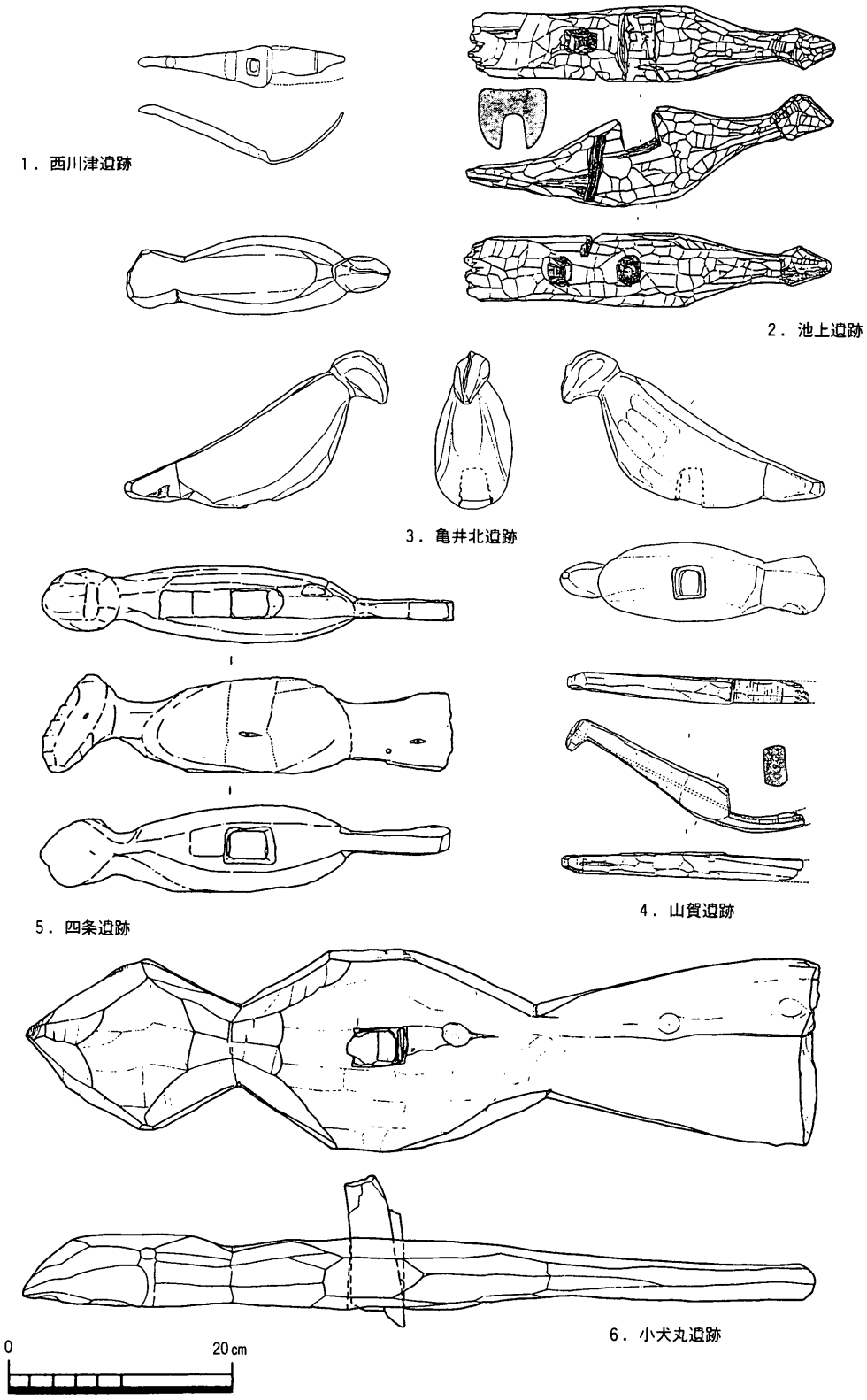


第433図　鴨部・川田遺跡出土鳥形木製品の翼装着状況図（1／4）

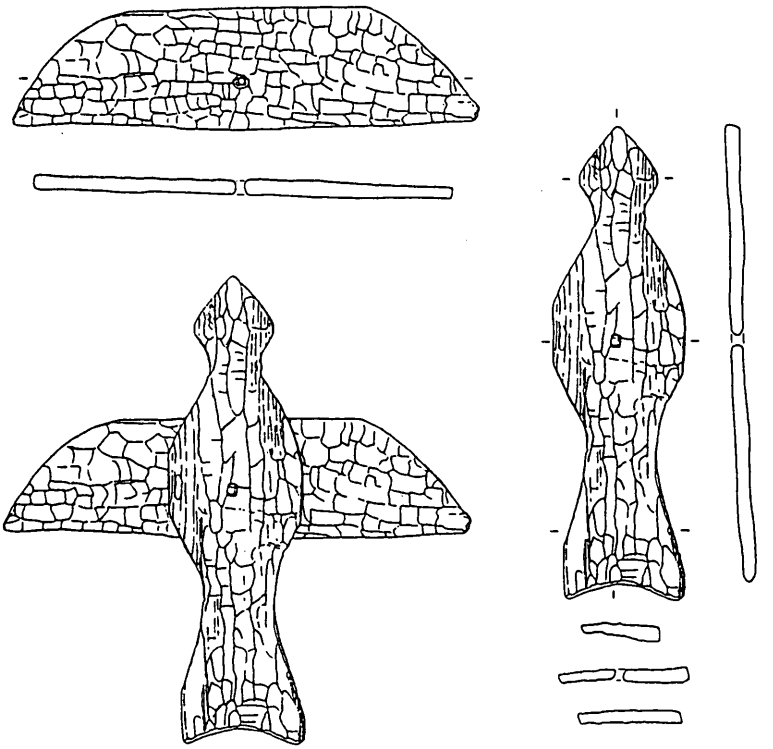
から出土している。翼（A184）は曲物の底板を半分に割ったような三日月形で，頂上部には鳥形木製品の頭部に合わせて抉りを入れている。また翼の後方部分は緩く弧を描いている。そして周縁部を斜めに削りだして丁寧に仕上げている。そして抉り部分を中央ラインとする延長上に釘穴が２カ所ある。このうちの一つには実際に木釘が残っていた。釘穴の間隔は5.8cmあり，この釘穴を結んだラインで翼は左右対称になる。この釘穴が鳥形木製品の背部に翼を装着したときの痕跡と考えられる。鳥形木製品の背部にも釘穴痕が２カ所あり，翼を装着したことが伺える。しかし実際に出土した鳥形木製品の背部の釘穴の間隔は6.5cmあり，両者が同一のものとして接合はしなかった。しかし接合状況は十分に復元出来るものであり，この両者が接合しなかったことは他に個体があるものと思われる。

このように実際に翼が出土していなくても，鳥形木製品の背部の状況で翼を装着していたと考えられるものもいくつかある。池上遺跡出土の弥生時代中期の鳥形木製品の中には背部を「コ」字状に削り取り，翼を組み合わせたと考えられるものがあるが（第434図２），翼そのものは出土していない。静岡県雌鹿塚遺跡では弥生時代後期のものが５点出土している。いずれも板材を使用した平面的なもので，上面から鳥形を表現している。いずれも穿孔が１～４個施されている。また鳥形木製品の近くから中央部分に穿孔を施した台形の板材が数個出土している（第435図１）。これらは穿孔部分で鳥形木製品と接合した翼と考えられている。この雌鹿塚遺跡のものに近いのが，古墳時代初頭まで下るが長野県石川条理遺跡のものがある。これも板作りのもので，台形の翼が栓により接合された状態で出土している（第435図２）。従ってこれらの例から，鳥形木製品の背部に小さな穿孔（釘穴）や組み合わせ用の窪みなどが見られる場合，それは翼を装着するため，あるいはしていたものと考えられる。

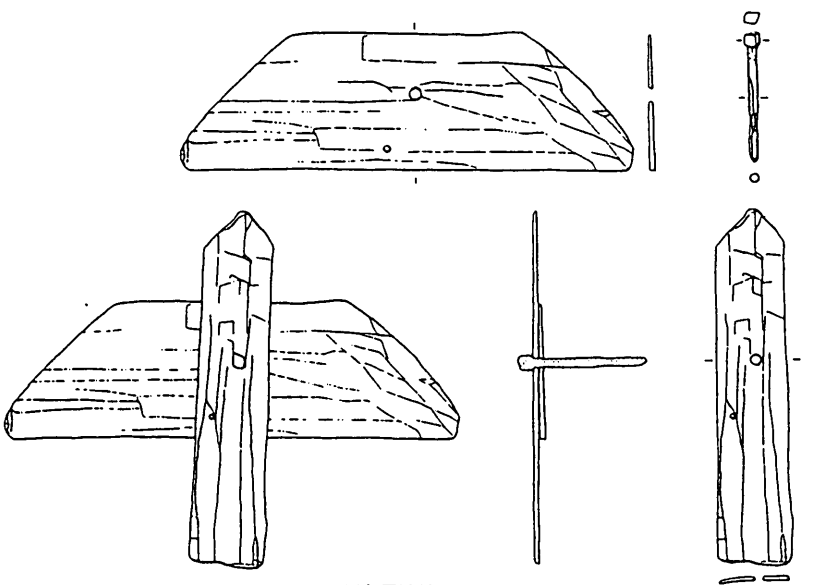
次に鴨部・川田遺跡出土の鳥形木製品の時期的なことを考えてみたい。すでに繰り返し述べているが鴨部・川田遺跡出土の鳥形木製品は丸彫りの立体的なものである。このような形態のものは弥生時代に多く，古墳時代になると奈良県纒向遺跡，奈良県四条古墳（第434図５）などで例があるが少なくなって行く。立体的なものの名残りはあるが平面的な板作りのものに近くなっている両者の中間的な形態のものが，兵庫県小犬丸遺跡の６世紀後半～７世紀代の例がある（第434図６）。奈良時代以降の丸彫りで立体的なものは現在のところ管見に上っていない。以上のことから鴨部・川田遺跡が弥生時代前期後半を中心とした集落であることから，その時代を考えるのが妥当であろう。しかし鴨部・川田遺跡の鳥形木製品および翼は平安時代の自然河川（Ａ区ＳＲ01）から出土しているのである。



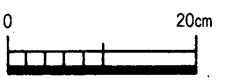
第434図　鳥形木製品（1/6）



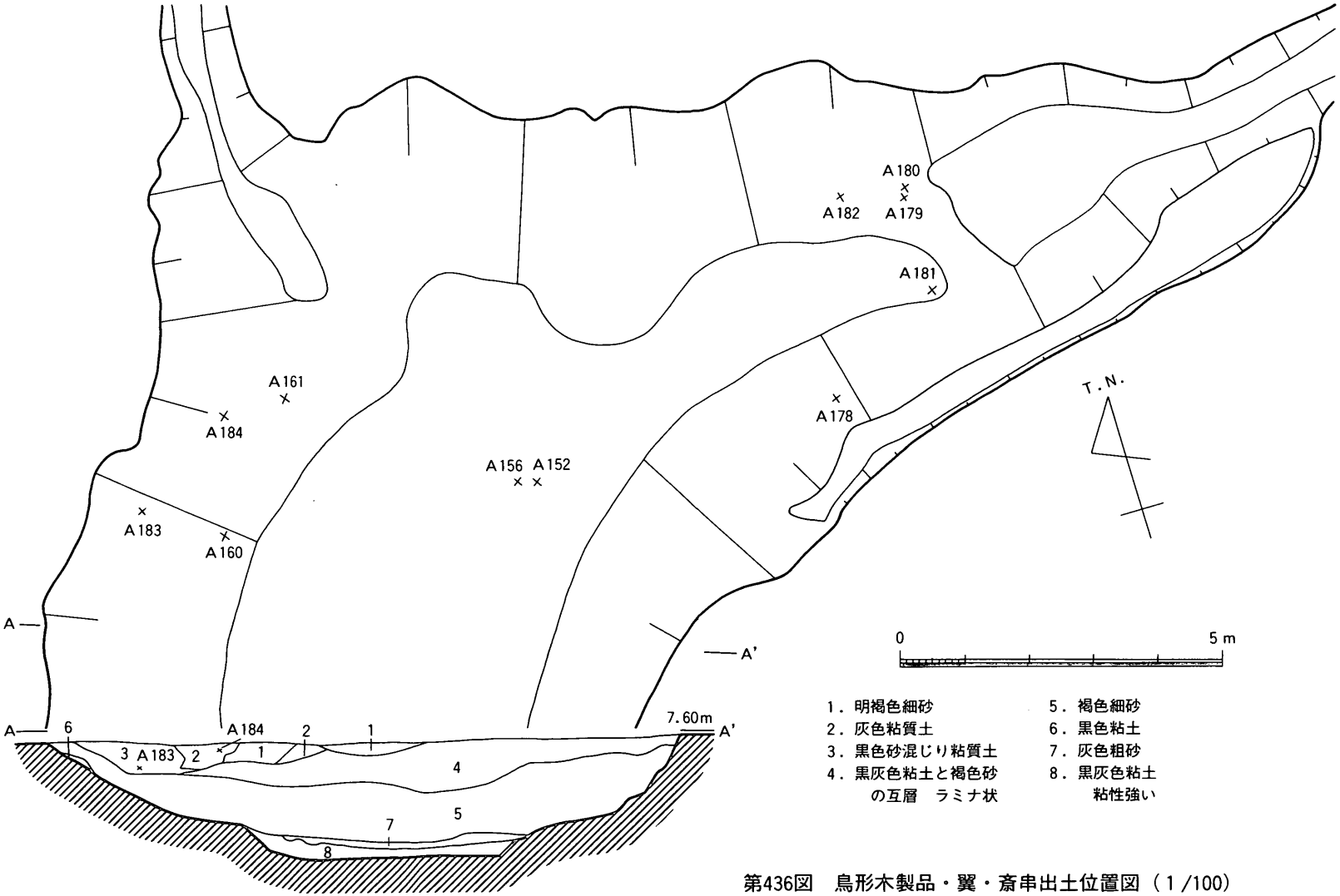
1．雌鹿塚遺跡



2．石川条里遺跡



第435図　翼装着の鳥形木製品（1／8）



第436図　鳥形木製品・翼・斎串出土位置図（1/100）

A区ＳＲ01は調査区内で13mほどで収束しているものである。埋土は下半に褐色細砂層が80～100cmほど堆積しており，上半は主に黒灰色粘土と褐色砂がラミナ状に堆積した層である（第55図)。上層の黒灰色粘土と褐色砂がラミナ状に堆積した層の中の下部で平安時代の土器が出土しており，下層の褐色細砂層の最上部で斎串が出土している。そして各層に弥生時代前期と考えられる土器の細片が少量含まれている。このような中で鳥形木製品と翼は最上層に再堆積したような部分から出土している。鳥形木製品は黒色砂混じり粘質土層から，翼は灰色粘質土層からそれぞれ出土しており，出土レベルはほぼ同じである。従って純粋に平安時代のＳＲ01の埋土ではない部分から出土している。しかしＳＲ01の本来の掘り込み面は弥生時代前期の遺構面よりも上部で，ＳＲ01の形成時に弥生時代前期の遺物を巻き込んだならば，鳥形木製品が最上層の再堆積部分から出土することの説明にならない。層位的に解釈するならばＳＲ01の埋没後の混入と考えられ，鳥形木製品の年代も平安時代以降ということになる。(第436図)

このように鴨部・川田遺跡の鳥形木製品は形態的には弥生時代のもの，出土状況からは平安時代以降である。弥生時代に属するならば集落と同じ前期後半のものと言えよう。弥生時代前期の鳥形木製品は大阪府山賀遺跡（第434図４），島根県西川津遺跡（第434図１）出土のものとともに最古の部類に入る。平安時代以降のものとなると遺跡から出土した例は知られていない。ただ現在まで残る習俗としては知られている。

これまで述べてきたような鳥形木製品の使用目的であるが，金関恕の論考にあるように「杆頭につけられ，集落内の祭儀にあたって，鳥杆として立て並べられたもので，葬礼の具とする蓋然性は乏しい」もので，「鳥杆として立て並べて執り行なわれる祭儀は，初期的な農耕社会の段階で，大きな役割を果たし」たと考えられている。そして「天空を高く遠く自在に天翔ける鳥が，神の国と人の世のなかだちをする使者であるという素朴な信仰は，世界的に広がっている。それは時には，死者の霊を彼岸に送る運搬者であり，時には，神霊をこの世にもたらす使いであり，あるいは，霊の化現だとも信じられていた」古代人の信仰を背景として考えている[(4)]。鳥形木製品は縄文時代にはなく，弥生時代になっての農耕とともに出現し，またその出土場所も弥生時代には墓域からではないことから集落の祭祀の場に立てられたものと考えられたのである。いずれにしても鳥に対する想いは飛んで運ぶことであり，それが農耕祭祀であろうと葬送祭祀であろうと鳥に込められた役割は同じである。

鴨部・川田遺跡では平安時代の自然河川から出土しているが，この場所はもともとＡ区

ＳＨ01～ＳＨ05の営まれたすぐ南側に位置しており，鳥形木製品が弥生時代前期のものであれば集落域での出土と言えよう。Ａ区は他の調査区に比べて弥生時代前期の遺構数は少なく，住居の南北には特に少ない。この場が広場で祭祀の場を兼ねていれば，鳥形木製品もまさに先に紹介したような場所で使用されたと考えられよう。また鳥形木製品は一つの遺跡で複数出土していることが多く，鴨部・川田遺跡でも鳥形木製品と翼が直接接合しなかったことからも複数の存在が予想される。

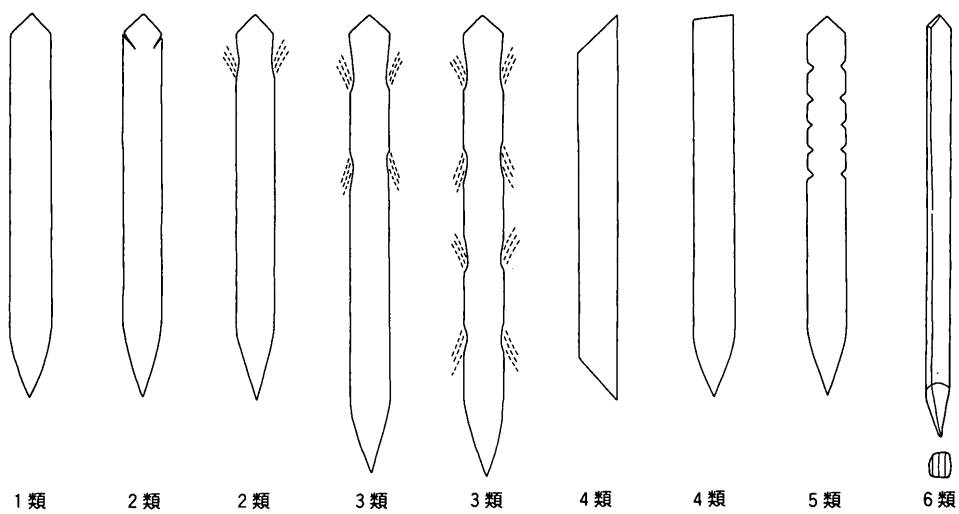
これに対して平安時代以降のものであれば，共に出土した斎串などとともに使われた祭祀具と考えられよう。この場合，特に古代以降では穢れを取り払うため人形などの木製模造品と斎串をセットで用いた律令的祭祀の系譜をひくものであったと考えられる。そしてこの自然河川は穢所のような場所であったであろう。しかしこのような木製模造品としての鳥形は板材を使用した平面的なもので，形態もかなり抽象化されている。鴨部・川田遺跡の鳥形木製品のような形態のものは現在のところ宮都などでも知られていない。

以上，鴨部・川田遺跡で出土した鳥形木製品について述べてきた。その年代が正確に定まらないのが残念であるが，可能性としては弥生時代前期後半段階が高いというのが，調査担当者としての所見である。我が国に農耕が定着した段階の精神面の文化を考える上で貴重な資料になるものと思う。

第５節　斎串について

古代の祭祀に用いられる木製品の一つに斎串がある。薄い板材を使用しており，頭部を圭頭状に，端部を剣先状に尖らせた形が一般的で，側縁部に切り掛けを施すことが多いものである。斎串は外部の悪気を遮断して内部に神聖な空間を作り出すとともに，内部に生じた穢れや罪を外部に漏れないようにする役目を担っていたと考えられている。このような斎串は人形や馬形・鳥形などの木製模造品とともに祓いに使用されることが多く，律令的祭祀と言われる宮都などの大祓に代表される国家的な祭祀に使用されるものである。古代律令制の展開に伴い地方にもこうした祭祀が広がり，近年の発掘調査の進展とともにこうした木製模造品が出土するようになってきた。一般の集落ではほとんど出土しないような木製模造品のなかで，鴨部・川田遺跡ではＡ区ＳＲ01より斎串が３点（Ａ178～Ａ180）出土している（第436図）。そこでここでは斎串の検討と出土したことの意味を検討してみたい。

出土した斎串は３点ともに頭部は圭頭状で，先端部は剣先状に尖っている。そして頭部のすぐ下の側縁部にＡ178は１対，Ａ179・Ａ180は２対の切り欠きをそれぞれ三角形状に施している。側縁部には切り欠き以外の調整はない。高松市前田東・中村遺跡における斎串の分類の５類に相当する[5]（第437図）。いずれもヒノキの柾目材を使用しており，厚さは４㎜と薄いものである。Ａ178は他の２点に比べてやや幅広で短くなっており，頭部の圭頭状の角度も大きくなっている。また先端部も急激に細くなり突出気味である。Ａ179



第437図　斎串形態分類図

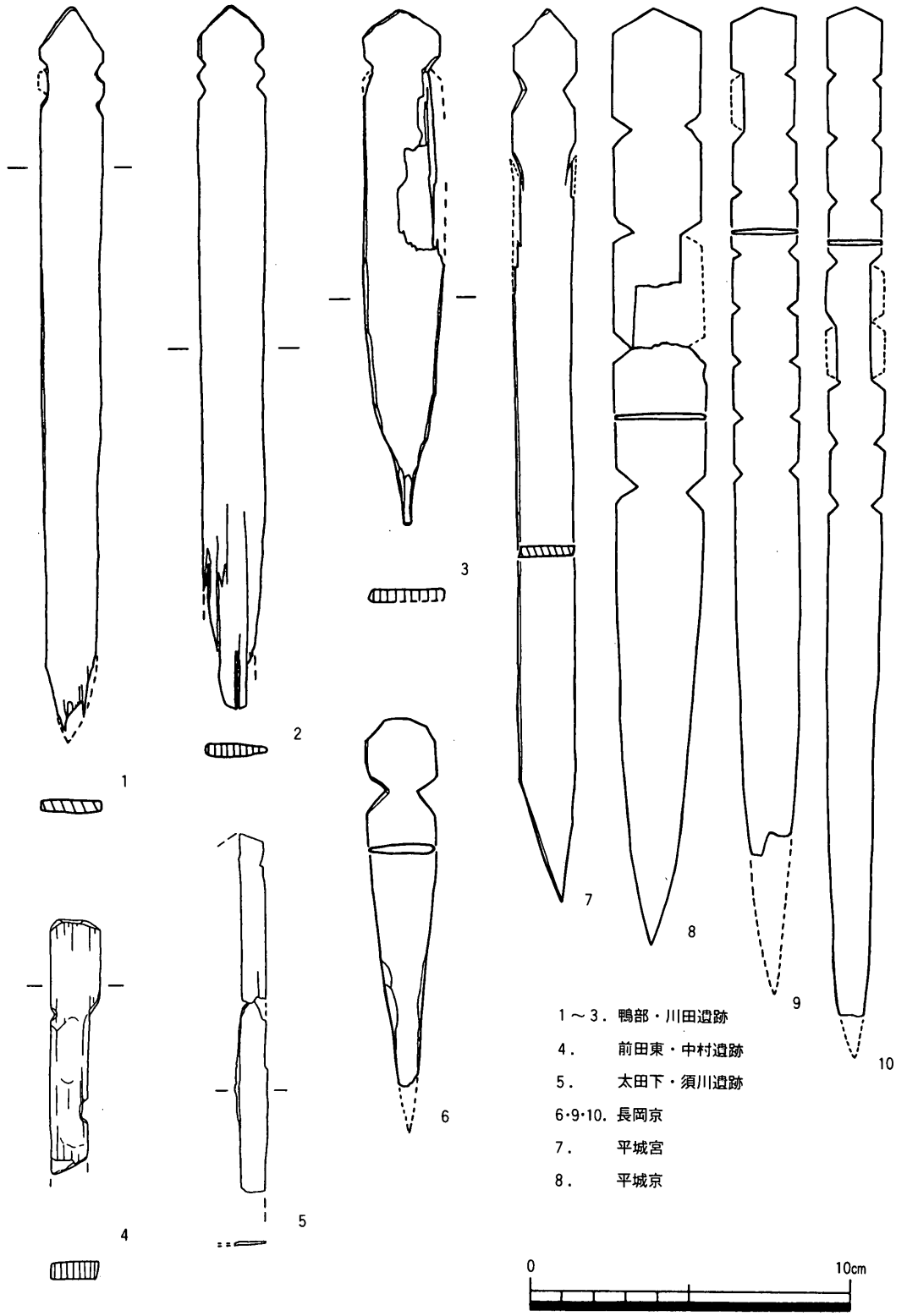
・A180は長さ20cmを超えるものである。

3点の斎串はすでに本文で述べているようにA区SR01の褐色細砂層の最上部で出土しており，この層の上層では12世紀代の土器が出土しており，またSR01が奈良時代の遺構を壊していることから，斎串の年代は9世紀～12世紀の間ということになる。斎串は現在のところ6世紀後半に奈良県和爾遺跡の井戸から出土しているのが最古の部類と考えられている[6]。本格的に出現するのは7世紀からで，人形・馬形などとともに新たに出現する。黒崎直の研究によると，切り掛けを施さないものと簡単に一対の切り掛けを施すものがまず出現し，7世紀後半に切り掛けを二対施すものが出現するという。8世紀後半には代表的なものが出揃い，8世紀末以降は切り掛けを四対以上施すもの，三角形の切り欠きを入れるものが増加しそれまでのものは減少する[7]。傾向として時代が下るにつれて単純なものから切り掛けを多く施したものが多くなる。しかし古い形態のものが消滅することはなく，むしろ大きさによる区別がなされるようになったようである。鴨部・川田遺跡の斎串は三角形の切り込みをもつことから，上記の変遷に照らし合わせるならば8世紀末以降で，出土状況から考えた年代に合致する。

香川県で斎串が出土した遺跡はこれまで鴨部・川田遺跡を含めて10遺跡ある（第22表）。鴨部・川田遺跡の斎串の年代に近い9世紀以降（平安時代）のものは，下川津遺跡，郡家原遺跡，太田下・須川遺跡，多肥松林遺跡，前田東・中村遺跡の5遺跡がある。この中で鴨部・川田遺跡の斎串の形態である5類が出土したのは太田下・須川遺跡（第438図5）と前田東・中村遺跡（第438図4）の2遺跡である。またこの2遺跡に鴨部・川田遺跡を

遺跡	所在地	遺構	時代	形態
金蔵寺下所遺跡	善通寺市	SR02	8世紀後半	2・3
郡家原遺跡	丸亀市	SD73	9世紀	1・4
郡家大林上遺跡	丸亀市	SR01-1	奈良時代	1・3
下川津遺跡	坂出市	第1低地帯流路2	7世紀	2・4
下川津遺跡	坂出市	第1低地帯流路3	7世紀後半	1・3
下川津遺跡	坂出市	第1低地帯流路5	6世紀末～7世紀前半	2・4
下川津遺跡	坂出市	第2低地帯流路2	9世紀	1・2・3・7
下川津遺跡	坂出市	第3低地帯流路2	8世紀	1・3
中間西井坪遺跡	高松市	SR8901	平安時代初頭	不明
太田下・須川遺跡	高松市	SR05	9世紀	1・2・5・6・7
多肥松林遺跡	高松市	Ⅲ区SD03	平安時代前半	2・3
前田東・中村遺跡	高松市	G区SR04	7～8世紀	1・2・3・（4）
前田東・中村遺跡	高松市	G区SR04	8世紀後半～9世紀	3・（5）・6
前田東・中村遺跡	高松市	E区SE02	10世紀前後	5
小山・南谷遺跡	高松市	SE701	8世紀	2
鴨部・川田遺跡	志度町	A区SR01	9～11世紀	5

第22表　香川県内斎串出土遺跡一覧



第438図　5類斎串（1/2）

加えた3遺跡が現在のところ5類のものを出土したすべてである。

側縁部に切り欠きを施す5類の斎串は，近畿地方においても平城宮，平城京，長岡京，平安京などの宮都を中心に8世紀後半以降に見られる（第438図6～10）。薄い板材を使用した斎串の中では後出のものである。この他に後出の斎串として棒状のものがあるが，鴨部・川田遺跡では出土していない。このように鴨部・川田遺跡の斎串は後出の一群と言える。

斎串は先に述べたように悪気を遮断する役目を担っていたと考えられている。悪気の外部からの進入や内部から漏れないようにしたのである。斎串のこの役目・機能を必要としたのは祓いなどの祭祀があり，祭事の後には河川や水路など水に流している。宮都や地方の国府・公的施設を中心とした律令体制下の国家的祭祀の場に使用されている。また斎串のもつ浄化作用により，井戸に関わる祭祀がある。斎串の出土状況から井戸の掘削時，廃棄時にかかわるものが考えられる。使用時もあったかも知れない。つまり水を清めたり井戸神を鎮めたりする場合に斎串を使用したと考えられる。これら両者は水に係わっているが，これら水辺の祭祀には他に「禊をするとともに誓約をする場，神々が相談する（神意を聞く）場としてある。河原は神の座す聖なるところであり，聖なる水による沐浴（潔斎）は穢をはらいよみがえるとともに，神の声を聞くのである。水辺の祓いはただ罪を祓うだけではなかった」[8]というようなものも考えられている。

鴨部・川田遺跡では斎串は自然河川から出土しており，上記のように水辺での出土である。祭祀具としては斎串が3点だけの出土で，前節で述べた鳥形木製品が伴うとしても，全体としては貧弱な様相である。律令体制下の国家的祭祀や官衙などの公的施設に伴う祭祀とは考えにくい様相である。また遺跡周辺にそのような施設は現在のところ発見されてはいない。井戸に伴うものでもない。すると鴨部・川田遺跡の場合は，民衆の日常的な水辺の祭祀の可能性がたかくなる。加えて鴨部・川田遺跡は鴨部川の氾濫に悩まされ続けたことであろうから，洪水のたびに神に祈り，神の怒りを鎮めようとして，このように斎串を用いた祭祀を行ったのかも知れない。

第６節　鴨部・川田遺跡出土の石器

（1）石器組成

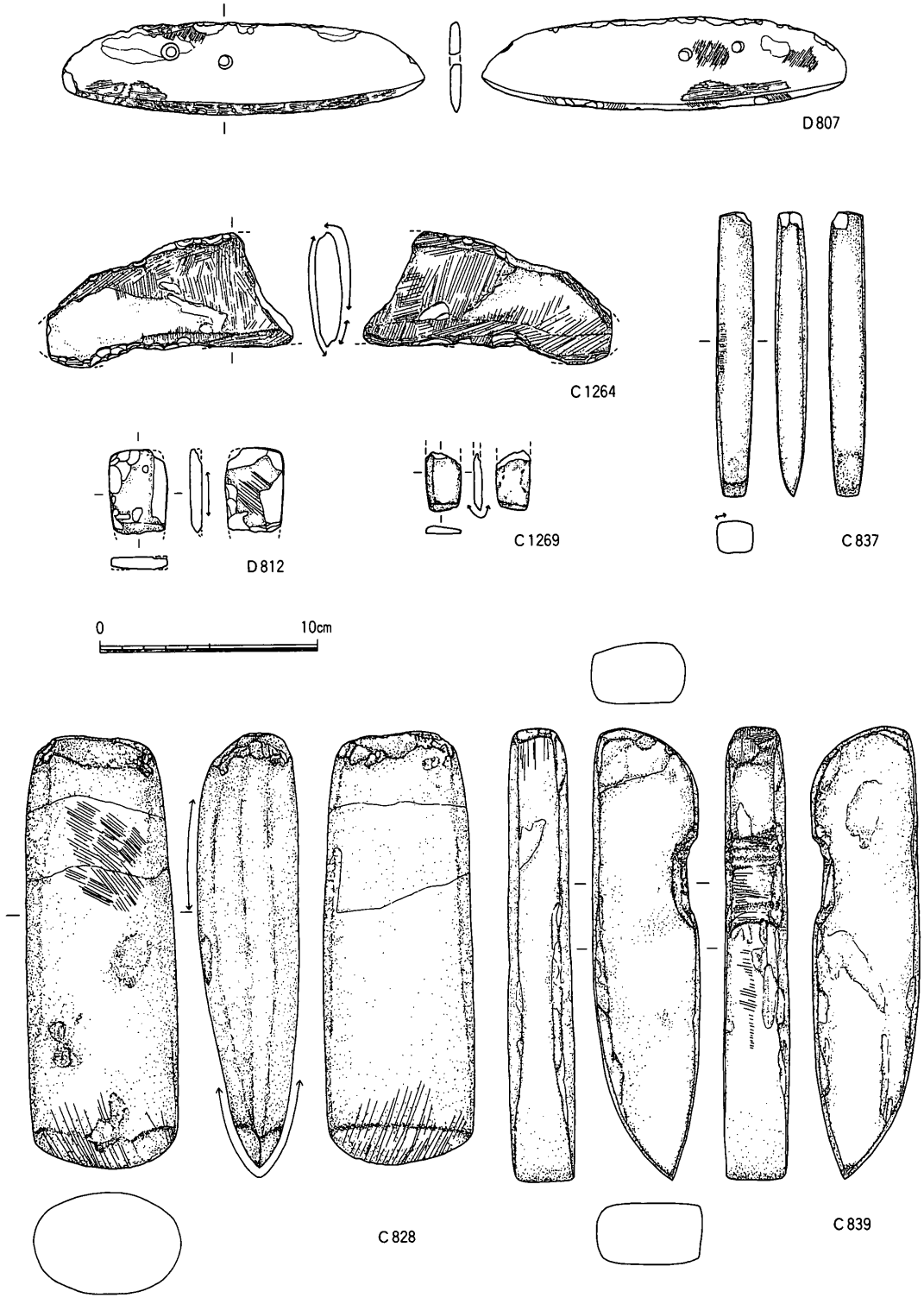
鴨部・川田遺跡のＡ区～Ｄ区までで525点の石器（素材剥片４点を含む）を図化した。これらを用途・機能別に分類したものが第23表と第24表である。表のその他の中にはＣ区で出土した素材剥片の４点を含んでいる。大きく用途別に農具，工具，武器，漁労具，調理具，その他に分類した。そして農具は収穫具と土掘具に，工具は伐採具と加工具にそれぞれ細分した。

用途	用途・機能	点数	比率（%）
農具	収穫具	119	23
	土掘具	30	6
工具	伐採具	29	5.5
	加工具	164	31
武器	武器	149	28
漁労具	漁労具	3	0.5
調理具	調理具	19	4
その他	その他	12	2

第23表　石器組成（１）

用途分類	用途・機能	器種	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	合計	比率（%）	用途別比率（%）
農具	収穫具	磨製石庖丁	4	6	24	19	53	10	29
		磨製石庖丁未製品	0	1	15	1	17	3	
		打製石庖丁	7	7	20	11	45	9	
		石鎌	0	1	3	0	4	1	
	土掘具	石鍬	4	4	12	10	30	6	
工具	伐採具	太型蛤刃石斧	4	3	14	8	29	5	37
	加工具	柱状片刃石斧	0	1	5	5	11	2	
		扁平片刃石斧	1	1	3	2	7	1	
		小型方柱状石斧	0	その他1	1	3	5	1	
		石錐	1	6	7	10	24	5	
		石小刀	0	1	2	2	5	1	
		石匙	0	1	6	3	10	2	
		スクレイパー	3	6	15	21	45	9	
		楔形石器	4	5	7	6	22	4	
		敲石	3	2	6	4	15	3	
		砥石	5	3	10	2	20	4	
武器		石鏃	8	41	36	61	146	28	28
		石槍	0	1	1	1	3	1	
漁労具		石錘	0	2	1	0	3	1	0.5
調理具		磨石	0	0	0	0	0	0	3.5
		凹石	4	3	6	6	19	4	
その他		その他	4	3	5	0	12	2	2
		合計	52	99	199	175	525	100	100

第24表　石器組成（２）



第439図　鴨部・川田遺跡出土大陸系磨製石器群（1／3）

石材	個数	重量　(g)	個数	重量　(g)	個数	重量　(g)	重量製品率 (%)
A区	剥片・砕片等		石器		総数		
サヌカイト	355	1623.7	25	556.9	380	2180.6	26
安山岩	14	3670.0	7	1599.1	21	5269.1	30
結晶片岩	3	39.8	3	355.6	6	395.4	90
(脈岩) 安山岩	2	168.2	4	1804.6	6	1972.8	91
流紋岩	5	89.1	8	3104.0	13	3193.1	97
砂岩	4	1481.6	5	2831.8	9	4313.4	66
花崗岩	9	3200.1			9	3200.1	0
その他	4	79.6			4	79.6	0
合計	396	10352.1	52	10252.0	448	20604.1	50
B区	剥片・砕片等		石器		総数		
サヌカイト	1014	5403.2	71	1017.0	1085	6420.2	16
安山岩	62	8170.1	7	3050.1	69	11220.2	27
結晶片岩	14	177.0	3	412.9	17	589.9	70
(脈岩) 安山岩	10	1361.7	4	1978.5	14	3340.2	59
流紋岩	24	1107.7	11	1130.7	35	2238.4	51
砂岩	10	1340.2	3	2000.7	13	3340.9	60
花崗岩	20	5995.8			20	5995.8	0
その他	10	1676.7			10	1676.7	0
合計	1164	25232.4	99	9589.9	1263	34822.3	28
C区	剥片・砕片等		石器		総数		
サヌカイト	1417	14594.6	88	1717.2	1505	16311.8	11
安山岩	150	23567.8	28	10213.2	178	33781.0	30
結晶片岩	25	651.7	18	1565.2	43	2216.9	71
(脈岩) 安山岩	12	1276.5	14	4396.6	26	5673.1	77
流紋岩	88	3773.4	37	2648.9	125	6422.3	41
砂岩	22	3425.4	7	1694.9	29	5120.3	33
花崗岩	44	5865.0	1	366.8	45	6231.8	6
その他	14	820.9	2	870.2	16	1691.1	51
合計	1772	53975.3	195	23473.0	1967	77448.3	30
D区	剥片・砕片等		石器		総数		
サヌカイト	2493	12244.1	110	1315.0	2603	13559.1	10
安山岩	235	28118.0	20	6762.8	255	34880.8	19
結晶片岩	50	671.8	17	1102.1	67	1773.9	62
(脈岩) 安山岩	10	783.5	8	2271.9	18	3055.4	74
流紋岩	116	4108.1	14	489.0	130	4597.1	11
砂岩	48	6598.6	1	547.6	49	7146.2	8
花崗岩	120	7979.6	3	1106.9	123	9086.5	12
その他	11	477.2	2	674.0	13	1151.2	59
合計	3083	60980.9	175	14269.3	3258	75250.2	19

第25表　調査区別石材集計

石材	個数	重量　(g)	個数	重量　(g)	個数	重量　(g)	重量製品率 (%)
A区～D区	剥片・砕片等		石器		総数		
サヌカイト	5279	33865.6	294	4606.1	5573	38471.7	12
安山岩	461	63525.9	62	21625.2	523	85151.1	25
結晶片岩	92	1540.3	41	3435.8	133	4976.1	69
(脈岩) 安山岩	34	3589.9	30	10451.6	64	14041.5	74
流紋岩	233	9078.3	70	7372.6	303	16450.9	45
砂岩	84	12845.8	16	7075.0	100	19920.8	36
花崗岩	193	23040.5	4	1473.7	197	24514.2	6
その他	39	3054.4	4	1544.2	43	4598.6	34
合計	6415	150540.7	521	57584.2	6936	208124.9	28

第26表　石材集計（A区～D区）

その結果，最も多かったのは加工具で31％，次いで武器の28％，収穫具の23％の順となっている。加工具の中で木製品の加工に係わる石斧類は23点で４％，石庖丁の穿孔具と考えられる石錐は24点で５％である。収穫具では磨製石庖丁及びその未製品が70点で13％，打製石庖丁が45点で９％あり，石庖丁全体では115点で22％を占めている。

鴨部・川田遺跡は弥生時代前期後半～中期初頭にかけてが中心となる遺跡で，石器はほぼこの時期に限定できる。農耕技術の導入と共に大陸系磨製石器も日本にもたらされた。大陸系磨製石器のうち石庖丁，石鎌，太型蛤刃石斧，柱状片刃石斧，扁平片刃石斧，小型方柱状石斧が出土している（第439図)。総計123点（磨製石庖丁の未製品を含む）で23％，全体の四分の一近くを大陸系磨製石器で占めていることになる。またこれら大陸系磨製石器に加えて打製石庖丁，打製石鎌が前期後半段階で出現している。

これに対して縄文時代からの伝統をもつ石器として石鏃と石匙がある。石鏃は30点出土

器種	ｻﾇｶｲﾄ	安山岩	結晶片岩	(脈岩) 安山岩	流紋岩	砂岩	花崗岩	その他	合計
A区									
磨製石庖丁					4				4
磨製石庖丁未製品									
打製石庖丁	4	2	1						7
石鏃	1	3							4
石鎌									
太型蛤刃石斧				4					4
柱状片刃石斧									
扁平片刃石斧			1						1
小型方柱状石斧									
石錐	1								1
石小刀									
石匙									
スクレイパー	3								3
楔形石器	4								4
敲石			1		1	1			3
砥石		1			2	2			5
石鏃	8								8
石槍									
石錘									
磨石									
凹石		1			1	2			4
その他	4								4
合計	25	7	3	4	8	5			52
合計重量	556.9	1599.1	355.6	1804.6	3104.0	2831.8			10252.0

第27表　器種別石材一覧（A区）

したが，中には全長29.5cmで重さが1823.7ｇもある大型の石鍬（D823）もある。鴨部・川田遺跡では土掘具としての木製の鍬が未製品も含めて多数出土しており，田を耕すのには木製鍬をほうを主に使用していたのではないかと考えられる。石鍬は木製鍬の補完的に使用していたか，あるいは小規模な掘削や硬い土壌の掘削に用いていたのかも知れない。石鍬は縄文時代晩期頃に出現して弥生時代前期には減少するものが多いが，地域的には弥生時代前期以降にも盛行している。弥生時代前期にあるような石鍬は鴨部・川田遺跡のもののように大きいものが多く，石材も香川県では安山岩が多い傾向にある。これに対して小さなものはサヌカイト製が多く，むしろこちらのものが縄文時代からの系譜を保っている可能性が高い。石匙は10点出土しているが，これは縄文時代に盛行した石器であり，集落内から縄文土器が全く出土していないことから弥生時代前期まで残存した器種である。農耕を本格的に導入しながら一方ではまだ縄文時代の色彩を残している様子が伺える。

器種	ｻﾇｶｲﾄ	安山岩	結晶片岩	(脈岩) 安山岩	流紋岩	砂岩	花崗岩	その他	合計
Ｂ区									
磨製石庖丁					6				6
磨製石庖丁未製品					1				1
打製石庖丁	5	1			1				7
石鍬	1	2	1						4
石鎌	1								1
太型蛤刃石斧				3					3
柱状片刃石斧			1						1
扁平片刃石斧			1						1
小型方柱状石斧					その他1				1
石錐	6								6
石小刀	1								1
石匙	1								1
スクレイパー	6								6
楔形石器	5								5
敲石		1				1			2
砥石		1			1	1			3
石鏃	40			1					41
石槍	1								1
石錘	1	1							2
磨石									
凹石		1			1	1			3
その他	3								3
合計	71	7	3	4	11	3			99
合計重量	1017.0	3050.1	412.9	1978.5	1130.7	2000.7			9589.9

第28表　器種別石材一覧（Ｂ区）

石鏃は146点あるが，長さは平均で2.54cm，重量の平均は1.59ｇで概して小形である。基部の形態をみると凹基が90点，平基が24点，凸基が18点，不明のものが14点であり，凹基のものが全体の62％を占めている。弥生時代前期後半～中期初頭にかけてのこの石鏃は縄文時代の石鏃と同様に狩猟用の武器と考えられ，中期中葉以降に増加する戦闘用の武器とは異なるものと考えられる。

（２）石器石材

鴨部・川田遺跡出土の石器には様々な石材が使用されている。主な石材としてサヌカイト，安山岩，結晶片岩，（脈岩）安山岩，流紋岩，砂岩，花崗岩の７種類が使用されており，その他のもので閃緑岩，アプライトが僅かにある（第25表・第26表）。また製品としてはないが石英を確認している。このうち（脈岩）安山岩としたものは，別名「ひん岩」と呼ばれるもので，斜長石を斑状に含む緑色系，緑灰色系の岩石である。目的の石器の大

器種	ｻﾇｶｲﾄ	安山岩	結晶片岩	（脈岩）安山岩	流紋岩	砂岩	花崗岩	その他	合計
Ｃ区									
磨製石庖丁		1	4		19				24
磨製石庖丁未製品		2			13				15
打製石庖丁	13	4	2		1				20
石鍬	1	11							12
石鎌	2				1				3
太型蛤刃石斧				14					14
柱状片刃石斧			5						5
扁平片刃石斧			3						3
小型方柱状石斧			1						1
石錐	7								7
石小刀	2								2
石匙	6								6
スクレイパー	14	1							15
楔形石器	7								7
敲石		3	1			1	1		6
砥石		1	1		1	6		1	10
石鏃	35		1						36
石槍	1								1
石錘		1							1
磨石									
凹石		3			1			1	5
石皿		1							1
その他	*4				1				5
合計	92	28	18	14	37	7	1	2	199
合計重量	*7411.7	10213.2	1565.2	4396.6	2648.9	1694.9	366.8	870.2	29167.5

第29表　器種別石材一覧（Ｃ区）

きさにより一概に比較は出来ないが，目安として石材別の重量比（石器と出土のすべての剥片・砕片等を含む）を見ると，サヌカイト18%，安山岩41%，結晶片岩２%，（脈岩）安山岩７%，流紋岩８%，砂岩10%，花崗岩12%，その他２%である。また微細な砕片も一つと数えて単純に数だけを比較すると，サヌカイト80%，安山岩８%，結晶片岩２%，（脈岩）安山岩１%，流紋岩４%，砂岩1.5%，花崗岩３%，その他0.5%である。このことから軽量のサヌカイト片が圧倒的に多いことがわかる。また石材別に重量を基準にしての製品率をみると，サヌカイト12%，安山岩25%，結晶片岩69%，（脈岩）安山岩74%，流紋岩45%，砂岩36%，花崗岩６%，その他34%である。石材としてはサヌカイトと安山岩が石器を製作するのに多くの無駄な部分，つまり不定型な剥片や砕片を多く産出していることがわかる。しかしこの不定型な剥片や砕片の多さが逆に集落内で石器生産が行われたことを示唆している。

器種	ｻﾇｶｲﾄ	安山岩	結晶片岩	（脈岩）安山岩	流紋岩	砂岩	花崗岩	その他	合計
Ｄ区									
磨製石庖丁		3	3		13				19
磨製石庖丁未製品			1						1
打製石庖丁	5	4	2						11
石鏃	2	8							10
石鎌									
太型蛤刃石斧				8					8
柱状片刃石斧			5						5
扁平片刃石斧			1		1				2
小型方柱状石斧			3						3
石錐	10								10
石小刀	2								2
石匙	3								3
スクレイパー	20		1						21
楔形石器	6								6
敲石			1				2	1	4
砥石		1				1			2
石鏃	61								61
石槍	1								1
石錘									
磨石									
凹石		4					1	1	6
その他									
合計	110	20	17	8	14	1	3	2	175
合計重量	1315.0	6762.8	1102.1	2271.9	489.0	547.6	1106.9	674.0	14269.3

第30表　器種別石材一覧（Ｄ区）

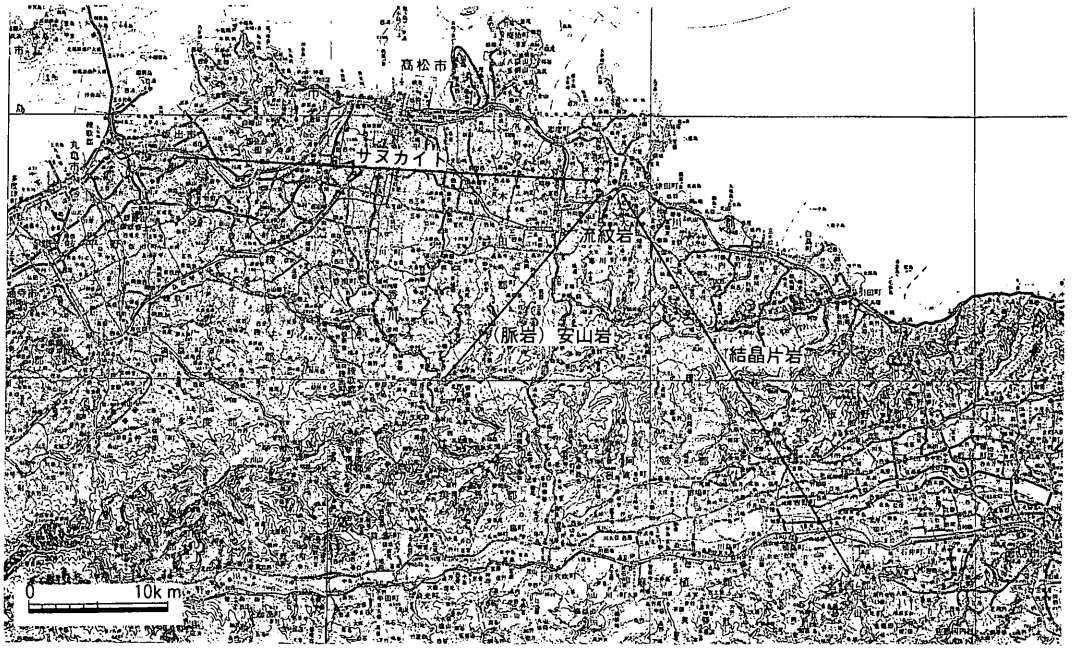
（3）石器と石材の関係

石器の器種と石材の関係をみると，器種別に石材が選択されていたことがわかる（第27表～第31表　＊はＣ区の大形素材剥片４点の5694.5ｇを含む）。ほぼ限定的な石材を使用するものに，太型蛤刃石斧が（脈岩）安山岩を，その他の石斧類が結晶片岩を，石錐・石小刀・石匙・スクレイパー・楔形石器の加工具と武器の石鏃がサヌカイトを使用している。これに加えて磨製石庖丁では未製品を含めて80％が流紋岩を選択している。それぞれの用途に適合した材質の石材を使用している。磨製石器は基本的に研磨し易いようにサヌカイト以外の石材を選択しており，太型蛤刃石斧は伐採という目的のために特に衝撃に強く割れにくい石材を選択している。

加工具を中心とした打製石器に使用されるサヌカイトは分析の結果，その大多数が金山東産のもので，その他の産地を含めても香川県内の金山・国分台地域のもので鴨部・川田

器種	ｻﾇｶｲﾄ	安山岩	結晶片岩	（脈岩）安山岩	流紋岩	砂岩	花崗岩	その他	合計
全体									
磨製石庖丁		4	7		42				53
磨製石庖丁未製品		2	1		14				17
打製石庖丁	27	11	5		2				45
石鍬	5	24	1						30
石鎌	3				1				4
太型蛤刃石斧				29					29
柱状片刃石斧			11						11
扁平片刃石斧			6		1				7
小型方柱状石斧			4		1				5
石錐	24								24
石小刀	5								5
石匙	10								10
スクレイパー	43	1	1						45
楔形石器	22								22
敲石		4	3		1	3	3	1	15
砥石		4	1		4	10		1	20
石鏃	144		1	1					146
石槍	3								3
石錘	1	2							3
磨石									
凹石		9			3	3	1	2	18
石皿		1							1
その他	＊11				1				12
合計	＊298	62	41	30	70	16	4	4	525
合計重量	＊10300.6	21625.2	3435.8	10451.6	7372.6	7075.0	1473.7	1544.2	63278.7

第31表　器種別石材一覧（全体）



第440図　鴨部・川田遺跡石器石材搬入状況

遺跡とは約30kmの距離である。石斧類を中心とした磨製石器に多い結晶片岩はおそらく徳島の吉野川南岸の四国山地から搬入されている。また太型蛤刃石斧の限定的な石材となっている（脈岩）安山岩は，鴨部・川田遺跡から南西約18kmの香川県塩江町の塩江温泉の香東川流域で産出される。さらに磨製石庖丁に多用されている流紋岩については，鴨部・川田遺跡の南約３kmの寒川町と大川町の境に位置する金山で産出される。流紋岩は他に高松市の三谷町付近と三木町岳山で産出されるが，鴨部・川田遺跡の流紋岩は恐らく距離的にみても金山産の可能性が高い。その他の石材は恐らく集落の近辺で採取したものと考えられる。このように鴨部・川田遺跡で石器に使用する石材は半径約30kmの円の内側の地域で採取していたものである（第440図）。

（４）鴨部・川田遺跡と石器生産

これまで述べたように鴨部・川田遺跡では多量の石器と剥片・砕片類が出土している。サヌカイトの剥片・砕片はＡ区～Ｄ区の全体で5279点，重量にして33865.6ｇが出土している。これに対してサヌカイト製の石器は294点，重量にして4606.1ｇである。重量による製品率は12％と少ない。このことは石器製作を集落内で行ったために剥片・砕片類が多くなっていると考えられる。鴨部・川田遺跡では23棟の住居跡を検出したが，このうちＡ区ＳＨ01とＤ区ＳＨ02からはサヌカイト片が集中して出土した。Ａ区ＳＨ01では付属する土坑ＳＫ01の５点を含めて71点，重量にして173.3ｇのサヌカイト片が出土している。加えて

石鏃の未製品と敲石が出土している。またD区ＳＨ02では409点，重量にして1149.8ｇのサヌカイト片が出土しており，さらに石鏃の未製品も出土している。両住居ともに剥片・砕片の割に製品が少ない。製品は集落の構成員で使用するために集落内に搬出したと思われ，両住居は集落内でサヌカイト製石器の製作を担当していた住居と考えられる。(第32表)

サヌカイトは主に坂出市の金山東産のものを使用している。この原産地から集落内には大形の素材剥片という形で搬入している。大形の素材剥片は４点（Ｃ884～Ｃ886・Ｃ1328）あり最大のものはＣ884で，30.4cm×29.2cm，厚さ4.6cm，重量は4000.0ｇである。製品率を先に述べたように12％とすると，この大形の素材剥片からは480ｇ分の製品が製作可能である。平均重量1.59ｇの石鏃なら301個，70ｇの打製石庖丁なら７個製作が可能なことになる。いずれの素材剥片も側縁部の一部に自然面を残しており，産地で原石を板

住居	製品	[3]	剥片・砕片	[5]
	点数	重量	点数	重量
A. SH01	4	356. 2	71	173. 3
A. SH02	0	0	0	0
A. SH03	0	0	0	0
A. SH04	0	0	0	0
A. SH05	0	0	0	0
A. SH06	0	0	2	4. 8
B. SH01	1	144. 7	9	53. 6
B. SH02	0	0	0	0
C. SH01	0	0	2	18. 5
C. SH02	1	7. 2	10	52. 0
C. SH03	3	33. 9	46	290. 4
C. SH04	0	0	5	55. 7
C. SH05	1	34. 8	0	0
C. SH06	1	1. 5	12	55. 8
C. SH07	0	0	0	0
C. SH08	0	0	4	71. 4
D. SH01	0	0	0	0
D. SH02	18	216. 2	409	1149. 8
D. SH03	0	0	0	0
D. SH04	1	5. 7	0	0
D. SH05	5	205. 7	98	783. 0
D. SH06	0	0	9	36. 4
D. SH07	0	0	7	294. 5

第32表　住居別サヌカイト出土数

状に分割したことが伺える。側縁部の鋭くなった部分には微細な調整や軽く敲打を加えているが，これはおそらく運搬するときに手を切らないようにするための配慮と思われる。そしてこの大形素材剥片を集落内でさらに小さな素材剥片に分割して各々の石器を製作したと考えられる。

サヌカイト製の石器以外に集落内で石器生産を行っているものに，流紋岩製の磨製石庖丁がある。磨製石庖丁は製品で53点，未製品で17点の合計70点が出土している。磨製石庖丁の製品のうちの42点（79%），未製品のうちの14点（82%）が流紋岩を使用している。その他に安山岩と結晶片岩を使用している。流紋岩製のものは遺跡内で原石，未製品，剥片・砕片，製品および製作・加工用の石錐・砥石が出土しており，その製作工程が復元出来る。製作工程は第一工程：原石採集・運搬，第二工程：粗割，第三工程：整形，第四工程：研磨・穿孔の四つの工程からなる。（第441図）

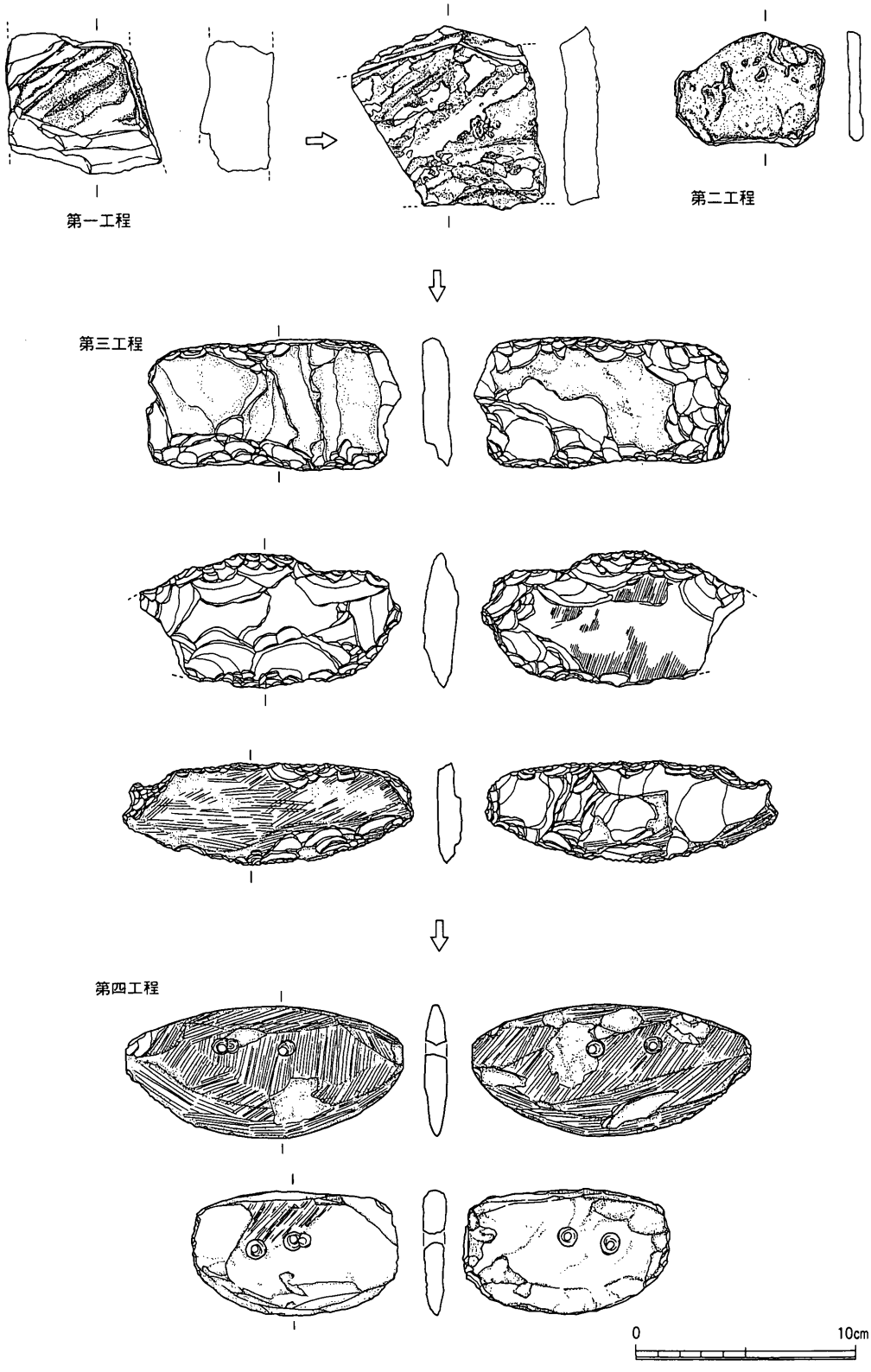
第一工程として原石の採取がある。石材となった流紋岩は鴨部・川田遺跡の南約３kmの寒川町と大川町の境にある金山産のものと考えられる。流紋岩は本来は灰色系統の原石であるが，遺跡内で出土した原石の大部分はやや風化して白っぽくなっている。現在でも金山で流紋岩が採取出来るが，露頭しているものはやはり風化して白っぽくなっている。この流紋岩の原石は10～15cm前後の角礫が多く，石理に沿って板状に割れやすくなっており，また比較的軟らかく加工・研磨が容易なため磨製石庖丁に適していたものと考えられる。この角礫の原石あるいは板状の剥片状で集落に搬入されている。

第二工程は粗割の段階である。原産地から原石を搬入した後に，石理に沿って長さ15cm前後，厚さ１cm前後の長方形の剥片を作り出す。

第三工程は第二工程で作り出した剥片に粗く調整を加えて石庖丁の形に近づけている。体部にはまだ凹凸が顕著であるが，中には部分的に研磨を施したり刃部を作りかけているものもある。

第四工程は研磨を施し刃部を作り出す最終工程である。紐穴の穿孔と体部の研磨の前後関係ははっきりとしないが，研磨以前の未製品に穿孔を施しかけたものがないことから，研磨を先に行いほぼ研磨と刃部を作り出した後に，紐穴の穿孔を行い最終的に穿孔部付近の研磨を行い完成したものと思われる。穿孔に必要な石錐は全体で24点出土しており，すべてがサヌカイト製である。

石庖丁製作時の小さな剥片や砕片は全体で233点とあまり多くない。このことは原石から素材の剥片が得やすく，また剥片の形が長方形ですでに石庖丁に近い形であったことに



第441図　磨製石包丁製作工程図（1／3）

よると考えられる。

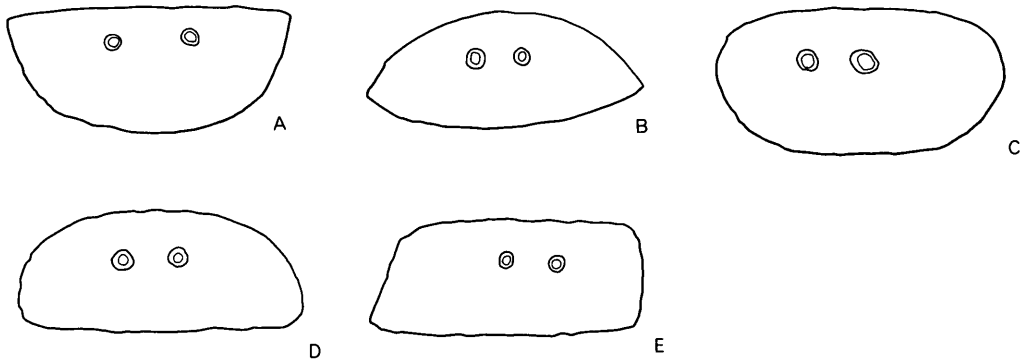
太型蛤刃石斧は（脈岩）安山岩を限定的に選択している。29点の製品あるいは製品の一部を確認した。このうち完形品が3点，刃部の破片7点，基部中央部分の破片9点，基端部が残るものが10点である。太型蛤刃石斧は伐採用の斧で，おそらく集落外で木材を伐採したりするのに使用されたものである。使用時に欠損したならば集落内に刃部の破片は少ないはずである。そして基端部はおそらく斧の柄についたまま集落内に持ち帰る可能性が高い。残存する部位は刃部，基部中央部，基端部はほぼ同じ割合になっている。これらのことから出土した破片は製作時のものの可能性が高い。しかし製品以外で（脈岩）安山岩は34点と少ない。原石を搬入して集落内で加工・製作するのではなく，ある程度の形を整えた段階の未製品を集落に持ち込み，微整形や研磨の最終工程のみを集落内で行ったのかもしれない。この点は遺跡出土の全遺物が判明した段階で明らかになろう。

次に結晶片岩製の石器であるが，主に太型蛤刃石斧以外の石斧類と磨製石庖丁の一部があり合計41点の製品がある。剥片・砕片類は92点，重量は1540.3gで重量による製品率は69%と高くなっている。太型蛤刃石斧と同様に製品あるいは製品に近い状態で集落に搬入したものと思われる。

以上のことから，鴨部・川田遺跡ではサヌカイトと流紋岩による石器については集落内で素材の搬入から生産まで行っており，（脈岩）安山岩と結晶片岩については製品あるいは製品に近い状態で搬入しているものと思われる。石斧類については集落内での生産は行っていないようである。しかし今回の分析は鴨部・川田遺跡でも環濠の外側部分についての資料を中心としているので，環濠の内部と環濠の残りの大部分についてはまだ不明である。集落が集約したような環濠の内部と環濠の分析により，環濠の外側部分と同じであるのかまたは異なるのかが判明するであろう。異なるとすればその要因が微細な時期的なものなのか，あるいは環濠の内側と外側では性格が異なるのかなど集落の構造を考えるうえでも興味深いものになる。

（5）磨製石庖丁の形態について

磨製石庖丁は収穫具として農耕技術とともにもたらされた大陸系磨製石器の主要なものである。この磨製石庖丁は53点が製品として出土しており，17点が未製品である。このうち形の判明するものについてその形態を分類しておく。このことは北部九州に伝来してからその拡散状況と形態変化を追うことにより，農耕社会の受容と展開が考えられる点で重要であるからである。



第442図　磨製石庖丁形態分類図

形態分類については大陸系磨製石器の研究を精力的に行っている下條信行の分類[9]に従う（第442図）。それによるとA型式～E型式に分類されている。A型式：背部が直線で刃部が湾曲するもの。外湾刃半月形。B型式：背部・刃部ともに湾曲し，背部と刃部の接点は尖る。杏仁形。C型式：弧背弧刃形で，背部と刃部の接点は丸い。楕円形。D型式：背部は湾曲し，刃部は直線になる。直線刃半月形。E型式：長方形であるが，側縁部は丸みをもったり斜めになる傾向がある。これらに今回はどの形状にもあてはまらないものとしてF型式を追加する。この分類により集計したものが第33表である。

型式	点数	%
A	13	19
B	14	20
C	9	13
D	11	15
E	13	19
F	3	4
不明	7	10

第33表　磨製石庖丁形態別出土数

鴨部・川田遺跡は弥生時代前期後半を中心とする遺跡であるが，この段階ですべての型式の磨製石庖丁が出現している。比率的にはほぼ同じ割合であり，刃部は両刃のものが圧倒的に多くなっている。また磨製石庖丁に加えて打製石庖丁も45点あり，磨製石庖丁との割合は３：２で磨製石庖丁のほうが多くなっている。

第７節　鴨部・川田遺跡出土の土器

（１）土器組成

鴨部・川田遺跡ではこれまで紹介してきたように多種・多量の土器が出土している。その大多数は弥生時代前期後半～終末にかけてのもので，これに少量の中期初頭の土器が加わる。また古墳時代以降の土器が微量あるがここでは除外する。すでに遺構の部分で述べたが前期後半～中期初頭の時期は，前期後半段階の環濠であるＣ区ＳＤ01を基準にして３段階に細分することが出来る。しかしこれは遺構の前後関係を主に考えたもので，詳細な土器の時期差に基づくものではない。また土器の様相は以下の項で述べるが，前期後半段階は概ね同じと考えられる。従ってここで土器組成を考えるにあたり，前期後半～中期初頭をまとめて報告することにする。

報告した遺物全体では壺・甕・鉢・蓋・甑・高杯の６器種とその他（土製紡錘車・土製円盤・用途不明土製品など）のものがある。調査区・器種別の集計は第34表に示した通りである。その構成比は壺が34％，甕が53％でこの両者で全体の85％を占めている。蓋は６％を占めているがこのうちの大部分は甕用の蓋である。高杯は全体で僅か４点であり，まだ主要な器種とはなっていない。

鴨部・川田遺跡の中心となる遺構である環濠・Ｃ区ＳＤ01に限ってみても，組成器種とその比率はＡ区～Ｄ区までの全体のものとほとんど同じである。従って前期後半から中期初頭までの器種組成は甕が全体の半分を占め，ついで壺がありこの２器種が主要器種となり，これに鉢・蓋・甑が少量伴うものと言える。

（２）分析の方法

鴨部・川田遺跡ではなるべく小さな破片でも図化を行い報告した。しかしこれに加えてどうしても図化に耐えれない細片についても，壺・甕の２器種に限り出土した全点を抽出して，壺は突帯の形状と条数，刻み目の種類，ヘラ描き沈線の施文部位と条数，各種文様

器種＼調査区	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	合計	割合(%)	器種＼調査区	Ｃ区ＳＤ01	割合(%)
壺	51	63	382	255	751	34	壺	279	35
甕	116	82	587	381	1166	53	甕	403	51
鉢	3	13	49	23	88	4	鉢	33	4
蓋	9	11	59	49	128	6	蓋	51	6
甑	0	2	30	11	43	2	甑	21	3
高杯	0	0	2	2	4	0	高杯	1	0
その他	0	1	7	7	15	1	その他	5	1

第34表　鴨部・川田遺跡出土土器（Ａ区～Ｄ区）の器種組成

突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	A区				未報告分	A区			
1	1(内面)			1	1	1(内面)		1	2
*1					*1		6	8	14
2			1	1	2		2		2
*2					*2	1(内面)	11	10	22
3					3			1	1
*3		1		1	*3		7	2	9
4					4				
*4					*4		1		1
5					5				
*5					*5				
6					6				
*6					*6				
7					7				
*7					*7				
8					8				
*8					*8				

第35表　壷の貼付突帯（1）

突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	B区				未報告分	B区			
1					1	4(内面)			4
*1		1		1	*1	3(内面)	10	29	42
2	1(内面)			1	2	2(内面)	1		3
*2		2		2	*2	4(内面)	21	25	50
3	1(内面)	1		2	3				
*3		1		1	*3	2(内面)	27	14	43
4		1(内		1	4				
*4					*4		17	2	19
5					5				
*5		1		1	*5		4	1	5
6					6				
*6					*6				
7					7				
*7					*7		1		1
8					8				
*8		1		1	*8			1	1

第36表　壷の貼付突帯（2）

突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	C SD01				未報告分	C SD01			
1	11(内面)	3	1	15	1	10(内面9)	7	25	42
*1		7	1	8	*1	7(内面6)	14	62	83
2	1(内面)	2	6	9	2	1(内面)		8	9
*2		2	1	3	*2	3(内面1)	25	33	61
3		3		3	3	1	1	2	4
*3			3	3	*3		13	19	32
4		1	1	2	4				
*4		1		1	*4		4	7	11
5		1		1	5				
*5		1		1	*5		3		3
6					6				
*6					*6				
7					7				
*7					*7				
8					8				
*8					*8				

第37表　壷の貼付突帯（3）

突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	C区・他				未報告分	C区・他			
1	1(内面)	1	2	4	1	11(内面10)	3	6	20
*1			1	1	*1	1(内面)	13	44	58
2		1	1	2	2	1(内面)			1
*2					*2		14	33	47
3		1		1	3		2		2
*3					*3		14	3	17
4					4				
*4		1		1	*4	1(内面)	3	1	5
5					5		1		1
*5					*5		1		1
6					6				
*6					*6		1		1
7					7				
*7					*7				
8					8				
*8					*8				

第38表　壷の貼付突帯（4）

突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	D区				未報告分	D区			
1	1(内面)	3	1	5	1	7(内面)	2	2	11
*1					*1	16(内面15)	28	76	120
2		3	4	7	2	2(内面)		2	4
*2		1		1	*2	7(内面5)	80	83	170
3		4	2	6	3		1	1	2
*3		3		3	*3	5(内面)	44	15	64
4		7		7	4				
*4		3		3	*4		13	3	16
5					5			1	1
*5		1	1	2	*5		4		4
6					6				
*6					*6		2		2
7					7				
*7					*7				
8					8				
*8					*8				

第39表　壷の貼付突帯（5）

突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	突帯条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	全体				未報告分	全体			
1	14(内面)	7	4	25	1	33(内面31)	12	34	79
*1		8	2	10	*1	27(内面25)	71	219	317
2	2(内面)	6	12	20	2	6(内面)	3	10	19
*2		5	1	6	*2	15(内面11)	151	184	350
3	1(内面)	9	2	12	3	1	4	4	9
*3		5	3	8	*3	7(内面)	105	53	165
4		9	1	10	4				
*4		5		5	*4	1(内面)	38	13	52
5		1		1	5		1	1	2
*5		3	1	4	*5		12	1	13
6					6				
*6					*6		3		3
7					7				
*7					*7		1		1
8					8				
*8		1		1	*8			1	1

第40表　壷の貼付突帯（6）

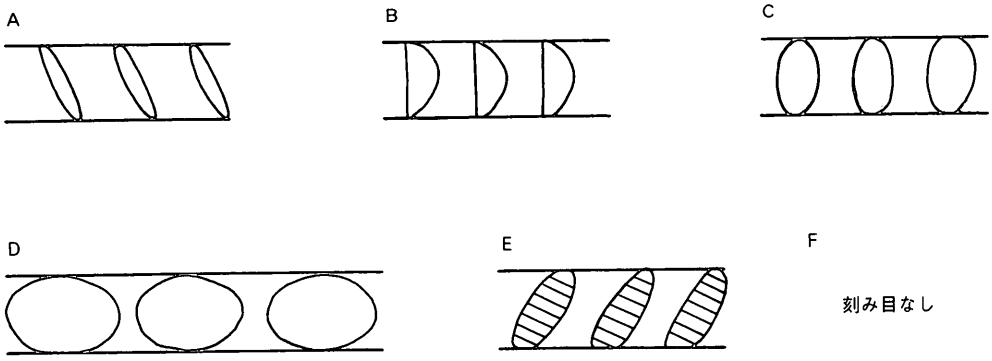
について資料化した。甕については口縁部の形態とヘラ描き沈線の条数，口縁部端部の刻み目の有無，各種文様について資料化した。そしてこれらの各要素を抽出・組み合わせて分析を行った。これら未報告の細片についてもすべて番号を付けて台帳登録を行い，番号を付けて収納している。

（3）壺の分析

鴨部・川田遺跡の本書に報告したＡ区～Ｄ区で，壺は総計751点報告している。しかしこの中には底部のみの破片から壺と考えたものが508点あり，確実に壺と断定できる口縁部～体部の資料は243点である。これに加えて図化出来なかった細片のうち，壺と判断出来たものは3118点ある。これら全体の中で，器形・突帯・沈線・文様などの各要素を中心に分析を行う。なお各表のなかの＊は現存数を示している。（第35表～第50表）

口縁部から頸部にかけての形態は以下の３つが多い。①口縁部は頸部から全体に外反して開き，口径が頸部径を大きく上回るもの，②内傾する頸部から短く開く口縁部，③突帯やヘラ描き沈線を施した発達した頸部から大きく開く口縁部。これに対して体部の形態には以下の３つが多い。①最大径がほぼ中央部にあるが上半部の肩は張らずに扁平気味なもの，②最大径が中央よりやや下部にあり下膨れで玉葱形になるもの，③最大径は小さく全体に長楕円形になるもの。

突帯は削出突帯と貼付突帯がある。削出突帯は報告分で38点，未報告分で188点を確認したが，大部分はＣ区ＳＤ01から出土している。削出突帯は幅広で突帯上にに沈線を３条程度施すものが多い。しかし中には突帯の上部は明瞭に削り出しているが，下部は僅かか



第443図　貼付突帯の刻み目の種類

刻み目種類＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	刻み目種類＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	A区				未報告分	A区			
A					A		1	1	2
B					B		2	1	3
C		1		1	C		1	1	2
D					D				
E					E				
F	1		1	2	F		12	7	19
不明					不明	1	9	12	22
報告分	B区				未報告分	B区			
A		1		1	A		5	7	12
B					B	1			1
C		4		4	C	1	5	9	15
D		1		1	D		3	6	9
E					E				
F	2	1		3	F	2	24	9	35
不明		2		2	不明	9	39	40	88
報告分	C SD01				未報告分	C SD01			
A	1	3	1	5	A		9	22	31
B					B	1	3	4	8
C		4	4	8	C		10	14	24
D	2	4	1	7	D	2	11	22	35
E		2	4	6	E		1	5	6
F	6	3	2	11	F	12	16	26	54
不明	1	3	1	5	不明	4	17	59	80

第41表　貼付突帯の刻み目（1）

刻み目種類＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	刻み目種類＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	C区・他				未報告分	C区・他			
A			1	1	A	2	5	13	20
B					B				
C					C		2	5	7
D			2	2	D		5	16	21
E					E			1	1
F			1	1	F	6	12	12	30
不明		1		1	不明	4	27	42	73
報告分	D区				未報告分	D区			
A		4	2	6	A	1	18	17	36
B		1		1	B	1	1	6	8
C		4	2	6	C	2	6	9	17
D			1	1	D		10	19	29
E					E		1	2	3
F		14	3	17	F	15	56	55	126
不明					不明	12	77	73	162
報告分	全体				未報告分	全体			
A	1	8	4	13	A	3	37	59	99
B		1		1	B	3	5	11	19
C		13	6	19	C	3	25	38	66
D	1	5	4	11	D	2	30	64	96
E		2	4	6	E		2	8	10
F	9	18	7	34	F	35	120	109	264
不明	1	6	1	8	不明	30	169	226	425

第42表　貼付突帯の刻み目（2）

沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	B区				未報告分	B区			
1					1			1	1
*1		2		2	*1		4	4	8
2					2			1	1
*2		1		1	*2		11	18	29
3		2	1	3	3			2	2
*3					*3	1	7	16	24
4		1		1	4		1	1	2
*4		1		1	*4		11	8	19
5					5			2	2
*5					*5		7	8	15
6			1	1	6			1	1
*6		1	2	3	*6		6	5	11
7					7			1	1
*7					*7		5	4	9
8					8				
*8					*8		5	5	10
9					9			1	1
*9					*9		3	6	9
10		1		1	10		3		3
*10					*10			1	1
11					11				
*11					*11		1		1
12		1	1	2	12		1		1
*12					*12		1		1
13～					13～		4		4

第43表　壷のヘラ描き沈線（1）

沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	A区				未報告分	A区			
1					1	4	1	1	6
*1					*1		1	2	3
2		1	1	2	2		1	1	2
*2					*2		6	3	9
3					3			2	2
*3					*3		5	4	9
4					4		1		1
*4					*4		6	1	7
5					5			1	1
*5		1	1	2	*5		1	4	5
6					6	1			1
*6					*6		4	3	7
7					7			1	1
*7		1		1	*7		5	1	6
8					8				
*8					*8		2		2
9					9				
*9					*9		1	1	2
10		1		1	10				
*10					*10		1		1
11					11				
*11					*11		1		1
12					12				
*12					*12				
13～					13～				

第44表　壷のヘラ描き沈線（2）

沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	C SD01				未報告分	C SD01			
1		4		4	1	1	7	11	19
*1		7		7	*1	1	18	49	68
2	2	10	3	15	2	1	7	18	26
*2		4		4	*2	2	28	110	140
3		10	8	18	3	1	9	42	52
*3		11		11	*3		33	88	121
4		10	10	20	4	1	11	36	48
*4		3	1	4	*4	1	21	56	78
5		4	4	8	5		6	15	21
*5		3	2	5	*5		25	44	69
6		6	4	10	6		1	13	14
*6		1		1	*6		7	28	35
7		4	2	6	7		4	4	8
*7					*7		11	7	18
8			1	1	8			5	5
*8		3		3	*8		2	9	11
9		1		1	9		1	2	3
*9		1		1	*9		1	2	3
10		1		1	10		1		1
*10					*10		3	5	8
11					11				
*11					*11			3	3
12					12				
*12		1		1	*12		1		1
13～		1		1	13～		2	1	3

第45表　壷のヘラ描き沈線（３）

沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	C区 他				未報告分	C区 他			
1					1	1		5	6
*1		2	1	3	*1	1	19	31	51
2		1		1	2		2	8	10
*2	1	2	2	5	*2		24	79	103
3		2	1	3	3		3	18	21
*3		1	1	2	*3		23	53	76
4		6	2	8	4		3	11	14
*4		1	2	3	*4		20	43	63
5		1	1	2	5		1	8	9
*5			1	1	*5		16	16	32
6		1		1	6			2	2
*6					*6		10	9	19
7			1	1	7		1	1	2
*7		2		2	*7		4	9	13
8					8		1	2	3
*8		1		1	*8		3	3	6
9					9			1	1
*9					*9		1	3	4
10					10				
*10					*10				
11					11				
*11					*11		2		2
12					12				
*12					*12				
13～					13～		3		3

第46表　壷のヘラ描き沈線（４）

沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	D区				未報告分	D区			
1			1	1	1		2	4	6
*1		2		2	*1		4	17	21
2		4	2	6	2		1		1
*2		5		5	*2	1	31	45	77
3		4		4	3		1	4	5
*3		1		1	*3		48	44	92
4	1	1		2	4		1	2	3
*4		2	1	3	*4	1	47	22	70
5	1	1	2	4	5		3	3	6
*5		3		3	*5	1	34	14	49
6		2	3	5	6		3	4	7
*6		2		2	*6		36	16	52
7		1	1	2	7		1	1	2
*7		1		1	*7		24	10	34
8		2		2	8			1	1
*8		2		2	*8		11	4	15
9		3		3	9		3		3
*9		2	2	4	*9		11	4	15
10		1		1	10		1	2	3
*10					*10		11	3	14
11					11				
*11					*11		4		4
12		1		1	12		1		1
*12					*12		5	1	6
13～		4	1	5	13～		4	1	5

第47表　壷のヘラ描き沈線（5）

沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計	沈線条数＼部位	口縁部	頸部	体部	合計
報告分	全体				未報告分	全体			
1		4	1	5	1	6	10	22	38
*1		13	1	14	*1	2	46	103	151
2	2	16	6	24	2	1	11	28	40
*2	1	12	2	15	*2	3	100	255	358
3		18	10	28	3	1	13	68	82
*3		13	1	14	*3	1	116	205	322
4	1	18	12	31	4	1	17	50	68
*4		7	4	11	*4	2	105	130	237
5	1	6	8	15	5		10	29	39
*5		7	4	11	*5	1	83	86	170
6		9	8	17	6	1	4	20	25
*6		4	2	6	*6		63	61	124
7		5	4	9	7		6	8	14
*7		4		4	*7		49	31	80
8		2	1	3	8		1	8	9
*8		6		6	*8		23	21	44
9		4		4	9		4	4	8
*9		3	2	5	*9		17	16	33
10		4		4	10		5	2	7
*10					*10		15	9	24
11					11				
*11					*11		8	3	11
12		2	1	3	12		2		2
*12		1		1	*12		7	1	8
13～		5	1	6	13～		13	2	15

第48表　壷のヘラ描き沈線（6）

文様＼調査区	A区	B区	C区	D区	合計	文様＼調査区	C区SD01
報告分							
棒状浮文		4		8	12	棒状浮文	
円形浮文			3		3	円形浮文	
竹管文		1	2	7	10	竹管文	2
列点文1(その他)	1	1	3	1	6	列点文1(その他)	2
列点文2(三角形)		1	3	9	13	列点文2(三角形)	1
ヘラ描き波状文			1	1	2	ヘラ描き波状文	
連弧文	1	1		1	3	連弧文	
口縁部内面の貼付突帯	1		3	11	15	口縁部内面の貼付突帯	3
半截竹管文				3	3	半截竹管文	
山形文		1	1	3	5	山形文	1
扇状文				1	1	扇状文	
未報告分							
棒状浮文	3	32	10	34	79	棒状浮文	3
円形浮文			3	1	4	円形浮文	
竹管文		1	24	13	38	竹管文	13
列点文1(その他)			13	9	22	列点文1(その他)	6
列点文2(三角形)	6	13	26	23	68	列点文2(三角形)	15
ヘラ描き波状文						ヘラ描き波状文	
連弧文			3		3	連弧文	2
口縁部内面の貼付突帯	4	9	11	22	46	口縁部内面の貼付突帯	6
半截竹管文			1	1	2	半截竹管文	
山形文	1	2	16	3	22	山形文	11
扇状文						扇状文	

第49表　壺の各種文様

削り出していないものもあり，単なるヘラ描き沈線と混同しやすいものも含まれている。いずれにしても削出突帯は量的には少ないものである。

貼付突帯は口縁部・頸部・体部に施されている。口縁部に施されるものは大部分が口縁部の内面に施されるものである。頸部に施されるものは１条から現存で５条までの間である。１条のものは頸部から口縁部にかけてが短く，頸部と体部の境部分に施されるものが多い。２条のものは１条の幅広の粘土紐の中央に溝を入れて２条に仕上げる複条貼付突帯が多い。３条以上のものは先に述べた発達した頸部を持つものである。体部に施された貼付突帯も頸部の様相と同じである。しかし体部に１条のものは少ない。そして頸部に３条以上の貼付突帯をもつものは，体部にも３条以上の貼付突帯を持つものが多い。

貼付突帯には刻み目を施すものと施さないものがある。報告したもので刻み目を施すものと施さないものの割合は50点：34点であるが，未報告分では290点：264点，全体で340点：298点と刻み目を施す方がやや多い。また摩滅して刻み目の有無が不明のものが報告分で８点，未報告分で425点ある。刻み目の種類にはＡ：縦長で幅の狭いもの，Ｂ：片側

が弧を描くD字形のもの，C：円形に近いもの，D：楕円形で指か棒の先で押圧したもの，E：布巻き棒の圧痕によるもの，の５種類がある（第443図）。そして刻み目のないものをFとした。刻み目の種類ではA，C，Dが多くBとEが少なくなっている。

ヘラ描き沈線も貼付突帯と同様に口縁部・頸部・体部に施されているが，口縁部に施されるものは少ない。頸部・口縁部ともに２条から６条にかけて多く分布するが，４条前後にピークがある。頸部で最も多条のものは20条，体部で最も多条のものは15条である。頸部では下半から体部との境部分に，体部では最大径部分からその少し上にかけての部分に多く施されている。

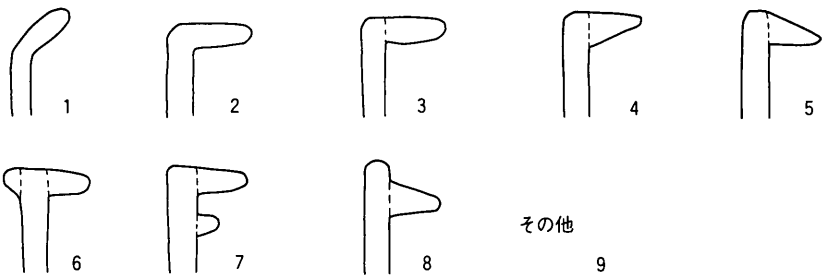
文様では棒状浮文，円形浮文，竹管文，三角形列点文，その他の列点文，ヘラ描き波状文，連弧文，口縁部内面の貼付突帯文，半截竹管文，山形文，扇状文の11種類がある。これらのうちの棒状浮文，竹管文，三角形列点文，口縁部内面の貼付突帯文が多用されており，次いでその他の列点文，山形文が多くなっている。

最後に櫛描文であるが，壺に櫛描文が施される段階を弥生時代中期とするならば，櫛描文のある壺の量が弥生時代中期の遺構・遺物の目安となる。第36表のように報告分で26点で全体の３％，未報告分で69点で全体の２％と微量であり，鴨部・川田遺跡では中期初頭にはまだ集落は存続しているが，衰退の一途をたどっていたことがわかる。

以上のうちで削出突帯：貼付突帯：ヘラ描き沈線：櫛描文の比率をみると，報告分で38点：96点：216点：26点＝10％：26％：57％：７％である。未報告分では188点：1009点：1904点：69点＝６％：32％：60％：２％である。C区ＳＤ01に限ると報告分で26点：42

施文＼調査区	A区	B区	C区	D区	合計	施文＼調査区	C区ＳＤ01
報告分						報告分	
削出突帯			33	5	38	削出突帯	26
貼付突帯	3	10	51	32	96	貼付突帯	42
ヘラ描き沈線	5	15	142	54	216	ヘラ描き沈線	112
櫛描文	4	1	11	10	26	櫛描文	6
未報告分						未報告分	
削出突帯	3	3	163	19	188	削出突帯	96
貼付突帯	51	167	397	394	1009	貼付突帯	241
ヘラ描き沈線	66	156	1190	492	1904	ヘラ描き沈線	753
櫛描文	7	11	29	22	69	櫛描文	12

第50表　壺の主な施文



第444図　甕の口縁部形態

点：112点：６点＝14％：23％：60％：３％である。また未報告分では96点：241点：753点：12点＝９％：22％：68％：１％である。この結果によるとヘラ描き沈線による施文が最も多く，次いで貼付突帯となっている。削出突帯と櫛描文は微量である。

（４）甕の分析

鴨部・川田遺跡の本書に報告したＡ区～Ｄ区で，甕は総計1166点報告している。しかしこの中には底部のみの破片から壺と考えたものが319点あり，確実に甕と断定できる口縁部～体部の資料は847点である。これに加えて図化出来なかった細片のうち，甕と判断出来たものは6894点ある。これら全体の中で，器形・沈線・文様などの各要素を中心に分析を行う。なお各表のなかの＊は現存数を示している。（第51表～第63表）

甕については口縁部にその特徴がよく表れるため，１～９の形態に分類（第444図）してその数量を集計した。口縁部の形態は１：如意形口縁，２：口縁部を真横に折り曲げるもの，３：逆Ｌ字形口縁で断面が方形に近く端部は真横を向くもの，４：逆Ｌ字形口縁で端部が先細りで真横あるいはやや上を向くもの，５：逆Ｌ字形口縁で上面は傾斜しており，端部は先細りで下方を向くもの，６：内・外面に粘土を加えてＴ字形になるもの，７：逆Ｌ字形口縁の少し下に突帯を貼り巡らせるもの，８：口縁部端部の少し下に突帯を１条貼り巡らせるもの，９：その他。この中で逆Ｌ字形口縁としたものは口縁部上端部の外側に粘土を貼り逆Ｌ字形に仕上げたもので，粘土を加えた部分も含めた一連のものを逆Ｌ字形口縁と呼び，この場合の口縁部端部とは粘土を加えて逆Ｌ字形に外に突出させた部分の端部を指している。

口縁部が欠損して形態が不明なものを除いて集計した結果，報告分では形態１の如意形口縁が185点と23％を占めている。形態３が226点の27％と最も多く，次いで形態５が214点の26％と多くなっている。形態３～５の逆Ｌ字形口縁全体では532点で65％である。未報告

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
報告分	A区										
0	2	1	3		10	2					18
1					1						1
*1											
2											
*2			1								1
3	1										1
*3					1						1
4					1						1
*4			1		1						2
5		1			1						2
*5											
6		1	1		3						5
*6	1			1					1		3
7	1		2		1						4
*7	1		1								2
8			3								3
*8			1		2						3
9										1	1
*9											
10				1	1						2
*10					1						1
11				1							1
*11		1	1								2
12					1						1
*12											
13			2	1							3
*13											
14			1								1
*14											
15											
*15											
16					1						1
*16											
17											
*17											
18											
*18											
19											
*19											
20											
*20											
21～											
櫛描文											
不明			1	1			1				3
合計	6	4	18	5	25	2	1	0	1	1	63

第51表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（1）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
未報告	A区										
0	15	10	19	19	6	2		1	2	1	75
1											
*1			4	6	3					7	20
2											
*2			5	4	3			1		14	27
3										1	1
*3				1	2					31	34
4					1					3	4
*4			4							28	32
5											
*5			4	1	1					22	28
6										2	2
*6			3		1					28	32
7	1									1	2
*7	1		1							23	25
8		1								1	2
*8			2		1					14	17
9										1	1
*9					1					1	2
10											
*10										4	4
11										2	2
*11					1					2	3
12											
*12				1						3	4
13			1								1
*13										1	1
14											
*14											
15										1	1
*15										1	1
16											
*16											
17											
*17											
18											
*18											
19											
*19											
20											
*20											
21～											
櫛描文			3	1						9	13
不明	1	1	25	27	13		2			5	74
合計	18	12	71	60	33	2	2	2	2	206	408

第52表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（2）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
報告分	B区										
0	7	1	4	3	5						20
1											
*1											
2				2	1						3
*2											
3											
*3				1	1						2
4											
*4											
5		1									1
*5											
6			1		1						2
*6					1						1
7	1										1
*7											
8											
*8			1								1
9					2						2
*9			1								1
10								1			1
*10			1	1							2
11					1						1
*11											
12			1		4					1	6
*12											
13					1						1
*13											
14											
*14											
15											
*15											
16											
*16											
17											
*17											
18											
*18											
19											
*19											
20											
*20											
21～											
櫛描文			3	2	2					1	8
不明		4	1	3	6			1			15
合計	8	6	13	12	25	0	0	2	0	2	68

第53表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（3）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
未報告分	B区										
0	27	6	64	34	16			1		2	150
1	2			1							3
*1	1	1	7	4				1		5	19
2	1										1
*2	2	1	9	2	6				1	9	30
3	1		3								4
*3			6	1	3					34	44
4	1									1	2
*4			7	2	2					22	33
5			1							1	2
*5	1		6	4	2			1		25	39
6			1	1	1					1	4
*6			10	2						25	37
7		1									1
*7	1		3		2					27	33
8	1									1	2
*8			2		2					13	17
9			2		1						3
*9			6		1					9	16
10										1	1
*10			1	1	1					8	11
11											
*11			1							5	6
12										2	2
*12			2							4	6
13										1	1
*13			1		1					1	3
14										1	1
*14										1	1
15											
*15											
16											
*16					1						1
17											
*17			1							1	2
18											
*18											
19											
*19											
20											
*20											
21～											
櫛描文		1	1							8	10
不明	4	3	57	39	11					4	118
合計	42	13	191	91	50	0	0	3	1	212	603

第54表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（4）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
報告分	C区	SD01									
0	12	5	7	4	12			1	3		44
1											
*1											
2	9	1	1		1				1		13
*2											
3	15	2	6		3			1			27
*3											
4	16	2	9	2	6			2		1	38
*4	1			2							3
5	2	1	12	1	10	1	1		1		29
*5			1	1	2						4
6	5		19	3	6			1	3		37
*6			1		1						2
7	2	2	12	2	10				2		30
*7			1								1
8			13	2	4				1		20
*8			3	1	1						5
9	1	1	7	4	4						17
*9					1						1
10			7	2	6					1	16
*10					1				1		2
11		1	3	1	1					1	7
*11					1						1
12	1	2	1	1	2				1		8
*12	1										1
13	1		5	1							7
*13			1								1
14											
*14											
15			2								2
*15											
16			1		2						3
*16											
17				1	1						2
*17											
18											
*18											
19											
*19											
20			1								1
*20											
21～			1								1
櫛描文			1		2						3
不明	4		3	1	1						9
合計	70	17	118	29	78	1	1	5	13	3	335

第55表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（5）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
未報告分	C区	SD01									
0	80	23	125	59	26	2		8	4	7	334
1	1										1
*1	10		12		3					34	59
2	20	2	3		1			1		3	30
*2	10	1	20	4	6			2		76	119
3	21	2	9		1				1	10	44
*3	9	4	27	1	9					90	140
4	12	1	15	1	3				1	14	47
*4	7		24	3	9					87	130
5	1	1	14	1	2			1		4	24
*5	4	1	27	6	8	1		1		74	122
6	4		12		1	1		1	2	14	35
*6	1	1	17	2	9					52	82
7	1	1	11	1	4				1	4	23
*7		1	21	5	2				1	40	70
8	2		9	1	5				1	11	29
*8			8	1	6					27	42
9			10	1	1				1	4	17
*9		1	5	1	5					19	31
10			1	1	1					6	9
*10		2	4		1					9	16
11			3							3	6
*11			2		1					5	8
12			2		1						3
*12			3							6	9
13										1	1
*13										1	1
14											
*14										1	1
15			2								2
*15										2	2
16											
*16										3	3
17											
*17											
18											
*18											
19											
*19											
20											
*20											
21～											
櫛描文			2		2					8	12
不明	18	2	56	14	7	1				5	103
合計	201	43	444	102	114	5	0	14	12	620	1555

第56表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（6）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
報告分	C区	他									
0	16	1	5	3	2		1	1	1	1	31
1	1										1
*1											
2	6	1					1				8
*2					1						1
3	16	1	4						1		22
*3											
4	12	3	9		2				1		27
*4								1			1
5	4	2	1	2	4						13
*5											
6	1		1		2			3			7
*6		1	1								2
7			1		1						2
*7				1							1
8			2								2
*8		1									1
9		1								1	2
*9											
10		1		2							3
*10											
11					1						1
*11											
12			1								1
*12											
13			1								1
*13					1						1
14											
*14											
15											
*15											
16											
*16											
17											
*17											
18											
*18											
19											
*19											
20											
*20											
21～											
櫛描文			1							1	2
不明	4	2	2	1	1				1		11
合計	60	14	29	9	15	0	2	5	4	3	141

第57表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（7）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
未報告分	C区	他									
0	138	23	80	44	22	2	1	6	2	3	321
1	7	1								1	9
*1	20	1	13	5	1			2		24	66
2	14	3	4							9	30
*2	21	3	19	7	7					59	116
3	13	4	9	2	4					12	44
*3	11		19	4	7			3	1	70	115
4	18	2	23		3			2		17	65
*4	5	2	24	4	4	1		2	2	69	113
5	6	2	9		6					5	28
*5	4	1	12	1	3					47	68
6	3	1	1							1	6
*6	1	1	10	3	3				1	42	61
7			2	1				1		2	6
*7	2		7	4						24	37
8	2		1		2					1	6
*8			4	1	1				1	15	22
9			1	2						1	4
*9	1	1	2							9	13
10		1								2	3
*10										10	10
11			1							1	2
*11			2		1					3	6
12				2							2
*12									1	4	5
13											
*13										1	1
14											
*14			1							2	3
15											
*15										1	1
16											
*16			1								1
17											
*17											
18											
*18											
19											
*19					1						1
20											
*20											
21～											
櫛描文			8	2	1					26	37
不明	22	6	89	38	6	1		1		9	172
合計	288	52	342	120	72	4	1	17	8	470	1374

第58表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（8）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
報告分	D区										
0	16	5	9	8	12		1		1	2	54
1			1								1
*1			1	1				1			3
2	3		1								4
*2			1		1					1	3
3	3		3		1		1			1	9
*3	1		1								2
4				1							1
*4			1		2						3
5	1			1	3						5
*5	1		1		1			1		1	5
6	1	1	5	1	2						10
*6		1			4						5
7				1	3						4
*7		1	1	2	2						6
8	2	2	5	4	5	1					19
*8	2		1		4			2			9
9			1	2	6				1	1	11
*9		1			3						4
10	1		6	1	5				1	1	15
*10	2		2							1	5
11				2	1					1	4
*11	1		1						1		3
12	1			3	4					2	10
*12										1	1
13				4	3	2					9
*13			1	1							2
14			1		2						3
*14				1	1					1	3
15			2	1	1				1		5
*15											
16					2					1	3
*16											
17											
*17											
18											
*18											
19			1								1
*19											
20											
*20											
21～											
櫛描文	5	1	2	3	3				1	2	17
不明	1										1
合計	41	12	48	37	71	3	2	4	6	16	240

第59表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（9）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
未報告分	D区										
0	130	41	229	155	66	8		4	9	11	653
1	1			1						2	4
*1	10	1	34	9	8			1	1	31	95
2	5		1							2	8
*2	8	5	41	13	16			1	1	125	210
3	4		4	1						1	10
*3	9	1	41	11	12	1		1		168	244
4	1	1	4		2					7	15
*4	3	1	47	17	16			2	1	183	270
5			2		2				1	4	9
*5	7	2	33	9	9					169	229
6	2		3	1						4	10
*6	4	2	23	10	5			1		143	188
7	3	1	2	2	1					6	15
*7	2	1	17	3	10				1	108	142
8	4		5	2	1					3	15
*8		1	12	1	13				1	80	108
9	1		2	1						4	8
*9	1		9							59	69
10			3		2					5	10
*10	1		2		1					38	42
11										2	2
*11	1		2	1	1					30	35
12			2							1	3
*12				1	1					12	14
13										1	1
*13		1	3							11	15
14										1	1
*14										7	7
15										2	2
*15										4	4
16											
*16											
17											
*17										1	1
18											
*18											
19										1	1
*19											
20											
*20											
21～											
櫛描文	10	3	16	4		1			1	67	102
不明	23	17	188	141	22		2		1	18	412
合計	230	78	725	383	188	10	2	10	17	1311	2954

第60表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（10）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
報告分	全体										
0	53	13	28	18	41	2	2	2	5	3	167
1	1		1		1						3
*1			1	1				1			3
2	18	2	2	2	2		1		1		28
*2			2		2					1	5
3	35	3	13		4		1	1	1	1	59
*3	1		1	1	2						5
4	28	5	18	3	9			2	1	1	67
*4	1		2	2	3			1			9
5	7	5	13	4	18	1	1		1		50
*5	1		2	1	3			1		1	9
6	7	2	27	4	14			4	3		61
*6	1	2	2	1	6				1		13
7	4	2	15	3	15				2		41
*7	1	1	3	3	2						10
8	2	2	23	6	9	1			1		44
*8	2	1	6	1	7			2			19
9	1	2	8	6	12				1	3	33
*9		1	1		4						6
10	1	1	13	6	12			1	1	2	37
*10	2		3	1	2				1	1	10
11		1	3	4	4					2	14
*11	1	1	2		1				1		6
12	2	2	3	4	11				1	3	26
*12	1									1	2
13	1		8	6	4	2					21
*13			2	1	1						4
14			2	0	2						4
*14				1	1					1	3
15			4	1	1				1		7
*15											
16			1		5					1	7
*16					0						
17				1	1						2
*17											
18											
*18											
19			1								1
*19											
20			1								1
*20											
21～			1								1
櫛描文	5	1	7	5	7				1	4	30
不明	9	6	7	6	8		1	1	1		39
合計	185	53	226	92	214	6	6	16	24	25	847

第61表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（11）

沈線条数＼口縁部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	合計
未報告分	全体										
0	390	103	517	311	136	14	1	20	17	24	1533
1	11	1		2						3	17
*1	41	3	70	24	15			4	1	101	259
2	40	5	8		1			1		14	69
*2	41	10	94	30	38			4	2	283	502
3	39	6	25	3	5				1	24	103
*3	29	5	93	18	33	1		4	1	393	577
4	32	4	42	1	9			2	1	42	133
*4	15	3	106	26	31	1		4	3	389	578
5	7	3	26	1	10			1	1	14	63
*5	16	4	82	21	23	1		2		337	486
6	9	1	17	2	2	1		1	2	22	57
*6	6	4	63	17	18			1	1	290	400
7	5	3	15	4	5			1	1	13	47
*7	6	2	49	12	14				2	222	307
8	9	1	15	3	8				1	17	54
*8		1	28	3	23				2	149	206
9	1		15	4	2				1	10	33
*9	2	2	22	1	7					97	131
10		1	4	1	3					14	23
*10	1	2	7	1	3					69	83
11			4							8	12
*11	1		7	1	4					45	58
12			4	2	1					3	10
*12			5	2	1				1	29	38
13			1							3	4
*13		1	4		1					15	21
14										2	2
*14			1							11	12
15			2							3	5
*15										8	8
16										0	0
*16			1		1					3	5
17										0	0
*17			1							2	3
18										0	0
*18										0	0
19										1	1
*19					1					0	1
20										0	0
*20										0	0
21～										0	0
櫛描文	10	4	30	7	3	1			1	118	174
不明	68	29	415	259	59	2	4	1	1	41	879
合計	779	198	1773	756	457	21	5	46	40	2819	6894

第62表　甕の口縁部形態とヘラ描き沈線（12）

分では形態１の如意形口縁が779点で19％である。未報告分でも形態３が1773点で44％と最も多い。形態３～５の逆Ｌ字形口縁全体では2986点で73％となっている。報告・未報告あわせたＡ区～Ｄ区の全体では形態１の如意形口縁が964点で20％，形態３が1999点で41％と最も多く，形態３～５の逆Ｌ字形口縁全体では3518点で72％である。Ｃ区ＳＤ01に限ってみると，形態１の如意形口縁が報告分で70点の21％，未報告分で201点の21％である。形態３は報告分で118点の36％，未報告分で444点の47％である。形態３～５の逆Ｌ字形口縁全体では報告分で225点の68％，未報告分で660点の71％である。報告分と未報告分を合わせたＣ区ＳＤ01全体では形態１の如意形口縁が271点の21％，形態３が562点の44％，形態３～５の逆Ｌ字形口縁全体では885点の70％となっている。これらのことから鴨部・川田遺跡の甕はいずれの場合でも同じような比率を示しており，形態１の如意形口縁が21％，形態３～５の逆Ｌ字形口縁が71％前後となり，逆Ｌ字形口縁の比率が高いことがわかる。

また甕で口縁部端部に刻み目を施しているものは報告分で406点，未報告分で1254点，両者併せて1660点である。これに対して刻み目を施さないものは報告分で359点，未報告分で1315点，両者併せて1674点である。全体で刻み目を施すものと施さないものの比率は1660点：1674点で同数と言える。

体部では全体が判明しているものが少ないが，体部上半部で緩く内湾するものが多い。そして体部最大径は口径と同じくらいか少し小さいくらいのものが多い。底部は小さめで突出気味のものが多い。

甕は口縁部の少し下部から体部上半部にかけてヘラ描き沈線を施すことが多く，このヘラ描き沈線について集計を行った。ヘラ描き沈線を施さない無文のものは，報告分で167点で21％，未報告分で1533点で26％である。無文の甕は口縁部形態１と３に多くなっている。１条～３条のもの（＊３は含まない）は報告分で98点で13％，未報告分で950点で16％となっている。このことから甕のヘラ描き沈線は４条以上が多く，４条～10条までの間に集中している。最も多条のものは21条である。Ｃ区ＳＤ01では無文の甕が報告分で44点で14％，未報告分は334点で23％である。また１条～３条のもの（＊３は含まない）は報告分で40点で12％，未報告分で253点で18％となっている。全体と似たような比率である。

櫛描文を施すものは報告分で30点と報告した甕全体の４％にあたる。また未報告分では174点で未報告甕全体の３％である。Ｃ区ＳＤ01でも報告分で３点，未報告分で12点と微量である。壺と同様に櫛描文は鴨部・川田遺跡ではまだ主流になっていない。

甕に施された文様にはヘラ描き沈線以外には，三角形列点文，その他の列点文，円形浮

文様＼調査区	A区	B区	C区	D区	合計	文様＼調査区	C区SD01
報告分							
列点文１（その他）	1	1	8	10	20	列点文１（その他）	7
列点文２（三角形）	0	2	9	19	30	列点文２（三角形）	6
円形浮文	1	0	5	1	7	円形浮文	4
半截竹管文	0	0	6	5	11	半截竹管文	6
山形文	0	0	11	7	18	山形文	10
櫛描直線文	0	9	5	19	33	櫛描直線文	3
櫛描波状文	0	6	1	5	12	櫛描波状文	1
未報告分							
列点文１（その他）	3	6	25	37	71	列点文１（その他）	10
列点文２（三角形）	16	20	58	124	218	列点文２（三角形）	29
円形浮文	2	2	2	8	14	円形浮文	0
半截竹管文	0	1	4	0	5	半截竹管文	4
山形文	2	8	20	25	55	山形文	13
櫛描直線文	12	10	49	101	172	櫛描直線文	12
櫛描波状文	4	2	5	12	23	櫛描波状文	2

第63表　甕の各種文様

文，半截竹管文，山形文，櫛描直線文，櫛描波状文の７種類がある。櫛描文以外では三角形列点文が最も多く施されている。三角形列点文およびその他の列点文はヘラ描き沈線文帯の下部に施されることが多く，この場合のヘラ描き沈線は多くの場合多条になっている。また２つのヘラ描き沈線文帯の間に半截竹管あるいはヘラ描きによる山形文が配されることもある。

（５）鴨部・川田遺跡出土の弥生時代前期後半～中期初頭の土器

これまでの分析の結果から簡単に鴨部・川田遺跡の平成２年度に調査を行ったＡ区～Ｄ区の土器のまとめを行っておきたい。

土器の組成は壺・甕が主となり，量的には甕のほうが多い。他に鉢・蓋があり，高杯は微量である。また壺の中には無頸壺も少量ながらある。

壺は退化した削出突帯が少量見られるものの，主体はヘラ描き沈線と貼付突帯である。段をもつものは３点確認したが，基本的には消滅している。貼付突帯は１条～５条のものが大部分で多条化している。中には数条を１回で貼り付けた複条貼付突帯も見られる。ヘラ描き沈線も２条～６条のものが多く，貼付突帯と同様にに多条化している。また口縁部内面に突帯を貼り付けて装飾するものや，棒状浮文・竹管文・三角形列点文などで飾るものが見られるようになる。

甕は主に形態１とした如意形口縁と形態３～５の逆Ｌ字形口縁をもつものが大部分であ

る。その比率は前者が全体の21％，後者が全体の71％と逆Ｌ字形口縁が主体となっている。口縁部端部に刻み目を施すものは全体の半数ある。ヘラ描き沈線は４条以上のものが多く，４条～10条の間に多くは分布している。中には10条以上のものも少なからずあり，全体に多条化しており，櫛描文に近いものもある。また実際に櫛描文もあり，櫛描文の発生前後の様相を示している。しかしこれに対して無文の甕も全体の25％前後あり，中には粗いハケ目で調整を施したものもあり，中期まで下る可能性のあるものも含まれており，注意を要する。他に三角形列点文を併用するものと，半截竹管により文様を施すものもある。

以上のことから，鴨部・川田遺跡のＡ区～Ｄ区の土器は弥生時代前期後半でもより後半段階のものが主体といえる。このことは全体の分析結果と鴨部・川田遺跡の中心となる環濠のＣ区ＳＤ01の土器の分析結果とが同じような結果を示すことも裏付けとなろう。

最後に櫛描文について少し触れておきたい。鴨部・川田遺跡には櫛描文を施した壺と甕が少量ある。遺構の変遷の中で，環濠であるＣ区ＳＤ01の埋没直後の段階を中期初頭と考えた。その段階の遺構には櫛描文を施した壺が出土している。壺に櫛描文が施される場合は直線文に加えて波状文が施されることが多い。これに対して甕では櫛描文を施す場合，直線文だけのものが多々ある。櫛描文の発生についてはヘラ描き沈線の多条化からの発生と言われている。鴨部・川田遺跡の場合，甕には確かにヘラ描き沈線が10条以上で中には20条近くに及ぶものもあり，ここから櫛描直線文の発生を考えることは容易である。半截竹管文もいわば２条の櫛描文と原理は同じであり，半截竹管文が甕に施される例があることも一因となった可能性もある。しかし壺の場合，鴨部・川田遺跡では10条を超えるようなヘラ描き沈線をもつものは甕に比べて非常に少ない。つまり壺は甕に比べると少条で，労力的にもヘラ描きより櫛描きのほうが圧倒的に早いということは少ない。加えて壺には貼付突帯という施文も多用される。従って櫛描文は甕における直線文を施文する際の省力化という要求から成立した可能性が高く，それが壺にも一段階遅れて採用されたのではないかと思われる。本書ではこれらのことから，壺と甕の両者に櫛描文が施される段階を弥生時代中期と考え，甕のみに櫛描直線文が施されている段階は前期末と考える。このことから遺構の時期判定には櫛描文のある壺を中期の指標とした。また見通しではあるが甕で櫛描波状文の施されたものは中期に下る可能性が高いものと考える。

註

（1）石神幸子・陣内暢子編『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』財団法人大阪文化財センター 1991

（2）中間研二「松菊里型住居」『東アジアの考古と歴史　中』1987

（3）錦田剛志「弥生時代の鳥形木製品」『古代文化研究』第1号　島根県古代文化センター　1993

（4）金関恕「神を招く鳥」『考古学論考』1982

（5）森　格也「前田東・中村遺跡出土の木製模造品をめぐる二，三の問題　―斎串を中心に―」『前田東・中村遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1995

（6）中井一夫・松田真一『和爾・森本遺跡』奈良県立橿原考古学研究所編　1983
しかし最近の泉武の論文「律令祭祀論の一視点」『道教と東アジア　―中国・朝鮮・日本』1989　では群馬県前橋市元総社明神遺跡出土の5世紀末の斎串を最古例としている。

（7）黒崎　直「斎串考」『古代研究』10号　1976

（8）金子裕之「水辺の祭祀　―律令期―」『水辺の祭祀』日本考古学協会三重県実行委員会　1996

（9）下條信行『弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究』平成5年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書　1994

(10) このことは藤好史郎・宮崎哲治がすでに指摘している。
藤好史郎『中の池遺跡発掘調査概要』丸亀市教育委員会　1982
宮崎哲治「香川における弥生前期土器の様相」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅲ』1995

挿図・表引用文献

第1節

渡辺昌宏編『美園』（財）大阪文化財センター　1985

出原恵三他『田村遺跡群　第2分冊』高知県教育委員会　1986

平井泰男編『南溝手遺跡1』岡山県教育委員会　1995

長嶺正秀・末永弥義他『下稗田遺跡』行橋市教育委員会　1985

宮小路賀宏・片岡宏二『三沢蓬ケ浦遺跡』福岡県教育委員会　1984
葉杖哲也「岡の段Ａ地点遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』（財）広島県埋蔵文化財調査センター　1993
西岡達哉・岡田静明『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第七冊　一の谷遺跡群』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1990
宮崎哲治『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二十三冊　龍川五条遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1996
森下英治「五条遺跡」『香川県埋蔵文化財発掘調査報告　―平成５年度香川県土木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集―』香川県教育委員会　1994
藤好史郎・西村尋文・大久保徹也『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1990
栗田茂敏「文京遺跡第４次調査」『道後城北遺跡群』（財）松山市生涯学習信仰財団埋蔵文化財センター　1992
平井勝他『百間川沢田遺跡３』岡山県教育委員会　1993
梅本健治他「岡の段Ｃ地点遺跡（1989年度）の調査」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ）』（財）広島県埋蔵文化財調査センター　1994
鍛冶益生『青木原遺跡発掘調査報告書』（財）広島県埋蔵文化財調査センター　1986
伊藤実他『横路遺跡』横路遺跡調査団　1982
前田佳久『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1993
井沢洋一・松村道博「有田遺跡第48次調査」『有田・小田部』第５集　福岡市教育委員会　1984
山崎龍雄・米倉秀紀「有田遺跡第100次調査」『有田・小田部』第10集　福岡市教育委員会　1989
山崎龍雄「有田遺跡第152次調査」『有田・小田部』第13集　福岡市教育委員会　1991
山崎龍雄他「有田遺跡第138次調査」『有田・小田部』第16集　福岡市教育委員会　1992
山崎龍雄「有田遺跡第125・145次調査」『有田・小田部』第18集　福岡市教育委員会　1993
山崎龍雄「有田遺跡第142・143次調査」『有田・小田部』第20集　福岡市教育委員会　1994
下村智・横山邦継「五十川遺跡」『福岡市中部地区埋蔵文化財調査報告Ⅰ』福岡市教育委員会　1984
松岡史他「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集』福岡県教育委

員会　1970
酒井仁夫・伊崎俊秋『今川遺跡』津屋崎町教育委員会　1981

第４節

村尾秀信他『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅰ』島根県教育委員会　1980
小野久隆・奥野都『池上遺跡　第４分冊の２　木器編』（財）大阪文化財センター　1978
森井貞雄他『山賀（その２）』（財）大阪文化財センター　1983
大楽康宏・竹原伸次他『亀井北（その３）』（財）大阪文化財センター　1986
西藤清秀・林部均「四条遺跡」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1987年度』奈良県立橿原考古学研究所　1990
山下史朗他『小犬丸遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　1989
臼井直之他「石川条理遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報６』（財）長野県埋蔵文化財センター　1989
石川治夫『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺構編』『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ　遺物編』沼津市教育委員会　1990

第５節

『木器集成図録　近畿古代篇』奈良国立文化財研究所　1985　PL.48
第438図６～10はこの文献のPL.48から引用した。
廣瀬常雄『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十冊　金蔵寺下所遺跡』　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1994
真鍋昌宏・岡敦憲・山下平重『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十三冊　郡家原遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1993
廣瀬常雄『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十七冊　郡家大林上遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1994
北山健一郎・森下友子『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四冊　太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1994
蔵本晋司「中間西井坪遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成元年度』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1990
森格也・古野徳久『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊　前田東・中村

遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1995
藤好史郎「小山・南谷遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成７年度』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1996
『多肥松林遺跡　平成５年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1994
藤好史郎・西村尋文・大久保徹也『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1990

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第7冊

鴨部・川田遺跡 I
（第2分冊）

平成9年12月24日発行
編　集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県坂出市府中町字南谷5001番地の4
電話　（0877）48－2191（代表）
発　行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局
印　刷　株式会社　美巧社

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊

鴨部・川田遺跡Ⅰ

第３分冊

1997.12

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊

鴨部・川田遺跡Ⅰ

第３分冊

1997.12

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

図版目次

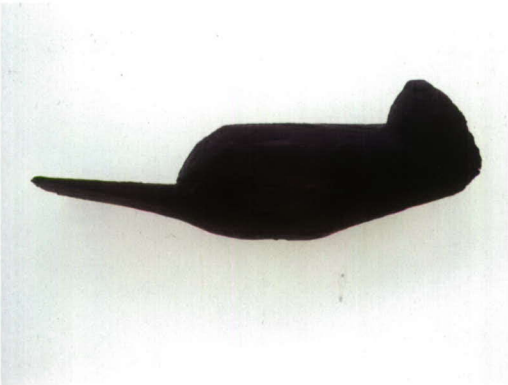
図版１　Ａ区全景
図版２　Ａ区北半分全景，Ａ区南半分全景
図版３　Ａ区ＳＨ01，Ａ区ＳＨ01柱穴ＳＰ05内サヌカイト出土状況
図版４　Ａ区ＳＨ06，Ａ区ＳＨ03柱穴ＳＰ06の柱材
図版５　Ａ区ＳＨ06内ＳＫ02，Ａ区ＳＲ01断面
図版６　Ａ区ＳＲ01遺物出土状況，Ａ区東壁土層
図版７　Ｂ区全景（西から），Ｂ区ＳＨ01
図版８　Ｂ区全景，Ｃ区全景
図版９　Ｃ区全景（西から），Ｃ区ＳＤ01断面Ａ－Ａ’
図版10　Ｃ区ＳＤ01遺物出土状況，Ｃ区ＳＤ01木器出土状況
図版11　Ｃ区竪穴住居群，Ｃ区ＳＨ06
図版12　Ｃ区ＳＨ08，Ｃ区ＳＤ01とＳＨ04の切り合い部分
図版13　Ｃ区ＳＫ02，Ｃ区ＳＫ06
図版14　Ｃ区・Ｄ区全景，Ｄ区全景
図版15　Ｄ区ＳＨ02，Ｄ区ＳＨ05
図版16　Ｄ区ＳＨ06，Ｄ区ＳＨ07
図版17　Ｄ区ＳＸ01，Ｄ区北壁土層（ＳＨ05部分）
図版18～図版53　Ａ区出土遺物
図版54～図版84　Ｂ区出土遺物
図版85～図版230　Ｃ区出土遺物
図版231～図版313　Ｄ区出土遺物

鴨部・川田遺跡全景（西から）

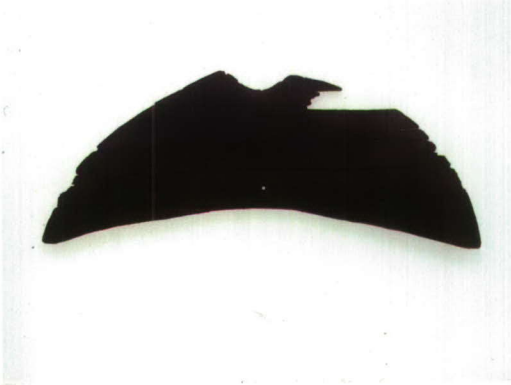
鴨部・川田遺跡全景（南から）

C区ＳＤ01（環濠）と住居跡群

A区ＳＨ01



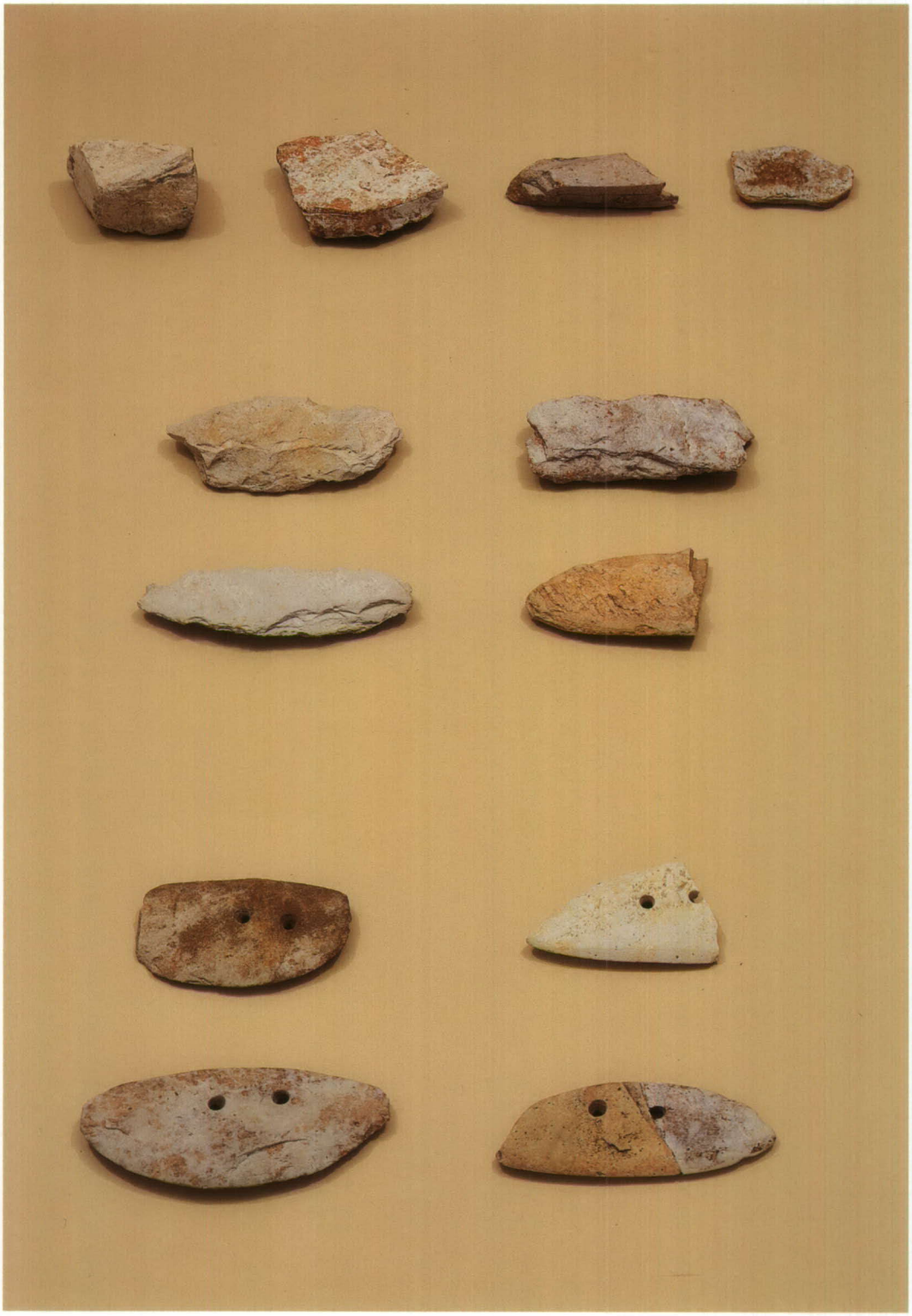
鳥形木製品（A183）



鳥形木製品の翼（A184）

C区SD01（環濠）出土土器

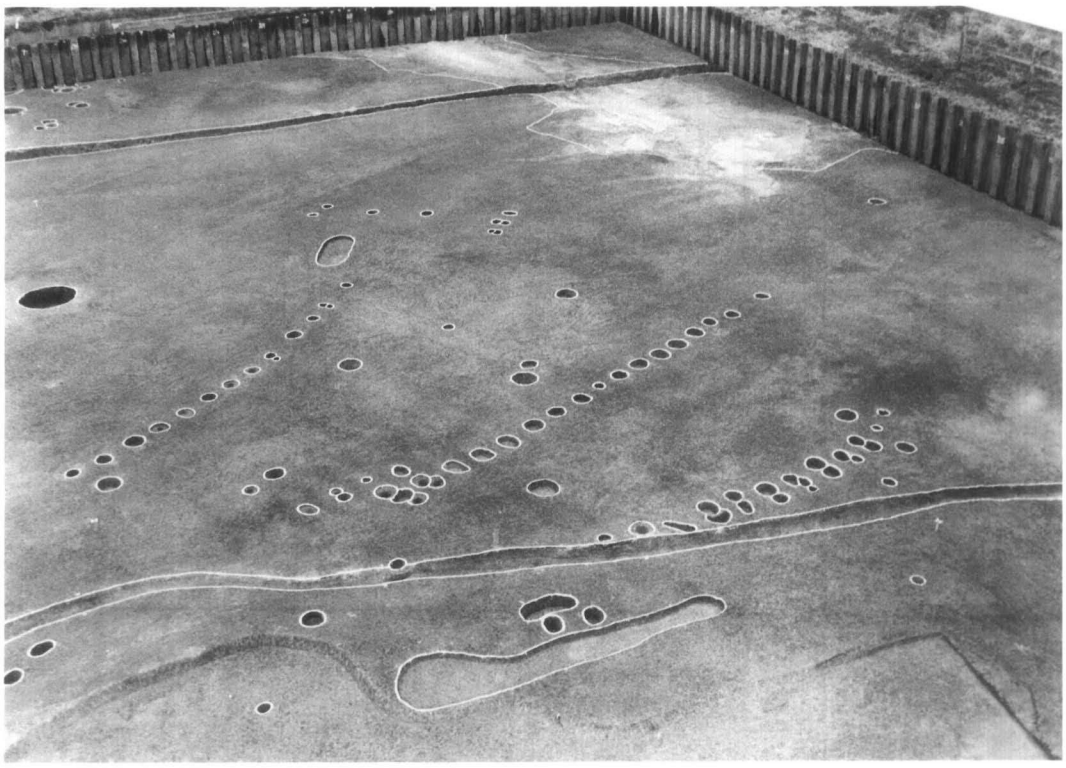
C区ＳＤ01（環濠）出土石器



磨製石庖丁製作工程

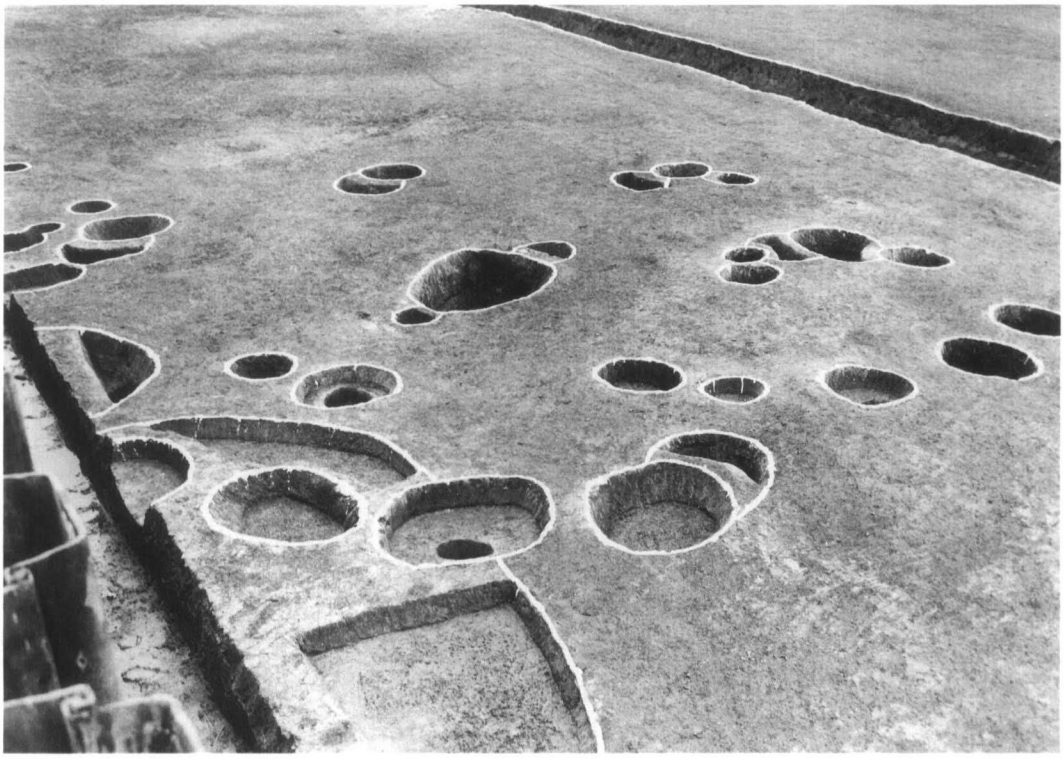
A区全景

図版 2

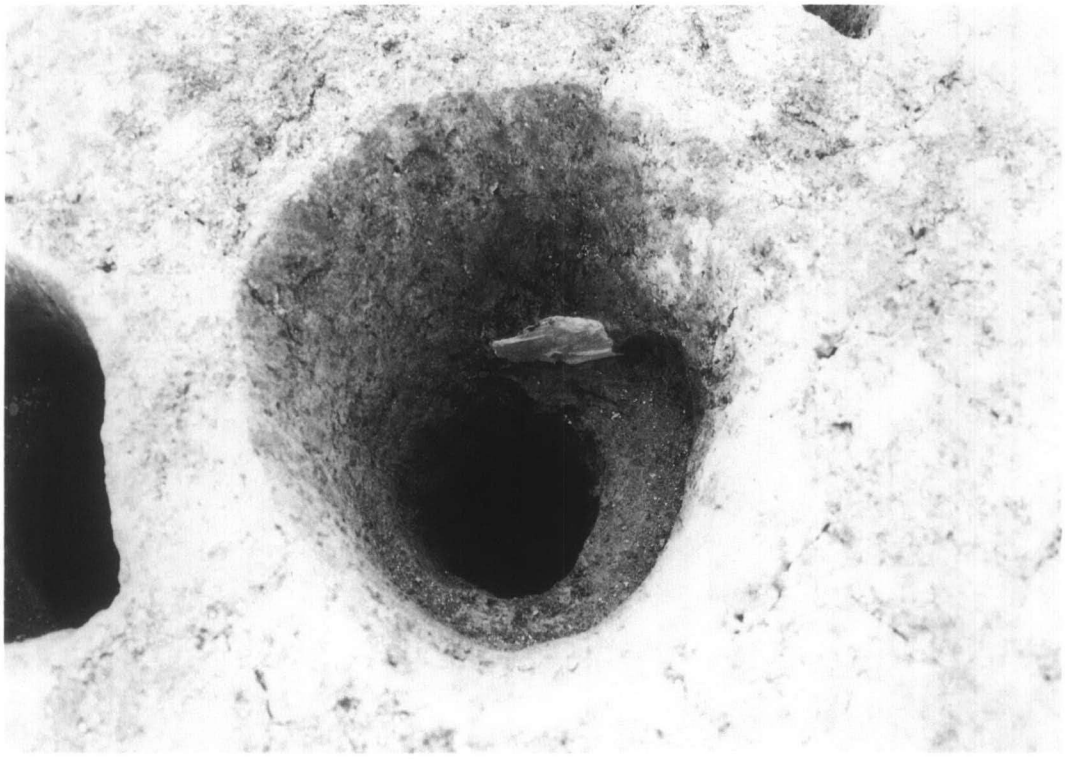


A区北半分全景

A区南半分全景

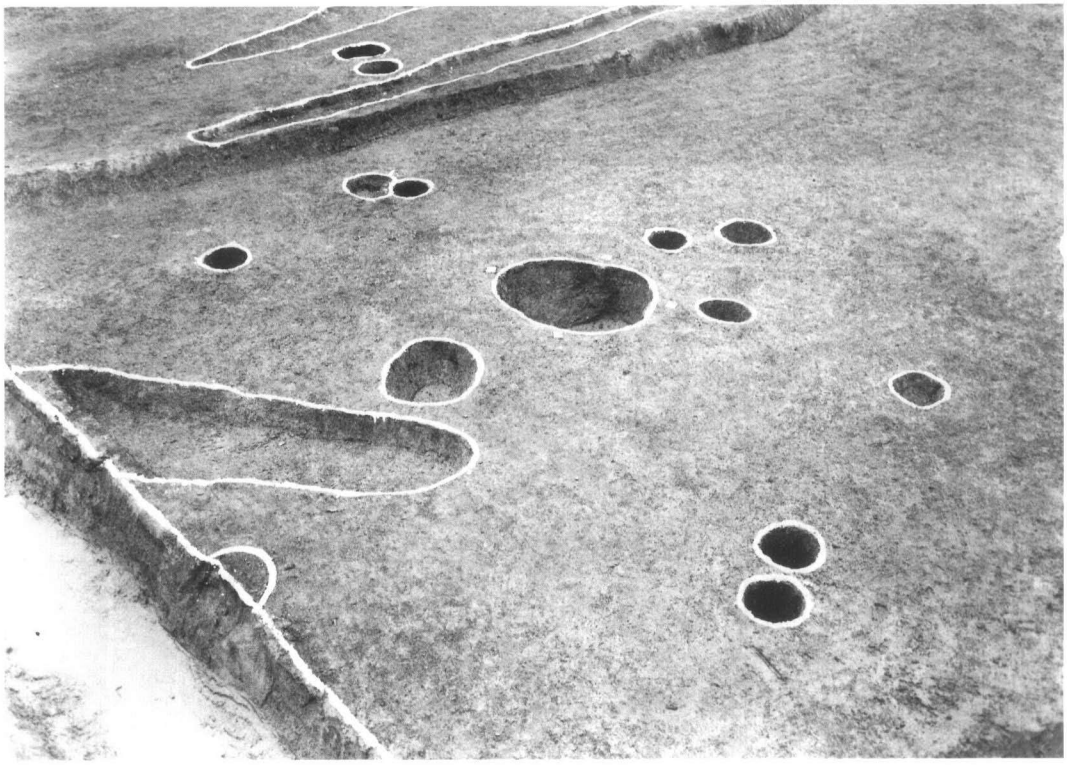


A区ＳＨ01

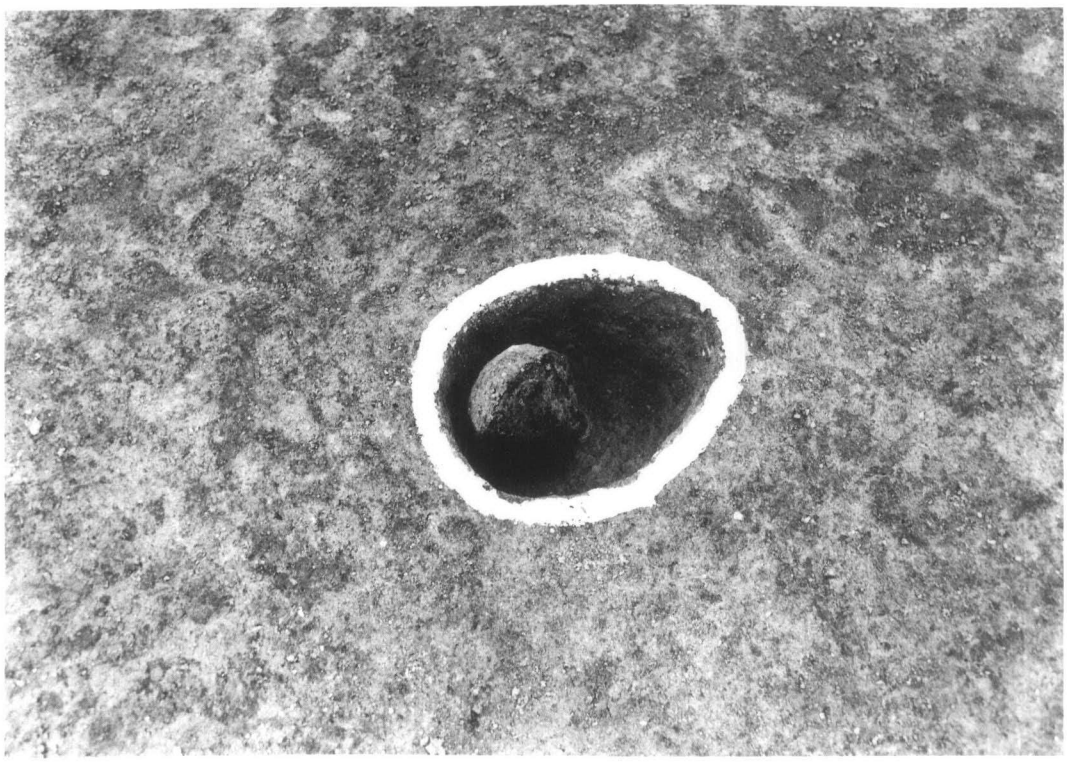


A区ＳＨ01柱穴ＳＰ05内サヌカイト出土状況

図版 4



A区ＳＨ06



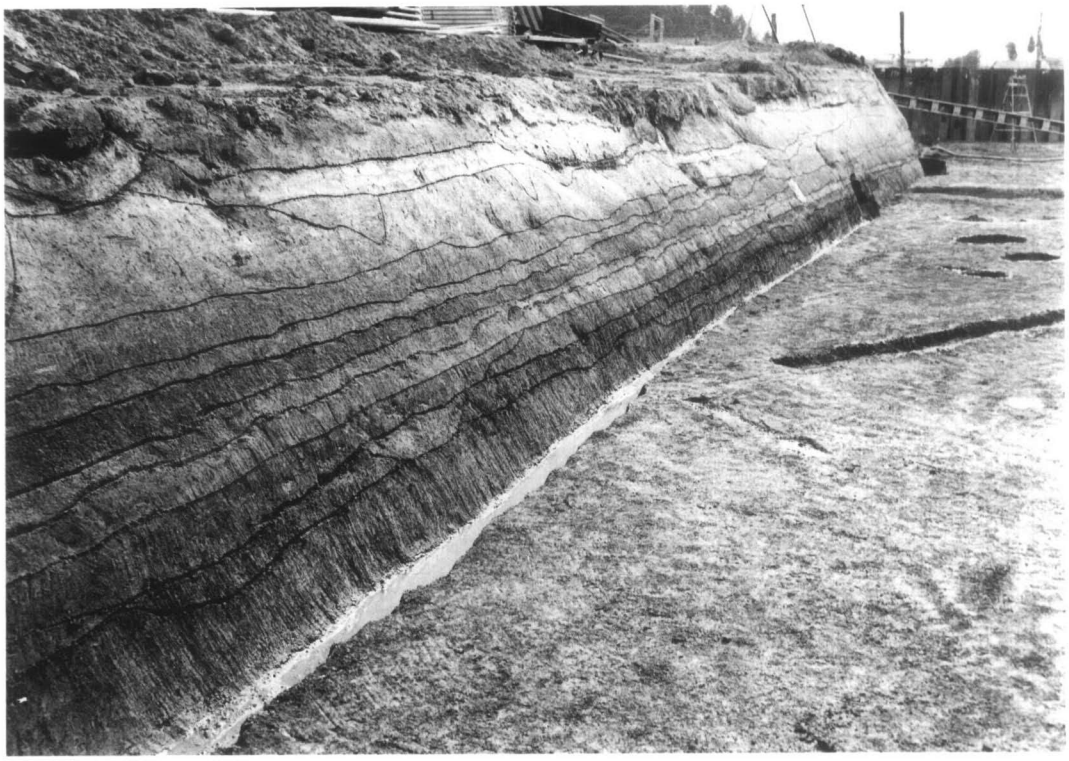
A区ＳＨ03柱穴ＳＰ06の柱材

A区ＳＨ06内ＳＫ02

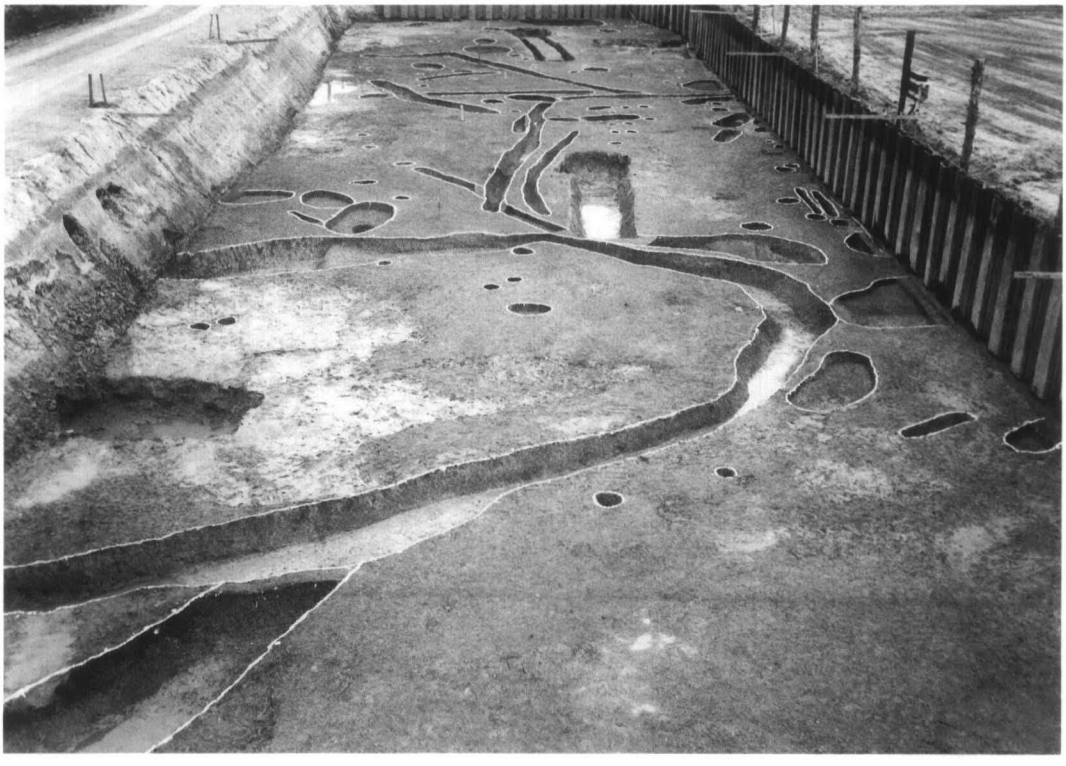
A区ＳＲ01断面

図版 6

A区ＳＲ01遺物出土状況



A区東壁土層



B区全景（西から）

B区SH01

図版 8

B区全景

C区全景

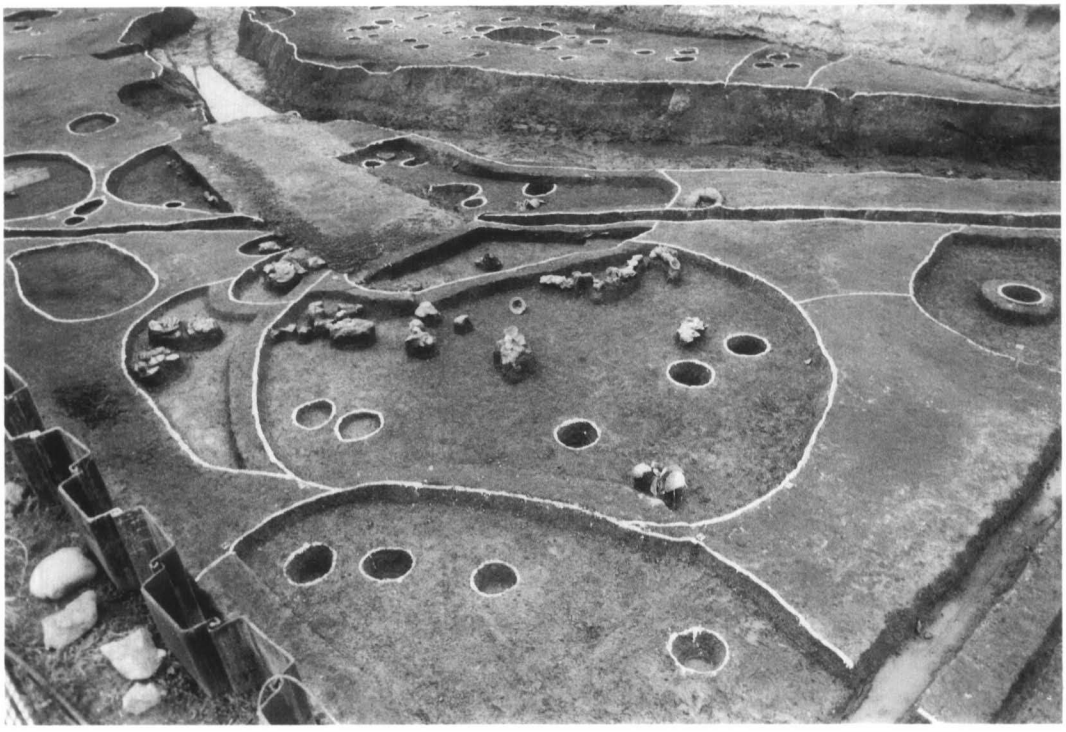
C区全景（西から）

C区ＳＤ01断面Ａ－Ａ′

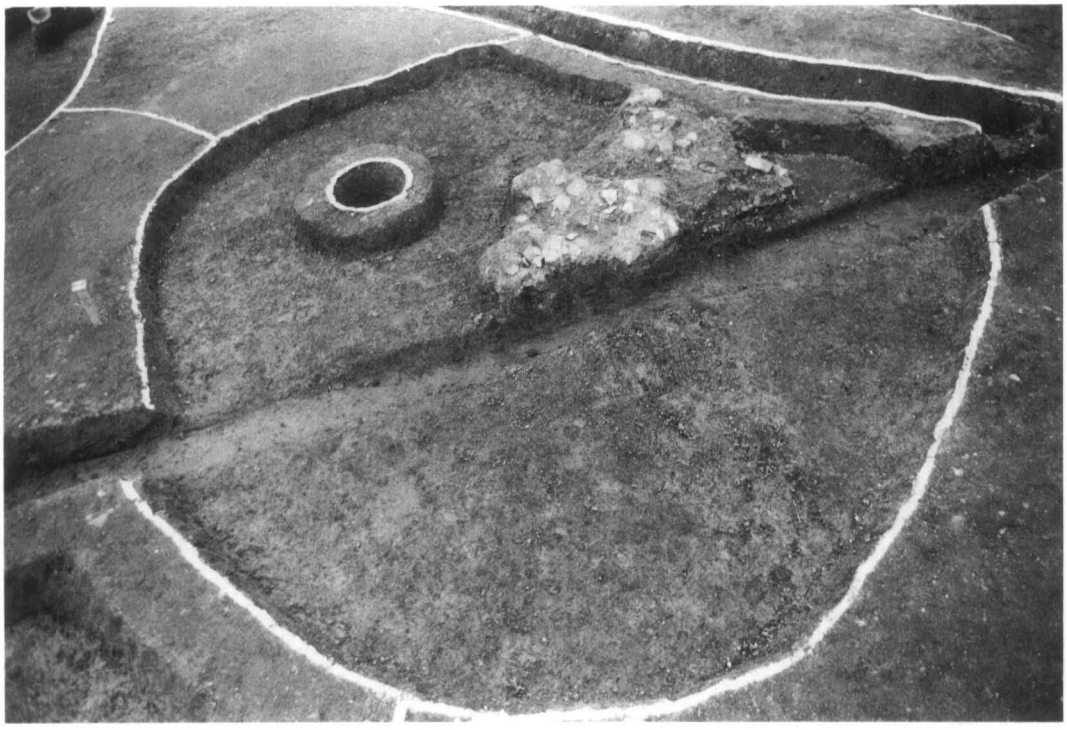
図版10

C区ＳＤ01遺物出土状況

C区ＳＤ01木器出土状況

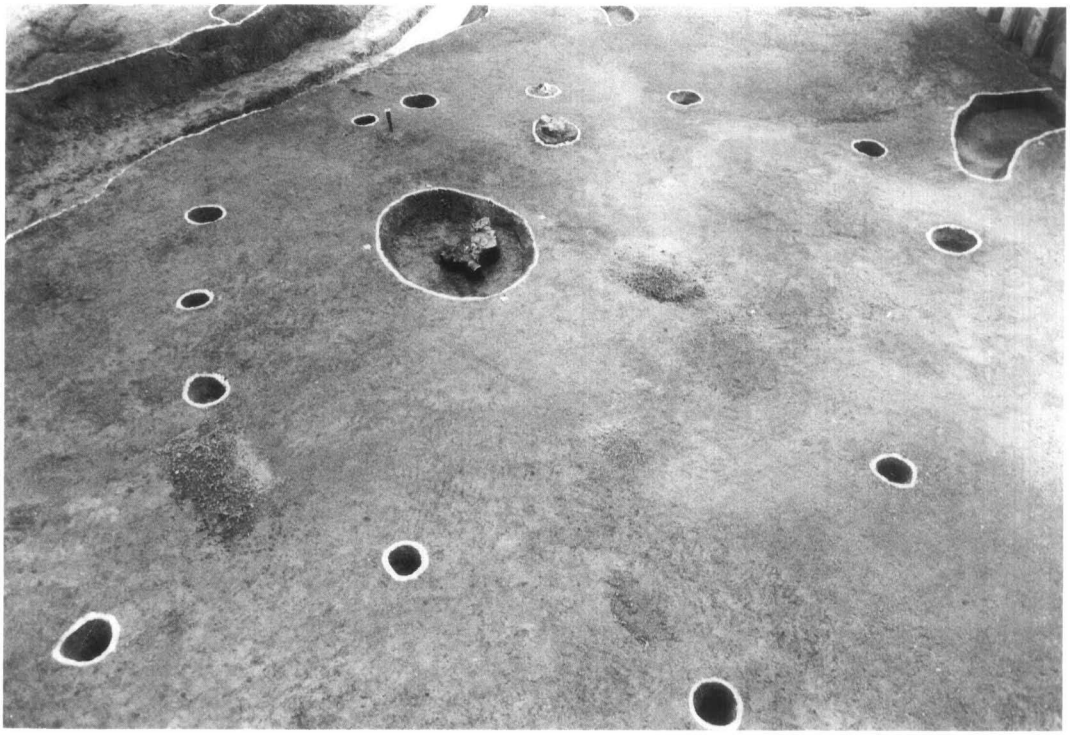


C区竪穴住居跡群



C区SH06

図版12



C区ＳＨ08

C区ＳＤ01とＳＨ04の切り合い部分